

見開き表示のため、白紙を挿入しています。

◆アニュアルレポート2005 目次◆

目次……………	1	尾高 直子……………	97	清水 徹郎……………	195	仲矢 史雄……………	293	三浦 謙……………	391
所属一覧……………	2	戒能 民工……………	99	SCHWARTZ LAURE ……	197	新名 謙二……………	295	三浦 徹……………	393
郷 通子学長……………	3	加賀美 常美代……………	101	庄司 恵雄……………	199	西尾 道子……………	297	水野 勲……………	395
内田 伸子……………	5	垣内 康孝……………	103	菅本 晶夫……………	201	西川 恵子……………	299	水村(久埜) 真由美……………	397
久保田 紀久枝……………	7	香西 みどり……………	105	菅原 ますみ……………	203	丹羽 裕子……………	301	三原 芳秋……………	399
柴田 文明……………	9	粕川 正充……………	107	杉田 孝夫……………	205	根本 心一……………	303	御船 美智子……………	401
羽入 佐和子……………	11	堅尾 和夫……………	109	杉野 勇……………	207	野口 徹……………	305	耳塚 寛明……………	403
相川 (小島) 京子……………	13	加藤 美砂子……………	111	杉橋 やよい……………	209	野々口 ちとせ……………	307	宮内 貴久……………	405
會川 義寛……………	15	金子 晃……………	113	杉山 進……………	211	萩田 真理子……………	309	宮尾 正樹……………	407
青木 紀久代……………	17	河村 哲也……………	115	鈴木 恵美子……………	213	長谷川 武弘……………	311	宮本 泰則……………	409
赤松 利恵……………	19	菅 聡子……………	117	鈴木 禎宏……………	215	服田 昌之……………	313	三輪 建二……………	411
秋山 光文……………	21	神田 由築……………	119	高崎 みどり……………	217	馬場 昭次……………	315	村田 容常……………	413
浅井 健一……………	23	菅野 健……………	121	高島 元洋……………	219	浜口 順子……………	317	村田 眞弓……………	415
浅田 徹……………	25	刑部 育子……………	123	鷹野 景子……………	221	浜野 隆……………	319	村松 志野……………	417
浅本 紀子……………	27	清本 正人……………	125	鷹野 光行……………	223	浜谷 望……………	321	室伏 きみ子……………	419
芦原 坦……………	29	金城 徳幸……………	127	高橋 俊彦……………	225	林 正男……………	323	最上 善広……………	421
足立 眞理子……………	31	窪添 慶文……………	129	高橋 真央……………	227	林 廣子……………	325	森 義仁……………	423
天野 知香……………	33	熊谷 圭知……………	131	高濱 裕子……………	229	原井 敬子……………	327	森川 雅博……………	425
新井 由紀夫……………	35	栗原 尚子……………	133	篁 倫子……………	231	平岡 公一……………	329	森田 寛……………	427
池田 まさみ……………	37	栗山 淳子……………	135	滝澤 公子……………	233	平田 亜古……………	331	森光 康次郎……………	429
池本 真二……………	39	小風 秀雅……………	137	竹尾 富貴子……………	235	平野 美恵子……………	333	森山 新……………	431
石口 彰……………	41	小坂 圭太……………	139	武部 尚志……………	237	平野 由紀子……………	335	矢島 知子……………	433
石塚 道子……………	43	小谷 眞男……………	141	竹村 和子……………	239	広橋 教貴……………	337	安田 次郎……………	435
市古 夏生……………	45	小玉 重夫……………	143	館 かおる……………	241	福田 豊……………	339	安成 英樹……………	437
伊藤 亜矢子……………	47	小林 一郎……………	145	田中 望美……………	243	藤工 康彦……………	341	矢野 裕子……………	439
伊藤 貴之……………	49	小林 功佳……………	147	田宮 兵衛……………	245	藤崎 宏子……………	343	山田 眞二……………	441
伊藤 美重子……………	51	小林 哲幸……………	149	田村 智英子……………	247	藤田 宗和……………	345	山野 春子……………	443
伊藤 るり……………	53	駒城 素子……………	151	千葉 和義……………	249	富士原 紀絵……………	347	山本 直樹……………	445
井原 成男……………	55	小柳 志津……………	153	千代 豪昭……………	251	藤原 正彦……………	349	山本 秀行……………	447
今井 正幸……………	57	近藤 和雄……………	155	曹 基哲……………	253	藤原 葉子……………	351	由比 良子……………	449
岩壁 茂……………	59	近藤 譲……………	157	塚田 和美……………	255	古川 はづき……………	353	横川 光司……………	451
牛江 ゆき子……………	61	近藤 敏啓……………	159	土屋 賢二……………	257	古瀬 奈津子……………	355	吉田 恵子……………	453
内田 正子……………	63	近藤 恵……………	161	出口 哲生……………	259	古田 悦子……………	357	吉田 裕亮……………	455
梅原 利宏……………	65	近藤 るみ……………	163	徳井 淑子……………	261	古田 啓……………	359	吉村 佳子……………	457
榎本 陽子……………	67	今野 美智子……………	165	戸田 正人……………	263	古谷 希世子……………	361	米田 俊彦……………	459
太田 裕治……………	69	酒井 朗……………	167	外館 良衛……………	265	HAWLEY DIANE EDLA…	363	頼住 光子……………	461
大瀧 雅寛……………	71	榎原 洋一……………	169	戸谷 陽子……………	267	堀 佳也子……………	365	李 美静……………	463
大塚 常樹……………	73	坂元 章……………	171	富永 典子……………	269	堀工 充子……………	367	若林 美佐知……………	465
大塚 譲……………	75	坂本 佳鶴恵……………	173	富永 靖徳……………	271	本多 恭子……………	369	和田 英信……………	467
大戸 美也子……………	77	作田 正明……………	175	内藤 俊史……………	273	前田 ミチエ……………	371	渡部 亜矢子……………	469
大場 清……………	79	酒向 治子……………	177	中居 功……………	275	真島 秀行……………	373	渡辺 知恵美……………	471
大森 正博……………	81	佐々木 成工……………	179	永頼 伸子……………	277	増田 優……………	375		
大森 美香……………	83	佐々木 泰子……………	181	仲西 正……………	279	益田 祐一……………	377		
岡崎 眸……………	85	佐々貴 義弐……………	183	永野 肇……………	281	増永 良文……………	379		
小川 昭二郎……………	87	佐藤 明子……………	185	永原 恵三……………	283	松浦 悦子……………	381		
小川 温子……………	89	佐藤 祐子……………	187	中村 俊直……………	285	松浦 秀治……………	383		
荻原 千鶴……………	91	椎尾 一郎……………	189	中村 美奈子……………	287	松崎 毅……………	385		
小口 正人……………	93	篠塚 英子……………	191	中村 弓子……………	289	松藤 薫子……………	387		
奥村 剛……………	95	柴坂 寿子……………	193	中谷 香織……………	291	松本 勲武……………	389		

学長 理事(総務担当) 理事(教育担当) 理事(国際・研究担当) 副学長(所属:文教育学部人文科学科哲学講座) 文教育学 人文科学科	所属	部局	学科(専攻)	講座(コース)	氏名	学部	学部担当	人間文化研究科担当	
								博士前期課程	博士後期課程
文教育学 人文科学科	所属:文教育学部人文科学科哲学講座) 形象分析学	部局	学科(専攻)	講座(コース)	郷 通子	教育学	人間社会科学科	発達社会科学	人間発達科学
					内田 伸子		食物栄養学科	人間発達科学	
					久保田 紀久枝		理	ライフサイエンス	
					紫田 文明		物理学科	物質科学	
					羽入 佐和子		文教育学	人文科学科	比較社会文化学
					土屋 貴文		文教育学	人文科学科	比較社会文化学
					秋山 光二		文教育学	人文科学科	比較社会文化学
					登添 慶文		文教育学	人文科学科	比較社会文化学
					田宮 兵衛		文教育学	人文科学科	比較社会文化学
					重原 尚子		文教育学	人文科学科	比較社会文化学
					安成 英樹		文教育学	人文科学科	比較社会文化学
					高島 元洋		教育学	人文科学科	比較社会文化学
					三浦 謙		教育学	人文科学科	比較社会文化学
					額住 光子		教育学	人文科学科	比較社会文化学
					山本 秀行		教育学	人文科学科	比較社会文化学
					安田 次郎		教育学	人文科学科	比較社会文化学
					三浦 徹		教育学	人文科学科	比較社会文化学
					古瀬 奈津子		教育学	人文科学科	比較社会文化学
					篠塚 英子		教育学	人文科学科	比較社会文化学
					神田 由敦		教育学	人文科学科	比較社会文化学
					石塚 道子		教育学	人文科学科	比較社会文化学
					熊谷 圭知		教育学	人文科学科	比較社会文化学
					水野 勲		教育学	人文科学科	比較社会文化学
					市古 夏生		教育学	人文科学科	比較社会文化学
					萩原 千鶴		教育学	人文科学科	比較社会文化学
					大塚 常樹		教育学	人文科学科	比較社会文化学
					高崎 みどり		教育学	人文科学科	比較社会文化学
					古田 啓		教育学	人文科学科	比較社会文化学
					浅田 徹		教育学	人文科学科	比較社会文化学
					相原 茂		教育学	人文科学科	比較社会文化学
					宮尾 正樹		教育学	人文科学科	比較社会文化学
					伊藤 重子		教育学	人文科学科	比較社会文化学
					石丸 昭二		教育学	人文科学科	比較社会文化学
					内田 正子		教育学	人文科学科	比較社会文化学
					中村 俊置		教育学	人文科学科	比較社会文化学
					松崎 毅		教育学	人文科学科	比較社会文化学
					菅野 健		教育学	人文科学科	比較社会文化学
					村田 真弓		教育学	人文科学科	比較社会文化学
					清水 徹郎		教育学	人文科学科	比較社会文化学
					戸谷 陽子		教育学	人文科学科	比較社会文化学
					西尾 道子		教育学	人文科学科	比較社会文化学
					中村 弓子		教育学	人文科学科	比較社会文化学
					ダイア・ホーリー・ナガモ		教育学	人文科学科	比較社会文化学
					野口 徹		教育学	人文科学科	比較社会文化学
					岡崎 謙		教育学	人文科学科	比較社会文化学
					野々口 ちせ		教育学	人文科学科	比較社会文化学
平岡 一	教育学	人文科学科	比較社会文化学						
杉野 勇	教育学	人文科学科	比較社会文化学						
鹿野 光行	教育学	人文科学科	比較社会文化学						
耳塚 寛明	教育学	人文科学科	比較社会文化学						
波平 恵美子	教育学	人文科学科	比較社会文化学						
三輪 建二	教育学	人文科学科	比較社会文化学						
米田 俊彦	教育学	人文科学科	比較社会文化学						
富士原 紀絵	教育学	人文科学科	比較社会文化学						
浪野 隆	教育学	人文科学科	比較社会文化学						
石口 彰	教育学	人文科学科	比較社会文化学						
塩元 章	教育学	人文科学科	比較社会文化学						
大岡 美香	教育学	人文科学科	比較社会文化学						
片岡 順子	教育学	人文科学科	比較社会文化学						
杉山 道	教育学	人文科学科	比較社会文化学						
新名 謙二	教育学	人文科学科	比較社会文化学						
水村 真由	教育学	人文科学科	比較社会文化学						
中村 美奈子	教育学	人文科学科	比較社会文化学						
酒田 治子	教育学	人文科学科	比較社会文化学						
廣子	教育学	人文科学科	比較社会文化学						
近藤 謙	教育学	人文科学科	比較社会文化学						
水原 惠三	教育学	人文科学科	比較社会文化学						
小坂 圭太	教育学	人文科学科	比較社会文化学						
菅葉義現	教育学	人文科学科	比較社会文化学						

理	部局	所属 学科(専攻)	講座(コース)	氏名	学部	学部担当 学科	人間文化研究科担当	
							博士前期課程	博士後期課程
	数学科	数理構造		藤原 正彦	理	数学科	数理・情報科学	比較社会文化学
				塚田 和美	理	数学科	数理・情報科学	複合領域科学
				中居 功	理	数学科	数理・情報科学	比較社会文化学
				戸田 正人	理	数学科	数理・情報科学	比較社会文化学
				大場 清	理	数学科	数理・情報科学	複合領域科学
		数理解析		真島 秀行	理	数学科	数理・情報科学	複合領域科学
				前田 ミチヲ	理	数学科	数理・情報科学	比較社会文化学
				榎本 陽子	理	数学科	数理・情報科学	比較社会文化学
				松崎 克彦	理	数学科	数理・情報科学	複合領域科学
				武部 尚志	理	数学科	数理・情報科学	複合領域科学
物理学科	基礎物理学		古谷 希世子	理	数学科			
			堀江 英子	理	数学科			
			菅本 晶夫	理	物理学科	物質科学	複合領域科学	
			森川 雅博	理	物理学科	物質科学	複合領域科学	
			奥村 剛	理	物理学科	物質科学	複合領域科学	
		物性物理学		外館 良衛	理	物理学科	物質科学	比較社会文化学
				梅原 利宏	理	物理学科		
				永田 真志	理	物理学科		
				出口 智生	理	物理学科	物質科学	複合領域科学
				小林 功佳	理	物理学科	物質科学	複合領域科学
化学科	構造化学		今井 正幸	理	物理学科	物質科学	複合領域科学	
			古川 はづき	理	物理学科	物質科学	比較社会文化学	
			中谷 香織	理	物理学科			
			松本 勲武	理	化学科	ライフサイエンス	人間環境科学	
			益田 祐一	理	化学科	物質科学	複合領域科学	
		反応化学		今野 美智子	理	化学科	物質科学	複合領域科学
				堀 佳代子	理	化学科	物質科学	複合領域科学
				森 義仁	理	化学科	物質科学	比較社会文化学
				近藤 敏啓	理	化学科	物質科学	複合領域科学
				福田 豊	理	化学科	物質科学	複合領域科学
生物学科	構造生物学		永野 慶	理	化学科	物質科学	人間環境科学	
			山田 真二	理	化学科	物質科学	複合領域科学	
			相川 京子	理	化学科	ライフサイエンス	人間環境科学	
			矢島 知子	理	化学科			
			山下 貴司	理	生物学科	ライフサイエンス	人間環境科学	
		機能生物学		根本 心一	理	生物学科	ライフサイエンス	人間環境科学
				室伏 きみ子	理	生物学科	ライフサイエンス	人間環境科学
				小林 智幸	理	生物学科	ライフサイエンス	人間環境科学
				作田 正明	理	生物学科	ライフサイエンス	人間環境科学
				西川 恵子	理	生物学科	ライフサイエンス	人間環境科学
情報科学科	情報数理		芦原 坦	理	生物学科	ライフサイエンス	人間環境科学	
			松浦 悦子	理	生物学科	ライフサイエンス	人間環境科学	
			殿上 善広	理	生物学科	ライフサイエンス	複合領域科学	
			山本 直樹	理	生物学科	ライフサイエンス	人間環境科学	
			林 正男	理	生物学科	ライフサイエンス	人間環境科学	
		情報如理		宮本 泰則	理	生物学科	ライフサイエンス	人間環境科学
				近藤 るみ	理	生物学科	ライフサイエンス	人間環境科学
				金子 晃	理	情報科学科	数理・情報科学	複合領域科学
				竹屋 富貴子	理	情報科学科	数理・情報科学	比較社会文化学
				萩田 真理子	理	情報科学科	数理・情報科学	
情報科学科	情報如理		渡辺 知恵美	理	情報科学科			
			矢野 裕子	理	情報科学科			
			増々 良文	理	情報科学科	数理・情報科学	複合領域科学	
			椎尾 一郎	理	情報科学科	数理・情報科学	複合領域科学	
			約川 正亮	理	情報科学科	数理・情報科学	比較社会文化学	
		情報如理		小林 一郎	理	情報科学科	数理・情報科学	複合領域科学
				小口 正人	理	情報科学科	数理・情報科学	複合領域科学
				浅井 健一	理	情報科学科	数理・情報科学	複合領域科学
				伊藤 真之	理	情報科学科	数理・情報科学	複合領域科学
					理	情報科学科	数理・情報科学	複合領域科学

部局	所属		学部担当		氏名		人間文化研究科担当	
	学科学科	講座(コース)	学部	学科学科	氏名	学科学科	博士後期課程	博士前期課程
生活科	食物栄養学科学科		生活科	食物栄養学科学科	髙山 洋右	ライフサイエンス	人間環境科学	人間環境科学
			生活科	食物栄養学科学科	村田 容常	ライフサイエンス	人間環境科学	人間環境科学
			生活科	食物栄養学科学科	鈴木 恵美子	ライフサイエンス	人間環境科学	人間環境科学
			生活科	食物栄養学科学科	香西 みどり	ライフサイエンス	人間環境科学	人間環境科学
			生活科	食物栄養学科学科	藤原 真子	ライフサイエンス	人間環境科学	人間環境科学
			生活科	食物栄養学科学科	池本 真二	ライフサイエンス	人間環境科学	人間環境科学
			生活科	食物栄養学科学科	平田 亜古	ライフサイエンス	人間環境科学	人間環境科学
			生活科	食物栄養学科学科	赤松 利恵	ライフサイエンス	人間環境科学	人間環境科学
			生活科	食物栄養学科学科	山野 春子	ライフサイエンス	人間環境科学	人間環境科学
			生活科	食物栄養学科学科	宮川 純子	ライフサイエンス	人間環境科学	人間環境科学
	人間・環境科学科学科		生活科	人間・環境科学科学科	田中 辰明	ライフサイエンス	人間環境科学	人間環境科学
			生活科	人間・環境科学科学科	駒城 素子	ライフサイエンス	人間環境科学	人間環境科学
			生活科	人間・環境科学科学科	倉川 義寛	ライフサイエンス	人間環境科学	人間環境科学
			生活科	人間・環境科学科学科	松浦 秀治	ライフサイエンス	人間環境科学	人間環境科学
			生活科	人間・環境科学科学科	中西 正	ライフサイエンス	人間環境科学	人間環境科学
			生活科	人間・環境科学科学科	太田 裕治	ライフサイエンス	人間環境科学	人間環境科学
			生活科	人間・環境科学科学科	近藤 恵	ライフサイエンス	人間環境科学	人間環境科学
			生活科	人間生活学科学科	井原 成男	発達社会科学	人間発達科学	人間発達科学
			生活科	人間生活学科学科	藤田 宗和	発達社会科学	人間発達科学	人間発達科学
			生活科	人間生活学科学科	簗 倫子	発達社会科学	人間発達科学	人間発達科学
人間文化	発達臨床心理学		生活科	人間生活学科学科	柴坂 勇子	発達社会科学	人間発達科学	人間発達科学
			生活科	人間生活学科学科	伊藤 亜矢子	発達社会科学	人間発達科学	人間発達科学
			生活科	人間生活学科学科	和郎 育子	発達社会科学	人間発達科学	人間発達科学
			生活科	人間生活学科学科	浜口 順子	発達社会科学	人間発達科学	人間発達科学
			生活科	人間生活学科学科	戒能 民江	発達社会科学	人間発達科学	人間発達科学
			生活科	人間生活学科学科	御船 美智子	発達社会科学	人間発達科学	人間発達科学
			生活科	人間生活学科学科	杉田 孝夫	発達社会科学	人間発達科学	人間発達科学
			生活科	人間生活学科学科	藤崎 宏子	発達社会科学	人間発達科学	人間発達科学
			生活科	人間生活学科学科	小谷 夏男	発達社会科学	人間発達科学	人間発達科学
			生活科	人間生活学科学科	大暮 正博	発達社会科学	人間発達科学	人間発達科学
	生活文化学		生活科	人間生活学科学科	徳井 淑子	人文学	比較社会文化学	比較社会文化学
			生活科	人間生活学科学科	吉村 佳子	人文学	国際日本学	国際日本学
			生活科	人間生活学科学科	鈴木 祐宏	人文学	比較社会文化学	比較社会文化学
			生活科	人間生活学科学科	宮内 貴久	人文学	比較社会文化学	比較社会文化学
			文教育学	人間社会科学科学科	坂本 佳樹恵	発達社会科学	比較社会文化学	比較社会文化学
			文教育学	人間社会科学科学科	新井 由紀夫	人文学	比較社会文化学	比較社会文化学
			文教育学	言語文化学科学科	竹村 和子	言語文化	比較社会文化学	比較社会文化学
			文教育学	言語文化学科学科	和田 英信	言語文化	比較社会文化学	比較社会文化学
			文教育学	言語文化学科学科	倉光 ミナ子	人文学	比較社会文化学	比較社会文化学
			文教育学	芸術・表現行動学科学科	石黒 節子	人文学	比較社会文化学	比較社会文化学
			文教育学	人文科学科学科	天野 知香	人文学	比較社会文化学	比較社会文化学
国際日本学	総合日本学		理	数学科学科	横川 光司	数理学	比較社会文化学	比較社会文化学
			理	生物学科学科	加藤 美砂子	ライフサイエンス	比較社会文化学	比較社会文化学
			文教育学	言語文化学科学科	香林 美佐知	言語文化	国際日本学	国際日本学
			文教育学	言語文化学科学科	平野 田紀子	言語文化	国際日本学	国際日本学
			文教育学	言語文化学科学科	菅 聡子	言語文化	国際日本学	国際日本学
			文教育学	人文科学科学科	小風 秀雅	人文学	国際日本学	国際日本学
			文教育学	人文科学科学科	内田 忠賢	発達社会科学	国際日本学	国際日本学
			文教育学	言語文化学科学科	松田 文子	言語文化	国際日本学	国際日本学
			文教育学	言語文化学科学科	佐々木 義式	言語文化	国際日本学	国際日本学
			文教育学	言語文化学科学科	尾高 直子	言語文化	国際日本学	国際日本学
	発達基礎論		生活科	人間生活学科学科	清田 淳子	発達社会科学	人間発達科学	人間発達科学
			文教育学	人間社会科学科学科	岩壁 茂	発達社会科学	人間発達科学	人間発達科学
			生活科	人間生活学科学科	内藤 俊史	発達社会科学	人間発達科学	人間発達科学
			生活科	人間生活学科学科	青木 紀久代	発達社会科学	人間発達科学	人間発達科学
			文教育学	人間社会科学科学科	宮原 修	発達社会科学	人間発達科学	人間発達科学
			文教育学	人間社会科学科学科	小玉 重夫	発達社会科学	人間発達科学	人間発達科学
			理	生物学科学科	小柳 志津	生物学	人間発達科学	人間発達科学
			理	化学科学科	李 美卿	化学	人間発達科学	人間発達科学
			生活科	人間生活学科学科	牧野 カツコ	人間生活学	人間発達科学	人間発達科学
			生活科	人間生活学科学科	永瀬 伸子	人間生活学	人間発達科学	人間発達科学
人間環境科学	ジェンダー学		理	生物学科学科	黒場 昭次	ライフサイエンス	人間環境科学	人間環境科学
			理	生物学科学科	小川 温子	ライフサイエンス	人間環境科学	人間環境科学
			生活科	人間・環境科学科学科	小川 昭二郎	ライフサイエンス	人間環境科学	人間環境科学
			生活科	人間・環境科学科学科	大瀧 雅寛	ライフサイエンス	人間環境科学	人間環境科学
			生活科	食物栄養学科学科	畑江 敬子	ライフサイエンス	人間環境科学	人間環境科学
	食環境科学		生活科	食物栄養学科学科	森光 康次郎	ライフサイエンス	人間環境科学	人間環境科学
			生活科	食物栄養学科学科	洪 静蘭	ライフサイエンス	人間環境科学	人間環境科学
			生活科	食物栄養学科学科	由比 良子	ライフサイエンス	人間環境科学	人間環境科学
			生活科	食物栄養学科学科	由比 良子	ライフサイエンス	人間環境科学	人間環境科学
			生活科	食物栄養学科学科	由比 良子	ライフサイエンス	人間環境科学	人間環境科学

部局	所属		学部担当		氏名		人間文化研究科担当	
	学科学科	講座(コース)	学部	学科学科	氏名	学科学科	博士前期課程	博士後期課程
人間文化	複合領域科学	社会情報科学	理	情報科学科学科	河村 哲也	情報科学	複合領域科学	複合領域科学
			文教育学	人間社会科学科学科	菅原 ますみ	人間社会科学	複合領域科学	複合領域科学
			理	情報科学科学科	小原 みどり	情報科学	複合領域科学	複合領域科学
			理	情報科学科学科	吉田 裕亮	情報科学	複合領域科学	複合領域科学
			理	物理科学科学科	曹 義哲	物理科学	複合領域科学	複合領域科学
			理	物理科学科学科	富永 靖徳	物理科学	複合領域科学	複合領域科学
			理	物理科学科学科	浜谷 望	物理科学	複合領域科学	複合領域科学
			理	化学科学科	鹿野 景子	化学	複合領域科学	複合領域科学
			理	化学科学科	本多 恭子	化学	複合領域科学	複合領域科学
			理	化学科学科	原井 敬子	化学	複合領域科学	複合領域科学
	ライフサイエンス	特設遺伝カウンセリング	理	ライフサイエンス	千代 智英子	ライフサイエンス	ライフサイエンス	ライフサイエンス
			理	ライフサイエンス	田村 智英子	ライフサイエンス	ライフサイエンス	ライフサイエンス
			理	ライフサイエンス	浅瀬 公子	ライフサイエンス	ライフサイエンス	ライフサイエンス
			理	ライフサイエンス	広橋 教貴	ライフサイエンス	ライフサイエンス	ライフサイエンス
			理	ライフサイエンス	垣内 康孝	ライフサイエンス	ライフサイエンス	ライフサイエンス
			理	ライフサイエンス	池田 まさみ	ライフサイエンス	ライフサイエンス	ライフサイエンス
			理	ライフサイエンス	佐々木 成江	ライフサイエンス	ライフサイエンス	ライフサイエンス
			理	ライフサイエンス	館 かのる	ライフサイエンス	ライフサイエンス	ライフサイエンス
			理	ライフサイエンス	伊藤 めり	ライフサイエンス	ライフサイエンス	ライフサイエンス
			理	ライフサイエンス	足立 廣理子	ライフサイエンス	ライフサイエンス	ライフサイエンス
			理	ライフサイエンス	杉橋 やよい	ライフサイエンス	ライフサイエンス	ライフサイエンス
ジェンダー学	ジェンダー学	ジェンダー学	理	ジェンダー学	宮崎 聖子	ジェンダー学	ジェンダー学	ジェンダー学
			理	ジェンダー学	近藤 和雄	ジェンダー学	ジェンダー学	ジェンダー学
			理	ジェンダー学	大塚 謙	ジェンダー学	ジェンダー学	ジェンダー学
			理	ジェンダー学	富永 典子	ジェンダー学	ジェンダー学	ジェンダー学
			理	ジェンダー学	佐竹 元吉	ジェンダー学	ジェンダー学	ジェンダー学
			理	ジェンダー学	酒井 朗	ジェンダー学	ジェンダー学	ジェンダー学
			理	ジェンダー学	高濱 裕子	ジェンダー学	ジェンダー学	ジェンダー学
			理	ジェンダー学	大戸 美也子	ジェンダー学	ジェンダー学	ジェンダー学
			理	ジェンダー学	榎原 洋一	ジェンダー学	ジェンダー学	ジェンダー学
			理	ジェンダー学	藤江 康彦	ジェンダー学	ジェンダー学	ジェンダー学
			理	ジェンダー学	宗我部 義則	ジェンダー学	ジェンダー学	ジェンダー学
	ジェンダー学	ジェンダー学	理	ジェンダー学	長谷川 武弘	ジェンダー学	ジェンダー学	ジェンダー学
			理	ジェンダー学	村松 志野	ジェンダー学	ジェンダー学	ジェンダー学
			理	ジェンダー学	増田 優	ジェンダー学	ジェンダー学	ジェンダー学
			理	ジェンダー学	堅尾 和夫	ジェンダー学	ジェンダー学	ジェンダー学
			理	ジェンダー学	金城 徳幸	ジェンダー学	ジェンダー学	ジェンダー学
			理	ジェンダー学	高橋 俊彦	ジェンダー学	ジェンダー学	ジェンダー学
			理	ジェンダー学	服田 昌之	ジェンダー学	ジェンダー学	ジェンダー学
			理	ジェンダー学	清水 正人	ジェンダー学	ジェンダー学	ジェンダー学
			理	ジェンダー学	ローレンツァン・アレクサ	ジェンダー学	ジェンダー学	ジェンダー学
			理	ジェンダー学	千葉 和義	ジェンダー学	ジェンダー学	ジェンダー学
			理	ジェンダー学	佐藤 明子	ジェンダー学	ジェンダー学	ジェンダー学
ライフワールド・ワカチセンター	ライフワールド・ワカチセンター	ライフワールド・ワカチセンター	理	ライフワールド・ワカチセンター	仲矢 史雄	ライフワールド・ワカチセンター	ライフワールド・ワカチセンター	ライフワールド・ワカチセンター
			理	ライフワールド・ワカチセンター	浅本 紇子	ライフワールド・ワカチセンター	ライフワールド・ワカチセンター	ライフワールド・ワカチセンター
			理	ライフワールド・ワカチセンター	渡部 亜矢子	ライフワールド・ワカチセンター	ライフワールド・ワカチセンター	ライフワールド・ワカチセンター
			理	ライフワールド・ワカチセンター	丹羽 裕子	ライフワールド・ワカチセンター	ライフワールド・ワカチセンター	ライフワールド・ワカチセンター
			理	ライフワールド・ワカチセンター	栗山 淳子	ライフワールド・ワカチセンター	ライフワールド・ワカチセンター	ライフワールド・ワカチセンター
			理	ライフワールド・ワカチセンター	山本 緑子	ライフワールド・ワカチセンター	ライフワールド・ワカチセンター	ライフワールド・ワカチセンター
			理	ライフワールド・ワカチセンター	佐々木 泰子	ライフワールド・ワカチセンター	ライフワールド・ワカチセンター	ライフワールド・ワカチセンター
			理	ライフワールド・ワカチセンター	佐 司 恵雄	ライフワールド・ワカチセンター	ライフワールド・ワカチセンター	ライフワールド・ワカチセンター
			理	ライフワールド・ワカチセンター	加賀美 常美代	ライフワールド・ワカチセンター	ライフワールド・ワカチセンター	ライフワールド・ワカチセンター
			理	ライフワールド・ワカチセンター	森山 新	ライフワールド・ワカチセンター	ライフワールド・ワカチセンター	ライフワールド・ワカチセンター
	ライフワールド・ワカチセンター	ライフワールド・ワカチセンター	理	ライフワールド・ワカチセンター	平野 美恵子	ライフワールド・ワカチセンター	ライフワールド・ワカチセンター	ライフワールド・ワカチセンター
			理	ライフワールド・ワカチセンター	田中 望美	ライフワールド・ワカチセンター	ライフワールド・ワカチセンター	ライフワールド・ワカチセンター
			理	ライフワールド・ワカチセンター	高橋 真央	ライフワールド・ワカチセンター	ライフワールド・ワカチセンター	ライフワールド・ワカチセンター
			理	ライフワールド・ワカチセンター	古田 悦子	ライフワールド・ワカチセンター	ライフワールド・ワカチセンター	ライフワールド・ワカチセンター
			理	ライフワールド・ワカチセンター	牛江 ゆき子	ライフワールド・ワカチセンター	ライフワールド・ワカチセンター	ライフワールド・ワカチセンター
			理	ライフワールド・ワカチセンター	松藤 薫子	ライフワールド・ワカチセンター	ライフワールド・ワカチセンター	ライフワールド・ワカチセンター
			理	ライフワールド・ワカチセンター	三原 芳秋	ライフワールド・ワカチセンター	ライフワールド・ワカチセンター	ライフワールド・ワカチセンター
			理	ライフワールド・ワカチセンター	森田 寛	ライフワールド・ワカチセンター	ライフワールド・ワカチセンター	ライフワールド・ワカチセンター
			理	ライフワールド・ワカチセンター	森田 寛	ライフワールド・ワカチセンター	ライフワールド・ワカチセンター	ライフワールド・ワカチセンター
			理	ライフワールド・ワカチセンター	森田 寛	ライフワールド・ワカチセンター	ライフワールド・ワカチセンター	ライフワールド・ワカチセンター

教員名	郷 通子 (GO Mitiko)
学 位	理学博士
職 名	学長
URL/E-mail	gakucho@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

選択的スプライシング / タンパク質機能の多様性とモジュール構成 / 生命分子ネットワーク

◆主要業績

総数 (3) 件

- ・由良 敬、山口晶大、郷 通子 全ゲノムを対象とした蛋白質立体構造データベースの公開
蛋白質核酸酵素 50 巻 16 号 2301 頁 (2005)
- ・Hasegawa M, Matsumoto-Ishikawa Y, Hijikata A, Hidaka Y, Go M, Shimonishi Y, Disulfide linkages and a three-dimensional structure model of the extracellular ligand-binding domain of guanylyl cyclase C, Protein J. 24 (5), 315-25 (2005)
- ・M. Saito, M. Go, T. Shirai, An empirical approach for nucleotide-binding site search on proteins. Protein Eng. Des. Sel. 19 (2), 67-75 (2006)

◆研究内容

1. 各種生物のゲノム情報に書かれている全てのタンパク質の立体構造をホモロジーモデリングによりモデリングすることは、どこまで可能か？
原核生物ではほぼ 50%、真核生物ではほぼ 20% がほぼ全長にわたってモデリングできた。
2. 情報伝達に関わるタンパク質のひとつグアニル酸シクラーゼはジスルフィド結合がわかっているが、立体構造が未知であった。ホモロジーモデリングにより、リガンド結合ドメインの立体構造モデルを提案することができた。これにより、これまで得られているアミノ酸置換のデータと整合性のある機能部位を予測できる。
3. タンパク質と DNA などのヌクレオチドとの相互作用部位は転写因子などの機能の詳細を知るために不可欠な情報である。この相互作用部位を経験則により予測する方法を開発した。予測精度は、リガンド結合に関わる塩基が一定の条件を満たす時に成功している。

◆教育内容

大学院における 2005 年度教育内容

本学は文部科学省による公募「魅力ある大学院教育イニシアティブ」の最初の年に、2 件が採択された。そのひとつである「生命情報学を使いこなせる女性人材」の講義「総合生命科学」の一部を担当した。

講義名：総合生命科学

内容：21 世紀は生命科学の時代だといわれる。様々な生物のゲノム情報を手にすることができる時が到来し、生命科学の様相は一変している。これからの生命科学は、ゲノムという生命活動の基本となる情報をもとに、発生、分化、老化、病気といった個体としての生命活動から、生物の種としての分化や進化など、壮大な生命科学の分野が開かれてくるであろう。「広い意味での生命情報学」は、生物学や情報学の他に、化学、物理学、数学の全てに関わる総合科学である。生命情報学分野の最近のトピックスや私自身の研究についてのエピソードも交えながら、生命情報学の位置づけと生命科学への期待を概観した。

◆Research Pursuits

1. Homology modeling was carried out for the open reading frames (ORFs) of the organisms whose genomes were sequenced and under public access. Around fifty percent of the ORFs of prokaryotes were modeled, however, only 20 % of ORFs of eukaryotes could be modeled.
2. Guanylyl cyclase C (GC-C) is a single-transmembrane receptor that is specifically activated by endogeneous ligands. The three-dimensional model of GC-C was constructed and its ligand-binding site appears to be located on the quite different region from its template structure.
3. Empirical rules were constructed for prediction of the interactions between nucleotides and proteins with known three-dimensional structures. The predictions were judged to be successful under certain conditions.

◆Educational Pursuits

I gave lectures in “Comprehensive Bioscience”, as one of the courses of “Attractive graduate education program” on “Education program for women graduate students engaged in bioinformatics”.

◆共同研究例

トヨタ中央研究所、CTI、医学生物学研究所、ネットフォースなどと、相互作用を含むタンパク質の機能予測法の開発、タンパク質デザイン法をはじめとする種々の生命情報学の技術開発に産学連携により取り組んできた。これらは名古屋大学理学研究科、長浜バイオ大学バイオサイエンス学部にて在籍した時期に行われた。

◆将来の研究計画・研究の展望

21世紀の生命科学とその応用は予想を超えて、広い意味での生命情報学を中心に展開していくとの展望のもとに、生命科学の新しい展開と体系化に貢献していきたい。その際に、大学の学部と大学院の教育を重視していきたい。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

生命情報学、計算生物学、生物物理学、分子進化学の基礎研究が、実は応用研究にも密接に結びつくことを、企業・他研究者等との共同研究で示していきたい。特に、選択的スプライシングによるタンパク質機能の多様化と生命システムの制御の研究に興味をもつ。タンパク質の部品モジュールなどをベースに、タンパク質機能の多様化の機構を解明したい。長浜バイオ大学特別客員教授として長浜バイオ大学との共同研究も行っている。

◆受験生等へのメッセージ

文系学部には女子大学、特にお茶大でなければ学べない専門領域が存在します。強調したいことは、「女子大学は理系の専門知識を身につけて、社会で生涯にわたって活躍したいひとにとって最適の場である」ことを、受験生にお伝えしたいと思います。これは私の自らの理系の教育者としてまた研究者としての経験に基づく信念ともいえるものです。さらに、学部と大学院において、文理融合の分野で、お茶大生が活躍できるようにカリキュラムの組織化が進行中です。

教員名	内田 伸子 (UCHIDA Nobuko)
学 位	学術博士 (1990 お茶の水女子大学)
職 名	理事・副学長
URL/E-mail	http://www.hss.ocha.ac.jp/psych/devpsy/home.html uchida@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

言語と認識の諸問題 / 言語・認知発達 / コミュニケーション力

◆主要業績

総数 (19) 件

- ・内田伸子 (編著)『心理学—こころの不思議を解き明かす—』(71 頁/全 344 頁)光生館
- ・内田伸子 (編著)『発達心理学キーワード』(68 頁/全 287 頁)有斐閣
- ・内田伸子『幼児教育ゲームへの接触が幼児のコミュニケーション能力に及ぼす影響』
基盤研究(B)研究成果 (全 245 頁)

◆研究内容

21 世紀 COE プログラム「誕生から死までの人間発達科学」拠点の拠点リーダーとして拠点研究を推進した。学問知と臨床知の統合をねらう本拠点では、脳科学と心の発達や研究成果の臨床・教育現場への応用をめざす研究に取り組んでいる。

◆17 年度の内田が取り組んだ主要テーマは以下の 3 点である

- (1)リスク社会における子どものコミュニケーション能力の発達について実験研究を行った。
- (2)幼児の安全教育に関する社会文化的要因の影響を解明するため、子どもの危機管理・安全教育をめぐる問題を診断し、望ましい子育て方策や安全教育の臨床支援プログラムを開発中である。
- (3)テレビ・テレビゲームなどの接触が子どもの発達、特に、認知能力やコミュニケーション能力にどのような影響を及ぼすか行動学的な実験研究や調査研究を実施した。

◆教育内容

学部教育:「発達心理学概論」、「人間と情報」の講義では、内容知識を伝えると共に、批判的思考力の育成をめざした授業方法をとっている。授業開始前 10 分間に授業内容にあわせたメッセージソングを聞かせるとともに、前回の学生のコメントや質問と内田の回答が書かれたコメント集 (1 回に B4 版で表裏 3〜4 枚程度) を配布して読んでもらう。授業終了時間 3 分前に授業が終わるようにして、3 分間に授業へのコメントや感想、質問をコメント票 (B6 版) に記入してもらった。一斉教育では双方向学習や学生同士の互惠学習が起こりにくいという弱点を克服するのに効果的であった。

大学院教育: 大学院前期・後期課程の院生の指導に力を入れた。個人指導と論文指導ゼミを組み合わせ修士論文 (6 名) や博士論文の研究を指導 (25 名) した。

教員全員が参加する「ランチトーク」ゼミでは研究指導と共に、プレゼンテーション能力を育成した。

◆特許

・子どもの発達と母子コミュニケーションの活性化: 過去 14 年間、出版社と共同で、メディアミックス教材 (子どもの創造的想像力の発達を促し、母子コミュニケーションを活性化するためのメディアミックス教材) を開発した。この教材は、モニター調査や効果測定により、よりよい教材へと改善する手法も開発したことにより、子どもたちに支持される教材を作成することができた。

・楽しんで会話しながら取り組める教材の開発: 子どもたちを惹きつける魅力的な教材としてビデオゲームソフト「ビーナ」を開発し、子どもたちに支持されている。この教材の改善のため、モニター調査により縦断的な追跡調査を行い、親子のコミュニケーションを活性化する演出技法を確立した。

その他、複数の出版社やおもちゃ制作会社と共同で絵本や幼児教育ビデオ・ゲームソフトの開発と監修を行っている。

◆Research Pursuits

Our center advances the research for the 21st century Center of Excellence (COE)

program, “Human Development from Birth to Death” as the leader of the center. We aim to integrate basic science research with clinical experience. Our research focuses on both neuroscience and cognitive development, and we strive to bring our results into the clinics, as well as disseminate them through education.

- 1.Studies were conducted on the development of communication abilities in children raised in risk societies.
- 2.In order to elucidate how social and cultural factors affect safety education for children, studies to illuminate the problems surrounding risk management and safety education are being developed. We are also working to develop a clinical program that supports parenting in such an environment.
- 3.Studies were conducted in order to investigate how extended exposure to television and video games affects children's cognitive development, especially with regards to their cognitive and communicative abilities.

◆Educational Pursuits

Undergraduate education: In the lecture-based classes of “Introduction to Developmental Psychology” and “Humans and Information,” there is a dual focus of training the students to understand the material, as well as fostering critical and analytical thinking skills. In the 10 minutes before the start of class, students are asked to listen to a song that encapsulates the day's lesson, as well as read over a summary of comments and questions from fellow students regarding the previous class, which are answered by Uchida. This was effective in overcoming the often unidirectional nature of lecture-based classroom education, and promoting a bidirectional flow in education by allowing the students to take part in their own learning process.

Graduate school education: Extra attention was given to graduate students just starting their research, as well as those finishing up their dissertations. In order to advance the research for their master and doctoral theses, one-on-one training was combined with seminars on research methods and “lunch talks” on the techniques of giving effective presentations.

◆共同研究例

- ・ベネッセ：メディアミックス教材（子どもの創造的想像力の発達を促し、母子コミュニケーションを活性化するためのメディアミックス教材）を開発し、幼児3人に1人が活用中。
- ・セガトイズ：ビデオゲームソフト「ビーナ」を開発し、モニター調査を踏まえて親子のコミュニケーションを活性化する演出技法を確立した。
- ・講談社：幼児アニメ「ミッフィー」を開発。NHK『おかあさんといっしょ』で放映中。

◆将来の研究計画・研究の展望

(1)ゲームやビデオへの接触が子どもの発達にどのような影響を与えるかについて行動学的アプローチと縦断研究を組み合わせた研究を推進する。(2)子どもの危険認知の発達や危険回避方略、コミュニケーション能力の発達について脳科学と行動学的アプローチにより解明する。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・子どものメディア環境のデザイン；子どもの発達に資するメディア環境のデザインについて提言。
- ・幼児の安全教育についての総合的研究；子どもの危険認知の発達や危険回避方略の発達についての基礎的知見を踏まえて、子ども自身が自律的に安全に配慮できるようにするために環境設定や大人の教育的働きかけについて提言する。

◆受験生等へのメッセージ

◆発達心理学は人が持つ能力のすべてを扱います。そしてそれらの力の萌芽は、乳幼児期に現れるため、乳幼児を対象とする発達心理学の研究テーマには、無限の広がりがあるといっても過言ではありません。心理学だけでなく、生理学、生物学、言語学、社会学など幅広い学問と結びつきながら、今後も活発な研究が行われていくことでしょう。◆あなたは人の振る舞いをみて不思議だなんて思ったことはありませんか？なぜそんなことをするのか、どうしてこんなことが起こったのか？答えをさがすときには、まず我が身をふりかえってください。最初の被験者はあなた自身なのです。困ったときどうするか、どんな気持ちになったか、どのようにして解決策をみつけたか、我が身をふりかえり、じっくりと自己内対話を交わしてみてください。「なぜ？」の答が自ずと見えてくるでしょう。◆発達心理学は面白い。人の心の不思議を解き明かすのには「発達」や「進化」の視点をもつことが必要です。自分の子ども時代を発見する旅、「発達心理学村」をいっしょに旅しませんか。わくわくするような「名所」や美しい「景観」をご案内し、感動的な「見所」へと同行させていただきます。

教員名	久保田 紀久枝 (KUBOTA Kikue)
学 位	学術博士 (1981 お茶の水女子大学)
職 名	理事・副学長
URL/E-mail	http://www.food.ocha.ac.jp/syokuhin/foodchem.htm kubota@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

におい成分の相互作用 / 香辛料の辛味成分 / 食品の香気形成とその生理機能

◆主要業績

総数 (6) 件

- ・ Pungent qualities of sanshool-related compounds evaluated by a sensory test and activation of rat TRPV1. Sugai, E. Morimitsu, Y. Iwasaki, Y. Morita, A. Watanabe, T. Kubota, K. Biosci. Biotechnol. Biochem., 69 (10), 2005.1951-1957
- ・ Quantitative analysis of sanshool compounds in Japanese pepper (X. piperitum DC) and their pungent characteristics. Sugai, E. Morimitsu, Y. Kubota, K. Biosci. Biotechnol. Biochem., 69 (10), 2005.1958-1962
- ・ Characteristic odour of Chinese jasmine tea formed by mutual interactions among potent odourants, "State-of-the Art in Flavour Chemistry and Biology", Proceedings of the 7th Wartburg Symposium, Kubota K. Ito, Y.; Hofmann, T. Rothe, M., Schiebelre, P. eds, Deutsche Forschungsanstalt für Lebensmittelchemie, pp308-314, 2005

◆研究内容

・ 日本料理の薬味として広く利用されるサンショウの辛味成分である 6 種のサンショオール類を単離、精製し、それらの辛味閾値、辛味の特性について官能評価法を用い明らかにした。また、静岡県立大学との共同研究により、トウガラシの辛味成分であるカプサイシンの受容体である TRPV1 に対するサンショオール類の賦活作用特性からサンショウの辛味特性について検討した。さらに、サンショウの葉、花、果実などの部位別辛味成分の分布や果実については、品種別や成熟に伴う辛味成分の変化を調べ、食生活における利用法など食文化的観点から考察した。これらの成果を 2 報の論文にまとめ、日本農芸化学会の欧文誌に投稿し、掲載された。

多くの食品の香気成分の構成成分として見出されているラクトン類について他の香気成分との共存による相互作用による香気形成への寄与について研究し、環太平洋学会議で発表した。

◆教育内容

学部
講義「食品化学」を担当し、食品の品質や機能性に関する化学成分について講義、課題演習を行った。
3 名の 4 年次学生に対し、最先端のジャーナルを読むゼミを行うとともに、各自の卒業論文課題に対する研究指導を行った。

大学院博士前期課程
「食品フレーバーの化学」について講義を行った。2 名の学生の研究指導を行い、そのうち 1 名については修士論文指導を行った。

大学院後期課程
6 名の学生の研究指導を行い、内 2 名の博士論文の査読となった。

◆Research Pursuits

- The detection threshold for pungent and taste characteristics of sanshools were examined by sensory evaluation, after isolating six sanshool related compounds. The pungent quality of each sanshool was also investigated by using the tests on the activation of rat TRPV1. Besides the distribution of each sanshool in the Japanese pepper plant grown in various regions and the change in composition of sanshools during maturation of the fruit were investigated.
- The mutual interaction among some sub-threshold aroma compounds in foods was investigated. Between some lactones and C6 alcohols and the esters synergetic effect was observed.

◆Educational Pursuits

I opened two courses in Food chemistry for undergraduate and Food flavor chemistry for graduates.
I had 3 undergraduate students, 2 master's course students and 6 doctoral students. One of them took a PH.D. and another also took a doctorate in science.

◆特許

- 現在関係している出願中の特許の件数：2

◆将来の研究計画・研究の展望

においては化学物質が受容体を刺激することにより感知される化学感覚である。刺激する側の食品のにおい成分について、化学的分析と人の感覚の評価など生理学的分析を併用する研究を展開する。おいしさとは何かを科学的に解明するとともに、食品産業への貢献、におい感覚の仕組み解明に少しでも寄与したい。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ジャスミン茶の香り成分に関する研究

◆受験生等へのメッセージ

食品にはさまざまな色、味、香りが感じられます。またいろいろな生理機能についても解明されつつあります。これらは主に食品に含まれる有機化合物による有機化学的な変化によるところが多いのです。
身の回りで、日々目にし、感じるいろいろな現象や感覚を最先端の技術を使って自分で検証できたときの喜びを、大学で、さらには大学院でぜひ経験してください。

教員名	柴田 文明 (SHIBATA Fumiaki)
学 位	理学博士 (1971 東京教育大学)
職 名	理事
URL/E-mail	

◆研究キーワード

量子情報理論 / 量子非平衡系 / 緩和現象 / 基礎的量子現象 / 量子通信理論

◆主要業績

総数 (4) 件

- ・ Sachiko Kitajima, Masashi Ban and Fumiaki hibata:
A Model of Quantum Mechanical Communication Channel with Quantum and Thermal Noises,
J.Phys.Soc.Jpn., 74 No.5 (2005) 1436-1444 .
- ・ Masashi Ban, Sachiko Kitajima and Fumiaki Shibata:
Decoherence of quantum information in non-Markovian qubit channel
J. Phys. A: Math. Gen. 38 (2005) 7161-7174.
- ・ Masashi Ban, Sachiko Kitajima and Fumiaki Shibata:
Decoherence of quantum information of qubits by stochastic dephasing
Phys.Lett. A 349 NO.6 (2005) 415-421.

◆研究内容

研究テーマは理論物理学のうち、
○量子情報理論 ○非平衡量子系 ○量子緩和現象
であり、成果は 以下の査読付論文に発表されている。
・A Model of Quantum Mechanical Communication
Channel with Quantum and Thermal Noises,
J.Phys.Soc.Jpn., 74 No.5 (2005) 1436-1444 .
・ Decoherence of entanglement in Bloch channel,
J. Phys. A:Math.Gen., 38(2005)4235-4245.
・ Decoherence of quantum information in
non-Markovian qubit channel, J. Phys. A: Math.
Gen. 38 (2005) 7161-7174.
・Decoherence of quantum information of qubits by
stochastic dephasing,Phys.Lett. A 349 (2005)
415-421.
・ Correlated and collective stochastic dephasing of
qubit entanglement,Physics Letters A 354 (2006)
35-39.
・ On phase relaxation processes,J.Mod.Optics,
2006, accepted for publication.
・ Stabilizer Code for Uncorrelated Errors Can
Correct Spatially Correlated Ones, Phys. Rev.
Lett., submitted.

◆教育内容

学部の教育：
1. 「量子力学Ⅰ」の講義。2年生対象。
2. 「物理学特別講義Ⅴ」3年生に対する卒業研究用のプ
レゼミナール。量子情報理論の基礎。
3. 「特別研究」卒業研究。テーマは神経回路網のダイナ
ミクス。2名卒業。
大学院の教育：
1. 「量子物理学特論」博士前期課程
2. 「量子物理学特論演習」博士前期課程
3. 「統計物理学」博士後期課程
博士前期課程（修士）2名修了。
博士後期課程（博士）1名修了。

◆Research Pursuits

Among theoretical physics, main themes are:

○ Quantum information theory ○ Non-equilibrium physics ○ Quantum relaxation.

The followings are the output results:

- A Model of Quantum Mechanical Communication Channel with Quantum and Thermal Noises, J.Phys.Soc.Jpn., 74 No.5 (2005) 1436-1444 .
- Decoherence of entanglement in Bloch channel, J. Phys. A:Math.Gen., 38(2005)4235-4245.
- Decoherence of quantum information in non-Markovian qubit channel, J. Phys. A: Math. Gen. 38 (2005) 7161-7174.
- Decoherence of quantum information of qubits by stochastic dephasing, Phys.Lett. A 349 (2005) 415-421.
- Correlated and collective stochastic dephasing of qubit entanglement, Physics Letters A 354 (2006) 35-39.
- On phase relaxation processes, J.Mod.Optics, 2006, accepted for publication.
- Stabilizer Code for Uncorrelated Errors Can Correct Spatially Correlated Ones, Phys. Rev. Lett., submitted.

◆共同研究例

- 日立製作所基礎研究所と量子情報理論
- 筑波大学と量子情報理論

◆受験生等へのメッセージ

役に立つとは何だろう

水銀の電気抵抗がゼロとなる不思議な現象は、温度をひたすら下げることにより情熱を燃やした研究者の発見でした。今や、超伝導線材は強力な電磁石を作る上で必要不可欠な素材として製品化され、世界中で使われています。

半導体メモリー、CPU チップなど、高度に集積された代表的工業製品として、アメリカや日本の産業を支えている半導体の発明は、ゲルマニウムという物質の表面状態の研究という、まことに地味な基礎研究の中から生まれたのです。

本学は来年度から全学の大学院を全面的に改組します。これにより、基礎的な研究を背景にした教育を一層充実させます。また、同時進行的に新しい教養教育（21世紀型リベラルアーツ）を展開して、根源的な思考法を養うための準備作業に入っています。

役に立とうが立つまいが、皆さんが自身の興味で学び、思索することを期待しています。私たちにも、多少のお手伝いはできるでしょう。

教員名	羽入 佐和子 (HANYU Sawako)
所 属	文教育学部人文科学科哲学講座
学 位	学術博士 (1982 年 お茶の水女子大学)
職 名	副学長
URL/E-mail	hanyu@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

哲学と科学 / 倫理的視点から見た生命 / 因果性と自由 / 比較思想 / コミュニケーション

◆主要業績

総数 (1) 件

・Sawako Hanyu, The Communication between Jaspers' Philosophy and Oriental Thought, in Studies in European Philosophy from the viewpoint of Comparative Thought vol.2, 「ヨーロッパ近現代哲学の比較思想的研究会」編, pp.1-15, 2006.3

◆研究内容

哲学的人間学とヤスパース哲学をテーマとした。

ヤスパース哲学については、国際ヤスパース協会連盟の主要メンバーを中心として 1999 年に開始したプロジェクト「カール・ヤスパース研究」がある。この中で、インド、中国の思想とヤスパース哲学の主要概念との比較分析を担当した。

哲学的人間学に関しては、哲学と科学の論理的手法の比較、論理の普遍性、倫理的判断の普遍性を研究課題とした。例えば哲学で人の「心」を対象とするとき、物理的言語による記述の限界が問題になる。この問題を二つの視点から研究した。一つは因果性の議論を手がかりとし、他方は、ヤスパースとハーバーマスを中心としたコミュニケーションの理論を基盤とした研究である。また、論理の普遍性、倫理的判断の普遍性について、カントの認識論、実践哲学を中心に、その理論を哲学的人間学に関連づける研究を開始した。

◆教育内容

理性の意味と因果性の問題を中心的テーマとして講義と演習を行った。

ヨーロッパ哲学史において「理性」がどのような意味を担ってきたかをたどり、「合理性」や「理性的であること」の意味を考察した。それは、現代社会で求められる合理性の意味を明らかにしようと意図している。これに関連して、コミュニケーションの問題を解釈学やハーバーマスの思想も扱った。

また、因果性の問題を、「自由」との関係と哲学的人間学の視点から論じた。人間を哲学の対象とした場合、科学的探究とは異なった手法が必要か否か議論が分かれる。この問題を考察するために、科学的因果性とは何か、それは哲学的にいかに評価されうるかを検討した。

さらに、学部を超えて開設している基礎ゼミでは、人格性や人間の尊厳などの概念を、日常的観点から問い直す試みを行った。この授業は、おもに 1 年生対象として、哲学的に考えること、理論的に主張することを学ぶ訓練の場でもある。

◆Research Pursuits

I am researching in philosophical anthropology and Karl Jaspers' philosophy.

Concerning Jaspers' philosophy, I have been doing a project on his thought since 1999 with main members of International Association of Jaspers Societies. In this project, I analyzed some significant concepts of Jaspers' thought from the viewpoint of comparative philosophy.

In relation to philosophical anthropology, I am researching in the following problems: deference between philosophy and science, universality of logic and ethical thought. For the purpose to research these subjects, it is important to clear causality, freedom, determinism, or to investigate theories of communication. In connection with the problem of universality, I try to study the philosophy of Kant, Jaspers and Habermas.

◆Educational Pursuits

The main subjects of lectures and seminars were concepts of reason and causality.

In order to clear the meaning of rationality in these days, I concentrated on the concept of reason and rationality in the history of European philosophy on my lecture. In relation to this point, I explained the theory of communication and Hermeneutik.

About the theory of causality, I lectured from the viewpoints of freedom and philosophical anthropology. That is, what human being is, or what the difference between scientific research and philosophical research is.

In my class of introductory seminar on philosophy, we tried to discuss the ordinary and familiar problems philosophically.

◆共同研究例

- ・カール・ヤスパースの思想的展開
- ・「生命」の全体論的研究

◆将来の研究計画・研究の展望

人間の哲学的生命論研究、人間存在の比較思想的研究をテーマとする。そこで、哲学と科学の論理、倫理的判断の特性や普遍性を研究し、その成果をもとに社会的問題を哲学の観点から分析して論じることを目標とする。具体的には、情報化社会とリアリティーの問題、科学と技術の問題、コミュニケーションの多様性の問題を哲学的に分析する。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・「生命」の哲学
- ・コミュニケーションの文化的差異
- ・人間に関する全体論的研究

◆受験生等へのメッセージ

受験生へのメッセージ：「役立つ哲学」

哲学には二つのあり方があります。すべての人にとっての哲学と、専門家の哲学です。

卒業生が数年ぶりに訪ねてきて、こんなことを言います。

「大学で哲学を勉強して本当によかった。哲学は役に立たないといわれますけど、すっごく役に立っています。」理由を聞くと、他人の言おうとしていることがすぐに理解できる、ということです。

哲学の授業では、まず、自分の思考の柔軟性を高める訓練をします。また、自分の主張を論理的に組み立てることの訓練もします。これらは、広い意味での哲学で、何を専門とするか、将来何を職業とするかにかかわらず「役に立つ哲学」として、哲学の重要な側面だと考えています。

教員名	相川（小島） 京子（KOJIMA-AIKAWA Kyoko）
所 属	理学部化学科
学 位	博士（薬学）（1994 東京大学）
職 名	助教授
URL/E-mail	kyoko@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

糖鎖 / レクチン / 分子認識

◆主要業績

総数（10）件

論文

1. Masuda J, Suzuki K, Satoh A, Kojima-Aikawa K, Nakanishi K, Kuroda K, Murakami M, Tkayama E, and Matsumoto I.

Beta-2-glycoprotein I and urinary trypsin inhibitor levels in the plasma of pregnant and postpartum women. *Thrombo Res.* 117(2006)255-261.

2. Gotoh M, Takamoto Y, Kurosaka K, Masuda J, Ida M, Satoh A, Takayama E, Kojima-Aikawa K, Kobayashi Y, Matsumoto I.

Annexins I and IV inhibit Staphylococcus aureus attachment to human macrophages.

Immunol Lett. 98(2005)297-302.

教材開発

3. 糖鎖科学入門 –レクチンを使った細胞表面糖鎖検出キット–

◆研究内容

（１）アネキシンレクチンの生体内での機能を明らかにするために、以下の研究を行なった。①ヒト ANX1, ANX2, ANX4, ANX5 とグリコサミノグリカン鎖の結合部位の詳細解析：リコンビナント ANX を調製し、ヘパリン／ヘパラン硫酸、コンドロイチン硫酸との結合性を比較した。その結果、ANX1 に最も高い GAG 結合活性がみられた。また、ANX5 の持つ抗血液凝固活性は ANX5 の GAG 結合部位が関与していることを明らかにした。

②線虫 *Caenorhabditis elegans* の ANX の機能解析：リガンド結合活性、発現細胞の同定、遺伝子発現時期の比較、過剰発現体の調製とその表現型の解析を行なった。その結果、線虫に発現しているアネキシン４種（NEX1～4）のうちの３種にレクチン活性があることがわかった。また NEX1～4 は異なる細胞や時期に発現することが明らかになった。

（２）腸管レクチン ZG16p の機能解析

◆教育内容

学部生に対し、構造生化学Ⅰおよび分子生物化学を開講した。実習は基本化学実験、生物化学実験を分担担当した。大学院生に対しては機能生化学特論、機能生化学特論演習を開講した。また特別研究として学部４年生２名、大学院前期課程学生を５名、大学院後期課程学生を２名の指導を行った。

◆Research Pursuits

We are investigating molecular mechanisms of interaction between sugar chains and proteins and cellular functions of lectins. Lectins, carbohydrate-binding proteins, are specific binding partners of sugar chains which are involved in various cell functions.

Our recent subjects:

Molecular mechanisms of interaction of annexin lectins and glycosaminoglycans.

Physiological roles of annexin lectin in blood coagulation cascade

Functional analysis of annexins in *Caenorhabditis elegans*.

◆Educational Pursuits

Lectures about biochemistry for undergraduate students:

Structural biochemistry I and Molecular biological chemistry. I also give lectures for postgraduate students and supervise their thesis for master and doctor degree.

◆共同研究例

- ・イノシトールの生理作用に関する研究
- ・バナナレクチンの生理作用に関する研究
- ・糖鎖を認識するモノクローナル抗体を使った婦人科腫瘍の診断、治療に関する研究

◆将来の研究計画・研究の展望

核酸、タンパク質に続く、第三の生命鎖である糖鎖の生体内での機能を明らかにするために、種々の新規な糖鎖認識タンパク質（レクチン）の構造と生理機能を研究しています。現在の研究成果を将来的には、レクチンを使った細胞レベルでの糖鎖検出法、細胞機能解析に有用なプローブ開発、レクチンのヒト細胞へのユニークな生理活性を利用した疾患の予防や治療法などの開発へと展開したいと思っています。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・企業・他研究者等と共同で研究できるテーマ
 - レクチンを使った糖鎖検出
 - 果実や野菜に含まれるレクチンのヒトへの生理作用に関する研究
- ・今後実用化したいテーマ
 - 1 細胞レベルでの糖鎖のキャラクタリゼーション

◆受験生等へのメッセージ

化学の研究手法を生命現象へ適用し、生命の不思議を分子のレベルで明らかにすることを目指しています。糖鎖は細胞表面や細胞間に局在しており、多細胞生物が細胞間コミュニケーションに選んだ究極のツールと言えます。糖鎖の持つ様々な情報を一緒に解読し、細胞のことばを聞いてみるのはいかがでしょうか？

教員名	會川 義寛 (あいかわ よしひろ)
所 属	生活科学部 人間・環境科学科
学 位	工学博士
職 名	教授
URL/E-mail	http://kankak.eng.ocha.ac.jp/ aikawa.yoshihiro@ocha.ac.jp

◆研究キーワード

電気化学 / 生理学 / 針灸学

◆主要業績

総数 (7) 件

- ・F. Kagitani, S. Uchida, H. Hotta, Y. Aikawa, Manual Acupuncture Needle Stimulation of the Rat Hindlimb Activates Groups I, II, III and IV Single Afferent Nerve Fibers in the Dorsal Spinal Roots, *Jpn. J. Physiology*, **55**, 149-155 (2005).
- ・會川義寛、池田寛子、兒玉歩、前田育子、大久保淳子、三浦明香子、岡田祐美、山下順三、演算子法とラプラス変換、生活工学研究、**7**, No.2, 222-225 (2005).
- ・池田寛子、大久保淳子、扇澤美千子、兒玉歩、野口榮太郎、會川義寛、GTP 結合蛋白質、生活工学研究、**7**, No.2, 210-211 (2005).

◆研究内容

1. 眼底血流に対する針刺激の効果
 - (1) 右天柱・右風池(後頸部)および右肩井・右曲垣(肩背部)へ電針刺激($f=1\text{ Hz}$, $\Delta t=250\text{ }\mu\text{sec}$, $T=15\text{ min}$)を行なった(11名22眼)。
 - (2) 電針刺激により、右眼・脈絡膜血流が有意に増加した(刺激開始後20分で約3%増加)。しかし、左(非刺激側)眼・脈絡膜血流は変化しなかった。
 - (3) また、眼圧および血圧はいずれも変化しなかった。
2. NiTi 合金電極の表面酸化膜と表面準位

電極表面酸化膜に基づく表面準位を検討した。

NiTi 合金電極の表面酸化膜層には、酸化チタン TiO_2 、チタン酸ニッケル NiTiO_3 、 $\text{Ni}(\text{OH})_2$ らが存在する。このうち、 $\text{Ni}(\text{OH})_2$ 中の $\text{Ni}^{3+/2+}$ 準位のみが、 0.530 V vs. SCE のエネルギー位置に準位密度 $5.2 \times 10^{15}\text{ cm}^{-2}$ の Tamm 準位を形成することを明らかにした。糖の酸化はこの表面準位を介して行なうもので、電極電位そのものには直接には依存しない。

この表面準位密度より、表面薄膜の膜厚が 1.8 nm であることを示した。この値は他の研究者等による値と一致した。

◆教育内容

- 学部・大学院における教育内容 (2005 年度)
- (1) 数学・物理学分野

学部の1, 2年生には微分・積分、級数展開、線型代数、ベクトル解析、質点の力学、剛体の力学を教えた。3年生には、環境物理学を教えた。4年生には、材料力学を教えた。

大学院学生には、フーリエ解析(アラマノヴィッチ「数理解理学入門」東京図書)、拡散方程式の解法(J. Crank, The Mathematics of Diffusion, Clarendon Press)などを教えた。
 - (2) 化学・生物学分野

学部2年生に生化学の基礎を教えた(Voet, 「基礎生化学」東京化学同人)。

大学院学生には、組織学(Gartner & Hiatt, 「最新カラー組織学」西村書店)と、生理学(Berne & Levy, 「カラー基本生理学」西村書店)と、分子生物学の基礎("Molecular Biology of THE CELL", Garland Science)を教えた。
 - (3) 英語分野

学部3年生に科学英語を教えた。特に、数量の表現(富井篤「技術英語数量表現辞典」三省堂)、冠詞の使用に関して教えた。
 - (4) 大学院博士後期課程学生の研究指導

現象のモデル作製、ならびに式による表現を指導した。また、英文論文作成を指導した。

◆研究内容 (English)

1. Effect of acupuncture on ocular fundus circulation

(1) Electroacupuncture stimulation ($f = 1 \text{ Hz}$, $\Delta t = 250 \text{ } \mu\text{sec}$, $T = 15 \text{ min}$) was applied between Tianzhu and Fengchi on the right neck and between Jianjing and Quyuan on the right shoulder (6 males and 5 females).

(2) The choroidal blood flow in the right (stimulated side) was increased significantly by the electroacupuncture stimulation, whereas that in the left (unstimulated side) showed no change.

(3) Both of the intraocular and blood pressures also showed no change by the stimulation.

2. Surface oxide layer and surface states on Ni-Ti alloy electrode

(1) Surface states in the oxide layer on Ni-Ti alloy electrodes were studied.

(2) The oxide layers on Ni-Ti alloy electrodes have TiO_2 , NiTiO_3 , and Ni(OH)_2 as their constituents.

(3) It was shown that only the $\text{Ni}^{3+/2+}$ level in Ni(OH)_2 forms the Tamm states, whose level 0.530 V vs.SCE and density $5.2 \times 10^{15} \text{ cm}^{-2}$, through which the oxidation of saccharides takes place.

(4) The thickness of the surface oxide layer on the electrode was estimated as 1.8 nm, which is in good agreement with the values obtained by other researchers.

◆教育内容 (English)

1. Mathematics and physics

(1) For the first and second year students in undergraduate school: differentiation and integration, series expansion, linear algebra, vector analysis, mass point and rigid body mechanics

(2) For the third year students in undergraduate school: Environmental physics

(3) For the fourth year students in undergraduate school: Material mechanics

(4) For the students in graduate school: Fourier analysis (Aramanovich, "Introduction of Mathematical Physics", Tokyo Toshio), solution for diffusion equation (J. Crank, The Mathematics of Diffusion, Clarendon Press)

2. Chemistry and biochemistry

(1) For the second year students in undergraduate school: Biochemistry (Voet & Pratt, "Fundamentals of Biochemistry", JW & S)

(2) For the students in graduate school: Histology (Gartner & Hiatt, "Color Textbook of Histology"), Physiology (Berne & Levy, "Principles of Physiology"), introduction of molecular biology ("Molecular Biology of THE CELL", Garland Science)

3. Language

(1) For the third year students in undergraduate school: Technical English (A. Tomii, "Dictionary of Numerical Expressions in Technical English", Sanseido)

◆共同研究例

1. 針灸刺激の循環器系に与える効果 (東京衛生学園)、2. 体性・自律反射 (東京都老人総合研究所)
3. 糖の電気化学検出 (東京医科大学)、4. 体表刺激と肝血流 (国際医療福祉大学)
5. 蕎麦の茹で方と fMRI (食品総合研究所)

◆将来の研究計画・研究の展望

1. 金属表面には必ず薄い酸化膜が表面に形成されているが、その形成機構ならびにその電子移動過程における役割を解明する。
2. 麺類を茹でるとその表面から水が浸透し、これが麺の相転移を促し、その結果、麺内における水の拡散定数が大きく変化する。これらの条件を取り入れた麺の茹で方のモデルと理論を作ろうとしている。
3. 生体の示す各種生理信号 (血圧、脈拍数、血流量、脈波波形、呼吸など) の周波数成分は、相互に関係を有するとともに、自律神経の活動を反映する可能性がある。これらを検討している。

◆受験生等へのメッセージ

1. 目前の対象や分野は次々と変化する。しかし、基礎を身に付けていれば、対象が変化しても、自分で考えて対処ができる。したがって、基礎の勉強をしっかりとすることがまづ第一に大切である。
2. 自分の思考や成果は、他に報告して初めて社会的に意味を持つ。報告は、他が理解できる様にしなければならない。したがって、論理的な推論・思考や主張を行なう訓練が必要である。発表練習や質疑応答の訓練、報告書や論文、解説記事の作製は、このために役に立つ。
3. 現在、分野によっては、資格がなければ就職も昇進もできない。大学入学時にこの点を検討しておかなければ、あとでは間に合にくいことがあるので注意が必要である。

教員名	青木 紀久代 (AOKI Kikuyo)
所 属	人間文化研究科人間発達科学専攻
学 位	
職 名	助教授
URL/E-mail	http://www.develop.ocha.ac.jp/aoki.html

◆研究キーワード

子育て支援 / 学校メンタルヘルス / コミュニティ・アプローチ

◆主要業績

総数 (35) 件

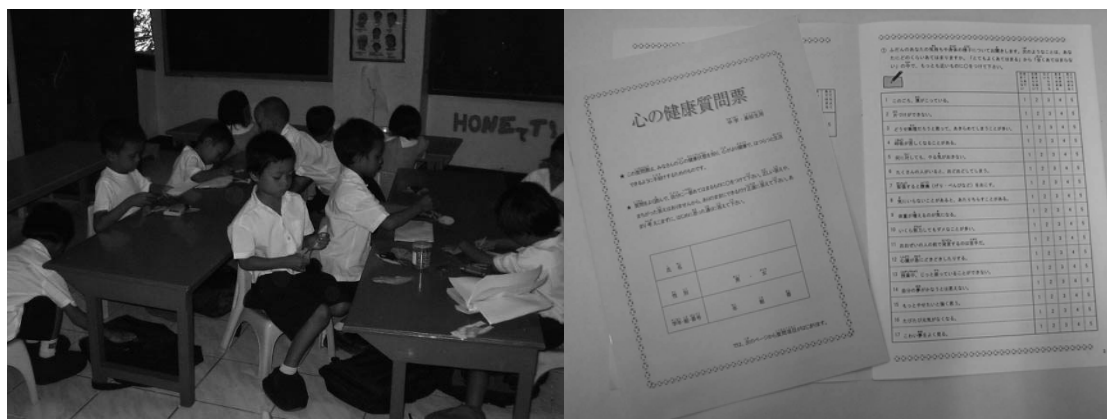
- ・星薫・山口勤・青木紀久代 2006 心理学入門 財団法人放送大学教育振興会
- ・Aoki K., & Nakano Y. 2005 Study on Child-Rearing Support in Slums of the Philippines. Journal of international Psychology Reporter. 10(1),13-15.
- ・永井美鈴・青木紀久代・増田かやの・岩藤裕美 2005 「女子高校生を対象とした摂食障害予防教育の試みーメンタルヘルス促進授業プログラムの効果ー」 学校保健研究 47(5),436 - 451.

◆研究内容

臨床心理学の蓄積を一個人心理療法からコミュニティへのメンタルヘルス支援・心理教育へと発展的に活用するためのシステムを構築することを目指した実践研究を行っている。例えば、対象となるコミュニティ独自の問題を把握するためのアセスメントツールの開発・アセスメントに基づく処方箋の適用・一定の実践及び事後評価を一貫して展開する。研究は、保育園協会、学校、教育委員会、あるいは就学援助を行うNGOなど、問題解決のニーズのある団体との協働となる。このようなスタイルで、2005年度に行った主な研究プロジェクトは、次の4つである。①幼児期から青年期までのメンタルヘルス縦断研究ー心理的援助のためのアウトリーチ・プログラムの構築ー、②フィリピン・セブシティスラム地区の就学前児童におけるECCD（幼児の早期ケア発達支援）縦断研究、③子育て支援者の専門研修プログラム開発、④インターネットによる子育て支援の可能性に関する調査研究。

◆教育内容

生涯発達上に起こるさまざまな心理的不適応の問題の理解と対応を、実践知と実証知の双方から学ぶことをテーマにしている。学部では、発達臨床心理学、心理臨床学、臨床心理学基礎実習、等の授業を担当した。またコアクラスター授業を半期担当し、主に摂食障害の心理・社会問題をジェンダー論から検討した。大学院では、カウンセリング特論・発達臨床心理学特論などを担当し、心理療法の個人指導及び実践研究を主とした修士論文指導を行った。「相談動機の低い思春期の生徒への予防的・心理臨床的支援を探る」「エンパワメントの観点からみた母親の参加体験過程：保育園・子育て広場における子育てネットワーク構築の試みから」「幼・小移行期の保育のなかで自己感を育てる心理臨床コンサルテーション」(以上修士論文)。博士後期課程では、在籍学生の全てが臨床心理士資格を有し、児童相談所、子育て支援センター、学校、クリニックなどでの専門職としての臨床経験を活かしながら、臨床研究に取り組んでいる。全ての学生が、学会発表と論文の執筆を行った。



◆Research Pursuits

I am preceding practical studies with the aim of constructing systems in which we can progressively apply the accumulated findings in the field of clinical psychology and individual psychotherapy to mental-health support or psycho-education in community. For example, I continuously conduct a study to develop an assessment tool for grasping the problems uniquely exist in the targeted community, to apply the prescription based on the assessment and to evaluate the specific practice.

Studies are collaborated with nursery school association, schools, school board or NGOs that support schooling. The four main research projects preceded in 2005 are as follows: 1. A longitudinal study on mental health from early childhood to adolescence; 2. Development of an out-reach program for psychological support; 3. A longitudinal study for early childhood care and development (ECCD) in a slum area in Cebu, Philippines; 4. Development of a training program for parenting supporters; 5. A research on the availability of parenting support through internet.

◆Educational Pursuits

The main theme to study is to understand and respond to various psychological maladjustments during life-course development from clinical practices and empirical knowledge. For undergraduate programs, I was in charge of Development and Clinical Psychology, Clinical Psychology, Fundamental trainings of clinical psychology and so on. Moreover, I was in charge of core-cluster classes and examined the psychological and social issues lay behind eating disorders from gender study perspectives. For graduate programs, I was in charge of Counseling theories, Developmental and Clinical Psychology and so on, and supervised individual counseling cases and master's theses. "Exploring preventive and psychological support for early adolescents whose motives for visiting counseling are low", "The experiencing of mothers' from the viewpoint of empowerment: Through an attempt to develop parenting networks in nursery schools", "Consultation to foster children's sense of self in early childhood care and education during the transition from kindergartens to elementary schools". (The above-mentioned are supervised master's theses) In the doctoral program, students all acquired the certified clinical psychologist, and are working on their studies while making use of their specialized work experiences at clinical settings, such as child counseling centers, child support centers, schools, mental clinics. All students presented their researches at conferences and submitted papers.

◆共同研究例

- ・八王子私立保育園協会との共同研究
- ・NGO カパティとの共同研究

◆将来の研究計画・研究の展望

現在4つのプロジェクトは、それぞれの成果をふまえ、発展している。例えば、学校メンタルヘルス関連のプロジェクトは、2006年度より、教育委員会と共同で、小豆島における食育とメンタルヘルスの増進推進プロジェクトに発展する。子育て支援プロジェクトは、2006年度より、八王子市と共同で子育て支援のネットワークシステム構築の実践研究へと発展する予定である。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・メンタルヘルス、子育て支援などに関するコミュニティベースの実践研究

◆受験生等へのメッセージ

臨床心理学の中でも発達臨床心理学の発想は、治療的アプローチを用いながらも、もっと発達促進的で、育ち合う関係作りを重視します。カウンセリングルームに自ら訪れ、自分の悩みをじっくりと語ることができ、心の内面を癒し、自己成長できる人というのは、ある意味では、恵まれた支援環境にある人だとも言えます。世の中には、援助の必要な人は沢山いますが、全ての人を救うことはできないし、また支援者自身も、実は、沢山の援助を必要とします。ありもしない「万能な支援者」という錯覚に陥ることなく、学部時代は、「心の援助」の基本を、広く学び、また他者に助けられながら育てている私たち自身を自覚しながら、卒業後、様々な生活シーンに役立つものをつかんで下さい。大学院に入って、臨床心理士を目指す人達、あるいは、すでに専門家の人達には、在学中に、是非自分たちの心理臨床活動のイメージの幅を広げ、創造的な援助スタイルを見いだして頂きたいと思います。

教員名	赤松 利恵 (AKAMATU Rie)
所 属	生活科学部食物栄養学科
学 位	博士 (社会健康医学)
職 名	講師
URL/E-mail	http://www.food.ocha.ac.jp/publichealth/phnindex.htm akamatsu@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

健康教育 / 行動科学

◆主要業績

総数 (7) 件

- ・ Interpretations and attitudes toward healthy eating among Japanese workers, *Appetite*, (2005) 44(1), 123-129.
- ・ Relationships between smoking behavior and readiness to change physical activity patterns in a community in Japan, *American Journal of Health Promotion* (2005) 19, (6), 406-409.
- ・ 健康的な食生活のための行動カウンセリング (behavioral counseling) 米国予防医学タスクフォースの報告と行動カウンセリングについて, *栄養学雑誌* (2005) 63(2), 105-108.

◆研究内容

主な研究領域：健康教育（栄養教育）、健康心理学、公衆衛生学

2005 年度の研究

- ・ 中学生を対象とした間食の過食行動に関わる心理社会的要因の検討ー計画的行動理論を用いてー
- ・ 中学生を対象とした間食選択動機調査票の作成
- ・ 健康情報についてのメディア報道の研究

◆教育内容

2005 年度学部授業：基礎ゼミ（コア科目）、教職総合演習（教職に関する科目）、栄養教育論Ⅰ、栄養カウンセリング論（専門科目）、食物科学輪講（専門科目）

◆Research Pursuits

Main research field: Health education (Nutrition education), Health psychology, Public health

Studies in 2005:

*Understanding the psychosocial predictors of excessive snacking in Japanese junior high school students using the theory of planned behavior

*A Measure for the Motives underlying Snack Food Selection:
Applying the Snack Choice Questionnaire (SCQ) in Junior High Schools

*A study of media coverage about health information

◆Educational Pursuits

Classes in 2005: Basic seminar (core subjects), Seminar for teaching profession (special subjects for becoming teachers), Nutrition education 1, Nutrition counseling, Seminar for food and nutrition science (special subjects)

◆共同研究例

- ・生活習慣改善システムの開発

◆将来の研究計画・研究の展望

- ・健康教育（栄養教育）の実践のベースとなる方法論を提案する研究をすること。その方法論には、行動変容に有効とされる行動科学の考え方を取り入れる。
- ・健康や栄養に関する情報が正しくかつ役に立つ内容である社会にすること。

◆受験生等へのメッセージ

健康や栄養の情報は世の中にたくさんあふれているのに、我々の健康度は高いとはいえないのが現状です。その理由として、役に立つ情報が少ないこと、役に立つ情報であったとしても、なかなかそれを実践できないことが考えられます。人々が健康的な生活を送るためにどんなサポートが必要だろうか、また健康的な生活のために社会はどうあるべきなのだろうか。そんなことをテーマに、研究をすすめています。毎日の食生活と社会に疑問を感じている方、いっしょに取り組んでみませんか。

教員名	秋山 光文 (AKIYAMA Terufumi)
所 属	文教育学部人文科学科形象分析学講座
学 位	文学修士(1974)
職 名	教授
URL/E-mail	http://www.li.ocha.ac.jp/hum/tetsugaku/tetugaku.htm akiyama.terufumi@ocha.ac.jp

◆研究キーワード

インド美術史 / 仏教美術 / 仏教説話図像

◆主要業績

総数 (3) 件

・秋山光文「インド中部におけるグプタ建築の諸相」(分担執筆)『古代インドにおける宗教的造形の諸相－寺院建築と美術の成立と展開－』(平成 14～17 年度科学研究費補助金 基盤研究 A(1) 研究成果報告書 研究代表者: 宮治 昭) 名古屋大学

・共訳、Jarrige, Jean-François & Gies, Jacques 『聖なる芸術 ギメ美術館アジア宗教美術コレクション』

(原題: Voyage spirituel: Art sacré du Musée Guimet, 英訳版: Spiritual Journey: Sacred Art from Musée Guimet) 翻訳担当箇所: (アミナ・オカダ著) RUPA-インド美術における「形態学」およびインド美術関連図版解説, Istanbul, Ertug & Kocabiyik Publishers.

◆研究内容

インドを中心として、わが国に及んだ仏教美術の展開していくプロセスを追求する。とりわけ、仏教美術が最初に展開するインドにおいて、不可視的な存在とされてきた仏陀の表象が、どのような変節の中で可視的な存在として表出されるのかを検証する。とりわけ、インド古代初期に展開する仏教説話図におけるさまざまな特質を解明することにより、AD 1 世紀後期における仏陀像出現のプロセスを跡づけることが可能になるとの見通しを得た。名古屋大学宮治昭研究室の主催する科学研究費補助金プロジェクト「古代インドにおける宗教的造形の諸相－寺院建築と美術の成立と展開－」への参加は、こうした研究成果を踏まえ、さらにインド古代後期(いわゆるグプタ時代)に展開するインドの民族意識が、どのように造形作品に展開していくかを検証するものであった。とりわけ、4 年間に及ぶ同プロジェクトの最終年に、デカン西部に展開する数多くの石窟寺院調査に参加できたことは、これまでの研究成果と合わせて「古代インドにおける民族芸術の成立」を実証する極めて有力な材料を収集することが出来た。

◆教育内容

【学部】平安時代後期の公家であった大江親通『七大寺日記』を底本とし、歴史的資料と実在する作例との相関を考える演習を行う。授業を通じ、日本美術史・仏教美術史に関する文献資料の検索方法及び研究発表のプレゼンテーション法を併せて指導する。

【大学院】講義科目の内容は、最近の仏教美術史学研究成果に基づいて、古代インドから広く仏教文化圏に展開する造形美術を通じ、「仏教美術伝搬のプロセス」を考察する。特に南アジアを中心に東南アジア諸国や我が国にまで及んだ仏教文化圏諸地域について、地域性と歴史的背景から検証していくことを目的とする。また、演習科目では Ratan Parimoo, *Life of Buddha in Indian Sculpture (Ashta-Maha-Pratiharya)*, Kanak Publications, New Delhi, 1982. を底本にしなが、インド古代彫刻に現れた仏伝表象とその特質について討議していく。

◆将来の研究計画・研究の展望

インド文化圏からさらに広く中国・東インド諸地域をはじめ、東南アジア一帯にまで及んだ、インド古代後期（いわゆるグプタ時代）に展開するインドの古典様式について、その展開のプロセスを考察するとともに、各地域における受容のプログラムについて、それぞれの地域における民族的・歴史的背景を探る。これは、大きく仏教文化圏、あるいはインド文化圏における異文化（インド文化・仏教文化）の受容プロセスが、その後の各地域における独自文化・様式、すなわちそれぞれの地域における国家意識(natioal identity)の形成とどのように結びつくのかを知る一つの手がかりを与えてくれるはずである。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

・「アジアにおける国家意識と造形活動」

◆受験生等へのメッセージ

世界の3大宗教の一つである仏教において造形美術が本格化するののは、仏陀が入滅してから3世紀を経てからのことになる。さらにわが国に仏教がもたらされるのはさらに800年という長い年月が経過してからのことであり、発祥地のインドでは次第に民俗宗教であるヒンドゥー教における造形活動が、仏教美術に取って代わる時期でもあった。インドにおける仏教美術の発生からその後の展開をたどる研究は、広くアジア諸地域で受容された仏教美術のさまざまな姿について、それぞれの地域における地域的・民族的特性を知る極めて有力な手がかりを与えてくれる。ここでは、インドを中心とする仏教美術の多様な姿を解明していく。

教員名	浅井 健一 (ASAI Kenichi)
所 属	理学部情報科学科
学 位	博士 (理学) (1997 東京大学)
職 名	助教授
URL/E-mail	http://pllab.is.ocha.ac.jp/~asai/

◆研究キーワード

自己反映言語 / 部分評価 / 継続

◆主要業績

総数 (6) 件

- ・ Asai, K. "Logical Relations for Call-by-value Delimited Continuations," Sixth Symposium on Trends in Functional Programming (TFP 2005), pp. 413-428 (September 2005).
- ・ 鈴木歩、浅井健一「Calculus of Constructions のステージ化」
第8回プログラミングおよびプログラミング言語ワークショップ論文集 (PPL 2006)、pp. 1-15 (March 2006).
- ・ Asai, K. "OCaml Course in Ochanomizu University," Presented at "Tips and Tricks" session of the ACM SIGPLAN Workshop on Functional and Declarative Programming in Education (FDPE '05), (September 2005).

◆研究内容

プログラミング言語に置ける部分継続の基礎理論の確立とその応用の開拓を行うと同時に、型の入った効率的な処理系の作成を目指す。具体的には、基礎理論として (1) 型システムの基本的な性質の確立、および (2) 継続計算の処理系作成のための基礎技術の確立を目指す。また、継続計算用型システムの応用として (3) 例外解析の定式化を行う。さらに (4) これらの知見をあわせ処理系の実装を行う。

◆教育内容

「データ構造とアルゴリズム」でデータ構造の初歩を、「関数型言語」でプログラムの基本的な考え方を、「言語理論とオートマトン」で言語処理系の基礎を、「コンパイラ構成論」でコンパイラの中身について学ぶ。

◆Research Pursuits

The current research is focused on the foundation of delimited continuations in functional programming languages. As its application, an efficient compiler for a typed language with delimited continuation constructs will be implemented. To be more specific, the research aims at (1) establishing basic properties on the type system for delimited continuations, (2) establishing the basic techniques for implementing efficient compiler for delimited continuations, and (3) formalizing exception analyses as the application of delimited continuations.

◆Educational Pursuits

"Data structures and algorithms" for data structures, "Functional Language" for the fundamental concepts in programming, "Formal language and automaton" for the basics of language processors, and "Compiler construction" for the internals of compilers.

◆将来の研究計画・研究の展望

継続理論の確立を通して、これまで正面から取り扱われて来なかった例外処理の定式化と、その効率的な実装を目指す。

◆受験生等へのメッセージ

情報科学の基礎理論の分野で確かな一歩を一緒に踏み出しましょう。

教員名	浅田 徹 (ASADA Toru)
所 属	文教育学部言語文化学科日本語・日本文学講座
学 位	文学修士
職 名	助教授
URL/E-mail	asada.toru@ocha.ac.jp

◆研究キーワード

日本文学 / 和歌 / 歌学 / 国語学史 / 連歌

◆主要業績

総数 (10) 件

・シリーズ「和歌をひらく」(全五巻のうち第一～第三巻が年度内に刊行。共編。うち第二巻『和歌が書かれるとき』2005・12 の責任編集者。同巻は岩波書店刊、245 ページ。そのうち「序論 声から紙へ—和歌の宿る場所」p1～p24、「書くことの呪術」p47～p76 を自分で執筆。)

・国立歴史民俗博物館『うたのちから 和歌の時代史』展 (2005・10～11 月開催) 図録 (展示プロジェクト委員の 1 人として共同編集・執筆。記名記事は「古今集の時代」p28～29)

・・ 堯恵古今伝授年譜稿 (お茶の水女子大学国語国文学会『国文』104 号、2005・12、p10～p21)

◆研究内容

2005 年は「古今和歌集」「新古今和歌集」の記念の年であったため、全国規模で行われた種々の記念企画に関わる仕事が多かった。美術館等における展示への企画協力、展示カタログへの寄稿、関連するテーマの論集への寄稿、雑誌の特集号の企画、座談などである。同時に、これまであまり踏み込んで研究していなかった室町時代の和歌史について、いくつかの論文を発表した。さらに、江戸時代後期の和歌について、自分なりの考察を得られるようにと考え、専門誌に論文を寄稿した。一方、時代を下っていくことで平安時代への目配りが失われるのを恐れ、非常勤講師で出講した大学院の学生たちと共同で、新出の小歌集の全注釈を刊行した。朝日新聞社から委嘱されている京都冷泉家所蔵の和歌関係典籍 (重要文化財) の調査と写真版監修・解題は継続して行っている作業で、この年も一冊を刊行し、また翌年以降のための調査を行った。

◆教育内容

【学部】 1 年生向けの「基礎ゼミ」では、隠れキリシタンの伝えた歪められたキリスト物語を取り上げ、異端思想に対する「寛容」について共に考えた。日本文学コースの専門科目では、中世の古典文学史を講義し、「特殊研究」では和歌・連歌を中心とした作品を取り上げて講義した。「基礎演習」において古典作品に対する文献学的取り扱いと専門レベルでのものの調べ方について指導した。「演習」では南北朝時代の歌人頼阿の自選歌集「頼阿法師詠」をテキストに選び、参加者が作品を適切に分析できるように指導した。【大学院】 全員で戦国時代頃成立の「名所句集」を読んだ。連歌の実際と、和歌の世界で育まれたそれぞれの名所のイメージについて学んでもらった。【その他】 高大連携教育プロジェクトのために、本学附属高校において 3 回の授業 (古文) を行った。

◆将来の研究計画・研究の展望

- ・平安～幕末期の和歌史的事象について、なるべく広汎に考えたい。
- ・国語学史と古典学史との間の壁を低くし、学的領域としての再構築を図りたい。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・『源氏作例秘訣』の頭注付き翻刻の刊行
- ・新しい国語学史の構築を目指すプロジェクト
- ・幕末・維新期の旧派和歌の動向についての資料研究

◆受験生等へのメッセージ

「研究」とは、この「アニュアル・レポート」のフォーマットが記入者に要求しているような「企業との共同研究による予算の獲得」を目指すものではない。それは理系分野のごく一部に限定されることである。大学院での文学系の研究を志してこの「レポート」を目にした学生の方々は、これでは学問など出来る状況ではないのではないかと不安に思われるに違いない。しかし文学系の研究室では、「実用的」研究のために教員のやりたい研究に動員されるようなことは決してないので、受験生諸君においては、安心して受験して頂きたい。

教員名	浅本 紀子 (ASAMOTO Noriko)
所 属	総合情報処理センター
学 位	博士 (工学) (1998 信州大学)
職 名	助教授
URL/E-mail	http://www.is.ocha.ac.jp/~asamoto asamoto@is.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

計算機支援学習 / 遠隔 TT / 情報教育

◆主要業績

総数 (3) 件

- ・吉田美穂子, 鈴木理子, 浅本紀子. 中学校情報教育における習熟度評価. PC カンファレンス. 鹿児島, 2003 年 8 月, pp.425-426.
- ・小黒史子, 浅本紀子. 中学校数学教育におけるノート式 CAI システム. PC カンファレンス. 東京, 2002 年 8 月.
- ・清水彩世, 浅本紀子. グループウェアを核にした CSCL の試み—中学生と大学生のコミュニティースペース—. PC カンファレンス. 東京, 2002 年 8 月.

◆研究内容

計算機支援学習、特に協調学習支援、人と人との活動への情報技術を活用した支援をテーマにしている。

◆教育内容

【学部】

1 離散数学

代数学とよばれる分野のうち、群、環、体の初歩。数学的な問題を抽象化して体系化していく科学の基本的な手法を確認し、そこでの成果が情報技術の分野でも道具として応用されることを紹介する。

2 計算機代数演習

今まで学習してきた数学や科学のいくつかの問題について計算機を使ったアプローチをおこなう。数学を計算機で扱う統合環境として **Mathematica** を利用し、毎回の授業で実際に計算機を使った計算機実験や可視化をおこなう。題材：アニメーション、サウンド、Taylor 展開、ベクトル、行列、数列、ランダムウォーク、Newton 法、線形変換、フラクタル、グラフ理論、組合せ論など。

【大学院】

1 数式処理特論

離散的な状態を持ち離散的な時間の流れで次の状態が局所的に定まる格子上の力学系であるセルオートマトンを使って、自然現象や社会現象の単純なモデル化をおこなう。

2 数式処理特論演習

数式処理特論の演習として、**Mathematica** を使い実際のプログラミングをおこなう。

◆ Research Pursuits

I am researching on computer-aided education.

One of the main themes is CSCL (Computer Supported Collaborative Learning), and it is support which utilized IT for people's activity.

◆ Educational Pursuits

[Under graduate course:]

1. Discrete Mathematics
2. Exercises in Computer Algebra

[Graduate course]

1. Advanced Formula Manipulation
2. Seminar on Advanced Formula Manipulation

教員名	芦原 坦 (ASHIHARA Hiroshi)
所 属	理学部生物学科
学 位	理学博士 (1975 東京大学)
職 名	教授
URL/E-mail	ashihara@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

Metabolism / Biosynthesis / Plant

◆主要業績

総数 (6) 件

- ・ Suzuki, M., Hashioka, A., Mimmura, T. and Ashihara, H.: Salt stress and glycolytic regulation in suspension-cultured cells of the mangrove tree, *Bruguiera sexangula*. *Physiologia Plantarum*, 123: 246-253 (2005).
- ・ Ashihara, H., Stasolla, C., Yin, Y., Loukanina, N. and Thorpe, T.A.: De novo and salvage biosynthetic pathways of pyridine nucleotides and nicotinic acid conjugates in cultured plant cells. *Plant Science*, 169: 107-114 (2005).
- ・ Zheng, X., Hayashibe, E., and Ashihara, H.: Changes in trigonelline (N-methylnicotinic acid) content and nicotinic acid metabolism during germination of mungbean (*Phaseolus aureus*) seeds. *Journal of Experimental Botany*, 56: 1615-1623 (2005).

◆研究内容

本学着任(1973年)以来、植物のヌクレオチド関連代謝の研究を一貫して行なっているが、2005年度には、以下のテーマで研究を行なった。

- 1) ニチニチソウ培養細胞のリン酸飢餓時にみられるプリンヌクレオチドの代謝。
- 2) ポテトにおけるピリミジン代謝の二面性：ピリミジンサルベージとパントテン酸の合成。
- 3) ポテトにおけるプリンの生合成、サルベージ、分解経路について。
- 4) マングローブ植物細胞のヌクレオチド代謝に及ぼす塩の影響。
- 5) コーヒー果実の成長・成熟時にみられるカフェインとトリゴネリンの生合成。
- 6) カフェイン合成系の N-メチルトランスフェラーゼの発現を抑えた組換え植物体におけるプリン代謝。

その他 3 件。上記 5 件については、2006 年度に論文発表している。

◆教育内容

講義

学部：

代謝生物学（細胞代謝一般を教科書を用いて概説した）

大学院（博士前期）：

代謝生化学特論（セミナー形式で行なった。予備知識のない他学科の院生については、学部の代謝生物学で代替した）

代謝生化学特論演習（論文、ゲノム・酵素のデータベースを利用し、特定の分野の総説にまとめる演習）

植物分子生物学（最新のトピックスについて学外の研究者の講義も含み集中でおこなった）

大学院（博士後期）：

代謝制御論、代謝制御論演習（集中でセミナー形式でおこなった。英語論文の考察のしかたと投稿論文の完成）

◆Research Pursuits

As part of our studies on the metabolism of nucleotide-related compounds in plants, we performed the research on the following topics.

- 1) Effect of phosphate starvation on the metabolism of purine nucleotides in cultured *Catharanthus roseus* cells.
- 2) Dual-functional of pyrimidine metabolism in potato plants: pyrimidine salvage and pantothenic acid synthesis.
- 3) Profile of purine biosynthesis, salvage and degradation in potato plants.
- 4) Effect of salt stress on the metabolic profile of nucleotides in cultured cells of the mangrove tree, *Bruguiera sexangula*.
- 5) Changes in biosynthetic activity of caffeine and trigonelline during growth and ripening of coffee plants.
- 6) Purine metabolism in the transgenic coffee plants with decreased expression of N-methyltransferase genes.

Three other projects were also carried out. The results of the projects mentioned above were already published in refereed journals.

◆共同研究例

- ・ハワイ農業研究センター (HARC) とのコーヒー成分の代謝に関する共同研究
- ・グラスゴー大学とのカフェイン生合成に関する共同研究
- ・カルガリー大学との針葉樹のヌクレオチド代謝に関する研究

◆将来の研究計画・研究の展望

30 年にわたって続けてきた植物のヌクレオチドとその関連化合物の代謝研究をさらに進展させたい。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・カフェイン、トリゴネリン代謝の制御に関する研究
- ・植物のヌクレオチド代謝の分子生物学的細胞生物学的研究
- ・ ^{14}C などを用いるトレーサー実験

◆受験生等へのメッセージ

私の研究室の卒業生は、東大、名古屋市立大、兵庫県立大などで、教員として生物学の研究を続けている。また、企業の研究所に勤務しているものも多数いる。将来生物学の研究者になりたい人の入学を特に希望する。

教員名	足立 真理子 (ADACHI Mariko)
所 属	ジェンダー研究センター
学 位	農学修士、経済学修士 (東京大学) 東京大学経済学博士号受理審議中
職 名	助教授
URL/E-mail	adachi3@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

グローバル化 / ジェンダー / 制度進化 / ケア・エコノミー / 方法的個人主義

◆主要業績

総数 (6) 件

- ・「奢侈と資本とモダンガール」『ジェンダー研究』第9号 (通巻26号) 2006年3月、19-38頁。
- ・「グローバル資本主義へのジェンダー分析」木前利秋編『模索する社会の諸相』御茶の水書房、2005年11月、105-117頁。総頁数332頁。
- ・「従属の取引」『現代思想』2005年8月号

◆研究内容

1. 「アジアにおける植民地近代とモダンガール」を共同研究テーマとして、1920-30年代のアジアの資本主義と奢侈性について研究している。
2. 現代のグローバル資本主義の性格を、再生産領域のグローバル化 (ケアの国際移転) として把握するための理論および実証研究を行っている。

◆教育内容

開発経済学の講義では、経済学の基礎からはじめ、ジェンダーと開発の今日的な課題に対応できる能力を持つことを課題としている。

◆共同研究例

- ・お茶の水女子大学ジェンダー研究センター国際共同プロジェクト
「東アジアにおける植民地的近代とモダンガール」

◆将来の研究計画・研究の展望

1. グローバリゼーション研究の一環として、金融不安定性とジェンダーの関係を分析する
2. 20-30年代のアジアの資本主義と奢侈性を企業史の視角で研究する

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・1920-30年代のアジアの資本主義とジェンダー、植民地的近代、
- ・貨幣論
- ・現代のグローバリゼーションへのジェンダー分析

教員名	天野 知香 (AMANO Chika)
所 属	人間文化研究科比較社会文化学専攻
学 位	博士 (文学)
職 名	助教授
URL/E-mail	chika@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

アンリ・マティス・マチス / 装飾芸術、アール・ヌーヴォー / アール・デコ /
19世紀末・20世紀・現代・フランス / ジェンダー・美術史・ポストコロニアリズム

◆主要業績

- ・編著：天野知香、読売新聞東京本社文化事業部編、『アール・デコ 1910-1939』読売新聞社／東京都美術館 2005年（天野知香主要論文：『アール・デコの位相』—装飾芸術／ブラック・デコ／モダン・ガール pp.15-28、および「作品、作家解説」他）
- ・共著：天野知香「アール・デコ」と他者の身体」、鈴木杜幾子、馬淵明子、池田忍、金恵信編著『交差する視線—美術とジェンダー2』ブリュッケ、2005年（執筆論文 pp.315-345）
- ・口頭発表：Chika AMANO, "Representation of Women in the Age of Art Deco", 9th International Interdisciplinary Congress on Women, Women's Worlds 2005. Seoul, Korea, 22 June 2005

◆研究内容

近代、特に19世紀から20世紀におけるフランス美術を中心に、具体的な事例や作例を通じて芸術、装飾をめぐる歴史的社会的な制度や理念、心性の構造や変化を研究し、視覚表象の歴史的社会的な位相と意味生産のプロセスを考察することに取り組んだ。具体的な事例としては、フランスの画家アンリ・マティス、「アール・ヌーヴォー」から「アール・デコ」と呼ばれた時代の装飾運動をめぐる諸問題の検討、20世紀における女性芸術家研究、を目下主要な研究対象としており、フェミニズム、ポストコロニアリズムの視点を含めた美術史学の理論構築と実践に取り組んだ。特に両大戦間の「アール・デコ」と呼ばれる時代におけるフランスの装飾や絵画、彫刻、写真といった視覚表象の事例を取り上げ、「アール・デコ」と呼ばれた視覚性の特徴を歴史的社会的な文脈の中で明らかにすると同時に、当時のジェンダーと植民地主義の観点に密接に絡みついた表象の構造を明らかにした。

◆教育内容

美術史の学問的な枠組みを再検討し、歴史的、社会的な位相において視覚表象をどのように捉え、分析するかに関する方法論的な視点を養うことを重視した。論文購読や授業を通じ、フェミニズム、ポストコロニアリズムを含めた多様な方法論を検討し、具体的な視覚表象分析の実践を通して、どのような立場や視点から視覚表象に向き合うのかを自覚的に考察しながら、実証的論理的に対象を論じる力を養うことを主眼とした。講義においては、具体的な事例をフランスを中心とした19、20世紀の美術の中からとりながら、上記の視点から分析の試みを示し、またゼミにおいては、英文、仏文による理論的な方法論的な文献の精読とともに、文献収集や調査の方法を学ばせた。さらに各人の研究発表を通して表象分析の実践を促し、参加者同士の議論を通じて、その方法論に対する自覚を養い、実証的な論証の訓練を重ね、論理的な思考力や構成力の養成に力を注いだ。

◆将来の研究計画・研究の展望

将来的には現在取り組んでいる視覚表象分析の方法論的研究を、理論的検討および具体的な分析の実践の両面を通して学際的な見地からさらに精緻なものとし、他領域との連携をより柔軟に図りうるものとしてゆきたい。そのことによって美術史学を、現代の社会において、閉ざされた停滞的な一学問領域ではなく、かつまた単なる文化研究の一部として視覚表象分析の一翼を担うにとどまらない、開かれた意味深いあり方において実践することを目指すものである。

◆受験生等へのメッセージ

メディアにあふれている「美術」についての固定的な観念からまず自由になってほしい。そして自分がこれまで生きてきた中でどのような考えを持ち、どのような感性を養ってきたのかを自ら確かめながら、直接視覚的なイメージと向き合ってみてほしい。その時自覚される感性や考え方、知識は、あなた個人のものであると同時にあなたの生きてきた歴史や社会と密接に結びついているものである。「美術」であれ、私たちの日常を取り巻くイメージであれ、それらを見、また生産することは私たちが日々過ごしてる現実の社会や生活と直接密接に結びついた体験であり、視覚表象の意味やあり方はそれが生産され受容される歴史や社会と切り離せない。美術史とはそのような視覚表象の意味生産のプロセスやあり方を実証的論理的に研究する学問です。視覚的なイメージと論理的実証的に対話することを通じて、これまでの「私」を揺るがし、時代や社会との関わりを見据え、捉え直してみたい。

教員名	新井 由紀夫 (ARAI Yukio)
所 属	人間文化研究科比較社会文化学専攻
学 位	文学修士 (1985 東京大学)
職 名	助教授
URL/E-mail	http://www.li.ocha.ac.jp/hum/arai.htm arai5177@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

中世イギリス史 / 史料学 / 社会的結びつき / ジェントリ

◆主要業績

総数 (2) 件

- ・新井由紀夫『ジェントリから見た中世後期イギリス社会』刀水書房 2005 年
- ・新井由紀夫「2004 年の歴史学界 一回顧と展望」ヨーロッパ (中世イギリス)『史学雑誌』114-5(2005 年) 321-325 頁

◆研究内容

人間、生きていればかならず出くわすものが、きずなやしがらみといった、人と人とをとり結ぶ社会的な関係の問題です。ただしその具体的なあり方は、地域や時代、人の置かれた状況により、さまざまに異なった姿となってあらわれてきます。もし自分が、中世後期のイギリスに生きていて、家屋敷と所領をもつジェントリだったとしたら、どんなきずなとしがらみの関係のなかで暮らしていたのだろうか？ そんな疑問を研究のテーマとしています。例えば、結婚するときには、どんな条件が決め手になっているのだろうか、いざというとき、頼れるような人をどのようにして見つけていたのか等々、これらの答えを探して史料を調べてゆくうちに、彼らが生きていた中世の社会の特徴が見えてくるのではないかと考えています。昨年出た『ジェントリから見た中世後期イギリス社会』(刀水書房)はその成果をまとめたものです。

◆教育内容

3・4年生向け授業は、15世紀イギリスの手紙史料をテーマに、一通の手紙から何がわかり、また何がわからないのかを考えたり、手紙の書式からいえることを検討しました。当時、羊皮紙や紙は大変高価で貴重だったために、手紙は細かな字でびっしりと書かれ、あまった部分は切り取って再利用するなど、ちびちびと使われていたのですが、手紙の文面はといえば、時候の挨拶のような文章が多いときには手紙の半分を占めるものもありました。もったいないなあ、なんでながながと挨拶文を書くのだろうという疑問を持ったことがそもそもの始まりです。そのうちに、貴重な紙を使ってわざわざ長い挨拶文を書かなければいけないような理由が当時あったのではないかと、それを探ってみようと考えようになりました。ゼミでは、最近の雑誌英語論文を、一年に7～8本、担当者による発表形式で読んでいます。各自が分担して、要約・コメントし、それをうけて皆で議論するというやり方です。テーマがあちこちに飛びますが、研究の新しい波にふれる充実感が味わえます。

◆共同研究例

・中世ヨーロッパの史資料に関する研究（科研）

◆将来の研究計画・研究の展望

キャサリン・ラングレイというロンドン豪商出身でジェントリに嫁ぎ未亡人になった女性とラングレイ家に関する史料を集めて、ぼちぼち読み始めています。昨年は、彼女の遺言書を3・4年生と一緒に読みました。今年は、ラングレイ家の会計記録を読んでいます。マニュスクリプトを前にして一緒ににらめっこしつつ読んでいくと、四旬節にカキやムール貝やヒラメでタンパク質を取り、四旬節が終わって値崩れした棒ダラ等を買占めたりと、生活のありさまが手に取るように浮かんできて興味深いものです。こちらは現在進行中です。

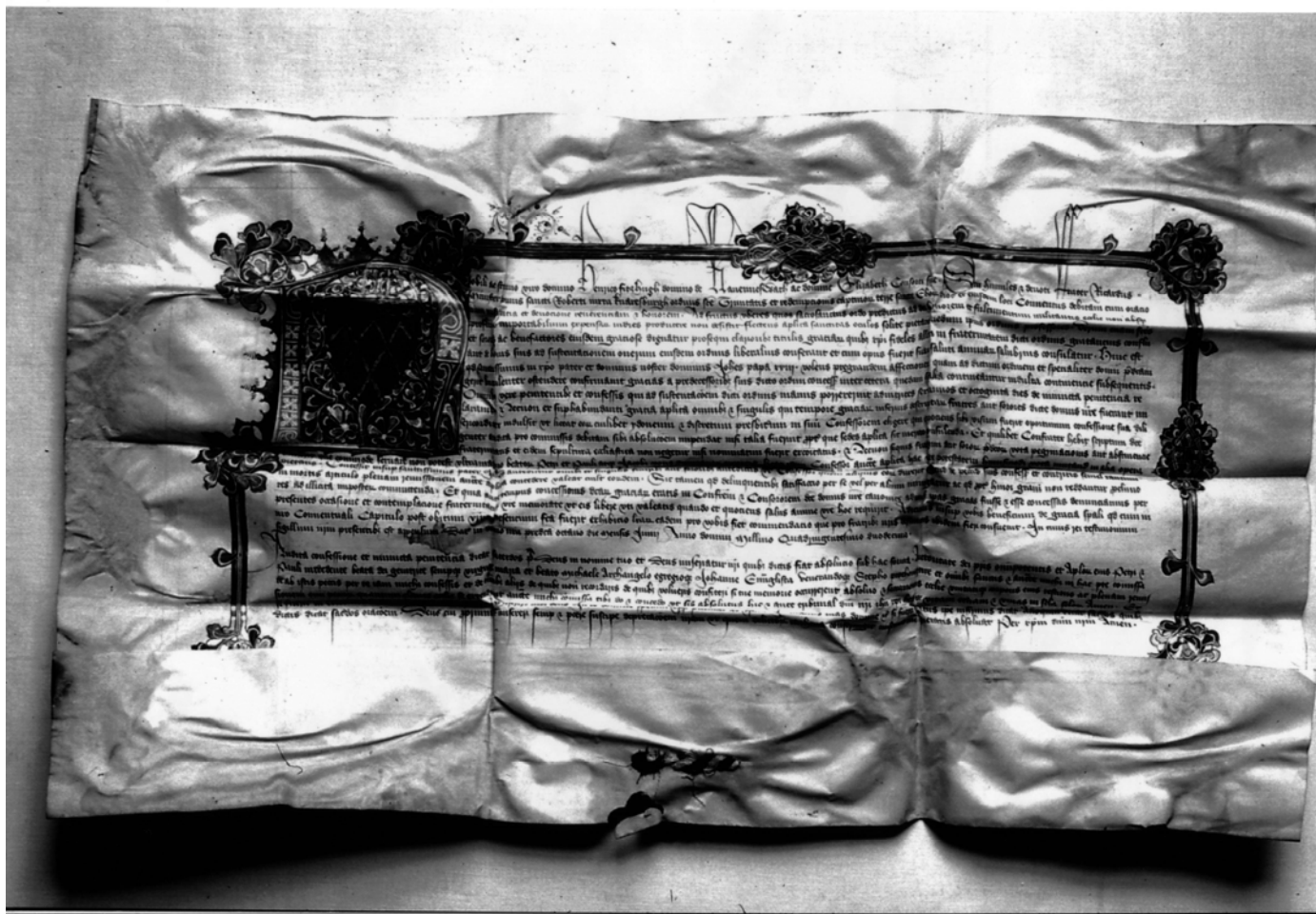
◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

・歴史的多民族多文化社会におけるリスクとコミュニケーション

◆受験生等へのメッセージ

なにごとにも好奇心を持ち、どんなことでもどん欲に楽しむという姿勢は、歴史学をやる上であんがい欠かせない要素だと思います。遊びや楽しみのなかから学問のヒントを得ることもあります。西洋史の山本先生の言葉、「子育ては面白い、子供を見ているとサイコロで振りだしにもどるように、自分の人生をはじめから学び直しているような気がする。日々新しい発見があるんだ。」は今の私の気持ちでもあります。

学生さん達との学科旅行での宴席で、比較社会史という授業のテーマ「ホモセクシュアルの比較社会史」が決まったのですが、やってみると奥が深く、史学の先生達との共同研究テーマにまで発展してしまったほどです。歴史学で扱えないようなテーマはない、何でもありだと最近よく思います。歴史学をやる上でこうしなければだめだということもありません。われこそは、という皆さん、是非、お茶大比較歴史学コースにいらして下さい。



教員名	池田 まさみ (IKEDA Masami)
所 属	人間文化研究科特設遺伝カウンセリング
学 位	博士（学術）（2001 お茶の水女子大学）
職 名	講師
URL/E-mail	ikedam@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

視覚 / 認知 / コミュニケーション / こころの科学 / 科学教育

◆研究内容

1. 視覚系における情報処理メカニズムの検討
パターン認知やオブジェクト認知など高次視覚における情報のサンプリング特性を実験的に検討
2. エイジングとコミュニケーション
認知的加齢がコミュニケーションに及ぼす影響を実験的に検討
3. 子ども向け「こころの科学」教育
科学的思考力を育成するための視覚実験教材の開発
4. 教育効果を測定するためのツール開発
5. 幼児の安全教育に関する研究

◆教育内容

【学部】

人間科学方法論

「調査研究」「実験研究」「実践研究」を柱として、それぞれ研究事例を交えて研究法を解説する。仮説検証の論理、人間科学と統計的手法の関わり、研究における倫理的問題など、研究の基礎となる考え方を養う。

心理学基礎演習（応用）

心理学書の講読を通して、専門書の読み方、レジュメの書き方、問題の発見法、プレゼンテーションやゼミでの討論の仕方を学ぶ。

【大学院】

遺伝カウンセリング研究方法論(基礎)

実際の研究例を基にディスカッションを通して研究法や最新の研究成果の理解を深める、学生自身の個々の研究テーマに積極的にアプローチしていく。

◆将来の研究計画・研究の展望

- ・視覚機能を中心とした人間の認知メカニズムの実験的検討
- ・科学的思考力（＝論理的思考力）を育成するための教材・教育システムの開発

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・科学教育に関する研究
- ・脳とコミュニケーションに関する研究

教員名	池本 真二 (IKEMOTO Shinji)
所 属	生活科学部食物栄養学科
学 位	博士 (栄養学)
職 名	助教授
URL/E-mail	http://www.h6.dion.ne.jp/~ikemoto/ IKEMOTO.shinji@ocha.ac.jp

◆研究キーワード

生活習慣病 / インスリン抵抗性 / 脂質栄養学

◆主要業績

総数 (5) 件

- ・発芽玄米を食べて基礎代謝をアップ, 元気生活, 125, 2005, 36-37.
- ・遺伝子多型は将来の栄養指導を変えるか「特集: テーラーメイドの栄養管理」栄養日本, 48(1), 2005.
- ・臨床栄養学総論「スタンダード栄養・食物シリーズ12」, 4・11章分担執筆, 東京化学同人, 2005.

◆研究内容

1. 脂質栄養に関する研究: 現在、主として、肥満・メタボリックシンドロームの発症機序ならびにその予防法に関する分子栄養学的研究を行っている。本年度は、Atkins Diet として知られる低炭水化物食ダイエット、発芽玄米、茶カテキンの耐糖能及び抗肥満作用について検討した。また、油脂の違いによる耐糖能異常ならびに肥満の発症レベルに違いが生じることが知られているが、中でも特異な作用を示す魚油とパーム油の耐糖能異常の軽減メカニズムについて検討した。魚油の耐糖能改善メカニズムとして、末梢、特に筋肉への脂肪の蓄積低減作用が大きく寄与してインスリン抵抗性の改善が見られることによるものであることが分かった。これに対し、パーム油の耐糖能改善メカニズムは、他の油脂摂取に比してインスリン分泌能の低下が起こりにくいことが分かった。なお、パーム油に関しては、肥満を呈するにもかかわらず、インスリン抵抗性の改善も見られることから、筋肉での糖質の取込能にも特異な作用を及ぼすものと考え、検討を続けている。

2. スポーツ栄養に関する研究: スポーツ選手の栄養管理に関する指導を行うとともに、その科学的根拠となる基礎研究として、筋損傷ならびに筋修復に関する実験系の確率を目指し動物を用いた検討を行っている。

3. 臨床栄養管理に関する研究: 国立成育医療センターのアレルギー科に掛かる小児アレルギー患者の食事指導を行いながら、その発症原因ならびにその容貌に関する検討を行っている。さらに、施設入居の高齢者に対する栄養ケアのあり方に関する検討を行っている。

◆教育内容

学部では、2年次の科目である「臨床栄養アセスメント学」で、ベッドサイドにおける個人の身体測定値や身体組成、血液性状、栄養素摂取状況、食習慣などの情報を基に、栄養必要量、栄養状態を科学的に評価する理論的背景や方法を解説するとともに、傷病者の病態や治癒の経過に伴い変化する栄養状態の動的な評価の方法について解説した。なお、「臨床栄養療法学」並びに「食事療法学」は、3年次の科目であり次年度開講予定である。なお、本年度は、基礎ゼミ並びに食物学概論において、他学部他学科の学生にたいし、それぞれ、健康・栄養情報の信頼性を見極めることを目的にその評価方法、「やさしい食事学」と称して食べることの意味を理解することを目的に幅広く食物・食事学に関する解説を行った。また、栄養教諭養成の認可を得たことから、そのカリキュラム内容の検討並びに、東京都の主催する「認定講習会」の講師を務めるとともに、認定講習会のとりまとめを行った。

大学院では、「臨床栄養学特論」において、医療現場における栄養管理システムのあり方について解説した。なお、個人(患者)の栄養管理をしっかりと実施するには、その病態を知らなければならない。それ故、病態から学ぶと題して、様々な症例の病態解析を行うことによって生体の病態生理並びに病態生化学を学ぶ機会とした。学内に「栄養ケア・ステーション」を設け、附属学校生の栄養・健康相談に応じる場を提供するとともに、大学院生並びに学部学生の現場体験の一助となるような配慮を行っている。

◆Educational Pursuits

The dietitian in medical nutrition therapy applies the science of nutrition to the care of people through health promotion and disease prevention; and uses medical nutrition therapy in the treatment of disease. As a member of the patient-care team, the dietitian is responsible for assessing, implementing, and monitoring the nutritional care of patients. In addition, the dietitian may serve professionally as a nutrition practitioner in health care; a teacher in an educational institution; a research dietitian; or a nutrition consultant-educator.

◆共同研究例

- ・発芽玄米の栄養学的特性に関する研究（株式会社ファンケル 総合研究所）
- ・油脂含量を減量した加工食品の体脂肪蓄積防止に与える影響（キューピー株式会社）
- ・ジアシルグリセロール等の脂質栄養代謝等に関わる栄養学上有益な科学的知見の探求に関する研究（（社）植物油協会）
- ・茶カテキン並びにジアシルグリセロールの栄養特性に関する研究（花王株式会社）

◆将来の研究計画・研究の展望

脂質摂取によって発症するインスリン抵抗性の発症メカニズム並びにその予防法の開発を目標に、広く生活習慣病の予防に生かしていきたいと考えている。インスリン抵抗性は、筋肉の脂肪の蓄積によって生じるものと考えられているが、詳細なメカニズムはまだ明らかになっていない。肥満を呈すれば、基本的にはインスリン抵抗性を生じるものと考えられがちであるが、パーム油摂取によって生じた肥満モデルマウスなどは、必ずしもそうではない。こうした差異の生じる機序を明らかにすることによって、肥満と耐糖能、インスリン抵抗性、インスリン分泌能等の関連について詳細に検討し、生活習慣病の予防に有効な食品並びに食品成分、さらには食事の取り方について明らかにしたいと考えている。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・肥満、耐糖能、インスリン抵抗性、インスリン分泌能に関与する食品成分の有効性に関する研究
- ・運動後に生じる筋痛の予防と筋損傷・筋修復等に有効な食事に取り方に関する研究

◆受験生等へのメッセージ

「管理栄養士が行う研究とは何か？」を常に意識しながら研究を行っていきたいと考えている。栄養問題を抱えた患者さんが目の前にいて、それを如何に改善するかが究極の課題である。私は、蛋白質栄養から研究を始め、現在、脂質栄養学の領域で、脂質摂取過剰によって生じる慢性代謝異常症の予防に関する研究を行っている。また私自身、スポーツが好きなこともあり、如何にトップアスリートのコンディションを最良の状態に保ち、選手本人の能力の最大限を発揮させるかが興味の対象ともなっている。考えてみると、管理栄養士として臨床分野への責務と、個人の興味に関する研究を行っていたというのが実感である。諸先生・諸先輩方がその様に導いてくれたものと感謝している。受験生の皆さんも、皆さん自身の興味・関心のある事柄について深く研究してみませんか？「Just do it!」の精神で。きっと夢は叶います。真摯に取り組めば。それを私に実感させてくれたのは、ノーベル賞学者の研究室への米国留学だったかも知れません。

教員名	石口 彰 (ISHIGUCHI Akira)
所 属	文教育学部人間社会科学科心理学講座
学 位	文学博士 (1989 東京大学)
職 名	教授
URL/E-mail	http://www.hss.ocha.ac.jp/akira1 akira1@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

視覚 / 推論 / 学習 / 加齢 / 教育支援

◆主要業績

総数 (11) 件

- ・単著 石口彰 視覚 2006年2月 新曜社
- ・分担 石口彰 認知心理学
(『心理学 ―こころの不思議を解き明かす (内田伸子編)』1章、2005年9月 光世館)
- ・Ikeda M. & Ishiguchi, A. "Effects of surface pre-presentation on symmetry detection on a 3-D bumpy surface." 2006.Jan. Japanese Psychological Research, Vol. 48, 65-76

◆研究内容

1. 視覚パターン認知の統計的特性の検討

視覚パターン認知の基本特性は、3次元世界を2次元網膜像から復元するといった不適切逆問題の解決である。この解決にあたり、視覚系は、既知の知識構造から成る制約条件と様々なサンプリングデータを元に、一種のベイズ解を導いている。私の研究室では、この一連の過程における統計的特性を、実験を通して解明している。

2. エイジングと認知能力

加齢に伴い、人間の認知能力は様々に変容する。私の研究室では、知覚能力、記憶能力、コミュニケーション能力、選択的注意能力、問題解決能力、リスク判断能力等に関して、加齢効果を実験的に検討している。

3. 数量判断の認知過程

人間の持つ数量判断(絶対量、相対量)に関して、基礎的な脳内メカニズムばかりでなく、発達の側面、比較行動学的側面、比較文化的側面も含めて、実験的に検討する。

4. 異種感覚情報の統合問題

視覚、聴覚、体性感覚間の相互作用を通じて、連合機能の特性を検討する。

5. 認知・感性と教育的応用

小学校児童への「こころの科学」の教育を通じて、不思議を感じるこころ、論理的に考えるこころを育成する。

6. リスク情報の処理メカニズム

身のまわりにあるリスク信号(リスクイベントに対する先行信号)の処理メカニズムに関して、実験的に検討する。基礎的な研究だけでなく、こどものリスク回避行動への応用研究へと発展させる。

◆教育内容

【学部】

1 認知心理学概論

人間の認知情報処理過程(パターン認知、学習・記憶、知識表現、推論と問題解決等)に関して、神経生理学、計量理論、行動科学的側面から平易に解説する。

2 認知心理学演習(基礎)

人間の認知機能、特にパターン認知、推論機能について、文献講読を通して、最新の知見を検討する。

3 認知心理学演習(応用)

Visual Basic を用いて、認知心理学に関連する実験プログラムの作成法を学ぶ。主たる技術は、刺激提示や反応の測定、試行や刺激提示のランダム順序化、反応時間の計測、ファイルの入出力である。

4 認知心理学研究法

認知心理学の研究方法を修得し、自ら研究する能力を身につける。

【大学院】

認知科学基礎論・同演習

認知科学の基礎として、人間のパターン認知、神経生理学、推論機能(演繹的推論、帰納的推論)に関し、包括的に検討する。演習では、主として、モデリングの実習を行う。

◆Research Pursuits

1. Statistical properties of visual pattern cognition

Statistical properties of visual pattern cognition are solutions of the ill-posed problem in which the visual system recovers the 3D space from 2D retinal images. The visual system induces the Bayesian solutions with use of some restraints and sampling data. Our lab has clarified these solution processes on the base of experimental data.

2. Aging and cognitive functions

Cognitive functions are varied and degraded in many cases with age. Our lab has investigated experimentally the aging effects on the perception, memory, communication, selective attention, problem solving and risk judgment.

3. Cognitive process of mathematical judgment

We have investigated the cognitive representations in the brain about human mathematical judgment of relative and absolute volume and numbers. We also have studied this problem from viewpoints of human development, comparative behavior and cross culture.

4. Integration problem of many kinds of information from perceptual systems

We have studied the cross modal perceptual systems. In particular, we have focused on the problem about the effects of the visual output on auditory or tactile perception.

◆Educational Pursuits

Under-Graduate Course

Introduction to Cognitive Psychology:

I survey fundamental properties of the cognitive information processes in pattern cognition, internal representation, learning, memory, reasoning and problem solving.

Graduate Course

Advanced Cognitive Psychology:

I survey and discuss the topics of the cognitive information processes in pattern cognition, internal representation, learning, memory, reasoning and problem solving.

◆共同研究例

- ・エイジングと認知機能 青山学院大学、群馬県立女子大との共同研究

◆特許

- ・認知・感性と教育的応用 児童向け「こころの科学」キットを開発する

◆将来の研究計画・研究の展望

現在は、人間の認知機能の基礎メカニズムを研究しているが、リスク情報処理やエイジング等、社会的ニーズに適応した研究の比重を増やしていく所存である。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・エイジングと認知機能
- ・認知・感性と教育的応用

◆受験生等へのメッセージ

認知心理学研究室では、人間の認知に関する幅広い領域を扱っているので、学生の関心領域に沿った教育・研究指導が可能である。

教員名	石塚 道子 (ISHIZUKA Michiko)
所 属	文教育学部人文科学科グローバル文化学環
学 位	博士 (地理学)
職 名	教授
URL/E-mail	ishizuka.michiko@ocha.ac.jp

◆研究キーワード

地域研究 / カリブ海 / クレオール

◆主要業績

総数 (3) 件

- 論文「地に呪われた者は立ち上がったのか—マルティニクの煩悶」田沼幸子編『ポスト・ユートピアの民族誌—トランスナショナリティ研究5』大阪大学 21 世紀 COE プログラム『インターフェイスの人文科学』
- 論文「さまざまな記憶の交差する場—小アンチル諸島の自然と文化—」酒井正人・鈴木紀編『新世界地理・第 14 巻アメリカ II・ラテンアメリカ』朝倉書店 (印刷中)
- 論文「マルティニク:クレオールの食卓」山本紀夫編『世界の食文化・第 13 巻中南米』農山漁村文化協会 (印刷中)

◆研究内容

近代における「西欧文明=普遍」/「野蛮=特殊」という図式による地政文化的な分断の中で作動している人種主義、ナショナリズム、エスニシティ、ジェンダー、セクシュアリティにかかわる「アイデンティティ・ポリティクス」や「記憶の政治」についてカリブ海小アンチル諸島をフィールドとして論考する。

◆教育内容

学部では「現代社会と文化」についての分析能力を学際的な視点から学部・学科の境界をこえて習得する場としての「グローバル文化学環」教育カリキュラムのうち「文化理論・文化分析方法論」授業・教材開発をおこなった。大学院前期課程では「開発」にかかわるさまざまな言説テキスト分析力を養成を目的とする研究指導をおこなった。

◆将来の研究計画・研究の展望

「クレオール」という文化研究の視点にたって、グローバル・マイグレーションのもとでの文化変動、文化の政治学研究理論を開発していきたい。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

・「文化変化・文化創造」についてのカリブ海地域以外の地域研究者との共同研究

◆受験生等へのメッセージ

身近な「異文化の風景」を探し出す眼を見開いていくために「グローバル文化学環」はあることを知ってください。

教員名	市古 夏生 (ICHIKO Natsuo)
所 属	文教育学部言語文化学科日本語・日本文学講座
学 位	博士（文学）（早稲田大学 1998）
職 名	教授
URL/E-mail	ichiko.natsuo@ocha.ac.jp

◆研究キーワード

近世文学 / 仮名草子 / 出版文化 / 原稿料 / 浮世草子

◆主要業績

総数 (2) 件

- ・『書籍覚書』（『国文』104、45-54）
- ・『日本女性文学人名辞典』（共編）日本図書センター

◆研究内容

日本近世文学の中で17世紀を中心に研究を行っているが、ここ2、3年江戸時代初期の小説・随筆類の中で、写本で流通している書物を精査し、版本との相違や独自性、特色などを考察するが、その成果の一端は、前年度に「仮名草子の読者の問題」に反映させている。また近世文学は出版文化の開花した時代であり、文学環境の1つとして出版に関する究明が必要である。出版文化を文学だけでなく幅広く分析するために、元禄時代に刊行されている「書籍目録」の諸本調査と収載書籍の基準などについて研究を進めている。さらに寛文年間（1661～73）に漢学者がどのような意識で書籍を購入したか、ということが判明する資料「書籍覚書」を紹介する。

◆教育内容

日本近世文学に関して教育を行っている。文教育学部では、「日本古典文学史論」で近世小説の展開を作品を紹介しつつ、講義をしている。「日本古典文学論演習」では、語句や背景となる風俗を調査させて、近世小説の読み方を習得させる。17年度は西鶴の浮世草子「武家義理物語」を対象とした。「日本古典文学論基礎演習」では、古典文学を読解するための調査方法を習得させ、17年度は仮名草子「大倭二十四孝」を対象とした。大学院では「日本近世文学特論」で作者の方法や版本書誌学・出版文化に関する講義を行うが、17年度は版本書誌学の文学研究への応用という意味で講義を行った。

◆将来の研究計画・研究の展望

①18年度より3年間科学研究費補助金で「出版機構の進化と原稿料についての総合的研究」を6名の研究者とともに推進しており、近世から現代に至る作家の経済的自立に関する推移をまとめる。②近世前期の出版物の目録である「書籍目録」の諸本調査と、出版者別に出版書をリストにし、文学関係出版者の特色、文学書の位置づけなどを考察する。③それに合わせて近世前期の出版書年表を作成する。④写本と版本の混在する仮名草子に関して、メディアの視点から分析を進める。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・挿絵に関する研究
- ・印税、原稿料に関する研究
- ・諸外国の書物と日本の書物に関する書誌学的研究

◆受験生等へのメッセージ

現代から一番近い時代の古典文学、これが近世文学です。文体、語句なども近代以降に繋がるものなので、慣れると理解しやすいと思います。

井原西鶴、曲亭馬琴などの書いた小説、松尾芭蕉の俳諧・奥の細道などはよく知られていますが、それ以外にも面白い怪異小説、遊里文学などがたくさん残されています。

また文学作品を出版しだしたのが江戸時代です。出版に関わる規制、作者と出版者との関係など興味は尽きません。近世文学をぜひとも知っていただきたいと思います。

教員名	伊藤 亜矢子 (ITO Ayako)
所 属	生活科学部人間生活学科発達臨床心理学講座
学 位	博士 (教育学)
職 名	助教授
URL/E-mail	http://www.develop.ocha.ac.jp/itoa.html

◆研究キーワード

スクールカウンセリング / 学級風土 / コンサルテーション / コミュニティ・アプローチ / 国際比較

◆主要業績

総数 (10) 件

- ・伊藤亜矢子 2005 Classroom Climate Inventory (CCI) による学校支援－質問紙の開発とコンサルテーション・モデルの提案－ 学位申請論文
- ・Ito,A. & Smith,D. 2005 Predictors of School Satisfaction among Japanese and U.S. Youth, Community Psychologist, 38(4), 19-21.
- ・伊藤亜矢子 2005 学校現場と臨床心理学とのコラボレーションを目指して－学級風土コンサルテーションの試みから－ 鹿毛雅治編 教育心理学の新しいかたち Pp.132-153 誠信書房

◆研究内容

国際比較に基づくスクールカウンセラーによる教師支援方法の開発

学校内不登校予防システムの構築に関する学校支援実践研究

校内連携を推進する情報共有・連携システムの構築

小中連携を推進する情報共有・連携システムの構築

学級風土質問紙 (Classroom Climate Inventory) の開発とそれを応用した学校支援。①教師個人レベルでは、CCI 結果を媒体とした教師コンサルテーション、②学級レベルでは、CCI 活用シートを利用した学級と個人の双方に焦点をあてたコンサルテーション、③学区・学校レベルでは、CCI を用いた教師教育、等の実践研究を行っている。

◆教育内容

伊藤研究室では、子ども・学校・地域・コミュニティをキーワードに、各人のテーマに応じて、実践研究を行っています。

臨床心理学・コミュニティ心理学・教育心理学・学校心理学の知見を元に、学校内外での、子ども支援を促進する方法の開発やシステムづくりをめざした実践研究です。

例えば、小学校・中学校・高等学校で、一教室あるいは、T T 枠などを提供してもらい、相談室を創設し相談システムづくりを実践的に検討するなどを、大学院生と学部学生が協力して行っています。

大学院生の多くは、心理臨床センターに所属し、相談事例について、伊藤のスーパーバイズを受けます。伊藤が母親面接、大学院生が子ども面接を担当する場合も多くなっています。そのほか、大学院生は興味に応じて外部実習に行っています。

◆Research Pursuits

Development teacher & student support programs for mental health problem by international comparison.

A series of action researches for prevention of non-attendance at school in public schools.

- 1) Development of supporting system in schools to share the information and enhance cooperation with teachers.
- 2) Development of supporting system in elementary and middle schools to share the information and enhance cooperation between elementary and middle school teachers in order to increase teacher supports for children's transition.

Development and application of Classroom Climate Inventory (CCI) for school support.

- 1) At individual (teacher) level: consultation with CCI for homeroom teacher.
- 2) At classroom level: consultation with sheet type CCI results to intervene in a student's and whole class problem.
- 3) At school and district level: teacher in-service training with CCI.

◆Educational Pursuits

In our laboratory, students do the action researches cooperated with each other focusing on their own topics in schools & communities. Their key words are prevention, mental health, children, youth, school, community.

Research methods are based on community psychology, clinical psychology, school psychology & educational psychology.

Many of graduate students also belong to the clinical psychology center in our university, do some clinical practices (counseling with children, parent, teacher) with supervisions by Dr.Ito.

◆共同研究例

- ・日米のスクールカウンセラーと教師の協働による学級介入プログラムの構築
- ・脱落型不登校の発生に関するパネル調査と予防・支援システムの構築
- ・学校場面における非行・メンタルヘルスの包括的アセスメントツールの開発と臨床活用

◆特許

- ・短縮版学級風土質問紙による自己診断シート
- ・PC入力と自動解析による短縮版学級風土質問紙を用いた学級アセスメントとコンサルテーションシート

◆将来の研究計画・研究の展望

現在行っている実践研究を継続し、学校内外で子どもを支援するシステムづくりについて、実践的な知見を提供していきたい。特に、校内のスクールカウンセラーによる実践を効果的に行う方法や、教師による子ども支援や授業づくり学級づくりを臨床心理学の知見から支援する研究成果を蓄積することが大きな目標である。学級風土質問紙の出版・実用化、国際比較による新たな子ども支援の提案が当面の課題である。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・スクールカウンセリング
- ・学校支援
- ・学級風土アセスメント

◆受験生等へのメッセージ

自分なりのテーマ関心を持ち、実践の場で創造的な実践研究ができる人材を求めています。

それぞれが自分の意見・センスを生かしながら、お互いに協働することで、学校という場や地域で、その場所の専門家である現職教員の先生方等と協働し、子ども支援を展開することは、やりがいのある実践研究活動です。スクールカウンセラーに重要なのは **work with** すなわち他業種も含めた協働。それに環境要因や発達の要因も含めた適切な問題理解の力ではないでしょうか。

助け合い切磋琢磨しながら、創造的な臨床心理士・実践的研究者として成長していける研究室をめざしています。

教員名	伊藤 貴之 (ITO Takayuki)
所 属	理学部情報科学科
学 位	博士 (工学)
職 名	助教授
URL/E-mail	http://www.is.ocha.ac.jp/~itot/ http://ito.is.ocha.ac.jp/ itot@is.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

コンピュータグラフィックス / コンピュータ画像処理 / コンピュータ音楽処理 / コンピュータ可視化

◆主要業績

- ・Itoh T, Takakura H, Sawada A, and Koyamada K, Hierarchical Visualization of Network Intrusion Detection Data in the IP Address Space, IEEE Computer Graphics and Applications, Vol. 26, No. 2, pp. 40-47, 2006.
- ・Itoh T, Yamashita F, Visualization of Multi-dimensional Data of Bioactive Chemicals Using a Hierarchical Aata Visualization Technique "HeiankyoView", Asia Pacific Symposium on Information Visualization (APVIS) 2006, pp. 23-29, 2006.
- ・伊藤 山口, 情報可視化手法「データ宝石箱」のハイパフォーマンス計算技術への応用, 日本計算工学会論文誌, Vol. 10, No. 1, pp. 1075-1078, 2005.

◆研究内容

情報可視化。身の回りにある複雑で膨大な情報を、計算機のディスプレイ上でわかりやすく示す技術の研究。2005年度は文部科学省原子力システム研究事業を獲得し、東大、原子力機構との共同で原子力システム計測情報の可視化を進めた。また製薬企業からの委託、京大との共同により、薬物データの可視化を進めた。また京大との共同で計算機ネットワーク不正侵入の可視化、東大のアドバイスにより遺伝子ネットワークデータの可視化、本学生活科学部および文教育学部のアドバイスにより大規模アンケート集計結果の可視化などを進めた。研究成果の一部は、IEEEという学会が発行する世界的に有名な雑誌にも掲載された。流体力学シミュレーションのための格子生成および可視化。自動車や飛行機や建築物の周囲の気流、気象現象、その他の物理現象を計算機によって科学的に解明するためのシミュレーションを援助する技術の研究。2005年度は本学科河村研究室との共同で、格子生成および可視化の研究を進めた。医療撮影結果（例えば CT, MRI などの撮影結果）、生命科学系立体データ（例えばたんぱく質の分子構造）、などの3次元コンピュータグラフィックスによる立体的な画面表示の研究。2005年度は基礎的な勉強にとどまった。デジタルカメラなどによる実写撮影画像の解析。例として、写真からの3次元情報の復元、大解像度写真からの特定物体の発見、などを計算機で自動的に実現する技術の研究。2005年度は基礎的な勉強を進め、学会にて数件の講演を行った。コンピュータ映像とコンピュータ音楽の融合。例として、任意の音楽に印象の合う背景画像やアイコン画像を自動提供したり、逆に任意の画像に印象の合う BGM を自動提供する技術の研究。2005年度は基礎的な勉強を進め、学会にて数件の講演を行った。

◆教育内容

マルチメディア技術、画像処理技術、コンピュータグラフィックス技術、などの講義と研究指導を担当した。研究指導においては、4年生の卒業研究だけで10件の学会口頭発表を行うことができた。

◆Research Pursuits

Information Visualization. We started an entrusted research project on visualization of measurements of atomic plant systems jointly with University of Tokyo, and Japan Atomic Energy Agency. We also started an entrusted research project on visualization of drug data jointly with Kyoto University. We also focused on visualization of network intrusion detection data, genome network data, and large-scale questionnaire data. A part of research results has been published on a magazine of IEEE, one of the most world-famous academic society on computer.

Grid generation and visualization for computational fluid dynamics simulation. We developed a grid generation and visualization technique jointly with Kawamura lab. in the department of information sciences.

Study of 3D computer graphics techniques for visualization of medical images and molecular dynamics data.

Study of image processing for real scenes taken by digital camera, such as 3D data reconstruction, and discovery of specific objects from large-resolution photographs.

Study of automatic integration of computer image and computer music.

◆Educational Pursuits

Classes and research on multimedia, image processing, and computer graphics. Undergraduate student in our lab archived 10 talks at academic conferences.

◆共同研究例

- ・文部科学省からの委託による、原子力システム計測情報の可視化
- ・製薬企業からの委託による、薬物データの情報可視化

◆将来の研究計画・研究の展望

世の中の役に立つ目的のためのコンピュータグラフィックス（CG）技術の研究を進めたい。

現状では原子力システム監視、計算機ネットワーク監視など、世の中の安全や環境を守る目的での CG 技術の研究に従事しているが、さらに力を注いでいきたい。

また現状では、医療撮影結果、たんぱく質分子構造、遺伝子ネットワーク、製薬用化合物データ、電子カルテなどの医療情報統合結果など、医療や健康を目的とした CG 技術の研究に従事しているが、これもさらに力を注いでいきたい。

デジタルカメラやポータブル音楽プレイヤーの普及で、ますます膨大に生産されていくデジタル映像やデジタル音楽を、さらに使いやすく面白いものにしたい。

具体的には、欲しいシーンやサウンドの自動検索、好みにあったシーンやサウンドの自動提供、撮影現場や演奏現場の情報復元、美術や音楽に関する文化遺産のデジタル復元、などといった研究に興味がある。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・データや情報を計算機上でわかりやすく表示する技術。
- ・映像や音楽に関する、検索、合成、自動提供、情報復元、などの技術。

◆受験生等へのメッセージ

皆さんの日常生活に欠かせない映像や音楽を、もっと使いやすく、もっと面白く、またもっと世の中の役に立つように、といった観点から新しい技術を研究しています。受験生の皆様と一緒に勉強ができる日を楽しみにしています。

教員名	伊藤 美重子 (ITO Mieko)
所 属	文教育学部言語文化学科中国語圏言語文化講座
学 位	文学修士
職 名	助教授
URL/E-mail	itomi@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

敦煌文献 / 通俗類書

◆主要業績

総数 (3) 件

- ・ 学術論文：「類書について」『お茶の水女子大学中国文学会報』第 24 号、pp1-15、2005 年 4 月
- ・ 報告書『唐代通俗類書初探』66p+105p、2006 年 3 月（平成 16-17 年度文部科学省科学研究費補助金、基盤研究 (C) (2)「中国の通俗類書に関する基礎的研究：課題番号；16520202、研究成果報告書」)

◆研究内容

唐代の通俗類書研究

ここ数年来、敦煌文献の中の教訓的内容をもつ文献を調査研究している。教訓書の類の調査は、ほぼ終了したが、教訓書という形ではなく「類書」という形で、教訓的内容を集めている文献があり、その研究に取りかかっている。「類書」問題を扱うに際して、「類書」自体の正確を明らかにすべく、「類書について」(『お茶の水女子大学中国文学会報』24 号)の一文を発表した。教訓的内容の類書だけではなく、「通俗類書」を対象をひろげ、調査検討をし、前年度から引き続いている科研費を交付された「中国の通俗類書に関する基礎的研究」(基盤研究 C)の報告書にその結果をまとめた。通俗類書は中国中央の資料では宋代の文献の中にしか見られず、宋代以降からその編集が盛んに行われていたが、敦煌文献の中に中央には伝わらなかった、通俗類書が存在していることから、唐代でも通俗類書が民間で行われていたということを明らかにした。

◆教育内容

学部での授業としては次の三種類の講義演習を担当している。

- (1) コア科目である外国語の初級中国語を週三コマ担当し、発音指導から基礎文法の解説および読み、書き、話しの総合的学習を指導している。
 - (2) 中国の古典文献(所謂「漢文」)を古典中国語として読みなれていく訓練を行うとともに、古典を読むための基礎知識を習得できるように指導している。
 - (3) 漢字および漢字字書に関する基礎知識を「漢字字書」の祖といわれる『説文解字』という漢代の字書を清代の注釈を通じて読解することによって、学生自らが基礎力をつけるよう指導している。
- 大学院での講義演習としては、敦煌文献を題材に、文献学的な問題の考察、その講読を通して民間文学の問題の考察などを行っている。

◆特許

- ・情報やデータの可視化技術。
- ・科学技術系シミュレーションのための格子生成技術と可視化技術。
- ・生命情報学や医療情報学のための可視化技術。
- ・映像や音楽に関する諸技術。例として、検索、合成、人の好みに合わせた提供、など。

◆将来の研究計画・研究の展望

これまで、教訓的類書から始まって、敦煌文献の通俗類書の問題に関しての調査検討を行ってきたが、これを宋代の文献と関連させて、通俗類書の流れをより明確にしたいと考えている。

通俗類書の流れは、のちの日用類書や善書と呼ばれるものになってゆくと予想している。このことを明確な資料をもとに検証したい。

◆受験生等へのメッセージ

中国は文字の国である。甲骨文から現在中国で用いられている簡体字にいたるまで、脈々と文字文化が途絶えることなく続いている。漢字文化は中国にとどまらず、周辺各国にも影響を与え、日本もその例にもれない。漢字について考え、漢字で書かれた文献を読むことは、同じ漢字文化圏に属するものとして、みずからを発見するよい機会になると思う。中国文化を理解することで、いろいろな発見をしてほしいと思う。

教員名	伊藤 るり (ITO Ruri)
所 属	ジェンダー研究センター
学 位	社会学博士
職 名	教授
URL/E-mail	http://www.igs.ocha.ac.jp/ ruri@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

国際移動 / ジェンダー / グローバル化 / アジア / 沖縄

◆主要業績

総数 (3) 件

- ・ 1. ITO, Ruri, 2005, "Crafting Migrant Women's Citizenship in Japan: Taking "Family" as a Vantage Point," International Journal of Japanese Sociology, No. 14, 52-69.
- ・ 2. 伊藤るり, 2006, 「1920～30 年代沖縄における『モダンガール』という問い——植民地的近代と女性のモビリティ——」, 『ジェンダー研究』第 9 号 (お茶の水女子大学ジェンダー研究センター), 3 月, 1-18 頁.

◆研究内容

主として以下の 2 つのテーマに関する研究を進め、成果発表を行いました。

1. アジアにおける移住家事・介護労働者の展開とジェンダー配置に関わる研究 (21 世紀 COE プログラム「ジェンダー研究のフロンティア」、及び科研費補助金による)。

(ア) 学会報告：

・ “Internationalizing Reproductive Labor in a Super Aged Society? Japan's New Immigration Policy and Its Implications on Care Work”

(Women's Worlds 2005, Seoul, Korea)

・ 「女性移住者にとってのシティズンシップと『家族』——滞日フィリピン人女性移住者の事例を中心に——」 (日本社会学会シンポジウム)

(イ) 調査研究：

・ 台湾における移住家事・介護労働者受け入れの実態に関する調査 (共同研究)。

(ウ) 論文発表：主要業績の 1.

2. 東アジアにおける植民地的近代とモダンガールに関する研究、特に沖縄の事例研究 (科研費補助金による)。

(ア) 講演：「沖縄にとっての〈モダンガール〉という問題——移動する〈女〉を手がかりに——」 (なは市民センター講座)

(イ) 研究会報告：「モダンガールと女学校文化の形成——沖縄県立女子師範学校と第一高等女学校をめぐるメモ」 (モガ研究会)

(ウ) 論文発表：主要業績の 2

◆教育内容

1. 学部

・ 国際社会の課題としての「ジェンダー平等」について、国際機関、各国政府、NGO 等がどのように取り組んでいるのか、グローバル化や南北格差拡大との関連で、多角的に検討する授業を行いました。授業科目名：「比較ジェンダー論」(人間生活学科共通生活社会科学講座) / 「国際ジェンダー論」(グローバル文化学環)

2. 大学院

・ 博士前期課程発達社会科学専攻開発・ジェンダー論コース： 人の国際移動がどのように開発過程にかかわるかを概説したうえで、受講者が国際移動のジェンダー分析の手法と主要な概念を習得し、批判的検討が行えるよう、事例研究の講読 (英語文献を多用) と討論を中心に授業を組み立てました。このほか、国際社会学の分野に関心のある学生の修士論文指導にあたりました。【科目名】「比較ジェンダー開発論」「比較ジェンダー開発論演習」

・ 博士後期課程ジェンダー学際研究専攻・ジェンダー論講座： 「ジェンダーとシティズンシップの政治社会学」を主題とし、文献講読を行うとともに、学位論文や投稿論文の準備を行う受講者に発表の場を提供し、論文内容のレベルアップを目指しました。【科目名】「国際女性開発論」「国際女性開発論演習」

◆Research Pursuits

In the year 2005, I have conducted research for the following two projects: a) migrant domestic and care workers and gender configuration in Asia, and b) the question of “modern girl” and colonial modernity in East Asia. The former was funded by the 21st Century COE program “Frontiers of Gender Studies” and also partly by the Ministry of Education’s Grant-in-Aid for Scientific Research, of which I am the head investigator. The latter is based at the Institute for Gender Studies and is also funded by the Grant-in-Aid for Scientific Research.

- article (English only)

・ ITO, Ruri, 2005, “Crafting Migrant Women’s Citizenship in Japan: Taking “Family” as a Vantage Point,” International Journal of Japanese Sociology, No. 14, 52-69.

- conference paper (English only)

・ “Internationalizing Reproductive Labor in a Super Aged Society? Japan’s New Immigration Policy and Its Implications on Care Work” (Women’s Worlds 2005, Ewha Womans University, Seoul, Korea)

◆Educational Pursuits

1. “Comparative Gender Studies” (undergraduate course) focused on the question of “gender equality” within the context of globalization and the North/South divide. It introduced students to some of the theoretical and conceptual frameworks for obtaining a critical understanding of “international feminism.”

2. “Comparative Gender and Development Studies” (master program) dealt with gender analysis of international migration and its relations to the development process.

3. “International Gender Studies” (doctoral program) was composed of two parts. First, students were asked to work on selected readings on the question of citizenship and gender. Second, those who were preparing their doctoral dissertation were asked to present draft chapters, to which peers gave critical assessments and useful advices.

◆共同研究例

- ・「東アジアにおける植民地的近代とモダンガール」（科研費補助金による国内外研究者との共同研究）
- ・「再生産領域におけるグローバル化とアジア」（科研費補助金による国内外研究者との共同研究）

◆将来の研究計画・研究の展望

1. 日比経済連携協定で、フィリピンから上限合計 1000 人の看護師、介護福祉士の導入が合意された現在、いよいよ日本も、アジア諸国で見られる再生産労働の国際分業に関して、直接的利害当事者となったといえます。高齢化する日本社会で移住労働者（その多くは女性）が果たす役割はいかなるものとなるのか、その労働、技能、人格が十分に尊重される社会をどのようにつくっていくか——これらの点について、国内外の研究者や NGO と連携しつつ共同研究を進めていけたらと考えています。

2. 沖縄女性にとっての植民地的近代と移動の経験

◆受験生等へのメッセージ

グローバル化の動きは、ジェンダー秩序をどのように変容させるのか（あるいはさせないのか）。この点を、主として国際移動という現象をつうじて検討したいと考えています。

また、グローバル化のもとで競争と格差拡大にさらされ、民族的多様性と市民的地位の多元化が増大する社会において、どのような「平等」や「連帯」の概念が可能なのか。こうした点にも強い関心をもっています。授業では、そうした社会的課題をいっしょに考えるためのツールを一つでも二つでも、身につけていただきたいし、独自の発想で練り上げてほしいと思います。

教員名	井原 成男 (IHARA Nario)
所 属	生活科学部人間生活学科発達臨床心理学講座
学 位	文学修士
職 名	教授
URL/E-mail	http://www.develop.ocha.ac.jp/ihara.html ihara.nario@ocha.ac.jp

◆研究キーワード

臨床心理学 / 発達心理学 / 移行対象 / アタッチメント / 摂食障害

◆主要業績

- ・井原成男：職と身体の臨床心理学―摂食障害の発達心理学。山王出版，2006.
- ・井原成男編著：移行対象の臨床的展開―ぬいぐるみの発達心理学。岩崎学術出版社，2006.
- ・井原成男：こころ。衛藤隆編，新世紀の母子保健（改訂版）医歯薬出版社，2005.

◆研究内容

発達臨床心理学講座の中で、特に病院臨床（小児科臨床）的な研究をしている。医師でないものがかかわるメリットを生かすために臨床心理学を、発達心理学的に基礎付け、将来的にはまやかashiものでない発達臨床心理学という応用分野を確立することを目指している。

具体的には、摂食障害の症例の積み重ねを基にして、発達心理学的にどのように理解したらよいか、またその基礎付けた知見を臨床現場や本コースで学ぶ臨床心理士志望の院生にどのように還元するかの研究をしている（主要業績1）。

さらに子どもの母子関係における愛着の発達と離脱について、移行対象という具体的、普遍的な現象に基づいて研究、応用するという研究を行っている（主要業績2）。

◆教育内容

学部では、臨床心理学的なもの、特に実践的な内容を伝える仕事をしています。科目は基礎論、人格心理学、心理テストの臨床的応用などです。

大学院においては、日々現在も継続している臨床現場の仕事を、どのように学的体系の中に位置づけ、当然それは自分の体験を深化させるものなので、ユニークなものになるわけですが、それを個性的かつ普遍の体系の中に位置づけ、そうした学的追求が、翻って、また以下に実践そのものを深く有効なものにするか、大学院ではそのような視点で心理臨床の中でも実践的な部門である、カウンセリング、心理療法等を教えています。

◆将来の研究計画・研究の展望

これまでに積み上げてきた臨床心理学的な知見と経験を、発達渉外的な基礎論の中に位置づけ、それを発達臨床の中に位置づけ、学的確立を目指す。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・アタッチメントの臨床心理学的研究
- ・病院臨床の臨床的発達の研究
- ・心理療法の比較統合研究

◆受験生等へのメッセージ

学部生

単に学問的な深化を目指すのみでなく、身の回りに起こっていることを、単に心理学的な興味だけでなく、社会的・政治的観点も含めて総合的に見ていける、しなやかな感性を持っている人を求めます。つまり視点の広い人ということです。

院生

対象化した病理（他者の病理「私の友達の病理」「社会の病理」）のみでなく、自分自身を振り返る能力とカツコの勇気のある方を求めます。それは常識のある普通の人ということかもしれません。

教員名	今井 正幸 (IMAI Masayuki)
所 属	理学部物理学科
学 位	京都大学 工学博士
職 名	教授
URL/E-mail	http://www.phys.ocha.ac.jp/imailab/index.html imai@phys.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

ソフトマター / 構造相転移 / ソフトマター複合系 / バイオマター / 生体膜

◆主要業績

総数 (6) 件

・ Static and Dynamic Structures of Spherical Nonionic Surfactant Micelles during the Disorder-Order Transition

M. Imai, I. Yoshida, T. Iwaki, and K. Nakaya

J. Chem. Phys. 122, 044906(1-9), (2005).

・ Surfactant Mesophases Mediated by Colloidal Particles

M. Imai, Y. Suganuma, K. Nakaya and S. Komura

J. Phys.:Condens. Matter, 17, S2929-2936, (2005).

・ Kinetic pathway to double gyroid structure

M. Imai, K. Sakai, M. Kikuchi, K. Nakaya, A. Saeki, and T. Teramoto

J. Chem. Phys. 122, 214906(1-10)(2005).

◆研究内容

高分子・液晶・両親媒性分子・コロイドなどの物質はその構成要素のサイズが 10～100 nm 程度と大きく、かつ、集団として比較的ゆっくりとした動きをする為にソフトマターと呼ばれている。このソフトマターと呼ばれる物質群は、その構成要素の複雑さから、豊かな非線形・非平衡現象を示し、近年物理学の研究対象として非常に注目されてだけでなく、生体系を構成する基本的な物質群とも一致し、また、多くの材料分野でも中心的な役割を果たすことから、生物学・材料科学から工業的な応用に至るまで幅広い分野で重要な役割を果たす物質として、大きな注目を集めている。

現在研究室ではこのような背景を基に、I)ソフトマターの構造相転移ダイナミクスの解明、II)ソフトマター複合系の秩序形成、III)ソフトマターからバイオマターへの進化を柱として、様々な実験手法を駆使して研究を進めている。

◆教育内容

2005 年度教育内容

博士課程学生指導

博士 3 年 1 名

両親媒性分子複合膜における秩序形成に関する研究

日本原子力機構 ポスドク研究員

修士課程学生指導

修士 2 年 1 名 就職 東芝松下ディスプレイ

修士 1 年 3 名

学部学生

4 年 3 名 進学 3 名 就職 0 名

学部授業科目 相転移物理学 学生実験

集中講義

東北大学 理学研究科 物理学専攻 統計力学特論 (国際コース)

高校生への教育

高崎女子高校 SSH

◆Research Pursuits

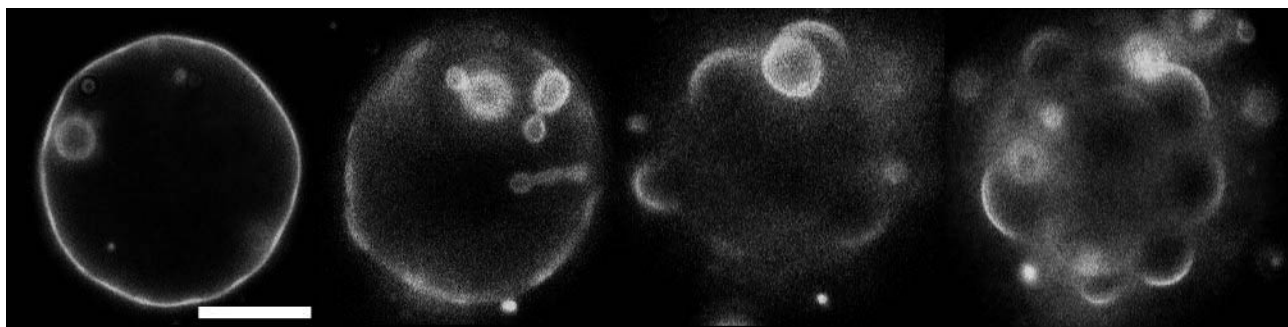
Soft matter is a general term for polymers, amphiphilic molecules, liquid crystals, colloidal particles and so on, which has large degrees of freedom originated from their complex structure. The coupling the large degrees of freedom with the energetic interaction between the basic constituents brings a wide variety of self-assembly structures. The purpose of my research is to reveal the free energy landscapes of the soft matter systems, including the kinetic pathways of phase transitions by making free use of sophisticated experimental techniques. Recently I have started researches on evolution of soft matter to bio matter from soft matter physics point of view. Unfortunately I am now far from the destination, but I believe that accumulated experiments on soft matter complex systems shed light on the missing links between soft matter and bio matter.

◆Educational Pursuits

Graduate School
Doctorial program
D3 1, D2 0, D1 0
Study on Ordering in Fluid Membranes Composed of Amphiphilic Molecules
Master's program
M2 1, M1 3
Undergraduate Students
B4 3
Lectures for Undergraduate Students
Phase Transition, Physical Experiments
Lecture for Graduate School
"Soft Matter Complex systems"
Tohoku University, Graduate School of Science
Special Lecture for High School Students
Takasaki-Jyoshi SSH

◆将来の研究計画・研究の展望

今井研究室では、ソフトマターの秩序形成をキーワードに、まずはソフトマター単体系での秩序形成をその自由エネルギーランドスケープの観点から明らかにしてきた。更に、その知識を基に、ソフトマター複合系での秩序形成へと展開し、特にエントロピックな相互作用の観点から、異種のソフトマターを複合する事による多様な秩序構造を出現させる機構の解明を行って来た。私は、これらの知識を踏まえ、生体系、特に生命誕生の場におけるソフトマター複合系の自己組織化が果たした役割について研究を進める。



教員名	岩壁 茂 (IWAKABE Shigeru)
所 属	人間文化研究科人間発達科学専攻
学 位	
職 名	助教授
URL/E-mail	http://www.develop.ocha.ac.jp/iwakabe.html iwakabe@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

psychotherapy research / psychotherapy integration / client experience / therapeutic failure / positive psychology

◆主要業績

総数 (4) 件

- ・心理療法の効果測定 臨床心理学 2005, No1., 25. 123-128.
- ・心理臨床家の専門家としての発達、および、職業的ストレスへの対処について：文献研究 明治学院大学心理学部附属研究所紀要 2006 57-74.
- ・初回面接における作業同盟の役割に関する研究 研究成果報告書 2006

◆研究内容

心理療法のプロセスと効果要因の研究。特に (1) 初回面接におけるクライアントの体験と面接プロセス、(2) 心理療法家の成長、(3) 治療的失敗、(4) 心理療法統合、特にプロセス研究の知見を基礎とした共通因子アプローチについて。

◆教育内容

カウンセリング、心理療法を中心として臨床心理学における実践と研究に関する授業を担当した。卒業論文、および修士論文指導は、臨床心理学にかかわる幅広い領域の研究を指導した。特に、グラウンデッドセオリー法を用いた質的研究が中心となった。臨床心理士を目指す大学院生に対して、グループ形式の臨床指導を行った。

◆Research Pursuits

Research on psychotherapy process and therapeutic factors. Specifically (1) client experience in the initial psychotherapy session and its process; (2) professional development of psychotherapists, (3) therapeutic failures, (4) psychotherapy integration, in particular of common factor approaches based on process research

◆Educational Pursuits

Taught courses on clinical psychology particularly in the area of theories and practice of counselling and psychotherapy. Supervised undergraduate and master theses on the diverse topics in clinical psychology. The majority of theses employed qualitative methods such as grounded theory approach. Conducted clinical supervision in a group format to graduate students in clinical psychology.

◆共同研究例

- Training and Development of Psychotherapists

◆将来の研究計画・研究の展望

- (1) 心理療法家の成長および訓練に関する研究の研究ネットワークを作り、心理療法家に対する調査を進める
- (2) 心理療法統合アプローチのプロセス比較研究を進める。
- (3) 治療的失敗に関する臨床家へのインタビュー調査データの分析を進める。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- training and development of psychotherapists
- Guilt and shame
- Emotional change process in psychotherapy

教員名	牛江 ゆき子 (USHIE Yukiko)
所 属	語学センター
学 位	文学修士 (1982 東京大学)
職 名	教授
URL/E-mail	ushie@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

指示表現 / 総称的代名詞 / メンタルスペース / 英語教育 / 自律型学習

◆主要業績

総数 (3) 件

- ・「談話における非人称的用法の you の解釈について—メンタル・スペースの視点から—」『言語研究の宇宙：長谷川欣佑先生古稀記念論文集』pp. 402-411. 開拓社 2005 年 9 月 単著
- ・「英語 CALL 教材を利用した自習における支援方法の比較」『お茶の水女子大学人文科学研究』第 2 巻、松藤 薫子・絹谷弘子・エドワード・シェイファー・牛江ゆき子の共著 pp. 217-228. 2006 年 3 月
- ・「CALL 教材を利用した自習のメールによる支援効果」外国語教育メディア学会 (LET) 第 45 回 (2005 年度) 全国研究大会 実践報告 (松藤 薫子・絹谷 弘子・エドワード シェイファー・ナガトモ ダイアン・牛江 ゆき子による共同発表) 2005 年 7 月 30 日 東京国際大学

◆研究内容

1. 指示表現は、指示対象を特定するという機能のほかに、テキスト内で、話し手と聞き手・指示対象の関係をあらわすなどの表出的機能を担っている。英語のテキスト内で表出的機能を担って用いられる指示表現について研究している。2005 年度は、総称的代名詞 you がテキスト内で表出的機能を担って、あいまいに用いられる場合の解釈について、メンタルスペースという概念を用いて説明を試みた。
2. 大学での英語学習においては、授業時間は限られているので、授業外の学習 (自習) が不可欠である。自習をどのように支援したら、自習を促進し、効果をあげることができるかを、学内で共同研究している。2005 年度の研究では、授業を通しての支援方法について研究を行った。その結果、教員が教材や学習方法、支援方法を決める教員主導の管理的な支援よりも、学生の自主性・自律性を高めた支援が有効であることが明らかとなった。

◆教育内容

本学のコア英語では、英語で知的にコミュニケーションが取れる国際人の育成をめざしている。そのために、コア英語においては、英語における文章の構造や論理の展開の仕方を理解することと、論理的な思考力を身につけることを重視している。このような目標到達のために、授業では、英語の文章を読んだりレクチャーを聞いたりして、論点は何か、それはどのようにサポートされているかを把握できるように訓練を行っている。また、授業時間は限られているため、課題として、読書レポートや、トランスクリプション (書き取り)、自分でリスニング等の課題を選んで学習する選択課題を課し、英語力を高められるようにしている。

◆Research Pursuits

1. interpretation of impersonal you in discourse from the viewpoint of mental space
2. comparison of different methods of support for English self-learning

◆Educational Pursuits

classes taught in the academic year 2005-2006: Basic English I, Basic English II, English Grammar, Advanced Seminar : Analysis of Linguistic Data II, English Teaching Methodology II

◆将来の研究計画・研究の展望

語学学習において学習者が高い到達目標に達するためには、授業のほかに、学習者が、自分のレベルや目標・興味・関心・生活パターンにあう学習法を見つけ出し、学習を長期間にわたって継続することが必要である。個々の学習者のニーズや状況を考慮した学習計画の提示、学習者が通学時間や自宅で学習支援メディアと教材を駆使できる環境の構築、学習者が自律的学習のために必要な支援を簡単に得られるような体制づくりなど、自律型語学学習環境の構築に向けて学内で共同研究を進めたい。

◆受験生等へのメッセージ

今、英語は「文法は間違っているけど、通じればよい」という考え方が主流になりつつあり、文法が軽視されがちです。しかし、文法がしっかりと身につけていないと、あるレベル以上のものを理解したり、発信したりすることができるようになりません。さらに、コミュニケーションには、論理的な思考力も不可欠です。

外国語の文法を習得するためには、文法の内容を理解するほか、たくさん読んだり、聞いたり、音読をしたり、地道な努力が必要です。論理的な思考力も簡単に身につくものではありません。

見かけばかりの流暢さを追うのではなく、地道な努力をして、たとえつたなくとも、本当に実のあるコミュニケーションができるようにしましょう。

教員名	内田 正子 (UCHIDA Masako)
所 属	文教育学部言語文化学科英語圏・欧州言語文化講座
学 位	英文学修士(1973 東京大学)
職 名	教授
URL/E-mail	uchida.masako@ocha.ac.jp

◆研究キーワード

イギリス文学 / 19 世紀 / 小説

◆主要業績

総数 (1) 件

・The Activities of the Chancery Reform Association and Dickens's Writing of "A December Vision": Part II, The Dickensian 101(Spring 2005), pp.46-58.

◆研究内容

2005 年春に、The Activities of the Chancery Reform Association and Dickens's Writing of 'A December Vision.を、Dickens 研究の最も伝統ある学術誌 *The Dickensian* に掲載。これは、小説 *Bleak House* 着想の実像を明らかにし、従来権威あるものとみなされてきた英米の実証的研究の欠陥をつくものであった。その後、その続編となる、“The Sallow Prisoner's Contempt”の執筆を継続。夏季には British Library において、17 世紀のピューリタンの著述家 Lucy Hutchinson の 19 世紀における受容につき、資料調査を行った。

◆教育内容

コア英語 3 コマ分担(基礎英語文 I A、II B、中級英語生活 A)。各レベルに適切な指導を心がけた。専門では英米文学演習(入門) (2 年次)で、Woolf の *Orlando* を取り上げたほか、英文学史 I、II (3 年次)と特別演習(作品分析 I)(4 年次)という各学年の基幹科目を担当。学生の基礎的な研究・読解能力の涵養に努めた。博士前期課程では、英文学演習 (作品論)(作家論)で、Mary Wollstonecraft の *Vindication* および Mary Robinson の *A Letter to the Women of England* を他作品と関連付けながら検討。博士後期課程演習では、Burke の *Sublime and Beautiful* を講読した。

◆Research Pursuits

Published in spring “The Activities of the Chancery Reform Association and Dickens’s Writing of ‘A December Vision’ Part II” in *The Dickensian*, a most prestigious specialist journal on Dickens studies.

The article gave a final solution to a long-standing problem concerning the conception of *Bleak House*, revealing at the same time the methodological shortcomings of Anglo-American scholars. Kept on the preparation of its sequel, “The Sallow Prisoner’s Contempt.” Conducted researches during the Summer Vacation in the British Library on the 19th-century reception of Lucy Hutchinson, a 17th-century Puritan author.

◆Educational Pursuits

Took three classes (Basic English I, II and Intermediate English) of Core-curriculum Foreign Languages, trying to suit teaching to each level.

Read Woolf’s *Orlando* with a great deal of enjoyment in the 2nd year Seminar on English and American Literature (Introductory). Also taught the History of English Literature, I and II for the third year, and conducted a Special Seminar (Text Analysis) for Senior students. Those classes constitute integral parts of the curriculum of the English Department and needs a special care to get the contents through to the students.

Read Wollstonecraft and Mary Robinson in the Master’s Course Seminar, and Burke’s *Sublime and Beautiful* with Doctoral Course students. Recognized anew the importance of those texts for the study of English Literature.

◆将来の研究計画・研究の展望

1. Dickens 小説執筆過程の解明

様々なテーマが、作家の中で世の中の動きと関わりながらどのように展開し、作品に結実していくかを検討しており、単なる source study や文献学的ないし伝記的な研究ではない。日本においてはこの分野は従来欧米の研究の翻訳であったが、近年の複写や電子技術の発達により、時間が与えられれば、外国人にも独自の研究を行う可能性が開けてきた。あまり評価はされないと思うが、緻密にテキストの関わり合いを追究し、自分で納得のいくような理解に近づきたい。それがたぶん、一般の人々による作品の読みをも、少しずつ変えていく契機になるだろう。

2. 19世紀イギリス文学の思想史的位位置づけ

1において、19世紀半ばの世界の読解を継続していると、そこにあらわれるテーマは、そこからは未来となる19世紀の末、20世紀、21世紀へと連なり、また他方では過去の19世紀のはじめ、18世紀、17世紀へと常につながっていることがわかる。現在は、大体後ろのほうを向いて、17世紀ごろからの宗教、美学的認識、心理学・人類学的知識などが、どのように19世紀イギリス文学を作り上げているのかにつき、資料を蓄え、考察を続けている。めだたないテーマの意味や関連を実証により解明したいのだが、その実現はなかなか困難である。

◆受験生等へのメッセージ

学生は基礎学力をつけ、自分が本当にやりたいことに果敢に挑戦してほしい。

教員名	梅原 利宏 (UMEHARA Toshihiro)
所 属	理学部物理学科
学 位	博士 (理学) (1992 東海大学)
職 名	助手
URL/E-mail	http://www.sci.ocha.ac.jp/umehara@phys.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

結合水 / 水和水 / 生体高分子 / 誘電緩和 / NMR

◆研究内容

生体や生体高分子のまわりに存在する、結合水などの水和した水の構造、および機能を解明することを目的とし、TDR 法による誘電緩和測定およびプロトン NMR を用いて、糖水溶液の測定を行った。

測定に用いた糖は、グルコースとトレハロースなどの二糖類である。トレハロースは乾燥・凍結から生体組織を保護する作用が高いことは知られているが、他の糖に比べてトレハロースの有効性の高さや、その作用機構は不明な点が多い。トレハロースの工業的な応用は多くみられるため、その作用機構を解明する事には大きな意味がある。

誘電の測定からは、トレハロース水溶液の緩和強度が他の糖に比べて大きいことが示され、トレハロースと水が作る構造が、他の糖と異なることが示唆される。また、NMR の測定から、温度変化に対する T2 緩和時間の異常性が観測され、ケミカルシフトの差などを考慮すると、プロトンの交換速度の違いが、T2 緩和時間の異常性に寄与していることが示唆される。

◆教育内容

物理学における実験の基礎技術の習得とともに、得られたデータの解析と考察を通じて、実験内容の理解と物理的な思考力を養う訓練を行う。

物理学実験

担当テーマ：プランク定数測定、誘電率

プランク定数

光電効果は、アインシュタインの光量子仮説により説明される。本実験では、ミリカンが実験により検証した方法を用いて、プランク定数を測定する。また、グレーティングを用い、白色光を単色光に分ける方法についても解説する。

誘電率

複素誘電率について解説し、3つの誘電体試料についての複素誘電率を測定する。また、構造相転移をしめすチタン酸バリウムの誘電率の温度変化を、相転移温度を含む温度で行う。

◆共同研究例

- ・ イースト菌の水和に対するトレハロースの影響
- ・ NMRによる糖水溶液の測定

◆将来の研究計画・研究の展望

結合水は、生体高分子を凍結などの刺激から保護する役割や、その立体構造を決定する 1 つの要因となっている。結合水と、トレハロースなどの凍結・乾燥耐性を向上させる物質との相互作用を調べることは、組織などの保存を考えると、非常に重要である。また、抗原抗体反応などを考えた場合、それらの直接の接触を考えることが多いが、実際にはその間に結合水が存在している。今後は、生理活性の発現の場で、結合水がどのような役割を果たしているのかを調べたい。

教員名	榎本 陽子 (ENOMOTO Yoko)
所 属	理学部数学科
学 位	
職 名	教授
URL/E-mail	

◆研究キーワード

ブルエ予想 / ドノバン予想 / 主 p -ブロック

◆主要業績

総数 (1) 件

・ Yoko Usami

"On the principal 3-blocks of the Chevalley groups $G_2(q)$ ", Proceedings of the 37th Symposium on Ring Theory and Representation Theory, 2005
98-102

◆研究内容

p を素数とする。二つの有限群 G と H が同じシロー p -部分群 P を持ち、 P の p -部分群たちの共役の様子が G と H でおなじならば G と H は p -local 構造を共有するという。そのときには G と H では主 p -ブロックどうしの加群のカテゴリーが似てくるのではないかと考えられる。つまり p -local 構造を共有する有限群の主 p -ブロックたちを導来同値類別したものは有限個ではないかという予想がある。

とくに P が可換群のときはブルエ予想 (の主ブロック版) と呼ばれる。

P が非可換群のときは知られた例が少ない。

小さい非可換群の例として位数が 2^7 extra-special group とよばれるような 3-群をシロー 3-部分群 P とするような単純群は以前リストアップしてあった。しかもそのなかで、3-local 構造がおなじかどうかで分類したものもリストアップしてあったので、そのような例として J_2 と $U(3,3)$ を考えた。主 3-ブロックどうしについて (導来同値より弱い) stable-同値がいえないか模索した。

◆教育内容

修士の学生の修士論文は以下である。すなわち J_2 と $U(3,3)$ という群の local な部分群どうしをくらべてそれらの主 3-ブロックどうしの導来同値をあたえる複体が見つからないか検討した。

学部 1 年生には数学科と情報科学科いっしょに初等代数学を教えた。新入生は論理的思考が簡単なものさえ年々弱くなってきていることを感じる。

3 年生には代数学を講義した。抽象化して考えることの苦手な学生は、この講義は弱いので、前年度履修して単位の取れなかった人が混じっている。今回 2 度試験をしてなんとか前年度とれなかったひとは一応合格した。

理学部他学科むけの線形代位数も講義した。

◆Research Pursuits

Let p be a prime number and G and H be finite groups. Assume that G and H have a common p -Sylow subgroup P and that any two subgroups of P are conjugate in G if and only if they are conjugate in H . Then we say that G and H have a common p -local structure. There is a conjecture that there are finitely many derived equivalence classes of principal p -blocks of finite groups having a common fixed p -local structure. When P is abelian, this is a principal block version of famous Broue's conjecture. Anyway there are few examples of derived equivalences when P is non-abelian.

I have a list of simple groups having extra-special group of order 27 and exponent 3 as a Sylow 3-subgroup.

Furthermore I already know their 3-local structures exactly.

Among them I pick up two simple groups having a common 3-local structure and studied whether there is a stable equivalence between their principal 3-blocks. (It is known that when two p -blocks are derived equivalent, they are stable equivalent.)

◆Educational Pursuits

To a master course student I gave a theme about the relation between the principal 3-blocks of J_2 and $U(3,3)$.

I gave lectures: elementary algebra, linear algebra, and algebra.

◆将来の研究計画・研究の展望

(1) ブルエ予想の研究

(2) ブルエ予想の非可換版の研究

とくに extra-special group 位数 27 exponent 3 の群をシロー3-部分群としてもつ単純群を 3-local 構造ごとに分類したものを有効につかって導来同値なもの例をふやしたい。

◆受験生等へのメッセージ

高校時代にいろいろな本をよく読んでください。

著者が何を主張しているのか、考える経験を多くつんでください。それに対して自分はどうか考えるか、考え込むことも、やってみてください。

数学の授業でも証明をいやがらないでください。

ポイントをおさえて、いいたいことを人にわかりやすく伝える努力も数学の中だけでなく大事と思います。

教員名	太田 裕治 (OHTA Yuji)
所 属	生活科学部人間・環境科学科
学 位	博士（工学）（1992 年，東京大学工学系研究科）
職 名	助教授
URL/E-mail	http://www.eng.ocha.ac.jp/biomedeng/index.html yuji@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

高齢者生活支援技術 / ニューロリハビリテーション / バーチャルリアリティによる障害児教育 / 画像情報を利用した組織工学 / 温度応答性高分子を利用したナノデバイス

◆主要業績

総数 (10) 件

- ・高野千尋，相沢博子，杉本千佳，江副亮介，長井宏和，山下和彦，太田裕治，佐々木健，保坂寛．転倒予防を目的とした高齢者の歩行中の足圧計測．ヒューマンインタフェース学会研究報告集，7(4)，37-38，2005．
- ・Takano C, Ohta Y. Simultaneous Measurement of Respiration and Heart Rate Using Live Image. The First International Conference on Complex Medical Engineering-CME2005, 24, 2005.
- ・田口大介，河島則天，太田裕治，中澤公孝．脊髄損傷者の装具歩行における股関節動作の動力補助—動力補助による装具歩行動作、エネルギーコストの変化—，日本義肢装具学会誌 21(1)，36-43，2005．

◆研究内容

各種医療機器，福祉機器の研究開発を行っている。高齢社会に入ったわが国においては、Quality of Lifeの向上をはかりつつ、医療経済の観点からも、またユーザに優しい低侵襲機器システムが求められる。以下のシステム・デバイスを開発するとともに、試作機を実際の医療・福祉現場に持ち込み評価を行っている。

（１）高齢者支援の為の工学技術

高齢者が健康で自立した家庭生活を営むことができるよう、社会参加・自立生活のための支援機器開発を行っている。動画像を利用した健康管理、初期褥瘡の無侵襲検出、転倒予防などを行っている。

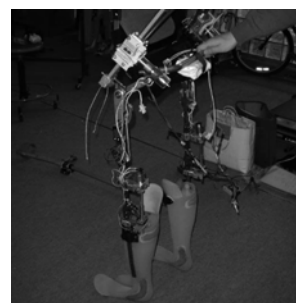
（２）バイオメカニクスとニューロリハビリテーション

脊髄損傷者（下肢麻痺者）が立位歩行を行うための歩行補助装具の研究開発を行っている。麻痺神経の再活性化が可能な歩行機器開発を主眼とする。

（３）その他、バーチャルリアリティ技術を用いた養護学校生徒のための避難訓練支援システム、腹膜透析における腹膜中皮細胞の修復メカニズム、温度応答性ポリマーを用いたマイクロマシンデバイス等の研究開発を行っている。

◆教育内容

数学物理学演習 1,2,3,4,物理化学英語 I，人体解剖学，人間工学，環境物理学（お茶の水女子大学）
電子工学（池見東京医療専門学校）
医用精密工学（中央大学理工学部精密機械工学科）
生体力学論（千葉大学工学部）
医用電子工学 1（東京理科大学）



◆特許

・動画像情報を利用した生体バイタルサイン計測：無拘束・非接触という性質をもつ動画像情報を利用することで、心拍数、呼吸数、RR間隔、姿勢動揺量などの各種バイタルサインの抽出・計測が可能な技術を開発した。この技術をビデオカメラ、携帯電話などに埋め込むことで、具体的な生活支援デバイスの開発が考えられる。

◆Research Pursuits

Current research themes are listed below.

- (1) Development of an assisting device for the walk of spinal cord injury patients. With a motor-powered prototype gait device, the effects of assistance by external actuators on the orthotic gait of spinal cord injury patients have been investigated.
- (2) Novel home-based care device for prevention of the secondary disease in paraplegic persons. An alternative rehabilitation device for individuals with motor disorders has been developed. Its aim is to prevent the secondary disease by stretching the ankle joints passively.
- (3) Evacuation procedures and drills in case of disasters for disabled children at schools. The goal of this research is to develop the evacuation procedures and drills in case of disasters for disabled children at schools, and to verify their effectiveness through trainings. A handy drill system using VR technologies has been proposed.
- (4) Heart rate measurement based on a time-lapse image. Using the time-lapse image acquired from a CCD camera, we developed a non-contact and non-invasive device which could measure both the respiratory and pulse rate simultaneously.
- (5) An image analysis algorithm for kinematics and morphology measurement of cells for the evaluation of tissue construction. Aiming at evaluation of tissue construction or reconstruction process, we developed a new image processing algorithm which could analyze the properties of huge number of cells in a tissue.
- (6) Pressure ulcer measurement. To detect rubor (initial pressure sore) at an earlier stage, which was curable in a short term, we examined the detection method by using bioelectrical impedance analysis (BIA).

◆共同研究例

- ・ 初期褥瘡の無侵襲検出に関する研究 ・ 高齢者の転倒予防デバイスの開発 ・ 脊髄損傷者用歩行補助装置の開発

◆将来の研究計画・研究の展望

科学技術の社会還元の観点からも少子高齢社会を支援する工学技術の研究開発が強く求められており、今後も積極的に下記技術開発を進める。(1) 高齢者支援のための工学技術：初期褥瘡の無侵襲検出、転倒予防デバイス、神経系確率共振現象を応用したデバイス開発 (2) 歩行リハビリテーションロボットを応用した歩行パターン研究 (3) 家庭内利用可能な車椅子常用户のための下肢運動訓練支援装置 (4) バーチャルリアリティ技術を用いた養護学校生徒のための避難訓練支援システム (5) ハンセン病患者の生活支援のためのデバイス開発

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・ 初期褥瘡の無侵襲検出に関する研究 ・ 高齢者の転倒予防デバイスの開発 ・ 脊髄損傷者のニューロリハビリテーション

◆受験生等へのメッセージ

当研究室は 2000 年 4 月に生活工学講座（現：人間・環境科学科）に開設された新しい研究室です。専門は人間工学・医用工学（Biomedical Engineering）という新しい分野の学問で、具体的には医療並びに福祉の現場で役立つ機器やシステムの開発を行っています。日本は高齢社会のピークを迎えつつありますが、Quality of Life の向上をはかりつつ、人に優しい（低侵襲な）機器システムが求められています。そのような機器を開発するには、医学・生物学と工学（物理化学）の基本的知識が必須となるだけではなく、試作したシステムを現場・臨床に持ち込んで、医師、患者、ユーザ、パラメディカルスタッフらと評価する必要があります。高齢化社会、医療技術の高度化に伴って、さまざまな大学で医療や福祉分野の研究を手がける研究室が増えつつあります。当研究室は医療・福祉分野への工学的な応用研究を専門に進める数少ない研究室です。若い皆さんの頭脳と力をこの分野に是非生かしてください。

◆Educational Pursuits

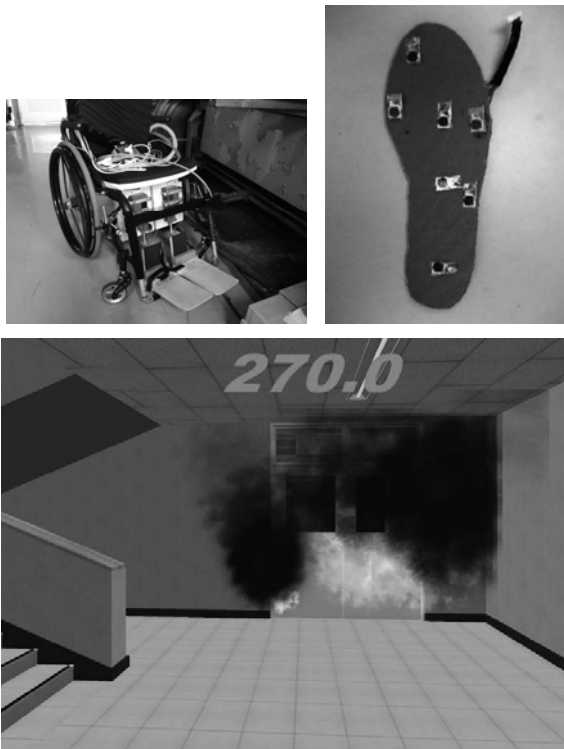
Exercise in math and physics 1-4, Physical chemistry, Human anatomy, Biomedical engineering, Environmental physics (Ochanomizu University)

Electrical Engineering (Ikemi Gakuen)

Medical Engineering (Chuo University)

An Introduction to Biomechanics (Chiba University)

Medical Electronics 1 (Tokyo University of Science)



教員名	大瀧 雅寛 (OTAKI Masahiro)
所 属	人間文化研究科人間環境科学専攻
学 位	工学博士 (1995 東京大学)
職 名	助教授
URL/E-mail	http://envir.eng.ocha.ac.jp/member/otaki/index-j.html otaki@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

健康関連微生物リスク / 光利用型水処理技術 / コンポスト型トイレ / 生活用水需要予測

◆主要業績

総数 (14) 件

- ・ Hong J., Ma H. and Otaki M., "Controlling algal growth in photo-dependent decolorant sludge by photocatalysis", J. of Bioscience and Bioengineering, Vol. 99, No. 6, 592-597, 2005.
- ・ Hong J., Emori H. and Otaki M., "Photodecolorization of Azo dyes by extracellular metabolites under fluorescent light and influence of operational parameters", J. of Bioscience and Bioengineering, Vol. 100, No.2, 192-196, 2005
- ・ M Bengtsson, T Aramaki, M Otaki and Y Otaki. Learning from the future: what shifting trends in developed countries may imply for urban water systems in developing countries, Water Science and Technology: Water Supply, Vol.5, No.3-4, pp.121-127, 2005.

◆研究内容

2005 年度の研究内容は主に以下の 3 つに分けられる。一つめはおが屑を用いたコンポスト型トイレにおける病原微生物リスクの評価と制御方法に関するものであり、病原細菌及び病原ウイルスの代替生物を用いて実験を行い、その不活化速度への影響因子を検討し、かつ数値シミュレーションによるリスク評価を通して、必要な微生物管理基準を提案した。二つめは UV 消毒および塩素消毒に関する細菌への損傷ダメージを簡便に評価する方法の開発である。複数の栄養培地を用いてそのコロニー形成数の差によって評価する方法および不活化後の回復処理による回復数によって損傷程度を評価することができ、消毒方法による損傷程度の比較を行った。三つ目は、発展途上国における生活用水使用量の実態調査であり、タイ王国において小型の流量計を各水道栓に設置し、一ヶ月間の用途別の使用量の詳細調査を行った。この結果により水使用量に影響を及ぼす因子を検討した。

◆教育内容

学部教育においては、基礎教育に関して 4 科目を担当した。物理数学に関する科目を 2 つおよび移動現象論を通して物理現象の数学的解明方法に関する講義を行った。また環境化学においては地球上の諸現象の基本メカニズムに関する講義を行った。専門教育に関して 4 科目の講義・演習を担当した。環境衛生学では、生活環境における有害性に関して講義した。環境物理学においては、諸現象を数学的に記述する方法論に関する講義を行った。環境工学および環境工学実験実習では、水環境の評価方法および改善技術についての講義を行った。卒業論文指導は 5 名を担当した。大学院教育においては、前期課程は専門科目 2 科目を担当し、後期課程は 1 科目担当した。環境工学特論では、水処理技術に関する論文の輪読や講義を行った。環境生活工学演習では、主に論文の作成方法の指導を行った。博士後期課程での指導は 3 名、博士前期課程での指導は、2 年生 4 名および 1 年生 3 名の計 10 名であった。

◆Research Pursuits

The researches conducted in 2005 were categorized to 3 parts. The first one was the assessment and control of microbiological risk in composting toilet using sawdust. The indicator bacteria and viruses as substitutes of pathogen were used to investigate the inactivation characteristics in composting toilet. And standard for management of microbiological risk from composting toilet was proposed according to the results of numerical simulation.

The second was the development of investigating damage level of bacteria suffered from UV and chlorination. The colony counts by several kinds of nutrient agar were compared each other and the recovery treatment was conducted after disinfection treatment to estimate damage level. Then the different damage level after each disinfection was observed easily.

The third was the survey of domestic water use in developing countries. The field survey was conducted in Thailand and small equipment for measuring water flow was set to every faucet in more than hundred households for obtain the detailed data describing water consumption for each purposes. According to results, the influencing factor deciding water consumption was investigated.

◆Educational Pursuits

In undergraduate education, I had 4 classes in fundamental science field and 4 classes in applied science field. In 3 classes of “mathematical physics” and “transfer phenomenon”, the mathematical methods describing physical phenomenon was lectured. In “Environmental chemistry”, the basic mechanisms of global phenomenon were lectured. In “Environmental sanitation”, the qualitative and quantitative assessment of toxic substances and phenomenon was lectured. In “Environmental physics”, the mathematical methods simulating several phenomenon was lectured. In “Environmental engineering” and its “laboratory”, the assessment and improving technology of water environment was lectured and practiced. In “Graduation Thesis”, 5 students conducted their Researches.

In graduate education, I had 1 class in Doctoral program and 2 classes in Master program. In “Special lecture of Environmental engineering”, English papers were read and the newest technology was introduced. In “Practice of Human Environmental Engineering”, making paper was practiced. 3 student in doctoral program and 7 students in master program conducted their researches. 3 student got Master degree.

◆共同研究例

- ・タイ国コンケン大学、チェンマイ大学と用途別水利用調査を行った。
- ・パルス型紫外線装置に関して岩崎電気株式会社と共同研究
- ・紫外線装置の評価手法の検討に関して西原環境テクノロジーと共同研究

◆将来の研究計画・研究の展望

コンポスト型トイレに関しては、特にウイルスによる感染リスクを制御するための方法を検討し、率的な消毒運転方法の技術開発に結びつけていく。また実用化に当たって安全性を簡便にモニタリングできる手法の検討を行い管理基準マニュアルを提案していく。細菌の損傷レベルに関しては、分子生物学的手法と結びつけて、より具体的な損傷機構を探っていく。水使用量調査に関しては、決定因子の特定を行い発展途上国における今後の水使用量予測に発展させていく。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・紫外線装置の簡便で迅速な照射量の評価方法の開発
- ・光触媒を用いた効率的な藻類抑制技術の開発
- ・発展途上国における用途別水使用量調査

◆受験生等へのメッセージ

本研究室は環境問題の中で水をキーワードに扱っていく。水は人と環境の間において必ず存在するものであり、水を通じて環境問題を考えれば、より具体的な問題認識、その解決法の提案といったことにたどり着きやすいと思われる。より具体的に環境に関する問題を考えることができるであろう。

本研究室は名前の通り工学を扱う。ここでいう工学の意味とは、主に「様々な現象や事象を定性・定量的に扱うこと」というイメージであると思って頂きたい。

例えば、食塩を取りすぎると高血圧になることはご存じだと思うが、だからといって「食塩を有害物質だ（定性的結論）」とは言えまい。それには「食塩は一日〇〇g以上摂取すると、高血圧が原因で死亡する確率は〇〇%になる（定量的結論）」といった判断が欠如しているからである。

本研究室は、水を介して「環境を工学的に評価」し、かつ「工学的に解決するための提案」を行っていくことに主眼をおいており、このような研究に興味がある方を歓迎する。

教員名	大塚 常樹 (OTSUKA Tsuneki)
所 属	文教育学部言語文化学科日本語・日本文学講座
学 位	
職 名	教授
URL/E-mail	

◆研究キーワード

日本近代詩 / 宮沢賢治 / 文学理論 / メディア戦略 / 昭和文学

◆主要業績

総数 (3) 件

・「草野心平―大胆な表現・とらわれのないスタイル」

共著

『日本のアバンギャルド』（和田博文編）

117頁－195頁

2005年5月・世界思想社

・高田敏子・井坂洋子・多田智満子

各項目執筆

『日本女性文学事典』

2006年1月・日本図書センター

・「田村圭司『吉田一穂 究極の詩の構図』」書評

「日本文学」第54号・日本文学協会

2005年

◆研究内容

①日本近現代詩の研究。

特に金子光晴、草野心平、萩原朔太郎、さらに1990年代以降に活躍する詩人について研究している。

②宮沢賢治の研究

近代科学、仏教、芸術などに幅広い視点からこれまで多数の研究を発表してきた。

③昭和初期文学の研究。

梶井基次郎、太宰治、川端康成、谷崎潤一郎、三島由紀夫などについて、主に表現戦略の観点から研究している。

④文学理論のテキストへの応用理論の研究。

文学テキストを一種のメディア戦略ととらえ、題名、人名、設定、語り、情報操作、目的、想定読者、誘惑、文化状況などの観点から、具体的な戦略理論の構築を行っている。

◆教育内容

①日本近代文学論特殊研究（文学理論）

文学テキストを作者と読者の仮想コミュニケーションととらえ、語り手、人物設定、修辞法、再現性、イデオロギーなど、その情報操作と戦略を提示した。

②日本近代文学論演習（現代）

大正期から昭和に活躍した川端康成や谷崎潤一郎、太宰治などの作家と作品について、分析用のチャートを配布し、それに基づいて学生各自に分析発表させた。

③日本近代文学史論（現代）

大正期から30年代までの文学史を、代表的な作家とその作品、文壇関係を細かく分析しながら追っていく。学生に調査レポートさせる参加型授業。

④日本文学

1年生向けの基礎講義。宮沢賢治のセロ弾きのゴーシュや川端康成の伊豆の踊子などを、文学理論に基づいて、チャート式に分析を行った。

⑤現代日本文学特論

大学院前期課程の授業。文学理論に基づく文学研究の具体的な方法論を学ばせた。

⑥日本文学研究指導

卒論を書くための基礎的なスキルを学ばせた。

◆将来の研究計画・研究の展望

- ①今後は文学理論の具体的な応用理論について、細部の詰めを行っていきたいと考えています。
- ②日本現代詩について、その表現方法に関する研究をしていきたいと考えています。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・文学理論の文学テキストへの応用。またはナラトロジー研究。
- ・メディア戦略論。

◆受験生等へのメッセージ

私の専門分野は日本近現代詩とメディア戦略を中心にした文学理論です。宮沢賢治の研究が一番多く、角川文庫の注釈などで皆さんの目に触れることがあります。萩原朔太郎や草野心平、金子光晴、梶井基次郎、太宰治の研究もしています。高校の国語教科書の編集も手がけています。

最近関心を持っているのは、文学もまた一種のメディア戦略であるということです。作者がいて、作品があり、そしてそれを読む読者がいて、また発表媒体があり、それらを取り巻く批評、文化状況があります。題名ひとつとっても意味がありますし、人名や設定にも意味があります。どのようなテーマがどのような話や設定で、どんな文体や形式で、どのような媒体で、どのような読者を想定されて構築されているか、ここには計算と意図が働いています。文学テキストも商品広告や政治パフォーマンスなどと違いはないのです。私は授業ではこうした観点から、日本文学作品を分析して、これまでにない読み取りの方法を行っています。

教員名	大塚 譲 (OTSUKA Yuzuru)
所 属	生活環境研究センター
学 位	農学博士 (1977 東京大学)
職 名	教授
URL/E-mail	http://pea.ieshl.ocha.ac.jp/otsuka/default.htm yotsuka@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

食品機能 / 遺伝子発現 / DNA マイクロアレイ / 活性酸素 / 組替え DNA

◆主要業績

総数 (3) 件

- ・ Rieko Oba, Yasuko Kudo, Naomi Sato, Reiko Noda and Yuzuru Otsuka "A new method of competitive reverse transcription polymerase chain reaction with SYBR Gold staining for quantitative analysis of mRNA." Electrophoresis in press
- ・ 加藤理恵 小川千穂、安藤、大塚 譲 「ベータナフトフラボンとアスコルビン酸添加時の遺伝子の発現の DNA マイクロアレイによる網羅的解析」 分子生物学会講演要旨集
- ・ 佐藤尚美、安藤、大塚 譲 「酸化ストレス時の遺伝子の発現の DNA マイクロアレイによる網羅的解析」 分子生物学会講演要旨集

◆研究内容

1. DNA マイクロアレイを用いて食品成分の細胞の遺伝子発現に及ぼす影響を調べた。
2. 活性酸素の遺伝子発現に及ぼす影響を調べた。
3. 遺伝子組替えにより酵素を作った。

◆教育内容

学部では細胞生化学の授業を行った。
大学院で授業を行うとともに以下の研究指導を行った。

1. DNA マイクロアレイを用いて食品成分の細胞の遺伝子発現に及ぼす影響を調べる。
2. 活性酸素の遺伝子発現に及ぼす影響を調べる。

◆Research Pursuits

- 1.The effect of the food constituents on the gene expression of the cells was analyzed by DNA microarray.
- 2.The effect of ROS on the gene expression of the cells was analyzed.
- 3.The genetically modified enzyme was produced by insect cell.

◆Educational Pursuits

For undergraduate students, I taught "Cell biochemistry".For graduate students, I taught "Molecular biology and food", and as a scientific advisor, I advised to the students. The graduate student's themes in my laboratory are "Study on the food constituents on the cell using DNA microarray" and "Studies on the reactive oxygen species on the cell function".

◆共同研究例

- ・鳥取大学医学部成瀬先生等

◆将来の研究計画・研究の展望

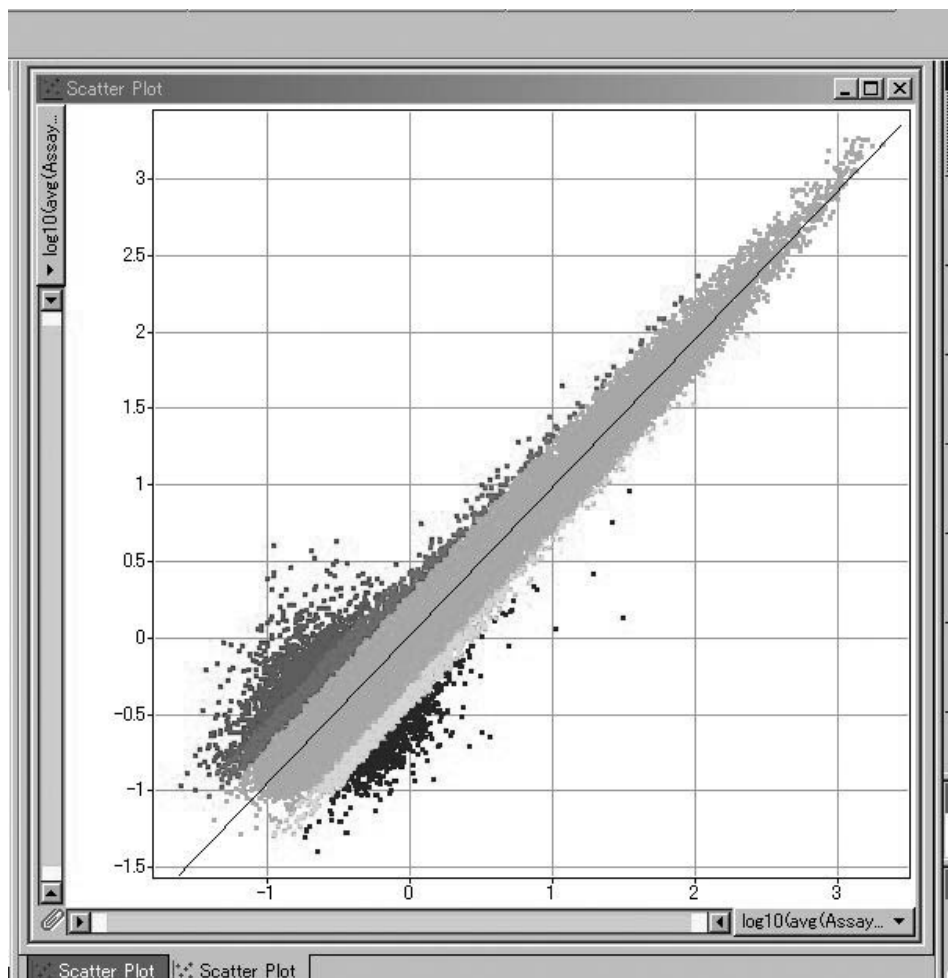
食品の機能と安全性を遺伝子発現などを通して検討する。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・DNA マイクロアレイ分析
- ・食品の機能
- ・酸化ストレス

◆受験生等へのメッセージ

食品の機能と安全性を研究したい人を当研究室では受け入れています。当研究室では環境中の化学物質の影響や酸化ストレス、アレルギー、発ガン、メイラード反応を遺伝子のレベル、蛋白質、細胞、個体のレベルで研究し、食物によってその影響を軽減できないかを考えています。2004 年から DNA マイクロアレイやリアルタイム PCR、レポーターアッセイができるようになり、最新の機器を用いた研究ができます。



教員名	大戸 美也子 (OHTO Miyako)
所 属	子ども発達教育研究センター
学 位	
職 名	教授
URL/E-mail	

◆研究キーワード

養育力 / 保護者論 / 幼保一体的運営

◆主要業績

・榎田二三子 武田隆子 義永睦子 滝川孝子 大戸美也子「親の養育力をエンパワーする環境構成の研究―附属幼稚園保護者の子育て意識調査を中心に」武蔵野大学人間関係学部紀要 3：49－62，2006

◆研究内容

2つの研究テーマについて、調査・研究を実施した。

1. 親の養育力をエンパワーする環境構成の研究
2. 幼稚園・保育園の一体的運営に関する課題の解明

1のテーマについては、東京近郊、横浜市、埼玉県鴻巣市の3地区の600人の保護者を対象に①子育てして楽しいこと、負担に感ずること、②子育てに必要なパワー（養育力）と現在の保有量等について調査し、子育てに関する意識調査を実施し、育児不安を持つ保護者は5%以下であり、大多数は豊かに養育力を持っていることがわかった。また、幼稚園、保育所における保護者向けの教育活動の実践を集め、多様な実態について分析中である。

2のテーマは、幼保一体的施設である「総合施設」の運営実態を明らかにするために全国35のモデル園を訪問し、インタビュー法により調査を進行中である。

◆教育内容

「保育臨床演習Ⅰ」（前期）

乳幼児を持つ保護者の実像をとらえ、彼らの養育力をパワー・アップする方法を探究することを目的に、調査票の作成法、各園の調査結果と全国調査等との比較及び、子どもと生きる力を育むための教材（VTR、絵本等）を具体的に検討した。

「比較保育学Ⅰ」（後期）

「乳幼児保育の質を高める取り組み」、「幼保一元化の取り組み」等の保育課題について、今期は、北欧五ヶ国、独・仏・伊、及びニュージーランド等、先進国の保育政策と実践と比較し、これらの取り組みの可能性を検討した。また、ニュージーランド、フランス、ドイツ、ウクライナの専門家を直接授業に招き、講演と話し合いの機会も設定した。

「保育実践研究Ⅰ・Ⅱ」（通年）

受講生の申告した保育実践上の課題について、各現場を訪れそれらを検証しながら課題解決の方法を具体的に検討した。

◆将来の研究計画・研究の展望

（１）親の養育力をエンパワーする環境構成の研究

乳幼児を持つ保護者の子育てに関する意識調査の結果（２００５）、大多数が豊かな養育力を保有していることが実証された。また、保護者は、自らの養育力をエンパワーする機会として、体を動かす、手先を使う等のワークショップ系の活動を求めていることが明らかとなった。この結果から、具体的に「手作り絵本」のワークショップを実施し、その達成度と養育力との関係について実証的に検討し、保護者の健全育成の方法を開発中。

（２）幼保一体的運営の質を保つ条件の課題の研究：

平成１７年度から実施された幼稚園と保育園の一体的運営施設である総合施設の３５モデル園について、運営の実態を５つの側面（①運営の主体、②幼保の１日の流れと融合プログラムの内容、③保育者の勤務シフト、④保育者の連絡・研修の持ち方、⑤保護者会の持ち方）から実地調査し、保育と教育の一体的運営の質を保つための条件を明らかにする。この研究成果をもとに新設の「認定 子ども園」運営の基本的条件を提案していく。

（３）基本生活習慣の獲得過程における学習内容の研究（その１ 排泄行為における学び）

幼児初期の発達課題の達成過程におけ「学び」を実証的に検証する第１弾で、排泄行為を中心に二つの側面から分析していく。（１）保育所によって排泄行為の自立の過程で子どもに求めるハードルがどのように異なるか？（２）子どもにとって越えることの難しいハードルはどこかを発達別にとらえる。この研究成果をもとに、３歳未満児における学びの１側面を明らかにし、保育における教育の在り方を提案していく。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

多摩地区の信用金庫の社会貢献事業として、乳幼児を持つ親支援を計画しており、その具体化のために基本調査の項目及びプログラムの内容検討に参画中。

◆受験（講）生等へのメッセージ

幼稚園と保育園が教育と保育を分担し棲み分けていた時代が終わり、就学前の子どもの保育と教育に明るいハイブリットな保育者が求められています。アップリカ特設講座は、現職保育者の学び直しの機会を提供します。新しい時代の保育者を目指す方々を歓迎します。

教員名	大場 清 (OHBA Kiyoshi)
所 属	理学部数学科
学 位	理学博士
職 名	助教授
URL/E-mail	ohba@math.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

位相幾何学 / リーマン面 / モジュライ空間 / アーベル微分 / 高次元結び目

◆研究内容

リーマン面のモジュライ空間について研究を進めている。リーマン面のモジュライ空間は、代数幾何学、関数論、微分位相幾何学、理論物理学など、いろいろな分野と深く関わりを持つ対象であるが、我々は、特に微分位相幾何的な視点から研究している。2005年度は、種数2のリーマン面のモジュライ空間の位相的性質を中心に研究を進めた。

◆教育内容

2005年度には、学部4年生3人と修士1年生1人、修士2年生1人の計5人の研究指導をした。また、学部向け授業として線形代数III、多様体論とその演習、数学輪講の授業を担当し、学部4年と院生向けにリーマン面の講義をした。また、東京理科大学と明治大学で非常勤講師として講義を行った。

◆Research Pursuits

We study the moduli space of Riemann surfaces. The moduli space is deeply related to various areas such as algebraic geometry, function theory, differential topology, theoretical physics, and so on. We investigate the moduli space from the viewpoint of differential topology. In 2005 we mainly worked the topological properties of the moduli space of Riemann surface of genus 2.

◆Educational Pursuits

Five students belonged to my laboratory in this academic year: two master students and three undergraduate students. Besides supervising the five students on their graduate reports or master thesis, I gave four two-credit undergraduate courses and one two-credit graduate course. I also gave graduate/undergraduate courses at Tokyo University of Science and Meiji University.

◆共同研究例

- ・“井桁”及び“稲妻対”によるリーマン面の構成（橋本義武氏との共同研究）

◆将来の研究計画・研究の展望

1. リーマン面のモジュライ空間に関するファーマー予想へのアプローチ
2. コバノフのホモロジー理論を使った4次元多様体のエキゾチック構造の探求.
3. 高次元の結び目に於ける PL-カテゴリーと Diff-カテゴリーの差異を具体的かつ初等的に理解する. 等

◆受験生等へのメッセージ

人生いろいろなことがあります. 受験も楽しみ, 受験後も楽しみましょう.

教員名	大森 正博 (OMORI Masahiro)
所 属	生活科学部人間生活学科生活社会科学講座
学 位	経済学修士 (東京大学)
職 名	助教授
URL/E-mail	http://www.soc.ocha.ac.jp/omori/ohmori.htm

◆研究キーワード

医療・介護 / 資源配分 / 所得分配 / 医療制度改革

◆主要業績

総数 (7) 件

- ・「オランダの医療・介護制度改革の最近の動向について」 『租税研究』 第677号 pp.153-167 2006年3月
- ・"A Refined Method for Estimating Medical Expenditure for Liver Disease Using The Patient Survey And Claim Data in Japan", (with Satoshi TOYOKAWA and Yasuki KOBAYASHI) Japanese Journal of Public Health Vol.52, No.11, pp.957-961 November 2005
- ・「オランダの最低生活保障制度」 栃本一三郎・連合総合生活開発研究所編 『積極的な最低生活保障の確立ー国際比較と展望ー』 pp.139 - 174 2006 第一法規

◆研究内容

- 1.医療サービスの需給には、市場の失敗が生じる要素があり、規制を含んだ何らかの制度設計が必要である。その中で特に、病・診連携に焦点をあてた研究を行っている。(文部科学研究費補助金、主任研究者)
- 2.医療制度における重要な規制として、医師供給に関する規制がある。医師供給政策の理論的根拠について考察を行った。(厚生労働科学研究費補助金、分担研究者)
- 3.現在、様々な産業、社会的制度において、規制緩和の流れがあるが、医療制度もその例外ではない。保険者機能を柱にした「規制された競争」の標語の下での医療制度改革が進展しているオランダのケース・スタディーを行った。
- 4.生活保護制度を中心とした最低生活保障制度の国際比較プロジェクトに関わり、オランダのケース・スタディーを行った。(連合総合生活開発研究所のプロジェクト)

◆教育内容

学部教育：

全学部向けに、「ミクロ経済学入門」、「マクロ経済学入門」の講義を提供した。内容的には、ミクロ経済学、マクロ経済学の基礎から中級までをカバーし、経済学部卒業生に負けない程度の力をつけることを目標とした。

また、生活科学部の専門科目として、「消費者経済学」、「国民経済と生活」の講義を行った。前者は、ミクロ経済学の応用分野である公共経済学、産業組織論の分野をカバーした。後者は、日本経済へのマクロ経済学の応用で、現実のデータを参照しながら、講義を行った。

学部3・4年生向けのゼミとして、消費者経済学演習を担当した。

大学院教育：

博士前期課程の「消費者問題論」、「消費者問題演習」を担当した。前者では、医療経済学 (Health Economics) の基礎的講義・演習を行った。後者では、医療を中心とした最近の文献を検討した。

◆Research Pursuits

- 1.Collaboration between primary care and secondary care.(Grant-in-aid for Scientific Research)
- 2.Theoretical foundation of physician supply policy(Grant-in-aid for Labor,Health and Welfare Scientific Research)
- 3.Health care reform in the Netherlands
- 4.Social assistance system in the Netherlands(Research Project: Research Institute for Advancement of Living Standards)

◆Educational Pursuits

For undergraduate students:

Micro economics, Macro economics

Applied micro economics, Applied macro economics

Seminar

For graduate students:

Health Economics, Applied economics

◆将来の研究計画・研究の展望

現実の医療制度には、様々な規制が存在している。それは、医療が市場的取引になじまない性格を持っているためであるが、その根拠を経済学的に明らかにし、望ましい医療制度設計に貢献したい。

教員名	大森 美香 (OMORI Mika)
所 属	文教育学部人間社会科学科心理学講座
学 位	Ph.D. Indiana University 2001 年 8 月 修士 (心理学) 筑波大学 1993 年 3 月
職 名	助教授
URL/E-mail	mika@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

ヘルスリスク行動 / 食行動 / 発達段階 / 感情

◆主要業績

総数 (4) 件

・Omori, M. & Ingersoll, G.M. (2005). Health-Endangering Behaviors among Japanese College Students: A Test of Psychosocial Model of Risk-Taking Behaviors. *Journal of Adolescence*, 28, 17-33.

・Omori, M.

Help-seeking attitudes towards professional psychological services among Japanese college students.

Poster presented at the American Psychological Association, August 18, 2005,

Washington, DC, USA

・大森美香

青年期のヘルスリスク行動評定における false-uniqueness 効果と false-consensus 効果

日本健康心理学会 2005 年 9 月 1 日 神戸

◆研究内容

(1) 文化・環境要因が青少年のヘルスリスク行動の形成過程に及ぼす影響を解明することを目的とするため、青年期前期のヘルスリスク行動 (喫煙) に影響を及ぼす心理社会的要因の日米比較調査を行った。心理社会的発達、リスクの知覚、健康信念、喫煙、親の健康行動の関連について比較調査を行った。

(2) 青年期のリスクテイキングと感情調節能力および自尊心の関連を明らかにする調査研究を行った。従来の研究では、自尊心はリスクテイキングを抑制する知見が報告されてきたが、抑制要因としては感情調節能力の予測力が高いことが示される研究結果が得られた。

◆教育内容

臨床心理学および健康心理学に関する授業・研究指導を行った。

大学院においては「文化心理学特論」「文化心理学演習」「心理臨床論演習」を担当し、心理的問題が文化や他の要因によってどのように説明されるのか、どのように明らかにするかの方法論に重点をおいて授業をすすめてきた。学部レベルでは「メンタルヘルス基礎論」「臨床心理学演習」「臨床心理学特殊講義」を主として担当した。

研究指導は、卒業論文と修士論文指導が中心である。

2005 年度の主なテーマは、中高年夫婦の性行動と精神的健康、養育態度と対人関係、青年期の攻撃性、子どもの抑うつ、職場のメンタルヘルス、などである。

◆Research Pursuits

- a. My research in 2005 centered around psychosocial impacts on adolescents' health-endangering behaviors. In 2005, I devoted myself to a comparative study in adolescents' smoking between US and Japan. The survey was designed to examine relationships among psychosocial development, risk perception, health beliefs, smoking behaviors, and parents' health behaviors.
- b. The secondary research that I conducted focuses on the role of emotional regulations on at-risk behaviors among college students. Although previous studies claimed that self-esteem was a protective factor of risky behaviors, the my study demonstrated that self-esteem was not significant when including self-regulation factors. It was demonstrated that emotional regulation was a significant protective factor in predicting

◆Educational Pursuits

I taught classes related to clinical psychology. Graduate courses that I taught were Cultural Psychology, Seminar in Cultural Psychology, and Seminar in Clinical Psychology. I put more emphasis on research than on particular intervention techniques in these classes. Undergraduate courses involved Foundation of Mental Health Issues, Topics in Clinical Psychology, Seminar in Clinical psychology.

I also supervised students' theses as part of my educational responsibilities. Research projects that I supervised included: relationships between sexuality of middle-aged women and mental health; perceived parenting styles and interpersonal relationships among college students; aggression among adolescents, children's depression, and mental health at work place.

◆共同研究例

- ・ 1. 青年期の健康行動に関する日米比較研究 (Indiana University)
- ・ 感情能力とリスク行動に関する研究 (Yale University)

◆将来の研究計画・研究の展望

これまでの青年期のヘルスリスク行動と心理社会的発達要因の関連に加え、感情能力と行動制御の観点からヘルスリスク行動の形成を明らかにしていきたい。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・ 健康行動
- ・ 感情能力
- ・ 心身の健康

◆受験生等へのメッセージ

臨床心理学は、心理的な問題の成り立ちや治療の方法に関わる領域ですが、広範な心理学の基礎知識のうえに成り立っています。臨床の場所では、個人の問題を理解し、どの方法がよいのか仮説をたて、治療法が効果的なものかどうか検証できることが求められます。こうしたことは、科学的な心理学研究法を学ばずには獲得できません。

基礎的な心理学の知識と科学的な心理学の研究法をしっかり勉強していただきたいと思います。

教員名	岡崎 眸 (OKAZAKI Hitomi)
所 属	文教育学部言語文化学科日本語教育講座
学 位	P h . D (1986 年 ミシガン大学)
職 名	教授
URL/E-mail	

◆研究キーワード

共生日本語教育 / 年少者日本語教育 / 日本語教員養成

◆主要業績

総数 (7) 件

・岡崎眸編著『多言語多文化社会を切り開く日本語教育と教員養成に関する研究』（基盤研究 (B)(2) 平成 14 年度?平成 17 年度 課題番号 14380117) 2006 年 3 月 pp.1-312

・岡崎眸「年少者日本語教育の課題」『共生時代を生きる日本語教育?上野田鶴子言語博士古稀記念論集?』お茶の水女子大学日本言語文化学会編 凡人社 (pp.165-182) 2005 年 10 月

・「子どもの母語を生かした学習支援?子ども、教員、地域の支援者にとっての意義?」岡崎眸 『児童教育』 15 pp.20-24

◆研究内容

主に二つの研究課題で研究を行った。(1) 多言語・多文化共生社会を切り開く日本語教育と教員養成のあり方を探ることを研究課題として、01 年から継続してきた基盤 B (2) (研究代表者)の最終年度に当たる 05 年度には、それまでの研究成果を総括する研究に展開し、成果報告書を作成した。具体的には、第一に、日本語母語話者と非母語話者が参加し、互いが共生するための言語的手段の獲得を目標とする共生日本語教育の特徴を提示したこと、第二に、共生日本語教育実習を受講した実習生の学びを質的・量的に明らかにしたこと、第三に、内省モデルに基づく実習プログラムの特徴を提示したことが挙げられる。(2) 言語少数派年少者の教科学習支援のあり方を探る萌芽研究(研究代表者)の開始年度にあたり、横浜市鶴見中学の協力を得て、母語を活用し、母語の育成と統合した教科学習支援を二人の生徒を対象として行い、その特徴を観察した。結果、教育課程の中で母語を活用した授業の可能性が示唆され、次年度の取り組みに向けた基盤がつくられた。

◆教育内容

(1) 日本語教育コースで開講している「日本語教育実習」を科研費研究の一環とすることで、受講生だけでなく、後期課程国際日本学に所属する院生も含めて研究チームを作り、研究を進める態勢を作った。実習生間の話し合い、実習生の内省レポート、教壇実習における実習生の教授行動、参加者の談話などを収集し分析し、研究会で口頭発表を行い、論文にまとめる作業を行った。この態勢により、?自分たちの実践を対象とすることで、実践と研究の相互交流を体験できること、?グループによる研究とすることで、研究手法が先輩から後輩に伝授され、共有されること、?修士 1 年次にも小さい論文を 1 本仕上げられること、などの点で、日本語教育研究者を養成することを目指す本コースにとって教育的意義があると考えた。この研究への参加を通して、修士論文、博士論文へと研究課題を育てていく院生もいる。(2) 鶴見中学における教科学習支援に院生を参加させることで、学校現場を知り、現場に直接影響力を与えることのできる研究のあり方について考える場を与えた。

◆Research Pursuits

The major research agendas were the following: (1) establishing methodologies for Japanese language education and teacher-development which aimed at facilitating to develop multilingual/multicultural society; (2) developing a system which was designed to support school subjects learning of linguistic minority children. The agenda(1) was conducted as the final step of a five year research project B(2) funded by JSPS, and the final research report was published.. The agenda(2) was processed as the first step of a three year pioneer research project, also funded by JSPS. The project was done going the full scale cooperation of Tsurumi junior high school in Yokohama city.

◆Educational Pursuits

The educational pursue should be characterized as the following: (1) education pro gram for Japanese language teacher practicum was put through by being carefully designed to be integrated to a research project funded by JSPS .; (2) establishing a system in which graduate students participate in the school subjects learning support system for linguistic minority children in Tsurumi junior high school designed for the graduate students participants to shape the field where the had the opportunity to identify what would be the appropriate research manner that could be responsive to and therefore influential to educational practice. Each of the attendants above had chances of the following experiences: 1. interactions between their teaching practice and research conducts; 2. research methodologies and fine techniques,.

◆共同研究例

- ・共生日本語教育で扱われる教材開発

◆将来の研究計画・研究の展望

- ・「母語を用いた帰国・外国人児童生徒支援に関する調査研究」2004-2005（横浜市教育委員会）
- ・「母語を用いた学習支援モデル事業」2001-2003（横浜市国際交流協会）
- ・1）現在進めている萌芽研究の結果をもとにして、小中学校の教育課程の中で、国際教室担当の教員を中心に、教科・母語・日本語相互育成モデルに基づいた授業実践を実施するためのマニュアルを作成する。（2）共生日本語教育実習の受講生と教壇実習用教室の参加者を対象として、もともととから持っている前提だけでなくその前提の源まで遡って意識変容を促す実習コースのデザインを追求する。

◆受験生等へのメッセージ

グローバル化に伴う社会の多言語化・多文化化の動きの中で、特にその社会で言語少数派に属する人々の言語権（母語を使う、母語を保持・育成する権利とその社会の共通言語を学び使う権利）は軽視され蹂躪されるという問題が深刻化しています。そこで、国内の言語少数派の人々（例えば就労目的で来日する日系人や日本人との結婚により来日するアジアからの花嫁など）を対象として、この社会の共通言語である日本語教育を支援する第二言語としての日本語教育のあり方が問われることになります。現状では、日本語の習得だけが強調されることによって、日本への同化要請の道具として機能するという傾向が見られます。彼らの母語・母文化の尊重の実現と統合される形の日本語教育のあり方が追求されなければならないと考えます。日本語教育コースで開講している「共生日本語教育実習」を中心にして、言語話者としての人々の全人格・生活全般を見渡す日本語教育のあり方学生のみなさんと一緒に追求していきたいと考えています。

教員名	小川 昭二郎 (OGAWA Shojiro)
所 属	人間文化研究科人間環境科学専攻
学 位	工学博士 (1971 東京大学)
職 名	教授
URL/E-mail	http://matchem.eng.ocha.ac.jp/ sogawa@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

分離機能を持つ芳香族複素環化合物の合成 / カラースイッチング機能を持つ大環状化合物の合成 /
高分子物質のケミカルリサイクル / キトサンの機能性材料への応用 / 高強度繊維の表面加工とその利用

◆研究内容

最近の研究の興味は、染料、顔料のような色素類のいわゆる機能性色素としての利用、すなわち、電子材料、表示材料、分離材料等への利用に向けられている。種々の芳香族大環状化合物の合成研究を行っている過程で、そのいくつかがりチウムイオンを極めて選択的に捕捉することを見出した。ナトリウムに対するリチウム選択性が 5000 倍という驚異的なものもあり、さらに、リチウムを取り込むことにより可視スペクトルが大きく変化し、色の変化が見られるものも得ることができ、リチウム分離材のみならず分析試薬としての利用が期待される。我々はこれらの化合物を用いて海水中のリチウム分離に成功し、2002 年度のアメリカ化学会誌

(J.Am.Chem.Soc.) に掲載された。また、現在、学術誌 Heterocycles および、J.Mol.Cat. に投稿中である。さらに、光により金属イオン捕捉能が変わる、すなわち光スイッチング機能を持つ大環状化合物の開発研究を行っているが、本研究については平成 17 年度、18 年度科学研究費補助金基礎研究 C の助成を受けている。

◆教育内容

【科目名】環境有機化学

【講義内容】石油化学製品、食品、医薬、農薬などから廃棄物、化学汚染物質まで我々の身の回りには有機化合物があふれている。その製造から廃棄までを考える上で分子構造の知識は不可欠である。有機化学Ⅰ、Ⅱで学んだ知識をもとに、脂肪族及び芳香族化合物の性質と反応、高分子の化学、さらにそれらの生活材料への応用と環境との関わりを学ぶ。

【科目名】生活高分子材料学特論

【講義内容】我々の生活の中でプラスチック、合成繊維等の高分子材料は益々増え続けている。この 10 年間でその性能は格段に向上しているが、同時に、環境問題にも大きな影響を与えつつある。高分子材料の製造、使用、廃棄について問題点を探る。

◆将来の研究計画・研究の展望

近い将来予測されるエネルギー確保、資源の枯渇の問題は人類の将来に対して極めて深刻である。すべての自然科学研究者は何らかの形でこれに対処する義務があると考え、これまで行ってきた分離機能をもつ有機化合物の合成研究、繊維等の高分子材料の表面加工の研究、我々が見出した高分子のケミカルリサイクルに有効な触媒が今後エネルギー問題、資源問題へのヒントを与えることを望んでいる。

◆受験生等へのメッセージ

人類の生存に関わるエネルギーおよび天然資源の確保の問題はますます深刻化することが予想され、君たちの未来は決して明るいものであると考えることは出来ない。社会は個々の生活の集合から成り立っており、その中での女性の役割は極めて重要である。新しく発足した人間・環境科学科では、生活の中で起こる問題を自然科学の問題としてとらえ、これを正確に理解する習慣を身に着けることを念頭に教育している。そのためには科学の基礎を真剣に学ぶことを前提としている。困難に背を向けることなくこれに立ち向かえる人達が育ってくれることを切に願っています。

教員名	小川 温子 (OGAWA haruko)
所 属	人間文化研究科人間環境科学専攻
学 位	理学博士
職 名	教授
URL/E-mail	hogawa@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

糖鎖の構造と機能 / 複合糖質 / レクチン / 細胞外マトリックス / 膵臓消化酵素

◆主要業績

総数 (7) 件

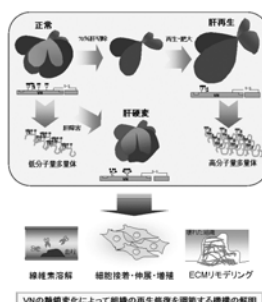
- ・ Takekawa, H., Ina, C., Sato, R., Toma, K., Ogawa, H.
Novel carbohydrate-binding activity of pancreatic trypsins to N-linked glycans of glycoproteins.
J. Biol. Chem., 281, 8528-8538 (2006).
- ・ Ina, C., Sano, K., Yamamoto-Takahashi, M., Matsushita-Oikawa, H. Takekawa, H., Takehara, Y., Ueda, H., and Ogawa H. (2005) Screening for and purification of novel self-aggregatable lectins reveal a new functional lectin group in the bark of leguminous trees. Biochim. Biophys. Acta, 1726, 21-7 (2005)
- ・ 金久實、小川温子、西原祥子（企画編集）
「バイオデータベース利用法－検索からバイオインフォマティクスまで」学進出版（2005）

◆研究内容

個体発生や受精、生体防御など、生命の各局面に糖鎖が必要であることが示されています。糖鎖が働く分子機構を知るためには、個々の現象に関わる分子間相互作用の解析が必須です。私達は、主要な膵臓消化酵素が糖鎖に高い親和性をもって特異的に結合することを世界で初めて見出しました。 α -アミラーゼの基質とは異なる糖鎖結合性の発見に続き、最近、代表的な膵プロテアーゼのトリプシンも特異的な糖鎖をもつ糖タンパク質に対して強く結合することを報告しました。糖結合によりトリプシンは活性化し、消化促進することがわかってきました。一方、ニセアカシア樹皮に新たな自己会合性レクチンの存在を見つけ、マメ科樹木における自己会合レクチン群の存在とその窒素貯蔵管理機能を提唱しました。この他、細胞外マトリックス分子の糖鎖の機能研究、糖鎖プローブの開発についても、活発に研究を進めており、情報発信しています。

◆教育内容

学部では化学を基礎にもつ学生を対象に、基本的な生体分子の構造と機能を講義しています。「基礎生化学」では糖質と核酸の基礎を、また「生体分子反応学」では主要な代謝反応の流れと原理を解説します。学部3年次の「生物化学学生実験」では、生体分子を扱う際の基礎的な実験技術と考え方の習得が目標で、少人数教育を生かした懇切な指導を教員3名で分担して行っています。内容：レクチンタンパク質と糖類の精製、化学分析、活性測定、酵素反応解析、組み換え DNA 実験の基礎。卒業研究と大学院教育では、講義、ゼミ、研究を通じて、糖質をめぐる化学・生物学の理解を深め、研究方法を習得します。関連する医学、工学分野も学習します。「総合生命科学」では、糖質科学と生命情報学の接点となるデータベースを紹介しました。卒研・修論テーマ例：プロテオグリカン構造の重要性、ウシ赤血球膜グリコホリンからのポリラクトサミン型糖鎖の性質。



◆Research Pursuits

Numerous biological phenomena have been shown to be mediated by recognition of specific oligosaccharide signals. To clarify the molecular mechanism of how the glycan functions, it is essential to analyze the molecular interactions involved in each phenomenon.

We discovered novel carbohydrate-binding activities for principal pancreatic enzymes. Following to that of pancreatic alpha-amylase which is different from the substrate-binding activity, the most major pancreatic protease, trypsin, was found to bind sugar-specifically to the glycoproteins with high affinity which allows trypsin to function in the hydrolysis as an uncompetitive activator.

Novel lectins were found in the bark of Robinia pseudoacacia and purified. One lectin exhibited the remarkable characteristics of self-aggregatable lectins: localization in the bark of legume trees, self-aggregation dissociated by N-acetylglucosamine/mannose, and coexistence with N-acetylgalactosamine/galactose-specific lectins, which are potential endogenous receptors. Self-aggregatable lectins are a functional lectin group that can link increased photosynthetic product to the release of glycoproteins to supply nitrogen, suggesting that these lectins are involved in the annual growth of legume bark.

Other research projects in our group include: Structure-function Relationship of Extracellular Matrix Glycoproteins; Development of Novel Glycoprobes such as Pseudoproteoglycans; and Application of Bioinformatics to Glycoresearch: Glycoinformatics.

◆Educational Pursuits

For undergraduates, I taught the 2nd and 3rd-year students who has chemistry basis to understand the structures and functions of biological molecules. "Basic biochemistry" course included carbohydrates and nucleic acids. The "Bioenergetics" course included principal metabolic reactions and theories. "Biochemical laboratory" course included purification of lectins and trehalose, chemical analyses, activity measurements, analyses of enzyme reaction, and basic recombinant DNA techniques. We guided the students carefully to obtain the basic experimental techniques and a way of thinking to treat biological molecules (shared by three instructors). For graduates, I delivered lectures and book-readings in the class on the current research issues in chemistry and biology of carbohydrates and their research methods including related glycotechnology and glycomedicine. In "General bioscience", databases in the glycoscience were introduced. The examples of titles of undergraduate and graduate theses were: "The importance of proteoglycan structures as a glycomatrix molecule" and "Characterization and utility of polyactosaminoglycan from bovine erythrocyte glycophorin", and "Screening of novel carbohydrate-binding substances", etc.

◆共同研究例

- ・膵臓消化酵素の糖鎖認識

◆特許

- ・シュードプロテオグリカンとその用途(特許出願中)
- ・蛍光標識糖鎖に対する固定化試薬(特許出願中)・膵臓消化酵素の糖鎖認識
- ・酵素の安定性、活性、ターゲティングの糖鎖による制御

◆将来の研究計画・研究の展望

- ・膵消化酵素に見出した糖鎖結合性を、広範囲の生体分子について検索し、相互作用によって達成される生物学的機能を解明する。
- ・糖鎖を介する相互作用系の分子間ネットワークから糖鎖暗号獲得の進化起源を解明し、新規相互作用系の予測と進化の方向を予測する。
- ・私達が開発したシュードプロテオグリカンを始めとする糖鎖プローブ、細胞外マトリックス分子プローブを改良し、糖鎖の関わる生命現象の解明、細胞機能制御、感染防御、組織構築の制御など、生物機能調節への利用をはかる。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・シュードプロテオグリカンを利用する細胞機能制御・消化酵素の糖鎖結合性の解明とその活用
- ・細胞外マトリックス分子の糖鎖による機能制御

◆受験生等へのメッセージ

私は糖鎖（グルコースなどの単糖がつながった分子）の役割や、体内で働くしくみを研究しています。スギ花粉アレルギー（糖鎖をもつ糖タンパク質です）の糖鎖の構造や、糖鎖がアレルギーの原因かどうかを以前に解明しました。現在は動物も含め、様々な分子を対象に調べています。糖鎖は生物が生きていくために欠かせない重要な物質ですが、まだ知られていない事がとても多く、予測を超える新しい面を見せてくれます。私はもともと化学を勉強しましたが、生命科学の研究には、知識ばかりでなく、物のとらえ方や考え方、想像力や精神力、体力も、楽しく長く個性的に続けるために重要です。大学を目指すときに、あなたの持っているすべての力を信じて、10年くらい先の自分をイメージしてみましょう。目標をもった前向きな姿勢と一日一日の努力が、必ず結果を生みます。受験勉強も、学問研究も、その点では同じです。さあ夢の実現に向けて Let's Go!

教員名	荻原 千鶴 (OGIHARA Chiduru)
所 属	文教育学部言語文化学科日本語・日本文学講座
学 位	博士 (人文科学) (1996 お茶の水女子大学)
職 名	教授
URL/E-mail	

◆研究キーワード

古事記 / 風土記 / 万葉集

◆主要業績

総数 (2) 件

- ・「橋に立つ神—古代日本文学に見る—」『古典に親しむ』(城西国際大学) p59～p78 2005.4
- ・『出雲国風土記』の説話表現(上代文学会 風土記の可能性を考える会) 研究発表 2006.3

◆研究内容

『古事記』『日本書紀』には、神が橋に立つ叙述が散見される。橋が斯界と異界をつなぐものであればこそ、橋は神の示現のための装置にもなることを指摘し、そうした橋の表象性が『万葉集』の歌に姿を変えて受け継がれてゆく様相について考察した。

一方『出雲国風土記』の説話表現については、他国風土記に比して顕著な特性があること、すなわち神を行為主体としその行為を地名起源に結ぶことがパターン化していることと、その意味などをこの数年来研究テーマとし、いくつかの論文を公表してきたが、2005年度にはその感情表現の特性について研究した。『出雲国風土記』の説話の感情表現の乏しさが何を意味するかを研究するために、『風土記』はもとより『古事記』『日本書紀』『日本霊異記』など、日本上代散文作品全般にわたってデータをとり、整理考察して、上代文学会の「風土記の可能性を考える会」において、研究発表を行った。

◆教育内容

学部では、日本古典文学史論・日本文学概説・日本古典文学論特殊研究・日本古典文学論基礎演習・日本古典文学論演習・日本文学研究指導の授業を担当した。文学史は、日本上代文学の特性と史的展開について講じた。日本文学概説では、動物神信仰の衰退を観点として、上代から近世にいたる文学モチーフの変遷について講じた。特殊研究では「自然を詠む」のテーマのもとに『万葉集』歌の各期それぞれの変容を探る教育を行った。基礎演習・演習では日本文学を研究するにあたってのトレーニングを指導した。日本文学研究指導では、上代文学作品をテーマとする学生の卒業論文作成のための指導を行った。また学部3年生の研修旅行の引率を行い、自作の資料も用意して、図書館や文学故地の実地踏査における指導を行った。

大学院博士前期課程では日本上代文学特論の授業を担当し、英雄造形をテーマとする作品分析についての指導を行った。また修士論文作成にむけて、『古事記』の代表的注釈書の比較対照に関し指導を行った。

◆受験生等へのメッセージ

『古事記』『風土記』『万葉集』など日本上代の文学は、1300 年も前に書かれたものです。古代の人々の、現代とは大きく異なるものの考え方・感じ方がうかがえますが、それだけにかえって、現代の私たちの中に埋没してしまっているものを、はっと気づかせてくれたりするのです。古典を学び研究することは、現代を考えることにつながると、私は思っています。上代の作品にも、ぜひ目を向けてみてください。

教員名	小口 正人 (OGUCHI Masato)
所 属	理学部情報科学科
学 位	工学博士
職 名	助教授
URL/E-mail	http://www.is.ocha.ac.jp/~oguchi/ http://ogl.is.ocha.ac.jp/oguchi@computer.org

◆研究キーワード

ネットワークコンピューティング/ミドルウェア/Storage Area Network/Mobile Ad hoc Network/ネットワークセキュリティ

◆主要業績

総数 (43) 件

・Masato Oguchi, "Cluster Computing and Storage Area Network - from their advent to current topics - (Invited paper)" In Proceedings of the 2nd JST CREST Workshop on Advanced Storage Systems (ADSS2005), pp.149-152, San Francisco, December 2005.

・Kikuko Kamisaka, Saneyasu Yamaguchi, and Masato Oguchi: "Performance Analysis of iSCSI Middleware Optimized for Encryption Processing in a Long-Latency Environment," In Proc. IEEE 20th International Conference on Advanced Information Networking

・豊田 真智子, 山口 実靖, 小口 正人: 「複数台 Initiator を用いた iSCSI アクセスにおける TCP 輻輳ウィンドウとシステム性能の考察」 日本データベース学会 Letters, Vol.4, No.2, pp.77-80, 2005 年 9 月.

◆研究内容

インターネットを中心とする大規模ネットワークにより、種々のコンピュータや情報機器類が接続され、互いに連携しながら高度なネットワークコンピューティングが行われるようになってきました。私の研究室では、このような新しいネットワーク環境において、コンピュータやその他の資源を効率良く快適に利用する、さらにはセキュリティに配慮し暗号化や認証を導入して安全に利用する、といった手法を研究しています。具体的な研究テーマとしては、高性能な PC クラスタシステムに IP ベースの SAN を統合した IP-SAN 統合型 PC クラスタ、仮想プライベートネットワーク VPN 上における高性能・高信頼性 SAN 環境の構築、モバイル環境における認証や暗号化の実現手法、TCP パラメータの動的な解析や制御などが挙げられます。環境と目的に応じてそれぞれに適したネットワークプロトコルや概念モデルを提案し、ミドルウェアを構築することによりそれを実現しています。

◆教育内容

情報科学：情報科学とは何であるか、自然科学分野における位置付けおよびその技術的な応用について学ぶ。近年急速な発展が見られる情報技術を基礎として支えているのが情報科学であるが、その内容は幅広く奥も深い学問である。本講義は、情報科学やその関連分野に携わる者が知っておくべき基礎知識について述べ、主要トピックを取り上げて議論し、受講者にこの分野の概要を理解してもらうことを目標とする。

コンピュータ基礎演習：UNIX およびプログラミング言語 C の基礎を習得する。情報科学分野の学習・研究を進めるためには、コンピュータを用いて数値計算やデータ処理などを行う能力を身に付けることが重要である。本演習では UNIX ベースのコンピュータの使い方を覚え、基本的なプログラムを作成する技術を習得することが目標である。

コンピュータネットワーク I：インターネットに代表されるコンピュータネットワークは、情報関係の様々な分野の基盤となる技術であり、この知識を身に付けることは実用的にも有効である。本講義では TCP/IP を中心としたネットワークプロトコルの基礎並びに応用技術に関して理解することを目標とする。

コンピュータネットワーク II：コンピュータネットワークは大学、企業、家庭等あらゆる場面において今や不可欠な存在となり、その知識や技術の習得を求める社会的要求も高い。本講義では、インターネットを中心としたコンピュータネットワークを実際に構築し運用するために必要な知識を総括する。本講義で行っている演習の概要が、(株)アップルコンピュータのホームページで紹介されている。

<http://www.apple.com/jp/education/profiles/ochanomizu/>

コンピュータネットワーク特論：コンピュータネットワークに関する知識は社会生活の上で必要不可欠なものとなってきた。本講義では、学部においてコンピュータネットワークに関する基礎知識を習得した学生を対象に、各プロトコル階層の動作メカニズムや実装例、応用などを詳細に議論する。

◆Research Pursuits

Recently, advanced network computing systems have been realized as various sorts of computers and resources are connected with each other, owing to prosperity of large-scale networks represented by Internet. In our laboratory, several innovative methods are proposed for such an environment in order to make the best use of computer resources comfortably and securely. They include IP-SAN Consolidated PC Cluster, High Performance Dependable SAN over Virtual Private Network (VPN), Authentication and Cryptography on Wireless LAN, and TCP Parameter Analysis and Control. Network protocols and concept models suitable for each environment are proposed.

◆Educational Pursuits

Information Sciences
Exercises in Basic Programming
Computer Network I
Computer Network II
Advanced Computer Networks

◆共同研究例

- ・「情報爆発時代に向けた新しい IT 基盤技術の研究」 東大生産技術研究所他
- ・「ディペンダブルで高性能な先進ストレージシステム」 東工大他
- ・「無線環境における TCP の研究動向」 トヨタ IT 開発センター

◆将来の研究計画・研究の展望

本研究室ではネットワークコンピューティング・ミドルウェアをテーマとして掲げ、これに含まれるいくつかの種類の研究を手掛けている。この分野は大学のみで研究が行われている訳ではなく、企業も積極的に手を伸ばしている領域であり厳しい競争が行われている。そのような状況の中で、大学の研究室の機動性を活かして、IP-SAN や MANET など常に最も先端的なシステムを取り上げ、解析や実装を行い、実際に動かしてみせることにより説得力のある研究を行ってきており、今後もその形で成果を出して行きたい。

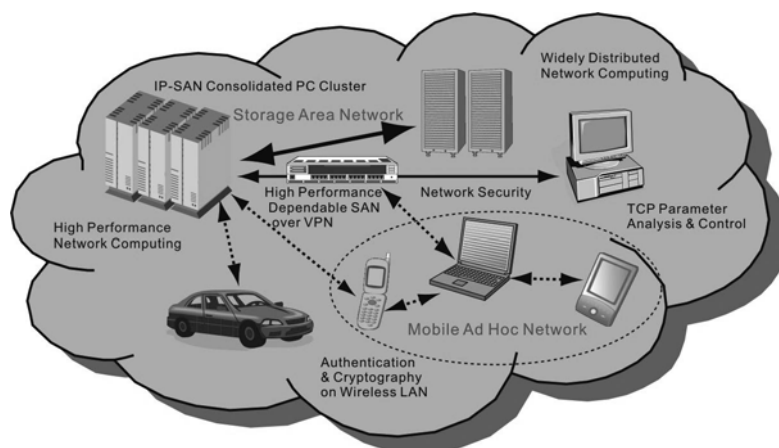
◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・MANET における通信プロトコルとセキュリティ実現方式
- ・IP-SAN を用いた VPN 上の複数経路通信
- ・PC クラスタを用いた高性能データ処理アプリケーション

◆受験生等へのメッセージ

現在、世の中の非常に多くの人が、携帯電話やパソコンその他を通して、コンピュータネットワークのお世話になっていると思います。それではコンピュータやネットワークは、一体どんな仕組みで動いているかご存知でしょうか。情報科学科で私が教えている講義は、その疑問に答えるものです。またコンピュータネットワークは、将来どのように発展していくのでしょうか。私の研究室においては、これを探る研究を行っています。

コンピュータやネットワークは、進歩のペースが物凄く速いものです。ただ利用しているだけだと中がどうなっているのか見えませんが、この中身を勉強し、研究で未来を切り開いていく作業は、大変刺激的で面白いものです。



教員名	奥村 剛 (OKUMURA Ko)
所 属	理学部物理学科
学 位	理学博士 (1995 慶応義塾大学)
職 名	教授
URL/E-mail	http://www.phys.ocha.ac.jp/okumuralab/ okumura@phys.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

ソフトマター物理学 / 濡れ / 破壊 / 複合材料 / テクスチャー表面

◆主要業績

総数 (11) 件

・ K. Okumura, Fracture strength of biomimetic composites: scaling views on nacre, J. Phys.: Condens. Matter 17 (2005) S2879-S2884.

・ Invited Lecture, Ko Okumura,
SCALING VIEWS ON STRENGTH OF SOFT/HARD COMPOSITES,
III European Conference
on Computational Solid and Structural Mechanics
Lisbon, Portugal, 5 - 8 June 2006

◆研究内容

本年は、表面張力、濡れ、複合材料などの破壊力学について以下のテーマの研究をソフトマター物理学の観点に立って行った。

(1) テクスチャー表面での接触角履歴：ナノからサブマイクロンの大きさの微細な構造が表面にある表面上に乗っている数ミリ程度の小さな滴の接触角の履歴現象についての基礎的研究。工業的応用にも密接に関連。

(2) 生物模擬複合材料の破壊：真珠は美しいだけでなく、大変丈夫である。これはナノスケールの微細な層状構造を持つためと考えられてきた。この物理的理由を印象派物理学の視点に立ち明らかにした。

(3) ミシン目の入った紙の強度について：リンゴやジャガイモの冷凍による強度の変化に触発され、たくさん穴の開いた紙の強度について研究した。

(4) 破壊力学におけるグリフィス法則の直接検証：破壊に関して 1920 年から知られている有名な法則を直接に実験的に検証するために装置を開発し、予備的な検証に成功した。

◆教育内容

2005 年度授業担当：(学部) 物理数学 I (2 単位) 必修、物理数学 II (2 単位) 必修、数理物理学 (2 単位) 必修、量子光学 (2 単位) 必修、物理数学演習 (2 単位) 選択 *、物理学特別講義 V (2 単位) 選択 **、特別研究 (12 単位) **。(修士)：ソフトマター物理学 (複雑液体・生体) [2 単位]、液体の物理学演習 [2 単位]、特別研究 [14 単位] **。*は他の教官と 2 人で担当。**は複数教員全員で担当。

2005 年度研究指導学生テーマ概要：

博士 1 年生 A：テクスチャー表面での濡れ転移の理論

博士 1 年生 B：液晶の相転移理論

修士 2 年生 A：流体のシミュレーション

修士 1 年生 A：多孔構造の破壊理論

修士 1 年生 B：高分子の統計理論

学部 4 年生 A グループ (2 名)：表面張力の実験・理論

学部 4 年生 B グループ (2 名)：破壊力学の実験

他大学での集中講義：京都大学、千葉大学。

その他：エコール・ポリテクニク (仏) より学生を受入れ指導 (3 ヶ月間)。コレージュ・ド・フランス (パリ大学所属) で研究する学生 1 名を 1 ヶ月間程度指導。

◆Research Pursuits

This year, we studied the following topics concerning surface tension, wetting, fracture mechanics of composite materials etc. from the viewpoint of soft matter physics:

- (1) Contact angle hysteresis on rough surfaces
- (2) Fracture strength of biomimetic composites
- (3) Toughness of perforated paper
- (4) Direct confirmation of Griffith's scaling law

◆Educational Pursuits

This academic year, nine students belong to my laboratory: two doctor students, three master students, and four undergraduate students. Aside from education for the four undergraduate students on the graduation report, I taught five two-credit undergraduate courses, three of which were compulsory. I was asked to give intensive lectures at Kyoto University and Chiba University.

◆共同研究例

- ・日産自動車：濡れに関する研究

◆将来の研究計画・研究の展望

濡れ、表面張力、破壊、複合材料、ゲル、液晶、高分子などのテーマをソフトマター物理学の立場から研究していく。これまでの理論に加え、実験研究も行っていく。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・濡れ、撥水、表面張力
- ・複合材料、破壊

◆受験生等へのメッセージ

ソフトマター物理学は、物理学の手法を、液晶ディスプレイ、ペットボトル、洗剤、化粧品、真珠などの身の回りの工業製品・現象等、また、高分子、コロイド、石鹼、DNA、たんぱく質など高校の科目でいえば化学や生物などで扱われている対象に適用し、注目を集めています。なかでも、私は、あたかもフランス印象派画家たちのように自然を理解しようとする「印象派物理学の手法」に注目しています。皆さんも私と一緒に、印象派画家になったつもりで、自然の本質をえぐりだしてみませんか？

教員名	尾高 直子 (ODAKA Naoko)
所 属	人間文化研究科
学 位	人文博士
職 名	リサーチフェロー
URL/E-mail	なし / odaka.naoko@ocha.ac.jp

◆研究キーワード

平安和歌 / 和泉式部 / 表現

◆主要業績

総数 (1) 件

- ・『日本女性文学大事典』市古夏生・菅聡子編 浅井清編集協力 日本図書センター 平成 18・1
(有智子内親王・小式部内侍・賀茂保憲女 執筆担当)

◆研究内容

2004 年度に提出した博士論文において『和泉式部集 (特に続集末尾にある日次歌群)』や『源氏物語』の表現に、『信明集』の歌物語化された歌群の影響が見られることを指摘した。和泉式部や紫式部が仕えた彰子のサロンにおいて『信明集』の歌物語化歌群が愛読され、作家たちが次々とこの表現を受容し各々の作品を創作していったことを考察した。しかし、そこには既成の古歌を引く際に贈答歌や歌群全体を意識化において引くことがあるのかということが問題点として残ったため、それを解明すべく、それぞれの作品の表現に着目し影響関係を分析した。

また、リサーチフェローという職は義務に縛られず自由な場所で研究できる職種なので、夫の転勤に伴い、2005 年度の 3 分の 2 はウィーンで活動したが、8 月 31 日～9 月 3 日に「11th International Conference of the EAJS (European Association for Japanese Studies)」に参加し、海外における日本文学研究に触れた。その後、ウィーン大学の日本語学科 (学部・修士) の授業に定期的に参加、他の国の教授とも意見交換を重ね海外における日本語教育の実情を分析した。

◆Research Pursuits

In the thesis, which was submitted in 2004, I noticed the expressions in *Izumishikibu-Syu* and *The Tale of Genji*. The same expressions of two works are also seen in *Saneakira-Syu* which is a work of waka before Izumishikibu flourished as a writer. Then the analysis makes it clear that they accept the expressions in the previous works such as *Saneakira-Syu* when they serve Syoshi as *Nyobo*. But the thesis has a problem that the writers in Heian period accepted the expressions in not only a *waka* but also a work of *waka*. Now I analyze this point through another works in Heian period.

Research Fellow is a kind of occupation which is permitted to study anywhere I like. So I am living in Vienna with my husband most of 2005 and took part in 11th International Conference of the EAJS to see the present condition of Japanese literature studies. After that I am taking part in the class of the department of *Japanologie* in Vienna University to analyze the circumstances of Japanese education.

◆将来の研究計画・研究の展望

和泉式部続集末尾に存する「日次歌群」の表現を通して、和泉式部の作歌活動の実態を明らかにし注釈を施す。さらに『和泉式部日記』との相違も分析し平安時代の文学のあり方を追究する。また、平安文学研究のグローバル化を視野に入れ、海外の研究者・学生が活用できるようなテキストを考案したい。現在、海外における日本語教育において、平安文学が取り扱われることは稀である。平安文学の実態を中心にしたテキストを通して平安文学研究の活性化を図りたい。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・平安文学研究の国際化

◆受験生等へのメッセージ

お茶の水女子大学の特長は女子大であるということに尽きます。学部生の折より十数年間お世話になってきましたが、いわゆる性差を感じることなく、真摯な態度で研究に打ち込む仲間の中で切磋琢磨して学問を追究できる環境であることを痛感してまいりました。女性であるが故に、結婚・出産という問題はどうしても研究活動の障壁となる場合が多いと思われませんが、本大学は自由な場所で研究に励めるリサーチフェローという職種を設置することを試み、女性の生活を十分に考慮しています。私も現在妊娠中、間もなく出産を控えていますが、研究活動を再開しやすい立場で出産を迎えられることに感謝しています。女性は未だに自由の利かぬ人生を強いられることも多いので、学問を継続するに当ってはよく将来の環境を見定めた上で学部・大学院を選ぶ必要があると思います。

教員名	戒能 民江 (KAINO Tamie)
所 属	生活科学部人間生活学科生活社会科学講座
学 位	法学修士
職 名	教授
URL/E-mail	http://www.soc.ocha.ac.jp/kaino/ kainou@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

ジェンダー / 女性の人権 / 法の生成 / 政策 / 女性運動

◆主要業績

総数 (5) 件

- ・編著『DV 防止とこれからの被害当事者支援』ミネルヴァ書房
- ・「DV 法制定から改正へーその意義と課題」『国際女性』19 号、76－84 頁
- ・「日本における女性の人権政策課題」『F-GENS ジャーナル』5 号、81－85 頁

◆研究内容

女性に対する暴力と法と法を主要研究テーマとするが、近年はドメスティック・バイオレンス（以下、DV）に焦点化し、DV 法制度の比較研究、DV 立法過程研究、DV に関する公共政策研究を中心に展開している。DV 法分析および公共政策研究の成果を 2006 年に編著書として刊行した。さらに、人身売買、セクシュアル・ハラスメント等、女性に対する暴力と人権課題について研究を進めている。21 世紀 COE プログラムにおいては、拠点リーダーとして取りまとめ役を担うとともに、女性に対する暴力の被害者支援政策研究と福祉政策研究の有機的統合をめざした共同研究を行っており、2005 年度は台湾調査を実施して、その成果を報告書にまとめた。

◆教育内容

学部では家族法及びジェンダー政策を中心に担当し、大学院では法女性論及び男女平等政策論を担当している。学生は法律学専門ではないので、法律学の基礎的知識を織り込みながら授業を行い、できるだけ事件や裁判例などを素材として現代的課題を取り上げ、リーガルマインドの養成に努めている。大学院においてはジェンダー研究の視点から、ジェンダー理論と法学理論の交差に焦点化して教育を行っている。

◆共同研究例

- ・ 東アジアにおける DV・女性福祉研究

◆将来の研究計画・研究の展望

女性に対する暴力の理論化、東アジアにおける女性の人権政策比較研究、ジェンダー法学理論研究

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・ 女性に対する暴力
- ・ ジェンダー政策
- ・ 女性・子どもの人権

◆受験生等へのメッセージ

ジェンダー及び女性や子どもの人権について関心を持つ学生さんとともに学んでいきたいと思います。

教員名	加賀美 常美代 (Kagami Tomiyo)
所 属	国際教育センター
学 位	文学博士 (東北大学)
職 名	助教授
URL/E-mail	http://jsl.li.ocha.ac.jp/kagami.htm tkagami@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

異文化間コンフリクトと解決 / 教育価値観 / 多文化間カウンセリング /
コミュニティ心理学的援助 / 心理教育と予防的支援

◆主要業績

総数 (7) 件

- ・加賀美常美代 2006 平成 15 年一平成 17 年度科学研究費補助金基盤 (C)(研究代表者 加賀美常美代) 「異文化間コンフリクトと教育価値観の研究」 pp1-94
- ・加賀美常美代 2006 「文化移行を伴う生徒の予防的協働的援助：こころと学校コミュニティ」 こころと文化 5-1 多文化間精神医学会 pp.35-41
- ・加賀美常美代・箕浦康子・三浦徹・篠塚英子「グローバル文化学に関心のある学生はどのような学生か？」人文科学研究 245-264

◆研究内容

平成 15 年度から三年間取り組んだ科研基盤 C「異文化間コンフリクトと教育価値観の研究」の最終年度として「短縮版教育価値観尺度の開発」、「教育価値観の包括的次元の探索」、「教育価値観と一般的価値観の関連に関する理論的研究」など学会論文としてまとめ、三年間の成果として報告書を作成した。

次に「文化移行を伴う生徒の予防的協働的援助：こころと学校コミュニティ」というテーマで、文化的配慮の必要な日本語未習の中学生の受入に関する取り組み、担任教員、帰国生担当教員、父母、母語話者チューターとの協働と連携によるコミュニティアプローチによる包括的援助体制づくり、世代間の問題解決について学会報告した。

最後に、グローバル文化学環が創設され、教育カリキュラム開発のため、新入生を対象に国際意識調査を実施し、グローバル文化学に関心のある学生がどのような特徴を持っているか、関心度とその関連要因（国際教育プログラムの参加動機と学習動機、理想的自己観、多文化理解態度、キャリア志向、社会イメージ）との関連を検討した。

◆教育内容

学部教育：「異文化間コミュニケーション」、「比較日本文化論」は、参加型授業、グループ活動、留学生と日本人学生の交流、コミュニケーション・スキルの向上、文化差・年齢差・学部を越えた人間関係作りの場の提供と協働を目指した。「異文化間人間関係論概論」では、購読、教師との対話型ゼミナール形式と学生同士の討論など共同活動形式の授業を行った。「学校カウンセリング(教職)」では、コミュニティアプローチによる学校の心理教育的援助の講義、スクールカウンセラー、特別支援教育、帰国生、養護教員 4 名のゲストスピーカーを招き現場教師の意見を聞く機会を設けた。

大学院教育：「異文化間心理教育学特論」は国内外の雑誌講読、大学院前期課程・後期課程院生の研究指導を行った。「異文化間心理教育学演習」は、海外派遣教師、多文化間の教師経験者による事例検討、ロールプレイを行い積極的傾聴に関するスキル向上を目指した。個別指導として学部卒論、修士論文、博士論文及び投稿論文指導を行った。

◆将来の研究計画・研究の展望

- 1) 葛藤解決方略と教育価値観の関連の検討
- 2) 多国籍の対象者に対する教育価値観尺度の有効性の検討
- 3) 教育価値観尺度の実践的応用と教師と学生のための教育プログラム開発
- 4) アジア諸国の対日イメージ形成過程研究と葛藤解決プログラムの開発など。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・ アジア諸国の対日イメージ及び社会イメージ形成過程研究
- ・ 留学生のキャリア形成と帰国留学生ネットワーク

◆受験生等へのメッセージ

留学生の相談をしながら、多様な文化背景を持つ人々とどのように関わったら、よりよい関係が構築できるのか、そのためのコミュニケーションはどのようにしたらよいか、ということをずっと追求してきました。

また、最近では、支援をしない支援とは、相手が負担にならない支援とはどのような支援かを考えています。このようなテーマを一緒に考えていきたいという方、どうぞいらしてください。

教員名	垣内 康孝 (KAKIUCHI Yasutaka)
所 属	人間文化研究科特設遺伝カウンセリング
学 位	博士 (学術)
職 名	講師
URL/E-mail	kakiuchi@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

細胞運動 / 生物リズム / 情報伝達 / 粘菌

◆主要業績

総数 (2) 件

◆研究内容

生物が複雑で予測不可能な環境を生き抜くためには、外界から受容した多種多様な情報を統合的に評価する仕組みが必要である。特に、脳神経系を持たない単細胞生物は、このような高度な作業を細胞膜、細胞質、核などの組み合わせで実現している。細胞における情報統合機構を理解するため、アメーバ様の単細胞生物である真正粘菌および細胞性粘菌を用いて、「リズム」がコンダクターとして機能するという観点から解析をおこなっている。

◆将来の研究計画・研究の展望

リズムなど細胞のダイナミカルな特性が情報機能を持つことを、「リバーシジェネティクス」に倣い「リバーシダイナミクス」を実現して明白に示すこと。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・細胞運動
- ・Niemann-Pick 病関連遺伝子

教員名	香西 みどり (KASAI Midori)
所 属	生活科学部食物栄養学科
学 位	博士(学術) (1995 お茶の水女子大学)
職 名	助教授
URL/E-mail	http://www.food.ocha.ac.jp/chori/cook.htm kasai@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

野菜の硬化・軟化 / 加熱条件 / 最適加熱時間 / テクスチャー / 予測

◆主要業績

総数 (11) 件

◆研究内容

調味料（食塩、醤油、砂糖）で野菜の加熱したときの野菜の軟化に着目し、速度論的解析より得た調味液中での軟化の速度定数と熱伝導解析より得た試料の内部温度を組み合わせて加熱中の軟化過程を予測し、さらに食塩の拡散過程についてもコンピュータを用いたプログラム計算によるシミュレーションを行った。炊飯途中で加熱を中断すると粘りの少ない、粒感がない飯となり食味が低下する現象を明らかにし、その機構の解明を行った。さらに炊飯における米の吸水過程を MRI で観察し、核磁気共鳴法による米の水分含量の推定法を確立した。

◆教育内容

調理科学として調理における非加熱操作および加熱操作の原理を説明し、実際の操作上の要点を整理して講義している。食嗜好評価学として嗜好に関わる要因、種々の食品の嗜好および調理特性、食品の嗜好評価法について等の講義を行っている。基礎調理学実習として調理の基礎的操作、食品についての基礎的知識を講義しつつ、実践として調理実習を行っている。その際、調理による変化の数量的把握のため重量変化等の計測も含めている。調理科学実験では調理科学の知識を基礎として種々の条件における食品の物性や成分の変化を測定し、現象の把握、原因の考察を行っている。研究室においては卒論、修論、D 論の学生と毎週ゼミを行い、外国文献の講読、討論、研究の進捗状況の報告および討議など行った。

◆受験生等へのメッセージ

“調理のこつといわれるものが真実ならば、そこに科学があるはずである”という先人の信念が調理学という新しい学問の基礎を築き、発展させてきました。調理は日常的に行われ、生きる喜びにもつながるものです。何気なく調理するのと、科学的視点でひとつひとつの調理操作、おいしさを考えるのとでは調理技術の進歩に大きな違いが生じます。調理学は理論と技術の両輪で発展するものであり、取り組むべき課題も多いです。体系だった勉強をし、その上で新しい課題に取り組んでみませんか？

教員名	粕川 正充 (KASUKAWA Masaatsu)
所 属	理学部情報科学科
学 位	博士 (理学) (1993 東京工業大学)
職 名	助教授
URL/E-mail	http://www.is.ocha.ac.jp/~kasukawa/ kasukawa@is.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

ユーザインタフェース / コンピュータアーキテクチャ

◆主要業績

総数 (1) 件

・「ステガノグラフィや電子透かしの手法を利用した画像ファイルへの情報の埋め込みとその利用法について」
第 47 回プログラミングシンポジウムポスター発表

◆研究内容

人間を中心としたコンピュータと人間の共棲を目指す。
現在のコンピュータのありかたは酷くいびつである。コンピュータをありうるべき姿で捉えなおし、人間にとって自然なパートナーであるように研究をしている。
また、暗号や乱数、アーキテクチャなどについても研究を行っている。

◆教育内容

学部講義としてコンピュータアーキテクチャ I、情報倫理、基礎ゼミなどを担当した。
コンピュータアーキテクチャ I はコンピュータのハードウェア面を主として、後期のコンピュータアーキテクチャ II の内容のオペレーティングシステムへの橋渡しを行った。
情報倫理はコンピュータセキュリティを管理者の立場で学ばせた。異常事態はなぜ発生するのか、また対策はどのように行うのか、再発防止はどうすればよいのか、また各段階で発生するコストはどの程度になるのかななどを講義し、レポートを課した。
基礎ゼミは他学科 1 年生向けの情報科学科ではどのような内容を学ぶのかを紹介する講義であり、授業時間の最初の 30 分は情報関係の様々なトピックを解説し、残り 1 時間で電子回路の市販キットや PIC・BASIC 基板の組み立てやプログラムの作成を行い、最後にレポートを課した。

◆Research Pursuits

Toward the Symbiosis of man and Computer, I study the interfaces between human and computer.

The development of computers stepped into the croocked way.

I hope to justify the way to the right one.

◆将来の研究計画・研究の展望

一昨年から継続している研究として、手書き文の作成と手書きのメール送信プログラム、手書きメールの受信再生プログラムを完成させるための目途がようやく立ったので、これを完成させて、発表する予定である。

また、今年行った「Wavelet 変換を応用した画像への情報の記録と取り出し」は意図した機能を十分に発揮しなかったため、もう少し内容を吟味してよりよいものとしたい。

また今年、修士希望の学生が来たので、一年で基礎を教え、来年度以降、この学生の持っている音楽との連携のアイデアを実現させたいと思う。

教員名	堅尾 和夫 (KATAO Kazuo)
所 属	ライフワールド・ウオッチセンター
学 位	工学士
職 名	教授
URL/E-mail	kkatao@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

ナノ材料 / リスク評価 / 化学物質規制

◆主要業績

総数 (2) 件

・ K,Katao. Application of the present Chemicals Risk management System to Nano-materials. A joint Royal Society & Science Council of Japan Workshop on the potential health, environmental and societal impacts of nanotechnology. London(Royal Society), 2005 年 7 月

・ K,Katao. Bilateral Academia Collaboration Session, A joint Royal Society & Science Council of Japan Workshop on the potential health, environmental and societal impacts of nanotechnology.

東京（東京ビッグサイト）2006 年 2 月 23 日

◆研究内容

現在の化学物質規制制度は、既存化学物質の扱い、試験法の不備、限定的規制対象などの点でナノ材料のリスク評価に対応できないとの懸念があり、これらの問題点について、世界の研究状況、議論を調査し、今後の制度的課題を検討した。

◆教育内容

2004 年度科学技術振興調整費に採択され、同年度後期から社会人向け公開講座「化学・生物総合管理の再教育講座」を実施している。2004 年度後期には 90 分授業 15 回からなる科目を 15 科目開講し 332 人が受講、2005 年には前後期合わせて 56 科目開講し 1273 人が受講し、年とともに発展している。また、2005 年度からは本公開講座が学部学生の単位対象となった。

◆Research Pursuits

There occurs the concerns along with the rapid development of nanotechnology that the present chemical regulation system might not be able to correspond to the risk appraisal of the nanomaterials, because of the unclear treatment of the existing chemical substance, defectiveness of the testing methods and the limited area of regulatory objects. And I have conducted the survey of research and argument situation of nanomaterials safety in the world, investigated future institutional topic concerning above mentioned points.

◆将来の研究計画・研究の展望

ナノ材料のリスク評価の課題について調査研究、とりわけ現行化学物質規制制度上の課題に焦点を当て研究を進める。また、新技術の登場に対して社会の知的インフラとしての学会等の役割、そのあり方について、調査研究を進める。

◆Educational Pursuits

We started the Extension Course of the integrated management of chemical substance and living organism for society member in 2004, supported by Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MECSST)

The course consists of 56 subjects in 2005, each subject has 15 lectures of 90 minutes and 1273 people had registered to attend the lecture.

In addition, the subjects of this extension course are admitted to be eligible for the unit object of the department student from 2005.

教員名	加藤 美砂子 (KATO Misako)
所 属	人間文化研究科比較社会文化学専攻
学 位	理学博士 (1988 東京大学)
職 名	助教授
URL/E-mail	mkato@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

二次代謝 / カフェイン / 遺伝子発現 / 藻類 / 炭化水素

◆主要業績

総数 (6) 件

- ・Yoneyama N., Morimoto H., Ye C-X., Ashihara H., Mizuno K., and Kato M. Substrate specificity of N-methyltransferase involved in purine alkaloids synthesis is depend upon one amino acid residue of the enzyme. Mol. Gen. Genomics (2006) 275:125-135.
- ・Ikegami Y., Tanoi T., Kawachi M. and Kato M. Characterization of hydrocarbon biosynthesis in *Botryococcus braunii* BOT-70. Plant Cell Physiol. (2006)47:s197.
- ・Mochizuki S., Komoro Y., Mizuno K., Adachi K., Kuwano K. and Kato M. DMSP biosynthesis regulated by the supply of methionine. (2006)47:s223.

◆研究内容

(1) 植物におけるカフェイン生合成系の遺伝子発現調節機構: MGG 275、125-135、2006に以下の内容の論文を掲載した。プリンアルカロイド生合成に関与する N-メチルトランスフェラーゼの基質特異性は1個のアミノ酸残基によって制御される。カフェインとテオブロミンは植物の主なプリンアルカロイドである。植物の中にはカフェインではなくテオブロミンを蓄積する種も存在する。カフェインとテオブロミンという蓄積されるプリンアルカロイドの違いは、その植物が持っている酵素の基質特異性の違いによるものであることを証明した。そして、その性質特異性は酵素タンパク質の中央部分のアミノ酸によって決定されることを示唆した。

(2) 藻類の炭化水素生合成系の解析: 以下の内容を日本植物生理学会大会で発表した。緑藻 *Botryococcus braunii* BOT-70 株の炭化水素生合成系の特性 *Botryococcus braunii* は、淡水でコロニーを形成して生息する単細胞の緑藻である。*B. braunii* に蓄積されている炭化水素は、その化学構造から Race A、B、L の3種類に分類されることが知られている。本研究では、広島県で単離した BOT-70 株の炭化水素生合成系の特徴を調べ、この藻類を用いた効率的な炭化水素生産の可能性を探ることを目的とした。14C-標識化合物を用いたトレーサー実験を行ない、BOT-70 株の炭化水素生合成系の特徴を調べた。[14C-methyl]メチオニンを投与すると、短時間で特異的に炭化水素に取り込まれることが示された。脂肪酸由来の炭化水素を生産する Race A と判明している株では、このような現象は見られず、BOT-70 株がその構造中に複数のメチル基を持つ *Botryococcene* を生産する Race B であることが示唆された。

(3) 海産藻類におけるメチオニン代謝が制御する耐塩性メカニズム: 以下の内容を植物生理学会大会で発表した。潮間帯などの環境中の塩濃度変化が激しい場所に生息するヒラアオノリ (*Enteromorpha compressa*) は、細胞内に適合溶質として DMSP (dimethylsulfoniopropionate) を蓄積する。DMSP はメチオニンを前駆体として合成される。本研究は、ヒラアオノリにおける DMSP 生合成代謝調節機構を明らかにすることを目的とした。藻体に放射性標識されたメチオニン等の化合物を与え、各前駆体からの DMSP 合成能の変化を検証するトレーサー実験から、高塩濃度環境下において、メチオニン供給量が細胞内 DMSP 量を制御する重要な調節因子であるという結果を得た。つまり、ヒラアオノリが高塩濃度環境へ馴化する際には、メチオニン合成系遺伝子の発現が誘導され DMSP 蓄積量が増加すると推定できる。そこで、植物におけるメチオニン生合成の鍵酵素として知られる CGS (シスタチオニン-γ-シントラーゼ) 遺伝子発現量と外界の塩濃度との相関関係について検証した。

◆教育内容

学部向けには植物生理学 (2名で担当)、植物生理工学、代謝生物学実習 (2名で担当)、生物学演習を担当した。博士前期課程の学生には、植物相関生理学、植物相関生理学演習、生命科学演習を担当した。卒業研究2名、博士前期課程の学生5名の特別研究指導を行った。
卒業研究テーマ チャの転写因子 Dof の単離と解析/ヒラアオノリにおける CGS 遺伝子の単離と遺伝子導入系構築の試み
博士前期課程特別研究テーマ 緑藻ヒラアオノリにおける適合溶質の生合成調節機構
チャのカフェイン生合成と蓄積に関与する遺伝子群の解析/重金属による植物の酸化ストレスの影響
チャのカフェインシントラーゼ TCS1 の発現制御機構/緑藻 *Botryococcus braunii* の炭化水素生合成系の解析

◆Research Pursuits

(1) Regulation of gene expression involved in caffeine biosynthesis in plants

MGG 275:125-135, 2006

Substrate specificity of N-methyltransferase involved in purine alkaloids synthesis is dependent upon one amino acid residue of the enzyme.

Caffeine and theobromine are the major purine alkaloids in plants. To investigate the diversity of N-methyltransferases involved in purine alkaloid biosynthesis, we isolated genes homologous for caffeine synthase from theobromine-accumulating plants. The predicted amino acid sequences of N-methyltransferases in theobromine-accumulating species in *Camellia* were more than 80% identical to caffeine synthase in *C. sinensis*. However, there was a little homology among the N-methyltransferases between *Camellia* and *Theobroma*. The recombinant enzymes derived from theobromine-accumulating plants had only 3-N-methyltransferase activity. The accumulation of purine alkaloids was, therefore, dependent on the substrate specificity of N-methyltransferase determined by one amino acid residue in the central part of the protein.

(2) Biosynthesis of hydrocarbon in microalgae

Characterization of hydrocarbon biosynthesis in *Botryococcus braunii* BOT-70

The green-colonial algae *Botryococcus braunii* is known to produce large amounts of hydrocarbon. The accumulated hydrocarbon is classified into 3 races A, B, L by their chemical structure. The aim of this study is to characterize hydrocarbon biosynthesis in *B. braunii* BOT-70 for the establishment of the efficient hydrocarbon production.

We investigate the characteristics of hydrocarbon biosynthesis in BOT-70 by ¹⁴C-tracer experiments.

[¹⁴C-methyl]methionine was specifically incorporated into hydrocarbon, differently from race A strain. The obtained results suggest that the accumulated major hydrocarbon is classified as race B that produces botryococcene containing some methyl groups. The hydrocarbon biosynthesis from [¹⁴C-methyl] methionine was highest at the beginning of the growth and then decreased drastically, on the other hand, the hydrocarbon biosynthesis from NaH¹⁴CO₃ was highest at early log phase growth. Botryococcene is supposed to be converted from IPP. We examine whether the origin of IPP is MEV pathway or MEP pathway.

The regulation of salt tolerance by methionine metabolism in marine algae

DMSP Biosynthesis Regulated by The Supply of Methionine

The aim of this study is to investigate the metabolic regulation of DMSP (dimethylsulfoniopropionate) biosynthesis in *Enteromorpha compressa* for the environmental adaptation. DMSP is one of the compatible solutes accumulated in many species of marine algae and a few of higher plants.

We fed the radio-labeled precursor of DMSP (for example, methionine) to *E. compressa* in high salinity medium and analyzed the change in DMSP biosynthesis activity from each precursors. The obtained results suggest that the biosynthesis of DMSP in salt-treated *E. compressa* is regulated by the supply of methionine.

If the biosynthesis of methionine is accelerated on response to salt stress, the expression of the salt-responsive genes involved in methionine biosynthesis may be induced. Cystathionine-γ-synthase is known as a key enzyme of methionine biosynthesis in plant. So we isolated CGS gene(s) from *E. compressa* by RT-PCR and examined the correlation between the expression of CGS and salt stress.

◆共同研究例

- ・藻類の炭化水素生合成に関する基礎研究

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・植物を利用した有用物質生産技術開発
- ・藻類の炭化水素生合成系の解析とその利用
- ・メチルトランスフェラーゼの機能改変

◆受験生等へのメッセージ

生物学を専攻してみませんか？後悔はさせません。

教員名	金子 晃 (KANEKO Akira)
所 属	理学部情報科学科
学 位	理学博士 (1973 東京大学)
職 名	教授
URL/E-mail	

◆研究内容

2方向投影データからの原画像再構成問題に、再構成像全体の成す集合の構造を調べるという新しい研究方法を提案し、スイッチンググラフという新しい表現法を導入してグラフとの興味深い関係をいろいろ見出し、この成果をニューヨークで行われた離散トモグラフィのシンポジウムで発表した。また詳細論文をお茶の水女子大学紀要に掲載した。

代数幾何符号の画像への埋め込みと自動修復画像の研究では、512ビットの部分体エルミート符号の実装に成功し、扱える画像の幅を最も適切なものとし、また新たにJPEG画像への冗長ビットの埋め込み法を開発した。ログ型非線型項を持った熱方程式に対する爆発の臨界指数は、実例の計算中で、これが終わり次第発表する。退化する位相を持った振動積分に対する漸近第1項の冪の推定を、精度保証数値計算により行う研究を開始し、アイデアを北大の研究集会で発表した。次年度に論文としてまとめる予定。学部生との共同研究で自然にデフォーカスされた写真の修復を逆畳み込みの正則化により実装した。

◆教育内容

情報科学科にふさわしい数学基礎教育を実践的に研究してきた。その成果を微分積分、線形代数、応用代数の教科書として今までに出版してきた。

今年度は数値計算と計算幾何学の講義を新たに始め、ノートを作った。これらも近い将来教科書として出版したい。

Cygwin のインストール用ディスクは今年も1年生に課外活動で教育したのみならず、情報処理センターで有効に利用していただき、大学の計算機教育に貢献した。

教員名	河村 哲也 (KAWAMURA Tetuya)
所 属	人間文化研究科複合領域科学専攻
学 位	工学博士 (1984 東京大学)
職 名	教授
URL/E-mail	kawamura@is.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

数値シミュレーション / 数値流体力学 / 環境科学 / エネルギー問題 / 非線形偏微分方程式の数値解法

◆主要業績

総数 (23) 件

- ・河村哲也 (単著), 流れのシミュレーションの応用!, 山海堂 (東京), ISBN4-381-01376-X, 2005.7 (167 ページ)
- ・河村哲也 (単著), 基礎からの流体力学!, 山海堂 (東京), ISBN4-381-02195-9, 2006.3 (217 ページ)
- ・R.Zhang, T.Kawamura and M.Kan: Numerical Simulation of Formation and Movement of Various Sand Dunes, "New Developments in Computational Fluid Dynamics (Notes on Numerical Fluid Mechanics and multidisciplinary design volume 90)", pp.165-174, Springer, Berlin, ISBN3-540-27407-3, 2005.12

◆研究内容

2005 年度の主な研究として, 1. 縦列砂丘など様々な砂丘形状の形成過程や動きの研究 (流れと砂の相互作用), 河川の流れの数値解析法の研究 (TVD 法の河川流れへの適用), 3. 高圧ガスパイプラインに関連した流れの研究 (多成分気体の流れとパイプラインの破断時における流体と構造物の連成析), 4. ジャイロ回転するナックルボールの挙動に関する流体力学的研究 (スポーツ工学関連の流れと軌道計算), 5. ダリウス風車や鉛直軸直線風車まわりの流れの研究 (風車関連の流れと性能計算) がある。5. は科学研究費基盤研究 B(2) (課題番号 16360478、研究代表者: 河村哲也) の補助を受けている。これらの研究は査読のある専門学術誌に掲載された。さらに、流体現象の数値シミュレーションとして環境科学への応用 (火災旋風, ビル風, ヒートアイランド等), 気象・海洋, 天体現象への応用 (雲の発生, 温帯低気圧の簡略化モデル, 木星の大気循環等), 生物・医学への応用 (魚の遊泳法, 生物対流, 血管内流れ等) などの研究も行った。

◆教育内容

2005 年度は授業としては、学部: 環境科学、大気・海洋科学概論、環境情報論、英文講読、博士前期課程ではシミュレーション科学特論、博士後期課程では環境情報論を受け持った。また、他大学では、数理手法Ⅱ (東京大学工学部)、数値計算の理論と実際 (千葉大学工学部)、計算数学および計算空気力学 (日本大学理工学研究科) の講義を行った。研究室における指導としては、博士後期課程 (複合領域科学専攻) 1 名の博士論文 (表題: Numerical Study of Pipe Burst and Decompression Process of Multicomponent Gas in Very High Pressured Natural Gas Pipeline)、博士前期課程 (数理・情報科学専攻) 13 名の修士論文の指導を行い、また情報科学科 4 年生 8 名、物理学科 2 名の卒業研究指導も行った。さらに、教育的な専門書籍 (朝倉書店刊、理工系の数学教室: (4) 微積分とベクトル解析 ISBN4-254-11624-1、(5) 線形代数と数値解析 ISBN4-254-11625-X) を執筆した。



◆Research Pursuits

The titles of the papers published to academic journals during 2005.4-2006.3 are as follows: 1.

Numerical study of the movement of the knuckleball with rifle spin (Natural Science Report of the Ochanomizu University Vol.56(2) p47-55, 2005), 2. Comparison of various numerical schemes for two-dimensional simulation of river flow (Theoretical and Applied Mechanics Vol.54 p203-209, 2005), 3. Two-dimensional coupled analysis of pipe burst and multi-component fluid of very high pressured natural gas pipeline (CFD Journal Vol.14(1), p76-83, 2005), 4. Numerical Study of the Formation of the Formation of Linear Dunes (Journal of Comput. Fluids Eng., Vol.74 No.1 p31-38, 2005), 5. Numerical Simulation and Visualization of the Flow around the Darius Wind Turbine (Journal of Comput. Fluids Eng. Vol.10 No.1, p45-50, 2005)

◆Educational Pursuits

Lectures given in Ochanomizu University during 2005.5-2006.3 are as follows: Under graduate course: 1. Environmental Science, 2. Introduction to atmospheric and ocean sciences, 3. Computer science for environmental science 4. Scientific English. Graduate course: 1. Advanced simulation sciences, 2. Advanced computer sciences for environmental sciences. Also following lectures are given in other universities: 1. Mathematical and computational method II (Tokyo University) 2. Numerical Analysis (Chiba University) 3. Computational Mathematics (Nihon University) 4. Computational Aerodynamics (Nihon University) One graduate student in doctoral course obtained doctor's degree (Title of thesis: Numerical Study of Pipe Burst and Decompression Process of Multicomponent Gas in Very High Pressured Natural Gas Pipeline) and thirteen graduate students in master course obtained master's degree under the supervision of Prof. Kawamura. Educational text book about mathematics are written which are concerned with (a) Calculus and vector analysis (b) Linear algebra and numerical analysis.

◆共同研究例

- ・ (株) ニコン 希薄気体・圧縮性気体の連成解析 (H16,17)
- ・ (株) ソニー CPUの冷却問題 (H16)
- ・ 鳥取県 鳥取砂丘の防砂林の影響評価 (H16)

◆共同研究例

- ・ 新型風車に関する提案

◆将来の研究計画・研究の展望

現在の研究の発展として、風による砂丘の移動問題に関しては乱流モデルの検討などモデルの精密化や現実の砂丘・砂漠への適用など、風車関連では開発した計算法の種々の風車への適用や計算結果から風車の改良法の提案、スポーツ工学関連ではゴルフボールなど他のボールまわりの流れの解析、河川のシミュレーションでは津波の遡上を視野に入れた水位の上昇・下降による浸水域の変化の取り扱いの検討などがあげられる。さらに、上記のことに必ずしもとらわれず、数値シミュレーションを理学・工学の諸問題へ幅広く応用したい。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・ 数値流体力学に関連するすべてのテーマ
- ・ 環境科学 (流体力学に関連するもの)
- ・ 風力エネルギー

◆受験生等へのメッセージ

近年のコンピュータの長足の進歩により、数値シミュレーションは、理論と実験に並ぶ第3の研究方法として限らない可能性を我々にもたらしている。数値シミュレーションは現象をなるべく正確に表す計算モデルをつくり、コンピュータで計算して結果を解析する。したがって、最大の利点としてどんな環境でも (コンピュータの中で) つくり出せることがあげられる。たとえば、スケールでいえば小は原子や分子など量子力学的な現象から大は天体など宇宙規模の現象も再現でき、また超高温、超高压の現象や逆に超低温、超低压の現象も解析できる。当研究室では、主に流体 (気体と液体の総称) の力学現象について、理学・工学に現われる諸問題に対し、数値シミュレーションを用いた解析を行っている。さらに、現在は環境問題が切実になってきているため、数値シミュレーションの環境科学や生活科学への応用にも関心をもって研究している。

教員名	菅 聡子 (KAN Satoko)
所 属	人間文化研究科国際日本学専攻
学 位	博士(人文科学) (2000 お茶の水女子大学)「尾崎紅葉・樋口一葉の文学—〈近代〉をめぐる物語—」
職 名	助教授
URL/E-mail	kan-s@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

近現代日本文学 / 女性表現 / ジェンダー / メディア / 表象分析

◆主要業績

- ・編集『樋口一葉 小説集』(ちくま文庫、平成 17 年 10 月、416pp)
- ・「聖なる愚者は〈父の言葉〉を超えられるか—鹿島田真希論」(「群像」平成17年10月、pp46-60)
- ・「近代の〈遊女〉断想—国家のための女たち—」(「立教大学日本学研究所年報」平成 17 年 3 月、pp49-58)

◆研究内容

近代日本文学を研究対象とする。とくに、明治から現代にいたるまでの女性表現について、ジェンダー批評ならびに国民国家成立のプロセスとの連関、女性の国民化とメディアの関係などについて考察する。また、サブカルチャーを含めた出版文化において、女性がどのように表象されているか、その表象の生成と受容、再生産、消費について論じる。

2005 年においては、とくに、戦後文学史における女性表現の位置を再考すべく、集英社『田辺聖子全集』の編集に携わり、その解説を執筆するとともに、『別冊解釈と鑑賞 田辺聖子論』(至文堂、刊行は 2006 年)に着手した。一方で、文芸誌『文学界』の創作月評を下半期担当し、現代文学批評を行った。その一環として、現代女性作家・鹿島田真希について、現在のサブカルチャー等の問題と関連させつつ論じた。

◆教育内容

学部教育においては、文学史ならびに近現代日本文学においてカノンのとされる作品群について、現在的な批評の視点から教授する。また、講義科目においてもディスカッション形式を採用し、学生の自主性ならびに自己表出能力の育成を目論む。ゼミにおいては、研究者育成のもっとも基礎となる部分を養うべく、調査・分析・考察・発表・資料作成について、基本的な能力を育てる。大学院教育においては、専門性を重視し、研究者の育成を前提とした高度な授業内容を保持する。具体的には、2005 年においては、戦争とジェンダーをゼミの主題とし、それぞれの個人研究の成果についての発表に加え、上記のテーマについて、壺井栄『二十四の瞳』林芙美子『浮雲』等を分析対象として、講義をおこなった。

◆将来の研究計画・研究の展望

女性表現と国民国家の共犯関係ならびに背戻について、「文学的感傷」の機制を視座として、具体的な作品を対象に論じる。対象とするテキストは明治～昭和の期間のものだが、問題の設定は現在的なもので、サブカルチャー等を含めた、日本の現在にコミットする考察になる。（詳細は未公開）

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

・サブカルチャー、とくに女性たちの手になる文化についての比較研究

◆受験生等へのメッセージ

文学研究は、ともすれば現実社会とコミットしていないと考えられがちだが、それは誤りである。私たちは、つねに「物語」のなかを生き、ときに、より「大きな物語」による抑圧を受ける。そのような抑圧にあらがうために、私たちは「物語」自身のみならず、その「物語」を発信・受容するシステムや、「物語」のコンテクストを読み解く力を持たなければならない。そのような広い意味でのリテラシーを得ることができるのは、文学研究の分野である。そもそも、現在の私たちをとりまき脅かす「大きな物語」の原型は、すべて過去にすでに語られたものなのだ。そのようなアクチュアルな学問の形として、文学研究はある。

教員名	神田 由築 (KANDA Yutsuki)
所 属	文教育学部人文科学科比較歴史学講座
学 位	博士（文学）（1998、東京大学大学院人文社会系研究科）
職 名	助教授
URL/E-mail	

◆研究キーワード

芸能 / 興行 / 文化 / 近世 / 都市

◆主要業績

総数 (3) 件

- ・「文化の大衆化」『日本史講座7』東京大学出版会
- ・「中山歌舞伎」国立歴史民俗博物館
- ・「中山歌舞伎の歴史」国立歴史民俗博物館

◆研究内容

2005年度は、大きく二つの研究を行った。まず一つは、遊芸文化の展開について考察し、その成果を「文化の大衆化」(『日本史講座7』)にまとめた。まず巨大都市における遊芸の拠点であった寄席の役割を問い直した。また、阿波・淡路(徳島・兵庫県)における浄瑠璃文化を素材に、遊芸文化の地方への浸透の様相を検討した。これらの分析を通じて、寛政・享和期(1789-1804)に文化史上の様々な転機があったことが確認された。二つめは、国立歴史民俗博物館の常設展示リニューアルにともなう、調査および展示・研究用のビデオ制作にたずさわった。香川県小豆島中山歌舞伎の調査の結果、小豆島での歌舞伎の存続には「振付師」と呼ばれる、演技指導や本番の差配などさまざまな働きを行う人々が大きな影響を与えていたことなどがわかった。それらの成果を盛り込み、研究用ビデオ「中山歌舞伎」、展示用ビデオ「中山歌舞伎の歴史」のシナリオを作成した。

◆教育内容

学部では以下の6つの授業を担当した。「基礎ゼミⅠ」では、「歌舞伎と民衆世界」をテーマに、歌舞伎に描かれた民衆世界を探るために、受講者全員に発表をしてもらった。「日本近世史料演習」では、『静岡県史』をテキストに受講者全員の発表を通じて、日本近世史の研究に必要な史料読解力等を身に付けてもらった。「日本文化史概論」では、源義経をめぐる芸能・文学などを横軸にしながら、日本文化史の縦の流れを概観した。「日本近世近代文化史」では、近世の浄瑠璃太夫が残した日記をもとに、江戸や大坂の都市社会と文化について紹介した。また他教員と分担して、史跡・遺物見学のフィールドワークを行う「比較家族史(日本)」、古今東西の踊りの文化を紹介する「比較社会史」を担当した。大学院では、院生が研究成果を発表する「日本政治経済史演習」「日本政治経済史特論」と、歌舞伎・文楽などの知識を養うための演習「伝統芸能文化論演習」を担当した。

◆将来の研究計画・研究の展望

これまで近世芸能の「商品」的局面に注目してきたが、今後、非「商品」的局面にも目を向けてみたい。前者は具体的にはプロの芸能者による「興行」、後者は素人による芸能や稽古文化ということになるが、後者に属する農村歌舞伎（地芝居）や都市における遊芸文化（たとえば音曲系の芸能）に注目することで、近世芸能の享受者をより拡大してとらえることができ、近世文化の多様な側面を見ることができるであろう。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・近世文学に社会的背景をみるなど文学との共同研究
- ・祭礼における社会のありかたなど民俗学との共同研究
- ・芸能をテーマにした音楽学・服飾史などとの共同研究

◆受験生等へのメッセージ

とにかく「実物」に接することを大切にしてください。「実物」の古文書に触れ、「実物」の文化的遺物を観て、歴史や文化について考えること。もちろん、なかには長い年月のあいだに姿を変えたものもあるでしょうから、そこから直接、歴史的事実が読みとれるとはかぎりません。けれども、「実物」は私たちに訴える何か不思議な力を秘めています。それから、古文書を読んだりモノを観たりするだけでなく、その古文書やモノが作成あるいは伝承された「現場」に行ってみること。やはり「現場」に立つことで、机の上では見えないものが見えたり、そこでしか得られない貴重な情報を入手することができます。まずは自分の目で確かめ、考える。そこから、現代社会を生き抜くに必要な批判能力が生まれると思います。

教員名	菅野 健 (KANNO Ken)
所 属	文教育学部言語文化学科英語圏・欧州言語文化講座
学 位	文学修士 (1975 東京大学)
職 名	助教授
URL/E-mail	

◆研究キーワード

ドイツ語 / ドイツ文学 / トーマス・マン

◆研究内容

お茶の水女子大学には、専門のドイツ文学のコースがないため、(現在ドイツ語の専任はひとり) コア科目としてのドイツ語を全学部の学生を対象としていかに丁寧にかつ効率的に教えるかということを、常に一方の研究課題にせざるをえません。お茶大生のために長年の研究成果として『改訂・ドイツ語の文法』(2002年第三書房刊)を作成した後は、さらにどこをどうすればさらに良くなるかを考え続けています。この教科書は何よりもまずお茶大生のことを念頭において作成したものではありますが、他大学でも好評で、これまで全国のさまざまな大学で使われています。

ドイツ文学の研究対象としては、ゲーテ、シラー、ショーペンハウアー、ヴァーグナー、ニーチェなどの影響を多大に受けた、20世紀最大の作家のひとりトーマス・マン(1875～1955)を主たる対象として考察を続けています。

◆教育内容

「ドイツ語初級」は文Aと理Aというクラスを「文法」と「演習」の週2コマずつ担当し、一年間でドイツ語の基本を、しかもかなり高度なところまで教育いたしました。週2コマの授業で学生との親近感も強くなり、教育の成果は独検合格などにも現れております。

「ドイツ語中級」は文教育学部対象のクラスで『ドイツ・ことばと文化—やさしく読めるドイツ文化史—』というテキストを使い、さまざまな観点からドイツ文化について考察を加えながら、「初級」で学んだドイツ語の知識を着実なものにしていくことを目標としました。

「ドイツ語上級」では『そもそもドイツとは?』というヴァイツゼッカーの論文を丁寧に読みつつ、ドイツとはいかなる国で、ドイツ人とはいかなる民族なのか、一方ではドイツ語の知識を深めながら、考察しました。

専門科目の「独文学演習」(大学院は「近代独文学演習」)では、トーマス・マンの『混乱と若い悩み』を一字一句おろそかにせず精読しながら、トーマス・マンの問題意識、時代の精神状況などをも検討しました。

◆将来の研究計画・研究の展望

最高レベルのドイツ語教科書『改訂・ドイツ語の文法』をさらによりよきものにしていきたいと考えています。

ドイツ文学の分野ではルター、レッシング、ゲーテ、シラー、ショーペンハウアー、ニーチェ、ヴァーグナーなどの精神の流れの中で、トーマス・マン（1875～1955）をとらえたいと常に考えています。

現代ドイツ文学にも大きな影響を与え、さらに日本の作家三島由紀夫・辻邦生・北杜夫・村上春樹などへの影響も論じられるトーマス・マンを主たる考察の対象にし続けたいと思います。

◆受験生等へのメッセージ

残念ながら専門のコースはないのですが、ドイツ語・ドイツ文学を、広く豊かな世界観・人生観を得るべく学びたい人はどうぞ入学してください。

ドイツ語の論理的構造をしっかりと学ぶことは、どのような分野を専攻するにせよ、その専攻分野の認識を深めることに役立って行くと思います。ドイツ語の基本構造を理解・分析する能力を高めていくことは、専門分野をより深く理解・分析する能力を高めることと同時並行的に起こっていくことでしょう。

教員名	刑部 育子 (GYOBU Ikuko)
所 属	生活科学部人間生活学科発達臨床心理学講座
学 位	
職 名	助教授
URL/E-mail	gyobu.ikuko@ocha.ac.jp

◆研究キーワード

集団における子どもの発達 / 保育デザイン / アートと学び

◆主要業績

総数 (9) 件

- ・刑部育子 (2006) 文化的起源としての共感性. 幼児の教育, Vol. 105 (1), フレーベル館, pp. 32-40.
- ・刑部育子 (2006) 動くことと見ることの同時性. 日本デザイン学会 Vol.13 pp. 36-39.
- ・岩田恵子・刑部育子 (2005) 遊びの意義—子どもの発達と遊び方—.小児科 vol. 46, No. 10, pp. 1774-1778.

◆研究内容

(1) 乳児の共感性の発達研究を進めました。2005年9月にはスペインで行われた「文化と活動研究の国際学術会議 2005」に参加し、共感性は人間の文化や学習の起源として重要であることを発表しました (日本学術振興会・国際学会等派遣事業による)。

(2) また、「実践のデザイン過程を記述するフィールド心理学における方法論の開発」研究を実施中です。デザインについては台湾国立交通大学と公立はこだて未来大学において行われた国際ワークショップ「シナリオ・エクスチェンジプロジェクト」に参加し、デザイン手法の開発を進めています。(3) このようなデザインの手法の応用として、お茶の水女子大学附属いずみナーサリーの「メッセージブック (パンフレット)」をいずみナーサリーの保育者と武蔵野美術大学の学生さんとともに共同製作、デザインしました。(4) さらに、保育フィールドに有効な観察記録ツール開発を開始しました。

◆教育内容

平成 17 年度は以下の通り。「基礎ゼミ (古典)」は「教育の過程」(ブルーナー著)の購読、「心理臨床実習」では教育現場におけるビデオ分析手法の演習、「人間関係学」では子ども同士の関係性について心理学的視点から講義、「児童学概論」では「子どもと絵本」をテーマとした講義、「保育臨床学」は保育に関わる様々な問題を検討、「発達臨床基礎論 I」では臨床発達心理学を概観、「発達過程論」では文化心理学的観点から発達過程について考察、「保育臨床講義講読」はケア論をテーマとした購読と保育事例の検討、「保育臨床学実習」は附属幼稚園、附属いずみナーサリーに観察、記録の検討、「発達臨床学特別演習」は幼・小・中学校などでのインターンシップ、「発達臨床論文演習 I・II」は卒論指導。平成 17 年度に提出された卒論のタイトルは「異なるものがともに生きる空間—子どもと高齢者が織り成す世界の検討」、「誰をケアする子育て支援」「保育現場における子どもの移行対象」、「特別支援教育における児童の個別に応じた教材とその実施」です。

◆特許

- ・保育観察記録ツールの実用化

◆将来の研究計画・研究の展望

- ・アートにおける学び（附属小学校授業「アート」と連携した実践的研究および幼稚園の表現活動の検討）
- ・保育観察記録ツールの開発

◆受験生等へのメッセージ

お茶の水女子大学敷地内には、日本で最も歴史ある附属幼稚園があります。また、国立大学の中で附属校として初めての保育所、いずみナーサリーが大学と同じ敷地内に設置されました。乳幼児期の教育プログラムを開発するため、大学と幼稚園・保育所が連携した研究プロジェクトが進行中です。このような学習環境が備わる中で実践的にそして専門的な保育・子ども理解・発達を学ぶことができます。

教員名	清本 正人 (KIYOMOTO Masato)
所 属	湾岸生物教育研究センター
学 位	博士 (理学) (1992 岡山大学)
職 名	助教授
URL/E-mail	http://marine.bio.ocha.ac.jp/kiyomoto@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

棘皮動物 / 細胞分化 / バイオミネラリゼーション / 重力環境 / 化学物質による形態異常

◆主要業績

総数 (1) 件

・ Imai M, Kiyomoto M, Izumi-Kurotani A, and Eguchi H
The effect of gravity on the spicule formation in the culture of sea urchin micromeres.
Space Utilization Research, 21,198-200,2005,学術雑誌

◆研究内容

ウニの発生や生殖について調べています。金属イオンや化学物質の中には、消化管の形成に影響を与え、形態の異常を引き起こすものがあります。女性ホルモンであるエストロゲンにより、消化管が外に飛び出す外原腸胚という形態異常が日本のウニでも引き起こされました。その作用は、エストロゲンの働きを抑える薬品により、押さえられました。また、エストロゲンの卵黄タンパク質の合成への影響を調べたところ、脊椎動物で見られるような合成の大幅な増加はみられませんでした。発生早い段階では、その合成が逆に押さえられることが分かりました。これらの作用の仕組みを解明することで、エストロゲンのようなステロイドが無脊椎動物で果たす役割を明らかにしようとしています。また、宇宙環境では骨密度が減少しますが、ウニ胚の骨片を作る細胞を培養したものを使って、重力環境が無脊椎動物の骨形成にも影響を与えるかを調べています。

◆教育内容

動物系統学、動物発生学についての授業、実習を担当しています。動物の系統学の授業では、地球上に存在する主な動物門の特徴を解説し、体制の特徴を系統進化の順にたどります。動物の発生の授業では、一つの細胞である受精卵から、動物の体が出来上がるまでの形態の変化と、それを引き起こすメカニズムを、組織や細胞の相互作用や、シグナルを伝達する分子や遺伝子発現まで、現在までに明らかにされていることを解説します。実習は、臨海実験所 (湾岸生物教育研究センター、千葉県館山市) で行っています。動物の系統学の実習では、潮間帯での磯採集やプランクトン採集により、自分で集めた材料を調べ、無脊椎動物の多様性の実際を理解します。動物の発生の実習では、棘皮動物の受精、初期発生について、胚操作や免疫組織染色等の実験を行います。さらに、水中での生物の観察調査を可能にするダイビングの実習も担当しています。

◆Research Pursuits

I am studying on the development and reproduction of echinoids. Some of metal ions and chemicals have a effect on the morphogenesis of digestive tract. Estrogen, one of sex hormone in vertebrate, induced exogastrula in which the digestive tract project to the outside. This effect of estrogen was suppressed by the anti-estrogen chemical. The effect of estrogen on the production of the major yolk protein was also examined. A drastic increase of yolk protein like vertebrate did not detected but a suppressive effect was observed in very early developmental stage. The role of steroids in invertebrate will be known by further examination of the mechanism how estrogen make these effects. I also studying the effect of gravity on the biomineralization using cultured skeletogenic cells of sea urchin.

◆Educational Pursuits

I teach the lectures and the experimental courses on the systematic zoology and developmental biology. In the lecture of systematic zoology, the characters of body plan of each phylum are expounded in the order of phylogeny. In the lecture of developmental biology, the morphological changes from a fertilized egg to the complete animal body are explained and the controlling mechanism by a interaction between tissues and cells and a signaling pathway of molecules and genes are expounded. Each laboratory courses are in marine laboratory (Marine and Coastal Research Center, Tateyama). In the laboratory course of systematic zoology, students go to sea shore to collect animals and take a boat to collect marine plankton by net. They understand the real animal diversity by examining animals collected by themselves. In the laboratory course of developmental biology, embryo manipulation and immunostaining on the fertilization and early development are performed. I also teach a laboratory course of diving for the observation and research of marine animals.

◆特許

- ・ウニ類の産卵期調節
- ・ヒトデ類の産卵期調節

◆将来の研究計画・研究の展望

ウニ胚の単離割球の培養技術を使って、形態形成に重要な役割を担っている細胞間相互作用と細胞内でのシグナル伝達を明らかにしたい。そして、化学物質や重力などが、どのステップにどのような影響を与えるかを明らかにし、それら環境要因の生物への作用を調べる生物検定の実験系にウニを利用できるようにしたい。さらに、棘皮動物等の生殖を調節する仕組みを明らかにして、実験材料として安定に供給することを可能にしたい。

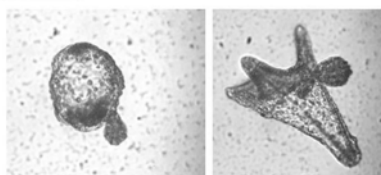
◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・海産動物の成熟調節
- ・海産動物の胚を使った化学物質等の生物検定

◆受験生等へのメッセージ

生命の生まれた海には、今でも地上にくらべてとても多くの生物のグループが生息しています。本学の臨海実験所（湾岸生物教育研究センター、千葉県館山市）では、海のフィールドに飛び出して、無脊椎動物の多様な姿を見て触れられるカリキュラムが用意されています。もし、あなたに意欲があれば、水の中の世界までも、、、海辺の施設で、動物の体の作り（ボディープラン）やその形成の過程（個体発生）を調べて、何億年分の進化に思いをめぐらすのはいかがですか？

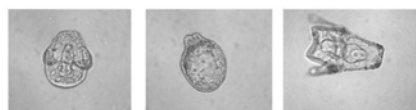
外原腸胚



バフンウニ EER10μMで12~48h処理

個体によって原腸胚の時点で発生が止まるものも、プルテウス幼生の形にまで発生するものもある

ICI182,780処理胚



ICI182,780 30μM + EER10μM

EER10μM

Control

外原腸胚の形成は抑えられているため、EERはエストロゲンレセプターを介して幼生に作用し、外原腸胚を引き起こしている可能性がある。

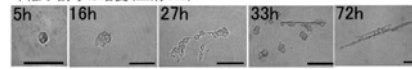
胚と単離小割球の培養による骨片形成過程

通常胚発生過程



Bar = 100μm

単離小割球の培養(血清4%)



培養開始 分裂 遊走 骨片形成 伸長
Bar = 10μm(5h), 50μm(16h~)

教員名	金城 徳幸 (KINJO Noriyuki)
所 属	ライフワールド・ウオッチセンター
学 位	理学博士
職 名	教授
URL/E-mail	kinjo.noriyuki@ocha.ac.jp

◆研究キーワード

技術革新／ 持続可能性

◆研究内容

21 世紀の潮流である持続可能な情報化社会と日本の国際貢献の重要性を考慮し、筆者が在籍した日立グループでの研究開発を軸に、日本が先行した機能性材料における技術革新の典型例として以下の 2 テーマの知識基盤を構築する。

- (1) 排煙脱硝触媒技術：大型かつ信頼性が要求される火力発電分野に初めて実用化された酸化チタン系脱硝触媒の開発経緯とその後の展開、および今後の期待。
- (2) 半導体用有機材料技術：半導体の高集積化・多層化の鍵である絶縁膜に適用されたポリイミドの開発経緯とその後のマイクロエレクトロニクス分野における有機材料の利用拡大。

企業での研究開発経験と担当者や本特定領域研究関係者の協力を得ながら、貴重な経験を蒐集・分析・解釈し、日本の新たな技術開発や新産業育成につながる「イノベーションの効率化」をいかに成し遂げて行くべきかを提言したい。なお、本研究は大阪工業大学の宮寺博教授との共同研究であり、『排煙脱硝触媒技術』を宮寺が担当し、筆者は『半導体用有機材料』を担当する。なお、本研究は、文部科学省の科学研究費補助金を 2006 年度より頂くことになった。

◆教育内容

東工大の学部 3 年生対象に『企業と倫理』を講義した。昨今の企業不祥事の例を挙げ、株式会社の本質と資本主義社会についてその歴史を説明し、現代では、不祥事を起こさないために、企業は何をしようとしているかを講義した。「エリカの話」とナチにユダヤ人を管理するコンピュータを売って保守管理して利益を上げた IBM を例に挙げ、同様の背信的な事件が現代でも起こっていることを指摘した。背信行為を避けるのはむろんのこと、企業の社会的責任を議論する最近話題の「CSR」についても解説した。また、企業のような組織の問題とそこに所属する個人の問題と切り離す必要性を説明し、個人の問題としては、科学者倫理、技術者倫理について説明した。

ノーベル賞を貰ったミリカンの油滴の実験は弟子の実験の盗用であった事実を紹介し、論文の捏造や剽窃との問題などを、科学者倫理として講義した。

講義の目的は、個人個人がしっかりと自らの倫理観を持つことが倫理的な社会構築の第一歩であることを認識してもらう事である。

◆共同研究例

2004 年より WBCSD(World Business Council for Sustainable Development：持続可能な発展の為の世界経済人会議)の LD(Liaison Delegate)を勤めている。2 年半に亘る議論の末、本年度より「化学産業の持続可能性」を論議するプロジェクトがスタートした。本プロジェクトには、私が所属していた日立グループ他、世界の化学企業 11 社が参加している。

◆将来の研究計画・研究の展望

研究開発には次のような定型的なステップがある。研究⇒開発⇒事業化⇒産業化⇒製品の終焉。各ステップにおいて技術革新上の固有の難しい課題が存在する。その難しさを象徴するために、「魔の川」「死の谷」「ダーウィンの海」「三途の川」などの言葉が用いられている。各ステップで、技術革新の質が異なるとは言え、技術革新の発想には或る種の類似性があるというのが私の考えである。技術革新のコンテキストを理解し、新技術誕生の必然性をパターン化あるいは類型化して整理すれば、今後の技術革新を効率化するテキストになるのではないかと考えている。歴史分野で用いられている『比較研究法』の研究手法を科学史、技術史に取り入れて分析し、技術革新のパターンの体系化を構築したい。化学史学会、SCE・net の会員メンバーとの共同研究である。

教員名	窪添 慶文 (KUBOZOE Yoshifumi)
所 属	文教育学部人文科学科形象分析学講座
学 位	文学修士(1968)
職 名	教授
URL/E-mail	kubo@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

胡漢融合 / 墓誌 / 竹簡

◆主要業績

総数 (2) 件

- ・ 日本的魏晉南北朝官僚制研究
- ・ 北魏的 陽鄭氏

◆研究内容

3 方面の研究を行った。1 つは魏晉南北朝とりわけ北魏の官僚制および官僚となった人々に関わる研究である。公刊された北魏官僚制研究史のまとめは、2003 年の著書の序章として執筆したもので、05 年度の業績ではないが、北京大学歴史学部の雑誌に翻訳掲載された。北魏で有力な官僚家となった 陽鄭氏の動向を詳細に追求した研究は、官僚制度の理解の上に立って、魏晉南北朝時代を特色づける貴族のあり方に目を向けた論文。05 年夏に上海復旦大学の記念シンポジウムで発表した。予定されている正規の論文集は未刊行である。2 つは、石刻研究である。北魏の中期以降、大量に詳細な墓誌が造られるようになったが、歴史研究にいかに取り込むか、再検討を開始した。成果は 2, 3 年度に出せるはず。3 つは呉簡研究である。04 年度に続き、呉簡を収蔵する長沙に赴き、呉簡を調査するとともに、北京大学での研究討論会に参加した。また、研究の一部を中国出土資料学会において報告した。

◆教育内容

学部教育：1 年生には隔年で東洋史概説と東洋史入門講読を担当している。概説では中国の殷周時代から唐末までの社会の変化の大略を理解させるように努めている。一部に日本との関係を交える。入門講読は年度により内容を異にするが、中国史に関する比較的平易な著書を用い、通説を打ち破る新たな考えがどう組み立てられているか、あるいは史料批判がなぜ必要かを理解させるようにしている。2 年生には、中国史研究に多く用いられる各種の史料を毎週 1 つずつ扱い、それら史料の性格を理解させるとともに、学生に分担発表させることにより、中国史の研究方法の基本を学ばせる。3、4 年生の演習は資治通鑑を用い、漢文読解力の養成と、関係項目調べを通じた中国史研究方法を学ばせる。もちろん論文作成の指導を含む。

大学院教育：基本的には、各人の研究発表形式で、参加者がそれに対する質疑を行い、教員が指導を行う形式で進行させる。必要に応じて、石刻史料などの史料研究を取り入れる。

◆共同研究例

- ・ 呉簡研究および石刻資料研究

◆将来の研究計画・研究の展望

本学における研究期間は 06 年度で終了する。その後の研究がいかなる形で継続するか、現段階では不明であるが、研究員として籍を置いている東洋文庫を利用する研究遂行を考えている。研究の方向は、中国北朝期の支配階層の動向、および胡漢融合の実態を追求すること、墓誌など石刻資料の歴史研究への取り込みについて明確な指針を得ること、続々と公表される呉簡を用いた三国時代の地方官僚体制の解明を中心とすることになるだろう。

◆受験生等へのメッセージ

受験生が入学した段階では退職して不在であるので、一般的なことしか述べることはできない。大学における歴史の勉強は高校までと異なることは皆さん承知しているはずである。年号や出来事をひとつひとつ記憶するといった苦痛は軽減される。これまでの研究で明らかになっていることを学ぶことも楽しいであろうが、自分で史料を探し、史料を読み、自分なりの歴史解釈を行うことは何よりも楽しいと私は考える。真剣に歴史研究に取り組む、その過程で身についた態度こそが、社会に出ても役立つのだと私は考えている。

教員名	熊谷 圭知 (KUMAGAI Keichi)
所 属	文教育学部人文科学科地理学講座
学 位	社会学修士 (1981 一橋大学)
職 名	教授
URL/E-mail	kumagai@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

開発 / ジェンダー / パプアニューギニア / ローカル / (人口) 移動

◆主要業績

総数 (3) 件

・熊谷圭知ほか編『ジェンダーの視点から開発の「場所」を考える——開発実践者・研究者のコラボレーションをめざして——』(若手支援のためのワークショップ報告書) (F - G E N S publication series No. 10) 2005 年 9 月、156p.

・熊谷圭知『『ジェンダーと開発』における男性の位置』F - G E N S ジャーナル (お茶の水女子大学 21 世紀 COE プログラム「ジェンダー研究のフロンティア」) 5、2006 年 3 月 : pp.337 - 346.

・熊谷圭知「グローバル化の中のオランダ移民社会——モルッカ移民に焦点をあてて——」、山本健児編『グローバリゼーションと EU 統合への文化的対応に関する EU 主要都市比較研究』(科研費研究成果報告書)、2005 年 5 月、pp.178-186.

◆研究内容

1. ローカル・センシティブな「開発とジェンダー」研究の構築に関する研究

2005 年 3 月 28 日～8 月 9 日まで、イギリスのサセックス大学開発学研究所(Institute of Development Studies)に客員研究員として滞在し、上記のテーマに関して、研究所スタッフとの意見交換、研究発表、文献資料の収集などを行なった。

2. パプアニューギニアにおける開発とジェンダーに関わる調査研究

2005 年 2 月と 8 月に、パプアニューギニアを訪問し、首都のポートモレスビーで、長年調査を続けている都市移住者集落の社会環境、路上販売などのインフォーマル・セクターの調査を、住民からの聴き取りを交えて行なった。調査成果の一部は、熊谷が主宰する COE のプロジェクト研究会 (10 月) と、日本オセアニア学会 (3 月) にて報告した。

1.2 の研究成果を、ジェンダーと開発における男性／性という視点から、論文にまとめたのが、熊谷 (2006) である。

◆教育内容

学部で授業では、「地域研究」「人間と空間」「グローバル文化学総論」「外国地誌演習」などの科目を担当した。その中では、ローカルな空間／地域がけって固定的なものではなく、常に外部との関わりの中で変化してきたし、現在も変化し続けていることを、具体的な事例を通じて示した。わたしたちが、地域の特質や文化の固有性としてイメージしているものが歴史的に構築されていることは、多くの学生にとって、新鮮な衝撃をもたらすものであったようだ。大学院の授業では、第三世界の開発論を再考するというテーマを掲げ、都市のスラムやインフォーマル・セクター、ジェンダー、参加型開発などのテーマを、新たな批判的な視点で取り上げた英語論文を、私が独自にリストアップして、検討した。院生たちの既成概念を崩すような刺激的な問題提起に触発されて、活発な議論を導き出すことができた。私が主宰する COE のプロジェクト (ローカル・センシティブな「開発とジェンダー」政策の構築) の研究会も、貴重な教育の場として活用している。学部で授業では、「地域研究」「人間と空間」「グローバル文化学総論」「外国地誌演習」などの科目を担当した。その中では、ローカルな空間／地域がけって固定的なものではなく、常に外部との関わりの中で変化してきたし、現在も変化し続けていることを、具体的な事例を通じて示した。わたしたちが、地域の特質や文化の固有性としてイメージしているものが歴史的に構築されていることは、多くの学生にとって、新鮮な衝撃をもたらすものであったようだ。大学院の授業では、第三世界の開発論を再考するというテーマを掲げ、都市のスラムやインフォーマル・セクター、ジェンダー、参加型開発などのテーマを、新たな批判的な視点で取り上げた英語論文を、私が独自にリストアップして、検討した。院生たちの既成概念を崩すような刺激的な問題提起に触発されて、活発な議論を導き出すことができた。私が主宰する COE のプロジェクト (ローカル・センシティブな「開発とジェンダー」政策の構築) の研究会も、貴重な教育の場として活用している。

◆将来の研究計画・研究の展望

グローバルに普遍的な価値を持つものとして捉えられてきた「開発とジェンダー」というテーマを、ローカルなコンテキストを組み込むものとして、フィールドワークに基づきながら再構築することが、主宰する COE の研究プロジェクト、科研費の研究会を通じての、当面の課題である。同時に、1979 年以来続けてきた、パプアニューギニアのフィールドワークに基づく地域研究を、一冊の本にまとめ、多くの読者に、グローバル化の中で変貌し呻吟するパプアニューギニアの人々のリアリティを伝えたいと考えている。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

・発展途上国都市における生活環境の改善と社会開発

◆受験生等へのメッセージ

私がパプアニューギニアと付き合い始めて、もう 27 年になります。都市周縁部の掘っ立て小屋集落や、奥地の村をフィールドとしながら、人々との付き合いを重ねるうちに、地域研究と開発実践の二つの領域を往還するようになりました。途上国を対象とする調査研究には、冷静な頭脳と熱い心、理解と共感の双方が必要です。西欧中心的な概念や理論だけに基づいて、研究対象を他者として捉え、分析するだけでは、先進国が途上国を支配する力が強まるだけで、相互の格差や距離は縮まらないように思います。お互いの間に横たわる違いをきちんと見据え、その差異を大切にしながら、そこにとどまらない交流や協働の可能性を探ろうとする、そんな学生を育てたいと思っています。



教員名	栗原 尚子 (KURHIHARA Hisako)
所 属	文教育学部人文科学科形象分析学講座
学 位	文学修士 (1977 法政大学)
職 名	教授
URL/E-mail	Kurihara@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

社会地理学 / スペイン地中海地域 / 近代の都市計画 / 国際的労働力移動 / 近代地理学の形成

◆主要業績

- ・ Institutional Establishment of Geography as a Subject at The Tokyo Women's High Normal School, in "FOLK'S GAZE TO THE GEOGRAPHICAL ENVIRONMENT IN JAPAN", Japanese Contribution to the History of Geographical Thought(5), in Printting.
- ・ (資料) スペインの近年における移民労働力移動 (1995-2003): バルセロナ市の動向を中心に、『グローバリゼーションと EU 統合への文化的対応に関する EU 主要都市比較研究』 日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 B pp187-203

◆共同研究例

- ・一橋大学地中海研究会において地中海正解の地域研究を共同で行っている。

◆将来の研究計画・研究の展望

- 1) スペイン地中海世界の地域研究。これまでの研究に接続するようにバルセロナ市の1930年代以降の都市形成に関する研究。
- 2) バルセロナ市における移民労働力の問題について、海外調査の結果を踏まえて、その実態について、移民労働者数の推移、居住を見られるセグレーションなどに焦点を当ててまとめ、フルペーパーにする。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・ヨーロッパ地中海世界の地域研究

◆受験生等へのメッセージ

学部：何事に対しても積極的に取り組み意欲に満ちた学生さんに期待します。文教育学部は、多様な研究テーマに取り組む研究者に恵まれているので、学生さんの関心に対応できると思います。個人的には、地域研究に関心を持ってくれることを希望します。世界は多様です。自らに価値観にとらわれずに、多角的な視点を涵養するのにも地域研究は役立つと思います。

大学院：それぞれの学界で通用するようなレベルの研究を期待します。大学院は、それぞれのライフスタイルにあわせて、長い目で自ら研究することを見つかる道と考えます。

教員名	栗山 淳子 (KURIYAMA Junko)
所 属	総合情報処理センター
学 位	修士 (数学) (1998 筑波大学)
職 名	アソシエイトフェロー
URL/E-mail	http://www.cc.ocha.ac.jp/ / kuriyama.junko@ocha.ac.jp

◆研究キーワード

数学基礎論

◆教育内容

総合情報処理センターに絶えず訪れる学生の質問や相談に、範囲を授業内容等に限定せず幅広く対応している。コンピュータ端末室でのオープンアワーも受け持つ (週 6 時間)。
 学生が理解し納得して進められるよう、それぞれのレベルと目的に合った指導を行うよう心がけている。

◆受験生等へのメッセージ

和気あいあいとした雰囲気の中で，共に学びましょう。

教員名	小風 秀雅 (KOKAZE Hidemasa)
所 属	人間文化研究科国際日本学専攻
学 位	文学博士 (1995 東京大学)
職 名	教授
URL/E-mail	kokaze@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

地域学 / 近代世界システム / 東アジア近代化 / 交通史 / 企業資料論

◆主要業績

総数 (12) 件

- ・小風秀雅・荒野泰典・貴志俊彦氏と共編著書『「東アジア」の時代性』溪水社、2005年6月、全242頁
- ・小風秀雅編著書『湘南の誕生』藤沢市教育委員会、2005年3月、全292頁
- ・「開港の世界史的意義」(『都市、文化、社会～市民文化形成支援研究序説～』Vol.2 (横浜市立大学), 17-25頁

◆研究内容

研究の柱は以下の4点である。

- (1) 19・20世紀における世界システムと日本 (欧米・アジアとの関係の中で国際的視野から日本の近代化を考察する)
- (2) 地域を歴史学・地理学・文化・人類学・社会学などの様々な視点から総合的に研究し、総合学としての地域学を構築する
- (3) 歴史社会システムを変化させる要因としての交通・情報の役割を、特に海運を中心に研究する
- (4) 近代の企業資料を中心とした企業・団体資料に関するアーカイブズ研究

1, 3については、従来の近代日本の国際化が日本史のなかからだけ論じられていたのに対して、海外の視点を導入して、日本の近代を世界環境のなかで比較史的に論ずることにより、日本史サイドからでは見えなかった種々の全くあらたな特徴を明らかにした点に特徴がある。2については、東アジアの地域史的研究から発展して、「湘南学」の立ち上げに着手している。

◆教育内容

学部では、日本近現代史全般に関わる講義・演習を行い、大学院においては、日本の近代化に関する研究を、海外の視点を導入して、世界環境のなかで比較史的に取り上げた演習を実施している。こうした方向は、海外の日本学との交流に刺激を受けたものであり、本学の博士後期課程の国際日本学専攻および比較日本学研究センターにおけるシンポジウム活動や国際研究交流活動の一環として展開しており、日本史専攻の学生が、日本研究を通じて、国際交流事業に参加し、自らの研究関心をグローバルな視野から位置づけることができる事に寄与している。

こうした成果をまとめた『近代日本と国際社会』(放送大学教育新興会、2004年3月、全200頁)は、放送大学で使用されている印刷教材であるが、従来の歴史教科書とは全く内容を異にするため、多くの受講生だけでなく本学の講義の参考書として使用するほか、一般読者からも受け入れられている。

◆共同研究例

・「近代日本と国際社会」の共同執筆(日本人5名、英国人1名)

◆将来の研究計画・研究の展望

東アジアにおける19世紀から20世紀にかけての近代化を、世界史の視野の中で考察する方向を継続しつつ、地域学的観点を加味して、大小さまざまな存在する日本を含む東アジアの諸地域を、学際的な手法を用いて、多元的、総合的に研究し、国家概念を超えて(相対化して)成立する地域の歴史性について、またその特質の時代的变化について、分析し、新たな日本学を世界に発信していきたい。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・地域概念の成立と展開(地域学として)
- ・東アジアの近代化と19・20世紀世界システムの成立
- ・日本とは何か(比較文化史的な国際的日本研究)

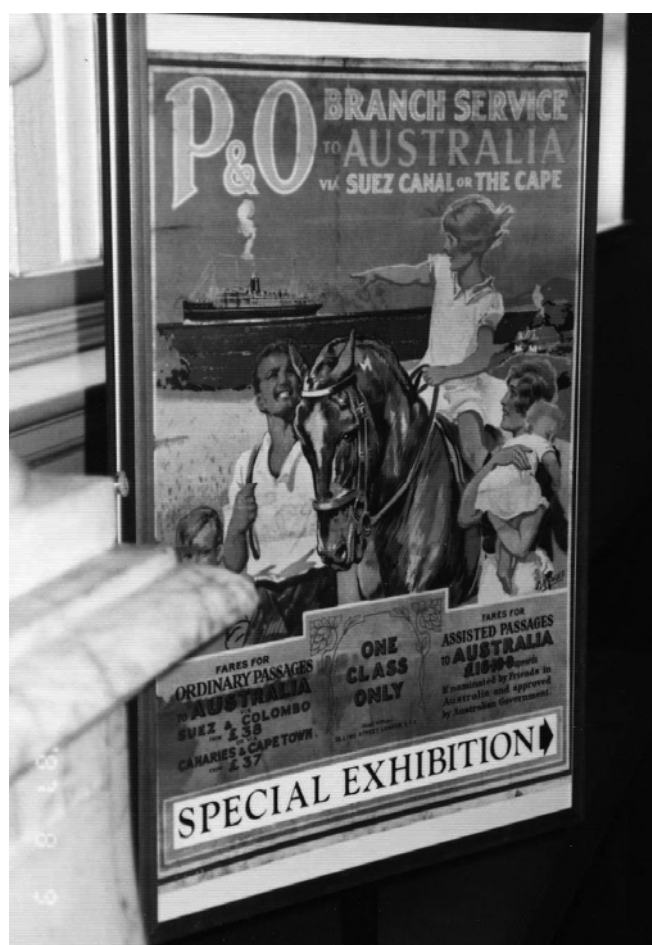
◆受験生等へのメッセージ

広い世界に出てみると、自分が属していた社会や集団がいかに特殊なものであるか、ということを実感することができます。

日本に住んでいるからといって日本のことを知っていることにはなりません。与えられた知識や情報によるだけでは、その地域や社会・文化のことを理解しているとも言えません。知りたい、という意欲に支えられ、自分で考える、ということがなければ、本当に日本や世界を理解することにはならないのです。

事象を与えられた情報からだけでなく、自分の頭で理解し、分析することができるようになることが、大学で勉強することの大きな目的のひとつです。疑い、自分で納得できる回答を自分の力で引き出すためには、自由な精神で、物事を相対的、総合的に考える姿勢が必要です。

歴史学も、これまで教わってきた歴史を疑う事から始めれば、全く新しい日本や世界と出会うことができるようになるでしょう。そういう知的興奮を一緒に味わってみませんか。



教員名	小坂 圭太 (KOSAKA Keita)
所 属	文教育学部芸術・表現行動学科音楽表現講座
学 位	音楽修士(1987、東京芸術大学)
職 名	助教授
URL/E-mail	ktakos@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

ピアノリズムの発展史における連続と断絶

◆主要業績

総数 (11) 件

- ・4月23日アンサンブル・フォルテ第一回演奏会、ベートーヴェン：ピアノ協奏曲第5番「皇帝」ソリスト 指揮 松尾葉子 東京オペラシティコンサートホール
- ・2月18日藤沢市芸術文化振興財団主催『エッセンシャル・モーツァルト』室内楽
- ・2月発売新譜工藤重典 (Fl) CD〈夢のあとに〉ピアノ伴奏 [レコード芸術誌特選盤]

◆研究内容

ライフワークである『ベートーヴェンと20世紀前半のピアノ作品演奏』を軸に演奏活動を展開。又、後述の『日本のピアノ曲1900～1975』ゼミ開講の為、様々な資料・史料を再読する中で本邦洋楽受容における問題設定の意識の変遷に関心が強まりつつある。

・演奏活動の一部

4月23日アンサンブル・フォルテ第一回演奏会、ベートーヴェン：ピアノ協奏曲第5番「皇帝」ソリスト 指揮松尾葉子 東京オペラシティコンサートホール

6月19日二期会週間'05、第6夜 ソプラノ松田昌恵 メゾソプラノ栗林朋子

2月18日藤沢市芸術文化振興財団主催『エッセンシャル・モーツァルト』室内楽

2月発売新譜工藤重典 (Fl) CD〈夢のあとに〉ピアノ伴奏 [レコード芸術誌特選盤]

◆教育内容

音を聴く、というのはどういう事なのか？楽譜通り弾く、とは具体的にはどういう事を指すのか？時間を軸に展開される芸術に於いてどうして構造把握認識を伝達・共有する事が可能なのか？等の根源的疑問と課題を各自が継続的に考え会得していく事を目指し実技個人レッスンを行っている。

又一つの事柄を多角的な問題意識で理解・把握する事を目指し多彩な切り口によるテーマ演習を毎年開講、17年度は『日本のピアノ曲1900～1975』及び、作曲家別ピアノ作品徹底研究第2弾として『ブラームス』を行った。前者では総括として近藤教授をゲストに迎え、1970年前後の文化状況等精神的背景についてインタビューを行った。

ピアノ以外の器楽が本学に無い為に器楽合奏の機会に恵まれない事を補う位置づけで16年度に開始した、毎年一つの楽器のプロ奏者を招いてのデュオ講座は17年度はチェロの丸山泰雄氏を招聘した。

◆将来の研究計画・研究の展望

- ・ 前述の諸テーマの継続・展開
- ・ 今後ますますフラット化（客観化・相対化）してゆくであろう学問と、あくまでも西洋近代の或る時代の思考と美意識の反映を引きずるピアノという楽器によって身体感覚として擦り込まれた真実との、矛盾や齟齬を縫い合わせる試み

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・ 20 世紀の文学・美術・ファッションなどとのネットワーク等

◆受験生等へのメッセージ

音楽を演奏する事にも理解する事にも関心を抱く人、ピアノを弾く行為は決してそれ自体で完結する事ではなく、自分の中の必ずしも明瞭ではなくても絶対に譲れないある価値観の体現だと感じている人、明確に回答の出る領域と永遠に謎として残る領域を往き来する事によって人格は形成されると考える人…そういう人たちに少人数制による緊密な人間関係の中で自己の指針を形成するお手伝いが出来ればと思います。

教員名	小谷 眞男 (KOTANI Masao)
所 属	生活科学部人間生活学科生活社会科学講座
学 位	学術修士 (1989 東京大学)
職 名	助教授
URL/E-mail	http://www.soc.ocha.ac.jp/Site/C426DF74-D177-4759-B171-5B1F3540EEB1.html m-kotani@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

イタリア / 法文化 / 名誉／恥 / 社会福祉 / 法と文学

◆主要業績

総数 (5) 件

- ・「もうひとつの福祉レジーム？ ――イタリアの研究動向から――」（『福祉社会学研究』no.2、2005 年 5 月、pp.91-105）
- ・「西欧近代における〈名誉コード〉と〈刑罰コード〉---家族と国家の比較法社会史へ---」（比較家族史学会監修、田中真砂子・白石玲子・三成美保編『国民国家と家族・個人』早稲田大学出版部、2005 年 9 月、pp.175-199）
- ・『世界の社会福祉年鑑 2005』（編集代表：仲村優一ほか、編集委員：西澤秀夫ほか、旬報社、2005 年 12 月；「イタリア」[pp.51-98] の一部を分担執筆、全体編集委員）

◆研究内容

- 1) 名誉と恥をめぐるイタリア法文化についての比較史的研究のまとめに入った。具体的には、伊仏独西の 4 カ国比較刑事法史分析、次いで 1889 年のイタリア統一刑法典編纂過程の検討をおこない、法曹集団の全国的形成の問題に取り組んだ。
- 2) 現代イタリアの社会福祉についての従来からの共同研究を進めた。具体的には比較レジーム論の観点から研究動向のサーヴェイをおこない、また 2004 年におけるイタリアの社会福祉の動向を共同で調査した。
- 3) 法と文学についての試行的研究を開始した。2005 年度は、とくに Shakespeare の諸作品にみる sense of justice の分析を試みた。

◆教育内容

生活法学演習 I・II、生活法学総論・各論、生活関連法、法学 II（法学入門）、生活法社会論、等の諸科目において、生活世界と法システムの関係および法文化をめぐる諸問題について、さまざまな角度から、法社会的に検討した。

◆Research Pursuits

- 1) Research on the Italian legal culture, especially from the historical viewpoint
- 2) Research on the social welfare of the contemporary Italy
- 3) Explore the themes of "law and literature"

◆Educational Pursuits

Lectures and seminars on the sociology of law and the comparative legal cultures.

◆共同研究例

- ・民間企業との共同研究の実績はない。

◆将来の研究計画・研究の展望

- 1) イタリア法文化研究を比較法文化論一般に展開させていく構想を温めている。
- 2) イタリア社会福祉についての従来の共同研究の蓄積を、単行書という形で公表する計画を立てている。
- 3) 法と文学についての研究を活用して一風変わった法学入門書を執筆したいと考えている。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

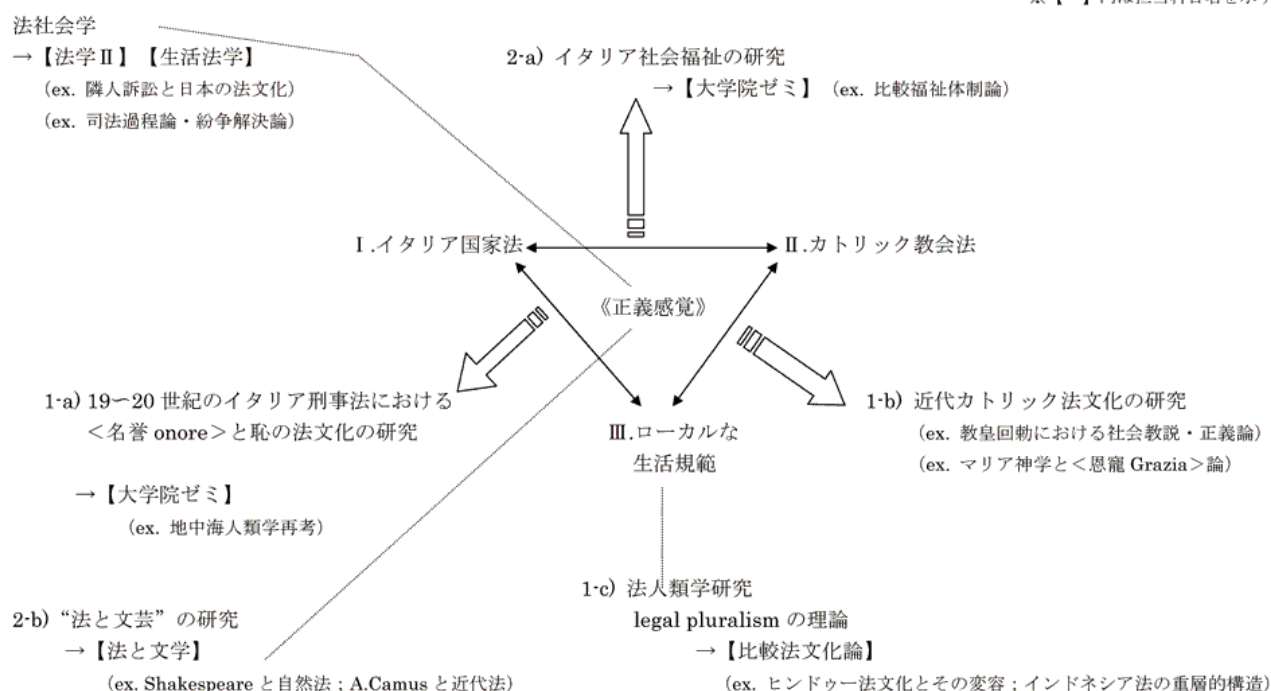
- ・比較法文化論
- ・法と文学
- ・社会福祉に関する国際比較研究

◆受験生等へのメッセージ

law school 以外で学ぶ法学は、"sense of justice" の練習問題です。自分なりの sense of justice を磨き上げていくことが、市民的教養の不可欠の一環をなすと信じて、教育・研究活動をおこなっています。

イタリアの法文化 — 名誉と恥・聖母マリア・人類学

※【 】内は担当科目名を示す



教員名	小玉 重夫 (KODAMA Shigeo)
所 属	人間文化研究科人間発達科学専攻
学 位	博士 (教育学) (1997 年度、東京大学)
職 名	助教授
URL/E-mail	http://www.li.ocha.ac.jp/hss/edusci/kodama/skodama@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

教育の公共性 / シティズンシップ教育 / ハンナ・アレント / 再生産理論 / 公教育思想

◆主要業績

総数 (12) 件

- ・『戦後思想の名著 50』(「無着成恭編『山びこ学校』」、pp.114-126 を執筆、岩崎稔・上野千鶴子・成田龍一編、平凡社、全 644 頁、2006 年 2 月)
 - ・「新自由主義的教育改革におけるアカウンタビリティの両義性—No Child Left Behind(NCLB)法に着目して」(財団法人家計経済研究所『季刊 家計経済研究』No.67,2005.7.,pp.49-56)
 - ・『子どもから成人への移行概念としてのシティズンシップ教育の変容とその思想的文脈』お茶の水女子大学 21 世紀 COE プログラム「誕生から死までの人間発達科学」プロジェクトⅢ「子どもから成人へのトランジションに及ぼす社会・文化的要因の探求」
- 思想史サブグループ報告書,小玉重夫編著,全 103 頁,2006.3.

◆研究内容

現代の教育思想を中心に研究している。私たちがふだん自明のものとしてうけいれられている「教育」や「学校」を、歴史的・構造的な視点から問い直し、そのうえで、教育改革の筋道を、特に公共性の視点から追及していくことを研究課題としている。当面は、基礎的研究として、教育の公共性について思想的な視点から解明することに取り組み、また、応用的、実践的研究として、新しい市民を育てるシティズンシップ教育の課題に取り組んでいる。

本年度(2005 年度)は、主要業績に記した通り、基礎的研究の成果として、『戦後思想の名著 50』(平凡社)に、無着成恭の『山びこ学校』を検討した論文を発表し、また、『季刊 家計経済研究』に、アメリカ合衆国における学力政策の動向を分析した論文を発表した。応用的、実践的研究の成果としては、21 世紀 COE「誕生から死までの人間発達科学」でシティズンシップ教育に関する研究グループを統括し、その成果報告書を刊行した。

◆教育内容

学部教育：文教育学部教育科学コースで、教育思想に関する専門科目を担当している。2005 年度の演習(ゼミ)では、国家と教育の関係をテーマとした文献や、学校選択に関する文献などを取り上げた。また、卒論では、ジョン・デューイの経験論を扱った論文、子どもの権利論を扱った論文、日本の新教育思想における個と社会の関係を扱った論文等が提出された。学部教育ではこのほか、教職課程を担当した。

大学院教育：博士前期および後期課程で、教育思想に関する授業を担当している。2005 年度の演習(ゼミ)では、教育における政治と権力の問題を、ミクロとマクロの視点から複眼的に検討することを課題とし、特に公共性やシティズンシップ(市民性)をめぐる最近の研究動向を取り上げ、ネグリ=ハートの『マルチチュード』等を検討した。大学院生の研究成果の一部は、主要業績に記した 21 世紀 COE の報告書に掲載されているほか、エスニック・マイノリティの教育支援に関する修士論文が提出された。

◆Research Pursuits

My research field is educational thought, and I am mainly concerned about the obviousness of the "education" and the "school", which I try to deconstruct from a historical and structural viewpoint. In order to do this, I set two research strategies, one is basic and the other is applied and practical. The basic research theme is about the publicness of education focusing on the historical context of educational thought. The applied and practical research theme is about the citizenship education for bringing up a new citizen.

This fiscal year (the 2005 fiscal year) I published the paper which examined the Muchaku Seikyo's "Yamabiko Gakko" in "The 50 excellent books of postwar period thought in Japan" (Heibonsha Publishers) as a result of basic research, and I also analyzed the trend of an academic ability policy in the United States of America focusing on the No Child Left Behind Act. As a result of my applied and practical research, the research report about citizenship education was published as a part of the research reports of the 21st Century COE Program, Studies of Human-Development from Birth to Death.

◆Educational Pursuits

Faculty education: As the exercise in the 2005 fiscal year (seminar), we discussed by taking up the literature on the theme of the relation between nation state and the literature about school choice, etc.

Moreover, as the graduation thesis, the paper treating John Dewey's concept of experience, the paper treating the child's right theory, and the paper treating the relation between individual and society in the early 20th century Japan were submitted. In faculty education, I am also concerned with the education and the management of the teacher-training course.

Graduate-school education: As the exercise in the 2005 fiscal year (seminar), we examined the problem of the politics and power in education

from the various points of view, taking up the Hardt=Negri's "Multitude". A part of the graduate student's result of research was published by the report of the 21st century COE. The master's thesis about an ethnic minority's educational support was submitted.

◆共同研究例

- ・日本学術振興会人文・社会科学振興プロジェクト研究
- ・経産省・シティズンシップ教育研究会
- ・お茶大附属幼・小・中（文科省開発指定校研究）

◆将来の研究計画・研究の展望

教育の公共性に関する基礎的な研究として、戦後にアメリカで活躍したハンナ・アレント（1906-1975）の思想を教育問題との関係で位置づけ直す作業を行っており、将来的にはそれをまとめていきたいと考えている。また、教育の公共性に関する思想研究と、シティズンシップ教育に関する実践研究とをつなぐために、主要業績に記したCOE 報告書での成果をもとに、学力問題を切り口として、大人と子どもの関係を再構築する視点を提起する論文、著作を準備中で、2006 年度中に成果を発表することをめざしている。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・シティズンシップ教育についての共同研究
- ・学力（格差）問題についての共同研究
- ・戦後教育学の理論的・歴史的検討に関する共同研究

◆受験生等へのメッセージ

教育の諸問題を幅広い視野から理論的にとらえ直すことが、教育思想のおもしろさだと思います。なお、教育の公共性や学力問題、シティズンシップ（市民性）教育を深めたい方は、2006 年度に下記の催しが予定されていますので、ふるってご参加下さい！

お茶の水女子大学・21世紀COE「誕生から死までの人間発達科学」思想史サブグループ・子ども発達教育研究センター「シティズンシップ教育の開発研究プロジェクト」共催セミナー

- ・12月2日（土）午前10時から12時、場所：お茶の水女子大学本館、学部会議室103、「シティズンシップの教育、海外での調査報告」、報告者：吉村春美氏（三菱総研）。
- ・3月24日（土）午後1時～3時、場所：お茶の水女子大学本館、学部会議室103、「政治教育の現状と課題」実践研究会、報告者：林大介氏（NPO法人ライツ常務理事）日本における模擬投票による政治教育の実践報告、コメンテーター：近藤孝弘氏（名古屋大学）。

教員名	小林 一郎 (KOBAYASHI Ichiro)
所 属	理学部情報科学科
学 位	博士 (工学) (1995 東京工業大学)
職 名	助教授
URL/E-mail	

◆研究キーワード

言語知能 / 知的インタフェース / Web インテリジェンス / 情報検索 / 知的コンテンツ

◆主要業績

総数 (20) 件

- ・ Ichiro KOBAYASHI and Yusuke TAKAHASHI: Text Generation Based on the Constraints of the Systemic Resource, The first Computational Systemic Functional Grammar Conference (CSFGC05), J.Patrick and T.Hawker eds., pp.56--64, Sydney, July 16 2005.
- ・ Ichiro KOBAYASHI and Yuriko KIKUCHI: A Study on Verbal Operation of Application Software, the 6th International Symposium on Advanced Intelligent Systems(ISIS'05), pp. 112--115, Korea(Yeosu), Sep.28--Oct.1, 2005.
- ・ Ichiro KOBAYASHI: Toward Intelligent Tailor-made Information Providing: Analysis of User's Behaviour of Operating a Word Processor, International Conference on Intelligent Technology (intech05), pp.395--401, Proc. of International Conference on Intelligent Technology (InTech05), Dec. 14-16, 2005.

◆研究内容

2005 年度は、以下に示すテーマを進めた。

- ・ 複数のアプリケーションソフトウェアを言葉で同時に操作するインタフェースの開発
これは、将来家庭に情報家電が入ってきたときに複数の家電を同時に操作する必要がある。そのために状況を判断して、ユーザの意図を汲み、適切なアプリケーションソフトウェアを選択、操作できるインタフェースを開発した。
 - ・ ユーザの入力キーワードに関連する時事的な情報を提供する情報推薦システム
情報検索のためにユーザが入力したキーワードと関連する時事的なキーワードから得られる情報を提供する。
 - ・ 検索結果文書から類似文書発見による検索精度向上への取り組み
情報検索を行った際に、一緒に提示されてしまう不必要な検索結果をフィルタリングして必要な情報だけを提示する研究。
 - ・ グラフ情報と協調するテキスト要約
 - ・ グラフの挙動を表すテキスト生成
- 時系列データをテキストと協調させ、知的な情報提示を行う研究。

◆教育内容

学部

1 年生の前期に数理基礎論および情報処理演習をおこなった。数理基礎論については、講義に合わせて演習問題をたくさん準備し、その回答もすべて配布し、予習・復習ができるように努めた。情報処理演習においても毎回、配布資料を用意し、課題を出して、基礎的な情報処理技術の習得が行えるよう努めた。3 年生の後期に人工知能論および英文講読を行った。人工知能論については、毎回、配布資料を準備し、授業中に演習問題を出し、講義内容の深い理解に努めた。英文講読については、英文法だけではなく、取り上げた人工知能理論の内容について学生が深く理解できるよう努めた。

大学院

言語メディア特論では、現在、注目を浴びている Web 上での情報技術の枠組みであるセマンティックウェブを取り上げ、輪講形式で講義を行った。

◆Research Pursuits

In 2005, I engaged in the following research theme,

- Development of an Operation Interface equipped with Knowledge that Supports to Achieve User's Goal

In this study, we developed an intelligent interface that can operate plural application software simultaneously with natural language instruction.

- A Study on Improvement of Retrieval Precision based on Finding Similar Documents from Retrieved Documents

In this study, we developed a method to filter unnecessary information from the result of information retrieval.

- Text Summarization Synchronizing with 2-D Chart Information

In this study, we developed a method to provide tailor-made information to a user, making multimodal information, i.e., text and 2D chart in this study, collaborated each other.

- A Study on Information Recommendation System that provides Hot topical Information Related to User's Inquiry for Information Retrieval

In this study, we developed a method to provide topical information related to the keyword that a user input to information retrieval engine.

- Text Generation for Explaining the Behavior of 2D Charts

In this study, we developed a text generation system that explains the behavior of Nikkei stock average with natural language.

◆共同研究例

- 知的映像ブログ

◆特許

- モダリティの協調による知的情報提示システム

◆将来の研究計画・研究の展望

現在、いくつかの研究テーマ（情報検索応用、知的インタフェース、Web インテリジェンス、画像理解、知的コンテンツ、意味処理、など）について研究を進めている。いずれも情報の意味を捉えることにより、それぞれが強く結びつくテーマであり、意味を処理することを基礎技術として、上記の研究テーマを進めていくつもりである。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- テーラメイドな情報提示を可能にするシステムの開発
- Web 上の情報を利用する研究（情報検索技術応用、知識獲得、など）
- モダリティを協調させた知的な情報提示手法の開発

◆受験生等へのメッセージ

今の時代は社会的に女性の活躍が大変期待される時代です。社会での活躍が期待されると同時に、少子化の背景により女性は出産をし、子どもを育てる大きな仕事にも期待を受けています。このような中で自分の将来を強い精神力で切り開いていく必要があります。本学はそのような強い心ざしを持っている学生がたくさんおり、後に続いてくれるみなさんを心待ちしています。我々、教員も前へ進もうとする学生さんの背中を押してあげたいという気持ちでいっぱいです。みなさんのご入学を心からお待ちしています。

◆Educational Pursuits

Undergraduate:

At the first year of undergraduate course, I taught an introduction of sets and proposition theory and an introduction of information processing. As for the former subject, I prepared for lots of material for the students to bluish up and prepare for the subject. As for the latter subject, I burdened the students with some tasks that they have to do by themselves so that they can acquire the basic skill of information processing. At the third year of undergraduate course, I taught artificial intelligence theory and English training. As for the former subject, at every lecture I gave all slides that I used in my lecture to the students and gave them problems to exercise so that they understand deeply about the content of the lecture. As for the latter subject, I did not only taught English grammar, but also what artificial intelligence is, which was the subject we studied through the readings.

Graduate:

I taught advanced theory of language media. In the subject, we took "Semantic Web" that is a remarkable technology on the Web. We hold a colloquium in the lecture.

教員名	小林 功佳 (KOBAYASHI Katsuyoshi)
所 属	理学部物理学科
学 位	博士 (理学) (1994 東京大学)
職 名	教授
URL/E-mail	http://www.phys.ocha.ac.jp/kobayashilab/home.html sakura@phys.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

表面物理 / ナノスケールの物理 / 走査プローブ顕微鏡 / 計算物理 / メタマテリアル

◆主要業績

総数 (2) 件

- Electrical resistance across a step of the Si(111) $\sqrt{3}\times\sqrt{3}$ -Ag surface, Surface Science 583 (2005) 16-28.
- Complementary media of electrons, Journal of Physics: Condensed Matter 18 (2006) 3703-3720.

◆研究内容

平成 17 年度は、電子の相補媒質について理論的研究を行った。相補媒質は、はじめ光について導入された概念である [1]。媒質と相補媒質の界面では、光は負の屈折をする。また、相補媒質を用いると、平面構造をもち、波長限界を超えてエバネッセント波まで再現する完全レンズを作成することができる [2]。本年度は、相補媒質を一般の波について拡張し、特に電子波の相補媒質について理論的研究を行った [3]。

主な内容は、伝達行列を用いた相補媒質の一般的な定義、電子の相補媒質の条件、相補媒質の走査トンネル顕微鏡による表面内部イメージングへの応用、界面原子構造の制御による有効的な相補媒質系、および、2次元グラファイト格子の相補媒系のデザインとその相補性の数値計算による確認、である。

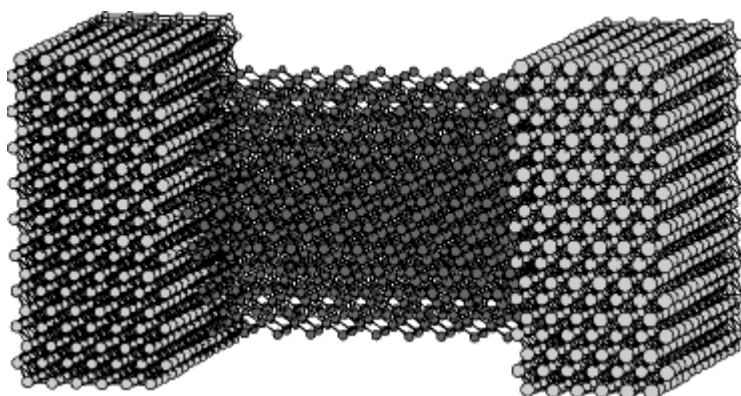
[1] J. B. Pendry and S. A. Ramakrishna: J. Phys. Condens. Matter 15 (2003) 6345.

[2] J. B. Pendry: Phys. Rev. Lett. 85 (2000) 3966.

[3] K. Kobayashi: J. Phys. Condens. Matter 18 (2006) 3703.

◆教育内容

平成 17 年度は学部卒研究生 3 名、大学院修士学生 3 名の研究指導を行った。卒業研究の題目は「負の屈折率をもつ物質中の電磁場のダイナミクス」および「弾性波の負の屈折」である。担当した授業は、学部では「計算物理講義・演習」、「量子力学 II」、「固体電子論」、大学院前期課程では「表面物理特論」である。この他、学部の「物理学特別講義 V」では 4 名の学生が配属し、「パーフェクト・レンズ」に関する論文等を読み、卒業研究の予備的な演習を行った。また、大学院博士後期課程の「メソスコピック科学演習」では 1 名の受講者があり、磁性に関する文献の講読を行った。



◆Research Pursuits

In 2005 we studied theoretically the complementary media of electrons. The concept of complementary media was first introduced to light [1]. Light refracts negatively at the interface of a medium and a complementary medium. Complementary media make it possible to make flat lens that reproduce evanescent waves beyond the wavelength limit [2]. We extended the concept of complementary media to general waves and mainly discussed the complementary media of electrons.

Main results are general definition of complementary media using transfer matrix, conditions of complementary media for electrons, an application of complementary media to subsurface imaging using scanning tunneling microscopy, effective complementary system by tuning interface structures, design of complementary systems of the two-dimensional graphite lattice, and verification of the complementarity by numerical calculations.

[1] J. B. Pendry and S. A. Ramakrishna: J. Phys. Condens. Matter 15 (2003) 6345.

[2] J. B. Pendry: Phys. Rev. Lett. 85 (2000) 3966.

[3] K. Kobayashi: J. Phys. Condens. Matter 18 (2006) 3703.

◆Educational Pursuits

In 2005 I have three undergraduate students and three graduate students in master course. The titles of the graduation researches are "Dynamics of electromagnetic fields in negative refraction index materials" and "Negative refraction of elastic waves".

I have teaching classes of "Computational Physics", "Quantum Mechanics II" and "Solid State Physics" for undergraduate students and "Surface Physics" for graduate students in master course. In addition I have four undergraduate students in "Special Lecture in Physics V" where we read several papers on "Perfect lens" as a preliminary exercise for graduation researches. I have a class on "Mesoscopic Science" for graduate students in doctor course where we read literatures on magnetism.

◆共同研究例

- ・原子スケールでの表面の電気伝導に関する研究

◆将来の研究計画・研究の展望

今後は、平成 17 年度に行った電子の相補媒質についての研究を継続し、特にその現実系での実現をめざした研究を行う。また、中間サイズ・ナノワイヤーの非一様伝導についての研究も行う計画である。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・原子スケールでの表面の電気伝導に関する研究
- ・中間サイズ・ナノワイヤーの伝導現象に関する研究
- ・相補媒質の物理に関する研究

◆受験生等へのメッセージ

最近 1, 2 年は負の屈折に関連した研究を行っています。負の屈折については、URL(<http://www.dc.ocha.ac.jp/fukugo/kkobayashi.html>)に少し詳しく書きましたが、要するに「あべこべ」な現象の一つです。研究をしていて面白いと思うのは、予想もしなかった、もしくは、予想に反する結果が得られた時でしょう。従来は知られていなかった新たな現象を発見すること、従来知られていることとは反対の現象を見つけることは、研究をする大きな目的の一つです。物理学は、自然現象を最も基本的な原理から出発してから説明し理解しようとする学問です。このためには、数学や物理の基礎から一步一步積み上げて習得する必要があります。物理を使いこなせるようになるには、ある程度の努力・忍耐が必要であり、少し時間がかかると思います。しかし、物理学の考え方を理解し、それを研究に使えるようになれば、研究する楽しみが実感できると思います。そのようなことのできる人材は、今の便利であるがやや表面的である世の中に必要だと思います。

教員名	小林 哲幸 (KOBAYASHI Tetsuyuki)
所 属	理学部生物学科
学 位	薬学博士 (1984 東京大学)
職 名	助教授
URL/E-mail	tetkoba@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

生理活性脂質 / ストレス応答 / メタボローム解析 / がん細胞の浸潤 / オメガ3系列脂肪酸

◆主要業績

総数 (4) 件

・ Keiko Moriya-Ito Toshiya Osada, Yuuki Ishimatsu, Kazuyo Muramoto, Tetsuyuki Kobayashi, and Masumi Ichikawa (2005) Maturation of vomeronasal receptor neurons in vitro by coculture with accessory olfactory bulb neurons. Chem Senses, 30: 111-119.

・ Yuki Shirai, Narie Sasaki, Yoshiro Kishi, Akiko Izumi, Kie Itoh, Masazumi Sameshima, Tetsuyuki Kobayashi, and Kimiko Murakami-Murofushi (2006) Regulation of levels of actin threonine phosphorylation during life cycle of Physarum polycephalum. Cell Motil.

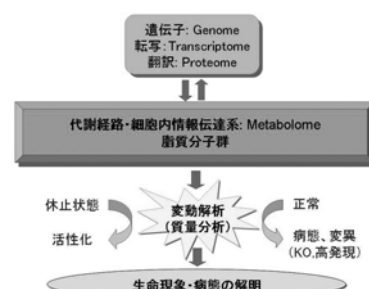
・ 小林哲幸 網膜機能におけるドコサヘキサエン酸 (DHA) の役割、オレオサイエンス、6 (2), 77-83 (2006)

◆研究内容

我々の研究室では、「脂質分子から細胞機能・病態を探る」をメインテーマとして、細胞生化学的手法や分子生物学的手法、さらには質量分析を駆使して、以下のテーマを研究している。研究姿勢としては、流行を追うというよりは独創的な研究を目指している。1) 生理活性脂質の代謝と機能；哺乳類の血清中に、生理活性リン脂質である環状ホスファチジン酸 (cPA) を生合成する酵素が存在すること、およびその生物活性を明らかにしつつある。2) 脂質メタボローム解析；いち早く最新の質量分析技術を駆使した脂質分子の系統的・網羅的解析手法の確立に努め、リン脂質分子やステロイド関連化合物について新知見の発見を目指している。3) 細胞のストレス応答に関与するステリルグルコシドの合成誘導と機能の解析。4) 必須脂肪酸バランスと生活習慣病 (脂質栄養学)；オメガ3系列脂肪酸の生理作用；DHA に代表されるオメガ3系列脂肪酸について最新の知見を整理し、予防医学的観点から研究成果を社会へ還元することに努めている。

◆教育内容

学部生に対しては、生化学関連の各種講義や実習を担当し、卒業研究の指導を行っている。また、院生に対しては、脂質生化学に関する新しい研究課題を基盤において、博士前期や後期課程の院生の講義・演習や学位取得のための研究指導を行っている。教育目的として、問題解決能力の高い、知的基礎体力のある人材を社会に供給することを目指している。そのための教育理念として、単に知識や技術を教えるのではなく、知識をどうやって得るか、また、どのように適用するか、そのための「知恵」を授けることを念頭において教育を行っている。自主性を重んじ、面白いデータが得られたときの感動を知ってもらいたい。これは大学院での研究に限らず、学部の講義や実習にもあてはまる。質の高い高等教育を行うためには、ハイレベルな研究がその基盤になくてはならない。したがって、私は脂質生化学に関する最新の研究課題に取り組みながら、独創的な研究を展開することを心がけている。



◆Research Pursuits

We have investigated cellular functions of lipid molecules using the techniques in biochemistry, molecular cell biology and mass spectrometry. Original research themes rather than fashionable topics are conducted in our laboratory. Our main research interests are as follows. 1) Regulatory mechanism for cell proliferation by cyclic phosphatidic acid (cPA). We demonstrated that cPA is a physiological constituent of human serum and that cPA shows an inhibitory activity toward cancer cell invasion and neurotrophic effects on cultured embryonic hippocampal neurons. 2) Lipid metabolome analysis based on mass spectrometry. Investigations of phospholipid and steroid molecules using soft-ionization mass spectrometry are performed. 3) Lipid mediators involved in cellular stress responses. We demonstrated the rapid induction of sterylglucoside (CG) by heat shock in human cultured fibroblasts to suggest that CG may act as a lipid mediator in an early stage of the stress signal transduction system. 4) Biological activities of omega-3 fatty acids. I have reviewed the recent research papers concerned with omega-3 fatty acids to return the results of research to society at large from the lipid nutritional point of view.

◆共同研究例

- ・脂質メタボロームのための基盤技術の構築とその適用
- ・がん細胞の浸潤を制御する新しい生体内リガンドの研究
- ・出血性ショックに続発する多臓器障害に関与する脂質分子の同定

◆特許

- ・環状ホスファチジン酸を用いたヒアルロン酸産生能増強剤の開発
- ・生理活性脂質（環状ホスファチジン酸、cPA）のがん細胞の浸潤抑制作用のメカニズム解明とがん化学療法剤への応用
- ・環状ホスファチジン酸を用いたグリア細胞の増殖分化、および生存促進のための薬剤開発

◆将来の研究計画・研究の展望

以前は、生体膜の単なる構成成分としてしか考えられていなかった脂質は、近年、様々な生理機能への関与が明らかにされ、ホットな研究領域の一つとなっている。生理活性脂質としての cPA や CG に関する我々の研究は、世界的にみても独創的かつ重要な研究となっている。また時代は今、新たなポストゲノム研究に入り、脂質生化学の分野でも代謝産物の構造と機能を網羅的に解析するメタボローム解析が可能となった。新しい質量分析装置を駆使して脂質の構造解析と定量の技術にさらに磨きをかけ、脂質分子の新機能を見出して行きたい。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・生理活性リン脂質の機能解析と代謝制御の解明
- ・質量分析による脂質メタボローム解析のための基盤技術の構築とその適用
- ・DHA をはじめとするオメガ 3 系列脂肪酸の生理機能

◆受験生等へのメッセージ

生物には美しいほどの見事な原理や論理性が潜んでいます。私の専門は、脂質生化学という研究分野で、細胞膜などの生体膜やそれを構成する主要な脂質分子の構造や機能を研究対象にしています。細胞膜は単なる仕切ではなく、ダイナミックに変動する脂質分子の変換工場です。脂質分子からは生理活性分子が作られ、そのバランスが崩れるとアレルギーやがん等の病気になることが分かってきました。さらに、神経機能にも関わっています。こんな脂質分子の新しい役割について、いっしょに学んで解明してみませんか？

◆Educational Pursuits

I deliver lectures about biochemistry to undergraduate students and supervise their graduation thesis. I also supervise a dissertation for master- and doctor-course students by co-investigating new research projects of lipid biochemistry. My educational goal is to produce excellent human resources with remarkable problem-solving abilities and fundamental knowledge. Knowledge is not enough, we must apply. Willing is not enough, we must do. With this point in mind I make much account of teaching how to get knowledge, and how to apply it. I regard individual initiative as important. I want them to know new-found excitement during studying in the undergraduate classes or graduate course. Higher education of good quality should be built on highly advanced research. Therefore, I attempt to develop original research by investigating new research project of my research field, lipid biochemistry. I also promote and implement joint research with collaborators outside the University. This collaboration contributes substantially to our educational activities.

教員名	駒城 素子 (KOMAKI Motoko)
所 属	生活科学部人間・環境科学科
学 位	学術博士 (1981 お茶の水女子大学)
職 名	教授
URL/E-mail	http://envchem.eng.ocha.ac.jp/komaki@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

洗浄 / 機械作用 / 流体二酸化炭素 / ポリ (α-ヒドロキシアクリル酸ナトリウム) / 天然色素

◆主要業績

総数 (7) 件

- ・駒城素子, 金重麻美・元木加世, 二酸化炭素による洗浄の基礎的研究-循環フィルタの効果と汚れ成分の影響, 繊維・高分子機能加工第 120 委員会年次報告, 56, 44-47 (2005)
- ・元木加世, 駒城素子, 洗浄における機械力の効果, 生活工学研究, 8(1), 138-138 (2006)
- ・稲垣香那, 駒城素子, スメクタイトの構造と特性, 生活工学研究, 7(2), 178-181 (2005)

◆研究内容

環境への負荷を低減できるような衣生活をめざして、主として洗浄・洗濯および染色について研究した。

1. 超臨界および亜臨界二酸化炭素による洗浄
循環式洗浄装置により、温度、圧力、時間など各種条件の洗浄性へ及ぼす影響を調べ、再汚染を防止するため吸着剤フィルターが有効であることを明らかにした。
2. 洗浄における機械作用と摩擦力の解明
布に衝撃力を加えることで生ずる圧縮・屈曲・変形が、汚れの除去にどのように関係するか調べ、布が含む水量の影響が大きいことを明らかにした。
3. ポリ (α-ヒドロキシアクリル酸ナトリウム) の生分解性
脂肪酸と複合体を形成する水溶性高分子の洗剤配合補助剤としての可能性を探るため、重要な条件である生分解性を調べた結果、土壌による除去は生分解よりむしろ吸着要因が大きいことを明らかにした。
4. 粘土鉱物の油脂に対する収着性とその応用
合成タルクおよび天然スメクタイトのスラリー物質によるオレイン酸の吸収性を調べ、洗浄剤としての有効性を確認できた。
5. 天然色素 (ラック色素) の染色性
ミャンマー産スティックラックからの色素の抽出方法を検討した。さらにその抽出色素と市販のラッカイン酸とを比較しながら、その物性、絹および毛繊維への染色性を調べた。

◆教育内容

1. 被服学分野 (学部)
衣服の材料の入手方法の歴史、性質や取り扱いの概要について被服学概論 (学部共通)、さらに繊維製品の染色加工、洗濯などの取り扱いについて被服科学 (学部共通)、慣習と科学について生活科学概論 (学部共通)、を講義した。
2. 洗浄科学・染色化学分野 (学部)
ケイ酸塩鉱物の化学、風化の化学 (粘土鉱物) について環境化学 (2 年次専門必修)、コロイド化学の基礎、吸着など界面化学の基礎と応用について生活界面化学 (3 年次専門選択) の講義を、さらに生活界面化学実験 (3 年次専門選択) を担当した。
3. 学部専門教育
卒論研究に関係する外国語文献の購読・発表について生活工学輪講 (4 年次専門必修) と、さらに分担購読を生活工学演習 (4 年次専門必修) で指導した。
4. 大学院専門教育
生活環境化学特論、環境生活工学演習において物質吸着の物理化学、解析方法について解説し、外国語文献の講読について指導した。
5. 特別研究指導
学部 4 年次生 (3 名) に対し卒論テーマの選定、実験計画と進め方、データのまとめ方を指導した。また博士課程院生 (M2: 1 名 M1: 2 名) に対しテーマ設定のしかた、実験の計画と進め方、データのまとめ方、学会発表等について指導した。D3: 1 名について (副) 指導と学位論文審査をおこなった。学部、大学院とも研究室全体で毎週研究経過報告会を開き、討論指導した。

◆Research Pursuits

1. Effect of various conditions of temperature, pressure and duration on detergency with supercritical or liquid carbon dioxide were examined by circulating the carbon-dioxide. It was found that the adsorbent filter was useful to prevent the re-deposition of dirt.
2. The water content in the wash-load is important to the removal of dirt, which is concerned to compression, bending and deformation of fabrics by mechanical action.
3. The water-soluble carboxylate polymer is very useful as a component of detergent. The polymer is eliminated from water by the treatment with soils by adsorption rather than biodegradation.
4. Mixed slurry of synthesized talc and natural smectite quite sorbed the oleic acid.
The slurry was confirmed the usefulness as a cleaner for oily soils.
5. The method of extraction of the colorant from stick-lac made in Myanmar was studied and the dyeing properties were compared to lacic acid for silk and wool fibers.

◆Educational Pursuits

1. Clothing Science (undergraduate students)
Introduction to clothing of the history of the getting way of clothing materials, its quality and treatments. Clothing Science for the treatment of textile materials with dyeing, and finishing and washing. Introduction to human life and environmental sciences on the custom and science.
2. Detergency science and dyeing chemistry (undergraduate students)
Environmental chemistry on the chemistry of clay-minerals and its weathering. Interfacial chemistry of lives on the basic and application of the colloids and adsorption phenomena. Experimental of interfacial chemistry of lives
3. Specialty for undergraduate students
Readings of Journals on each research theme in foreign language.
4. Specialty for the students in graduate school
Special courses on the physical chemistry and analysis of adsorption.
5. Research guidance
Determination of each research theme, experimental planning, Discussion of the results obtained to undergraduate students and also the presentation in the congress to the students in graduate school.

◆共同研究例

- ・電子線照射水による油脂汚れの洗浄
- ・インジゴデニムの酵素処理
- ・高温洗濯による洗浄性

◆将来の研究計画・研究の展望

1. 環境負荷を抑制できる処理剤として粘土鉱物を、染色廃水処理、ドライクリーニングにおける汚れの回収処理など染色や洗浄の分野で利用できるよう、その構造と機能との関係を研究する。
2. 洗濯の基本原則として、機械力の役割を解明し、少ない洗剤、水による洗浄系の確立と、新たな洗濯装置の開発を目指す。
3. 未利用の天然色素の有効利用を計る。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・洗浄研究（ポリカルボン酸塩系ビルダー）
- ・汚染物質除去への粘土鉱物の利用
- ・洗浄における衝撃圧縮力の利用

◆受験生等へのメッセージ

洗濯のように簡単にみえる行為にも“何故汚れが落ちるのか、布をもんだり水を動かしたりといった機械作用は何故必要なのか？ 洗剤の働きは？”など必ずしも十分に解明されているとはいえない問題があり、科学の対象世界となる。しかも些細な日常的行為もいまや環境問題に密接に繋がってくる。

身近な諸現象に興味を持つ好奇心と、よりよい生活空間を作ろうという意欲の両方を携えて勉強すること、すなわち興味・関心をもったテーマを研究し、世の中に役に立てることは楽しくやりがいのあることである。そのためには基礎となる科目もしっかり勉強し、かつ広い教養も培うことが必要で、これからの若い人に大いに期待している。

教員名	小柳 志津 (KOYANAGI Shizu)
所 属	人間文化研究科
学 位	博士 (人文科学) Ph.D. in Cultural Psychology Master of Arts
職 名	リサーチフェロー
URL/E-mail	shizuwk@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

文化接触 / 文化心理 / 引退シニア層

◆主要業績

総数 (3) 件

小柳志津 (2006) 「感情心理学からの文化接触研究：在豪日本人留学生と在日アジア系留学生との面接から」, 風間書房, 平成 17 年度科学研究費 (研究成果公開促進費) 受給

小柳志津 (2005) 「アジア系留学生にみる境界意識 - 文化規範が本質的に捉えられるのはなぜか - 」『異文化間教育』22 号, 異文化間教育学会, pp80-94.

箕浦康子、加賀美常美代、小柳志津、三浦徹、篠塚英子 (共著) 「大学教育とキャリア形成ー入学時と 2 年修了時のお茶の水女子大学生の調査からー」 (2006), 『お茶の水女子大学人文科学研究第 2 巻』

◆研究内容

グローバル化を背景に、海外滞在の目的や滞在者のバックグラウンドも非常に多様になっている。従来の文化接触研究では、企業の駐在や留学などビザや目的により滞在者をカテゴリー分類し、関与要因をある程度統制して分析してきたが、果たしてそれらの変数が文化接触の現実を反映しているのか、疑問に思われるケースが多くなっている。

そのような問題意識のもと、2005 年度は中高年以降に海外滞在を開始したシニア層の文化接触到に焦点を当てて研究を始めた。ロングステイという名称が一般化し、悠々自適の有意義な海外生活が謳われる一方で、生活費の安さだけで海外滞在を選択し現地で問題となるケースも増えている。従来の異文化適応研究に照らすと、中高年になってから特定の任務もなく海外に滞在する引退シニア層の場合、文化接触の視点からも問題を抱える可能性が高いのではないかと思われる。

極めて私事的に行われる引退シニア層の海外滞在については、マスコミの現地を紹介するハウツー的情報の他はほとんど実状が明らかでない。引退後に海外滞在するシニア層の文化接触の現状を把握し、彼らのホスト社会との接触と自文化保持について調査を進めている。

◆教育内容

異文化交流実習 1 「米ヴァッサー大生との共同グローバル文化学習」担当：三浦徹、小柳志津

本授業では、お茶大に 2 ヶ月弱研修に来るヴァッサー大学 (アメリカ) の学生と組んで数名のグループを作り、グループで考えたトピックを調査学習した。授業やグループでのコミュニケーションは日本語と英語を混ぜて行い、調査ではそのトピックに関する現場 (フィールド) の調査やインタビューなどを必ず入れることとし、最後の授業では各グループの調査発表を行った。

この授業では、調査やグループワークを通して自己観察を行い、最終レポートとして提出することも課題とした。グループメンバーや自分の行動にどのようなことを感じたか、自己分析をすることで、対人コミュニケーションや異文化コミュニケーションの意味や自分の傾向などを考える。

本授業の目的

- ①実際のコミュニケーションにより異文化交流を実体験し、何が重要かを学び取る
- ②社会調査の実施法や発表法を身につける。
- ③コミュニケーションの構造と自分の行動や感情の傾向を知る。

◆Research Pursuits

In the are of globalization, the purpose and background of overseas sojourners have been increasingly diversified. Studies of Intercultural Interaction often analyses sojourners controlling the variables based on their visa status or purpose of stay, such as business personnel or international students. Recently, however, there are many cases which make us reconsidered that these variables truly reflect the reality of sojourners.

My recent research topic is how retired senior people experience their overseas stay. Now a days, while so-called “long-stay” become more popular and overseas stay with on worries are promoted widely, some problematic cases are reported in which people chose to stay abroad just because of cheap living costs. Based on the prior studies, retired seniors who go abroad in their middle age with no specific task seem to have higher risk of mal-adjustment.

The reality of overseas sojourn of retired seniors has not yet revealed, other than the information how to do “long-stay” by mass media. I am conducting a research to grasp the real picture of their sojourns and to discover the relationship between contacts with their host and retainment of their home culture.

◆Educational Pursuits

Intercultural Interaction 1: Collaborative global learning with Vassar University students.

In this class, small group members of Ochanomizu students and Vassar students investigate a topic which they have interests. Communication made in Japanese and English and the research must include some field works such as interview. They made presentation at the last class in Japanese and English.

Adding to the group work, students were asked to carry out self observation through their group works. Students need to think the meaning and their tendency of intercultural communication by analyzing how and why they felt towards the behaviour of themselves and others.

The purpose of the class;

- * To experience the real intercultural communication and learn what is important.
- * To learn how to conduct social research and presentation.
- *To understand the structure of communication and the tendency of their own feelings and behaviour.

◆将来の研究計画・研究の展望

シニア層のと留学生の特徴を比較し、文化接触において年齢や滞在のバックグラウンド、環境要因などにどのような関係があるのかを分析し、人間発達の点から新たな示唆を得る。また、大きく異なる滞在者のコンテキストに注目し、文化接触時に起きる感情や心理を分析することで、文化接触で大きな役割を果たす要因を探し出す。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・ 企業・他研究者等と共同で研究できるテーマ
：日本人が海外滞在に必要な心理状態やスキル、能力の開発

◆受験生等へのメッセージ

人文や社会科学の研究で一番重要なのは、自分の中にある疑問です。この疑問を何としても解明したい、という自分のテーマがあれば、地味で重労働の研究も楽しく進められると思います。その疑問はどこから来るのか、これは自らが様々なことを経験し、思ったようにものごとが進まなかった時に生まれるのではないのでしょうか。いろいろな体験から新たな発想も生まれます。頭で考えるだけでなく、自分が動き経験することです。

教員名	近藤 和雄 (KONDO Kazuo)
所 属	生活環境研究センター
学 位	医学博士 (1986 東京慈恵会医科大学)
職 名	教授
URL/E-mail	http://carrot.sk.ocha.ac.jp/kondo/ kkondo@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

動脈硬化 / 高脂血症 / 活性酸素 / 抗酸化作用 / ポリフェノール

◆主要業績

総数 (9) 件

・ Nghiem Nguyet Thu, Ta Thi Tuyet Mai, Reiko Ohmori, Masatoshi Kuroki, Nguyen Van Chuyen, Nguyen Thi Kim Hung, Masanobu Kawakami and Kazuo Kondo: Plasma Triglyceride and HDL-Cholesterol concentrations in Vietnamese girls are affected by lipoprotein lipase, but not apolipoprotein CIII polymorphism. J. Nutr. 136(6), (2006) 1488-1492.

・ Reiko Ohmori, Tamami Iwamoto, Motomi, Tago, Tadakazu Takeo, Tomonori Unno, Hiroshige Itakura and Kazuo Kondo: Antioxidant activity of various teas against free radicals and LDL oxidation. Lipids 40, (2005) 849-853.

・ M.Kasai, N.Nosaka, H.Maki, S.Negishi, T.Aoyama, M.Nakamura, Y.Suzuki, H.Tsuji, H.Uto, M.Okazaki, K.Kondo: Effect of dietary medium- and long-chain triacylglycerols (MLCT) on accumulation of body fat in healthy humans. Asia Pac. J. Clin. Nutr. 12(2), (2003) 151-160.

◆研究内容

食物と人体の関わりをテーマに、心筋梗塞、脳梗塞をおこす動脈硬化の予防を念頭において、応用研究を主体とした研究活動を行なっている。

これまで、生体内の LDL 酸化抑制作用ならびに食後高脂血症改善作用を有する赤ワイン、緑茶などのポリフェノールを含有する食物の存在を明らかにしてきた。

2005 年度は、クロロゲン酸を有するコーヒー、リンゴにおける LDL 酸化抑制作用、紅麴のコレステロール合成系に関する HMGCoA 還元阻害作用を蛋白発現、mRNA レベルから明らかにするとともに、紅麴の LDL 酸化抑制作用を明らかにした。また、にがりの食後高脂血症改善作用、レモンの MMP 活性抑制、アーモンドの LDL 酸化抑制作用などを明らかにして、これらの成果を、日本栄養・食糧学会、日本動脈硬化学会などで発表している。

◆教育内容

学部では、生活科学部食物栄養学科で、病態栄養学、医学概論を担当し、動脈硬化を引き起こす高脂血症、肥満、糖尿病、高血圧、メタボリックシンドロームなどの生活習慣病における診断、治療について食物との関わりを中心に講義している。

大学院では、学部の講義を一步すすめて、動脈硬化症の成り立ち、老化の問題を、リポ蛋白代謝を中心に、活性酸素と活性酸素に対抗する食物に含まれる抗酸化物の関わりを、生体防御、この防御システムの観点から講義している。

◆共同研究例

- ・中鎖脂肪酸における体脂肪減少作用（日清オイリオ）
- ・植物ステロールの血清コレステロール減少作用（日清オイリオ）
- ・レモンの抗動脈硬化作用に関する研究（ポッカコーポレーション）

◆特許

- ・日本人のポリフェノール摂取量に関する研究
- ・食物に含まれるポリフェノール量に関する研究

◆将来の研究計画・研究の展望

様々な疾病の予防に、食物に含まれるポリフェノールを中心とした抗酸化物の関与が明らかになっている。ポリフェノールは、LDLの酸化抑制をはじめ、動脈硬化の進展抑制にあらゆる課程で関わっている。ポリフェノールなどの動脈硬化抑制の役割を明らかにするとともに、病気の発症を予防する食環境を探索し、生活習慣病を発症させない食生活を構築する。

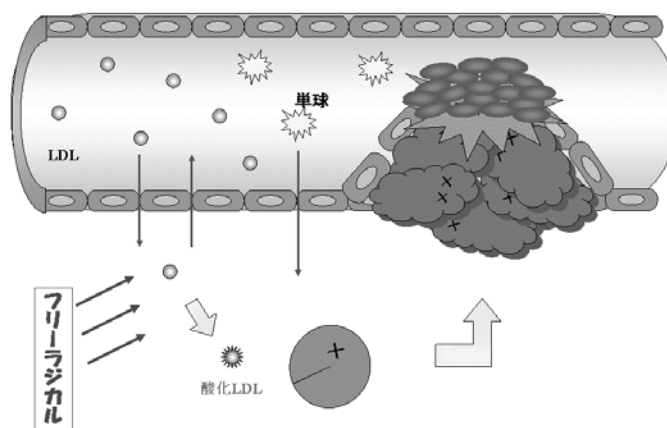
◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・動脈硬化予防に関する食物の研究
- ・ヒトを対象にした食物の効能研究
- ・遺伝子多型の検討を基にした食物の効能研究

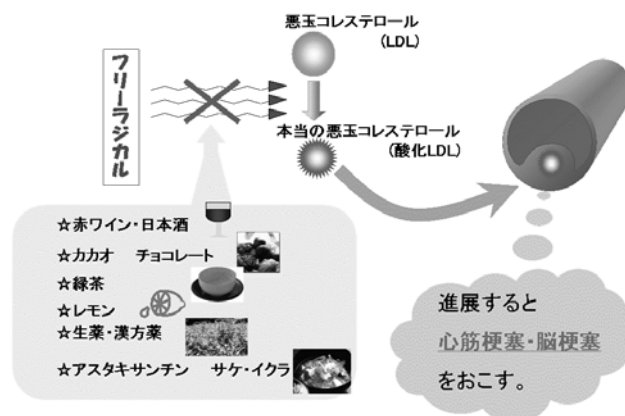
◆受験生等へのメッセージ

食物と人体の関係の研究に興味のある学生諸君の来訪を待っています。

動脈硬化と悪玉コレステロール(LDL)の新しい関係



抗酸化食品



教員名	近藤 譲 (KONDO Jo)
所 属	文教育学部芸術・表現行動学科音楽表現講座
学 位	学士(音楽)(1972 東京芸術大学)
職 名	教授
URL/E-mail	jk@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

作曲 / 音楽理論 / 音楽美学 / 音楽史 / 現代音楽

◆主要業績

総数 (4) 件

- ・《アコーディオンと弦楽四重奏のための「ヤローウ」》(作曲作品、単著)、演奏時間約 12 分。「ウルティマ現代音楽祭」(ノルウェー)委嘱作品。同音楽祭の演奏会 (オスロ) において、フロデ・ハルトリとチカダ弦楽四重奏団の演奏で初演。楽譜は、UYMP(University of York Music Press,イギリス) から出版。
- ・《ピアノ独奏のための「リトルネッロ」》(作曲作品、単著)。演奏時間約 7 分。井上郷子氏委嘱作品。同氏のリサیتالル (東京) において、初演。楽譜は、UYMP(University of York Music Press,イギリス)から出版。
- ・「近藤譲作品個展演奏会」(演奏会、単著)。イギリスの「ハダスフィールド音楽祭」のテーマ作曲家として招聘され、同音楽祭で室内楽曲 7 作品のプログラムからなる作品個展演奏会 (約 2 時間) を開いた。この演奏会は、BBC (イギリス放送協会) によって収録され、同放送からラジオ放送された。

◆研究内容

作曲の実践的研究。及び、現代の芸術音楽の美学的、理論的研究。

◆教育内容

作曲の指導。音楽理論及び音楽実践の基礎的な能力開発のためのトレーニング。音楽形式、及び、その美学的背景を音楽史な視点から論じる。

◆Research Pursuits

Composition, and aesthetic and theoretical studies of contemporary art music.

◆Educational Pursuits

Composition. Basic training in music theory and solfage. Lecture on musical form and its aesthetic background in historical context.

◆受験生等へのメッセージ

音楽の実技だけでなく、理論的・思想的な観点から音楽学習を深めることができます。

教員名	近藤 敏啓 (KONDO Toshihiro)
所 属	理学部化学科
学 位	工学 (博士) (1993、東京工業大学)
職 名	助教授
URL/E-mail	http://ana4.chem.ocha.ac.jp/~kondo/ tkondo@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

自己組織化 / ナノ界面 / 放射光利用表面X線散乱法 / 光電気化学 /

◆主要業績

総数 (3) 件

- ・ M. Abe, T. Masuda, T. Kondo, K. Uosaki, Y. Sasaki, "Photoconversion of a redox-active self-assembled monolayer: In situ probing of photoinduced CO dissociation from a triruthenium cluster center on gold", *Angew. Chem. Int. Ed.*, 44(3), 416-419 (2005).
- ・ M. Okamura, T. Kondo, and K. Uosaki, "Electrochemical Assembly and Potential-Dependent Plasmon Absorption of Au Nanoclusters Covered with a 4-Aminothiophenol Self-Assembled Monolayer", *J. Phys. Chem. B*, 109(20), 9897-9904 (2005).
- ・ Toshihiro Kondo and Kohei Uosaki, "PHOTOELECTROCHEMICAL PROPERTIES OF ELECTRODES MODIFIED WITH SELF-ASSEMBLED MONOLAYERS (SAMs) OF VARIOUS ALKYLTHIOL DERIVATIVES", ("Encyclopedia of Electrochemistry", Edited by A. J. Bard and M. Fujihira, Vol. 10 Modified

◆研究内容

電極／溶液界面における電子移動反応は、厳密に基礎的に理解し、燃料電池やバイオセンサといった次世代ナノテクノロジーに応用していくためには、電気化学活性界面を高い空間分解能／時間分解能で知る必要がある。シンクロトロン放射光利用表面X線散乱 (Surface X-ray Scattering; SXS) 法を利用して、0.01 nm オーダーという非常に高い空間分解能で電気化学活性界面の三次元構造をその場決定する事に加え、時間分解能が低いというこれまでの SXS 法の欠点を、装置 (光源、入射波長の選択) や電気化学セルの工夫 (図1) によって克服し、電気化学活性界面の構造ダイナミクスを高い時間分解能で測定／解析する事を目的としている。平成17年度は、硫酸水溶液中の金単結晶 (Au(111), Au(100)) 電極の酸化還元サイクルにおける構造ダイナミクスを実験／解析した。その結果 (図2)、金電極の酸化膜は二重層構造であり、Au(111)よりも酸素原子が入り込みやすい Au(100)表面の方が酸化速度が速い事を明らかにした。

◆教育内容

分析化学 I (学部1年): 化学平衡論を通じて、分析化学の基礎的操作である滴定分析と定量分析の原理とその応用について理解する事を目的とし、酸塩基平衡、錯生成滴定、溶解平衡、酸化還元平衡について解説した。
機器測定法 (学部3年): 化学の分野で一般的に用いられる機器分析法を理解し、これらに共通して必要な基礎事項、測定機器使用時のマナー、化学反応や物理現象からセンサにより得られる信号の取り扱いなどを、主に発表／討論形式で行った。
電気化学 (学部4年 (卒論生)): 当研究室において必須の電気化学について、基礎的な事項から機器の取り扱い／実験操作まで完璧に理解するよう指導した。また、電極表面修飾剤としてアルキルチオール類の合成、自己組織化単分子層の形成／脱離、及び機能評価についても指導した。
界面化学特論 (大学院): 化粧品からカーボンナノチューブまで、最近の界面化学に関する話題／トピックスについて、発表／討論形式で行った。

◆Research Pursuits

It is very important to study the electrochemical reaction not only for the fundamental surface science but also for the applications related to nanotechnology. Surface X-ray scattering (SXS) technique using synchrotron radiation is one of the most promising methods to investigate the interfacial structure with ultra-high spatial resolutions in situ. In this year, we determined the static structure and discussed dynamics of surface structure change of Au(111) and Au(100) single crystal electrodes during oxidation/reduction reaction cycle measured in a sulfuric acid electrolyte solution using a specially designed electrochemical cell (Fig. 1). We completely determined the static structure of Au(111) or Au(100)/electrolyte interface at several potentials. The oxidation of Au(100) was much faster than that of Au(111) because of the penetration space of oxygen atoms (Fig. 2).

◆Educational Pursuits

Analytical Chemistry I (B1): In order to understand the principle and application of titrations and gravimetric methods for the chemical equilibrium, acid-base titration, complex formation titration, precipitation titration, and oxidation/reduction titration were explained. Methods of Instrumental Measurements (B3): In order to understand the methods of instrumental measurements in the chemistry field, general fundamentals for instrumental measurements and operation of the signals from the sensor were discussed. This lecture was carried out in a seminar style.

Electrochemistry (B4): Electrochemical methods were completely explained and electrochemical experiments were carried out for the bachelor thesis.

Seminar in Interfacial Chemistry (M1, M2): This lecture was carried out in a seminar style. Today's topics for interfacial chemistry were discussed.

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・人工光合成システムの開発
- ・構造制御ナノ界面構築法の確立
- ・高い空間／時間分解能を有するナノ界面構造その場追跡法の開発

◆将来の研究計画・研究の展望

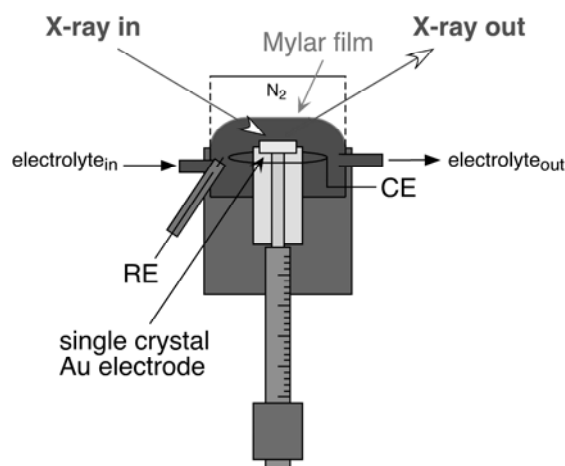
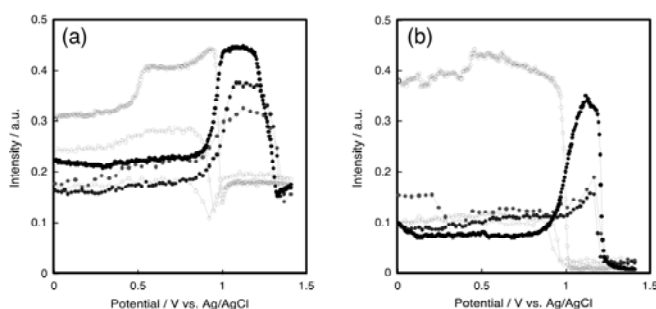
電気化学活性界面（電子移動を伴う電極／溶液界面）を厳密に理解し、燃料電池やバイオセンサといった次世代のナノテクノロジーへと応用していくためには、構造が原子／分子レベルで制御された界面で電子移動反応を行い、反応が起こっているその場で高い空間分解能／時間分解能で界面構造を知る必要がある。この指針を元に、「自己組織化を利用した界面ナノ構造制御」と「界面ナノ構造その場追跡法の開発」について推進していく。

◆特許

- ・自己組織化単分子層を利用した機能性界面の創成
- ・界面ナノ構造のその場追跡法の開発
- ・機能性分子の合成

◆受験生等へのメッセージ

我々の生活の中では、燃料電池、バイオセンサ、化粧品／繊維など、すでにいろいろなところでナノテクノロジーの技術が使われています。より豊かな社会生活にするため、そして次のノーベル化学賞を目指して、一緒に環境にやさしいナノテクノロジーの研究をするために、ぜひ、お茶の水女子大学に来てください。



教員名	近藤 恵 (KONDO Megumi)
所 属	生活科学部人間・環境科学科
学 位	博士（理学）（1995 東京大学）
職 名	助手
URL/E-mail	megkondo@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

人類の起源と進化 / 年代測定 / 化石骨 / ジャワ原人 / 日本の旧石器時代人

◆主要業績

総数 (2) 件

- ・ Dating of the Hamakita human remains from Japan
- ・ 帝釈観音堂洞窟遺跡出土哺乳動物骨の多元素分析 ― 古人類化石の出土層準・年代判定に関する基礎的研究 ―

◆研究内容

1. 化石骨の年代測定・判定学：化石骨試料に含有される少量・微量元素を調べることで、その年代の測定および間接的に判定を行う。
2. ジャワ原人の編年および変遷史：インドネシアのジャワ原人に関する遺跡の地質学的調査を行い、様々な試料の年代分析をすることにより、化石骨の編年を行う。また、それにより、人類進化の様相を考察する。
3. 日本の旧石器時代の人類の編年および変遷史：日本の旧石器時代の人類とされる化石骨について、年代測定または年代判定を行い、それらの編年を行うことにより、日本列島の人類の由来について考察する。

◆Research Pursuits

1. dating of fossil bones; measure contents of minor or trace elements contained in fossil bones to determine the absolute age or discriminate the fossil bearing layers.
2. chronology and palaeoanthropology of the Indonesian fossil hominids; examine the history of Java man by geological survey of the site and chronological analysis of several kinds of specimen.
3. chronology and palaeoanthropology of the Japanese Palaeolithic hominids; determine the age of the Japanese “Palaeolithic” hominids by absolute or relative dating to examine the origin of hominids of the Japanese archipelago.

教員名	近藤 るみ (KONDO Rumi)
所 属	理学部生物学科
学 位	博士 (理学) (1993 総合研究大学院大学)
職 名	講師
URL/E-mail	rkondo@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

適応進化 / 多様性 / 嗅覚・味覚 / ショウジョウバエ

◆主要業績

総数 (3) 件

・Inomata, N., Itoh, M., Kondo, R., Oshima, M., Inoue, Y., Takano, -Shimizu, T. Detecting single-generation selection acting on inversion polymorphism in *Drosophila* Genes Genet. Syst. 80:446, 2005.

・Itoh, M., Nanba, N., Hasegawa, M., Inomata, N., Kondo, R., Oshima, M., Takano-Shimizu, T. Seasonal changes in the scale of long-distance linkage disequilibrium and population structure in *Drosophila melanogaster* Genes Genet. Syst. 80:446, 2005.

・近藤るみ, 金子實, 小川温子, 西川祥子
ショウジョウバエゲノムデータベースを検索する バイオデータベース利用法 ―検索からバイオインフォーマティクスへ―
学進出版 p42-p53 2005年3月

◆研究内容

1. ショウジョウバエ逆位染色体多型の働く一世代の自然淘汰の検出

現在の生物集団に働いている自然淘汰の検出例は稀有である。ショウジョウバエの逆位染色体多型には緯度にそったクラインがあり自然淘汰が関与していると考えられてきた。本研究では1世代の淘汰の新規検出法を開発、これをキイロショウジョウバエの逆位多型に応用し、淘汰の検出を行った。

2. キイロショウジョウバエにおける連鎖不平衡 (LD) の季節変動と集団構造

ショウジョウバエの味覚嗅覚レセプター (*Cr*) 遺伝子群を用いた LD 解析は、平均 LD 量 (r^2) 変動 (秋<春) を明らかにした。この季節変動の原因を探るため、京都の2001年秋、2002年春の集団に加え、全国108地点から202個のX染色体を抽出し、X連鎖51多型マーカーのLDを調査した。その結果、全国と京都集団のLD量に有意差はなかった。しかし、51マーカー中11個の*Cr*遺伝子に注目すると、京都春集団でのみLD量が有意に上昇した。したがって、*Cr*遺伝子間のLD量の季節変動は、ボトルネック効果ではなく、自然選択の結果である可能性が示唆される。

◆教育内容

1. 学部

生物学科の必修科目として「基礎遺伝学」、「生物学実習I」を分担で担当しており、

「基礎遺伝学」では、集団遺伝学や量的形質の遺伝学について取り上げた。

選択科目として、「進化遺伝学」、「基礎遺伝学実習」「生物学演習」、を担当している。

「進化遺伝学」では、講義以外にも、DNAやアミノ酸配列の進化の特徴や、分子系統学的手法を理解することを目的として、コンピューター実習室での配列データの検索から配列のアラインメント、置換数の推定と分子系統樹を作成するという一連の作業行う実習も取り入れた。「生物学演習」では、Genomeの輪読、関連論文の講読の指導を行った。

2. 大学院

「集団遺伝学」、「集団遺伝学特論」では、最新の論文の講読を行った。遺伝カウンセリングコース対象の「特設集団遺伝学」では、Genetics in Medicine (6th Ed)のChapter6,7,15,20の講読及び、関連分野の問題演習を行った。「分子進化学」では、DNAやアミノ酸配列を用いたデータ解析の基本的手法について、講義と演習を行った。「魅力ある大学院教育」イニシアティブ「生命情報学を使いこなせる女性人材の育成」プログラム対象に「総合生命科学」を分担で担当した。また、公開セミナー「バイオインフォーマティクスへの招待」を企画・開催した。

◆Research Pursuits

1. Detecting single-generation selection acting on inversion polymorphism in *Drosophila*.

Much effort has been made to search signatures of past natural selection in DNA sequences, but currently acting selection is rarely detected in extant population because of uncommonness or low detection power of available methods or both. Inversion polymorphisms in *Drosophila* have long been thought to be under selection because of latitudinal clines in frequency. We suggest that strong selection is currently acting on *In(2L)t* polymorphism in the investigated *Drosophila melanogaster* population.

2. Seasonal changes in the scale of long-distance linkage disequilibrium and population structure in *Drosophila melanogaster*.

Linkage disequilibrium (LD) is a good indicator of demographic history of a population and possible natural selection. We studied the amount and pattern of long-distance LD in the *Drosophila melanogaster* genome in two seasonal fly samples (autumn and spring) from Kyoto, and a fly sample collected in 108 localities in and around Japan (entire Japan). We found a significant increase of the amount of LDs between the *Cr* genes in the spring sample when compared with the autumn and other samples. Environmental selective pressure may play an important role in shaping LD between this class of genes.

◆Educational Pursuits

1. Undergraduate course

For “Basic Genetics”, I lectured on the basic issues on Population Genetics and Genetics bases of complex inheritance. For “Evolutionary Biology” I lectured the basic issues on Evolutionary Biology. Also, I used the computer class room to teach the basic methods on molecular evolution hands on. Two laboratory courses were taught: “Biology lab I”, “Basic Genetic lab.” I supervised the seminar and research for three undergraduate students in my lab.

2. Graduate course

Recent research articles concerning each student's interest were discussed in 2 classes, “Population Genetics”, “Advanced course in Population Genetics”. In “Population Genetics for Genetic Counseling”, we read Chapter 6, 7, 15, 20 of Genetics in Medicine (6th Ed.) and discussed about the related topic. In “Molecular Evolution”, the methods for Molecular Evolutionary analyses are taught hands on. I also took part in the lecture and seminar for the initiative “Bioinformatics program”.

◆共同研究例

- ・ショウジョウバエ嗅覚・味覚受容体遺伝子の連鎖不平衡解析による自然淘汰の検出
- ・遺伝的組換え荷重のゲノムワイド解析

◆将来の研究計画・研究の展望

嗅覚受容体遺伝子のどの時期に起きた、どのアミノ酸変化により、匂い物質に対する親和性がどのように変わるのかを明らかにし、嗅覚受容体の進化にどのような力が働いているのか明らかにしたい。この研究により、嗅覚受容体の匂い物質の受容に関して、受容する匂い物質の種類を増やしているのか、種類を減らし特異性を高める方向に進化しているのかというような議論が初めて可能となる。また、昆虫のみならず、ヒトを始めとする哺乳類の嗅覚系の適応進化についても新たな知見をもたらすことが期待される。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・感覚系遺伝子の多様性と進化
- ・ショウジョウバエの実験集団遺伝学
- ・遺伝子発現量の多様性と進化
- ・ミトコンドリア DNA の分子進化

◆受験生等へのメッセージ

「生物好きの若者よ、21世紀の旗手となれ」

いろいろな分野でますます生物学を学んだ人材が求められています。皆さんが、本学で学んだことを活かし、21世紀の担い手になることを願っています。一緒に学び、考え、感動を共有していきましょう。

教員名	今野 美智子 (KONNO Michiko)
所 属	理学部化学科
学 位	理学博士 (1974 東京大学)
職 名	教授
URL/E-mail	konno@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

アミノアシル-tRNA 合成酵素 / tRNA / 核酸の認識 / タンパク質のフォールディング / 酵素反応機構

◆主要業績

総数 (1) 件

・Parameter landscape analysis for common motif discovery programs. Lecture Notes in Bioinformatics, Vol 3318: E. Eskin, C. Workman (Eds.) N. Poluliakh, M. Konno, T. Horton, & K. Nakai, Regulatory Genomics. VII, 79-87(2005).

◆研究内容

核酸の遺伝情報コドンの並びに正確に対応したタンパク質アミノ酸の並びを結ぶのが tRNA である。tRNA は、すべてに共通な 3 次構造を持ち、tRNA はアンチコドンの塩基の違いにより多様な構造をもつアミノアシル-tRNA 合成酵素 (aaRS) によって厳密に識別される。研究の目的は、tRNA のアンチコドンの 3 個の各塩基におけるそれぞれ独立な相互作用の機構を調べ、すべての tRNA に共通に働くかどうか解明することである。アンチコドン結合ドメインが同じヘリックス-バンドル構造を持つクラス Ia の aaRS 酵素に着目し、高度好熱菌由来 MetRS と IleRS の立体構造に引き続き、真性細菌、真核生物の酵母菌、古細菌である *Pyrococcus horikoshii* (P.h.) のコドンの使用頻度を比較し、その使用頻度に大きな差のあるもの、その中でも、真性細菌と古細菌で使用頻度に顕著の違いがあるもの：アルギニン、イソロイシン、グリシンのなかで他の種と比較可能な P.h. アルギニル-tRNA 合成酵素と tRNA の複合体の立体構造解析を決めた。

◆教育内容

学部学生への授業として、理学系学生のための化学と化学実験を担当している。これらの授業は、初歩の一般化学で、内容としては原子構造の発見につながる実験、水素の原子スペクトルの説明可能なモデルから水素の波動関数、周期律表に基づく原子の性質、酸と塩基の捉え方、基礎的無機の化学反応、分子運動論による気体の法則の解釈等について講義した。化学実験は、基礎的化学操作の習熟と化学反応の理解を深めるような簡単な化学反応の実験を設けた。化学科学生を対象にした授業として「物理化学」の中で、統計熱力学、回折法、分子の電気的・磁気的性質、高分子の性質等についての講義を担当した。修士の大学院の授業は、「構造科学特論」「構造科学特論演習」を担当し、水溶液中の分子の構造の決定要因である分子間相互作用とタンパク質を中心に立体構造と酵素反応機構等について解説した。学部 4 年の卒業研究と大学院修士に対し特別研究を指導した。

◆Research Pursuits

Transfer RNAs play an essential role linking sequences of DNA and sequences amino acids of proteins. The tRNAs have the common three-dimensional structure and are recognized by aminoacyl-tRNA synthetases which have several sizes and many kinds of forms. Object of study is to investigate the mechanism that the three bases of anticodon of tRNA bind three regions of each protein and whether their mechanisms or not work commonly. I have been paying attention to aaRSs of class Ia the anticodon binding domain of which possess a helix bundle structure. We have already determined the structures of *Thermus thermophilus* MetRS and IleRS. Next, compared codon usages among prokaryotes, eukaryote and archaeobacteria, we found out that those of Arg, Ile and Gly are largely different between them. Since crystal structures of ArgRS of other species have been already reported, we first determined a structure of a complex of *Pyrococcus horikoshii* ArgRS and tRNA(Arg) and compared with the former structures.

◆Educational Pursuits

I have lectures of 'general chemistry' and 'basic experimental of chemistry' for students in science field. The lecture of 'general chemistry' include introduction of classical experiments leading atomic structure, quantum wave function, atomic properties on the basis of periodic table and contents in order to be understood about hybrid orbital and molecular orbital, basic chemical reaction and law of gas on the basis of kinetic-molecular theory. Object of general chemical instrument is to learn basic chemical operation and to understand chemical reaction through the experiments. For student of department of chemistry, I have a lecture of 'physical chemistry' of the field of statistical thermodynamics, diffraction crystallography, electric and magnetic properties of molecules and properties of macromolecules. For master student, I have a lecture of 'structural science' and discuss about interactions between molecules determining the molecular structure in solution and structure of proteins and the mechanism of enzyme. I also give special study for senior students and master students.

◆将来の研究計画・研究の展望

原始生物においても存在したアミノアシル-tRNA 合成酵素の構造研究から、最終目的は、原始生物のアミノ酸は 20 種類なのか、コドンは何種類だったのかに対する解を得ること。生命の起源で僅かに異なる原始生物がそれぞれ僅かに異なる酵素をもちそれぞれに進化したのか、広い選択を持つ酵素があり進化したのかについて、異なった種によりコドンの選択性に大きな差のある酵素の構造比較から知見を得る。

◆受験生等へのメッセージ

21 世紀に解かなければならない問題として原始生命の発生と地球の環境問題がある。若者よ共に考えよう。



教員名	酒井 朗 (SAKAI Akira)
所 属	子ども発達教育研究センター
学 位	教育学修士 (1986 東京大学)
職 名	教授
URL/E-mail	http://www.kodomo.ocha.ac.jp/sakai@kodomo.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

教育臨床社会学 / 校種間連携 / 不登校

◆主要業績

総数 (7) 件

- ・酒井朗・千葉勝吾・広崎純子・濱野玲奈 2006「高校生の進路選択に関する教育臨床学的研究(2)―進路形成過程における転機が存在とジェンダーの影響―」『お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要』第3号,2006,97-112 頁
- ・酒井 朗『幼小中の連携教育による児童生徒の問題行動の抑制に関する教育臨床学的研究』平成 15-17 年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2)研究成果報告書(研究代表者:酒井 朗) 2006
- ・酒井朗・藤江康彦「幼小連携実践の今日的課題」お茶の水女子大学附属幼稚園・小学校『子どもの学びをつなぐ―幼稚園・小学校の教師で作った接続期カリキュラム―』東洋館出版社、2006、107-124 頁。

◆研究内容

2005年度は大きく4つのプロジェクトを進めた。

(1) 幼小連携に関する調査

附属幼稚園小学校とのカリキュラム開発の成果を本にまとめた。

(2) 小中移行期の学校不適応に関するパネル調査

A自治体において、2004年度に小学校を卒業した生徒を中1の2学期まで追跡調査し、小中移行にともなう学校不適応の増加を解明した。

(3) 不登校対策のネットワーク構築に関する研究

A自治体における不登校問題に関連する諸機関のネットワークの現状を解明し、対応策の提言を行った。

(4) 高校生の進路選択支援に関する教育臨床学的研究

X商業高校における高校生の進路選択支援の取り組みから、進路形成過程におけるジェンダーの影響、および支援活動を通じてのボランティアの成長について論文にまとめた。

◆教育内容

学部：教職科目「生徒指導の研究」での指導とともに、附属学校や近隣の学校での学生インターンシップのとりまとめを行った。

大学院(前期課程)：ゼミや夜間ゼミを通じて、教育臨床社会学に関する基礎的文獻購読と質的方法論の指導を行った。また、1年生2年生併せて10名以上の修士論文指導を主たる指導教員として行った。

大学院(後期課程)：各自の研究の遂行に対して指導した。学位論文のとりまとめに向けて課程博士1名、論文博士1名の準備に取りかかった。

◆Research Pursuits

In 2005, I was engaged in the research projects as below.

(1) An participatory research project on the transition process from a kindergarten to an elementary school.

We published a book with the attachment schools' teachers on the curriculum development for easing transitional pressure among pupils.

(2) A panel study to capture the changing process of the degree of students' adjustment during the transition from elementary schools to middle schools.

A three-waved panel study students was conducted to examine their school adjustment in "A" district in metropolitan Tokyo.

(3) A sociological study of the supporting network to assist "Futoko (absentee)" students.

We inspected the relationship among schools, a counseling center, a special classroom for Futoko students and NPO organizations and evaluated the functioning as network to support those students in "A" district.

(4) A clinical study of education to help students to enter colleges from a commercial high school.

◆Educational Pursuits

Undergraduate level: I had a class of "student's guidance" for teacher preparation course and managed an internship program for students who volunteered to assist students' studying at the attachment schools and a middle school nearby.

Graduate level (Master course): I had three seminars to teach the foundations of clinical sociological study of education and basics of qualitative methodology for education.

Graduate level (Doctor course): I assisted each student to go on her own study project. I helped two of them to prepare for their doctoral dissertation theses.

◆共同研究例

- ・ 近隣自治体教育委員会と共同で不登校対策委員会を設置し、基礎的調査を実施
- ・ X商業高校において、生徒の進路選択支援活動を通じ、成果を論文にまとめた
- ・ 幼小連携、幼小中連携に関する実態調査やカリキュラム開発に従事

◆将来の研究計画・研究の展望

不登校対策における学校・地域・関連機関のネットワーク支援の在り方について、全国調査やケーススタディを実施し、現状と課題を解明する。

X商業高校での支援活動に基づく研究成果を本にまとめる。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・ 不登校問題のネットワーク形成に関して、自治体等との連携が可能。
- ・ 校種間連携に関して、文科省や自治体との連携が可能。

◆受験生等へのメッセージ

学部では教職科目など一部しか担当しておりませんが、現代日本の教育問題について広く考えさせるテーマを提示していきたいと思います。

大学院では、研究者養成よりも、教育の実務家、管理職の方々の研修の一環として幅広く教育活動を進めていきたいと思います。

教員名	榊原 洋一 (SAKAKIHARA Yoichi)
所 属	子ども発達教育研究センター
学 位	医学博士
職 名	教授
URL/E-mail	sakakihara.yoichi@ocha.ac.jp

◆研究キーワード

小児科学 / 小児神経学 / 発達障害

◆主要業績

- ・ Kubota M, Nagura M, Hirose H, Kimura I and Sakakihara Y. A magnetoencephalographic study of negative myoclonus in a patient with atypical benign partial epilepsy. *Seizure*, 14:28-32,2005.
- ・ Hirose H, Kubota M, Kimura I Yumoto M, Sakakihara Y. Increased right auditory cortex activity in absolute pitch possessors. *Neuroreport* 16:1775-1779, 2005
- ・ 榊原洋一 特別支援教育のためのアスペルガー症候群の医学 学研 2005

◆研究内容

研究の主要テーマは

- (1) 発達障害の臨床と脳科学的研究
- (2) 子どもの社会性発達の追跡調査
- (3) メディアの子どもの脳活動に及ぼす影響

の2つである。

(1) については、注意欠陥多動性障害の子どもの臨床の中から、本人の自尊感情の発達について観察を重ねている。自尊感情の発達の阻害が、ADHDの子どもの社会適応の阻害要因になっているという仮説の検証を目指している。(2)は科学技術振興機構のコホート調査であるが、乳幼児の神経観察によって、将来の社会性の発達を予測することのできる観察パッケージの開発を行っている。観察時の子どもの行動をすべてビデオに収め、その解析を予定している。

(3) は、乳幼児がテレビ画像を見たときの脳内活動。特に注意 (attention) について、多チャンネル脳波計による前頭部のガンマ波の測定を通じて解析している。

◆教育内容

アプリカの寄附講座を担当し、主に現職保育士、幼稚園教諭に対して、「子どもの病気とそのメカニズム」「乳幼児の発達と脳科学」2コマの講義を行ったが、各講座とも数名の学部生を受け入れている。

子どもの病気とそのメカニズムでは、医学部で行われている系統講義と同レベルの講義を行い、保育現場で遭遇する頻度の高い小児疾患について専門レベルの知識を持つことを目指した。

乳幼児の発達と脳科学では、近年の脳科学の最新のデータを提示し、乳幼児の神経発達についての深い理解が可能になるようにした。

また社会臨床論コースの大学院生に対し、発達障害概論の講義と関係文献の抄読を行った。

◆Research Pursuits

The main objectives of our research were as follow.

- (1) Clinical and scientific research on developmental disabilities
 - (2) Development of sociability in infants and children
 - (3) Neuroimaging study of media exposures in infants and children
- (1) It is postulated that stunted development of self-esteem in children with ADHD (attention deficit hyperactivity disorder) is responsible for the conduct disorder among them. We assessed this relationship in clinical setting.
- (2) In a prospective cohort study conducted in Osaka, we have developed a diagnostic package of neurological examinations for infants to predict the future development of developmental disabilities such as ADHD and autism.
- (3) Using multi-channel EEG (EGI), we studied the power spectra of gamma oscillation in infant to quantitatively measure the degree of attention to visual stimuli.

◆受験生等へのメッセージ

私の担当講座は、アプリカによる寄附講座で、主な対象者は、現職保育士、幼稚園教諭ですが、2005年度以降入学の学部学生の方も受講できます。

小児医学、脳科学、障害児保育学、世界の保育事情、絵本、おもちゃ、メディア学など、子どもの発達と育児に関する最新の知識を得ることができます。

学部学生の方々の受講をお待ちしております。

教員名	坂元 章 (SAKAMOTO Akira)
所 属	文教育学部人間社会科学科心理学講座
学 位	博士 (社会学) (1992 東京大学)
職 名	教授
URL/E-mail	http://www.hss.ocha.ac.jp/psych/socpsy/saka_member/sakmo-sidou-top.htm sakamoto@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

メディア / 心理学 / テレビ / テレビゲーム / インターネット

◆主要業績

総数 (57) 件

- ・ Sakamoto, A. (2005) Video games and the psychological development of Japanese children. In I. Sigel (Series Ed.), D. W. Shwalb, J. Nakazawa, & B. J. Shwalb (Vol. Eds.), *Advances in applied developmental psychology: Theory, practice, and research from Japan*. Greenwich, CT: Information Age Publishing. Pp. 3-21.
- ・ 坂元 章 (研究代表者) (2006, 3) 青少年団体におけるメディア・リテラシー教育の取組と家庭・学校・地域の連携 ―東アジアを中心に (第2期)― 平成 16 年度文部科学省委託「青少年を取り巻く有害環境対策の推進」調査研究事業報告書
- ・ 坂元 章 (2005, 9) メディア心理学とは何か ―メディアと人間の関わりを研究する― 内田伸子 (編) 心理学 ―こころの不思議を解き明かす― 光生館 Pp. 233-252.

◆研究内容

テレビ、テレビゲーム、インターネット、ケータイなどのメディアが人間の能力やパーソナリティにどのように影響するか、また、それらのメディアを教育、福祉、作業にどのように有効利用できるかについて主として心理学的な方法を用いて研究している。2005 年度においても、それらのメディアの影響について、いくつかの実験研究や調査研究を行った。また、メディアと人間が適切に関わるためにはどのような政策的、社会的、教育的取り組みがありうるかについても検討している。2005 年度においては、他の研究者とともに、文部科学省から委託された、中国、韓国、台湾、シンガポールのメディア・リテラシー教育についての視察調査プロジェクトを実施し、報告をまとめた。

◆教育内容

学部および大学院において、社会心理学に関する授業を担当しており、その領域の研究、理論、方法などの指導を行っている。卒業論文、修士論文、博士論文の研究においては、メディアに関するテーマを持つ学生が多く、その分野の指導を行っている。2005 年度においては、卒業論文では「携帯電話による e ラーニング・コンテンツの内容分析」、修士論文では「テレビゲームと社会的適応の向上」「中国と日本の新聞はお互いをどう伝えているか」、博士論文では「アパレル CAD 教育システムの開発」などのタイトルの論文があった。

◆Research Pursuits

I have been studying how such media as TV, video games, the Internet, and mobile phones can affect human ability and personality and how the media can be usefully used for education, welfare, and work, mainly using psychological methods. In the fiscal year of 2005, I still conducted some experiments and surveys to investigate the effects of those media. I have also been examining which kinds of administrative, social, and educational plans should be possible to have people form appropriate relationships with media. In the fiscal year of 2005, I conducted an interviewing study project of media literacy education in China, Korea, Taiwan, and Singapore trust by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology with other researchers, and we presented a result report to the ministry.

◆Educational Pursuits

I have some classes on the field of social psychology for graduate and undergraduate school students, and I have been teaching them its research, theories, methods, etc. In addition, most students belonging to my laboratory study issues on media to make their bachelor's, master's, and doctoral theses, and therefore I have been engaging in the guidance of the field. As for the fiscal year of 2005, the titles of some of the theses produced in my laboratory are like this: "The analysis of contents of e-learning with cell phones" (bachelor's thesis), "Videogames and the improvement of social adjustment" (master's thesis), "How did Chinese and Japanese newspapers report issues on each other country?" (master's thesis), and "The development of apparel CAD teaching systems" (doctoral thesis).

◆共同研究例

- ・韓国・同徳女子大学との共同によるオンラインゲームと国際交流に関する研究
- ・米国・アイオワ大学との共同によるテレビゲームの暴力シーンに関する研究
- ・米国・カリフォルニア大学との共同によるテレビの暴力シーンに関する研究

◆将来の研究計画・研究の展望

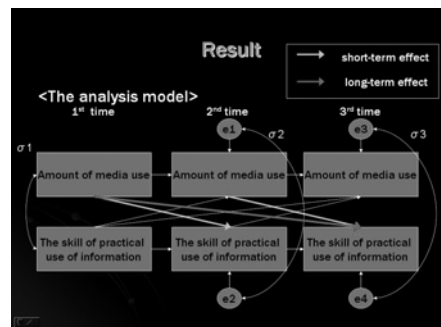
現在、メディアの心理学的研究について、いくつかのテーマに関する研究を進めているが、今後は、それぞれの研究を充実させるとともに、この分野の研究の活性化や、その「メディア心理学」という一つの研究領域としての確立に尽力したい。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・テレビゲームと教育に関する研究
- ・メディアと脳に関する研究
- ・メディア・コンテンツ制作者に関する研究

◆受験生等へのメッセージ

「メディアと人間の関わり」について知りたい方は、「メディアと人間の発達」(学文社、坂元 章編、2003 年)をご参照ください。とくにテレビゲームについては、「テレビゲームと子どもの心」(メタモル出版、坂元 章、2004 年)をご覧ください。



教員名	坂本 佳鶴恵 (SAKAMOTO Kazue)
所 属	人間文化研究科比較社会文化学専攻
学 位	社会学修士 (1984 東京大学)
職 名	教授
URL/E-mail	

◆研究キーワード

コミュニケーション / アイデンティティ / 社会意識 / 家族 / ジェンダー

◆主要業績

総数 (5) 件

- ・『アイデンティティの権力——〈語る／聴く〉主体の成立は可能か』(新曜社、2005) p.327
- ・「メディアが編む国家・世界そして男性——サッカーゲームの言説分析」『言説分析の可能性』(佐藤俊樹・友枝敏雄編) 東信堂 p.89-122
- ・「女性雑誌にみるジェンダー概念の使用法」『日本女性文学大事典・資料編』(市古夏生・管聡子編) 日本図書センター p.367-372

◆研究内容

1. 2005 年度刊行した著作『アイデンティティの権力』において、バトラー、アルチュセール、カルチュラルスタディーズのアイデンティティ論と社会学のアイデンティティ論との接合をおこない、社会学のアイデンティティ論に権力の視点を導入することを試みた。
2. 携帯電話の会話を、エスノメソドロロジーの手法で分析し、携帯電話特有のコミュニケーションのルールを明らかにし、論文とした。
3. 2002 年日本・韓国でおこなわれたワールドカップサッカーをめぐるテレビ・新聞報道の言説分析をし、その成果が論文として出された。
4. 1950 年代の女性雑誌の言説分析をおこない、その成果の論文が刊行された。また、女子大学生を対象とし、女性雑誌の読者調査をおこなった。
5. ロボット工学の関係者との議論や、新たな道具の開発を検討することにより、コミュニケーション領域での工学と社会学の共同研究の可能性を探った。この点については、計測自動制御学会で、共同で学会発表(「相互作用と賢さに関する一考察——工学と社会科学の連携」)をおこなった。

◆教育内容

学部では、各自のテーマ発表と、インタビュー調査の身近で良質な具体的分析を学ぶことを目的とした。E.ホックシールド『セカンド・シフト』、J.ロバートソンの『踊る帝国主義』を読み、議論をおこなった。大学院では、各自のテーマ発表のほか、院生と話し合っ
て決めたテキストを議論した。E.Goffman の Gender Advertisement、Brunsdon らの Feminist Television Criticism, McRobbie の In the Culture Society, Salih の Judith Butler をとりあげた。基礎ゼミでは、社会学の古典である『スティグマの社会学』を読み、質的調査の一端を紹介した。NPOインターンシップでは、全体の運営、広告・宣伝のNPO団体への学生派遣を担当した。このほか、卒論の個人指導・共同指導、修士論文個人指導・共同指導、博士論文審査を担当した。

◆Research Pursuits

1. I published a book, *Power of Identity* in which I argued how Althusserian and cultural studies' view on identity contribute identity in sociology.
2. Analyzing conversation over mobile phone, I showed a communication rule particular to mobile phone.
3. I published an article on football coverage of World Cup 2002 in Japan.
4. I conducted a survey of readers about Japanese women's magazines.
5. I explored collaboration with robotics on communication theory and appliance.

◆共同研究例

- ・現代および未来の家族のイメージの提供

◆将来の研究計画・研究の展望

1. 言説分析、会話分析などの理論的背景となる構築主義について、そのアプローチ、利点と問題などをまとめる。現在執筆中。共同執筆本の一部として発表される予定。
2. サッカー報道の言説分析を海外で学会発表。
3. 工学者との共同研究を、それ自体をコミュニケーション問題として再検討。
4. 女性雑誌の研究について、成果をまとめる。

◆受験生等へのメッセージ

現代社会では、さまざまな情報が氾濫しています。いかに情報を集め、その良否を確かめ、自分で考え、自分の言葉で語っていくか。私の授業が、そうしたことを、学んでいける場になればと思っています。

◆Educational Pursuits

At faculty level, I mainly aimed at teaching quality research especially interviews and discourse analysis. I picked up some books to read: *Second Shift* by Hochschild, *Takarazuka* by Robertson. For freshman, I introduce qualitative approach using *Stigma* by Goffman. At graduate level, I took much time on discussing students' reports written on their own theme. We also read books and articles about gender and culture: *Gender Advertisement* by Goffman, *Feminist Television Criticism* by Brunsdon, *In the Culture Society* by McRobbie, and *Judith Butler* by Salih.

教員名	作田 正明 (SAKUTA Masaaki)
所 属	理学部生物学科
学 位	理学博士 (1986 東北大学)
職 名	助教授
URL/E-mail	msakuta@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

二次代謝 / 植物色素 / 代謝進化 / 発現調節 / 転写制御

◆主要業績

総数 (3) 件

・ Takeda, K., Osakabe, A., Saito, S., Furuyama, D., Tomita, A., Kojima, Y., Yamadera, M. and Sakuta, M. Components of protofucan, a blue pigment from the blue flowers of *Centaurea cyanus*. *Phytochemistry* 66: 1607-1613. (2005)

・ Shimada, S., Inoue, T.Y. and Sakuta, M. Anthocyanidin synthase in non-anthocyanin-producing Caryophyllales species *Plant J.* 44: 950-959. (2005)

・ 作田正明 植物バイオテクノロジーの新たな挑戦 *BIOINDUSTRY* 22 : 5-8. (2005)

◆研究内容

花色などにみられる赤色の多くは、アントシアニンにより発色されている。これに対し、ナデシコ目植物ではアントシアニンは合成されず、その赤色はベタシアニンにより発色される。そこで我々は、高等植物に広く分布するアントシアニンが、なぜナデシコ目植物には存在しないのかという点に注目し、解析を試みている。

まず、アントシアニン合成に特異的な反応を触媒する DFR、ANS の両酵素に注目し、解析を試みた。その結果、ナデシコ目にも DFR、ANS のオルソログが存在し、これらは酵素としての機能を保持していることが明らかとなった。次に発現パターンを解析したところ、DFR、ANS は種子のみに特異的に発現しており、他の器官での発現はほとんどみられなかった。これは、ナデシコ目植物でアントシアニンが合成されないのは、両遺伝子の器官・組織特異的発現制御に起因することを示唆しており、アントシアニン合成と種子におけるタンニン合成の代謝進化という点において極めて興味深い。

◆教育内容

2005 年度は、大学院および学部において、それぞれ 4 つの授業を行った。授業の内容としては、植物生理学、植物生化学といった基礎生物学から代謝工学、遺伝子組換え植物といった応用生物学までの広い範囲を扱った。授業では、学生にわかりやすく、受講者全員が授業内容を理解できるよう心がけた。また研究室では、博士課程後期 4 名、博士課程前期 3 名、学部 2 名の学生の研究指導を行った。このうち博士課程後期学生 1 名は、今年度博士 (理学) の学位を取得した。

◆Research Pursuits

Anthocyanins and betacyanins, two types of red pigment, never occur together in a plant. Although anthocyanins are widely distributed as flower and fruit pigments in higher plants, betacyanins have replaced anthocyanins in the Caryophyllales. The evolutionary gain and loss of the two pigments remain a mystery, as do the molecular bases underlying their mutual exclusion.

The accumulation of flavonols in the Caryophyllales suggests that the step(s) of anthocyanin biosynthesis from dihydroflavonols to anthocyanins could be blocked in the Caryophyllales. Some insights can be gained from DFR and ANS, which are involved in the biosynthetic pathway from dihydroflavonols to anthocyanins. The cDNAs encoding DFR and ANS were isolated from the Caryophyllales. Recombinant DFRs convert dihydroflavonol to leucoanthocyanidin. The ability of recombinant ANSs of the Caryophyllales is also comparable to that of ANSs in anthocyanin-producing plants. Overexpression of *Spinacia* ANS complemented the ability of anthocyanin synthesis in the *Arabidopsis* mutants. These results revealed that the Caryophyllales possess functional ANS.

The expression profiles showed that DFR and ANS were not expressed in most tissues and organs except seed in *S. oleracea*. These results indicated that the suppression or limited expression of the DFR and ANS may cause the lack of anthocyanin in the Caryophyllales.

◆Educational Pursuits

In 2005, I conducted four classes each in undergraduate and graduate courses. The course contents include both basic biology such as plant physiology or plant biochemistry and applied biology for instance metabolic engineering, GMO (gene modified organisms). I have tried to make classroom coursework easier to understand and get my teaching across to all students attending. Four Ph.D., three master's and two undergraduate students work in my lab under my supervision. A Ph.D. student earned her degree in 2005.

◆共同研究例

- ・イチゴ培養細胞におけるアントシアニン生産：石川島播磨重工業
- ・ブドウ培養細胞におけるアントシアニン合成：理研植物科学研究センター
- ・ブラシノステロイドシグナル伝達系の解析：理研中央研

◆将来の研究計画・研究の展望

高等植物の二次代謝は、一次代謝より派生し、進化の過程において多様化したものと考えられている。本研究は、この進化・多様性に関する古くからの仮説に対する分子レベルからの実証的研究である。この研究が契機となり、高等植物の二次代謝が分子進化研究のための優れたモデルとして広く認知されることを期待している。また一方で、花色はバイオテクノロジーの格好のターゲットであり、本研究が新しい花色を持つ植物の創出に大きく寄与することが期待される。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・新規花色を持つ植物の分子育種
- ・植物をターゲットとした有用物質生産法の開発

◆受験生等へのメッセージ

私たちは、「花の色」を指標として、植物の分化や環境に応答した遺伝子発現の制御機構、さらには植物の進化を遺伝子レベルで解析するという研究を行っています。「花の色」に代表される植物色素は、紫外線や温度（低温による紅葉の誘導）により合成が促進され、生合成系の遺伝子群が誘導されることから、植物の環境応答の有効なモデル系です。また、深紅の花でも色素が合成・蓄積されるのは表皮の細胞一層のみで内部は白色（リンゴやサツマイモの切り口と一緒です。）であることから分化の指標として優れています。さらに、花の色は受粉を助ける昆虫や種を運ぶ鳥たちと共に進化してきたといわれており、花色の合成系の遺伝子解析により、植物の進化をうかがい知ることができます。このように、私たちの研究は、生物学のきわめて基礎的な部分に着目したのですが、見方を少し変えると最近話題の「青いバラ」に象徴される、植物バイオテクノロジーの基盤技術でもあります。

教員名	酒向 治子 (SAKO Haruko)
所 属	文教育学部芸術・表現行動学科舞踊教育学講座
学 位	博士 (人文科学)
職 名	助手
URL/E-mail	http://www.li.ohca.ac.jp.geijutsu/buyou/sako@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

舞踊 / 身体表現 / ジェンダー

◆主要業績

総数 (4) 件

- ・論文「コンテンポラリー・ダンスにおける静穏の身体」『舞踊と身体表現』日本学術会議・文化人類学民俗学研究連絡委員会編集 東京：株式会社ビュープロ 2005 年 pp.106-117.
- ・論文「ダンスとジェンダー研究 - A. デリー (Ann Daly) の〈male gaze〉をめぐる理論的変遷について - 」『上演舞踊研究』上演舞踊研究会 第6号 pp.25-28
- ・論文「コンテンポラリー・ダンスにおけるジェンダー・イメージ—M. カニングハムの舞踊をめぐる—」『若手研究者フォーラム報告書』美学会編 2005 年

◆研究内容

本年度はダンスとジェンダーに関する研究を中心に行った。まず (1) ダンスとジェンダー研究の第一人者アン・デリーが 1990 年代を通し著した male gaze に関連する論文を分析することで、未だ歴史が浅いダンスとジェンダー研究の主要な分析視角となってきた male gaze 理論がダンス研究に何を切り開き、どのような課題を投げかけたかについて考察を行った。さらに、(2) ジェンダーの視点による劇場舞踊史の文脈で悪しきバレエの伝統を代表する動きの語彙とされている男性による女性のリフトに着目し、現代舞踊作家マース・カニングハム作品におけるリフトの問題を検討すると共に、通常看過されがちな創作活動初期 (1950・60 年代) に表れたダンサー個性重視の作風に改めて注目することで、カニングハムダンスにおける「ジェンダー・ニュートラリティ」の革新性を明らかにした。

◆教育内容

授業としては、「スポーツ健康実習」(ダンス)の代行を行う(通年)。
それ以外では、年間を通して行われる様々な舞踊教育学講座の舞踊パフォーマンス行事(毎年春に行われる舞踊教育学講座の創作舞踊公演等)の指導補佐として、実技の指導にかかわった。

◆Research Pursuits

This year, the main research activities were to study contemporary dance performance from the standpoint of gender. Firstly, I focused “the male gaze,” which comes from feminist film theory, is the concept that refers to the way in which the structure of representation is gendered; the possessive gaze is “male,” while the passive object of the gaze is “female.” Applying the concept to historical studies of dance, Ann Daly, an authority who has contributed to the development of the research field <dance and gender>, published a paper titled “The Balanchine Woman of Hummingbirds and Channel Swimmers.” in 1987. Since then, the concept of male gaze came to be acknowledged rapidly in dance studies. By examining Daly’s papers, I tried to clarify in what way the male gaze was useful to dance study, and what are the limitations and the problems of the male gaze.

Secondly, I analyzed Merce Cunningham’s choreography from the viewpoint of gender, focusing on “gender-neutrality”, the concept which considers the differences between male and female dancers are not important to the aesthetic qualities in dance material. Especially discussing partnering in Cunningham’s choreography in which men usually support and lift women in quite traditional ways, dance critics and scholars have been criticized the conservative aspect contrary to his ideal of unisex choreography. However, this paper discusses a radical aspect in Cunningham’s works in 1950s and 60s, gender-neutrality originated from the diversity of dancers which does not exclude sexuality as seen in his later works.

◆Educational Pursuits

Classes I had : PE Class(Dance)

◆将来の研究計画・研究の展望

舞踊をジェンダーの視点から研究する「ダンスとジェンダー」は、欧米の舞踊学においてはなくてはならない研究領域となっています。一方日本では資料の整備の問題もあり、未開拓の状態にあります。今後も引き続きジェンダーの視点によるダンス研究を続け、日本における「ダンスとジェンダー」という研究領域の発展に寄与できればと考えています。また、並行して創作ダンスの指導法の研究も行っていく予定です。

◆受験生等へのメッセージ

お茶の水女子大学の文教育学部芸術・表現行動学科舞踊教育学講座は、舞踊やスポーツを実技・研究の両面から深くアプローチすることが可能です。少人数制で一人一人の個性に合わせた指導が行われるので、現段階で大学入学後にどのように研究（あるいは実技）を行うか迷っている人でも、全く問題ありません！舞踊やスポーツが好きであれば、可能性は多方向に開かれていると思います。

教員名	佐々木 成江 (SASAKI Narie)
所 属	人間文化研究科特設遺伝カウンセリング
学 位	理学博士 (東京大学大学院理学系研究科生物科学専攻)
職 名	講師
URL/E-mail	narie@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

ミトコンドリア核様体 / ミトコンドリアヒストン様タンパク質 / DNA 複製と転写

◆研究内容

生体内において、ミトコンドリア DNA (mtDNA) は、タンパク質により高次に組織化された、ミトコンドリア核構造をとっている。このミトコンドリア核の主要構成タンパク質は、HMG-box を持つ塩基性タンパク質であり、細胞核におけるヒストンと似た働きをしていると考えられている。このミトコンドリア核が、複製・転写・修復の場であり、mtDNA の機能的なユニットとなっている。実際に、真正粘菌から単離したミトコンドリア核は、in vivo での DNA・RNA 合成能を保持する。我々は、この mtDNA の機能的ユニットであるミトコンドリア核の構成タンパク質を解析することで、そこに含まれる新規の mtDNA 機能制御因子の探索、同定、機能解析を行っている。

◆Research Pursuits

Mitochondrial DNA molecules are packed into the highly organized structure, which is called a mitochondrion nucleoid. The most abundant protein is a basic protein having HMG-box regions, and it plays a mitochondrial histone-like role for nucleoid structure. The mitochondrial nucleoid is a functional unit for DNA replication and transcription. We analyze proteins in the mitochondrial nucleoid to identify new functional proteins for DNA replication and transcription in mitochondria.

◆共同研究例

・マラリアやヒトのミトコンドリア核様体の研究

◆将来の研究計画・研究の展望

本研究で網羅的にミトコンドリア核様体構成タンパク質を同定すれば、ヒトを含めた mtDNA の機能制御機構の全貌解明が実現できる。生体内で mtDNA は、活性酸素などの変異要因に曝され、非常にストレスを受けやすい環境にあり、その変異は、ミトコンドリア病や糖尿病、癌などの疾患の他に、老化などにも関わっている。本研究の進展により、未だ解明されていない mtDNA の修復機構、原因遺伝子の同定、さらに、その治療方法の発見や予防へと繋がっていくことが期待できる。

◆受験生等へのメッセージ

本大学には、生命系や心理系の多くの先生方がおり、遺伝カウンセリングコースの学生は、多彩な視点から学ぶことができます。また、初心者の方でもきちんと学べるように、基礎的な学問の授業を充実させております。遺伝カウンセラーにご興味のおありの方は、安心していらしてください。

教員名	佐々木 泰子 (SASAKI Yasuko)
所 属	国際教育センター
学 位	文学修士 (1978 お茶の水女子大学)
職 名	助教授
URL/E-mail	http://jsl2.li.ocha.ac.jp/kyookanHP/sasa.html ysasaki@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

コミュニケーション / 談話分析 / 会話分析 / 相互行為

◆主要業績

総数 (5) 件

- ・ 討論における「じゃ」の考察 - 討論の談話とフォローアップ・インタビューの質的分析を通して -
- ・ 討論における成員の役割 - 役割が遂行されなかった事例に着目して -
- ・ 大学初年次教育と言語表現教育との接点③ーオーストラリアの初年次教育に学ぶー

◆研究内容

私達は学校や職場、あるいは家庭で日常的に他者と会話をしている。そして、その中には複数の人々の間で考えや意見をまとめるという行為がある。だが、そのプロセスについては、普段、あまり意識することはない。しかし、例えば、異なる文化圏の出身者がその会話に含まれていたらどうだろう。同文化間の参加者だけの会話の時とは合意あるいは不合意にいたるプロセスが異なることが予想されよう。そのような問題意識のもとに複数の参加者間のディスカッションの分析を談話分析の手法を用いて行った。

その際、コミュニケーションを話し手から聞き手への意味の伝達という一方向的なモデルとして捉えるのではなく、話し手・聞き手の相互行為によって意味が作り上げられていく過程と捉え、会話に現れる談話標識、沈黙、役割意識などを手がかりに分析を試みた。

その結果、私達は、談話標識や沈黙などの言語、非言語を用いてディスカッションにおける自分の役割を果たしつつ、意味の生成に貢献していることが明らかになった。

◆教育内容

2005年度の学部及び大学院における教育内容の重点は以下の通り

【学部】

留学生を対象とした授業では、書くという行為に必要とされる日本語を学ぶ。テーマに関するブレインストーミング、作文の推敲過程に参加者同士のディスカッションなど協働的学習を取り入れた。また日本語日本文化研修留学生を対象とするクラスでは、1年間の研修のまとめとして修了レポートを書くという課題をプロジェクトワークを通して達成する。

日本語教育基礎コースの授業では、将来日本語教師を目指す学生を対象に、日本語を母語とする人と日本語を母語としない人のより良いコミュニケーション場面をデザインする方法について実践を通して学ぶ。

【大学院】

大学院生を対象としたクラスでは、談話分析・会話分析について実際にデータの収集・記述を通して学びつつ、文献講読を通して談話分析・会話分析への理解を深める。指導学生のテーマは例えば、チャットの会話の研究や会話における話題転換の中日比較研究など。

◆Research Pursuits

My current research is primarily concerned with the disciplines of discourse analysis. I am concerned to explain the characteristics of the Japanese written and spoken discourses.

In the academic year 2005, the main focus of attention of my research was set on the interaction of individuals in the experimental multi-participants' discussion situations in order to analyze how they negotiate and reach an agree

◆Educational Pursuits

In the undergraduate program, I taught a Japanese language classes for foreign students and a teachers' training course of Japanese as a second language. My classes were designed to develop the ability of the interaction with multicultural participants.

In the graduate program, I taught the methodology of discourse analysis and conversation analysis. Based on the alternative methods, students were asked to describe their interactions with their friends and neighbors and to investigate how people negotiate and reach an agreement.

◆共同研究例

- ・ 幼児から大学生までのコミュニケーション能力育成モデルの開発
- ・ 大学での学習を支える日本語表現能力育成カリキュラムの開発
- ・ 日本語学習者による日本語発話と、母語話者との対照データベース

◆将来の研究計画・研究の展望

同一文化内のコミュニケーションだけでなく異文化間のコミュニケーションの実態を明らかにすることを通して、多文化共生社会に資するコミュニケーションのあり方についての考察を行った。この成果に加えて、幼児から大学生までのコミュニケーション能力の発達モデルの開発、大学での学習を支える日本語表現能力育成カリキュラムの開発を目指す。

◆受験生等へのメッセージ

日本社会の多文化化に伴い、私達はコミュニケーションスタイルの異なる人たちとコミュニケーションをする機会が今後ますます増えていくことが予想されます。そのような社会にあって言語の果たす役割はこれまで以上に重要になると言えるでしょう。

また私たちのコミュニケーションには対面の会話だけではなく、電話による会話、携帯メールやインターネットを媒介としたチャットなど様々な手段が考えられます。皆さん自身や周りの人たちの言語行動を分析することを通して、言語を用いて私たちはどのようにコミュニケーションを成し遂げているのか、それらは文化背景の違いによって異なるのかなどについて一緒に考えてみませんか。

教員名	佐々貴 義式 (SASAKI Yoshinori)
所 属	人間文化研究科国際日本学専攻
学 位	MA in English as a Second Language (applied linguistics) (1986 ハワイ大学)、PhD in Education (educational psychology) (1992 イリノイ大学)
職 名	助教授
URL/E-mail	http://jsl2.li.ocha.ac.jp/kyookanHP/yoshi/index.html http://sa_yoshi.at.infoseek.co.jp/ocha/sa_yoshi@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

心理言語学 / 第二言語習得論 / 外国語教育学 / 日本語教育学

◆主要業績

総数 (3) 件

- ・佐々木嘉則 (研究代表者・編著) (2005) 平成 14～16 年度 科学研究費補助金 基盤研究 (C) (2) 「第二言語としての日本語習得研究のレビュー論文集編纂と刊行・オンライン配信」研究成果報告書
- ・お茶の水女子大学日本言語文化学会『言語文化と日本語教育』増刊特集号編集委員会 (編集責任者 佐々木嘉則) (2005) 『第二言語習得・教育の研究最前線 2005 年版』
- ・宇根谷孝子、梅田千砂子、佐々木嘉則、福多文子 (2005) 平成 14～16 年度 科学研究費補助金 基盤研究 (C) (2) 「インターネットによる遠隔地日本語予備教育システムの開発と効果の検証」研究成果報告書

◆研究内容

私の研究目標と実践

目標 1 : 第二言語習得・教授研究の最新の成果を総括した論集を継続発行する。

実践 :

(1) 言語習得・教授に関する総括論文集を編集発行した。

(2) 総括論文の執筆を目指す若手研究者のためのワークショップを開催し、特にテーマ選択・参考文献および対象範囲の設定と切り口・章構成を中心に指導助言を与えた。

目標 2 : 言語処理および習得に関する研究を進める。

実践 : 実験心理言語学に関する英語総括論文を執筆した (共著論文の筆頭著者)。この論文を収めたハンドブックは、2006 年にケンブリッジ大学出版会から出版された。

目標 3 : 若手研究者の研究能力を伸ばすノウハウを蓄積する。

実践 :

(1) 研究計画能力の養成に関する発表を 2005 年の大学教育学会全国大会でおこなった。

(2) 出版社の依頼を受け、上記テーマに関する書籍を執筆中である。

◆教育内容

私の教育目標と実践

目標 1 : 学士課程新入生のアカデミックリテラシースキルを伸ばす。

実践 : 「アカデミックリテラシー入門」と題する基礎ゼミ授業を開講し、アイデアの視覚表現、アウトライン作り、段落構成、パワーポイントによるプレゼンテーション、発表資料作成を中心に実習を行った。

目標 2 : 第二言語習得論および心理言語学に関する専門知識の養成

実践 :

次の授業科目を開講した。

- (1) 学士課程における、第二言語習得論講義・演習
- (2) 修士課程における、心理言語学講義・演習・実習
- (3) 博士後期課程における、第二言語習得論演習

次の大学院生向け勉強会を主宰・支援した。

- (1) 言語習得理論に関する輪読会
- (2) 認知学習に関する輪読会

目標 3 : 学生の研究・論文執筆能力および研究者としての自覚を高める。

実践 :

(1) 修士課程在学者のための応用言語学研究法実習を開講した。

(2) 修士課程在学者および博士後期課程在学者のためにそれぞれ、総括論文執筆のためのワークショップを開いた。

◆Research Pursuits

My research goals and practices:

Goal 1: Compiling state-of-the-art reviews on second language acquisition and instruction.

Practices: (1) I edited and published anthologies of review articles on language acquisition and instruction. (2) Also, I organized workshops for prospective contributors of such articles, with an emphasis on theme choice, reference, scope setting and reference selection, perspective taking, and chapter organization.

Goal 2: Pursuing mechanism of language processing and acquisition.

Practices: I co-authored an article on experimental psycholinguistics, and contributed to a handbook to be published in 2006 (Cambridge University Press).

Goal 3: Accumulating know-how on developing students' research skills.

Practices: (1) I presented a paper on research design training at Kyoto University. (2) I am writing a book on researcher training.

◆Educational Pursuits

My educational goals and practices:

Goal 1: Developing newly-enrolled undergraduate students' academic literacy skills.

Practices: I taught a freshman seminar including practicums on mind map, outlining, paragraph writing, PowerPoint presentation, and resume preparation.

Goal 2: Developing students' expertise in second language acquisition and psycholinguistics.

Practices:

I taught (1) undergraduate lecture/seminar in second language acquisition, (2) Masters' lecture/seminar/practicum in psycholinguistics, and (3) Doctoral seminar in second language acquisition.

Also, I organized study groups for postgraduate students in (1) language acquisition theories (2) cognitive learning theories.

Goal 3: Developing students' academic writing/research skills and awareness as researcher.

Practices: I taught (1) Masters' research practicum in applied linguistics, and (2) organized a review-article-writing workshop for Masters' and doctoral students.

◆将来の研究計画・研究の展望

(1) 科研費の助成を受けた総括論文の集成事業を今後とも継続する。さらに長期的な展望としては、論集掲載論文の著者達の共著による、日本語習得論の本格的な概説書を編集し出版したい。

(2) 研究室の実験環境を整え、実験心理言語学の手法による習得研究を継続したい。

(3) リサーチクエスションの設定指針を軸にした、若手研究者向けの研究ガイドを出版したい。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・実験心理言語学
- ・第二言語習得論
- ・研究者養成過程の実践研究

◆受験生等へのメッセージ

博士後期課程進学希望の方へ：

日本語・英語をはじめとする言語の習得に興味のある方をお待ちしています。

http://sa_yoshi.at.infoseek.co.jp/ocha/D-kiboo.html

博士前期（修士）課程進学希望の方へ：

次のページを参照してください。

<http://jsl2.li.ocha.ac.jp/index.html#nyuushi>

<http://jsl2.li.ocha.ac.jp/QA/index.html>

学士課程進学希望の方へ：

(1) 本学には今のところ日本語教育を主専攻とする学士課程プログラムはありませんが、「日本語教育基礎コース」の所定科目を履修することにより、卒業時に課程修了証を取得することができます。

<http://jsl2.li.ocha.ac.jp/kiso.html>

(2) 卒業後、日本語教育コースの博士前期課程への進学の道も開かれています。将来大学院への進学を希望する方は、大学在学中に外国語・言語学・発達／認知心理学など、将来の研究の基礎となる学問やスキルをしっかり身につけておくことをお勧めします。

(3) 日本語教師という職業に拘らず、諸言語の働きや仕組みに関する科目を広く受講することもできます。

教員名	佐藤 明子 (Akiko Sato)
所 属	サイエンス&エデュケーションセンター
学 位	博士 (理学) (お茶の水女子大学)
職 名	講師
URL/E-mail	asato@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

科学教育 / 化学教育 / 初等・中等教育

◆主要業績

総数 (4) 件

- ・佐藤明子, 高橋治, 菊地洋一, 村上祐 “イオン学習の適時性—教科書の国際比較に基づいて—.” 理科教育学研究. 2006. 46(2), 21-28.
- ・高橋治, 菊地洋一, 武井隆明, 村上祐, 佐藤明子 “中学校理科にイオンをどうとり入れるか—現教育課程におけるイオン学習の実践—.” 理科教育学研究. 2006. 46(3), 33-43.
- ・佐藤明子, 細矢治夫 “高校化学における量子論—アメリカの事例研究に基づいて—.” 日本科学教育学会第 29 回年会岐阜大会. 2005.

◆研究内容

初等・中等教育における研究者のアウトリーチ活動に関して、海外の実態を調査した。
わが国においても SSH や SPP 等が普及し、研究者の学校現場でのアウトリーチ活動が盛んになり、その役割は大きい。様々な要因によりその活動は必ずしも容易ではない。効果的なアウトリーチ活動が行われることを目的に、既に実績のある欧米や、科学教育に力を入れているシンガポールの事情を調査した。2006 年度は調査を継続するとともに、調査結果を一般に還元できる形にまとめている。
その他、日本における科学的リテラシーのあり方に関する研究に参加すると共に、中等理科教育（特に化学分野）のカリキュラム研究を行った。

◆Research Pursuits

Outreach activities by scientists for primary and secondary schools in western and Asian countries were investigated. The research is aimed at improving the outreach activities in Japan, which is neither systematic nor well-organized compared to the activities in western countries. The research is being extended and its results are planned to become available to public.

Researches on scientific literacy for Japanese and on science curriculum were also done.

◆共同研究例

- ・中等教育における「イオン学習」の適時性等の研究（科研費・岩手大学）

◆将来の研究計画・研究の展望

研究者のアウトリーチ活動が活発かつ円滑に行われるよう、海外調査の成果を一般に供することにより、将来を担う子ども達が科学に関心を持ち、科学を理解し、科学的に考えることができることを目指している。本研究により、アウトリーチ活動を通しての、国内の研究者・学校教員の交流や、内外のアウトリーチ担当者の交流の活性化もねらっている。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・内外のアウトリーチ担当部署と共同研究を考えている。

◆受験生等へのメッセージ

自然の法則が理解され、社会の状況に応じて誰でもが適切な判断ができて欲しいと願っています。

教員名	佐藤 祐子(SATO Yuko)
所 属	総合情報処理センター
学 位	理学 (修士)
職 名	講師
URL/E-mail	sato.yuko@ocha.ac.jp

◆研究キーワード

数値シミュレーション / 数値流体力学 / 風力エネルギー

◆主要業績

- ・Yuko Sato, Tetuya Kawamura, "Numerical study of the interference effects in small vertical axis wind turbines", Proceedings of IMECE 2005, DVD-ROM, 2005/11
- ・佐藤祐子, 水上洋子, 伊藤貴之, 河村哲也, 「重合格子法による直線翼垂直軸型風車周りの流れの数値シミュレーション」, 第 37 回流体力学講演会講演集, pp207-208, 2005/9

◆研究内容

2005 年度は、クロスフロー風車や直線翼垂直軸風車まわりの流れ場の数値的研究を行った。これは、科学研究費基盤研究 B(2) (課題番号 16360478、分担者として) の補助を受けている。これらの研究は、国内外の学会において報告を行った。

◆教育内容

授業としては、学部のコア科目として以下のものを行った。

1. 情報処理演習

総合情報処理センターが用意しているネットワークに接続されたパソコンを用いて 基礎的な情報処理の実際を学習する。すなわち、ネットワークの利用、情報の収集、文書の作成など、勉学・研究支援ツールとしてパソコンを利用するための技術を習得する。

2. プログラミング演習 C

Fortran 言語を用いて、数値計算の基礎である、連立一次方程式、補間と数値積分、常微分方程式等のプログラミングを学ぶ。併せて、UNIX の基本操作やグラフソフトの操作を習得することを目指す。

3. プログラミング演習 D

初級システムアドミニストレータの資格取得に必要な基礎知識を実践的な問題を通して学ぶ。この資格は、ビジネスの現場で EUC (エンド・ユーザー・コンピューティング) を支える人材となることを目指すもので、幅広い知識の習得が必要となる。

また、学習院女子大学においても「情報処理」の授業を行った。

研究指導としては、博士前期課程 (数理・情報科学専攻) 1 名の修士論文の共同指導および、情報科学科 4 年生 1 名の卒業研究の共同指導を行った。

◆Research Pursuits

In 2005, I have studied about a cross-flow wind turbine and a straight-wing vertical axis wind turbine by using numerical simulation. These studies are supported in part by the Grant-in-Aid for Scientific Research of Japan Society for the Promotion of Science (16360478). I gave presentations of these studies in domestic and international conferences.

◆Educational Pursuits

Lectures given in Ochanomizu University are as follows:

1. Exercises in Data Processing
2. Exercises in Computer Programming C
3. Exercises in Computer Programming D

Also following lectures are given in Gakushuin Women's College:

1. Information Processing

I co-supervised a dissertation for a master course student

◆将来の研究計画・研究の展望

種々の風車周りの流れの数値解析や風車騒音問題について取り組んでいく予定。

特に環境問題に関する応用に重点をおきたいと考えているが、それだけに限らず、数値シミュレーションを理学・工学の諸問題へ幅広く応用していきたい。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・ 垂直軸風車周りの流れの数値シミュレーション
- ・ 風車による騒音・電波障害問題の数値的研究
- ・ 波力発電用タービン周りの流れの数値シミュレーション

◆受験生等へのメッセージ

コンピュータの活用をすることにより、情報の収集・発信の幅が大きく広がります。皆さんの多くは、既に電子メールやウェブページを活用し、ワープロソフトや表計算ソフトを利用することができるでしょう。大学においては更にそのスキルを向上し、また、情報化社会を支えるコンピュータやネットワーク技術の基礎知識を学び、今後次々と出てくる新しい情報技術にも柔軟に対応できるようになってほしいと思います。

また、コンピュータシミュレーションは、理学や工学において理論や実験と並ぶ重要な研究方法となっています。コンピュータに出力された結果から、革新的な発見が得られるかもしれません。大学では研究することの楽しさ、知ることの素晴らしさを是非学んでほしいと思います。

教員名	椎尾 一郎 (SHIO Itiro)
所 属	理学部情報科学科
学 位	工学博士
職 名	教授
URL/E-mail	http://www.siio.jp/siio.itiro@ocha.ac.jp

◆研究キーワード

ヒューマンインタフェース / ユビキタスコンピューティング

◆研究内容

Kitchen of the Future: コンピュータ強化されたキッチンの研究。

コンピュータ、ネットワーク、センサを組み込んだ未来のキッチン、**Kitchen of the Future** を開発している。このコンピュータ強化されたキッチンにより、単に調理の効率を向上させるだけではなく、キッチンを学びとコミュニケーションの場として復活させることができると考えている。

文鎮メタファーによるペンインタフェース

滑り易い机の上に置かれた紙片は、筆記具を動かすと移動してしまうので、書き込むには手で押さえないといけない。このような手で押さえる動作を文鎮メタファとして利用して、スクロールと編集モードを切替える操作方法を提案した。このアイデアをもとに、PDAなどの小型ペンコンピュータにタッチセンサを装着して、手のひらがタッチセンサに触れている間は文字入力等のコンテンツ操作が可能であり、手のひらが離れている時にはドラッグによりスクロールするインタフェースを実装した。これにより、直感的で自然な操作で、モードを感じさせることなく、コンテンツのスクロールとコンテンツの操作・編集を切替えて操作することが可能になった。

デジタルな日用品による生活者支援

家具、調度品、小型の家庭電化製品、および生活のあらゆる場所に置かれている小物などの総称である **decor** は、人々が長年親しんだ簡単な操作で、単一もしくは限られた数の機能を提供している。**decor** は、透明な存在のコンピュータを組み込むのに格好の場所といえる。

本研究では、**Digital Decor** が果たすであろうアプリケーション分野から、インターネット情報の表示、賢い収納と、カジュアルなコミュニケーションをテーマに実装し、評価実験をすすめている。

◆教育内容

ヒューマンインタフェース



◆Research Pursuits

Kitchen of the Future: Computer augmented kitchen. A kitchen is a place of food production, education, and communication. As it is more active place than other parts of a house, there are lot of potential ubiquitous computing applications in a kitchen. We are developing a computer-augmented kitchen environment: the Kitchen of the Future that embeds various computing elements into a standard kitchen unit.

Pen Interface Using Paperweight Metaphor: Conventional scrolling methods for small sized display in PDAs, mobile phones or small pen computers are difficult to use when frequent switching of scrolling and editing operations are required, for example, browsing and operating large sized WWW pages.

In this paper, we propose a new user-interface method to provide seamless switching between scrolling and other operations such as editing, based on "Paperweight Metaphor".

A sheet of paper that has been placed on a slippery table is difficult to draw on. Therefore, in order to write or draw something on the sheet of paper, a person must secure the paper with his/her palm to avoid the paper from moving. This will be a good metaphor to design switching operation of scroll and editing modes.

We have made prototype systems by placing a touch sensor under each PDA and pen computer display where user's palm will be hit.

Digital Décor: Digital Decor is furniture, appliances, and other small objects commonly found in homes and offices that have been augmented with computational power to extend usefulness.

As such, Digital Decor is a physical manifestation of the ubiquitous, pervasive, and invisible computer in which the familiar, everyday object is imbued with additional capabilities through a single, simple application.

Thus far we have investigated three possible functionalities

for Digital Decor: everyday objects that indicate Internet information, everyday objects that keep track of their own contents, and everyday objects that support informal, lightweight communication.

◆Educational Pursuits

Human Interface

◆共同研究例

- ・コンピュータ支援キッチンの開発とその教育的利用に関する研究
- ・ユビキタスコンピューティングによるコミュニケーションの研究

◆特許

・滑り易い机の上に置かれた紙片は、筆記具を動かすと移動してしまうので、書き込むには手で押さえなければならない。このような手で押さえる動作を文鎮メタファとして利用して、スクロールと編集モードを切替える操作方法を提案した。

◆将来の研究計画・研究の展望

メニューやウィンドウによる表示、マウスやキーボードによる操作に代わる、新しいコンピュータの利用形態に興味を持っている。将来は、コンピュータが環境に埋め込まれ、実世界の紙、文房具、家具などのモノを通して人の生活を便利にする、実世界指向のコンピューティングが主流になると考えている。

研究の詳細は <http://www.siio.jp/> で公開している。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・デジタルな日用品の提案と開発
- ・コンピュータ組み込みキッチンの提案と開発

◆受験生等へのメッセージ

生活のあらゆるモノにコンピュータの機能が組み込まれるユビキタスコンピューティングの時代になりつつあります。現在、自動車の設計にコンピュータ技術者は不可欠です。将来は、食器、服飾、家具、住宅の設計、企画、商品開発に、そこに埋め込まれるコンピュータを理解できる情報技術者が不可欠になると考えています。日常生活を支援するコンピュータの可能性を追求して行きたいと思っています。

教員名	篠塚 英子 (SHINOTSUKA Eiko)
所 属	文教育学部人文科学科比較歴史学講座
学 位	商学博士 (慶応義塾大学) 1990
職 名	教授
URL/E-mail	eshino@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

労働経済学 / ジェンダー研究 / 金融政策 / 外国人労働 / 中国・韓国パネル調査

◆主要業績

総数 (9) 件

- ・『家計内配分とジェンダー統計の研究』報告書
お茶の水女子大学「家計内配分とジェンダー統計の研究会」研究代表者 篠塚英子 pp.1-291 2006年3月
- ・『パネル調査からみたジェンダー平等政策』
お茶の水女子大学 21世紀 COE プログラム :
お茶の水女子大学 F-GENS ジャーナル No.5 pp.86-92 2006年3月
- ・「配偶関係別からみた現在の北京就業率」
お茶の水女子大学 F-GENS Publication Sries No.5
『家族・仕事・家計に関する国際比較研究中国パネル調査第1年度報告書』 pp.50-65 2005年11月

◆研究内容

17年度は大きく3つの研究を実施した。第1はCOEジェンダー研究のフロンティアの2年目にあたる研究、第2に科学研究費の最終報告書作成、第3に、金融政策にかんするものである。第1のものはCOE-FGENSの中国、韓国パネル報告書を分担執筆して報告書を完成させた(お茶の水女子大学 F-GENS Publication Sries No.5『家族・仕事・家計に関する国際比較研究韓国パネル調査第1年度報告書、3章「現在の就業」およびお茶の水女子大学 F-GENS Publication Sries No.5『家族・仕事・家計に関する国際比較研究中国パネル調査第1年度報告書』、4章「配偶関係別からみた現在の北京就業者」)。第2は平成15～17年度科学研究費補助金基盤研究(B)[2]課題番号15330039「家計内配分とジェンダー統計の研究」[研究者代表 篠塚英子]の研究報告書[全291ページ]を完成させた。報告書では2本の論文を担当した。第3の金融政策に関するものを学会で報告をした(日本金融学会春季大会 早稲田大学「金融政策は分配問題に責任はないのか?」)。

◆教育内容

17年度の教育実施上の特色をいくつか挙げる。第1は極力、学生の質問に答える努力をし、メールで質問を受け付け、回答は質問者の氏名を匿名にして全員に紙面で回答することで双方向授業を試みた(グローバル化と経済、経済学通論)。第2に、これは毎年実施しているが日本銀行の日銀ツアーを企画した。事前に学生から希望をとり30名の学生が参加することができた。第3に、個人的なコネクションで外部講師を招き、ビジネス世界の活きた情報を学生に提供できた。学生も積極的に講師との議論を体験した(コアクラスター「企業・起業論」)。第4に、書籍によるテキストと映像のよる情報を適宜おりまぜて学生に刺激を与える工夫をした。最後に試験の結果について、テスト、レポート、出席のウエイトを明記して学生に成績評価を戻すことをやった。

◆受験生等へのメッセージ

本学は法学や経済学、政治学などの社会科学系の学部がありませんが、文教育学部と生活科学部にはこれらを専門とする教員がかなりおります。そして新たな試みで学部を超えて副専攻という選択も出来ます。グローバル文化学環はこうした新しい試みで冷え性 16 年度から設立しました。是非ホームページをのぞいてみてください。

教員名	柴坂 寿子 (SHIBASAKA Hisako)
所 属	生活科学部人間生活学科発達臨床心理学講座
学 位	理学博士 (1988 京都大学)
職 名	助教授
URL/E-mail	http://www.develop.ocha.ac.jp/shibasak@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

幼児 / 仲間関係 / 集団過程 / 自然観察 / フィールドワーク

◆主要業績

総数 (4) 件

- ・幼稚園児集団における共有ルーティンの発生過程の分析
(柴坂寿子・倉持清美(2006)「お弁当場面のルーティンの形成」日本保育学会第 59 回大会発表論文集 pp.864－865.)
- ・公立幼稚園におけるフィールドワーク
- ・付属幼稚園、付属ナーサリーにおける保育研究

◆研究内容

1. 幼稚園を中心とした子どもの仲間関係のネットワークとその変化、2. 幼稚園集団における長期的な人間関係の変動とその要因及び影響、3. 幼稚園における子どもの方略と社会的知能、4. 幼稚園における子ども同士の情報交換、5. 幼稚園集団における子ども同士のルーティンの機能

第一に、ある公立幼稚園のクラス集団を入園から卒園まで 2 年間縦断調査したフィールドワーク資料

(収集済み) の分析を行った。幼稚園の弁当場面で起こった子どもたちの共有ルーティンがどのような過程を経て発生したかを入園時からのビデオ資料、フィールドノート等を元に分析し、再構成した。結果を保育学会で発表した。第二に、公立幼稚園において、2004 年度入園のクラス集団のフィールドワークを引き続き行い、観察記録、保育者との話し合い記録を収集した。第三に、付属幼稚園、付属保育所の保育者及び、本学保育系教員の合同による保育研究を行った。これは特別教育研究経費「幼・保の発達を見通したカリキュラム開発」(代表：浜口順子助教授) へと発展した。

◆教育内容

1. 日常場面での行動観察法
2. 日常場面での子どもの行動の意味
3. 園生活の子どもにとっての意味

第一に、生活科学部人類科学講座 3・4 年生の教育を行った。「人間行動学演習」では行動観察の文献講読と実習を行い、「文化行動論」では人間行動の汎文化的側面について講義した。「人類科学演習」で卒論の進捗状況報告や先行研究論文紹介を行わせ助言するとともに、卒業論文執筆及び口頭発表を指導・助言した。第二に、生活科学部発達臨床心理学講座 1・2 年生の教育を行った。「児童学概論」、「人間関係学」で子どもの仲間関係を理解する基本的視点を講義し、「発達臨床観察法」で観察法の基礎実習を行った。第三に、全学の留学生特別科目「日本事情演習ⅣA」、「同ⅣB」を担当し、自然科学系科目を学ぶ上での背景知識を講義した。第四に、人間文化研究科ライフサイエンス専攻では「比較行動学特論演習」で人間行動に関する基礎文献の講読を行った。「生物人間科学演習」で修論の進捗状況報告や先行研究論文紹介を行わせ助言するとともに、修論中間報告の口頭発表、中間報告書執筆を指導・助言した。

◆Research Pursuits

1. Analyses of the sharing routine at lunch time among preschoolers.
2. Fieldwork in a Japanese preschool
3. Studies on child care and education at the attached kindergarten and the attached nursery school

◆Educational Pursuits

1. Lectures at the Department of Human Biological Studies
2. Lectures at the Department of Developmental Clinical Psychology
3. Lectures for Foreign Students
4. Lectures at the Graduate School of Humanities and Sciences, Graduate Division of Life Sciences

◆将来の研究計画・研究の展望

第一に、幼稚園・保育園などにおける観察を継続し、園における出来事への仲間関係の影響と出来事の仲間関係への影響、子どもの個人史を事例から分析していく。これらの分析資料を集積し、幼児集団における仲間関係とその変容について考察を深める。第二に、特別教育研究経費「幼・保の発達を見通したカリキュラム開発」（代表：浜口順子助教授）における研究を、付属幼稚園、付属保育所の保育者及び本学保育系教員と協力し進める。

◆受験生等へのメッセージ

幼稚園、保育園など、子どもたちの生活の場における行動を観察・記述・分析している。子どもたちが園で体験することの豊さにいつも驚き、それを研究を通して伝えていければと思っている。

教員名	清水 徹郎 (SHIMIZU Tetsuro)
所 属	文教育学部言語文化学科英語圏・欧州言語文化講座
学 位	文学修士
職 名	助教授
URL/E-mail	

◆主要業績

総数 (1) 件

・シェイクスピア学会口頭発表
2005 年 10 月 9 日 日本女子大学にて
「"What see'st thou in the ground?" ー裸体と風景、あるいはエピリアの読者についてー」

◆研究内容

初期近代英国における王権表象と異教神話。

◆教育内容

修士論文指導
卒業論文指導
英作文指導
イギリス文学特殊講義
英詩研究
英語（基礎英語・中級英語・Oral English）
イギリス演劇
アイルランド演劇
言語表現論
その他の学生指導

◆共同研究例

- ・ 宗教とテューダー朝演劇の成立に関する共同研究に参加。
- 「宗教とテューダー朝演劇の成立」に関する共同研究に参加。

◆将来の研究計画・研究の展望

Christopher Marlowe における政治・宗教・演劇

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・ 初期近代イギリス演劇
- ・ 初期近代の英詩
- ・ 古典受容と国民文学の成立

教員名	SCHWARTZ LAURE (SCHWARTZ LAURE)
所 属	比較日本学研究センター
学 位	博士
職 名	助教授
URL/E-mail	http://www.cf.ocha.ac.jp/ccjs/schwartz@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

美術史 / 仏教 / 美術館

◆主要業績

総数 (3) 件

- 「フランスにおける日本美術史研究の起源と発展についての一考察」『お茶の水女子大学比較日本学研究センター年報』、創刊号 2005 年
- 「フランスにおける日本仏教美術研究への概観 その誕生と発展」、『日仏図書館情報研究』31号、2005.年

◆研究内容

2005 年度は、教育活動や比較日本学研究センターでの活動と平行して、ヨーロッパにおける日本美術史への関心及び日本美術史研究を追究してきた。特に仏教美術研究の誕生に立ち返り、この分野における先駆的な行動をした学者らの役割に着目し、また仏教美術品の評価と分析の基となった様々な文化的背景（東洋学研究の伝統、ジャポニズム、比較研究、百科事典的精神、最初の極東美術館の誕生など）の中に、そういった作品の発見を置き直した。

また、博士論文でテーマにした平安時代の傑作「応徳涅槃図」（高野山霊宝館所蔵）の研究を続け、星辰信仰や陰陽道信仰と密接に関わった当時の風潮とこの絵画との関係性を明らかにするための解釈を深めた。

◆教育内容

授業では、日本美術に対する考え方を歴史的に概観しながら、同時に現代の海外の日本学者、特に活発な欧米、アジアの日本学研究とその成果について、できるだけ網羅的に紹介するよう努めている。

セミナーでは、1908 年パリで出版された『日本にて - 美術の聖域へのプロムナード - 』の講読を主に行っている。著者、ガストン・ミジョン(1861-1930)は、1893 年よりルーブル美術館初の極東美術コレクション展示室開設を推進した学芸員である。著名な美術品蒐集家であり日本美術愛好家であったミジョンは、今から 100 年前の 1906 年に任務で訪れた日本の建造物、美術館、名所、庭園、寺といった様々な場所について、本著で詳しく解説しており、取り上げられているテーマの多様性、その批判的アプローチ、そして著者ミジョン自身、当時の最も著名な日本美術愛好家と親交があったということからも、日本ではほとんど知られていないこの本は、セミナーのテーマにとっても意義深いものである。

◆Research Pursuits

Parallel to my activities within the Center of Japanese Comparative Studies, I have concentrated my research on the history of the studies related to the appreciation of Japanese Art in Europe. Going back to the origin of several researches, particularly in the field of Buddhist Art, I insisted on the role of some Europeans scholars pioneers in that domain and I attempted to situate the discovery of the Buddhist works within the different contexts, knowledge and cultural circumstances (such oriental tradition, Japonism, comparatives methods, encyclopedic approach, first extreme-oriental art museums) having influenced western specialists in their evaluation and analyze.

Besides, continuing my research on the *Ôtoku nehan zu*, masterpiece of the Heian Period preserved at the Reihôkan Museum (Mount Kôya), I tried to develop my interpretation intending to show how this Buddhist Painting could have been connected with the *Onmyô-dô* and astrological beliefs.

◆Educational Pursuits

Devoted to the presentation of the historical development of Japanese Studies Overseas my teaching program intends to introduce and analyze the birth and development of Japanese Art History over the world, particularly in Europe and America.

During the previous years, our courses focalized on the study of the Book [In Japan. Pilgrimages to the Shrines of Art] published in Paris in 1908. His author, Gaston Migeon (1861-1930), Curator in the Department of Decorative Arts of the Louvre Museum, was the first to introduce in 1893, Far Eastern Art collections within this prestigious institution. By describing in detail, with a critical approach many historical places like museums, gardens and temples, this book almost unknown in Japan allows us to examine how, just one hundred years ago, Western people, in particular in Europe, considered and interpreted Japanese culture.

◆共同研究例

お茶の水女子大学比較日本学研究センター (2004-2006)

プロジェクト名：欧米における日本学 ―日本美術研究を中心に―

趣旨：欧米における日本美術研究に関する方法論の分析的考察を行う。欧米の研究者あるいは芸術家がどのように日本の美術を解釈してきたかを明らかにしながら、彼らの残した言説（内容、文化的背景、方法論）を分析し、日本国内での研究と比較しながら検討し、その特質を捉える。

◆将来の研究計画・研究の展望

ヨーロッパにおける日本美術史の誕生についての研究では、ガストン・ミジョンが 1893 年にルーブル美術館へ初めて日本美術コレクションを導入した目的とその段階を明らかにしていく。今日ではほとんど知られていないが、日本美術研究史の中で中心的な役割を果たしたこの人物の功績に着目し、日仏文化交流における重要な局面を明らかにしていく。また、「応徳涅槃図」に関する研究を発展させ、その現段階を発表し、この作品を占星術と陰陽道に結びつけた新しい見方の下に捉えなおしていく。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

ヨーロッパにおける日本美術史の誕生と発展、とりわけ日本美術コレクションの現状と分析、またこれらがヨーロッパの主要な美術館に導入され、保存され、研究され、展示された方法等は、国内外での共同研究の対象となり得るテーマであり、また大学教員や学芸員の協力を前提とする研究テーマである。

◆受験生等へのメッセージ

2004 年 6 月にお茶の水女子大学比較日本学研究センター助教授に着任して以来、フランス人研究者としての日本美術史に対する考察を伝え、大学や美術館での研究・勤務経験を生かして、お茶の水女子大学の国際学術交流に貢献できることは大変光栄である。講義や、比較日本学研究センターが主催する国内外での様々な活動（講演会、セミナー、シンポジウム、出版）を通して、海外で力強く発展し続ける日本学に接し、学生が研究テーマを発見し、これを深めていけるように促していきたい。日本美術に関する海外の文献の紹介と解説、海外の主要な日本学研究施設の訪問、講義や比較日本学研究センター主催の国際セミナー等は、我々の目的とするところであり、関心のある学生と共に追究していきたいと願っている。

教員名	庄司 恵雄 (SHOJI Yoshio)
所 属	国際教育センター
学 位	国際学修士
職 名	教授
URL/E-mail	http://jsl2.li.ocha.ac.jp/kyookanHP/shoji.html shoji@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

言語テスト(日本語口頭能力測定) / 地域日本語ボランティア活動 /
大使館推薦留学生に対する予備教育としての日本語教育

◆主要業績

総数 (9) 件

- ・「パフォーマンス評価一口頭能力をどうとらえるか—学習者のための口頭能力テストは可能か」単著
2005年度日本語教育学会秋季大会シンポジウム「言語能力を多角的に評価する」シンポジスト 2005年10月
- ・「外国籍地域住民・日本人住民相互学習のための日本語学習用ビデオ教材の開発 研究成果最終報告書」単著
平成16年度学術振興会科学研究費研究報告書(p. 1-44) 2006年3月
- ・「合本 留学生歌集『歌心』・留学生句集『留香』」編著 お茶の水女子大学国際教育センター(24頁) 2006年3月

◆研究内容

・地域の多文化化に対応するボランティアの日本語活動のあり方に関する研究

多文化状況が日々進行しているこの国の各地域において、日本人市民のボランティア活動が占める社会的意味は重大である。その活動の内実をより人間的な平等感覚に基づいたものにする必要があるが、ともすれば日本人の価値観を基準にしたエスノセントリックな活動に陥りがちであることから、外国人・日本人が日本語を共通項として相互交流をはかるためのビデオ教材の開発を試みた。

・日本語口頭能力試験の開発に関する研究

現行の日本語能力試験に口頭能力を測定する分野が含まれていないことから、試験の改善が急がれている。新しい課題を日本語能力試験に組み入れるための基礎研究として、2005年度は、日本語を母語としない日本語教員に口頭能力を判定することが可能かどうか、その現実性を探るため、中国・台湾・フィリピン・タイ・米国・メキシコ・ブラジルの日本語教育機関において調査を実施し、一定の資格要件を満たすかどうかを検定するシステムを確立すれば、日本語を母語としない教員にも、日本語の口頭能力を判定することが可能なことが判明した。

・大使館推薦研究留学生のための予備教育としての日本語教育に関する研究

お茶の水女子大学では、該当留学生の受け入れが行われなかったため、実践的研究は実現しなかった。他大学における予備教育を見学するなどにより、資料収集を行った。

◆教育内容

<外部留学生・研究生向け>

・日本語中級

日本語能力試験 2 級合格を目指す留学生・研究生を対象に、日本人の著になるテキストを読むことから始め、他の 3 技能の向上をも目指す。

・日本語初中級

アフガニスタンからの大学院留学生を中心とした受講生に対して、日常会話を中心として、コミュニケーション能力を養成する。

・日本語演習Ⅱ「日本語口頭表現」

学部留学生及び日研生、研究生らを対象に、前期は単独の発表形式のスキルを、後期は対話・討議・議論など、インターアクションを含む口頭表現のスキルを訓練する。

・日本事情演習Ⅱ「日本の短詩形」

学部留学生・日研生・研究生を対象に、前期は短歌、後期は俳句を取り上げ、その歴史的背景を学習したのち、多数の作品鑑賞を行うとともに、実際に作歌・作句を行い、発表する。期末に作品を集大成する。

<大学院向け>

・言語テスト特論 講義・演習

2005 年度は開講せず。

教員名	菅本 晶夫 (SUGAMOTO Akio)
所 属	理学部物理学科
学 位	理学博士 (1978 東京大学)
職 名	教授
URL/E-mail	sugamoto@phys.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

素粒子論 / 高エネルギー物理学

◆主要業績

総数 (4) 件

・ BANDO Masako, SUGAMOTO Akio, TERUNUMA Sachiko, Meson strings and flavor branes, Prog.Theor.Phys. 115 (2006) p.1111-p.1127

◆研究内容

2005年度に菅本は、愛知大学の坂東昌子教授と本学博士課程大学院生照沼幸子との共同して、「Meson strings and flavor branes」に取り組んだ。この研究は Prog.Theor.Phys. 115 (2006) p.1111-p.1127 に出版された。内容は、クォークと反クォークから構成される中間子の質量スペクトルを、クォークとグルオンの力学である量子色力学と双対関係にある重力理論を用いて評価する試みである。特にクォークと反クォークの種類（フレーバー）が異なる場合に注目した。この結果、クォークと反クォーク間に働く力のポテンシャルの形状が、フレーバーが異なる中間子の場合には、特定の距離の前後で変化することを見出した。この結果が、重いフレーバーをもつ核物質の密度が通常に比べて大きくなる現象の理解に役立つことが期待される。その他、国立天文台で行っている重力波測定装置の開発研究に、本学博士課程大学院生川添史子と坂田紫帆里、修士課程大学院生苔山圭以子と共に協力した。

◆教育内容

2005年度には、通常の学部授業と大学院授業に加えて、修士1年の院生に対して、場の量子論のゼミを行った。これは素粒子物理学の基礎を学ばせるゼミであるが、この年度は教科書を使わずに、場の量子論に関する重要な原論文を購読した。即ち、ヤン・ミルズやファデーフ・ポポフのゲージ理論およびダイソンによるくりこみ理論の原論文である。これには優れた教育効果があった。この年度には、苔山圭以子が「重力波の検出方法」に関する論文を書いて修士課程を終了した。

◆Research Pursuits

In 2005, Sugamoto studied “Meson strings and flavor branes” in collaboration with Professor Masako Bando of Aichi U. and our graduate student Sachiko Terunuma. This work has been published in Prog.Theor.Phys. 115 (2006) p.1111-p.1127.

This is an attempt to understand the mass spectroscopy of mesons consisting of quark and anti-quark in the gravity theory dual to the Quantum Chromo-Dynamics (QCD) of quarks and gluons. Especially, we consider the case with different kinds (flavors) for quark and anti-quark. As a result, we find that the potential between quark and anti-quark with different flavors changes its shape at the special distance. This result may be related to the existence of dense nuclear matter having heavy flavor quarks.

Also Sugamoto supported the research and development of gravitational wave detector at the National Observatory with our graduate students Fumiko Kawazoe, Shihori Sakata and Keiko Kokeyama.

◆Educational Pursuits

In 2005, in addition to the usual classes for undergraduates and graduates, Sugamoto had a series of seminars with the 1st year graduate students in which original papers on quantum field theories were read. This is the introductory course for the graduate students, but the reading of original papers by Yang and Mills, Faddeev and Popov, and the renormalization theory by Dyson is very effective educationally.

This year Keio Kokeyama graduated the master course by writing the thesis on “New method of gravitational wave detection”.

◆将来の研究計画・研究の展望

微視的世界と宇宙に関する新しい理論を構築し、これらをより深く理解すること。

教員名	菅原 ますみ (SUGAWARA MASUMI)
所 属	人間文化研究科複合領域科学専攻
学 位	1990 年 7 月文学博士 (東京都立大学大学院人文科学研究科・心理学) 取得
職 名	助教授
URL/E-mail	sugawara@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

発達心理学 / 発達精神病理学 / パーソナリティ心理学

◆主要業績

総数 (8) 件

・“Maternal employment and child development in Japan: A twelve-year longitudinal study.” In Schwalb, D.W., Nakazawa, J., & Schwalb, B.J. (eds.), Applied Developmental Psychology: Theory, Practice, and research from Japan. 225-240, 2005 A Volume in Adovanc

・“ライフコース研究の新しいかたち” (共著) 「発達心理学の新しいかたち」 遠藤利彦編著、誠心書房, 260-293. 2005

・“子ども家庭総合評価票” (編著) 「子ども・家族への支援計画を立てるために -子ども自立支援計画ガイドライン-」 児童自立支援計画研究会編 日本児童福祉協会, 2005.

◆研究内容

2005 年度には以下の 4 つの縦断的研究プロジェクトを実施した:

1) 子どもの発達と家族の精神保健に関する長期縦断研究・・・妊娠期より子どもが成人期に達するまでの子どもの心理的発達と適応に及ぼす家庭を中心とした環境要因の影響を検討するために継続している長期縦断プロジェクト。2005 年度には生後 18 年間のデータをもとに親の就労を中心とするライフスタイルの影響について分析した。

2) ツインプロジェクト・・・双生児の家庭を対象とした縦断研究で、発達に及ぼす遺伝と環境の役割について検討している。4 回目の追跡調査を実施した。

3) Child Care Quality の検討・・・家庭および保育施設での養育の質が子どもの心身の発達に及ぼす影響について乳児期からの生態学的観察を実施している。2 回目の追跡調査を実施中。

4) メディアと子どもの発達・・・NHK との共同研究。映像メディアの影響について 0 歳～12 歳までの縦断研究を展開中。3 歳時点調査を実施。

◆教育内容

学部教育: 1 年次基礎ゼミでは、“家族とは何か” を考えることをテーマとし、心理学・社会学・教育学・行動遺伝学・比較行動学などの広範囲な領域における知見を学びながら、自由に発想を展開し自分の考えをまとめて発表をおこなった。2 年次・3 年次の心理学基礎教育では、実験・演習を通じて発達心理学および臨床心理学の基礎的技法の修得をめざした。4 年次では卒論ゼミでは、子ども期の心理的適応と環境要因との関連に関する様々な心理学的アプローチの実際について研究指導をおこなった。

大学院教育: 発達心理学と臨床心理学および精神医学の境界領域として新しく誕生した発達精神病理学の理論について講義を通じて論じるとともに、演習および個別の研究指導によって具体的研究方法論の指導をおこなった。修士論文・博士論文の指導では、家族関係と子どもの発達に関する広範囲な発達精神病理学的研究の実際について指導をおこなっている。

◆Research Pursuits

The following 4 longitudinal research projects were conducted in 2005.

1) Longitudinal study of child development and family mental health: This longitudinal research project aims to investigate the effect of family environment on children's psychological development and adjustment from pregnancy to adulthood. In 2005, by using the data collected from the birth to 18 years of age, the effect of family lifestyle such as parental employment was examined.

2) Twin Project: This longitudinal study of twins and their families investigates the role of environment and genes on child development. In 2005, the fourth follow-up survey was conducted.

3) Study on Child Care Quality: The purpose of this study is to find out the effects of the quality of care provided at home and child care centers on children's physical and psychological development by observational assessment from infancy. The second follow-up survey is now running.

Child development and media: This is a collaborative research with NHK. The effect of electronic media on children of age 0 through 12 has been examined by longitudinal study. The follow-up project at 3 years of age was conducted.

◆Educational Pursuits

Undergraduate students: In "Kiso-zemi" for freshman, the major theme was "family". Studies on family from various academic fields such as psychology, sociology, education, behavioral genetics, and comparative ethology were discussed during the class, and each student did a presentation on summary of their own ideas. Basic education of psychology for sophomore and junior year, basic methodology of developmental psychology and clinical psychology was introduced by experiments and exercises. For seniors, thesis advices were given by discussion on current issues of various psychological approaches for psychological adjustment and environmental factors during childhood. Graduate students: The theoretical backgrounds of developmental psychopathology, a new interdisciplinary of psychology, clinical psychology, and psychiatry, were discussed. Practical advices for conducting psychological research were given during class and individual meeting. For those who writing master's and doctor's thesis, thesis advices were given by discussion on current research topics on family relationship and children's development in the field of developmental psychopathology.

◆共同研究例

- ・メディアと子どもの発達（NHK との共同研究）

◆将来の研究計画・研究の展望

上記4つのプロジェクトを発展させたいと考えている。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・子どもの心理的発達に及ぼす発達環境の影響に関する研究

◆受験生等へのメッセージ

子どもの健やかな心身の発達には遺伝子から家庭環境、学校での体験、社会的制度に至るまで広範囲な要因が影響を及ぼします。これらの諸要因がどのようなメカニズムとプロセスを経て子どもの心身の発達や健康に関わってくるのかを明らかにすることが私たちの研究室の目標です。

教員名	杉田 孝夫 (SUGITA Takao)
所 属	生活科学部人間生活学科生活社会科学講座
学 位	文学修士 (1978 東京教育大学)
職 名	教授
URL/E-mail	http://www.soc.ocha.ac.jp/Site/A3EB7B9B-7F0D-4281-9108-02D75C42957A.html sugitats@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

ドイツ啓蒙およびドイツ観念論 / 政治思想 / 自由 / 共同性 / 家族

◆主要業績

総数 (4) 件

- ・「カントとフィヒテの歴史認識における政治的なもの」
『フィヒテ研究』(日本フィヒテ協会) 第 13 号, 晃洋書房, 2005 年 12 月, 25 頁－39 頁所収
- ・「ヘーゲル家族論の現代的意義」
『ヘーゲル哲学研究』(日本ヘーゲル学会) 第 11 号, 2005 年 12 月, 97 頁－106 頁所収.
- ・「政治思想としての精神現象学」
日本ヘーゲル学会主催・フンボルト財団後援 日本におけるドイツ年 200/2006
日独哲学シンポジウム「精神現象学 200 年」第 2 セッション「ドイツ観念論と精神現象学」での報告
2006 年 3 月 26 日, 法政大学

◆研究内容

ドイツ啓蒙とドイツ観念論の政治思想史研究

(1) とくにカント、フィヒテ、ヘーゲルの政治思想の諸問題をかれらの共通枠組みである「自由と共同性」の位相を同時代的文脈の中で再検討し、その歴史的固有性を明らかにする作業を行っている。

(2) 第二の主題として、カント、フィヒテ、ヘーゲルの家族観を、ドイツにおける「近代家族」の形成過程を示すテキストと捉えて、家族の構成と機能を分析し、同時代の社会構造の転換とどのように構造的に連関するものであるかを明らかにする作業をおこなっている。この作業は必然的に家長のものと近代家族と家長を主体とする近代社会の構造的秘密を明らかにするものであり、近代におけるジェンダーの思想的作為性と歴史性を明らかにする作業でもある。

(3) 以上の二つの側面からの研究によって現代社会における自由と共同性をめぐる問題状況を克服する理論的展望を得ることを目指している。

◆教育内容

基礎講義「政治学入門」では、市民のための政治学という観点から、新入生を対象に、現実の政治過程を事例に取り上げて、それを手掛かりに政治の意味、メカニズム、機能をできるだけ分かりやすく、講義する。

「生活政治学 I」「生活政治学 II」では第 2 学年を対象に、現代デモクラシーの主体である生活者市民にとって必要な政治学の基礎理論を講義する。

「政治とジェンダー」は 3 年次を対象に、ロック、ルソー、ウルストンクラフト、カント、フィヒテ、ヘーゲルを材料にして、近代社会の政治理論の形成展開過程をジェンダー構造の形成展開過程の同時性を明らかにするとともに、近代の政治的ジェンダー構造克服するための条件を検討する。

「比較家族思想史」は 3 年次を対象に、カント、フィヒテ、ヘーゲルの家族観をテキストに即して検討し、ドイツにおける近代家族の形成展開過程を明らかにする。

◆Research Pursuits

I am chiefly interested in the intellectual history of modern Europe, and with this area I specialize in two related fields. One is the political thought of Modern Germany, especially German Enlightenment and German Idealism. The other is the genesis of Modern Family concept in Germany.

◆Educational Pursuits

I lecture on Scope and Theory of Political Science, and on the foundation of Modern Civil Society and Family, and run two seminar. One is for the Theory of Civil Society (in undergraduate senior course) and another for intellectual history of Europe (in postgraduate course).

I have supervised Intellectual History in Modern Europe as well as in Modern Japan. I am also interested in the questions of the public and the private and gender, which are new perspectives in politics.

◆将来の研究計画・研究の展望

ドイツ啓蒙の思想家のうち、ヤコービとフンボルトの政治思想、およびフンボルトのジェンダー論については、18世紀ドイツ思想を理解するうえで重要な対象であるにもかかわらず日本ではまったく手つかずの状態にある。ドイツ観念論の政治思想史研究に一区切りついたならば、ヤコービとフンボルトの研究を行いたい。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・ドイツ啓蒙とドイツ観念論の政治思想
- ・政治とジェンダー
- ・市民社会論

◆受験生等へのメッセージ

政治学は古来教養の学として長い伝統を築いてきました。近代以前においては統治者の教養の学あるいは統治の技術でした。政治学は役人や政治家になるための学問であるという見解が生まれた原因はそのような伝統に起因します。しかし統治者＝被治者の時代であるデモクラシーの現代においては、政治学はまず第一にすべての市民の教養の学でなければなりません。

政治の世界は、人間が生きている間は絶えず試され、問い続けなければならない実践知の世界です。そのように考えると私たちはいつでもどこでもなんらかの政治のただ中の中にいることに気づきます。人生は、そこで得られる疑問や経験を手掛かりにして「善く生きる」ための知の探求の旅です。政治学はそのような旅の指南書の一つと言えます。

教員名	杉野 勇 (SUGINO Isamu)
所 属	文教育学部人間社会科学科応用社会学講座
学 位	社会学修士(1992, 東京大学)
職 名	講師
URL/E-mail	

◆研究キーワード

理論社会学 / 法社会学 / 社会調査 / 職場—家庭バランス

◆主要業績

総数 (4) 件

- ・杉野勇, 2006, 「1936 年大統領選予測の実際——Literary Digest と Gallup 再訪——」, 『相関社会科学』, 15, pp. 55-69.
- ・SUGINO, Isamu, and MURAYAMA Masayuki, 2006, 'Employment Problems and Disputing Behavior in Japan,' Japan Labor Review, 3(1), pp. 51-67.
- ・杉野勇, 2005, 「責任帰属の拡張的性質」, 『現代社会理論研究』, 19, pp. 73-84.

◆研究内容

この数年は、日本法社会学会初の大規模標本調査プロジェクトである民事紛争処理実態調査、インテンシヴ・インタビューによる個別事例調査研究である司法についての当事者ニーズ研究、お茶の水女子大学 21 世紀 COE プログラム「誕生から死までの人間発達科学」の一環である小田原パネル調査におけるワーク・ファミリー・フィット研究、そして、10 年ごとに行われている日本の社会学界の代表的な継続的全国調査の第 6 回目にあたる「社会階層と社会移動全国調査プロジェクト」(SSM2005)における女性のライフコース・ライフスタイル研究に従事している。2005 年度はそれに加えて、選択性の帰責をめぐる理論法社会学的研究、そして社会調査史上の画期的エピソードである。

”Literary Digest vs Gallup(1936)” についての真相の探究と社会調査論へのそのインプリケーションの研究なども行い、論文にまとめて発表をした。

◆教育内容

2005 年度は、学部の社会学の入門的講義では、コミュニティにおける規範、評判、インフォーマル・サンクション、社会資本といった基本的な社会学的視角、弱い紐帯の理論、予言の自己成就や準拠集団論、社会的ジレンマなどの代表的な社会学説・社会学理論を解説した。社会調査についてのメディア・リテラシーについても例示した。演習においては、「制度」をテーマとして、新制度派経済学や文化人類学など隣接諸科学との関連や異同についての学習を行った。行動経済学や合理的選択理論なども一部扱った。社会調査法の授業では、調査票の作成からデータ収集と計量分析までの全プロセスを年間を通じて実施した。2005 年度の大学院の演習では、社会構築主義、比較歴史社会学における理論の役割、カルチュラル・スタディーズ、教育社会学的な学校の参与観察、歴史社会学などの多様な文献を取り上げ、幅広い社会科学的な知見と批判的な思考スタイルを身につけられるよう努めた。

◆Research Pursuits

I am engaged in several survey research projects. The first one is the largest nationwide survey research in Sociology of Law concerning the civil "justiciable problem" in everyday life, and the second is the qualitative research on legal needs among ordinary people. These two researches are linked to each other, and I focuses on the employment problems. The third survey is the Odawara panel survey as part of Ochanomizu University's COE, in which I study the Work-Family fitness for middle aged women. The last is the 6th "Social Stratification and social Mobility survey". This is the most well-known longitudinal national survey in Japanese Sociology, and I work on the life course, life style of the female. To add to these, I published two studies in 2005; The one is the theoretical socio-legal study on the attribution of selectivity-responsibility. The other reveals the truth of the famous episode in social research history, that is the competition between Literary Digest and George Gallup in 1936.

◆Educational Pursuits

2005, undergraduate course:

Introduction to Sociology-- norm, reputation, informal sanction, social capital in Community. Media literacy or research literacy. The weak/strong ties, self-fulfilling prophecy, reference group, social dilemma, the empirical way to study social stratification and inequality, etc.

Social Research Method and Practice: Experiencing the whole process of social survey; Making questionnaire, data collection, and statistical analysis.

Seminar: Considering the "Institution" on the interface to the neo-institutional economics, or cultural anthropology. In part picking up behavioral economics, rational choice theory.

Graduate course:

Studies in Social Constructivism, Cultural Studies, Rational Choice Theory in Comparative-Historical Sociology, Historical Sociology, participant observation in middle school were examined.

◆共同研究例

- ・ 民事紛争実態調査
- ・ 社会階層と社会移動に関する調査研究
- ・ 職場役割と家庭役割のバランス (Work-Family Fit) についての調査研究

◆将来の研究計画・研究の展望

1) 民事紛争処理についての実態調査の分析・研究(法の主題化、雇用問題)を2008年まで継続して行い、司法制度改革に対する提言や評価につなげたい。2) ワーク・ファミリーフィット研究の第二期パネル調査を実施し、第1期のデータ分析と共に縦断的分析を行う。3) 2005年度実施の「第6回社会階層と社会移動全国調査」のデータ整備及び分析。ライフスタイル班に所属し、出来れば2)の研究とリンクさせながら進めていく。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・ Work-Family Conflict/Facilitation についての調査研究
- ・ 民事紛争処理(法の主題化／雇用問題)についての調査研究
- ・ 社会階層と不平等に関する調査研究

◆受験生等へのメッセージ

私たちは、しつけや教育などの「社会化」を経なければ、きちんとした「社会人」になれません。その意味で「規範」や「常識」を内化することはとても重要です。しかし同時に、そうした規範や常識の手前で立ち止まってそれを対象化してよく考えてみることも一特に青年期には一極めて重要です。グローバル化の中、自分達の手が直接届く範囲の割合はますます小さくなり、メディアなどによる情報や疑似体験に否が応にも巻込まれざるを得ない。その中で、経験的・実証的な証拠や事実に基づいて、かつ論理的・分析的に思考をするということの重要性は、いくら強調してもし過ぎることはありません。他方で、規範や常識、趣味嗜好の社会的フォーマットなどの「社会的なもの」とは、自分のアイデンティティと呼ばれるものを形成する要因でもあります。社会の理解と自己の理解が不即不離であることの淋しさと面白さを共に実感することが、とても大切だと考えています。

教員名	杉橋 やよい (SUGIHASHI Yayoi)
所 属	ジェンダー研究センター
学 位	Ph.D. in Census and Survey Research (The University of Manchester)
職 名	講師
URL/E-mail	http://devgen.igs.ocha.ac.jp/professor/sugihashi.html yayoi_s@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

ジェンダー / 統計 / 賃金・収入 / 格差 / 差別

◆主要業績

総数 (11) 件

- ・独立行政法人国立女性教育会館・伊藤陽一編 (2006)『男女共同参画統計データブックー日本の女性と男性 2006ー』ぎょうせい (第4章「労働条件」と第11章「意思決定」を担当)
- ・金子治平・杉橋やよい・山下裕歩 (2006)「正規・非正規雇用の年間所得格差の分解」大阪市立大学『季刊経済研究』第28巻第1号, pp.19-32.
- ・Sugihashi, Y. (2006) “Examination of Unequal Income between Women and Men in Japan and Korea”, The 9th International Interdisciplinary Congress on Women, Seoul, Korea

◆研究内容

1. 「ジェンダー統計視点による男女間所得格差の国際比較研究ー「男性稼ぎ主」型を考えるー」という研究は、平成17年度～19年度の間、科学研究費補助金若手研究B (研究代表者：杉橋やよい) の助成の下で、進めている。2005年度には、平成4年、9年、14年の就業構造基本調査の個票データ (リサンプリング・データ) を用い、急速に変わりつつある労働市場と賃金体系のもとで、性別所得格差とそれを規定する要因の変化等を分析し、また、平成元年、6年、11年の全国消費実態調査の個票データを用い、妻の家計への貢献度を分析し、リサンプリング・データ報告集会 (財団法人統計情報研究開発センター主催) で発表をした。

2. 近年ますます注目されつつあるジェンダー統計に関しては、日本における「ジェンダー統計の現段階と課題」をまとめ、『統計学記念号第4集』に掲載した。総務省統計研修所、JICA、NWECCなどでジェンダー統計に関する講師を務めた。

3. お茶の水女子大学21世紀COEプログラム「ジェンダー研究のフロンティアー<女><家族><地域><国家>のグローバルな再構」の下で、中国のパネル調査のうち、家計の収入について分析をし、韓国の収入データを用いて、韓国ソウルで開かれたWomen's World 2005において“Examination of Unequal Income between Women and Men in Japan and Korea”で報告した。

◆教育内容

本学大学院 (開発・ジェンダー論コース) で2科目を担当した。

1. ジェンダー論特別講義 (後期、伊藤り教授と共同担当)。ジェンダー・センシティブな統計 (ジェンダー統計) は、女性と男性の現況や格差 (そして差別) をもたらす根源を確認し、政策立案に貢献し、さらに進捗状況を監視することに貢献できる点で、近年注目されている。統計がよりジェンダーセンシティブになるためには、統計生産、統計利用・分析、統計制度すべてにおいてジェンダー主流化を進め徹底することが必要条件になる。本講義では、与えられた統計数値を鵜呑みすることなく、批判的に統計を利用できるスキルを身につけるために、①統計の機能と役割、統計の生産過程、統計制度に関する講義を6回行い、②受講生と相談した上で、法政大学日本統計研究所 (2001)『統計と人権および開発ーIAOS2000をめぐってー』研究所報, No.27の文献を輪読し、GDIやGEMについて批判的に検討し、③SPSSを用い簡単なマイクロデータ分析も実習した。

2. 国際協力論演習 (後期、伊藤り教授・熊谷知圭教授と共同担当)。タイにあるアジア工科大学院大学で行われる2005年度の「ジェンダーと開発」ワークショップに向けての事前学習および現地でワークショップのサポートをした。

3. その他では、地域、総務省統計研修所等で講義をし、またタイのアジア工科大学院大学でも客員教員として講義をもった。

◆Research Pursuits

My main research is (1) gender differentials and discrimination of wage and income, in Japan and Britain, (2) gender statistics in Japan and ESCAP region, and (3) analysis of panel data conducted by Frontiers of Gender Studies, the 21st Century COE Programme, Ochanomizu University.

Regarding (1), I have awarded JSPS Grant (Encouragement of Young Scientists(B)) for 2005-2007, to investigate unequal income in Japan and compare with other countries. It aims to provide the basic data for considering living wage, minimum wage to eradicate unequal income/wage between women and men.

About (2), I have identified the present situation of activities and research on gender statistics in Japan and propose how to move on forward to enhance gender statistics in terms of the both sides.

◆Educational Pursuits

I taught 2 subjects in the course of “Development and Gender”, graduate school in our University.

(1) “Special Lecture on Gender Studies” (with Prof. ITO Ruri): Its main objective was to learn what is gender statistics, how gender statistics can be produced, what is weakness of GDI and GEM.

(2) “Seminar on International Cooperation” (with Prof ITO Ruri and Prof. KUMAGAI Keichi): We supported post graduate students who attended “Gender and Development Workshop” conducted by Gender and Development Studies (GDS), Asian Institute of Technology (AIT), Thailand.

(3) Apart from the teaching in our University, I gave lectures on gender statistics in Japan, such as in local governments, NGOs, and Statistical Research and Training Institute, Ministry of Internal Affairs and Communications. I also gave lectures on “Gender, Technology and Economic Development”, as a visiting faculty, at GDS, AIT.

◆共同研究例

・独立行政法人国立女性教育会館の「ジェンダー統計に関する調査研究プロジェクト」（2004年10月～2005年3月）の委員として、共同研究を行い、『男女共同参画統計データブック 2006』を発行した。

・JICA、カンボジア王国ジェンダー政策立案・制度強化支援計画技術協力プロジェクト国別研修においては、独立行政法人国立女性教育会館の担当者のサポートをしつつ3回の講義を行った。

◆将来の研究計画・研究の展望

(1) ジェンダー視点から賃金/所得の絶対的水準と相対的格差（男女間、同性間、夫妻間）の両方を分析するので、男女が共に自立した労働者として生活可能な賃金/所得を得ているかを検討していきたい。(2) 賃金/所得について、労働と生活そしてジェンダーの視点から関連付けて、検討したい。(3) 共働き男女の賃金/所得に着目しているので、「男性稼ぎ主」型あるいは「両立支援」型の強弱の検討をしたい。(4) 個人と世帯の所得の関係をジェンダーの視点から検討し、リビング・ウェイジやベーシック・インカムなどの政策論議に結びつけつつ、労働力の持続的再生産のための政策に結びつける方向で、分析を進めたい。(5) 労働統計と家計統計のジェンダー統計視点からの検討と国際比較を行う。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

・ジェンダー統計に関して（地域、アジアなど）

◆受験生等へのメッセージ

皆さんは、たくさんの数値を、雑誌、新聞や本の中で目にしていると思います。これらの数値は、どのように得られたのでしょうか。政府が行う統計調査から得られたもの、民間団体が聞き取り調査をしたもの、インターネットや携帯を通じて得られたデータなど、様々あります。

統計は、社会経済現象の数量的側面を反映した数値・データです。統計が正確に現実を反映したものであれば、現実の把握と分析、そして政策策定とその効果の監視に統計を役立てることができます。ただし、我々が使う統計のほとんどが、統計調査という特別な認識過程を経て獲得されたものです。ジェンダーによるバイアスが、統計の作成過程に入りこむ可能性もあります。だから、統計数値を鵜呑みにすることなく、批判的に統計を利用する必要があります。

統計の作られ方、統計の利用の仕方などを、ジェンダーの視点から、検討しませんか。

教員名	杉山 進 (SUGIYAMA Susumu)
所 属	文教育学部芸術・表現行動学科舞踊教育学講座
学 位	体育学修士 (東京教育大学)
職 名	教授
URL/E-mail	sugiyama@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

体育哲学 / 大学体育 / スポーツ文化 / 身体知 / 身体表現

◆主要業績

- ・特別講演 これからの大学体育連合のあり方
- ・これからの大学体育

◆研究内容

大学体育関連の研究として、共同で全国 450 大学を対象に「大学における課外スポーツ活動に関する実態調査-大学および保健体育教員の関わりについて-」を実施した。調査内容は (1) 大学における課外スポーツ活動に関する実態調査 (大学用調査票) (2) 課外スポーツ活動に関する実態調査 (学生用調査票) の 20 項目の質問から成る。回収率は約 30% で 150 校から回答があった。報告書は作成中である。大学体育に関する資料を整理し九州地区大学体育研究集会で講演をした。

◆教育内容

学部では、専門科目として、体育原理、表現行動論、スポーツ文化論、保健体育科教育法 I、保健体育科教育法 II、舞踊・運動科学研究法入門、スキー実習、ゼミ (卒論指導) を担当、コア関係ではスポーツ健康実習 (6 クラス)、生涯スポーツ (1 クラス) を担当、大学院前期課程では、現代スポーツ特論、院ゼミ (修論指導) を担当した。授業負担が過多であった。修士課程の学生 2 名がそれぞれの事情で修論が完成せず留年した。

教員名	鈴木 恵美子 (SUZUKI Emiko)
所 属	生活科学部食物栄養学科
学 位	農学博士 (1989 東京大学)
職 名	助教授
URL/E-mail	http://www.anthrop.ocha.ac.jp/esuzuki@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

アスコルビン酸 / 糖尿病 / 酸化ストレス

◆主要業績

総数 (2) 件

・ E.Suzuki, M.Hayashi, M.Kaminao and T.Kurata

Influence of cigarette smoke on the L-ascorbic acid metabolism and the activities of drug-metabolizing enzyme in rats

J.Nutr.Sci.Vitaminol., 51(5), 374-376(2005)

・ N.Sanceda, J.Ibanez, T.Kurata, E.Suzuki, K.Hatae

Changes in the Fatty Acid, Taurine and Free Amino Acid Contents of Incubated Unfertilized and Fertilized Duck Eggs

The Philippine Agricultural Scientist, 88(3), 337-349(2005)

◆研究内容

平成 17 年度に行った研究の代表として、受動喫煙がビタミン C (アスコルビン酸) 代謝に及ぼす影響に関する研究を報告する。

生活環境中には生体に酸化ストレスをあたえる要因が多くあり、その一つにタバコの煙があげられる。ビタミン C (アスコルビン酸) は生体内の有効な抗酸化剤で、酸化ストレスを低減化させると考えられる。そこで、アスコルビン酸の代謝への受動喫煙の影響を調べることにより、アスコルビン酸の適正摂取量に関する情報が得られると考え、研究を行っている。本年度では特に、ラットを用いて受動喫煙を行った場合の血漿中アスコルビン酸濃度の経時的な変化を調べた。受動喫煙開始後、酸化型アスコルビン酸濃度が上昇しその後、開始前のレベルに低下することを認めた。この結果、アスコルビン酸は酸化ストレスから生体を防御するものと考えている。

◆教育内容

学部で担当した主な授業科目としては「生化学」「一般化学実験」「生体生理学」「生体制御学実験」である。このうち基礎的なものは「生化学」「一般化学実験」で、より専門的な領域のものは「生体生理学」「生体制御学実験」である。「生化学」では、人体の構造や機能を理解する上で必要な基礎的な知識を習得させることを目的に行っている。「一般化学実験」では、実験の基礎となる基本操作法を習得させ、安全で正しい実験が行えるようになること目的としている。「生体生理学」では、生体の感覚機能、情報伝達・処理機構および内部環境の維持等を取り上げ、体の機能についての理解を深めることを目的にしている。「生体制御学実験」は生体成分の分離・定量等の実験ならびにそれらに伴う各種実験操作の習得をとおして生体内での物質代謝や生体の構造、機能についての理解を深めることを目的に行っている。

大学院の講義「生体制御学」では環境変化に適応して体内の恒常性を維持する調節機構を中心に取り上げてより生体の機能が理解できるようにしている。

◆Research Pursuits

Several factors in the environment could give oxidative stress to the body. Smoking is considered one of them. Vitamin C (ascorbic acid) is an effective antioxidant in the body, and it is considered to reduce the oxidative stress.

In order to get more information about the AsA optimum intake, the influence of passive smoking to the metabolism of ascorbic acid was investigated. The ascorbic acid concentrations in plasma of the rats exposed to cigarette smoke as a function of time were measured.

The concentration of oxidized form of ascorbic acid increased after exposure to smoking, and then decreased to the initial level, that was before the start of passive smoking exposure.

The results showed that ascorbic acid could protect the body against oxidative stress.

◆Educational Pursuits

“Biochemistry” and “Chemistry, General Experiments” are basic subjects. “Human Physiology” and “Applied Biochemistry and Physiology Laboratory” are special ones.

In “Biochemistry”, the structures and functions of carbohydrates, proteins, lipids, and nucleic acids are taught. In “Human Physiology”, the functions of tissues, such as sensory organs, and maintenance of homeostasis are taught in order to deepen the understanding level about the body. In “Chemistry, General Experiments”, the general use of laboratory instruments, such as pipette and burette, is explained, and preparation of reagent solutions and the like, is also taught. In “Applied Biochemistry and Physiology Laboratory”, separation and determination methods of the chemical constituents of the body are taught and also how to measure the activity of enzyme are instructed.

The regulation mechanisms that maintain the homeostasis are taught in the subject of “Biological regulation” in graduate school.

◆将来の研究計画・研究の展望

糖尿病発症時でのアスコルビン酸の代謝を詳細に解明してその適正な摂取量を明らかにすることにより、糖尿病患者の健康の維持増進に寄与できると考えている。超高齢化社会では高齢者の健康を考えることは重要である。抗酸化物質により老化の進行抑制等がはかれる可能性が考えられたために抗酸化物質の適切な摂取について明らかにする。この結果により、高齢者の QOL の改善が期待されるものと考えている。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・糖尿病合併症の発症予防、進行遅延・阻止について
- ・活性酸素種の消去と酸化ストレスの低減化

◆受験生等へのメッセージ

人の健康や食物のことについて興味をもって学び、将来、人の健康の維持・増進に寄与したいと考えている人を歓迎します。

教員名	鈴木 禎宏 (SUZUKI Sadahiro)
所 属	生活科学部人間生活学科生活文化学講座
学 位	博士号 (学術) (2002 年 東京大学)
職 名	助教授
URL/E-mail	http://hikaku.aesthe.ocha.ac.jp/~hp/ssuzuki@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

生活造形論 / 民芸運動史 / 生活の芸術化、芸術の生活化 / 対抗産業革命論 / British Studio Pottery

◆主要業績

総数 (2) 件

- ・『バーナード・リーチの生涯と芸術 「東と西の結婚」のヴィジョン』(ミネルヴァ書房、2006 年)
- ・「民芸運動とバーナード・リーチ」、熊倉功夫、吉田憲司共編『柳宗悦と民藝運動』(思文閣出版、2005 年 P164-P182)

◆研究内容

専門分野：

比較日本文化論/比較文学比較文化、生活造形論

主な研究課題：

- 1 二〇世紀イギリスの工芸 (Studio Pottery を中心に)
- 2 近現代日本の工芸 (民芸運動ほか)
- 3 その他日本とヨーロッパを軸とする比較文化論 (例えば、昭和初期の日本における「世界」観など)

所属学会等：

日本比較文学会 美術史学会 ジャポニズム学会 東大比較文学会 文化資源学会 デザイン史フォーラム 民族芸術学会

◆教育内容

主な担当授業科目

(学 部) 比較生活文化論、比較生活文化論演習、比較生活文化史 I、生活造形論ほか

(大学院) 比較文化論、比較生活文化特論、生活造形特論、生活芸術論

学部 4 年間を通じ、「自分で問題をみつけ、その問題に自分で答えをみつけることのできる人材」の育成を目指しております。

この目的のためには、(1)基礎技能を高めていくことと、(2)専門性を高めていくことと いう、二つの事柄が重要です。

すなわち、(1)語学などの基礎学力、問題設定能力、情報収集能力、分析・思考能力、プレゼンテーション能力などを高めていくことと、(2)比較文化論という方法論を身につけ、異文化理解能力と異文化への発信能力を高めることです。

こうした観点から、各学年の授業をくみだてています。主に世界の諸地域における文化 (特に生活造形) の諸相と、それを支える精神構造・価値観の解明を研究課題とします。

特に近代以降の西ヨーロッパと日本を中心として、諸文化・文明間の接触がもたらす文化の継承・変容を論じております。

その際には、日本を比較の基点とする比較文化論的アプローチを用います。これは、「日本」という文化を知ることによって異文化を知り、また異文化を知ることによって自己の由来する文化のあり方をふりかえるという、複眼的思考のことです。(何かと何かを比べて、その優劣を定めることではありません。)

現代では国際的な文化交流がますます速まっており、儀礼や習慣を支える根底の意識も変容をきたしております。

こうした変化の流れの中に身をおきながら、今一度「生活」というものの在り方を考え直したいと考えております。

◆Research Pursuits

My research subjects so far are as follows: (1) Aspects of "Art for Life's Sake" in Modern and Contemporary Japanese Cultural Scenes; (2) The History of the British Studio Craft Movement (mainly in the field of ceramics); and (3) A Mental Map of Modern Japan: A History of World Views Conceived by Modern Japan in the Period between 1905 and 1945.

◆Educational Pursuits

Comparative Studies of Japanese Culture (Hikaku-Nihon-Bunka-Ron) is an approach to understanding Japanese culture and history in the context of world cultural traditions and world history. Our way of thinking is culturally and historically conditioned. The theory of Comparative Culture suggests first challenging these conventional modes of thinking by making reference to the possibility of other frameworks or cultural values, and, secondly, rediscovering the significance of the culture to which he or she thinks they belong.

◆共同研究例

- ・「京都を中心とした、日本の伝統工芸の過去・現在・将来」研究会
- ・「柳宗悦と民芸運動」研究会

◆将来の研究計画・研究の展望

「生活造形論」の理論化
いわゆる「情報化革命」が文化のあり方に及ぼす影響の分析

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・情報化社会における生活文化論

◆受験生等へのメッセージ

日本語の「ハンカチ」と英語の"handkerchief"は似て非なるものですが、その違いをみなさんは御存知でしょうか。

「ハンカチ」とは「小型・方形の手ふき布」(『広辞苑』)であるのに対し、"handkerchief"は"a small piece of material or paper that you use for blowing your nose, etc." (鼻をかむさいなどに用いる、一切れのものまたは 紙) (Oxford 英英辞典)です。「ハンカチ」も"handkerchief"も一切れの布であることには変わりはありませんが、それらが現実の生活において果たす役割は、文化によって異なることになります。

このような生活造形などを手がかりとして、文化の接触と変容の問題等に取り組んでおります。こうした問題を考える際には、(1)「異文化」を「自文化」に対して説明すること、および(2)「自文化」を「異文化」に対して説明すること、の2点を常に意識することになります。

文化と文化の接触の現場に興味があり、外国語の習得に意欲のある方を、歓迎いたします。

教員名	高崎 みどり (TAKASAKI Midori)
所 属	文教育学部言語文化学科日本語・日本文学講座
学 位	文学修士
職 名	教授
URL/E-mail	takasaki@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

文章論 / レトリック / 表現 / 談話 / ジェンダー

◆主要業績

総数 (2) 件

- ・『文体論研究書誌』『日本語』セクションを佐藤嗣男（明大教授）・立川和美（流経大講師）と担当、学会誌『文体論研究 特別号』（日本文体論学会 2005 年 9 月）として発刊。
- ・「日本語研究とジェンダー—規範としてではなく、構築される現象としての”言葉”」お茶の水女子大学COEプログラム「日本文学におけるジェンダー表象」第6回研究会 発表（2005 年 6 月 18 日）

◆研究内容

現代日本語の文章・談話分析を中心に研究しています。文章・談話という最大の言語単位を対象に、その成立要因、展開や構造、あるいは表現・文体といった個別的個性的な様相等を、具体的な言語データを基に分析しています。また、ディスコース分析からの自然な帰結としてジェンダーとテキストの関係にも興味を持っています。

2005 年度でいえば 2005 年 3 月に、海外学会発表 1 件、論文 2 本（明治書院、お茶大言語国文学会）が集中して出ており、4 月以降は、科研費補助金（研究成果公開促進費）獲得のための研究会を毎月重ねた。その結果、18 年度交付決定（130 万円、課題番号 185082 「日本語随筆テキストの諸相」）を得たが、結果として 2005 年度はその準備に忙殺された。また、研究のシステム化の一環として、文体論関係書誌・日本語セクションを担当（『文体論研究』特別号 2005 年 9 月）したことでも時間をとられたが、所収すべき論文の選定などで、多くの論文にあたり、今後の自分の研究方向の参考となった。

◆教育内容

現代日本語学全般の必須知識の伝達を心がけて、講義内容を組んでいます。

演習やゼミは、自分の専門分野である現代日本語の文章論や談話論を具体的な材料を使って分析をする内容です。

講義、演習、ゼミ共学生の興味、関心、知識に応じてフレキシブルに内容を用意するように心がけています。

◆Research Pursuits

I study the sentence and conversation of modern Japanese mainly.
In concrete terms, I analyse the practical data and prove the cause of its construction and development.
Besides, I'm interested in the connection between texts and gender.

◆Educational Pursuits

In my classes, students learn the necessary knowledge of modern Japanese.
In my seminar, they learn the way to analyse the text and discourse with the practical data.
We can discuss many theme flexibly.

◆共同研究例

- ・職場のことばの性差分析（2000）
- ・日本の随筆テキストの分析（2005）

◆将来の研究計画・研究の展望

新しいメディア（メール、ブログ、チャット等）を文章論、談話論の角度から分析し、日本語学として位置づけることを目指しています。
また、ジェンダーやセクシュアリティの現代日本社会における様相が、ことばの面にどう反映しているかについての調査・研究にも意欲をもって取り組みたいと考えています。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・新メディアと旧メディアの対比
- ・テキスト分析
- ・ジェンダー論

◆受験生等へのメッセージ

大学院受験生へ
現代日本語についての文章談話分析に興味を持っている方は、ぜひ受験なさってください。
お待ちしております！

教員名	高島 元洋 (TAKASHIMA Motohiro)
所 属	文教育学部人文科学科哲学講座
学 位	博士 (文学) (1993 東京大学)
職 名	教授
URL/E-mail	takasima@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

倫理学 / 日本倫理思想史 / 道德教育 / 感情 / 普遍性と特殊性

◆主要業績

- ・「人間存在の二重構造」(和辻哲郎)と「仏向上」(道元)ー「人間とは何か」(存在)をめぐる予備的考察、『時間論をてがかりとした道元思想構造の総合的研究』pp.79-85、平成15年度～平成17年度・科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書・研究課題番号15520010・研究代表者・佐藤(頼住)光子、2006年3月
- ・「思想史」とは何かー「日本倫理思想史」に関する方法論的反省、『お茶の水女子大学比較日本学研究センター研究年報』創刊号、2005年3月 pp.95-108
- ・「河竹黙阿弥と演劇の近代化」、『近代日本の成立』西村清和・高橋文博編、ナカニシヤ出版、2005年1月 pp.63-90

◆研究内容

日本思想を極東の特殊な思想として理解するのではなく、これを手掛かりとして人間の普遍的な倫理そのものを考察する。主とする専門領域は、江戸時代の思想・文化、特に儒教であるが、古代(神道)・中世(仏教)をも視野に入れながら日本思想全体を概観して研究する。また現代の倫理の問題(人倫＝人間関係)に関しても、特に超越的な存在(神・仏・天など)や他界の観点を考慮しつつ、心(理性)に対する身体(感情)という問題として再考する。

A 個別研究(モノグラフ)としては、1 儒教関係(この研究の一部は「比較日本学研究センター」のプロジェクトである)、2 儒教以外の研究(仏教・武士道・演劇など)、3 道德教育関係があり、また B 方法論の分野の研究もある。

◆教育内容

学生に対する教育内容は、主として「講義」と「ゼミ」である。「講義」は教員が中心となる授業であり、「ゼミ」においては学生が中心となってレポートをする。問題は学生の主体性が充分育成されているかということであるが、現状は「講義」の趣旨はよく理解されており、「ゼミ」において活発な議論がなされていることから、教育は期待どおりに機能していると判断している。

また「魅力ある大学院教育イニシアティブ：〈対話と深化〉の次世代女性リーダーの育成」(平成17年)のさまざまな事業においては、フランスにおけるジョイント教育・シンポジウムの開催(コレージュ・ドゥ・フランス、ブレーズ・パスカル大学)を実現した。このことは学生にとっては、海外で積極的に発表し、学生同士また研究者と交流することが刺激となって、博士論文執筆への動機付けを強化したと考えている。

◆共同研究例

- ・ 「比較日本学研究センター」の研究プロジェクト

◆将来の研究計画・研究の展望

日本思想は、インド・中国などの影響にあつて独自のものはないと考えられているが、実際はきわめて洗練された普遍的思想内容を形成しており西洋思想にもひびいてくるものがある。今日海外との文化交流は、能・歌舞伎・茶道だけではなく文学・演劇・美術など高度に専門的な学問分野においても活発である。今後重要な研究の方向として、日本思想は特殊であるとする誤解を是正し、正確な思想・文化を発信することがある。

◆受験生等へのメッセージ

授業においては、テキスト（資料）を正確に読みとる訓練と相互の討論をとおして、資料の意味、著者が何を考えていたかを時間をかけて考えたいと思います。今日さまざまな政治問題・社会問題が日々の TV、新聞等マスメディアによって伝えられていますが、重要なことは結局は自分自身がどのようにこの情報を受けとめるかということです。マスメディアはいろいろな意見を羅列しますが、場合によっては「言論の自由」が「無責任」と同義語となることもあります。いずれにせよテキスト（資料・情報）を正確に読みとる責任は個々人にあるということです。

教員名	鷹野 景子 (TAKANO Keiko)
所 属	人間文化研究科複合領域科学専攻
学 位	理学博士 (1988 大阪市立大学)
職 名	助教授
URL/E-mail	http://www.dc.ocha.ac.jp/fukugo/takano.html keiko@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

計算化学 / 量子化学 / 理論化学 / 化学反応 / 分子認識機構

◆主要業績

総数 (4) 件

- ・ K. Ueno-Noto, M. Hara-Yokoyama, and K. Takano J. Comput.Chem., 27, 53-60 (2006) Recognition of Tandem Sialic Acid Residues by CD38: A Theoretical Study
- ・ K. Miyamoto, K. Takano, and Y. Fukuda Bull. Chem. Soc. Jpn., 78, 2124-2129 (2005)
Theoretical Study on the Disproportionation Reaction of Nickel(II) Mixed-Ligand Complexes Containing N,N,N',N'-Tetramethylethylenediamine, Benzoylacetate, and a Halide Anion
- ・ N. Koga, T. Matsushita, K. Takano, K. Hashimoto, M. Hada, H. Hosoya, H. Matsuzawa, K. Mogi, U. Nagashima, H. Wasada, S. Yamabe (Eds.) J. Comput. Chem. Japan, 4(5) (Special Issue), Society of Computer Chemistry, Japan, pp.1-367 (complete in one issue) (2005) Quantum Chemistry Literature Data Base II. Supplement 24. Bibliography of ab initio Calculations for 2004

◆研究内容

量子化学的手法を主な研究手段として、分子およびその集合体を対象とするコンピュータシミュレーションを行ってきた。実験に対する相補的な情報の提供および、化学現象の先見的な理解および予測を目指している。対象とする分子のサイズは大小様々で、無機分子・有機分子・生体系の認識部位など多岐に渡る。本稿では、糖鎖科学への適用例について述べる。

<糖鎖科学への計算化学からのアプローチ> 細胞の分化シグナルの発生と制御に関与する新しいタイプのマイクロドメイン糖脂質の立体配座解析を行い、糖のある特定の水酸基の配向が糖脂質糖鎖全体の向きを決めるのに重要な因子であることを明らかにした。また、糖脂質による酵素阻害に対して、フロンティア分子軌道と阻害効果の大きさとの相関を見出し、マンノース結合タンパク質の糖結合性に関して、受容体と基質における静電ポテンシャルの相補性と糖結合性との相関を明らかにした。

◆教育内容

理学部化学科における教育活動に従事した。

「化学特別ゼミ」コンピュータケミストリの入門として、水分子やアンモニア分子の量子化学計算の実習。

「構造物理化学」量子化学の基礎的内容。

「量子化学」量子化学計算の実践的講義 (計算機実習)。

「物理化学実験」物理化学の重要概念を修得させることを意図した実験。

「化学演習 I・II」化学の幅広い分野の論文の輪読および文献紹介の指導。

「特別研究」卒業研究生 (2005 年は 3 名) の研究指導。大学院前期課程物質科学専攻における教育活動に従事した。

「量子化学特論」分子軌道計算の実習と学術論文を読むための専門用語の解説。

「理論化学特論演習」量子化学の専門書の輪読と問題演習により、理論的基礎を養う。

大学院生 (博士前期課程物質科学専攻 3 名、博士後期課程複合領域科学専攻 3 名) の研究・論文指導。学位審査の主査 2 件、副査 1 件を務めた。主査の内 1 件は、ルイ・パルツール大学 (仏) との共同博士指導に基づく。

◆Research Pursuits

Our ultimate goal is to understand and predict properties of molecules, characteristics of chemical bonding, and mechanisms of chemical reactions. From the viewpoint of quantum chemistry, we are studying properties of chemical bonds in molecules and reaction mechanisms. There are many complicated intermolecular and intramolecular interactions in materials. We hope to understand and clarify origin and/or features of the interactions.

One of the research projects done in 2005 is related to glycoscience. Systematic conformational analysis of the sugar-part in phosphatidylmonosacchride was carried out to examine the preferable conformation of sugars. Preliminary calculations suggested that hydrogen bonds and gauche conformation contributed to the stability of the conformers. Starting from the initial geometries having gauche conformations and/or hydrogen bonds, geometries of the sugar-part were optimized. Finally, conformers were grouped into three types. It was found that ratios of the types depended on the orientation of the OH group. We also found a relationship between the frontier molecular orbitals and the inhibitory effect for the inhibition of the glycolipids in the enzyme reaction. In addition, we found the correspondence between electrostatic potentials and binding property of the enzyme to the substrate.

◆将来の研究計画・研究の展望

量子化学的手法を主な研究手段として、分子およびその集合体を対象とするコンピュータシミュレーションを行う。実験に対する相補的な情報の提供および、化学現象の先見的な理解および予測を目指す。生命科学に重要な役割をもつ糖鎖科学への計算化学からのアプローチは先導的な研究と位置づけられ、重要テーマの一つとして推進していく。金属錯体の構造と反応、分子の励起状態と分光学、など実験精度に匹敵する計算研究を推進する。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・糖鎖の立体構造解析
- ・酵素と基質の相互作用の解析
- ・金属錯体の幾何学構造と反応機構の解明

◆受験生等へのメッセージ

「コンピュータケミストリ（計算化学）」をご存知ですか？

高校の化学には登場しない、みなさんにとって新しい分野です。化学の長い歴史とは対照的に、20世紀になってからスタートした若い学問・研究分野です。計算化学は、化学のあらゆる分野の研究に、現在では必須の役割を果たしています。化学は実験の学問として長い歴史を持ちますが、結合の性質や化学反応の過程や機構をコンピュータシミュレーションによって調べることができるようになりました。しかも、現象を説明するだけでなく、予測も夢ではありません。

お茶の水女子大学理学部化学科では、1年次の基礎化学の一部で量子化学の導入を行い、2年次の構造物理化学(必修)で量子化学の基礎をみっちり学びます。4年次の計算化学および大学院(博士前期課程)の量子化学特論において、コンピュータケミストリの講義実習を受講できます。

コンピュータケミストリを学び、化学の新しい領域を共に開拓していきましょう。

◆Educational Pursuits

Educational Activity

I hold the chair of the subjects described below at the Department of Chemistry of the Faculty of Science.

"Special Seminar of Chemistry," "Structural Physical Chemistry," "Quantum Chemistry," "Experimental Exercise of Physical Chemistry," "Exercise in Chemistry I & II," and "Research Activities."

I occupied the chair of the subjects described below at the Division of the Physical and Chemical Sciences of Graduate School of Humanities and Sciences (Master's Program).

"Advanced Quantum Chemistry" and "Exercise in Theoretical Chemistry."

I supervised three undergraduate students, three master's course students, and three PhD students. One of the PhD students was jointly supervised and examined by University of Louis Pasteur and our university. Another student was a Japanese-government-financed foreign student.

教員名	鷹野 光行 (TAKANO Mitsuyuki)
所 属	文教育学部人間社会科学科教育科学講座
学 位	文学修士 (1974 年 東京大学)
職 名	教授
URL/E-mail	mtakano@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

火山噴火罹災遺跡 / 学芸員養成 / 遺跡活用

◆研究内容

2004 年度より文部科学省科学研究費（特定領域研究）を得て鹿児島県指宿市周辺にフィールドを求め、火山噴火による罹災遺跡の調査を行っている。これは 1985 年より参加していたイタリア共和国におけるローマ時代別荘遺跡の調査とつながりを持ち、この調査を通じて、発掘調査された遺跡がどのように活用されていくのかを見てきた。これは日本の遺跡博物館の動向ともかわりを持つものである。今後も自ら手がけた遺跡の保存活用に関わる諸問題を博物館学的見地からも研究していく。

発掘調査を行った指宿市敷領遺跡は、874（貞観 16）年 3 月 25 日の開聞岳の噴火による火山灰により埋没した平安時代の水田の遺跡である。発掘実施前に東京工業大学と連携して地中のレーダー探査を行って遺構の存在を確認し、それに基づいて発掘を行った。調査期間中台風に襲われ手水没してしまったが、おかげで水田面の稲の株跡と見られる窪みを多数検出し、この水田からの収穫量を推定することができた。



◆教育内容

学芸員養成のための諸問題については、いかによいカリキュラムを作成していくかが問題である。幸いお茶の水女子大学の学芸員養成課程の評価は比較的高いところにあるようで、今後もこの水準は維持していきたい。今のところ、良好な最新の本質的な博物館に関する課題を担当する博物館学概論、博物館活動特殊講義（博物館法施行規則における博物館経営論、博物館情報論に相当）、博物館資料特殊講義（同 博物館資料論）、博物館実習を通じて学芸員資格取得希望者に対して伝えていくことが課題である。学芸員資格取得のための選択科目でもある考古学通論においては、半期を非常勤講師に委ねたが、考古学の定義、研究資料、研究法などについて、縄文時代を主な題材として講義した。大学院修士課程では、博物館の活動の評価を試みるために、博物館の年報・館報により活動を分析し、博物館の教育機能の確認を行った。

教員名	高橋 俊彦 (TAKAHASHI Toshihiko)
所 属	ライフワールド・ウオッチセンター
学 位	理学博士
職 名	助教授
URL/E-mail	toshi.t@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

化学物質総合管理 / 国際動向 / SAICM / 自主管理 / 法律体系

◆主要業績

総数 (2) 件

- ・高橋俊彦・山崎隆生・大久保明子・増田優．企業の社会的責任と化学物質総合管理を巡る最近の国際動向－行動評価指標の開発の視点を踏まえて－．化学物質総合管理．1(2),2005,p288-305
- ・高橋俊彦・結城命夫・増田優．国際的な化学物質管理のための戦略的アプローチ (SAICM) に関する国際動向調査．化学生物総合管理学会 2006 年春季学術集会．東京都文京区お茶の水女子大学．2006 年 3 月．

◆研究内容

本研究では化学物質管理に関する最近の国際動向とわが国の現行制度とを比較することにより、わが国が抱えている課題を明らかにするとともに、課題の解決に向けての目標、方策、戦略を導き出すことを目的とする。現在、安全・安心で持続可能な社会の構築が世界的に求められている。法令を遵守するのみならず、企業の社会的責任 (CSR) を求める社会の要請や社会的責任投資 (SRI) の動きが近年強まっている。また、化学物質管理においても自主管理が主要な役割を担うことがアジェンダ 21 第 19 章やヨハネスブルク実施計画を通して世界の常識となった。国際的な化学物質管理のための戦略的アプローチ (SAICM) の調査を通じて世界の化学物質管理の動向と今後のわが国の化学物質管理の有り方について検討した。

◆Research Pursuits

The purposes of my research are to clarify the problems which our country has in the field of chemical management and to design the target, the way and strategy to solve the problems by comparing current regulation system for chemicals management in Japan with the international trend.

It has been longed worldwide to build a safe and sustainable developable world. Companies are recently demanded more and more not only to obey law but to implement CSR (corporate social responsibility). SRI (Socially responsible investment) has become more popular. Voluntary action for the sound management of chemicals by companies has been common sense through the implementation of chapter 19 of Agenda 21 and the Johannesburg Plan of Implementation.

The global trend in chemical management and the direction of the management in Japan was investigated through the research of Strategic Approach to international chemicals management (SAICM).

◆将来の研究計画・研究の展望

自主管理・社会的責任という概念は企業に限らず社会を構成し化学物質管理に係る全てのセクターに共通するものである。自主管理・社会的責任に基づく行動が各セクターに期待されており、これに応えるための体制の構築が急がれている。企業以外の専門機関、人材育成機関、非政府組織が化学物質管理に関して抱えている課題を検討し、今後とるべき方向を提言することにより、各セクターの今後の発展に資することが期待される。

教員名	高橋 真央 (TAKAHASHI Mao)
所 属	開発途上国女子教育協力センター
学 位	学士 (文学) 修士 (人間科学)
職 名	講師
URL/E-mail	mao@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

国際協力 / 開発途上国における女子教育 / ボランティア

◆主要業績

総数 (4) 件

- ・＜論文＞高橋真央・天沼直子・加藤貴子. 2005 年. 「国際理解教育における遠隔交流授業の可能性ーケニア・マサイと日本の小学校における遠隔教育の実践からー」国際理解教育. 11 号. 88－101 頁.
- ・＜学会発表＞高橋真央・天沼直子・中村安秀・草郷孝好・仲佐保・倉沢愛子・池田光穂. 「インドネシア母子健康手帳プログラムに関する学際的調査」第 20 回国際保健医療学会総会. 東京大学本郷キャンパス. 2005 年 11 月 6 日.
- ・＜フィールドワーク＞「生活世界と学校教育の相互作用に関する調査」(ケニア、マサイにおいて)

◆研究内容

開発途上国における女子教育の必要性および支援の状況について研究を進めています。どのような国においても女性が一人の人間として、自分の意志で選択し生きていける世界となるために何が必要なのか、という視点を常に持ち続けながら研究しています。

同時に、「国際協力ボランティア」に関心を持ち、世界中で様々な NGO が立ち上がり、沢山のボランティアが途上国に出かけていたり、国内での NGO 活動に関わったりしています。ボランティアを焦点に当てた国際協力活動や市民社会の動きに注目し、研究を進めています。

◆Research Pursuits

I am studying the conditions of women and girls in developing countries. I am promoting research activities aimed at improving the education and status of women in developing nations for the purpose of creating a world where every woman is free to make her own decisions. Women's empowerment is affected by many different issues in developing nations, including health, education, population, economics and labor problems. I am trying to research about these problems and promoting support activities from the perspective of education.

In addition, I am interested in NGO activities and the volunteers who deal with international collaboration activities. Now the volunteers are so active that they can go to the developing countries and support the people, or that they can make efforts to assist the international volunteers. I focus on the people's activities in the field of international collaboration and try to research the system of civil society in its field.

◆共同研究例

- ・紛争地における教育支援

◆将来の研究計画・研究の展望

日本の市民による国際協力の関わりについて分析し、まとめていきたい。また、他国の国際協力について比較研究し、日本の市民社会による国際協力のかたちについて考えていきたい。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・ボランティア
- ・国際教育協力
- ・開発途上国における女子教育

◆受験生等へのメッセージ

女性の視点から「世界を見る」そして、「世界を知る」この大学にはそのための様々なチャンスがあります。その機会を得ながら、いつかは世界の平和や貧困にどのような形で良いから関われる女性を育成しようという夢と期待がここにはあります。みなさんも共に、それぞれの視点から世界にいる様々な女性について、その状況について考えてみませんか。

教員名	高濱 裕子 (TAKAHAMA Yuko)
所 属	子ども発達教育研究センター
学 位	博士 (人文科学) (2000 お茶の水女子大学)
職 名	教授
URL/E-mail	takahama@kodomo.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

システム・ダイナミクス / 親子システム / 歩行開始期 / 反抗・自己主張 / 親行動発達支援

◆主要業績

総数 (4) 件

- ・論文 高濱裕子・渡辺利子 「母親が認知する歩行開始期の扱いにくさ：1歳から3歳までの横断研究」 お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要第3号, pp.1-7, 2006(2月)
- ・著書 高濱裕子 「反抗期の親子関係：1歳から3歳までの縦断研究が教えてくれるもの」 幼児の教育第105巻第3号, pp.8-15, 東京:フレーベル館, 2006(3月)
- ・著書 高濱裕子 「子育て支援」 江川紋成・高橋勝・葉養正明・望月重信 (編著) 最新教育キーワード137 [第11版], pp.220-220, 東京:時事通信社, 2005(6月)

◆研究内容

「歩行開始期の子どもをもつ親への養育支援」
われわれは、すでに4年間にわたって「歩行開始期の子どもをもつ親に対する養育支援」を検討してきた。この研究の目的は、(1) 2歳前後に始まるとされる反抗期における家族システムの変化を、多様な測定法によって重層的に記述すること、(2) 反抗期をはさんだ歩行開始期の養育支援の具体的手立てを構築することである。これらの目的を達成するために3つの課題を設定した。①1歳児の親子を同一の変数を用いて2歳時点と3歳時点で測定し、各変数の変化の様相を明らかにすること、②反抗期の始まりから収束までの親子システムの変化を縦断的に測定し、システムの変化のプロセスを記述すること、③歩行開始期の子どもをもつ親や家族に対する養育支援を目的としたプログラムを開発することである。

◆教育内容

大学院前期専攻では、「保育者養成論」および「幼児教育課程論」を担当した。「保育者養成論」では保育者(幼稚園教諭や保育所保育士)の専門性や専門性を支えるさまざまな資源について、内外の文献講読を通して検討した。対人援助を目的とする他の職業(看護師、介護福祉士、教師など)との比較もおこないながら、保育者の専門性への洞察を深めた。「幼児教育課程論」では、乳幼児の発達を保障する教育課程(保育計画)とは何かについて考察した。幼稚園や保育所の保育計画の実際を多数入手し、保育の計画と実践、評価などについて検討した。また、乳幼児期にふさわしい生活の組み立てについて、5箇所の施設見学(幼保の総合施設、子育て支援センター、公立幼稚園の公開研究会など)を通して考察した。

◆Research Pursuits

Child Rearing Support to Parents who have Toddlers

We have already been examining `child rearing support to parents who have toddlers' for four years.

The purpose of this study are, (1) to describe changing the parent-child system on negativism by various metrologies, and (2) to construct the concrete ways of child rearing support to parents who have toddlers.

We set three tasks, and almost achieved two sooner or later. One remaining task is to construct the program that supports the parents' child rearing.

◆Educational Pursuits

I took charge of three seminars of the graduate school master's course.

Those contents were as follows. That is,

(1) The education and training for teachers of preschool or kindergarten, and the professional development as preschool teachers

(2) The curriculum with a preferable kindergarten and day-care center where the infants, toddlers, and young children's development are secured.

◆将来の研究計画・研究の展望

歩行開始期の親子システムについてのわれわれの研究結果から、3歳時点の子どもの自己主張は約70%の親が強まったと認知していることがわかった。この結果は、わが国の子どもの社会化の現場に、従来とは異なる変化が起きている可能性を示唆している。今後は幼児期後期から学童期の自己主張のゆくえを、家庭、集団保育施設（幼稚園や保育所）、学校などにおいてカリキュラムと実践との両面から検討したい。発達の視点をもちた比較文化的な検討がぜひとも必要であると考えている。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

・環境移行と移行期の適応（入園・入学）

◆受験生等へのメッセージ

親や保育者などの成人発達のメカニズムには、まだよくわからないことがあります。それらを解明したいと思っています。また、現職の保育者（幼稚園教諭・保育所保育士）が抱えるさまざまな課題を、発達の視点から検討したいと思っています。

教員名	篁 倫子 (TAKAMURA Tomoko)
所 属	生活科学部人間生活学科発達臨床心理学講座
学 位	1980 年 8 月 MA 文学修士 (米国インディアナ州立ボール大学大学院) 1994 年 3 月 医学博士 (東京女子医科大学)
職 名	教授
URL/E-mail	takamura@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

LD / 軽度発達障害 / 低出生体重児 / ターミナル期 / 心理教育的支援

◆主要業績

総数 (8) 件

・ 篁倫子(2006)

「ターミナル期における教育・心理的対応に関する研究—子どもと共にある教育を目指して—」独立行政法人国立特殊教育総合研究所 (平成 14 年度～平成 17 年度、研究代表者篁倫子)

・ 篁 倫子 (2005)

LD、ADHD、高機能自閉症の子どもの生きにくさ、育療、第 34 号、10-12、2006

・ 上野一彦, 篁 倫子, 海津亜希子 (2005)

LDI (Learning Disabilities Inventory) - LD 判断のための調査票一, 東京, 日本文化科学社

◆研究内容

1) LD、ADHD、高機能自閉症等の軽度発達障害の子どものアセスメント、特別支援教育、心理的支援、教員支援等について、文部科学省の指針、事業等考慮しながら研究を進めてきた。指導ガイドの作成、教育診断法の開発等で成果を示した。

2) 小児がんの子どもやターミナル期にある子どもに対する教育・心理的支援の在り方を病弱教育の視点から研究を行い、その結果を最終年度報告書にまとめた。本研究では院内学級とその担当教員が果たしている役割と直面している課題を検討し、担当教員の研修、適正な教員配置、生と死を考える教育と研修等の必要性が明らかにされた。

3) 発達障害を視野に入れた極低出生体重児の出生から中学生まで前方視的追跡研究ではその発達経過、主に認知機能の発達と問題の発生過程と予防、親支援について検討してきた。

◆教育内容

平成 18 年 2 月に本学に着任し、学部では障害臨床学、人間関係演習、大学院では障害臨床学特論の集中講義を担当した。下記のその概要を示す。

＜障害臨床学＞

発達障害、特に近年、教育や福祉においても特別な支援の対象と認識されるようになった LD、ADHD、高機能自閉症等のいわゆる軽度発達障害について、その障害概念の理解と教育・心理臨床の基礎を学ぶことを目指す。

＜人間関係演習＞

障害や病気と共に生きることを人間の発達の視点並びに、本人、家族、教育、社会生活におけるトータルケアという視点から考えていく。

＜障害臨床学特論＞

LD、ADHD、高機能自閉症等の障害とその臨床について、内外の実証的研究を基に理解し、議論すると共に、各自がテーマを定めて心理・教育臨床の文献研究を報告する。

◆将来の研究計画・研究の展望

「軽度発達障害の思春期の課題と心理教育的支援 - 二次障害の予防に向けて -」

LD、ADHD等の軽度発達障害の子どもは理解と支援がないままに思春期を迎えることが少なくない。様々な心理的・社会的不適応、いじめなどの社会的不利益などの「二次障害」の実態を把握し、彼らのより健全な自我発達と社会化を支える心理教育的支援のあり方を検討する。

「ターミナル期にある子どもの心理・教育的対応」

小児がんや進行性筋ジストロフィーなどを患い、特にターミナル期にある子どもの心理的支援と教育カリキュラムについて、内外の情報収集のため

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・軽度発達障害の子どもの思春期における心理教育的支援
- ・軽度発達障害と脳科学
- ・子どものターミナルケア

教員名	滝澤 公子 (TAKIZAWA Kimiko)
所 属	人間文化研究科特設遺伝カウンセリング
学 位	歯学博士
職 名	講師
URL/E-mail	life-kt@cc.ocha.ac.jp

◆主要業績

総数 (3) 件

- ・共編著：遺伝カウンセラー その役割と資格取得に向けて、151 頁、真興交易医書出版部、2006
- ・共著：遺伝カウンセリングと遺伝カウンセラーの養成、バイオニクス (12) 36-41、オーム社、2005
- ・分担翻訳：分子生物学大百科事典、太田次郎監訳、朝倉書店、担当 U-Z、2006

◆研究内容

- ・遺伝学及び遺伝子研究に対する意識態度の形成：一般社会の遺伝子研究の許容と関心について、独、韓国の研究者と調査研究を行っている。2005 年度は韓国におけるアンケート調査を実施し、データ解析を行っている。
- ・初等中等教育における遺伝学理解のための教材研究
：平成 17 年度日産学術助成、理科・環境教育プログラムの採択を受け、初等教育における遺伝学理解のための教材研究を実施。
- ・日本における遺伝カウンセラー養成のためのカリキュラム研究：さまざまな背景を持つ学生が、遺伝学の基礎領域を効率よく修得するための、教育内容の精査・キーワードの設定等の研究に参画。また先端医療の理解のための科目、セミナーの内容設定、学生の教育や一般啓発のためのシンポジウムのあり方などを探った。

◆教育内容

大学院人間文化研究科ライフサイエンス専攻で、基礎人類遺伝学、細胞遺伝学、遺伝学実習を担当

◆Research Pursuits

- Investigation of attitude for human genetics
- Development of teaching materials for understanding of genetics on elementary and secondary education
- Development of educational program of genetic counseling course in Japan

◆Educational Pursuits

Basic Human Genetics,
Cytogenetics,
Laboratory course of Genetics

◆共同研究例

- Investigation of attitude for human genetics

◆将来の研究計画・研究の展望

- 一般社会の遺伝子研究・治療の許容と関心について、調査研究をすすめ、東アジアにおける遺伝カウンセリング構築のために、欧米との比較などのデータ解析を継続する。
- 初等中等教育において、遺伝を理解することにつながる教材研究を継続し、教養としてゲノム医学や遺伝子研究に関心と理解を持つ生徒・学生の育成をはかる。

◆受験生等へのメッセージ

遺伝子研究やゲノム医学の発達に伴って、ヒトの遺伝情報の取り扱いにとくに配慮が必要となっています。高度な専門知識をわかりやすく解説し、心理社会的支援を行う必要性からも、遺伝カウンセリングの重要性が大きくクローズアップされています。日本にまだ新しいこの分野を切り拓こうとする人たちに期待しています。

教員名	竹尾 富貴子 (TAKEO Fukiko)
所 属	理学部情報科学科
学 位	理学博士 (1982 東京大学)
職 名	教授
URL/E-mail	takeo@is.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

非線形解析学 / 力学系 / フラクタル / カオス / ハウスドルフ次元

◆主要業績

総数 (2) 件

- ・ F. Takeo,
Chaos and hypercyclicity for solution semigroups to some partial differential equations, Nonlinear Analysis, 63(2005), 1943-1953.
- ・ F. Takeo,
Chaotic or hypercyclic semigroups on a function space $C_0(I,C)$ or $L^p(I,C)$, SUT Journal of Mathematics, 41 (2005), 43 - 61.

◆研究内容

力学系におけるカオスのメカニズムを研究するため、関数空間上の作用素からなる半群に対して、カオスや混合性、エルゴード性を引き起こす条件を求めた。カオスは非線形性に由来すると知られているが、関数空間に重み関数を考えると、線形半群であっても、カオスを引き起こすことがある。そこで、どのような重み関数を考えたときに、カオスや混合性、エルゴード性が起こるのかを研究した。この結果を、偏微分方程式に対して適用し、偏微分方程式の解からなる半群がカオスや混合性、エルゴード性を引き起こすための偏微分方程式の性質を特徴付けた。さらに、カオスアトラクターからなるフラクタルについて、その幾何学的性質の対称性やハウスドルフ次元などを中心に研究している。

◆教育内容

学部生に対しては、「微分積分学」、「位相空間論」「情報解析学」の講義をしている。
微分積分学では、高校で学んできたことの発展として、基本的な微分、積分、級数について例を多く挙げながら、ときにはコンピュータの作図を使って講義した。
位相空間論では、位相の基本的な概念を数学的な証明は少なくして、例を多く用いることにより、イメージをできるだけ把握し、応用に使えるように講義した。
情報解析学では、フラクタルやカオスについて、いろいろなコンピュータによる作図をプロジェクターで見せて実演しながら、基本的な概念を講義した。
大学院生に対しては、「応用解析学特論」の講義をした。フラクタルの性質を特徴付けるハウスドルフ次元や、フラクタル図形の復元に重要な役割をするコラージュの定理を中心として、数学的な立場からフラクタルについて講義をした。

◆Research Pursuits

We investigate mechanism of chaos in dynamic systems and get conditions for semigroups of operators in functional spaces to be chaotic, mixing or ergodic. Though it is known that chaos is induced by non-linearity, even in linear semigroups chaos is induced by considering weighted function spaces. We examined the property of weight functions and characterized weight functions which introduce chaotic, mixing or ergodic. By applying these results, we characterize the property of partial differential equation which induce chaotic, mixing or ergodic. Moreover, we investigate the geometrical property or Hausdorff dimension of chaotic attractor, fractal and examined how symmetry of attractor is introduced.

◆Educational Pursuits

For undergraduate students, the lectures “Real analysis”, “topology” and “information analysis” are given. As for real analysis, I teach differential, integral, numerical series and differential equations as an extension of learning in senior high school days. Sometimes I showed the picture drawn by computer graphics and let students understand easily.

As for topology, I teach fundamental properties of topology by showing many examples instead of proving in detail. I try to show image of the meaning in theorem and let students to apply the theorems.

As for information analysis, I explained the fundamental property of fractal and chaos by showing the pictures drawn by computer graphics.

For graduate students, the lecture “topics in applied analysis” is given. In this lecture, I explained and proved the fundamental property of fractal, such as, Hausdorff dimension or Collage Theorem.

◆将来の研究計画・研究の展望

カオスアトラクターは、いろいろ興味深い性質をもっているが、その中でも、ランダムフラクタル、スーパーフラクタル、フラクタルタイリング、などについて、研究を始めている。ランダムフラクタル、スーパーフラクタルは、これまでの幾何学的な形だけでなく、色彩の濃淡、色合いなどもフラクタル性を応用して表すことができる。フラクタルタイリングは、写像に対応する行列の性質と関係して、数学的に興味深い結果が得られそうである。

教員名	武部 尚志 (TAKEBE Takashi)
所 属	理学部数学科
学 位	博士 (数理科学)
職 名	助教授
URL/E-mail	http://www.math.ocha.ac.jp/takebe/ takebe@math.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

可積分系

◆研究内容

可積分系と単葉関数論

◆教育内容

関数論、初等解析学、線形代数

◆Research Pursuits

Integrable systems and univalent function theory

◆Educational Pursuits

Elementary calculus, linear algebra, complex analysis

◆将来の研究計画・研究の展望

可積分系と単葉関数論の関係を研究する。

教員名	竹村 和子 (TAKEMURA Kazuko)
所 属	人間文化研究科比較社会文化学専攻
学 位	人文科学博士 (2003 お茶の水女子大学) 文学修士 (1980 お茶の水女子大学)
職 名	教授
URL/E-mail	takemura@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

ジェンダー / セクシュアリティ / 暴力 / 表象 / 英語圏

◆主要業績

総数 (11) 件

- ・「対抗テロリズム小説は可能か——『マオⅡ』(1991)から『標本的日々』(2005)へ」『アメリカ研究』40号(2005) アメリカ学会、19-37頁
- ・"Pure Love" and Constitutional Amendments: Yukio Mishima and Today's Cinematization of His Novel." *_F-GENS Journal 5_* (2006): 97-103.
- ・「ポスト性的差異は可能か、だがもしも可能になったら」『ラカンとポストフェミニズム』岩波書店、2005年、95-113頁

◆研究内容

《親密圏／公共圏》の考察を、おもに両者のインターフェイスに発生する「暴力」に焦点をあて、理論と表象研究の両面から取り組んだ。具体的には、①精神分析の枠組の歴史的意味と主体構築における暴力隠蔽のメカニズム。②フロイト再読で展開されているマゾヒスティックな自己破砕の位置づけ。③現代アメリカ文学における対抗テロリスト表象の可能性。④翻って日本の改憲論争と三島由紀夫受容の連動性の相同性。⑤医療現場におけるTGの問題系と、TGがもたらす可能性の考察。⑥同様に女性のメンタルヘルス現場に展開するカウンセリングの権力構造の考察と、大学と社会の協働の可能性。⑦アメリカ女性大衆文学における孤児性の表象。⑧2006年のHathorne研究の後付。⑨その他ギリシア悲劇、映像表象におけるフェミニズム的考察。⑩フェミニズムへのバックラッシュと理論的展開の関係。⑪『世界女性人名辞典』と『ジュディス・バトラー』の監訳を通じた英語圏文献の紹介と解説⑫COE事業におけるジュディス・バトラーの初来日講演の企画運営。

◆教育内容

「米文学史」: "アメリカ"や"文学史"とは何かという問題意識を醸成。講義と具体的なテキスト分析とビデオ映像を組み合わせた授業。
「英文学特殊講義(批評理論)」: 1ヶ月に1つの批評理論を取り上げ、講義および文学作品や映像作品の分析への応用を習得。
「英米文学演習(初級)」: N. Hawthorneの短編を精読し、文学研究の面白さと意味を追求。米原住民や戦争、母性イデオロギー等を扱う。
「特別演習(作品分析)2」: 各自が選んだテキストの先行研究と批評的アプローチの指導。
「卒論指導」: 卒論の指導。
「英語圏言語文化概論」: 19世紀中葉以降のセクシュアリティの表象を、文学作品と映画で考察。概論と具体的なテキスト分析より構成。「中級英語」二つ: マンガで解説されたフロイト入門書と、米国の雑誌やインターネットの記事を題材に、理解力の訓練をおこなった。
[大学院]「米文学特論(作家・批評研究)」セクシュアリティの文学表象を抜粋の形で読みながら、とくに女のセクシュアリティ言説の変遷を考察する。適宜、批評的資料をはさむ。

◆Research Pursuits

Examinations of the intimate/public spheres in terms of feminist theory and of representations of violence.

1. historicization of psychoanalytical theorization of self and of the concealment of violence in ego-formation (in _Lacan and Postfeminism_).
2. Rethinking the relationship between "masochistic self-shattering" and self-building (lecture at Ritsumeikai Univ.)
3. Genealogy of representations of terrorism in American literature and possibilities of counter-terrorist novels (in _American Studies_)
4. Research on the recent militarization in terms of campaigns for constitutional amendment and of today's reassessment of Mishima novels. Focusing on the interrelationship between "Pure Love" ideology and nationalism. (COE)
5. Problematics of the medicalization of TG and new horizons to be opened by visibilities of TG (In _Sex Changes_).
6. Power dynamics through (counter)transference in women's mental health projects (Co-research with IGS).
7. Feminist rereading of female-orphan novels and rethinking American literature (at the conference of the ELSJ).
8. Review of Hawthorne studies in 2005.
9. Analyses of Ancient Greek tragedies and contemporary films from a feminist perspective (essays and dialogues).
10. Tensions between backlash against feminism and the development of feminist theory ("WW2005" in Seoul)
11. Introduction of feminist literature through translations of _Women's Biography_ & _Judith Butler_ with prefaces of my own.
11. Arrangement of Judith Butler's lecture at Ochanomizu University

◆共同研究例

- ・「女性のメンタルヘルス研究プロジェクト」

◆将来の研究計画・研究の展望

以下の二つのテーマを追求する。

1. 近年顕著に見られる暴力について、これを近代的自己形成の変容（ポスト近代的自己の出現）と捉え、暴力の再布置の理論化を推し進めて、領域横断的なポスト人文学の可能性をさぐる。
2. グローバル化する英語圏文学（ハリウッド映像やニュース報道も含む）の位置づけ、および近代日本文学との交差の再定位。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・「暴力の再布置」の研究：政治学・社会学・哲学・心理学・自然科学と。
- ・「近代日本文学と英語圏文学の交差」：日本文学・日本史・日本思想史と。
- ・「フェミニズム理論と実践」：男女共同参画センターや民間の NP と。

◆受験生等へのメッセージ

いつも人は、「前例のない時代」を生きています。今まで「当たり前」だった事柄が、当たり前ではなくなるのです。けれども現代は、とくに世界全体が大きく様変わりしようとしているときです。国境を超えて人やモノやマネーや情報が動き、人の身体のパーツも徐々に変換可能・変更可能になっていき、わたしたちが得る情報も電子テクノロジーを介して一挙に拡大・変質していますね。このような、歴史の転換期にこそ、人が本当に自由に、平等に、幸福に生きていけるような知恵を養うことが必要です。世界では教育を受けられない人たちが、残念ながらたくさんいます。高等教育はなおさらです。ぜひみなさんが、〈深い思考〉と〈十全なアカデミックな訓練〉と〈広く公正な視野〉を、大学時代に身につけることを心から望んでいます。社会に世界に発信する女性になってもらいたい、と思って教育に携わっています。大学院を志す人は、『研究する意味』（東京図書）に文章を書きましたので、それを参考にしてください。

◆Educational Pursuits

Teaching undergraduates American literature, critical theory, feminist studies & English as a second language and, to graduates, sexuality studies in terms of theory and representation with focus on female friendship.

1. History of American Literature: Rethinking Americanness, literature, & literary history. Lectures, textual analyses and video-screening.
2. Literary Theory: Training critical thinking to be required for writing dissertations. Lectures, presentations by students, and discussion.
3. Seminar: Reading Nathaniel Hawthorne Today's short stories, focusing on descriptions of native Americans, war matters, maternal ideology, & childhood.
4. Seminar: Training critical analysis and writing
5. Supervision for dissertations
6. Introduction to sexuality studies. Lectures and textual analyses of novels and films (Hollywood and independent).
7. English (2 classes): Training comprehensive ability, using an introductory book to Freud (life & theory) and articles carried in magazines and on Internet.
8. [Graduates] Advanced Seminar in sexuality studies with focus on the nexus between romantic friendship and lesbianism. Critical framework was introduced.

教員名	館 かおる (TACHI Kaoru)
所 属	ジェンダー研究センター
学 位	文学修士 (1975 お茶の水女子大学)
職 名	教授
URL/E-mail	http://www.igs.ocha.ac.jp/ tachi@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

ジェンダー / 東アジア / 規範と制度 / Web世界 / 教育

◆主要業績

総数 (4) 件

- ・『『満州』における植民地的近代とモダンガール』『『東アジアにおける植民地的近代とモダンガール』2005年度研究報告集』(科学研究費補助金基盤研究(A)(1)研究報告集(研究代表者:館かおる)、67-74頁 2006年3月
- ・『『自然科学分野の女性の活動』に関する研究—お茶の水女子大学における調査及び資料研究から—』『第2次世界大戦後における日本の女子高等教育に関する社会史的研究』(科学研究費補助金基盤研究(B)(2)研究成果報告書(研究代表者:米田俊彦)114-122頁 2006年3月
- ・Naoko Oyama, Yoshifumi Masunaga, Kaoru Tachi, A Diachronic Analysis of Gender-Related Web Communities Using a HITS-Based Mining Tool, X.Zhou et al.(eds.): Frontiers of WWW Research and Development - APWeb 2006, Springer-Verlag Berlin Heidelberg, pp. 355

◆研究内容

2005年度は、2003年に採択された3つの科学研究費とCOE「ジェンダー研究のフロンティア」で実施している研究プロジェクトを推進した。

1. 「東アジアにおける植民地的近代とモダンガール」の研究では、「満州」を対象にし、女性たちの「モダニティ」の認識を明らかにすることを試み、海外研究協力者の報告も含め、研究報告集をまとめた。なお、COE「ジェンダー」の「アジア認識とジェンダー」研究とも連結させ、東アジアの現況の歴史認識解明のために、「東アジアの「戦後」60年:軍事化とセクシュアリティ」と題するシンポジウムを開催し記録集を刊行した。

2. 「日本の女子高等教育における自然科学分野の女性」の史的展開を、お茶の水女子大学理学部及びジェンダー研究センターにおける調査及び資料研究から考察し、成果報告書にまとめた。

3. ジェンダー研究の現代的課題の一つに、Web世界の「ジェンダー」の解明がある。情報科学研究者との連携により、Webリンク解析の方法論の開発及び検索サイトの問題性の解明を行ない、その成果を論文にまとめた。

◆教育内容

(学部) 文教育学部人間社会科学科「社会教育特講Ⅰ」では、女性政策と女性センターの役割、ジェンダー・フリー・バッシングについて取り上げた。

(大学院前期課程)「ジェンダー関係論」、「ジェンダー関係論演習」では、ジェンダー概念の成立過程にかかわる基本的な文献と今後のジェンダー研究の展開に重要な文献をとりあげ、受講生の報告をうけて議論した。

(大学院後期課程)「ジェンダー史論Ⅰ」、「ジェンダー史論演習Ⅱ」では、ジェンダー史に関わる文献の講読と共に、各自の博士論文執筆に必読の文献を講読し、博士論文の構想に関わる報告をもとに、受講者で議論した。

修士論文では「韓国の性買売防止法制定過程におけるジェンダー・ポリティクス」、「19世紀後半のアメリカにおける『女性』の構築」、博士論文では、「高群逸枝再読—種への拒否と歴史の誘惑」などの研究指導及び主査を行った。

◆共同研究例

- ・「女性とたばこの文化誌—そのジェンダー規範と表象」（日本たばこ研究センターとの共同研究）
- ・「アジアのモダンガールと＜世界＞—グローバル資本・植民地的近代・メディア表象」（ワシントン大学「世界のモダンガール」研究会との共同研究による国際ワークショップの開催）

◆将来の研究計画・研究の展望

変転する世界状況の中での「東アジア」のジェンダー研究の課題を当面 2 つの方向で展開する。第 1 は、東アジア社会の地政学的文化政治的な解明の中から示唆的な見解を見出すことである。第 2 は、Web 世界の現出が人間の「知」の生成過程を変えつつあることを把握するツールを開発することである。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・東アジアの女性学、ジェンダー研究の推進とその影響力の検討
- ・Web 世界を把握する方法の開発と考察

◆受験生等へのメッセージ

ジェンダー研究は、女性学の成立から数えても、まだ 40 年の歴史もない新しい学問研究です。でもジェンダー研究は、この世界が、20 世紀システムでは立ち行かなくなったことから生まれてきました。お茶の水女子大学は女子大ですが、他大学との単位互換制度もありますし、日本の大学で始めて設置されたジェンダー研究センターという場もあります。21 世紀の世界で生きるあなたたちが、まだ誰も知らない新しい世界を拓くために、ジェンダー研究が「力」になれば嬉しいです。

教員名	田中 望美 (TANAKA Nozomi)
所 属	国際教育センター
学 位	Arizona State University (B.A. in Secondary Ed.) University of Oregon (M.A. in Japanese Linguistics and Pedagogy)
職 名	アソシエイトフェロー
URL/E-mail	tanaka.nozomi@ocha.ac.jp

◆研究キーワード

テストイング / 英語教育 / 日本語教育 / 外国語教育

◆主要業績

- ・田中望美. Mismatch between teaching style and learning style: the learners' preferences and individual differences. 人文科学研究. 第2巻, 2006年, pp201-216.
- ・Sage, K.; Tanaka, N. Future English Listening Testing Directions in Japan. 2006 JALT Pan-SIG Conference. 東海大学清水キャンパス. 2006年5月.
- ・田中望美、平野美恵子. 2004・2005年度 海外短期語学研修報告書. 2006年, 68p.

◆研究内容

平成17年度に導入されたセンター試験の英語リスニングセクションにおけるテストの信頼性と妥当性を考察する。Backman&Palmer(1996)が提唱する Test Usefulness に基づき、TOEFLiBT と照らし合わせながら、比較・分析していく。

◆教育内容

海外(英語圏)における渡航前の心構えとして、危機管理やメンタルヘルスの指導。また、帰国後のメンタルヘルスや異文化理解についての指南。
留学生に対する日本語指導。初級と上級を担当。
日本語教授法。英語圏の小・中・高校及び大学で日本語教師のインターンとして配属される学生に対する指導。
主に演習を通して英語話者に対する日本語指導の仕方や秘訣を指導。

◆Research Pursuits

My research reviews and suggests improvements for the reliability and validity of the English listening section featured for the first time in the 2006 National Center for University Entrance Examination by comparing it with the listening component of TOEFLiBT.

◆Educational Pursuits

My teaching area includes students' physical and mental health care and support during studying abroad in the English-speaking countries. Cultural adjustment and cross-cultural understanding after returning to their home country are also instructed.

Teaching Japanese to international students. Currently teaching to students in novice and advanced levels.

Study/Practicum of Teaching Japanese as a Foreign Language to English speakers.

Giving instruction to student interns who expect to teach to K-16 students.

◆共同研究例

- ・センター試験、英語リスニングセクションの妥当性と信頼性に関する研究

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・海外(英語圏)における日本語教育
- ・テスト勉強による英語教育の逆効果について
- ・JFL(EFL) と FSL(ESL)、環境の違いにおける学生の学習意欲の変化について

教員名	田宮 兵衛 (TAMIYA Hyoe)
所 属	文教育学部人文科学科形象分析学講座
学 位	理学博士 (1975 東京教育大学)
職 名	教授
URL/E-mail	htamiya@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

自然地理学／気候学

◆主要業績

- ・田宮兵衛, 降水と湿度の気候, 西澤利栄編『気候のフィールド調査法』, 他著者 15 名, 古今書院, 2005 年 1 月, 39-42.
- ・田宮兵衛, 都市のヒートアイランド, 西澤利栄編『気候のフィールド調査法』, 他著者 15 名, 古今書院, 2005 年 1 月, 100-104.
- ・田宮兵衛, 炭俵百韻における大気現象, お茶の水地理, 45 巻, 2005 年, 5-9.
- ・田宮兵衛, お茶の水女子大学と地理. 日本地理学会発表要旨集, No. 69, 2006 年 3 月, p. 30.
(春季学術大会シンポジウム、地理学教室の教育体制の現状. 3 月 28 日, 於埼玉大学.)

◆研究内容

- ・気温決定要因考察のための基礎的観測研究。

地球温暖化問題の観測的基礎としての、気温観測は百葉箱を用いて行われている。しかしながら、百葉箱における気温観測の精度の議論は十分になされているとはいえない。

その理由の 1 つは、百葉箱で観測される気温の空間的代表性にある。環境条件を含めこの点に関する現在の知見は、極めて少ない。

この問題を整理する目的で本学学生会館と文教育学部 2 号館の間の中庭に東京都環境科学研究所の協力を得て設置した小型百葉箱で夏季気温観測を実施した。

本データは東京都環境科学研究所が 23 区内に展開したメトロスデータと比較することを予定している。より、広域的な地形が気温に与える影響に関しては、アメダス青梅が多摩川谷底から、扇状地の比較的開けた地点に移転した前後のデータ解析を計画している。

- ・元禄時代の天候認識

芭蕉七部集中の連句に現れる天候現象についての集計を継続的に行いつつ、連句における天候の取り上げ方を通じて、当時の天候認識を探る作業を続けてきた。その作業もほぼ終了しつつあるので、全体を概観し総括的知見を得ることとする。

◆教育内容

学部：

基礎ゼミ；オゾンホール問題

気候環境論；地球環境問題対応に必要な自然地理学の基礎的な知識

気候学解析演習；基礎的大気情報である気温・風・湿度の観測と観測データ処理

卒論演習

博士前期課程：

自然環境論；熱塩循環が気候変動にはたす役割について

博士後期課程：

地理情報論演習Ⅰ

地理情報論演習Ⅱ

◆Research Pursuits

Preliminary observational research for air-temperature controlling factors.

As the observational ground of the issue Global Warming, temperature measurements have been carried using screen temperature. However, accuracy of air temperature, measured in screen, have not discussed sufficiently.

One reason for the situation above concerns the spatial representation of temperature observation, which are performed in screen in flowing air. Our present knowledge about the matter is poor as to point out dependence upon ambient conditions.

To arrange these questions, we observed air temperature using small screen in a courtyard of Ochanomizu University in last summer, in collaboration with The Tokyo Metropolitan Research Institute for Environmental Protection.

Data will be compare with the “METROS” data accumulated by Tokyo Metropolitan Research Institute for Environmental Protection. For more extensive ambient conditions, such as geo-morphological influences on air temperature, “AMeDAS- Oome” data before and after its move from the site in narrow Tama-River valley to more exposed site at near the top of the fan, will be analyzed.

Sensitivity on Weather in *Genroku-Period*

Wards concerning to weather in “hrase Chain” in the 17. Century *Edo-era (Genroku-Period)* have been counted up to survey the citizen’s sensitivities on weather at the time. Texts are quoted from the Collected Phrase edited or supervised by Basho. The program will be completed in time to come. Now the entire picture of the theme is under consideration.

◆将来の研究計画・研究の展望

- ・理系の基本知識を文系大学生に教える方法の開発。

◆受験生等へのメッセージ

小さな大学なので、小人数で密度の高い指導体制が取れるが、指導教員とトラブルが生じた場合救済可能性が乏しい。また、中途または停年退職者があった場合、適切な指導教員不在という事態が容易に発生する。さらに、後者については、組織的対応が全く確立されていない大学である。その点さえ見極めれば、非常に優れた教育機関である。

◆Educational Pursuits

Education of compulsory knowledge for physical geography.

教員名	田村 智英子 (TAMURA Chieko)
所 属	人間文化研究科特設遺伝カウンセリング
学 位	Sc.M., C.G.C (USA)
職 名	助教授
URL/E-mail	http://www.dc.ocha.ac.jp/lifescience/GC/c_tamura@t3.rim.or.jp

◆研究キーワード

遺伝カウンセリング / 遺伝子診断 / 心理社会的遺伝カウンセリング (psychosocial genetic counseling)

◆主要業績

総数 (53) 件

- ・ Chieko Tamura : The Family-Facilitated Approach Could Be Dangerous If There Is Pressure by Family Dynamics. American Journal of Bioethics; 6 (1), 2006, 16-17
- ・ 田村智英子：遺伝カウンセリングとは—十分な遺伝カウンセリングが提供されていたら。和田幹彦編著『法と遺伝学』第2章「遺伝学・遺伝性疾患・遺伝カウンセリング」第4節，法政大学出版局，2005，69-76
- ・ 田村智英子：海外における遺伝カウンセラーの活躍。千代豪昭ら監修『遺伝カウンセラー』第8章，真興交易医書出版，2006

◆研究内容

(1) 日本の遺伝カウンセリングのあり方に関する研究 (文部科学省科学技術振興調整費「先端医科学の認知に向けた社会的基盤調査」研究)：日本と諸外国の遺伝カウンセリング制度の調査、遺伝カウンセリング従事者および従事者養成教育実施者の意見を聴取、さらに遺伝カウンセリングを受ける人々の期待や要望を聴取、これらの現状と課題をまとめて整理した上で、我が国における遺伝カウンセリングの制度や実践のあり方を検討。

(2) 遺伝カウンセラー養成教育の研究 (文部科学省科学技術振興調整費)：学生からのフィードバックも活かしながら、非医師専門職遺伝カウンセラー養成のカリキュラム研究および遺伝カウンセラー養成教育のモデル構築を目指して研究実施。

(3) プリオン病の患者・家族に対する支援システムの研究 (厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業「プリオン病及び遅発性ウイルス感染症に関する調査研究班」研究)：希少難病であるクロイツフェルト・ヤコブ病 (その10%は遺伝性) を始めとするプリオン病の患者、家族の心理支援体制のあり方を検討。

(4) 遺伝カウンセリング臨床実践

東京医科歯科大学遺伝診療外来および木場公園クリニック 遺伝カウンセリング部門において、週1.5日程度の頻度で、産科、小児科、成人の遺伝科領域の遺伝カウンセリングに従事。2005年度は約200件のセッションを実施。

◆教育内容

米国には約2000人の非医師専門職の遺伝カウンセラーが存在するが、日本の遺伝カウンセリングは長年医師によって担われてきたため、非医師遺伝カウンセラーの養成は始まったばかりである。我が国における最初の非医師遺伝カウンセラーであり、国内で唯一米国の遺伝カウンセラーとしての正規認定資格を有する田村は、本学において他の教員と協力し、外部の複数の医療機関とも連携して、遺伝カウンセラーとなる人材を養成すべく教育研究と実践を重ねている。

田村の担当としてはまず、新しい学際的な学問領域としての「遺伝カウンセリング学」を主軸にすえ、日本において学生たちがこれからの遺伝カウンセリング分野をリードする人材となり遺伝カウンセリングとは何かということについて洞察力に富み議論ができるように、国や制度、職種、診療科領域や立場の違いによって様々に異なるとらえ方や概念の広がりについて学生が考える機会を提供している。

さらに田村は、他の授業等で修得した遺伝医学的知識と心理カウンセリングの理論や技術を統合して遺伝カウンセリング実践に結びつけるための実践的な理論と技術に焦点を当てて指導している。中でも、遺伝カウンセリングの心理社会的側面については多くの時間を割いて、その理論的な背景と実践応用的なスキルの教育に力を入れている。

また、田村は、日本ではほとんど知られていない遺伝カウンセリング研究とそのための研究方法論についても学生に紹介、学生が今後日本において優れた遺伝カウンセリング研究を実施できるようにすることを目指して指導している。

◆Research Pursuits

One of the major themes of my research is to consider the better genetic counseling practice and the system in Japan. I have investigated different systems in several countries. I have gathered opinions from Japanese genetic counseling providers (mostly physicians). Actual and potential clients (patients and Families) are also interviewed to understand their needs and expectations.

How to train genetic counseling providers is another important area of my research. We have been trying to figure out the model of the master level of the genetic counseling training graduate program.

I have also been a member of the prion disease research group, where I have been trying to establish the family support system in Japan, especially from counseling point of view.

Besides research and educational activities, I have a couple of part time clinical position to provide genetic counseling practices. I conducted about 200 genetic counseling sessions from April, 2005 to March, 2006, including prenatal, pediatric, and adult genetics cases.

◆Educational Pursuits

Since genetic counseling has been primarily conducted by physicians in Japan, training non-MD master level genetic counselors is a very new thing. With other staff at our school, as well as other opinion leaders of the field of genetics medicine, I have played the major educational role at our newly established genetic counseling graduate program, as I am the Japan's first non-MD genetic counselor, who is formally trained in the US.

I have taught our students the depth and the variety of the concept of genetic counseling so that they will be able to develop their own future visions.

Our students will also learn how to integrate genetics information provision and psychological counseling skills to provide genetic counseling practices. I have been focusing on psychosocial aspects of genetic counseling. Students will learn theory-oriented and practice-based skills.

Research methodology is another important area that I have been teaching. I have introduced major articles of former genetic counseling research studies so that our students will conduct good research activities in the future.

◆将来の研究計画・研究の展望

我が国では学際領域としての遺伝カウンセリング研究はまだあまり知られていないが、優れた遺伝カウンセリングサービスを提供するためには、研究の充実による当該分野の発展が必須である。諸外国の遺伝カウンセリング研究の現状を積極的に紹介しつつ、日本の遺伝カウンセリング研究の基礎を築くことは、本分野の先駆的立場にある私の使命のひとつであると考えている。具体的にはたとえば、遺伝医療制度調査、来談者の期待や要望調査、遺伝カウンセリングの成果やプロセス、方法論の研究、人材養成研究、生命倫理的側面や法制度や健康保険・福祉制度などの研究等が考えられる。今後新たな研究課題も随時見出していきたい。また、研究実施にあたっては、最終目標は患者、家族に対して優れた臨床実践を提供することにあることを念頭におき、そのために意義のある研究に重点を置いて研究を推進していきたい。特に、遺伝カウンセリングの心理的、社会的側面に注目した研究は欠かせないと考えている。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・ 遺伝医療従事者や当事者団体との共同研究として、遺伝医療制度のあり方や患者・家族の期待やニーズの調査が可能。遺伝子診断実施企業との共同研究により、情報提供ツールの開発なども可能である。
- ・ これまでに登録した特許、実用化テーマ、テーマの実用化の予定は特にありません。

◆受験生等へのメッセージ

遺伝カウンセリングは、充実した医学的知識や心理カウンセリング技術などが必要な学際的分野であり、患者、家族に提供する最新情報を得るためには英語力も必須です。日本における専門職遺伝カウンセラー養成は始まったばかりでまだ混沌としている部分も多々ありますが、新しい分野を築いていく醍醐味を味わいたいという気概のある方、そして心理援助職としての強さと繊細さを併せ持ち、自身や他者に対する深い洞察力と幅広い視野を持つ方々に、ぜひチャレンジしていただきたいと思います。皆様とともに、日本の遺伝カウンセリング分野を発展させるために力を尽くしていきたいと思っています。

教員名	千葉 和義 (CHIBA Kazuyoshi)
所 属	サイエンス&エデュケーションセンター
学 位	理学博士 (1990 東京工業大学)
職 名	教授
URL/E-mail	kchiba@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

受精 / 減数分裂 / ヒトデ / アポトーシス /

◆主要業績

総数 (2) 件

・ Kazuyoshi Chiba 著 NEW IMPACT ON PROTEIN MODIFICATIONS IN THE REGULATION OF REPRODUCTIVE SYSTEM (TOSHINOBU TOKUMOTO 編) 29-35 ページ 第3章 Degradation of cyclin B is blocked by the MAPK pathway at the MI arrest in starfish oocytes RESEARCH SIGNPOST 出版

・ 千葉 和義 科研費報告書「受精タイミング補正装置として働く減数分裂中期休止機構」2006年3月4ページ

◆研究内容

卵と精子の形成では、減数分裂が起り、染色体数は半減する。一方、受精に引き続く精子核と卵核の合体によって、染色体数はもとにもどる。従って減数分裂と受精は、生物学的な意味において、独立した別々の事象である。しかしほとんどの動物において、受精は卵減数分裂の途中で成立する。そのタイミングは種によって厳密に制御されており、減数分裂が適切な段階まで進行しなければ受精は正常に起らないし、受精しなければ卵減数分裂が完了しないことが知られている。本研究では、減数分裂と受精がどのように干渉しあい、生命の連続性を成り立たしているのかを明らかにすることを目標とする。具体的にはヒトデ、ヒト、マウス等を研究対象として、1) どのように減数分裂が休止して受精を待つのか、2) 未受精卵がアポトーシスで死んでしまうのはどのような機構によるのか、について研究を進めている。

◆教育内容

学部

発生生物学Ⅰ：卵と精子の形成から受精を経て、細胞分裂が始まり、発生・分化が進行していく各過程を取り上げて、それらの分子メカニズムについて解説する。

内分泌学：個体や細胞は、外部環境からどのようなシグナルを受け取り、どのような機構で対応するのかについて、研究の経緯やトピックスを交えながら、解説する。

発生生物学実習：ヒトデ、カエル、ニワトリ等を用いて減数分裂と受精、そして発生を観察する。また、減数分裂や受精を制御している生理活性物質を単離して、その働きについて探究的な実験を行う。

海洋環境学ダイビング実習：ダイビング技術、水中観察・記録技術の習得とダイビングライセンスの取得を行い、海洋生物の観察を行う。

大学院修士過程

分子発生学：発生を制御している分子機構を、英文教科書を用いて理解する。

分子発生学演習分子発生学で取り上げたトピックスについて、最新の研究状況を理解するために、当該分野の国際誌から原著論文を選び、その内容について理解する。

科学教育企画特論：近年、授業で用いる実験教材費等は外部予算として獲得してくる流れがある。予算を獲得するためには、実験の企画や必要性を述べる等、申請書を作成するスキルが必要となる。このスキルを獲得できるように講義する。

大学院博士過程

細胞・発生生物学：発生・分化の分子機構について、細胞生物学的見地から考察する。特に減数分裂や受精、初期発生過程において、細胞外の情報がどのように細胞内に伝達され、発生が制御されているのかについて論ずる。また、発生現象に関わる細胞内情報伝達系についても、最新のトピックスを取り上げる。さらに、なにが未解決な問題として残されているかを考察し、どのようにすれば、それを明らかにできるかを議論する。

細胞・発生生物学演習：細胞・発生生物学に関する文献を調査し、批判的に講読し、議論し、発表する。調査した文献から自己の研究に有用な情報を抽出するとともに、それらを手がかりとして創造的な発想を得る技術を高める。

◆Research Pursuits

During oogenesis and spermatogenesis, meiosis occurs and the number of chromosomes decreases. Also, an increase of the number of chromosomes is induced by fertilization. Thus, meiosis and fertilization are biologically different events. However, in many animals, fertilization occurs during meiotic division of oocytes. The timing of fertilization is definitely restricted: fertilization does not occur until meiosis proceeds to an appropriate stage and meiosis reinitiation is induced by fertilization. I am interested in the fact that meiosis and fertilization proceed interactively, and would like to find molecular mechanisms of the interaction using starfish, human and mouse oocytes.

References

- Harada, K., Oita, E., and Chiba, K. 2003. Metaphase I arrest of starfish oocytes induced via the MAP kinase pathway is released by an increase of intracellular pH. *Development*. 130, 4581-4586.
- Sasaki, K., and Chiba, K. 2004. Induction of apoptosis in starfish eggs requires spontaneous inactivation of MAPK (ERK) followed by activation of p38 MAPK. *Mol. Biol. Cell*. 15, 1387-1396.
- Oita, E., Harada, K., and Chiba, K. 2004. Degradation of polyubiquitinated cyclin B is blocked by the MAPK pathway at the MI arrest in starfish oocytes. *J. Biol. Chem.* 279, 18633-18640.
- Matsuura, R and Chiba, K., 2004. Unequal cell division regulated by the contents of germinal vesicles. *Dev. Biol.* 273, 76-86.

◆Educational Pursuits

Developmental Biology I: The molecular mechanisms of fertilization, cleavage, cell division, and organogenesis are covered in this class.

Endocrinology: It will be discussed how extracellular signals such as hormones affect whole body and cells. Also, the current important issues will be covered in this class.

Laboratory course of developmental biology: Using eggs or oocytes from starfish and frog, meiosis reinitiation, fertilization and cell division are observed.

Molecular Developmental Biology: Graduate level lecture and literature discussion in this class covers the molecular mechanisms of development.

Other Classes: Scuba Diving course, Science education for science communicator.

◆将来の研究計画・研究の展望

減数分裂中期休止機構と、未受精卵におけるアポトーシス機構を解明し、初期発生を分子レベルで理解したい。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・不妊治療における基礎研究

◆受験生等へのメッセージ

大学で授業を受けてみれば、いままでにない新しい世界が広がっていることが感じられると思います。その世界は、あなた自らが歩み出すことで、より深く遠くまで、見えてくるものです。また研究とは、これまで誰も手にしたことがない、全く新しい価値の創造であり、興奮と感動に満ちた自己実現を伴います。あなたが来るのを楽しみにしています。

教員名	千代 豪昭 (CHIYO Hideaki)
所 属	人間文化研究科特設遺伝カウンセリング
学 位	医学博士
職 名	教授
URL/E-mail	http://www.dc.ocha.ac.jp/lifescience/GC/profile/chiyo.html hchiyo@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

遺伝カウンセリング／遺伝カウンセラー／遺伝医学／人類遺伝学／生命倫理

◆主要業績

総数 (9) 件

- ・千代豪昭、田村智英子：チーム医療をめざした遺伝カウンセリング専門職としての遺伝カウンセラーの役割. 医学のあゆみ、212：2675-2680、2005
- ・千代豪昭：国境を越える生殖医療．学術の動向、10（5）：20-25、200
- ・千代豪昭：認定遺伝カウンセラーの養成と資格認定に関する研究．平成 16 年度厚生科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）分担研究報告書、2005

◆研究内容

1. 厚生労働省科学研究班の分担班長として、わが国における遺伝カウンセラーの養成方法と認定方法に関する研究を行い、報告書をまとめた。
2. 文部科学省科学技術振興調整費による新興分野人材育成プログラムとして採択されたお茶の水女子大学特設遺伝カウンセリングコースの主任として赴任し、遺伝カウンセラーの養成をめざした教育研究を行なった。
3. 日本人類遺伝学会と日本遺伝カウンセリング学会が共同で「認定遺伝カウンセラー制度委員会」が組織されたが、委員長として委員会の立ち上げと第一回の認定作業実施にむけてワーキングを指導した。

◆教育内容

1. 2005 年度に前期課程で担当した科目は下記の通りである（後期課程の開講は 2006 年度から）。
 - ・人類遺伝学
 - ・メンデル遺伝学
 - ・細胞遺伝学
 - ・医療概論
 - ・医療倫理学
 - ・カウンセリング演習
2. 修士課程修了要件の「課題研究」の指導と審査（4 名が修士課程を修了し、後期課程に進学）
3. 後期課程 1 年目に行なう臨床実習に関して、実習施設の確保と、実習指導体制の確立。

◆Research Pursuits

1. Research for the training & qualification system of genetic counselor (non-M.D.) in Japan.
2. Research to achieve the effective curriculums for genetic counselor in the graduate school.

◆Educational Pursuits

1. Major subjects lectured by Chiyo (2005)
 - Human Genetics
 - Clinical Genetics
 - Human Cytogenetics
 - Introduction for Medicine
 - Ethics in Medicine
 - Practice in genetic counseling

◆共同研究例

- ・厚生労働省科学研究班：ゲノムリテラシー向上のための人材育成と教育ツール開発に関する研究
(分担研究課題：人材育成のためのカリキュラム作成に関する研究)

◆将来の研究計画・研究の展望

「遺伝カウンセラーの養成と資格化に関する研究」:作成した教育カリキュラムを採用した大学が本学を含めて7大学院となった。今後は、わが国の医療制度のなかで遺伝カウンセリングが医療の一環として規準化されるための制度改革に結びつく研究を展開し、わが国の遺伝医療の発展をめざす。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

我々の講座は教育研究に特化した外部資金導入型講座であり、エフォート 100%が求められているため、本項目に記載する内容はない。

◆受験生等へのメッセージ

遺伝カウンセラーは 2005 年に資格認定が開始された新しい専門職である。本学を含めて全国で7大学院に専門課程が設置されているが、本コースは唯一、修士・博士一環の5年コースで、遺伝カウンセラーの指導者育成を目標としている(3年目の博士課程1年時に認定遺伝カウンセラーの認定試験受験可能)。本コースの受験は学士であれば医療系、自然科学系、人文系といずれの学部出身者も出願可能である。遺伝カウンセラーは「ゲノム医学の時代」と呼ばれている 21 世紀の医療を支える重要なマンパワーである。科学情報を提供するだけでなく、患者の悩みや相談に乗ることのできる遺伝カウンセラーをめざす若い人材に期待をかけている。

参考図書：千代豪昭、滝澤公子監修「遺伝カウンセラー、その役割と資格取得に向けて」真興交易医書出版、2006

教員名	曹 基哲 (CHO Gi-Chol)
所 属	人間文化研究科複合領域科学専攻
学 位	博士 (理学) (1996 東海大学)
職 名	助教授
URL/E-mail	cho@phys.ocha.ac.jp

◆主要業績

総数 (3) 件

- Weak boson fusion production of supersymmetric particles at the LHC.
G.-C. Cho, K. Hagiwara, J. Kanzaki, T. Plehn, D. Rainwater, T. Stelzer.
Published in Phys.Rev.D73:054002,2006
- Neutron electric dipole moment and flavor changing interactions in supersymmetric theories.
Gi-Chol Cho, Naoyuki Haba, Minako Honda.
Published in Mod.Phys.Lett.A20:2969,2005
- Particle physics at Tera scale.
Gi-Chol Cho.
Proceedings of the 3rd International Symposium on New Developments of Integrated Sciences, Ochanomizu University.

◆研究内容

- (1)LHC 実験における、超対称粒子探索の可能性に関する研究を行った。イベントジェネレーター「SUSY-Madgraph」を開発し、それをを用いて LHC 実験でのウィークボゾン対消滅による超対称粒子生成過程のシミュレーションを行い、評価した。
- (2)超対称性理論におけるフレーバーと CP 問題について研究を行った。モデルによらない、一般の枠組みでフレーバー問題を考察し、中性子の電器双極子能率測定実験からの制限を調べた。

◆教育内容

- (1)研究室として大学院生 11 名 (修士 7 名、博士 3 名) を受け入れ、研究指導を行っている。
- (2)卒業研究を行う 4 年生を 3 名受け入れ、研究指導を行っている。
- (3)物理学科の学生への授業として「古典力学」「素粒子物理学」「物理学特別講義 5」「物理学特別講義 6」を担当した。
- (4)コア科目「物理学入門」「物理学 I」を担当した。

◆ Research Pursuits

- (1) Possibilities of SUSY particle search at the LHC experiment were studied. We developed an event generator "SUSY-Madgraph" and examined the SUSY particle production through the weak boson fusion using SUSY-Madgraph.
- (2) Flavor and CP problems in supersymmetric theories were studied. We examined changing process in the quark sector model independently, and quantitative constraints on the flavor changing vertices are found from experimental constraints on the measurement of neutron electric dipole moment.

◆ Educational Pursuits

- (1) 11 graduate students were accepted to guide their research. (Master course:7, Ph.D course:3)
- (2) 3 undergraduate students were accepted to guide their research.
- (3) Classes for Physics department:
 - (a) Classical Mechanics
 - (b) Particle Physics
 - (c) Special Lectures in Physics 5
 - (d) Special Lectures in Physics 6
- (4) Core cluster:
 - (a) Introduction to Physics
 - (b) Physics I

教員名	塚田 和美 (TSUKADA Kazumi)
所 属	理学部数学科
学 位	理学博士(1983 東京都立大学)
職 名	教授
URL/E-mail	tsukada@math.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

リーマン部分多様体 / 等質空間 / 曲率テンソル

◆主要業績

総数 (2) 件

- ・ Symmetric submanifolds associated with irreducible symmetric R-spaces (with J.Berndt,J-H.Eschenburg,H.Naitoh), Mth.Ann.,332(2005),721-737.
- ・ Another natural lift of a Kaehler submanifold of a quaternionic Kaehler manifold to the twistor space (with N.Ejiri), Tokyo J.Math.,28(2005),71-78

◆研究内容

「1つのリーマン多様体（より広く擬リーマン多様体）の中に良い性質をもって実現される部分多様体のクラスに関する理論を構築すること。そのような部分多様体を分類すること。」という目標で研究を進めている。2005年度は下記のような課題に取り組んだ。

- (1) 複素2次超曲面への等方的ケーラーはめ込み：その高階基本形式のもつ代数的性質を明らかにし、ある種の還元定理を証明した。さらにエルミート対称空間からの等方的ケーラーはめ込みに対しては高階法空間の間のペアリングが成立すること及びその次数を与える公式も導いた。
- (2) 共形平坦擬リーマン多様体の構造及び構成理論の研究：擬リーマン多様体のリッチ作用素は、リーマン多様体の場合とは異なり、複素固有値をもったりべき零となったりする。このようなリッチ作用素の形に着目し、共形平坦等質擬リーマン多様体の研究を行い、3次元の場合には分類に成功した。

◆教育内容

基礎微分積分学：数学科、情報科学科以外の学生を対象にした1変数微分積分学の基礎に関する講義。高校の数学III,C未履修者もしくは心もとないと感じている学生も適応できるよう配慮した授業を行った。

ベクトル解析：数学科2年生向け。空間内の曲線、曲面について基礎的な事項を述べた後、ユークリッド空間上の関数、ベクトル場、微分形式などの解析学、幾何学を論じた。

数学講究（数学科4年生）：A.Gray,"Modern differential geometry of curves and surfaces with MATHEMATICA"をテキストにセミナーを行い、曲線、曲面に関する微分幾何学の学習を指導した。

数学講究（修士1年生）：Lee,"Riemannian manifolds"をテキストにセミナーを行い、リーマン幾何学の基礎に関する学習を指導した。あわせて修士論文に向けた準備の学習を指導した。

◆Research Pursuits

The main aim of my recent research is to make theories of the good class of submanifolds which are realized in Riemannian manifolds (more generally pseudo-Riemannian manifolds) and classify them. In 2005, I studied the following subjects :

- (1) Isotropic Kaehler immersions into a complex quadric: I investigated the algebraic properties of higher fundamental forms of isotropic Kaehler immersions and showed some reduction theorems. Futhermore I found the pairing between higher normal spaces and obtained the formula on the osculating degrees of isotropic Kaehler immersions of Hermitian symmetric spaces.
- (2) The theory of the structure and the construction of conformally flat pseudo-Riemannian manifolds: It is possible that the Ricci operator of a pseudo-Riemannian manifold has the complex eigenvalues or the nilpotency different from the Riemannian case. We studied the conformally flat homogeneous pseudo-Riemannian manifolds according to the form of the Ricci operators and classified 3-dimensional conformally flat homogeneous Lorentzian manifolds.

◆将来の研究計画・研究の展望

取り組みたいと考えている課題は次の2つである。

- (1) 四元数ケーラー多様体の全複素部分多様体論の発展：四元数微分幾何学と複素微分幾何学が相互作用する興味深い幾何学が展開されることが期待される。
- (2) Singer による無限小等質空間の理論を基礎としたリーマン多様体の等質性と曲率テンソルの関わりの解明：曲率テンソルは扱いが難しく幾何学的な意味を理解するのも困難であることから、"Monster" と呼ばれることもある。上記の課題を追求する中で、曲率テンソルのより深い理解に貢献できればと考えている。

◆受験生等へのメッセージ

インゲン豆のつる、閉じた枠に張られる石鹸膜、シャボン玉から宇宙まで、いろいろな「形」を主題に数学も挑むことができます。様々な問題に様々なアプローチ、そして応用。興味をもったら、始めてください。応援します。

教員名	土屋 賢二 (TSUCHIYA Kenji)
所 属	文教育学部人文科学科形象分析学講座
学 位	文学修士 (1970 東京大学)
職 名	教授
URL/E-mail	kenji@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

哲学 / ギリシア哲学 / ウィトゲンシュタイン

◆主要業績

総数 (1) 件

◆研究内容

ウィトゲンシュタインの『論理哲学論考』
アリストテレスの倫理学
自由と決定論の問題

◆教育内容

講義：20世紀の分析哲学における言語哲学の紹介
講義：心身問題の解説
概論講義：哲学とは何か
哲学入門ゼミ：プラトンからデカルトまで
ゼミ：Kripke, Naming and Necessity
ゼミ：Wittgenstein, Blue and Brown Books
ゼミ：自由と責任

◆Research Pursuits

Study of Wittgenstein's Tractatus
Study of Aristotle's Ethics
Study of the Problem of Freedom and Determinism

◆Educational Pursuits

Lecture: Philosophy of Language in 20th Century
Lecture: Theories on Mind-Body Problem
Introductory Lecture: What Is Philosophy?
Seminar: Introduction & From Plato to Descartes
Seminar : Kripke, Naming and Necessity
Seminar : Wittgenstein, Blue and Brown Books
Seminar: Freedom and Responsibility

◆将来の研究計画・研究の展望

心の構造（理性、信念、意志、欲求、意図など）の研究と、「べきである」という倫理的命令の文法的解明により、「べきである」がどういう意味で可能かを明らかにしたい。

◆受験生等へのメッセージ

哲学は厳密に考えて答えを見つける学問です。使う道具は自分の頭だけです。ところが、人間の頭は厳密に考えるのが苦手です。歴史上、天才的な人でも間違いを犯してきました。普通の頭のわれわれが厳密に、先入観なしに、緻密にものを考えるには、大きい努力を払わなくてはなりません。入学直後は、さまざまな偏見や誤った信念をもっています。学部の4年間で、少しでも緻密に考える力をつけてもらいたいと思っています。

教員名	出口 哲生 (DEGUCHI Tetsuo)
所 属	理学部物理学科
学 位	理学 (博士) (1992 東京大学)「色付き絡み目の多変数不変量および関連する統計力学の可解模型」
職 名	教授
URL/E-mail	deguchi@phys.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

数理物理学 / 高分子物理学 / 結び目

◆主要業績

総数 (9) 件

- ・ T. Deguchi, Topological entropic force associated with the topological swelling of random knots and links, in "Physical and Numerical Models in Knot Theory", edited by J.A. Calvo, K.C. Millett and E.J. Rawdon, (World Scientific, Singapore, 2005) pp. 343
- ・ K. Kudo and T. Deguchi, Level statistics of XXZ spin chains under zero magnetic field, J. Phys. Soc. Jpn. Vol. 74 No. 7 (2005) pp. 1992-2000.
- ・ M. K. Shimamura, K. Kamata, A. Yao and T. Deguchi, Scattering functions of knotted ring polymers, Phys. Rev. E Vol. 72, 041804 (2005) (6 pages)

◆研究内容

(1) 数理物理学における研究成果
量子統計力学および量子多体問題における厳密に解ける模型の研究。可積分量子スピン鎖として代表的な XXZ 鎖の異方性変数が 1 のべき根の場合に、エネルギー固有値スペクトルに著しい縮退が出現することが、本報告者を含む共同研究の中で明らかにされた。 $sl(2)$ ループ代数という無限次元の対称性が出現する。2005 年度には、ベータ状態がループ代数の最高ウェイトであることを証明した。

(2) 高分子物理学における研究成果
環状高分子鎖は線形の高分子鎖と異なり、いくつか興味深い性質を示す。自然界にはバクテリアなど原始的な生命の DNA が環状鎖である場合が多い。2005 年度には、一定のトポロジーを持つ環状高分子鎖の散乱関数を、結び目不変量を用いる数値シミュレーションにより精密に求めた。環状鎖のトポロジーは結び目で表され、熱揺らぎでは変化しないため、現実の環状高分子鎖の性質を調べるにはそのトポロジーを一定に制御するシミュレーションを実行する必要がある。このことは一般には容易でないが、我々は Vassiliev 不変量を用いて実行した。

◆教育内容

(1) 学部の卒業研究
2005 年度の卒業研究では、最初の半年間は高分子物理学の基礎を英文の教科書「The Theory of Polymer Dynamics」(M. Doi and S.F. Edwards) を修士の大学院生とも一緒に輪講して読み進めた。年度の後半では、自力で高分子のシミュレーションを実行すべく、簡単な分子動力学などのプログラムを作成して実行する演習を行った。

(2) 大学院の教育・研究の内容
修士の大学院生は、環状高分子鎖の溶液中での拡散の様子を明らかにするため、分子動力学シミュレーションを実行した。環状鎖の方が線状鎖よりも流体力学的半径が大きいと言う実験結果の報告のためである。博士課程の研究を紹介する。大学院生の一人は、ゴム弾性の理論にトポロジー的絡み合いの効果を取り入れる研究を行った。数理物理分野の大学院生は量子非平衡統計力学における Keldysh の方法を勉強し、強束縛格子模型においてその形式論を展開する演習問題に取り組んだトンネル電流を具体的に非平衡グリーン関数を計算して求めた。

◆Research Pursuits

- (1) In mathematical physics: We discuss irreducible highest weight representations of the $sl(2)$ loop algebra and reducible indecomposable ones in association with the $sl(2)$ loop algebra symmetry of the six-vertex model at roots of unity. We have shown a general criteria for a highest weight representation to be irreducible. We also give an example of a reducible indecomposable highest weight representation and discuss its dimensionality.
- (2) In polymer physics: We discuss the scattering function of a Gaussian random polygon with N nodes under a given topological constraint through simulation. We evaluate the form factor $P_K(q)$ of a Gaussian polygon of $N=200$ having a fixed knot K for some different knots such as the trivial, trefoil and figure-eight knots. Here the Gaussian polygons with the different knots K have distinct values of the mean square radius of gyration. We obtain the Kratky plots of the form factors for the different topological constraints, and discuss nontrivial large- q behavior as well as small- q behavior for the scattering functions.

◆Educational Pursuits

For undergraduate students, we discussed the physics of polymers based on the textbook: M. Doi and S.F. Edwards, the Theory of Polymer Dynamics, throughout the summer semester of 2005. Then, the undergraduate students compiled and run some small Fortran programs so that they can construct numerical simulation of polymer dynamics.

Graduate students in the master course, we discussed the physics of polymers based on the textbook: M. Doi and S.F. Edwards, the Theory of Polymer Dynamics, throughout the summer semester of 2005. Then, they constructed Fortran codes of molecular dynamics and performed numerical simulation on the diffusion process of ring polymers.

One of the graduate students in the PhD course studied the elasticity of polymer networks and investigated some possible generalization of the theory of polymer network due to Graessley and Pearson. Another graduate student in the PhD course studied quantum transport problem in non-equilibrium such as that of the Landauer formula, and learned the Keldysh formalism of non-equilibrium Greens functions.

◆共同研究例

- ・ 神奈川県産業技術総合研究所と高分子の結晶化における絡み合いの効果に関するシミュレーションの共同研究を実施した。研究成果は以下の論文: K. Tsurusaki, S. Takeuchi and T. Deguchi, Crystallization of an entangled ring polymer: coexistence of crystal and amorphous regions, J. Macromolecular Science: Part B Physics B42, Nos.

◆将来の研究計画・研究の展望

(1) 数理物理分野

XXZ 鎖におけるループ代数の対称性の理論をさらに展開し、ダイナミカル対称性として確立することを目指とする。この研究は、いわば有限系の多体効果の厳密な取り扱いが物理的にも重要であることを示唆しており、逆にいえば、そのような研究が今後の量子統計物理学の発展のためには重要なのである。

XXZ スピン鎖は相互作用のある量子可積分系の代表的存在で、朝永・ラッティンジャー流体 (TL 流体) を実現する数少ない可解模型である。現在の TL 流体理論は XXZ 鎖のベータ仮説に基づいており、 XXZ 鎖の固有状態を厳密に取り扱うことは学問的に重要性である。将来の応用の可能性も大きい。

(2) 高分子物理学

DNA の複製過程を理論物理学の立場から明らかにすることは、生命を物理学の視点から理解する目的のためには必ず解決しなければならない問題の一つである。その重要な手がかりの一つとして、一定のトポロジーをもつ環状高分子鎖のダイナミクスや統計力学を詳細に解明する。実験との比較を通じて数多くの性質を確認しなければならない。そのためには、本学の学生の高い能力が必要不可欠となる。

◆受験生等へのメッセージ

理論物理学の研究を行うことは、決して難しいことではありません。実は研究は勉強と異なるのです。もちろん、これまでに人類が蓄積した様々な物理学上の知識を相当量学ぶことは、これまた決して容易なことではありません。大学の 4 年間で学ぶ物理学の知識はじっくり取り組んで身につけるのが大事ですが、一方、研究というのは今までに見つかっていないことを見つけるのが目的なので、極論するとあまり基礎知識がなくても出来ることなのですもし必要な知識は例えば指導教員に聞けば分かるならば、そのことを認識しておけば済んでしまうこともあるのです。新発見をした後で、何を自分が見つけてしまったのかを確認するのも、人生の楽しい経験の一つになるのではないのでしょうか。

出口研究室では、数理物理と高分子物理の 2 分野で、世界最先端のテーマを数多く研究しています。外国の人と一緒に研究したい人や議論してみたい人には特にうってつけです。

教員名	徳井 淑子 (TOKUI Yoshiko)
所 属	生活科学部人間生活学科生活文化学講座
学 位	博士 (学術 2003 信州大学) 家政学修士 (1975 お茶の水女子大学)
職 名	教授
URL/E-mail	http://www.aesthe.ocha.ac.jp/fukshok%20history/tokui@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

服飾 / ヨーロッパ中世 / 色彩 / 文様 / 懐古趣味

◆主要業績

総数 (5) 件

- ・「オリジナリティは引用の集積である：ファッションの歴史は語る」『映像情報メディア学会技術報告』vol.29 no.58 pp.1-4 2005 年 10 月
- ・「歴史が紡ぐ感性：色と柄のイメージの東西」『第 36 回繊維学会夏期セミナー要旨集』 pp.19-24 2005 年 9 月
- ・「禁欲と知性の黒服」『ハイファッション』2005 年 10 月号 pp.52-53

◆研究内容

ヨーロッパ中世服飾のシンボリズム研究の一環として、フランスを中心に、文学や図像における服飾表象の分析から色彩の象徴性を考察、特に 15 世紀を色の価値の転換期として、すなわち近代的な色彩感情の誕生の時期として位置付けた。

色彩感情の変化には、文様・紋章の嗜好が伴っており、具体的には黒の好尚と涙文の流行を中世末期の心性として分析した。すなわち年代記の記録や写本挿絵等の図像から黒服や涙文の紋章ドゥヴィーズの流行を調査し、それを促した感情を文学作品や色彩論の著作により明らかにした。

◆教育内容

服飾の歴史を通してヨーロッパの人々の感性を知るには、どのような資料を使い、どのようなアプローチがあるのか、西洋服飾史を概説するとともに、服飾史の調査の方法と資料を解説、あわせて服飾文化論を学ぶための基礎を講義した。

およびフランス中世服飾に関する論文の講読、18・19 世紀のモード版画・文学資料の分析によって服飾史の論文を作成するための基礎演習を行い、ヨーロッパの生活文化史に関する卒業論文の指導へと繋げた。

◆Research Pursuits

Symbolic meaning of the French mediaeval fashion, mainly symbolism of colors and significance of patterns relative to device through the analysis of literature and iconographies.

◆Educational Pursuits

Lecture and seminar on cultural and historical studies of clothes, especially through the literary and iconographic sources in order to clarify the sensibility of Europeans.

◆将来の研究計画・研究の展望

中世ヨーロッパの色彩感情、あるいは文様の意図の 16 世紀以降の展開を視野に入れて中世の感性を歴史のなかに位置付ける。具体的には 15 世紀の色の価値の転換が、近代から今日にいたる色彩感情をいかに決定したか、また 15 世紀の紋章がエンブレムとしていかに展開したかを調査することによって、逆に中世文明を照射する。

◆受験生等へのメッセージ

衣服を着ることはたいへん卑近な事柄ですが、ゆえにひとの感情生活と密接に結びついています。着衣の文化を知ることは、ひとの心を知ることにつながります。身近なファッションを通して、あるいは歴史上のファッションを通して、ひとの感情や心理を発見する可能性を広げてほしいと思います。

教員名	戸田 正人 (TODA Masahito)
所 属	理学部物理学科
学 位	数理科学博士 (1996 東京大学)
職 名	助教授
URL/E-mail	toda@math.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

リッチフロー

◆主要業績

総数 (3) 件

- ・ レクチャーノート
「ポアンカレ予想、幾何化予想へのアプローチハミルトン・ペレルマンのリッチフロー」
(東北大学、6月) レクチャーは昨年度 2005 年 3 月
- ・ 講演「リッチフローの曲率評価について」
一橋 One day シンポジウム (一橋大学、5月)
- ・ 講演「4次元リッチフローの理解に向けて」
研究集会「リーマン幾何と幾何解析」(筑波大学、2006年2月)

◆研究内容

リッチフローにおいて生じる特異性の解析を研究している。
2002-3年のG.Perelmanの結果は3次元トポロジーに決定的な結論を導いたが、4次元(以上)の場合に解析は難しくほとんど結果がない。
4次元の特異性モデルがどのような曲率条件を満たすか、3次元の特異性の標準近傍定理の類似が4次元においても成り立つか、などを研究している。
2005年度は4次元の特異性モデルの曲率条件とトポロジーの関係について作業仮説を立てて研究を進めた。

◆教育内容

2005年度は以下の講義を担当した。
微分幾何学および演習、数学英語、複素解析、ファイバー束の理論(大学院共通科目)他に通年で四年生のゼミを担当した。
また、12月に名古屋大学(多元数理)において院生向けの集中講義、「リッチフローによる三次元多様体の幾何学化について」を行った。

◆ Research Pursuits

I study the analysis of the singularity of the Ricci flow.

In 2002-3, Perelman established the famous theory on the Ricci flow. While his result implies the decisive result in the 3-dimensional topology, the generalization to the higher dimension is quite difficult.

The problems I investigate is: * What curvature condition should the 4 dimensional singular model satisfy.

* Is it possible to prove the canonical neighborhood theorem in dimension 4.

In 2005 I mainly work around my conjecture about the relationship between the topology and the first problem.

教員名	外館 良衛 (TODATE Yoshiei)
所 属	理学部物理学科
学 位	理学博士
職 名	助教授
URL/E-mail	http://www.phys.ocha.ac.jp/~todate@phys.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

固体物性 / 磁性体物理 / スピン統計物理 / 機能性酸化物 / X線・中性子線・ミュオン

◆主要業績

総数 (2) 件

- ・外館良衛、ランダムフェリ磁性 II、日本物理学会第 61 回年次大会 (松山大学)、2006 年 3 月、日本物理学会講演概要集 第 61 巻 第 1 号 p 497
- ・外館良衛、鈴木梨沙、浜谷望、複合銅酸化物の物性、日本物理学会 2005 年秋季大会 (同志社大学京田辺キャンパス)、2005 年 9 月、日本物理学会講演概要集第 60 巻 第 2 号 第 3 分冊 p 307

◆研究内容

化合物磁性体において、構造・磁性・伝導特性が相互に関連している現象に関して、現在でもなおまだ完全とは言えない根源的理解と解明を目標として、新規複合酸化物反強磁性体の合成・構造解析等を進めている。また、現代の磁性研究の重要な分野のひとつであるランダム磁性の研究において未解決の問題を解明すべく、新たな発想にもとづく計算機実験を行い、従来の実験との詳細な比較検討を行っている。これらの研究は、新機能を持った磁性材料開発への発展を視野に入れている。

◆教育内容

- ◎学部講義：「基礎エレクトロニクス」、「物理学実験」
- ◎大学院講義：「応用磁性体物理学特論」
- ◎研究室セミナー：学部学生と「量子科学」講読
- ◎研究室セミナー：大学院生と「物質の対称性と群論」講読
- ◎大学院前期過程学生の研究指導、研究結果を物理学会秋の分科会で発表

◆Research Pursuits

We study magnetic materials for the purpose of obtaining the essential understanding of the interrelation between structural, magnetic and transport properties. Synthesis and analysis of a new class of antiferromagnetic oxides are now being carried out. Simultaneously, we study the random magnetism, which is one of important subjects of the modern magnetism, by computer experiments with a completely new point of view. Development of new functional magnetic materials is also expected through these studies.

◆Educational Pursuits

Summary of educational activities:

lectures for undergraduate course: "Elementary Electronics" and "Physics experiments",

a lecture for a postgraduate course: "Applied magnetism",

a seminar for undergraduate students: read a textbook: "Quantum Chemistry",

a seminar for postgraduate course students: read a textbook:

"Symmetry in Matter and Group Theory",

teaching and advising a postgraduate student as a supervisor and

presented the results of the study at the meeting of the physical society of japan.

◆特許

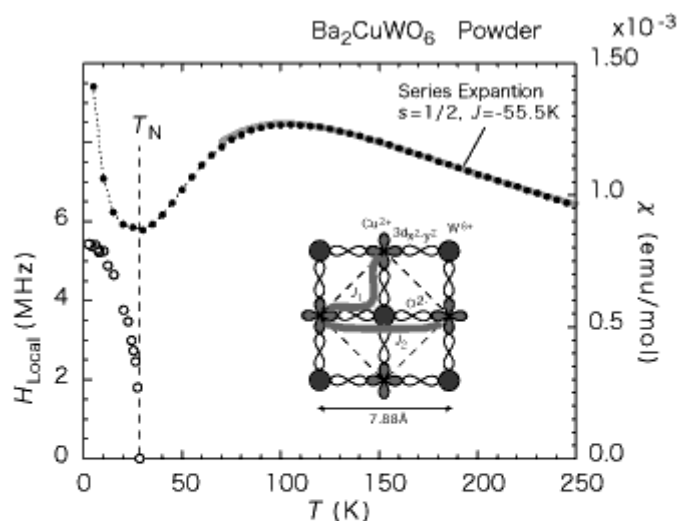
- ・ 新たな概念にもとづく新規磁性材料の開発

◆将来の研究計画・研究の展望

現在の研究テーマである”幾何学的自由度を結合させた反強磁性体”を発展させる。新たに提案するモデルが予想する特性を、実際に現実の物質で実証したい。まったく新しい視点を提供するきわめて重要な研究になるものと期待している。

◆受験生等へのメッセージ

科学の謎を解決し、新しいモノを創造することは、実はとても楽しいことなのです。



Magnetic susceptibility and internal fields in the B-site ordered complex perovskite Ba_2CuWO_6 probed by the μSR method. Quantum two-dimensional antiferromagnetism with competing interactions is the most interesting feature to be noted. The essential but unsolved problem is the detailed antiferromagnetic interaction mechanism between the non-degenerated $3d_{x^2-y^2}$ orbitals on Cu^{2+} .

教員名	戸谷 陽子 (TOTANI Yoko)
所 属	文教育学部言語文化学科英語圏・欧州言語文化講座
学 位	文学修士 M.F.A (芸術学修士)
職 名	助教授
URL/E-mail	totani@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

アメリカ演劇 / グローバリゼーション / 文化政策

◆主要業績

総数 (2) 件

・“Fornes: Gender/Sexuality and Theatricality” (全国アメリカ演劇研究者会議第 22 回全国大会)

◆研究内容

1. 昨年に引き続き、科学研究費助成により「二十世紀以降アメリカ舞台芸術の理論と実践における文化ポリティクスとグローバル化」の研究を行い、グローバリゼーションが文化にもたらす影響について、主に演劇にみられる異文化受容という点から調査を進めた。
2. 学会活動としては全国アメリカ演劇研究者会議の年次全国大会シンポジウムにおいて、“Fornes: Gender/Sexuality and Theatricality”と題する報告を、またジェンダー&イメージ研究会例会においてコメンテータとして日本のクィア演劇に関する発表のコメントを行った。前者についてはこの発表に基づき論文を執筆した。
3. また本学 COE ジェンダー研究のフロンティア学内研究協力者として、プロジェクト D の研究活動に参加し、多くの研究者と専門分野を超えて学際的な交流をはかった。

◆教育内容

1. 授業は、全学部対象のコア科目英語、英語圏言語文化コース学生対象の専門科目（英語圏テキスト講読、英米文学演習）、大学院生対象のアメリカ演劇関連の科目（米文学演習）を担当しており、視聴覚教材を作成し、立体的な授業を心がけている。
2. その他、語学センター委員として、全学部の英語科目のオリエンテーション、クラス編成、とくに履修相談・指導に時間をかけている。また語学センター主催「イングリッシュキャンプ」に引率として参加。
3. 言語文化学科 1 年生担任としては、留学生の履修や学生生活に関する相談・指導、また来年度より英語圏コースに進学する学生の担任として、オリエンテーションキャンプの企画・準備等。

◆Research Pursuits

Research topic: Politics of Culture and Globalization: Theory and Practice of American Performing Arts since 20th Century

◆Educational Pursuits

Classes taught in 05-06 Academic year

Undergraduate Level: Basic English I & II, Intermediate English II, Cross-Cultural Communication, Readings in English Texts, English and American Literature 2,

Graduate Level: American Literature: Seminar.

◆将来の研究計画・研究の展望

グローバリゼーションと文化の問題をアメリカ演劇の理論と実践を中心に現在研究しているが、実地調査などの具体的な論考を加え、さらにこれを展開させてゆきたい。

教員名	富永 典子 (TOMINAGA Noriko)
所 属	生活環境研究センター
学 位	理学博士 (1978 名古屋大学 論理博第 259 号)
職 名	教授
URL/E-mail	http://carrot.sk.ocha.ac.jp/tominaga/ntominag@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

好酸性緑藻 / 重金属耐性機構 / ミャンマー

◆主要業績

総数 (5) 件

- ・ K. Nishikawa, H. Machida, Y. Yamakoshi, R. Ohtomo, K. Saito, M. Saito, N. Tominaga: Polyphosphate metabolism in an acidophilic alga *Chlamydomonas acidophila* KT-1(Chlorophyta). *Plant Sci.*, 170: 307-313 (2006)
- ・ K. Nishikawa, A. Onodera, N. Tominaga: Phytochelatins do not correlate with the level of Cd accumulation in *Chlamydomonas* spp. *Chemosphere*, 63: 1553-1559 (2006)
- ・ F. Akaishi, M. Satake, M. Otaki, N. Tominaga: The surface water quality and information about the environment surrounding Inle Lake in Myanmar. *Limnol., Asia/Oceania report* 7: 57-62 (2006)

◆研究内容

好中性より好酸性の藻類の方が重金属耐性は高い。好酸性単細胞緑藻 *Chlamydomonas acidophila* の KT-1 株と DVB238 株とも Cd に対する耐性は藻類の中では非常に高く、特に DVB 238 株は細胞内への Cd 蓄積性が KT-1 株の 170 倍にも及ぶ。高濃度の Cd が細胞内微細構造に与える影響は KT-1 で大きい、DVB238 はあまり影響を受けず、Cd の細胞内分布も両者で異なった。酵母などで重金属耐性への関連が報告されているポリリン酸量、植物における重金属無毒化機構に関与するとされているフィトケラチン合成能を両株で比較したところ、いずれも DVB238 株の高蓄積性の決定的要因ではないと考えられる結果を得た(文献 1, 2)。従って DVB238 において、既に報告されている重金属蓄積機構とは異なるシステムの存在が推測される。

2004～5 年度に行ったミャンマーのインレー湖周辺の陸水調査の結果、湖は富栄養化しており、主たるイオンは Ca^{2+} と HCO_3^- であり、大腸菌群濃度が高いため飲用には適さないことが明らかとなった(文献 3)。

◆教育内容

生活科学部、生活環境学科 食物科学講座 3 年生に対し、「食品微生物学実験」を受け持った。17 年度は生で食べる野菜の一般生菌数、大腸菌群数が部位および洗浄(水洗、次亜塩素酸処理)によってどのように変化するかを調べ、それぞれから 1 種類の菌を分離し、性質を調べて同定した。また、純粋培養した大腸菌を用いて酵素の誘導実験も行った。4 年生には「食物科学基礎演習、食物科学演習」で、英語文献の読み方、それを皆にわかりやすく説明する事などについて指導した(食物科学講座教員と共同)。「食物科学輪講」は生活環境研究センターに所属する 4 年生を対象にセンターの教員全員で、卒論に関係のある文献を輪読した。

生活科学部食物栄養学科 2 年生に対しては後期に「生活環境学」を講義した(村田教授と共同)。富永は環境汚染の現状と保全対策などを担当。

大学院人間文化研究科前期課程 ライフサイエンス専攻で「資源微生物学特論演習」、後期課程 人間環境科学専攻で「生態環境科学演習」を担当した。

◆Research Pursuits

Mechanisms of tolerance and accumulation of heavy metal in acidophilic green algae, *Chlamydomonas acidophila* was studied. Both strains of KT-1 and DVB238 of *C. acidophila* exhibit a strong heavy metal tolerance. Strain DVB238 can accumulate a much higher amount of Cd than KT-1. The ultrastructure of KT-1 was extremely disrupted by Cd but not so notable in DVB238. The localization of Cd in the cells was discriminate between two strains. Phytochelatins (PCs) and polyphosphate are known to play important role in the detoxification of several toxic heavy metals. The levels of polyphosphate and PCs did not correlate with the level of Cd accumulation in *Chlamydomonas* spp., maintenance of a high glutathione level seeming to be important for Cd accumulation. These results indicated that *C. acidophila* DVB238 probably has a developed detoxification system preventing such as destruction of the cells due to Cd toxicity. Surface water quality and information about the environment surrounding Inle Lake, the second largest lake in Myanmar, was reported. The main cation and anion species in the surface water are Ca^{2+} and HCO_3^- . The trophic state is eutrophic. The concentration of coliform bacteria indicated that the lake water was unfit to drink.

◆将来の研究計画・研究の展望

Cdの細胞内への取り込みによって新たに合成される、または消滅するタンパク質の分析を行う。蓄積に対するグルタチオン (GSH) 量の変化、GSH合成酵素の関与などを調べ、さらにGSH合成の律速酵素の遺伝子を過剰発現させてCd蓄積への影響を見る。得られた知識を基に環境浄化に役立つ重金属蓄積能の高い藻類、植物を創成する。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・企業・他研究者等と共同で研究できるテーマ：重金属蓄積能の高い植物の開発
- ・今現在登録または出願している特許の件数と実用化されているテーマ：なし
- ・今後実用化したいテーマ：なし

◆受験生等へのメッセージ

本学は女子大ですので女性しか入学できませんが、女子大ならではの良さ、小さな大学ならではの良さにあふれています。学生時代は自分の時間を自分の好きなことに使える幸せな期間。また、新たな知識を吸収できる期間でもあります。大いに勉強し、余暇にはいろいろな経験をしてほしいと思っています。

教員名	富永 靖徳 (TOMINAGA Yasunori)
所 属	人間文化研究科複合領域科学専攻
学 位	理学博士
職 名	教授
URL/E-mail	tominaga@phys.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

低振動数ラマンスペクトル (THz ラマンスペクトル) / 超臨界水 / 水の動的構造 /
水素結合型強誘電体 / 構造相転移

◆主要業績

総数 (3) 件

- ・ "The First Observation of Low-Frequency Raman Spectra of Supercritical Water": Yasunori TOMINAGA and Yuko AMO, Journal of Physicla Society of Japan, Vol.75, No.2 (2006), 023801-1 ~ 023801-3
- ・ 「水の動的構造 - ラマン散乱分光 -」: 富永靖徳, 天羽優子, 低温科学, Vol.64 (2005), p.121 - 134
- ・ 「水・アルコール二成分混合系の動的構造 - レーリー・ブリュアン散乱 -」: 富永靖徳, 天羽優子, 低温科学, Vol.64 (2005), p.135 - 140

◆研究内容

水素結合を形成している物質に焦点を当てて、そのダイナミクスを主にラマン散乱を用いて解明するテーマに取り組んだ。液体では、「水」の特異な性質を、ラマンスペクトルの解析に基づいて、「振動と緩和」という観点から明らかにした。また、固体では、リン酸二水素カリウム(KDP)を代表とする「水素結合型強誘電体」の強誘電性相転移の動的機構を明らかにした。2005年度の主な成果は以下の通りである。(1) 超臨界水の低振動数ラマンスペクトル (THz ラマンスペクトル) の測定に世界で初めて成功し、水素結合の揺らぎに対応する緩和時間を求めることに成功した。この緩和時間が超臨界状態に向かって、一度短くなるが、ある温度から再び長くなることが明らかになった。(2) KDP 型強誘電体において、水素モードとリン酸四面体の分子振動モードのラマンスペクトルの解析から、相転移機構が、直接のプロトントンネリングによるものではなく、歪んだリン酸四面体の秩序無秩序型の相転移であることを示した。

◆教育内容

学部では、「熱・統計力学」、「基礎物理学実験」、「物理英語」の科目の講義、および2名の「卒業研究」を担当した。大学院では「固体物理学特論演習」、「凝縮系科学」の科目、および、前期課程の院生2名、後期課程の院生1名の研究指導を担当した。「熱力学・統計力学」の科目は、熱力学の部分のみを丁寧に講義した結果、学生の理解が深まったことが、期末試験の成績と授業評価アンケートで明らかになった。基礎物理学実験は、学生に実験の面白さと論理的な考え方を教えることを目指して、なるべく分かりやすい基礎的な項目で実施した。物理英語は、将来、専門の英語文献が読めるようになることを目指した。少人数でのゼミ形式の利点を活かして、英語の内容をそのまま理解できることが大切であることを教えた。卒業研究では、ラマン分光の基礎から初めてスペクトル解析まで行い、結果のまとめかたまでの指導をした。大学院生には研究題目を自ら進められるように配慮をしながら、物理の面白さと課題のまとめ方を指導をした。

◆Research Pursuits

I have focused to reveal dynamics of hydrogen-bonded materials through Raman spectroscopic study. I selected "liquid water" and "KDP-type ferroelectrics" as the typical hydrogen-bonded materials. I have carried out the following works during 2005 era. (1) From the analysis of low-frequency Raman spectra of supercritical water we have analysed both inter-molecular vibration modes due to the restoring force of the hydrogen-bonds and a relaxation mode due to the creation and annihilation of hydrogen-bonds. The obtained relaxation time as a function of temperature shows that first the relaxation time becomes shorter (faster) with increasing temperature at 25 MPa, then it turns longer (slower) with increasing temperature toward to the supercritical temperature. In the supercritical region the relaxation time is still longer (slower) with increasing temperature. (2) From the analysis of Raman spectra on the mixed crystals of KDP and deuterated one (DKDP), the hydrogen modes are definitely assigned and revealed as a simple local vibration mode not the tunneling mode. While from the analysis of molecular vibrations of PO₄ tetrahedra, the tetrahedra are already distorted even in the paraelectric phase. We have concluded that the dynamical mechanism of hydrogen-bonded ferroelectrics is an order-disorder type due to the locally distorted PO₄ tetrahedra. The proton-tunneling model is not adequate to explain the Raman spectroscopic results.

◆Educational Pursuits

For undergraduate course I lectured "Thermodynamics and statistical physics", "Elementary experiments of physics", and "English for physics". For graduate course I promoted "Condensed matter physics" with seminar style. Moreover I educated two undergraduate students and three graduate students to carry out their theses. On "Thermodynamics and statistical physics" I decided to confine only thermodynamics in order to well-understanding, because of different concepts between the two and the lack of sufficient time. This decision was positively estimated considering from the results of examination and questionnaires of students. On "Elementary experiments of physics" we tried to give the interest of experiment and the logical thinking of science through the simple and fundamental items. On "English for physics" I put a special emphasis on importance of direct understanding of English not through translation of Japanese with making an advantage of small class. I lectured undergraduate students on Raman spectroscopy from the very beginning to the advanced spectral analysis and encouraged to work out the experiments. I gave for graduate students the good circumstance to promote their theses by their own efforts. At the same time I tried to give the interest of physics and how to reach the final conclusion of their works.

◆共同研究例

- ・超臨界アルコールの低振動数ラマン散乱 (THz ラマン散乱) (山形大学)

◆将来の研究計画・研究の展望

現在、超臨界水の低振動数ラマン分光 (THz ラマン分光) の測定と解析を世界に先駆けて成功させた。超臨界水の高振動数領域のラマンスペクトルは多くの研究があるが技術的な問題から偏光解析が十分でない。また、赤外スペクトルとの比較検討も遅れている。水の特異性の理解のためには、水素結合がほとんど切れた超臨界水の理解は重要なステップである。これから、技術的な困難を解決して偏光ラマンスペクトルと赤外スペクトルとの比較から水素結合の状態を解明したい。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・超臨界水のラマン分光
- ・水素結合型強誘電体の構造相転移
- ・トレハロースのラマン分光

◆受験生等へのメッセージ

常にあくことのない知的好奇心を持って、自分の頭で考える意欲をもつこと。どんな事にもめげずにがんばれば、必ず報われます。さらに詳しい研究室の案内は、以下のサイトで見ることができます。

<http://www.phys.ocha.ac.jp/tominagalab/home.html>

<http://www.dc.ocha.ac.jp/fukugo/tominaga.html>

理科系学部をめざしている受験生に一言：

自然に感動する感性はとても大切ですが、それ以上に持続的に科学の素養を身につけるための動機付けとして、「なぜ科学の素養と科学的な考え方の訓練が必要なのか、あるいは、生きていくための必需品として、なぜ科学が必要なのか」をちょっとだけ考えてみて下さい。ひとつの答えは、「騙されないために」だと思っていますが、これよりもっともっと素敵な動機付けがあるかもしれません。

教員名	内藤 俊史 (NAITO Takashi)
所 属	人間文化研究科人間発達科学専攻
学 位	博士（教育学）（1998 慶応義塾大学）
職 名	教授
URL／E-mail	http://members.aol.com/naitot/morality.htm naito.takashi@ocha.ac.jp

◆研究キーワード

道徳性 / 道徳的感情 / 感謝 / 韓国 / 対人関係

◆研究内容

他者から援助を受けたときの感情のパターンについて、日本と韓国の女子大学生を対象として、調査を行った。他者から援助を受けた場合の感情として、目的達成、人間関係の確認、負債感、相手への気づかいというカテゴリーを設定した。その他に愛着尺度、負債感尺度、感謝尺度を用いた。その結果、韓国では負債感、日本では相手への気づかいの得点が高いことが見出された。これらの結果は、日本と韓国の社会的関係についてあらかじめ想定していた予測とそうものであった。

◆教育内容

道徳性の発達、思いやり行動の発達初めとして、道徳性の発達について、講義、演習においてとりあげた。大学院においては、道徳性に関する最近の動向を理解するために、characterに関する論文集を購読した。

◆Research Pursuits

We conducted a questionnaire study to explore correlations between gratitude and indebtedness when receiving friend's favor, and some related variables using Japanese female university students as participants (Study 1). As the results, the item of gratitude correlated with items of positive feelings and regret for bothering others. The results also suggested that positive feelings and indebtedness reported in a hypothetical helping situation had different correlation patterns with other variables: the positive feelings had significant positive correlations with enhancement of prosocial motivation and obligation. In contrast, feelings of indebtedness had significant positive correlation only with enhancement of obligation. Study 2 was conducted to examine similarity and differences of the correlation patterns and magnitude of these feelings between female university students from Japan and South Korea. The results showed the similar correlation patterns for Japanese and South Korean samples.

◆Educational Pursuits

I had a lecture on Introductory course of Educational Psychology in undergraduate course and seminars on moral development and education in the graduate course.

◆共同研究例

- ・ 自然に対する感謝感情の文化間比較

◆将来の研究計画・研究の展望

道徳的感情、なかでも感謝心について、その発達の様相を、アジア諸国との比較研究と実験研究を組み合わせることにより、明らかにする。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・ 道徳的感情の比較文化的研究

◆受験生等へのメッセージ

心理学のテーマは、私たちの日常のなかにも多く見出すことができます。大学は、それをより確かな方法で探究する場です。心理学にはいろいろな方法があります。問題意識を大切にしつつ、方法を学んでいく意欲を持ち続けてください。

教員名	中居 功 (NAKAI Isao)
所 属	理学部数学科
学 位	理学博士 (1985 京都大学)
職 名	教授
URL/E-mail	nakai@math.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

複素力学系 / 常微分方程式 / 解析同形 / 複素葉層 / WEB 幾何学

◆主要業績

総数 (1) 件

- ・ Nakai, isao and Yanai, kana Relations of formal diffeomorphisms}
数理解析研究所講究録, Complex Dynamics 1447 (2005) 145 -- 163

◆研究内容

複素解析的同相芽の満たす合成法則に関する関係式の組織的研究を行った。二つの複素 1 変数解析同相芽の合成に関する関係式を、それを記述する語をランク 2 の自由群の元とみなし、その群の言葉で特徴づける研究に着手し、基本的アイディアを得た。その結果の応用として、関係式の存在定理を証明した。この研究は、博士後期課程の学生柳井との共同研究としてすすめられ、既に部分的に発表されている。今年度の 9 月より 2 年間の予定で JSPS 外国人特別研究員として採用された Movasati 氏との共同研究も始められ、可換なホロノミーを保つ変形を許す複素ハミルトン力学系の研究も始められ成果を挙げつつある。

◆教育内容

今年度は、数学科 2 年次の微分積分学とその演習、力学系、1 年生対象の輪講の講義をした。微分積分学の講義では、1 年次に学んだ 1 変数の微分積分の考え方を思い起こしながら、それらがどのように自然に 2 変数関数に拡張されるかを、類似点と相違点をできるだけ明らかにするようつとめながら講義した。力学系の講義では、マルサスの人口論、ロジスティック写像、円周の回転写像を例としながら、周期点やカオスといった様々な力学系の基礎概念を紹介し、シャルコフスキーの定理等を証明した。数学輪講では、1 年生の二つの小さなグループで、数の様々な話題の本と、平面図形の面積の本を読んだ。学生の自発性を引き出す事につとめた。今年度は博士後期課程の学生の博士論文の指導をした。題材は 1 変数複素解析同相芽の群の中の 2 つの元の満たす関係式であった。博士論文の他に 2 編の論文を仕上げ、本学自然科学報告に出版した。

◆Research Pursuits

I investigate the problem on relations of germs of holomorphic diffeomorphisms under composite raw. Regarding words describing relations of two holomorphic germs as elements of rank two free group generated by those germs, I obtained a basic ideas to characterize those relations in terms of group theory. As a coproduct I obtained some theorems on the existence of relations. This research is mostly done collaborating with my doctoral student Yanai, and a part of the result is published. From this september, I stated a joint research with a JSPS over sea fellow Dr Movasati on the subject of deformations of complex Hamiltonian systems respecting commuting holonomy. We are gradually obtaining the various results.

◆Educational Pursuits

In this academic year, I gave a course in calculus and its exercise course for the second year students, a course on Dynamical systems, and a reading course of mathematics. In the course of calculus, I reminded the various basic ideas in the calculus of function of one variable, and showed the natural way in which those ideas are generalized for functions of two variables, emphasising the similarities and the differences in those cases. In the course of dynamical systems, using the theory of population due to Malthus, Logistic equation, rotation maps of the circle as examples of dynamical systems of one dimension, I introduced the various basic notions in dynamical system in general such as periodic points and Chaos, and I proved the theorem of Sharkovskii and others. In the reading course I organized two small groups of first year students to read a book on the various topics on numbers and a book on area of planar domains. In this course I tried to help spontaneity of the students. In this academic year I supervised a student in doctoral course to finish her thesis. The subject of the thesis was relation of two elements in the group of germs of holomorphic diffeomorphisms. Besides the thesis, she could finish two small papers on this subject and publish in the Natural Science Report in the Ochanomizu University.

◆共同研究例

- ・ブラジルの IMPA 研究所の、Lins Neto 教授との WEB 幾何学の共同研究
- ・フランス、ボルドー大学、Henaut 教授との WEB 幾何学の共同研究
- ・ブラジル、IMPA 研究所 Movasati 教授との複素葉層の共同研究

◆将来の研究計画・研究の展望

波面の重ね合わせの幾何構造の曲率の計算の微分方程式への応用をさぐる。解析的同相芽のなす群の中の関係式の研究を続ける。またその研究のリー環とリー群での対応物を探し求める。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・波の波面と位相の幾何学：幾つかの波の位相の重ね合わせの研究
- ・複素 1 変数解析同形の研究
- ・特異点論の研究

◆受験生等へのメッセージ

何か不思議だなと思ったときに勉強を始めるチャンスです。それが何なのかは、凝視し続ければ次第に分かってきます。それがもしも数学的なものであれば、私に手伝うことができるかもしれません。

教員名	永瀬 伸子 (NAGASE Nobuko)
所 属	人間文化研究科ジェンダー学際研究専攻
学 位	博士 (経済学) (1995 東京大学)
職 名	助教授
URL/E-mail	http://www.soc.ocha.ac.jp/nagase/nagase@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

Labor Economics / Female Labor Supply / Family Formation / Social Protection System / Econometrics

◆主要業績

総数 (9) 件

- ・ Nobuko Nagase(1997) "Wage Differentials and Labor Supply of Married Women in Japan: Part - time and Informal Sector Work Opportunities" The Japanese Economic Review Vol.48. No.1, pp.29 - 42.
- ・ 永瀬伸子・村尾裕美子 (2005)「社会保障や税制等は家族・家族形成に影響を与えるかー日本の社会的保護の仕組みが持つ特定タイプの家族へのバイアス」『季刊社会保障研究』第 41 巻第 2 号 137-149 頁。
- ・ Nobuko Nagase(1997) "Wage Differentials and Labor Supply of Married Women in Japan: Part - time and Informal Sector Work Opportunities" The Japanese Economic Review Vol.48. No.1, pp.29 - 42.

◆研究内容

労働経済学の分析枠組みを用いて、労働、結婚、出産行動と就業との関係、家族形成、さらには、社会的保護の仕組み（年金、保育、介護、失業等に対する保護の仕組み）の在り方について研究をしています。労働の分野では、就業選択、雇用形態、労働時間、非正規雇用と正規雇用の格差、労働組合をテーマとして研究しています。

2005 年は内閣府男女共同参画局の依頼でモデルケースワーキングチームとして日本の税制・社会保障制度の変更が労働供給にどのような影響を与えるか、全国消費実態調査の個票と賃金センサスとを組み合わせ計量分析をしましたが、作成した報告書をもとに論文としてより精緻にしました。

また 21 世紀 COE プログラムジェンダー研究のフロンティアにおいて、北京、ソウルのパネル調査を実施、東アジアの女性と就業を日本と比較していますが、その調査をまとめ、また国際学会(韓国、スウェーデン、カナダ)で発表しました。また労働組合とジェンダーの調査に参加し分析をしました。

◆教育内容

「労働経済学」「社会保障論」「労働経済学演習」、「労働論」等を大学、大学院で教えています。学部前期は標準的な労働経済学の講義をします。雇用と労働時間、失業と職探し、離転職や引退、労使関係、雇用者保護の社会制度などについて、また企業内の昇進や賃金制度などです。私自身の研究テーマが、女性労働と家族、社会的保護の制度ですので、「労働経済学各論」は、女性に関心を絞り女性がなぜ昇進しないか企業組織と女性意識についてケースを輪読をしながら討論しました。大学院前期は中国留学生が 5 人も受講してくれたので中国の労働市場の発展と社会階層をテーマとしました。大学院後期は労働の分析に加えて、計量経済学とパネル分析手法を学び合いました。また学部専門英語では native speaker との team teaching に挑戦しました。学外出講として東京大学経済学部で「社会保障」を教えました。また東京労働大学では企業の人事部等のサラリーマンを相手に女性労働の現状について講義をし、総務省統計研修所では統計を用いた計量分析の講義をしました。

◆Research Pursuits

My research field is in Labor Economics: Female labor supply in Japan and the social protection system surrounding work and family. I also do researches in marriage timing and birth timing and work choices. I do empirical analysis using econometrics.

◆将来の研究計画・研究の展望

COE ジェンダー研究のフロンティアで、北京およびソウルのパネル調査の実施にかかわっていますので、これらの他の東アジア諸国の女性労働と家族とのかかわりを日本と対比し、さらに欧米諸国と対比した上で、社会的保護の制度のあり方について考察したいと考えています。その際には少子化、家族、労働供給、社会保障などをキーワードとします。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・少子化と女性労働
- ・税制・社会保障・雇用ルールを含めた社会的保護のあり方の制度の比較研究
- ・賃金構造と失業

◆受験生等へのメッセージ

女性が働くことと、社会的な制度のあり方、さらには社会規範や家族のあり方は深くかかわっています。仕事と家族の両立支援策は、1990年代から行われているように見えますが、なぜ実効を伴わないのでしょうか。なぜ日本の女性の出産離職は今でも大変高いのでしょうか。そのメカニズムについて一緒に考えてみましょう。企業の賃金制度や雇用慣行、法律の枠組み、文化的な土台や家族の価値規範、税制や社会保障制度、それぞれはどのような役割を果たしているのでしょうか。実際に制度を調べ、聞き取りをし、あるいはデータ分析を行うことで、要因を明らかにするのが私の研究です。また私の属する講座や大学院のコースには、この問題を考える幅を広げる学際的な土壌があり、この問題を真摯に考える人には良い場所を提供すると思います。

教員名	仲西 正 (NAKANISHI Tadashi)
所 属	生活科学部人間・環境科学科
学 位	工学博士 (1987 東京工業大学)
職 名	助教授
URL/E-mail	http://www.eng.ocha.ac.jp/matsci/ntadashi@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

高分子ゲル / 消臭機能繊維 / 分離膜

◆主要業績

総数 (2) 件

・ KOBAYASHI Yasuko, KAMIMARU Mayuka, TSUBOYAMA Kaori, NAKANISHI Tadashi, KOMIYAMA Jiro, Deodorization of ethyl mercaptan by cotton fabrics mordant dyed with direct dye and copper sulfate, Textile Research Journal, 2006, 受理印刷中.

・ 木村 奈緒・仲西 正, 種々の含水率を持つポリビニルアルコール膜の塩収着, 日本学術振興会繊維・高分子機能加工第120委員会年次報告, 56巻64-67頁, 2005年

◆研究内容

本年度は残念ながら科学研究費補助金を研究代表者として受けることが出来なかったが、研究分担者として2件を担当し、その分担金により、「反応染料と銅塩で染色して調製した消臭機能綿布」および「ガスクロマトグラフィーを用いた含銅染色繊維の消臭過程の追跡」というテーマで研究を行った。また、昨年度より合成高分子ゲルに加えて天然高分子からなるゲルについても膨潤挙動の研究を開始したが、本年も κ -カラギーナンゲルなどについてゲル膨潤に対する基礎的知見を得るべく実験を行った。ポリビニルアルコール膜の塩収着挙動に関しては、ある程度の結果を昨年度までに得ることが出来たので、その内容を、日本学術振興会繊維・高分子機能加工第120委員会の年次報告にて公表した。私の研究室で研究生をしている他大学教員と共同で行っている「食材中の食塩の拡散」に関する研究については、日本家政学会大会ほかの学会で発表を行った。

◆教育内容

(学部) 物理化学英語Ⅱ、機器分析演習(分担)、生活材料物性、生活材料物性実験、生活工学演習、生活工学輪講、および、コアクラスター「現代科学技術と地球環境学」(分担)の授業を担当した。授業に際しては、理解しやすいことを最大の目標とした。卒業論文指導学生は2名で、論文題目は「コンニャクおよび κ -カラギーナンゲルの溶質選択的膨潤」と「反応染料と銅塩で染色した綿布の消臭特性」であった。卒業論文指導においては、理系的研究方法のあらましを理解させることと、言葉によって、自分の考えをまとめ相手に伝える力を持たせることを主眼とした。

(大学院) 前期課程において、環境生活工学演習と機能材料特論を担当した。指導した前期課程学生は1年生2名であった。修士1年生の指導においては、文献を調査し読解できる力を与え、研究の背景と方向性を明確に理解させることと、自身の力で実験を計画し遂行できることを目標に指導を行った。

◆Research Pursuits

Unfortunately I was not able to receive "Grants-in-Aid for Scientific Research" as a head investigator in this year. However, I received the Grants as a co-worker and studied in "Deodorization function of cotton dyed with reaction dye and a copper salts" and "Gas chromatographical study in deodorization process by the fibers dyed with a copper-complex dye." In addition, I started a study in the last year about swelling behavior for gels composed of natural polymers as well as synthetic polymer gels, and investigated in order to get fundamental findings for gel swelling for k-carrageenan gel this year. I had obtained some results on salt sorption behavior of polyvinyl alcohol membranes by the last year, and I reported the results on Annual Report of Japan Society for the Promotion of Science (the 120th committee). On a study to relate to "diffusion of salt of the cooking ingredients," We presented it in a meeting of the Japan Society of Home Economics, and others.

◆Educational Pursuits

(Faculty) I had the following classes to teach in 2005: "Physical Chemistry in English," "Exercise in Equipment Analysis," "Physical Properties of Materials for Human Life," "Laboratory for Materials Science," "Exercise for Human Life Engineering," "Reading for Human Life Engineering", and a core-cluster program "Present Age Science and Technology and Global Environmental Studies." I supervised two students making graduation theses. The titles of the theses were "Deodorant properties of cotton fabrics dyed with reactive dyes and a copper salt," and "Solute specific swelling of konjak and carrageenan gels. A main objective of supervising the students is to develop their faculties for scientific research and their ability for scientific presentation.

(Graduate School) I had two classes in 2005: "Exercise in Human Life Engineering for Environment," and "Special Topics in Functional Materials." I supervised two master course students of the first year. The aims of the guidance for the students are: (1) to give the abilities of searching, reading and understanding scientific information from various sources, for example, the papers on journals, and (2) to give the abilities of planning and accomplishing the studies by the student's own efforts.

◆将来の研究計画・研究の展望

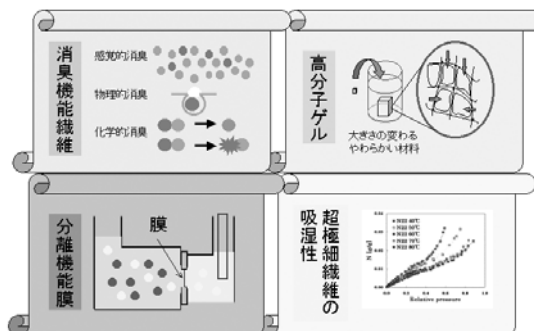
消臭繊維については、におい物質の吸着や分解などの消臭機構の基礎的な点について調べると同時に、実用的な観点からの開発的な研究を行いたい。高分子ゲルの研究については、環境対応などの観点から、天然高分子ゲルへも拡張したい。特に、天然高分子ゲル固有の高い機能性にも注目したい。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・消臭繊維の開発
- ・高分子ゲル材料の生活分野への応用
- ・ナノファイバーの吸湿性評価

◆受験生等へのメッセージ

現在、高校生や大学生の皆さんも、いつかは社会に出られ仕事をして活躍されることになります。社会に出る直前で大学や大学院で学ぶことにはどのような意味があるのでしょうか。私は「未知の問題を解決できる力」を備えることではないかと考えています。大学では、ひとつの専門について深く学びます。大学院では専門的な研究も自ら行います。大学や大学院で学んだ専門分野は、将来の仕事と直接に関係ないかもしれません。しかし、私は、皆さんがどのような専門を選ばれても、「深く」学び、「深く」考えることが大切であると考えています。「深く」考えた人には、その人にしか見えなかったり気づけなかったりするものが見えるのです。そのような能力こそが、皆さんが活躍される将来のどのような分野や状況においても、必ず役に立つのです。私は、講義室や研究室で、自分の専門を通して、学生の皆さんが「深い」見方が出来るように指導したいといつも考えています。



教員名	永野 肇 (NAGANO Hajime)
所 属	理学部化学科
学 位	理学博士 (1974 東京大学)
職 名	教授
URL/E-mail	http://www.sci.ocha.ac.jp/chemHP/index.html nagano@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

天然物化学 / テルペノイド / 有機合成化学 / 立体制御 / ラジカル反応

◆主要業績

総数 (2) 件

- ・ NAGANO Hajime, IWAZAKI Yukiko, GONG Xun, SHEN Yuemao, KURODA Chiaki, HANAI Ryo
Chemical and genetic differentiation of *Ligularia pleurocaulis* in northwestern Yunnan and southwestern Sichuan Provinces of China
Bull. Chem.Soc. Jpn, 79/2, 300-304 (2006)
- ・ YAJIMA Tomoko, SAITO Chiaki, NAGANO Hajime
Radical-mediated hydroxyalkylation of α,β -unsaturated esters
Tetrahedron, 61/43, 10202-10215 (2005)

◆研究内容

- [1] 原始細胞膜がポリプレニル鎖を持つリン脂質からなるという仮説を確認するため、種々のポリプレニル鎖を持つリン脂質合成し、膜構造の形成と安定性を研究している。
- [2] 中国雲南省や四川省の高原に生育するキク科 *Ligularia* 属植物の遺伝的および化学成分の多様性を解明している。
- [3] キレート環形成が鎖状化合物の立体選択的ラジカル反応に極めて有効であることを見だし、天然物の立体選択的合成を行っている。

◆教育内容

講義名「安全管理概論 (分担)」(1年生対象): 化学物質を中心とした実験室の安全管理について講義する。

講義名「基礎化学 A」(1年生対象): 有機化学入門。将来、化学を専攻する学生はもとより、自然科学のいかなる分野に進む者にとっても有機化学の知識は必要である。多種多様な有機化合物の構造、性質、反応を体系的に理解し、有機化学の全体像を把握できるよう基礎から講義する。

講義名「構造有機化学 I、II」(化学科2年生対象): 原子軌道、分子軌道、共有結合等の概念に基づき、有機化合物の構造を理解し、それらの性質、反応性、合成法について講義する。

実験「有機化学実験 (分担)」(化学科2年生対象): 基本的な反応を用いた有機化合物の合成、有機機器分析、有機定性分析、および文献検索に関する実習を行う。

演習「有機反応化学演習」(大学院生対象): 新着雑誌の講読と討論、研究報告など。

◆ Research Pursuits

[1] We have postulated earlier that the highly branched isoprenoid alkanes may have been derived from the corresponding branched polyprenyl phosphates, potentially present in biomembranes in primitive organisms. We have now synthesized a series of 6-(poly)prenyl-substituted polyprenyl phosphates and studied the formation of vesicles from these phosphates, as a function of the substituted-chain length, the position of the double bond, and pH.

[2] Intra-specific diversity of *Ligularia* species (Compositae) collected in Yunnan and Sichuan Provinces in China is examined from both chemical and genetic aspects, using furanoterpenes as the chemical index and the nucleotide sequences in the *atpB-rbcL* and the ITS1 regions as the genetic index.

[3] We have shows the possibility for attaining reliable radical mediated 1,3-asymmetric induction in acyclic systems and the 1,3-asymmetric induction is applicable to the synthesis of chiral natural products having 1,5-dimethyl motifs.

◆ Educational Pursuits

Basic Chemistry A

Structural Organic Chemistry I, II

Experimental Organic Chemistry

Seminar in Organic Chemistry

教員名	永原 恵三 (NAGAHARA Keizo)
所 属	文教育学部芸術・表現行動学科音楽表現講座
学 位	博士（文学）（1999 大阪大学）
職 名	教授
URL/E-mail	nagahara@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

合唱 / 観光（ツーリズム） / キリスト教音楽 / 柴田南雄

◆主要業績

総数 (5) 件

・2005 年 6 月 共著書『都市の祭礼ー山・鉦・屋台と囃子ー』（京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター 研究叢書 I）、植木行宣；田井竜一編、「祭礼と観光のダイナミズムー鹿角市の花輪ばやしを例としてー」、pp.433-458、東京：岩田書店。

・2006 年 3 月 論文「日本におけるカトリックの新しい典礼聖歌ー高田三郎と新垣壬敏の作曲による聖歌を中心にー」、『礼拝音楽研究』、第 5 号（キリスト教礼拝音楽学会）、pp.33-53.

・2006 年 3 月 CD『よろこび歌えアレルヤー復活徹夜祭の典礼』、演奏：アンサンブル・アルボス、東京：サンパウロ

◆研究内容

1) 音楽学の分野では、3つのジャンルで研究している。①合唱活動の存在論的研究と柴田南雄の合唱作品研究。②観光と音楽についての研究。海外の観光学研究を踏まえ、日本の民俗芸能などの事例を調査し発表した。調査地域は秋田県鹿角市（花輪ばやしと大湯太鼓）、北海道江差町（江差追分）。③カトリックの典礼聖歌に関する研究。カトリック教会の聖歌隊指揮者と独唱者を担当。第二ヴァチカン公会議後の現地語聖歌のあり方を日本の事例について研究。またヨーロッパ中世・ルネサンスの聖歌についても研究。

2) 演奏の分野では、3つの立場で研究と実践を行なう。①合唱指揮者。男声合唱団を指導し、発声指導法や音楽作りを研究。発声指導に大きな成果あり。②声楽アンサンブルを主宰。ルネサンス期のポリフォニーと現代の典礼聖歌を中心に演奏を研究。③テノール独唱者。ドイツリートおよびバロック音楽における演奏を研究。発声法と演奏法を大阪音楽大学名誉教授の永井和子氏のもとで研鑽している。

◆教育内容

学部：1，2年生向けの音楽文化概論Ⅰおよび音楽学概論Ⅱで、音楽学の基本的概念、考え方、方法などを提示するとともに、西洋音楽史の中世からルネサンスまでの時代を英語の文献で概観する。3年生向けの比較芸術文化論では近年の音楽学文献（英語）を演習形式で輪読する。本年は Bonnie Wade "Thinking Musically"(2004)。4年生向けの比較芸術文化論演習では卒業論文作成のために毎回数人ずつ発表し、論文の内容を検討する。3年生向けの指揮法はグループレッスンだが、クラス全員が1回ずつ前で指揮をし、それにコメントをする。斎藤秀雄の方法を用いる。

大学院：（博士前期）音楽学特論（演習）は近藤教授と共同で修士論文に向けて全員のゼミ。民族音楽学特論（演習）は音楽学専攻の学生を中心としたゼミ。音楽学の近年の論文等を参考にして、各自の研究を発表。博士後期の学生も聴講するので20人強の受講生がいる。（博士後期）後期の学生のためのゼミでは近年の英語論文を輪読。他に個人指導多数。

◆Research Pursuits

1 Musicology: 1) the study of the ontology about the choral activity, especially about Minao Shibata's choral works. 2) the relationship between tourism and music, especially regional performing arts. 3) Catholic church music, especially the liturgical music in Japan.
2 Music performance: 1) choral conducting. 2) Dirigent of vocal ensemble singing especially Catholic church music. 3) Tenor solo singer singing especially German lieder and baroque music.

◆Educational Pursuits

Undergraduate course: musicology; lectures of key concepts and comprehensive knowledge of this field, and Western music history (medieval through renaissance period). conducting method.
Graduate course: musicology (advanced and applied including ethnomusicology).

◆将来の研究計画・研究の展望

- 1) 合唱のトポロジーについてと、柴田南雄の合唱作品の総括を研究成果として単行本で刊行。
- 2) 観光学の古典とされる D. MacCannel の "The Tourist" についての解説本を刊行（共著）。
- 3) スペインの 16～17 世紀の音楽における東洋と西洋の邂逅に関する研究。
- 4) スペインのカトリック音楽、特にルネサンス期の合唱音楽の演奏研究。
- 5) テノール独唱者として、J.S. Bach のカンタータと受難曲の演奏研究。

◆受験生等へのメッセージ

私は音楽学者と演奏家との二足のわらじを履いています。西洋音楽ではバロック以前の音楽に重要性を見だし、とくに合唱に関心を持っています。演奏家としては西洋音楽を専門としていますが、音楽学者としては、西洋だけでなく諸民族の音楽や国内の民謡や民俗芸能にも関心を持ち、それらに応じた研究の仕方や研究成果を学び、またそれを学生の皆さんと共有しています。

お茶の水女子大学の音楽学は日本でも有数の研究拠点で、学会でも高く評価されています。大学院のゼミは実にさまざまな音楽研究者のタマゴたちが集まり、熱い議論をして切磋琢磨しています。

音楽について、しっかりと考えて、研究し演奏していく姿勢をもっている人に、来ていただきたいと思っています。音楽は知的産物なのですから。

教員名	中村 俊直 (NAKAMURA Toshinao)
所 属	文教育学部言語文化学科英語圏・欧州言語文化講座
学 位	文学修士(1979 東京大学)、D.E.A.(1982 ポール・ヴァレリー大学)
職 名	教授
URL/E-mail	tn@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

視覚イメージ / 言語記号 / 記号論 / 詩学 / 情報伝達

◆主要業績

総数 (1) 件

・「ヴァレリーと死の誘惑 『真実らしい物語』について」

◆研究内容

- 1 フランスの19世紀末から20世紀前半に活躍した詩人・批評家のポール・ヴァレリーに関する多角的な研究。さらに彼に関係する文学者や芸術家並びに彼の生きた時代に関する総合的な研究。
- 2 視覚イメージと言語記号の両者の機能の比較研究。特に写真、絵画、言語表現の三者の相互影響関係の考察。
- 3 日本の近現代の文学者の営為にフランス文学が与えた影響の解明。また逆に日本の美術作品がフランスの文学や美術に与えた影響の解明。

◆教育内容

学部

- 1 フランスにおける言語文化と映像文化との関係を比較対比的に考察する。換言すれば、それは言語表現（特に文学）と視覚イメージ（絵画、写真、映画など）との関係の問題である。

- 2 フランスの20世紀の作家のアンドレ・ジッドの研究を行う。彼の代表作の『贗金つかい』を中心に読解と分析を進め、さらに彼の他の作品との関係にも触れる。
- 大学院

- 1 フランスの20世紀の詩人・批評家のヴァレリーの最初期（即ち、年齢にして10代後半の時期）の詩作品を精密に読解し、どのように詩人が誕生したのかを考える。

- 2 フランスの19～20世紀の文学者（ゴーチエ、マラルメ、ヴァレリーなど）の舞踊論を読みながら、それぞれの詩人や作家にとって、舞踊の本質とは何かを明らかにする。

◆将来の研究計画・研究の展望

視覚イメージと言語記号の両者の機能を総合的に比較考察する。文化史、社会学、記号論、美術批評、文学批評、情報伝達論などの多様な視点から研究を進める。歴史的に見れば、現代の社会・文化の特徴の一つは、これら二つの表現・コミュニケーションの手段の共存ならびに相互影響であるといえるからである。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・視覚イメージと言語記号の両者の表現や伝達の機能の比較研究

◆受験生等へのメッセージ

大学は自由にものを考え、探求する場所です。大学での学問の範囲は明確に限定されているわけではありません。したがって、はっきりした答えが見つからなくてもよいのです。重要なのは、思考や探求の結果ではなく、その過程です。その過程で、たくさんのことを考え、調べ、さらにはいろいろ迷うことが、のちのち大きな意味を持ってきます。そのようにして、柔軟な思考力や幅の広い判断力を養成することが、大学を卒業してからの人生において大きな力となることでしょう。昔からよく言われるではありませんか、「人生は長く、学生生活は短し」と。(少し違うか・・・)

教員名	中村 美奈子 (NAKAMURA Minako)
所 属	文教育学部芸術・表現行動学科舞踊教育学講座
学 位	芸術学士 (東京藝術大学)、人文科学修士 (お茶の水女子大学)
職 名	助教授
URL/E-mail	http://buyou1.li.ocha.ac.jp/Nakamura/index.html http://www.li.ocha.ac.jp/geijutsu/buyou/nakamura.minako@ocha.ac.jp

◆研究キーワード

民族舞踊 / 舞踊記譜法 / 舞踊動作分析 / ダンスとコンピュータ / インドネシア

◆主要業績

総数 (4) 件

- ・中村美奈子, 小島一成, 海賀孝明: 「特集「巧みな動き」の脚と腕: 「舞」における腰と上肢の動きーバリ島の舞踊を事例としてー」, 『体育の科学』日本体育学会, 56 (3) 197-203, 2006 年 3 月
- ・Minako Nakamura, Kozaburo Hachimura: "An XML representation of Labanotation Laban XML and its implementation on the notation editor LabanEditor2", Proceedings of the First South-Eastern European Digitization Initiative (SEEDI) Conference 2005, pp90-93, Ohrid
- ・中村美奈子 「国際日本学シンポジウム『無形文化財の保存とデジタルアーカイヴ』概要」, 比較日本学研究センター研究年報, 2 号, pp67 (セッション 3), pp71 (セッション 4), 2006 年 3 月

◆研究内容

筆者は、インドネシア・バリ島の舞踊を研究対象とし、その舞踊の技法、表現特性、舞踊構造の分析を行っている。2005 年度は、科学研究費により短期間ではあるが現地調査を行った。また、立命館大学の COE 客員研究員としてマケドニアで開催された「第 1 回東南ヨーロッパデジタル化企画国際会議」にて研究発表を行った。更に 2005 年度は、お茶の水女子大学比較日本学研究センターの一員として、国際日本学シンポジウムにおいて『無形文化財の保存とデジタルアーカイヴ: テクニカルセッション』および『無形文化財の保存とデジタルアーカイヴ: パネルディスカッション』を企画運営した。立命館大学 (COE) と神奈川大学 (COE) の研究者および韓国の研究者を招聘して討論するとともに、テクニカルセッションでは、筆者の所属院生の研究テーマである岩手県の民俗舞踊、鬼剣舞の団体を招聘して舞踊の計測を行った。この計測データの分析を、来年度以降の研究の中で行っていく予定である。

◆教育内容

舞踊教育学コース所属の学生らは、そのほとんどが、バレエやモダンダンスなど西洋の芸術舞踊を実践してきている人たちである。筆者の教育目標は、さまざまな身体表現、舞踊表現が世界には存在すること、また、舞踊は、その社会文化的背景と深く結びついた表現様式をもっていること、そして、舞踊は芸術的なものだけではなく、民俗芸能のように社会的な機能をも果たしていること等を理解してもらうことである。そして、それらの理解を通して、舞踊創作の際に新しい表現方法を構築する糧としてもらいたいと考えている。そのために、講義、演習だけでなく実技授業も毎年開講している。2005 年度は、加えて舞踊記譜法についての講義と実習を開講し、舞踊研究の方法論としての可能性について検討した。大学院では、「民族舞踊学特論」において、各院生の研究テーマを「民族舞踊学の視点から検証する」という内容の授業を行った。

◆Research Pursuits

I am studying the dance technique and structure of Balinese (Indonesian) dance.

In 2005, I took a field trip to Bali by Grants-in-Aid for Scientific Research.

In 2005, I also took part in the COE research project in Ritsumeikan University as a COE guest researcher and read my paper at the first South-Eastern European Digitization Initiative Conference which held in Macedonia.

I organized two sessions titled “Documentation of Intangible Properties and Digital Archives” at the 7th Symposium on Global Perspective in Japanese Studies as a researcher of Center for Comparative Japanese Studies in Ochanomizu University.

◆Educational Pursuits

Most of the students in our dance education course only know Western dances such as Ballet or Modern dance.

I am teaching those students that there are many more kinds of dances which have their own cultural background and that some of them are not artistic but perform a social function.

In 2005, in addition to those lectures and practices, I gave a lecture on “Dance Notation (Labanotation)” as a method of analyzing dance.

To the graduate students I gave a lecture to examine the research subject of every graduate student from the point of view of Ethnochoreological (Dance Ethnology).

◆共同研究例

- ・ラバン式身体運動記譜法に基づく身体運動データのXML表現の開発
- ・モチーフ・ライティングに基づく舞踊（運動）創作あそびのソフト開発
- ・光学式モーションキャプチャーを用いたアジア地域の舞踊の手と指の動作解析

◆特許

- ・Labanotation（舞踊記譜法）のXML表記（LabanXML）の国際標準化

◆将来の研究計画・研究の展望

文化人類学から情報学までさまざまな領域の研究者らとの学際研究を通じて、舞踊および身体表現に関する研究を行ってきた。今後も幅広く身体文化、身体表現、身体運動の解明にかかわる研究をしていきたいと考えている。アジア地域（特に東南アジア地域）の舞踊の通文化的な比較分析を通して、各舞踊の特性や普遍的な身体表現について研究していきたい。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・舞踊芸術公演のためのメディア開発
- ・モーションキャプチャーを用いた民族舞踊の動作分析
- ・アジア地域の舞踊の伝承と教育について

◆受験生等へのメッセージ

舞踊は、その社会文化的背景と深く結びついた多様な表現様式があること、そして、舞踊は芸術的なものだけではなく、民俗芸能のように社会的な機能持つものもあることを是非みなさんにも知ってもらいたいと思っています。同時に、バリダンスは見てみると緩やかで楽そうですが、実は中腰の姿勢で踊るのはきついということを是非実技授業で体験してください。そんな「伝統的」な舞踊の研究をしている私ですが、実は大変な新しいもの好きで、共同研究のほうでは、1998年頃からずっとモーションキャプチャーという装置で舞踊の計測をしてきています。モーションキャプチャーは、日本では主にゲームの人体のCGを作るときに使われていますね。最初の頃は「そんなもので舞踊が計測できるわけがない」と敬遠されたものですが、最近は技術が発展したこともあり、舞踊学の1ジャンルのようにさえなっています。一緒に舞踊学の新しい可能性を切り開いていきましょう！



教員名	中村 弓子 (NAKAMURA Yumiko)
所 属	文教育学部言語文化学科応用言語学講座
学 位	修士 (東京大学 1973、アミアン大学 1972)
職 名	教授
URL/E-mail	

◆主要業績

総数 (4) 件

- ・中村弓子 「心身の合一（ベルクソン哲学からキリスト教へ）第3部 キリスト教における心身合一論（命の癒しの教え）」上 、お茶の水女子大学『人文科学研究』第2巻（2005年版）2006年3月 pp.155-169
- ・中村弓子 「同上 下、お茶の水女子大学『人文科学研究』第2巻 （2005年版）2006年3月 pp.169-184
- ・中村弓子 「ベルクソンと16世紀キリスト教神秘主義（十字架のヨハネを中心に）」、『ベルクソン読本』法政出版局 2006年3月

◆研究内容

「2005－2006年度（平成17－18年度）の研究の最重要な成果は、《心身の合一（ベルクソン哲学からキリスト教へ》三部作の第三部「キリスト教における心身合一論（命の癒しの教え）上・下」を完成し、『人文科学研究』第二号に掲載したことである。」

◆教育内容

2005－2006年度の教育内容の核となったのは、学部の専門の授業で行った、モーリヤックをパスカルの思想と照合しつつ解説する方法論の演習であった。この授業の内容は、近く、私自身の論文としてまとめる予定である。

教員名	中谷 香織 (NAKAYA Kaori)
所 属	理学部物理学科
学 位	博士 (理学) (2001 お茶の水女子大学)
職 名	助手
URL/E-mail	nakaya@phys.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

ソフトマター / 界面活性剤 / 高分子 / 構造 / 中性子散乱

◆主要業績

総数 (4) 件

- Polymer-Confinement-Induced Nematic Transition of Microemulsion Droplets
K. Nakaya, M. Imai, S. Komura, T. Kawakatsu, and N. Urakami
Europhysics Letters 71, 494-500 (2005).
- Surfactant Mesophases Mediated by Colloidal Particles
M. Imai, Y. Suganuma, K. Nakaya and S. Komura
J. Phys.:Condens. Matter, 17, S2929-2936, (2005)
- Structure of Membrane-Polymer Complex Systems
K. Nakaya and M. Imai
Fracture Journal 19, 17-25 (2005) in Japanese

◆研究内容

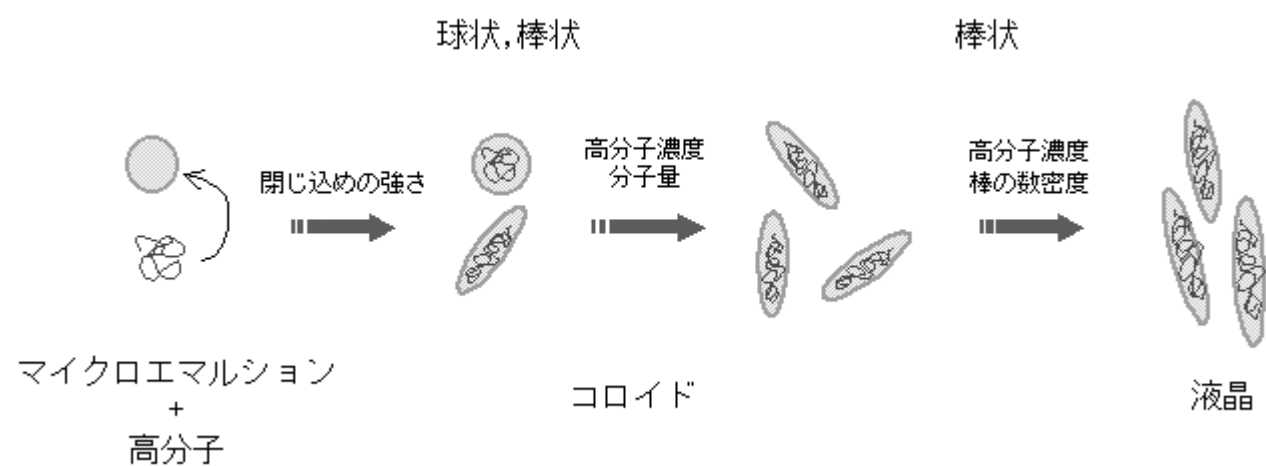
ソフトマター（特に膜＋高分子の複合系）の秩序形成
高分子、両親媒性分子、コロイド等に代表されるソフトマターは、その大きな内部自由度に起因するエントロピーとエネルギー的な相互作用が競合する結果、非常に複雑な自由エネルギー・ランドスケープを生み出し、そこには様々な秩序メソ構造が安定構造ないしは準安定構造として存在する。その中でも特に膜と高分子複合系にみられる様々な秩序構造相転移を明らかにするとともに、流動場により本来の熱平衡状態から離れた非平衡状態に置かれた系が、もとの熱平衡状態とどのようなキネティックパスウェイ(相転移ダイナミクス)で結び付けられているのかを解明することを目的にしている。

◆教育内容

物理学科今井研究室の学部学生および大学院の学生に対し、研究指導の補助を行っている。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・高分子＋界面活性剤複合系における構造解析



教員名	仲矢 史雄 (NAKAYA Fumio)
所 属	サイエンス&エデュケーションセンター
学 位	理学博士
職 名	講師
URL/E-mail	http://www.cf.ocha.ac.jp/SEC/nakaya@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

スケーリング則 / 酸素センサー / Bioenergetics

◆主要業績

総数 (3) 件

- ・ Fumio Nakaya, Yasunori Saito and Tatsuo Motokawa. “EXPERIMENTAL ALLOMETRY: HOW DOES METABOLIC RATE CHANGE WITH SIZE OF MODULAR ORGANISMS? “. Proceedings of the Royal Society of London. Series B. (2005) 272, 1963-1969
- ・ 仲矢 史雄 「群体と個体の境界性—群体ボヤのサイズの生物学—」 海洋 (2005) 41, 119-127.
- ・ “Scaling analysis of physiological time of the colonial ascidian Botrylloides violaceus” Fumio Nakaya¹, Yasunori Saito², Tatsuo Motokawa¹ (Tokyo Institute of Technology¹, Univ. of Tsukuba²) Society for Integrative and Comparative Biology, San Diego, 2005.

◆研究内容

専門：動物生理学および酸素センシング技術開発、および科学コミュニケーション

動物のエネルギー消費量は、体重の増加に比例しない。体重とエネルギー消費は 0.75 乗という乗数をもったべき乗関数でうまく表すことができる。この現象は恒温動物でも変温動物でも広く知られているが、なぜ成り立つのかは検証されていない。

そこで、この現象に対して新たなアプローチ（新しい実験装置、これまで調べられていない研究対象）を開発することで、謎の解明に取り組んでいる。

また、この問題に取り組む過程で開発した装置、技術の応用にも現在取り組んでいる。特に微小スケールでの迅速かつ高精度の酸素センシングに力を注いでいる。

科学コミュニケーションも研究の軸である。研究内容の教材化や科学実験教室の運営を行い、方法論の確立とその実践に取り組んでいる。

◆教育内容

教育内容：動物生理学及び実験方法開発指導

大学院修士課程：生物教材開発法（基礎）

動物の発生過程におけるダイナミックな形態変化と環境との関わりを遺伝子発現と合わせて感動をもって体験できる実習の構築方法習得を目標としています。

「科学コミュニケーション能力を持つ教員の養成プロジェクト（文科省支援事業・教員養成 GP）」の教材開発と教育活動運営一般に従事しています。

◆Research Pursuits

Specialty: Bioenergetics (Concurrent, cell biology)

Research interests: some of comparative and integrative biology, science education, etc.

Now, my research project is the micro-scale oxygen measurement by using the optical sensor.

◆Educational Pursuits

Graduate course education: The method to develop science education materials (Biology)

◆共同研究例

- ・光学式酸素センサーによる微小スケール（培養細胞・単細胞生物）の計測

◆特許

・財団法人理工学振興会，本川 達雄，仲矢 史雄．センサ用攪拌子ホルダ、及び、前記ホルダを備えた測定装置．特開 2 0 0 5 - 1 4 7 8 5 2．平成 1 7 年 6 月 9 日．

◆将来の研究計画・研究の展望

現在進めている研究は基礎生物学的課題を始点としているが、その過程で多くの派生的応用技術を生み出している。最近開発した装置では既存の計測システムの 1000 倍小さいスケールでの酸素センシングが可能になった。今後はさらに 1000 倍の微細化に取り組み、発生学研究や医療分野とくに受精医療に展開していきたい。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・酸素センシング
- ・光学式酸素センサーの応用展開（電極式酸素センサーにも対応）
- ・微細加工を伴う生物・医療実験装置の開発

◆受験生等へのメッセージ

科学はお好きですか？わたしは特に科学の実験が好きです。高校までの理科の実験も好きでしたが、本当の実験の醍醐味を知り得たのは大学に入ってからでした。

大学では、不思議だと思うことに対して、自らテーマを選び、道具を作って、誰もやったことのない実験をすることが出来ます。

自分で工夫した装置から、誰も知らない新発見を見つけることが出来るなんてワクワクしませんか？このワクワクやドキドキする思いを味わってほしいです。

教員名	新名 謙二 (NIINA Kenji)
所 属	文教育学部芸術・表現行動学科舞踊教育学講座
学 位	修士（教育学）（1991 東京大学）
職 名	助教授
URL/E-mail	niina@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

スポーツ消費 / 時系列分析

◆研究内容

スポーツ消費の時系列分析

スポーツ関連支出の変動パターンについて分析を行っている。1 変量時系列モデルを用いて家計調査におけるスポーツ支出の分析を行ったところ、「スポーツ用具」、「スポーツ月謝」、「スポーツ施設利用料」については SARIMA モデルによるあてはめが可能であり、短期においては妥当な予測を行えることが明らかになった。この結果については平成 18 年度の学会において発表する予定である。

今後は GDP 等の経済指標との関連を時系列分析における因果性の分析の枠組みを用いて検討していくことにより、スポーツ消費を適切に説明できる経済モデルを構築することに取り組む予定である。

◆教育内容

コア科目においては、必修科目である「スポーツ健康実習」の授業構成を変更し、全学部において 1 年次に必修 2 単位を履修することとした。また講義科目を選択にしたことにより、「スポーツ健康実習」の授業内で講義の時間を年間 4 回以上入れることとした。この改正に伴い、前期の授業においてはフィットネストレーニングの理論と実践を実習を通じて学ぶという形態に変更し、科目責任者として授業内容の立案・実施、授業評価方法の検討などで中心的な役割を果たした。

専門科目においては、「スポーツ人間学」、「スポーツ人間学実験演習」、卒業論文の指導を通じて、スポーツ及び舞踊分野におけるマネジメントの考え方を学生に対して指導した。

卒業論文は 4 名の指導を行った。卒業論文の分野は下記の通りである。

プロスポーツ球団のマネジメント（1）

文化・芸術政策（1）

舞踊関連団体のマネジメント（2）

◆将来の研究計画・研究の展望

スポーツ消費を説明する経済モデルの構築
国家レベルのスポーツマネジメントの比較研究

◆受験生等へのメッセージ

スポーツマネジメントの分野は現在多くの大学において取り組みが始まっている注目すべき分野です。残念ながら、スポーツマネジメントに関わる女性の数はまだまだ少数です。スポーツに興味を持っている人が集まることを期待します。

教員名	西尾 道子 (NISHIO Michiko)
所 属	文教育学部言語文化学科応用言語学講座
学 位	学士
職 名	教授
URL/E-mail	nishio@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

語用論 / 同時通訳 / 認知言語学

◆主要業績

総数 (1) 件

・「日英同時通訳における通訳文に見られる人称代名詞に関する考察（その2）--we, they, you の使用について--」
お茶の水女子大学『人文科学研究』第2巻, 141-154.

◆研究内容

基本語順の異なる日本語と英語の間で同時通訳が行われる場合にどのようなことが問題となるかをここ数年研究している。2005年度にはSOV語順の言語であり、しかも主語や目的語が省略されることが多い日本語を、SVO語順の言語であり基本的に主語が省略されない英語に同時通訳する際に、通訳文の主語として原文の日本語には使用されていなかった人称代名詞が使用されるのはどのような場合なのかについて考察した。

誰が主語なのか確定できないものの人間が主語だと推測できる場合に、文構造よりもむしろ文の意味を基に通訳者が一人称・二人称・三人称代名詞を使いわけていることが明らかになった。

◆教育内容

学部では、コア英語と英語圏言語文化コースの専門科目と両方を担当しており、コア英語ではリスニング・リーディングの基礎として、一般的な内容の本、テレビ番組、新聞などに使われる英語が理解できるようになることを目指した。

英語圏コースの専門の授業では対照表現学で英語の論文の書き方について理解を深めることを目的とし、特講等では自分の専門の語用論の分野で会話における談話標識の使われ方、ラジオ番組への聞き手の参加の仕方などについて、最近の論文を読みながら考察し、英語が現実の場面でどのように使用されるのかについて議論した。

大学院においては談話標識の使われ方についての理解をより深めるために、関連性理論という理論的な枠組みを基にして書かれた文献を読みながら最近の動向について考察を加えた。

◆Research Pursuits

For the past several years, I have looked into what happens when a language (e.g. Japanese) with SOV order is simultaneously interpreted into another language (e.g. English) with SVO word order.

In 2005, I researched the choice of the subject, in particular the conditions which encourage interpreters to use personal pronouns in English, when no counterparts are found in Japanese original sentences. This is an interesting issue because Japanese often allows sentence subjects to be omitted, but English, in principle, does not. Simultaneous interpreters must determine what the subject of the English sentences would be while listening to Japanese which does not mark the subject clearly.

It was found that interpreters depend on meaning of the sentence rather than on the form or the structure to determine which personal pronouns to use, if they are going to any.

◆Educational Pursuits

At the undergraduate level, I taught both core curriculum classes and classes for English majors. In the former, I chose materials that would enhance students' basic reading and listening abilities: authentic materials that reflected the language and culture of English speaking countries such as books, TV programs, and newspapers. In the classes for English majors, I taught a class that designed to help students write academic papers in English. I also taught classes that dealt with subjects which are close to my own field of study, pragmatics. In these classes, recent papers discussing the use of discourse markers and characteristics found in radio programs that invited listeners to phone in were closely studied.

In the graduate classes, in order to gain deeper understanding of the use of discourse markers, papers that used the theoretical framework of relevance theory to analyze discourse markers were critiqued and discussed.

◆将来の研究計画・研究の展望

主語のほかにも日本語では文末近くになるまで同定できないが、英語では文頭近くで同定される必要のある要素をいくつか取り上げ、日英同時通訳においてそれらの要素がどのように処理されているかを考察したい。それにより、一般に人が言語をどう理解・処理しているのかという問題を考える手がかりとしたい。

教員名	西川 恵子 (NISHIKAWA keiko)
所 属	理学部生物学科
学 位	
職 名	助手
URL/E-mail	nisikawa@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

protocorm / spikelet / morphology / anatomy / photograph

◆研究内容

1：ラン科植物における幼植物の比較形態。2：単子葉植物特にイネ科、カヤツリグサ科、イグサ科を中心とした類縁関係について。3：お茶の水女子大学構内の植物

◆教育内容

学部

・授業

1：植物形態学実習（2005年・前期）

2：植物学野外実習（2005年・前期）

3：生物学実習Ⅰ（2005年・後期）

・卒業研究指導

大学院

・細胞生化学特論演習

◆将来の研究計画・研究の展望

単子葉植物を軸に植物形態学の基礎的領域を解明し、類縁関係を明らかにする。

◆受験生等へのメッセージ

植物形態学実習は、主にお茶の水女子大学構内の植物を材料にした実習を行い、植物学野外実習は千葉県館山市の湾岸生物教育研究センターで、海藻と海岸及び里山の植物を材料に実習を行う。両者とも観察とフィールドワークを取り入れた内容で、自然科学への知的好奇心の誘起を目標としている。

教員名	丹羽 裕子 (NIWA Yuko)
所 属	総合情報処理センター
学 位	
職 名	アソシエイトフェロー
URL/E-mail	http://www.cc.ocha.ac.jp/ / niwa@cc.ocha.ac.jp

◆教育内容

- 2005 年度末 総合情報処理センターの機種更新

学生が新システムに円滑に移行できるよう案内作成。

新システムに学部、大学院の学生アカウントを登録し、パソコン、メールを全ての学生が利用できるよう準備。

- サーバ管理、システム管理、アカウント管理

メールサーバ、ファイルサーバ、ネームサーバ等の管理。教育用パソコンの不具合対処。

- Web ページの作成、更新

教育用システム、メール、ネットワークの利用、機種更新等に関して掲載。

- 学生対応

システム利用に関する各種質問、所有パソコン不具合相談等に対応。

教員名	根本 心一 (NEMOTO Shinichi)
所 属	理学部生物学科
学 位	理学博士 (1983、東京都立大学)
職 名	教授
URL/E-mail	http://plaza.umin.ac.jp/~gc-ocha/starfish/MAIN.html snemo@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

細胞周期 / 減数分裂 / 中心体

◆主要業績

総数 (1) 件

A. Miyazak, K.H. Kato and S. Nemoto (2005). Role of microtubules and centrosomes in the eccentric relocation of the germinal vesicle upon meiosis reinitiation in the sea-cucumber oocytes. Dev. Biol., 280: 237-247.

◆研究内容

1) 動物の受精卵における中心体の継承機構。細胞分裂の際、分裂極を形成する細胞器官は中心体であり、自己複製能をもつ。ヒトも含め受精卵では、この中心体は父系遺伝をする：即ち、精子が卵に持ち込む。父系遺伝が成立する為には、卵の中心体は受精時までには消滅することが前提になる。この仮説は100年以上前に提唱されたが、これまで解明されなかった。この機構をヒトデ卵を用いて解明した。この成果に対し、今年度の日本動物学会賞が与えられた。

2) 中心体は細胞分裂周期毎に複製・増殖する。他の自己複製する細胞器官な独自の遺伝子を持つが、中心体については不明である。近年、ヒトデ精子中心体に核ゲノムとは異なる新規 DNA の存在が示唆されている。この中心体独自遺伝子と複製能の関連を検討した。

3) 受精卵の発生過程は、核—細胞質間の関係を確立する過程でもある。卵母細胞の核（卵核胞）に含まれる成分が細胞周期の確立に果たす役割を検討した。

◆教育内容

担当する授業は、学部は、基礎生物B；発生生物学II；一般生物学実習I,II；発生生物学実習；発生生物学臨海実習、公開臨海実習。大学院では、発生生物学；発生生物学演習；多細胞体形成；発生生物科学演習。

研究を指導する学生は、学部4年卒業研究3名；大学院博士前期課程学生1名；博士後期課程学生2名である。

講義内容は、学部では、発生現象を中心に据えて、細胞生物学に関する基本事項と、減数分裂や細胞分裂機構、細胞周期制御機構、細胞分化に関する事柄等を講義している。大学院では、単細胞の受精卵から細胞分裂と細胞分化により、調和性のある多細胞体が形成される過程に関する現在のトピックを中心に扱った。

卒業研究と大学院博士課程の学生は主に、海産無脊椎動物の卵を用いて、減数分裂と受精卵の細胞分裂における中心体の制御機構；核の移動機構における中心体と微小管の役割；細胞周期機構の確立における核成分役割、を研究テーマにしている。

◆Research Pursuits

Paternal inheritance of centrosomes in starfish zygotes. Centrosomal inheritance in zygotes is an issue of fundamental importance in all sexually reproducing organisms. In most animals, centrosomes for mitoses of fertilized eggs are derived from the sperm alone. The fertilized eggs retain another centrosome inherited from the secondary oocytes. The paternal inheritance of centrosomes is based on the premise that the egg centrosome must decay by the onset of first mitosis. This hypothesis was proposed over one century ago by Boveri (1889), but has not been understood. We, using starfish eggs, have revealed that (1) each of the centrosomes consists of two centrioles with different destinies: one survives and retains its reproductive capacity, and other is lost after meiosis completion., (2) the mature egg inherits the centriole destined to decay, (3) the heterogeneity of the maternal centrioles is determined well before re-initiation of meiosis, (3) some factor in the mature cytoplasm is responsible for suppressing the reproductive capacity of the centrioles destined to decay. Recent data suggest that the heterogeneity is regulated by a novel centrosomal DNA.

◆Educational Pursuits

Lectures and laboratory course for the undergraduates: General Biology B, Developmental Biology II, and laboratory Courses of Marine Development Biology, Developmental Physiology and general biology I and II. For the graduates, Developmental biology and multi-cellular organism formation.

Contents of them are: basic events of cell biology in animal development, regulation mechanism of meiosis and mitosis, cell cycle and differentiation to form organized multi-cellular body. The theme of dissertations are: regulation of paternal inheritance of centrosomes in zygotes, and role of nuclear factors for the establishment of cell-cycle regulation.

◆将来の研究計画・研究の展望

細胞分裂の分裂極を形成する中心体の複製制御機構と、分裂装置形成能、及び、細胞周期全般にわたる制御機構を、中心体が細胞周期制御因子のネットワークを形成する場所であるとの考えから追求する。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

特には無い。強いて挙げれば、不妊治療。受精卵の細胞分裂の分裂極を形成する中心体は、受精の際に精子が持ち込む。この中心体を欠く精子の場合には、他の細胞から単離した中心体を移植することが期待される。

◆受験生等へのメッセージ

学問に対する探求心をもって欲しい。他人と言葉で意志疎通ができる能力を養って欲しい。挫折から立ち直ることができる基礎力を身に付けて欲しい。

教員名	野口 徹 (NOGUCHI Tohru)
所 属	文教育学部言語文化学科応用言語学講座
学 位	Ph.D. (1995 マサチューセッツ大学アマースト校)
職 名	助教授
URL/E-mail	noguchi@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

文法理論 / 生成文法 / 統語論 / 意味論 / 照応

◆主要業績

総数 (2) 件

- ・ "On Semantic Composition in Reflexive Anaphora." 『言語研究の宇宙：長谷川欣佑先生古希記念論文集』, pp. 232-250, 開拓社.
- ・ "Semantic Composition in Reflexivization." Proceedings of the HPSG05 Conference, pp. 540-560, Stanford, CA: CSLI. (<http://csli-publications.stanford.edu/>)

◆研究内容

2003 年度より継続中である科学研究費による研究課題「再帰形態素の特質を明らかにし照応理論を再構築する研究」を中心に研究を進めた。9 月に出版された論文 "On Semantic Composition in Reflexive Anaphora" では、中心的な主張について大まかな検討を加えたものを提示したが、その主張を更に発展させたものを 8 月にポルトガルで開催された国際学会 Lisbon Workshop on Binding Theory において発表し、研究者との意見交換を行い、その結果を 10 月に刊行された論文集において、"Semantic Composition in Reflexivization" として出版した。この研究と平行する形で、意味的構成性に関する文献に目を通し、研究課題との関連を探った。また、11 月に九州大学で開催された日本英語学会 23 回大会に出席した。

◆教育内容

学部においては、コア科目「中級英語理 Ba」において英語の授業を担当し、「言語学概論」においては、言語文化学科所属の学生を対象に言語学の入門の授業を行い、「英語学概論」及び「英文法演習」においては、英語圏言語文化コース所属の 2 年生を対象に統語論を中心とした英語学の入門の授業を行い、「特別演習（言語研究方法論）I」及び「特別演習（言語研究方法論）II」においては、同コースの 3 年生を対象に統語論の中級レベルの授業を行い、「特別演習（言語資料分析）II」においては、卒論作成中の学生に対する専門分野の指導を行った。大学院においては、「英語学特論（統語論・意味論）」において、比較的最近の統語論・意味論に関する文献をいくつか取り上げ、詳細な検討を行った。また、英語圏言語文化コース所属の 3 年生を対象に、9 月と 11 月から 3 月の 2 回にわたり、統語論の勉強会を主催し、学生の当該分野に関する理解力の強化に努めた。

◆将来の研究計画・研究の展望

現在取り組んでいる研究課題では、再帰代名詞の中心的な性質がほぼ明らかになりつつある。再帰形態素の意味的性質と形態統語的性質との相互作用からほぼ予測できるからである。しかし、再帰代名詞には、談話や視点に依存した用法や強調用法など、周辺的な用法もかなりある。また、言語間の違いについても十分考察を進める必要がある。今後は、これまでに得られた成果を基に、さらに対象とする現象の範囲を拡張していく予定である。

◆受験生等へのメッセージ

私の所属する英語圏言語文化コースでは、英語学と英米文学を専門に学ぶことができます。私は、英語学の授業科目を担当していますが、理論言語学的な立場から、統語論、意味論、形態論などを授業では扱っています。一言で言えば、英語を人間のことばの一つとして捉え、英語を背後から支えている仕組みをできる限り客観的に明らかにしようという取り組みです。（一般的には、「生成文法」と呼ばれています。）英語に限らず、人間のことばには、表面をみただけでは分からないような深い意味を持つ仕組みが潜んでいます。そのような「無意識の知識」を明らかにすることにより、英語とはどのような言語なのか、また、人間のことばにはどのような仕組みが働いているのか、学生の皆さんと一緒に考えていきたいと思っています。このような事柄に興味を持つ方を歓迎いたします。

教員名	野々口 ちとせ (NONOGUCHI Chitose)
所 属	文教育学部言語文化学科日本語教育講座
学 位	修士 (人文科学)
職 名	講師
URL/E-mail	http://jsl2.li.ocha.ac.jp/index.html nonoguchi.chitose@ocha.ac.jp

◆研究キーワード

多言語多文化共生社会 / 日本語教育 / グローバル・リテラシー / 日本語非母語話者 / 日本語母語話者

◆主要業績

総数 (3) 件

・野々口ちとせ「学ぶことがらをどこに見出すかある地域の日本語教室の談話分析から」『共生時代を生きる日本語教育-上野千鶴子先生古稀記念論集-』凡人社 311-325.

・金珍淑・野々口ちとせ「多言語多文化教室における参加者の談話分析・非対称な力関係を示す発話行為を中心に」平成 16 年度科学研究費補助金研究基盤研究 B(2)研究成果中間報告書『多言語多文化社会を切り開く日本語教育と教員養成に関する研究』研究代表者：岡崎眸. 66-80.

・張瑜珊・OHRI Richa・高橋悦子・野々口ちとせ「地域住民による「相互学習」を実現するための教室設計-ある地域の日本語教室における参加者現象問題への対応の過程から見えること-」平成 16 年度科学研究費補助金研究基盤研究 B(2)研究成果中間報告書『多言語多文化社会を切り開く日本語教育と教員養成に関する研究』研究代表者：岡崎眸. 81-96.

◆研究内容

1) 地域の日本語教育に関する研究

教室を形づくる「決まりごと」や、コースデザイン・活動デザインの計画書、教室談話、活動記録などを採集し、その教育実践を分析している。

2) 多言語多文化共生を目指す日本語教育実習を対象とした研究

本学大学院日本語教育コースで実施している教育実習で、アンケート調査を行ったり、談話データを収集したりして、実習生の学びや、参加者の意識変容に関する分析と考察を行っている。

◆教育内容

日本語教員養成における入門期の教育と、留学生に対する日本語教育を担当している。

<日本語教員養成における入門期の教育>

1) 日本語教育学：教材や学習活動の分析を通して、外国語として日本語を学び、使うとはどういうことなのかを考える。また、日本語学習者が直面する心理的・社会的な問題についても検討する。

2) 日本語学：身近な日本語にひそむ力関係や社会・文化との結びつきに注目し、ことばを多角的に分析する力を養う。日本語学の中で社会言語学的な分野を中心に扱い、分析と考察を行う。

<学部留学生に対する日本語教育>

留学生が大学での研究生活を円滑に進めるために必要な日本語教育を行っている。特に、ペアワークやグループワーク、ディスカッションなど仲間とともに行う活動を通して、レジュメを作って発表したり、レポートを作成する力を伸ばすことを目指している。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・日本語非母語話者と日本語母語話者の相互学習
- ・多言語多文化共生を目指す教育実習における実習生の学び

◆受験生等へのメッセージ

日本語教育基礎コースでは、日本語教育に関する基礎知識を学びますが、日本語教員を志望する人だけのコースではありません。グローバル化が進む現代、言語や文化が異なる人々と共に生きる時代に必要な「リテラシー」について考えるコースでもあります。言語や文化や自分の持つ枠組みを振り返り、他の異なる枠組みとぶつかったときに、新たな枠組みをどう創り上げるかを、一緒に考え話し合う授業をつくっていきたいと思っています。

教員名	萩田 真理子 (HAGITA Mariko)
所 属	理学部情報科学科
学 位	2000 年 3 月博士 (理学) 慶應義塾大学
職 名	助教授
URL/E-mail	http://www.ecrypt.eu.org/stream hagita@is.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

暗号理論 / 離散数学 / 暗号乱数 / 誤り訂正符号 / グラフ彩色

◆主要業績

・論文

author= {Makoto Matsumoto, Hagita Mariko, Takuji Nishimura and Mutsuo Saito},
title= {"Mersenne Twister and Fubuki Stream/Block Cipher"},
howpublished = {{eSTREAM}, {ECRYPT} Stream Cipher Project, Report 2005/003},

・論文

author= {Makoto Matsumoto, Mutsuo Saito, Takuji Nishimura and Mariko Hagita},
title= {"Cryptanalysis of CryptMT: Effect of Huge Prime Period and Multiplicative Filter"},
howpublished = {{eSTREAM}, {ECRYPT} Stream Cipher Project, Report 2005/083},

・特許

発明者名 = 萩田 真理子 権利者名 = 学校法人 慶應義塾
発明の名称 = 暗号鍵更新方法 番号 (特許番号) = 特許第 3695526 号
取得日 = 平成 17 年 7 月 8 日

◆研究内容

情報技術の発展に伴い、機密性の高いデータがネットワーク上を流れることが多くなり、数学的に安全性の裏付けられた、より強力な情報セキュリティが必要とされている。

これまでに、離散数学を利用して情報通信のセキュリティを高めるための研究を進め、暗号鍵更新方法や電子署名強化方法や、乱数を用いて既存の暗号化方法を強化し、文書の改ざん防止を行う暗号強化方法、暗号用擬似乱数発生システムを特許出願している。これらの離散数学を用いた情報セキュリティアルゴリズムは、現在使われているアルゴリズムよりも数学的に優れていることが証明でき、情報化社会を支える重要なアルゴリズムとなることが期待できる。現在はこれらのアルゴリズムの性質の良さを定量的に証明し、数学を知らない人でも簡単に使える形にして提供することを目的とした研究を進めている。また、2005 年度に暗号の鍵情報を関数に組み込むだけでなく関数の選択に利用することを特徴とする暗号用擬似乱数発生システムを特許出願し、eSTREAM 標準ストリームサイファの募集に応募している。

◆教育内容

研究室の学生は格子グラフの彩色問題を研究テーマとして、離散数学についての基礎知識を見につけると平行して様々な彩色アルゴリズム及びプログラムを作成し、研究集会等で積極的に発表しています。

この分野では学部生が研究発表を行うことはとても難しいのですが、なるべく扱いやすいテーマを選び早くから発表の場に立ち、しっかり研究をしていることをアピールできるように誘導したいと思っています。

◆Research Pursuits

We propose two stream ciphers based on a non-secure pseudorandom number generator (called the mother generator).

The mother generator is here chosen to be

the Mersenne Twister (MT), a widely used 32-bit integer generator having 19937 bits of internal state and period $2^{19937}-1$.

One proposal is CryptMT, which computes the accumulative product of the output of MT, and use the most significant 8 bits as a secure random numbers. Its period is proved to be $2^{19937}-1$, and it is 1.5-2.0 times faster than the most optimized AES in counter-mode.

The other proposal, named Fubuki, is designed to be usable also as a block cipher.

It prepares nine different kinds of encryption functions (bijections from blocks to blocks), each of which takes a parameter.

Fubuki encrypts a sequence of blocks (= a plain message) by applying these encryption functions iteratedly to each of the blocks. Both the combination of the functions and their parameters are pseudorandomly chosen by using its mother generator MT. The key and the initial value are passed to the initialization scheme of MT.

◆特許

- ・ 周期の長いストリーム暗号 CryptMT
- ・ 安全性の高い暗号 Fubuki
- ・ 数列によるブロック暗号の強化方法
(この特許は出願中です)
- ・ 共有鍵更新方法

◆将来の研究計画・研究の展望

暗号や擬似乱数に代表される数論的アルゴリズムは、世界中の純粋数学及び応用数学の研究機関が興味を持っている分野である。しかしながら、現代の研究は純粋理論なら純粋理論に特化し、実用分野なら実用理論に特化する傾向が強い。また、それらを結びつけるはずの応用数学研究も純粋理論にまで深く切りこむものは少ない。これから「先端的純粋数学理論を実用の視点から眺め研究し、実際に用いられるところまで到達させる」ことを目的とした研究を進めて、離散数学での研究経験を生かして情報社会に貢献して行きたいと考えている。

教員名	長谷川 武弘 (HASEGAWA Takehiro)
所 属	子ども発達教育研究センター
学 位	博士(医学)(2006 東京女子医科大学)
職 名	リサーチフェロー
URL/E-mail	http://www.kodomo.ocha.ac.jp/~ccae/index.html thase@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

障害児保育・教育 / 脳機能計測 / 発達神経心理学 / 障害児コミュニティ支援

◆主要業績

・呉東進 長谷川武弘 近赤外分光法による脳血流、組織酸素代謝の評価 周産期医学 35:1481-1486,2005

◆研究内容

乳幼児期の脳機能の発達の变化について、以下の2つの側面から研究をしている。

1) 新生児、乳児期のクロスモーダルな脳機能に関わる発達の变化の検討。

2) 幼児期のメディア視聴時の脳活動状況の検討

1) は東京女子医科大学乳児行動発達学研究所との共同研究として、生後数日の新生児と生後1ヶ月の乳児が哺乳を行っている最中の脳活動の様子を、多チャンネル近赤外分光分析法を用いて計測した。体動などで計測信号が不安定なものを除き、現在解析を進めている。

2) は科学技術振興機構の研究費を元に、幼児があらゆる種類のメディアを視聴している際の脳活動の様子を、帽子型の多チャンネル脳波計を用いて計測する。現在は幼児の計測の基礎データとなる成人の計測を始めたところである。

◆教育内容

アプリカ寄付講座にて開設の下記の授業を担当した。

「障害児保育教育論Ⅰ・Ⅱ」

近年、保育園、幼稚園現場では、統合保育として障害児が健常児と一緒に活動する機会が増えている。これをうけ、小学校における障害児の教育を参考に「障害」のとらえ方、障害児の保育について考える授業を行った。

「保育実践研究Ⅰ・Ⅱ」

受講生個人が保育・教育に関わるテーマを見つけ、調査研究を進める力を付けることを目的に、特に心理学の研究法を中心に講義、実習を行った。

「保育者の情報学Ⅰ」

保育現場においてもコンピューターの導入は進められており、保育士においてもこれに対応できる技能を身につける必要がある。コンピューターの基本的な操作方法から簡単なポスター作成の実習を行った。

◆将来の研究計画・研究の展望

新生児・乳児期のクロスモーダルな脳機能計測を，新たな課題を設定して進め，ヒトの脳における多感覚情報処理に関する初期の発達的变化を描出していく．

また，障害児のコミュニティ支援について，現在関わっている地域をモデルケースとした新たな支援ネットワーク形成に関する研究を行っていく予定である．

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・音楽と脳機能の関係に関する研究
- ・乳幼児の脳機能，行動発達に関する研究

◆受験生等へのメッセージ

障害児の保育や教育に興味がある方，音楽と脳，乳幼児の脳や行動の発達に興味がある方，ぜひ一緒に研究しましょう．

教員名	服田 昌之 (HATTA Masayuki)
所 属	湾岸生物教育研究センター
学 位	博士 (理学) (1993 京都大学)
職 名	助教授
URL/E-mail	http://marine.bio.ocha.ac.jp mhatta@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

サンゴ / 生物多様性 / 進化発生

◆主要業績

総数 (4) 件

- ・ Hatta M.
An affair in the morning after mass spawning.
Coral Reefs 24: 102 (2005)
- ・ Petersen D., Hatta M., Laterveer M., van Bergen D.
Ex situ transportation of coral larvae for research, conservation, and aquaculture.
Coral Reefs 24: 510-513 (2005)
- ・ Takahashi T., Hatta M., Yum S., Koizumi O., Kobayakawa Y., Gee L., Ohtani M., Fujisawa T., Bode H. R.
Hym-301, a novel peptide, regulates the number of tentacles formed in hydra.
Development 132: 2225-2234 (2005)

◆研究内容

ミドリイシサンゴ幼生の着生変態を左右するバクテリアを海底の基盤上からスクリーニングしたが、新たに活性を有する菌株は単離できなかった。その代わり、ミドリイシサンゴ幼生に対して組織崩壊をもたらす菌株が単離できた。

PCR によって基盤上に混在するバクテリアの組成を識別できるかどうかの検討では、岩盤上から培養したバクテリア群集から抽出した DNA ごとに異なるバンドパターンが検出された。解像度が低いながらも、簡便な方法で識別できる可能性を示すことができた。

変態誘導神経ペプチドによるミドリイシ幼生の変態誘導の過程で、変態中の幼生から二面性を有する物質が分泌されることが見つかった。この物質は、神経ペプチドと同時に作用すると変態の一過的阻害をし、神経ペプチドより遅れて作用すると変態を加速する。変態過程の中に変態阻害も含まれていることを示唆しており、変態の進行が単純ではないことを示している。

◆教育内容

全学科目として、コアクラスター「サイエンティフィック・リテラシー」の企画運営を行うと共にその主要構成科目「サイエンティフィック・リテラシー入門」を担当した。全学科目ではその他に、基礎ゼミ、海洋環境ダイビング実習を担当した。理学部生物学科の専門科目として、発生遺伝学、内分泌学、分子遺伝学実習を担当した。また1年間の卒業研究で2名の指導を行い、特別研究と生物学演習を担当した。大学院科目では、通常科目として進化発生学と進化発生学演習を担当し、教員養成GP「生物教材開発法研究（基礎）生物発生遺伝学コース」を開講した。

◆Research Pursuits

Marine bacteria from underwater substrates were screened for the effectors on settling larvae of the coral *Acropora*. Novel strains having such activities were not identified but several strains were established, that showed the cyto-toxicity to coral larvae.

Assessing methods to detect bacterial compositions on substrates, a PCR-based method gave specific patterns for each DNA specimen suggesting efficiency of this convenient method though low sensitivity.

It was found that substances of Janus-faced activities were secreted during metamorphosis of the coral *Acropora* in response to a neuropeptide. The substances accelerate metamorphosis when act prior to the neuropeptide, and delay metamorphosis when act behind the peptide. The metamorphosis process may include an inhibitory step, and it will be more complex than thought before.

◆Educational Pursuits

I provided the following subjects as liberal arts: “Scientific Literacy, An Introduction” which was the key subject in a Core-Cluster course “Scientific Literacy”, “Basic Seminar” and “Marine Environments and Diving”, and the following subjects as biology majors: “Developmental Genetics”, “Endocrinology”, “Molecular Genetics Laboratory”. The bachelor study and seminar were also held during the whole fiscal year for two undergraduate students. As the subjects in the graduate school, a lecture and an exercise course were offered as regular subjects, and “Developing Teaching Materials in Biology” as a teacher-training course in the frame of the Good Practice.

◆共同研究例

- ・サンゴ種苗生産技術の開発

◆将来の研究計画・研究の展望

サンゴ種苗生産によるサンゴの増殖を起点として、サンゴ礁域の環境修復と保全へと発展させていきたい。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・サンゴ増養殖
- ・サンゴ礁修復

◆受験生等へのメッセージ

地球は水の惑星で、その表面の約 7 割は海である。その中で、日本は約 6000 の島から成る島国であり、古くから海の恵みに支えられた海洋国家であるはずである。では、あなたは海のことをどれだけ理解していますか？ 海を大切にしていますか？ 海の生物を出発点として、持続可能な社会や環境の実現に貢献できるような、人類の知的財産としての研究と、人材の育成を目標にしています。

教員名	馬場 昭次 (Shoji A. Baba)
所 属	人間文化研究科人間環境科学専攻
学 位	理学博士 (1971 東京大学)
職 名	教授
URL/E-mail	http://homepage3.nifty.com/Shoji_Baba/baba@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

cell motility / flagellar movement / ciliary movement / LED strobe / Ca(2+) signaling

◆主要業績

総数 (8) 件

- ・ Christopher D. Wood, Takuya Nishigaki, Toshiaki Furuta, Shoji A. Baba, and Alberto Darszon. (2005). Real-time analysis of the role of Ca(2+) in flagellar movement and motility in single sea urchin sperm. J. Cell Biol. 169, 725-731.
- ・ Kogiku Shiba, Junko Ohmuro, Yoshihiro Mogami, Takuya Nishigaki, Christopher D. Wood, Alberto Darszon, Yoshiro Tatsu, Noboru Yumoto, and Shoji A. Baba. (2005). Sperm-activating peptide induces asymmetric flagellar bending in sea urchin sperm. Zool. Sci. 22, 293-299.
- ・ Kinukawa M, Ohmuro J, Baba SA, Murashige S, Okuno M, Nagata M, Aoki F. (2005). Analysis of Flagellar Bending in Hamster Spermatozoa: Characterization of an Effective Stroke. Biol Reprod. 73, 1269-74.

◆研究内容

イオンチャネルとイオンエキスチェンジャーは精子の様々な生理学的側面において重要である。例えば、運動の活性化と維持、走化性、先体反応などにおいてである。今年度は、K⁺-非依存的 Na⁺/Ca²⁺ エクスチェンジャー(NCX)のホヤ精子における役割を研究した。ユウレイボヤとカタユウレイボヤを実験材料として用い、NCX が精巣で発現していることを逆転写 PCR 方によって示し、精子でも発現していることを免疫化学的手法によって示した。NCX の強力な阻害剤である KBR7943 が精子活性化-誘因因子(SAAF)誘導の運動活性化、運動性および走化性を阻害することを示した。さらに、この阻害剤の鞭毛波形、曲率、鞭毛打頻度、振幅、波長などの精子鞭毛運動のパラメータに対する効果研究した。NCX の効果は2つのはっきり区別できるものとして捉えられた。つまり、低濃度では、対照的な運動を誘導し、高濃度では非対称的運動を誘導する。これらの発見は、NCX が SAAF によって誘導されるホヤ精子の走化性、運動の活性化とその維持の調節において重要な役割を演じていることを示している。

◆教育内容

基礎生物学B、動物生理学、動物生理学実習、動物生理学臨界実習などを通して、「動物の環境への適応とそのしくみ」を巨視的および微視的側面から解き明かした。また、細胞運動の分子機構に関する最新の研究について、アメーバ運動、原核細胞の鞭毛運動、繊毛・鞭毛運動、筋収縮などを対象として、運動装置の超微細構造を含む細胞運動に関する諸構造の研究、運動の力学的側面の解析などを含む生物物理学的手法による研究などについての論文検索、紹介、批判的考察を行った。

◆Research Pursuits

Ion channels and ion exchangers are known to be important participants in various aspects of sperm physiology, e.g. motility activation, chemotaxis, the maintenance of motility and the acrosome reaction in the sperm. In the year of 2005, I studied a role of the K^+ -independent Na^+/Ca^{2+} exchanger (NCX) on ascidian sperm. Reverse-transcriptase PCR reveals that the NCX is expressed in the testis while immunoblotting and immunolocalization demonstrate that the NCX exists on the sperm in the ascidian *Ciona savignyi* and *C. intestinalis*. A potent blocker of the NCX, KBR7943 was found to block sperm-activating and -attracting factor (SAAF)-induced motility activation, sperm motility and sperm chemotaxis. I further analyzed the effects of this blocker on motility parameters such as the flagellar waveform, curvature, beat frequency, amplitude and wavelength of the sperm flagella. Inhibition of the NCX caused two distinct effects: a low concentration of KBR7943 induced symmetric bending, whereas a high concentration of KBR7943 resulted in asymmetric flagellar bending. These findings suggest that the NCX plays important roles in the regulation of SAAF-induced sperm chemotaxis, motility activation and motility maintenance in the ascidian. This study provides new information toward an understanding of Ca^{2+} transport systems in sperm motility and chemotaxis.

◆Educational Pursuits

I reviewed macroscopic and microscopic aspects about the subject “Animal Physiology, adaptation and mechanisms”, giving lectures, Basic Biology B, Animal Physiology and instructions in experimental classes, Experiments in Animal Physiology, Animal Physiology of Marine invertebrates. I also surveyed, introduced and discussed critically about recent researches and published papers in the field of cell motility, ameboid movement, eukaryotic flagellar movement, muscle contraction, ultrastructural studies of motor machinery, mechanics and biological physics and so on.

◆共同研究例

- ・ 東京大学吉田学氏と東京大学青木不学氏とメキシコ自治大学西垣卓也氏となど

◆将来の研究計画・研究の展望

私が世界に先駆けて開発した LED-ストロボ蛍光法によるリアルタイム Ca^{2+} イメージング法を発展させ、細胞の膜電位変動をリアルタイムで計測する手法を開発し、繊毛・鞭毛運動の制御のしくみを解明する。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・ 動画画像解析
- ・ LED-ストロボ蛍光リアルタイムイメージング

教員名	浜口 順子 (HAMAGUCHI Junko)
所 属	生活科学部人間生活学科発達臨床心理学講座
学 位	博士 (人文科学、お茶の水女子大学、2005)
職 名	助教授
URL/E-mail	hamaguti@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

保育 / 実践研究 / 大人性

◆主要業績

総数 (1) 件

・「育ち」という言葉と保育者の経験 幼児の教育 104-10、フレーベル館 (2005) 18-24

◆研究内容

お茶の水女子大学に4月から赴任したため、同大学における保育学関連のカリキュラム、授業内容の構造化、教員養成課程（とくに幼稚園養成課程）の編成について検討、改革案作成をおこなった。また、女性のキャリア、リーダーシップを視野に入れた、本大学独自の、子ども専門家・保育士資格養成に関してプログラムを作成、平成18年以降の特別教育研究費研究に向けて、プロジェクトを企画した。

◆教育内容

【学部】保育学、子ども学、保育史、幼児教育理論、現代子ども思想等の視点から、実践的保育者となるための内容を盛り込んだ授業を目指した。「児童学概論」「保育学」「保育課程論」「人間関係学」など。

【大学院】

保育実践者の思考方法、行動規範、省察的カリキュラム・評価について、現象学的方法、解釈学的方法などの文献をとおして、ディスカッションした。「保育基礎論」「保育方法論」など。

◆将来の研究計画・研究の展望

平成 18 年度以降、特別教育研究費研究「幼保の発達を見通したカリキュラム開発」（平成 21 年度まで）および科研費萌芽研究「次世代育成コミュニティとしての大学における乳幼児保育施設の意義と可能性の探求」（平成 20 年度）を中心に、大学・附属幼稚園・附属保育所の共同的研究体制を組織化して、学生の育成と附属園における保育の質の向上の有機的相互展開を図る。

◆受験生等へのメッセージ

幼稚園・保育所などの先生や親になるためだけに、保育を学ぶものではありません。子どもから、実際の保育現場から学ぶことが、どんな方面で将来活躍するにしても、かならず生きてくるはずです。大人になってから、子どもと遊び、大人になるとはどういうことかと考えることが、現代において特に必要だと思います。

教員名	浜野 隆 (HAMANO Takashi)
所 属	文教育学部人間社会科学科教育科学講座
学 位	教育学修士 (名古屋大学 : 1991 年)
職 名	助教授
URL/E-mail	http://www.li.ocha.ac.jp/hss/edusci/hamano@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

教育開発 / 発展途上国 / 国際協力 / 国際機関 / アジア・アフリカ

◆主要業績

総数 (12) 件

- ・浜野隆「ベトナムの初等教育の費用負担構造：中央－地方関係を中心に」『初等教育の普遍化戦略に関する事例研究』（科学研究費補助金研究成果報告書）pp.64-92
- ・浜野隆「世界銀行の教育政策」日本教育政策学会編『日本教育政策学会年報』第 12 号、pp.83-92
- ・浜野隆「国際開発援助と教育改革」お茶の水女子大学『人間発達研究』第 28 号、pp.5-18

◆研究内容

2005 年度は、主に以下の 2 つの研究課題に取り組んだ。

①ベトナムの初等教育における財政構造

2005 年度は、ベトナムの初等教育財政に関する研究を実施した。ベトナムの初等教育には、地域間格差や階層間格差の問題が厳然と存在する。このような格差を是正していくために重要になるのが、政府による資源の「再配分」である。研究の問題意識は、ベトナムにおいては、上述のような格差を是正するための再配分政策はあるのか、あるとしたらそれはどのようなものか、といった点である。

②世界銀行の教育援助政策

世界銀行は国際的な教育援助において非常に重要な役割を果たしており、発展途上国の教育政策への影響力も大きい。2005 年度は、世界銀行の教育援助政策について包括的なレビューを行った。世界銀行の教育分野への援助は 1963 年に始まり、それ以降増加してきている。特に増加が著しいのは、1990 年代以降である。発表した論文では、世界銀行の教育援助の歴史を 4 つの時期に分けて説明している。

◆教育内容

1. 学部

学部段階における 2005 年度の教育内容としては、以下の様なものがあげられる：①教育開発概論、②教育学特殊講義 1、③教育政策科学演習（教育開発演習）、④社会科教育論、⑤教職概論、⑥教育原論（制度・社会）の「制度」に関する部分（教育行政）。他大学においては国際協力論（武蔵野大学）を担当した。

2. 大学院

大学院の授業においては、学生たち自身の研究テーマの報告、及びそれに関する討論を多く行った。共通文献としては、“Education for Development” や “Diploma Disease (邦題：学歴社会・新しい文明病)” を読んだ。他大学においては、「開発と教育政策・計画」（国際基督教大学大学院）を担当した。

近年、国際協力において教育分野での協力が重視されるようになってきている。教育開発に関する授業においては、途上国の教育の現状、国際機関の役割、日本の協力のあり方などを多くとりあげた。

◆Research Pursuits

(1) The financial structure of primary education in Vietnam
In the primary education in Vietnam, there are problems of regional and family income disparity in terms of promotion to higher grades and completion of primary school. What is important in correcting such disparities is “redistribution” of resources by the government. My main concern is whether or not redistribution policies exist in Vietnam to correct above described disparities. I paid an attention to the structure of educational financing in Vietnam, particularly to the cost-sharing structure of primary education because they are essential to understand the issue mentioned above.

(2) World Bank financing of education

The World Bank plays a very important role in both educational development policy in developing countries. World Bank lending for education, which started in 1963, has been increasing. And, it has increased rapidly since 1990's. In this article, I explained four stages in the history of World Bank lending for education: (1) Lending for education based on manpower planning (1963–1974), (2) Emphasis on primary education based on rate of return analysis, (3) Structural adjustment lending in education (1983–1989), (4) Increasing assistance for basic education after the World Conference on Education for All (after 1990).

◆Educational Pursuits

1. Undergraduate course

Classes given in Ochanomizu University during 2005.4–2006.3 are as follows, (1) Introduction to Educational Development, (2) Advanced Lectures in Educational Science 1, (3) Seminar: Educational Policy (Educational Development), (4) The Theory and Practice of Teaching Social Studies, (5) Introduction to the Teaching Profession, (6) Educational Administration. Also, “International Cooperation Studies” are given in Musashino University.

2. Graduate course

At graduate level, I took much time on discussing students' reports written on their own theme. In the class, I gave some reading assignments: “Education for Development” by Psacharopoulos and Woodhall, “Diploma Disease” by R. Dore. Also, “Development and Educational Policy and Planning (International Christian University)”. In the age of globalization, international cooperation is very important. Recently, education cooperation is one of the most important topics in the field of development assistance studies. In my class (Introduction to Educational Development, Advanced Lectures in Educational Science 1, Seminar: Educational Policy, and graduate course), I gave a lecture on the real situation of education in developing countries, the role of international organization, the challenges of Japan's ODA, education for international understanding, etc.

◆共同研究例

- ・義務教育の機能変容に関する国際比較研究
- ・公私協働とネットワーク化による教育運営支援に関する国際比較研究
- ・幼児教育に関する情報収集と幼児教育モデルの提案

◆将来の研究計画・研究の展望

1. 教育開発、国際教育協力のあり方を依り具体的に検討する。
2. 発展途上国、特にアフリカにおける世界銀行の役割。援助理念・政策と現実との関連
3. ベトナムにおける初等教育および就学前教育の構造の解明。
4. 教師教育に関する国際協力手法の検討。
5. 幼児教育・早期子ども発達 (ECD)分野における国際協力の可能性の検討

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・国際教育協力・教育開発
- ・教育格差に関する研究
- ・比較教育（教育の国際比較研究）

◆受験生等へのメッセージ

グローバル化が進む今日、教育学・教育科学は必ずしも日本の教育のみを対象にするものではなく、つつあります。日本の教育を見る際にも、グローバルな視点が求められつつあります。

私が専門とする「教育開発学」は、まだまだ教育学の中では新しい領域です。「教育開発学」はこれまでに培ってきた教育学の知見を発展途上国など海外の教育改善に活かしていくという、きわめて実践的な学問領域です。日本からの援助や提言が、発展途上国の教育政策や教育内容・教育方法の変容をもたらすこともあります。また、途上国の教育について考えること、途上国に日本の教育経験を伝えていくことは、日本の教育経験を相対化する(振り返る)契機にもなります。世界の人々ともに教育問題を一緒に考えていきたい人におすすめです。

教員名	浜谷 望 (HAMAYA Nozomu)
所 属	人間文化研究科複合領域科学専攻
学 位	理学博士(1981 東京大学)
職 名	教授
URL/E-mail	hamaya@phys.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

高圧科学 / 放射光 X 線回折実験 / 圧力誘起相転移 / 分子性結晶 / 複雑・不規則系

◆主要業績

総数 (3) 件

- ・浜谷望
小谷正博ら編 第 5 版実験化学講座 6 巻 温度・熱, 圧力
第 11 章 2 節 3 項 高圧 X 線回折・分光 435-444 丸善(2005).
- ・浜谷望
分子性結晶 SnI₄ の多彩な高圧構造と相転移
高圧力の科学と技術 15、120-125 (2005).
- ・浜谷望
超高圧力下で中性子散乱実験を
日本中性子学会誌「波紋」 16, 8-11 (2006).

◆研究内容

高圧力下で表れる様々な新奇な相転移の実験的研究が主要テーマである。適切な実験装置を選ぶとそれを顕微鏡を通して目で見ることができる。一例として、高圧水から高圧氷の結晶が成長する様子を添付の写真に示す。

近年はとくにアモルファスや液体状態などの構造不規則系の中で起きる相転移に注目している。このような現象を実験的に調べるには強力な探査プローブが必要である。そのために、研究室に設置されている強力 X 線発生装置の使用に加え、大型実験施設として共用されている放射光 X 線を利用している。

本年度は、高圧下で複雑な相転移を示す四ヨウ化錫についての解説、高圧力 X 線回折・分光実験法を詳述した実験解説書(分担)、ユニークな高圧力中性子散乱実験を解説した論文を発表した。

◆教育内容

大学院博士前期課程の教育
書籍購読 (週 1 回通年) とゼミ (週 1 回通年)
研究テーマは下記の通り。
姜桂善：分子性結晶 BI3 の圧力誘起相転移
越山葉子：ヨウ化錫の圧力誘起アモルファス→アモルファス相転移
鈴木理沙 (外館良衛助教授指導)：新しい酸化物高温超伝導体の合成
学部四年生の教育
輪講 (週 1 回通年) とゼミ (週 1 回通年)
卒業研究テーマは下記の通り。
青木真由：KMnF₃ の高圧 X 線回折実験
松浦文恵：高圧液体の X 線回折実験に向けての準備

◆Research Pursuits

Our principle research objective is to experimentally study various novel phase transitions occurring under high pressure. Such phenomena can be looked by eyes through the microscope.

Attached photograph show the moment when high-pressure ice crystals are growing in the high-pressure water.

In recent years our research interest has been focused on phase transitions in structurally disordered systems such as amorphous and liquids. In order to study such phenomena experimentally the use of very powerful probe is indispensable. We exploit extremely brilliant x-rays emitted from a synchrotron radiation light source as well as a laboratory apparatus capable of generating very intense x-rays.

In this fiscal year we published (1)a review of complex high-pressure phase transitions in SnI₄, (2)an article describing details of experimental techniques of high-pressure x-ray diffraction and spectroscopic measurements, and (3)an article on a unique neutron scattering experiment under high pressure.

◆Educational Pursuits

Education of graduate students in the master's program

Reading text book (weekly for a year) and seminar (weekly for a year)

Research themes

JIANG Guishan: Pressure-induced phase transition in molecular crystal BI₃

KOSHIYAMA Yoko: Pressure-Induced Amorphous-amorphous phase transition in SnI₄

SUZUKI Risa (Associate Prof. TODATE Yoshiei as a principal adviser):

Synthesis of new high-T_c oxide superconductors

Education of undergraduate students

Reading text book (weekly for a year) and seminar (weekly for a year)

Research themes

AOKI Mayu: High-pressure x-ray diffraction study of KMnF₃

MATSUURA Funie: Preparation for x-ray diffraction experiment on high-pressure liquid

◆共同研究例

- ・ 米の多結晶 X 線回折実験（生活科学部香西助教授）
- ・ 四ヨウ化錫の高圧力下の液体－液体相転移の探索（愛媛大理瀧崎教授）

◆将来の研究計画・研究の展望

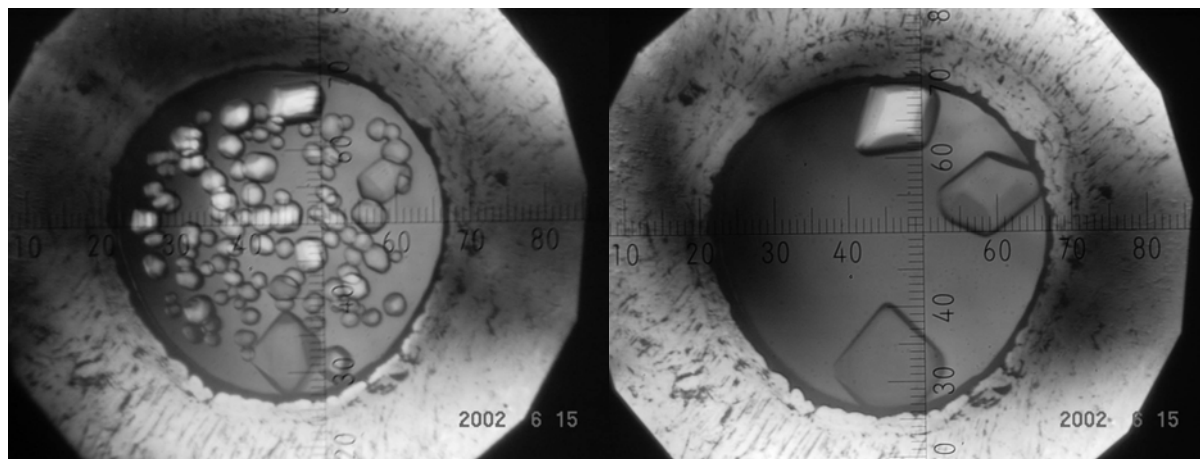
常識の壁を崩した液体－液体相転移はいまだ数例の実験的な検証しかなく、この相転移の普遍性や特性についてはほとんど未知である。「圧力」が重要な外的変数であることに疑いはなく、この複雑・不規則な系の相転移に関する研究をさらに進める。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・ X 線回折実験
- ・ 高圧 X 線回折実験
- ・ 圧力誘起相転移

◆受験生等へのメッセージ

今の受験勉強に明け暮れる高校生活ではなかなか実感するのが難しいかもしれませんが、不思議なことに心ときめかせ、未知の世界に飛び込むことに物怖じしない気持ちを育ててください。



教員名	林 廣子 (HAYASHI Hiroko)
所 属	文教育学部芸術・表現行動学科音楽表現講座
学 位	音楽学士 (1967 東京芸術大学)
職 名	教授
URL/E-mail	hayashi@cc.ocha.ac.jp

◆主要業績

総数 (4) 件

- ・林 廣子リサイタル 王子ホール：2005 年 10 月
- ・アルベリ演奏会〈オペラアリア〉企画・構成・指導 上野旧奏楽堂：2005 年 7 月
- ・日本音楽教育振興協会主催 夏期ヴォイストレーニング研修会 指導 軽井沢：2005 年 8 月

◆研究内容

- 1.アルベリ演奏会〈オペラアリア〉企画・構成・指導
於：上野旧奏楽堂 2005 年 7 月
主宰しているグループ「アルベリ」の〈オペラアリア演奏会〉の企画、構成、指導を行なった。出演者は 21 名。様々なアリアを演奏した。
- 2.日本音楽教育振興協会主催 夏期ヴォイストレーニング研修会 指導
於：軽井沢 2005 年 8 月
研修会において、呼吸法とジラーレの実習指導を行った。
- 3.林 廣子リサイタル(イタリア歌曲・フランス歌曲・日本歌曲・オペラアリア)
於：王子ホール 2005 年 10 月
小坂圭太氏の伴奏による「林 廣子ソプラノリサイタル」を開催。曲目はイタリア歌曲から O.G.パイジェッロ “いとしい人が来る時”、A.スカララッティ “すみれ”、F.D.トスティ “理想の人”、G.スイベッラ “ジロメッタ”、P.マスカーニ “アヴェ・マリア”、E.De クルティス “勿忘草”、F.リスト “3つのペトラルカのソネット”、日本歌曲から畑中良輔 “八木重吉による五つの歌”、フランス歌曲から H.デュパルク “旅への誘い” “悲しき歌”、E.サティ “あなたがほしい” “エンパイヤ劇場のプリマドンナ”、アリアとして C.グノー “ロメオとジュリエット” “私は夢に生きたい”
- 4.アルベリ演奏会〈歌曲〉企画・構成・指導・指揮
於：上野旧奏楽堂 2006 年 3 月
アルベリ歌曲演奏会を企画、構成、指導を行った。出演者は独唱 21 名、コーラス 12 名。曲目は様々な歌曲とお茶大公開講座コーラス受講生メンバーによるコーロ・フィオーリのコーラスで木下牧子「月の角笛」の演奏と指揮を行った。

◆教育内容

学部：声楽 I 演習(4 単位)…声楽基礎、呼吸法、歌唱法の講義及び演奏。前期イタリア歌曲、後期日本歌曲。声楽 II (4 単位)…前期ドイツ歌曲、後期フランス歌曲の研究。声楽 III (4 単位)…ホールにおけるより表現豊かな演奏の研究。声楽 IV (4 単位)…宗教曲を含む古典・ロマン派声楽作品及びホールにおける演奏研究。声楽表現学(4 単位)…ベルカント唱法。イタリア歌曲研究。声楽アンサンブル研究 A,B,C,D(2 単位)…O.ニコライ「ウィンザーの陽気な女房たち」の合唱指導。教職ピアノ(1 単位)…1 コマ 5 人の弾き歌い、ピアノソ曲指導。教職声楽(1 単位)…コールユーブンゲン。独唱曲指導。卒業演奏研究(2 単位)…2 月、川口リリアホールにおいて行われた卒業演奏会出演者 3 名の演奏曲目(10 分のプログラム)の作品研究及び演奏指導。

各学年において以上の作品研究及び演奏実技個人指導を毎週行うと共に「演技をともしうオペラアンサンブルのゼミ演奏会」の出演者 8 名の年 2 回の演奏プログラムの個人指導を行った。他にサークル活動として微音祭に行われる恒例のオペラ、2005 年度は O.ニコライ「ウィンザーの陽気な女房たち」出演者全員の全曲声楽指導を行った。

大学院：

前期課程；声楽表現演習(4 単位)…イタリアのベルカントによるオペラアリアを中心とした声楽楽曲について、その演奏表現を音楽的側面と身体的側面をも考察しながら実践的研究指導を行った。修了演奏(8 単位)…3 月、川口リリアホールにて開催の修了演奏会出演者 2 名の演奏曲目(30 分のプログラム)の作品研究、実技指導を行った。声楽演奏学特論(4 単位)…履修者 2 名が微音堂にて開催したオペラ、モーツァルト「劇場支配人」、ブリテン「電話」の作品研究、声楽実技指導を行った。

後期課程；声楽表現論演習(2 単位)在籍者 2 名の論文研究指導及び声楽実技指導を行った。又その内 1 名は 11 月と 1 月に異なるプログラムによるリサイタルを開催。プログラム曲目(イタリア作品、フランス作品、ドイツ作品、日本作品、韓国作品等)の作品研究と実技指導を行った。

◆将来の研究計画・研究の展望

喉に負担のかからない、なめらかで自然な呼吸による美しい発声の研究をしている。この発声には横隔膜を意識した支え、喉頭の安定と共鳴腔の広さの保持等が重要な要素になると考えられるが、この事を自ら体感・実践し、音響分析等の検証も行いながら、生徒に会得させる事を課題としている。しかしながら、この発声を総合的に会得する事はたやすい事ではなく、段階的に習得出来る方法をいろいろ模索し、検討を行いながら研究している。近年中にこの成果についてまとめたいと思っている。

◆受験生等へのメッセージ

本学、音楽表現のアドミッション・ポリシーに「勉強も実技もきちんとやってみたい、そんな贅沢な悩みを抱えている人にこそ、本コースは開かれています」と書かれています。真に、総合大学の中に存在する音楽科であるという条件を最大限に活かせる勉学意欲旺盛な学生を望んでいます。又、東京藝術大学音楽学部と単位互換の協定が結ばれているので、その事も役立てていただきたいと思います。

その上で声楽に関しては、無理のない発声、国際的に通じる発声と歌唱力を身につけていただきたいと思います。その為に声楽専攻者には3年次より日、独、仏、伊とそれぞれのエキスパートの指導者のもとで作品を学べる体制が生まれ、常時、東京芸大や国立音大の大学院在学学生あるいは卒業した男声の助演の方達を迎えて、実際の演技を伴うオペラ・アンサンブルの授業も開講され、前期と後期に一度ずつ試演会を行っています。そして4年次には演奏専攻者全員で、卒業演奏会を行います。又、毎年秋に開催される学園祭(徽音祭)において、3年次生がオーケストラ伴奏による手作りのオペラを上演します。今年は44回目の公演で、音楽科の伝統になっています。大学院修了者は30分のプログラムの修了演奏会の他にピアノ伴奏によるオペラ公演も行っています。これらの科目・演目をこなすには、かなりのパワーと努力が必要になります。しかしながらこの体験を通して得るものは、音楽以外の職業に就く場合にも大いに役立つものであると実感しています。

教員名	林 正男 (HAYASHI Masao) 別名：白楽ロックビル (はくらく ろっくびる)
所 属	理学部生物学科
学 位	理学博士
職 名	教授
URL/E-mail	http://hayashi.bio.ocha.ac.jp hayashi.masao@ocha.ac.jp

◆研究キーワード

バイオ政治学 / バイオ社会学 / 生化学

◆主要業績

総数 (5) 件

- ・著書 (単著)：『科学研究者になるための 進路ナビ』197 頁、羊土社、東京。
- ・総説 (単著)：「新聞と映画の中のバイオサイエンス―肯定度を科学量論的に評価する―」、遺伝、59 (1) , 50-56.
- ・著書 (共著)：『科学における社会リテラシー 3』(総合研究大学院大学)、執筆部分 195-223 頁。

◆研究内容

最近、科学者や研究者の倫理的問題が多く報道される。例えば、米国ではシェーンによるデータ捏造事件が起こり、医学者のバトラー事件が起こっている。日本でも 2003 年に東大の産婦人科教授の研究費不正事件、2005 年に大阪大学医学部研究者のデータ捏造事件、が報道されている。これら科学者や研究者の問題を科学的に分析するため、科学者や研究者の事件の全体像をつかむことを行った。

また、大衆はメディア (テレビ、新聞、映画、インターネット、雑誌、マンガなど) を通して生命科学の知識を得るが、同時に、事実がどうであれ、生命科学が肯定的に描かれていれば肯定的に思い、否定的に描かれていれば否定的に思う (だろう)。そこで、メディアがどのように生命科学を描いており、われわれがそれをどのように受け取っているかについて、科学的に分析した。

◆教育内容

学部では、科目「分子細胞生物学」で、細胞接着一般論から、細胞接着分子、レセプター、細胞伸展、細胞移動、細胞内情報伝達などを講義した。科目「バイオ社会論」では、先端医療技術・先端バイオ研究を対象に、その生物学的原理、研究動向、倫理問題、法的規制、社会経済との関連をベースに、学生自身が、調査・口頭発表・質疑応答の実践力を養うように指導した。科目「科学技術論」では、バイオ研究者、研究室、科学情報と論文、研究者倫理、海外留学など、バイオ研究者キャリア形成上の問題を講義した。

大学院では、上記の発展した内容の教育をした。また、メディアの中の科学者の描かれ方を研究指導した

◆Research Pursuits

I was studying on many aspects of research integrity of individual scientist, who faced the globalization of research ethics in the traditional culture and custom of Japan. Topics were scientific misconduct (fabrication, falsification, and plagiarism) in writing paper and presenting research results. Managements of research material, research record, grant money, authorship, and conflict of interest were also analyzed and discussed to improve research integrity in Japan.

Public attitude toward biotechnology and health-related scenes in movies influences the development of the biomedical science itself and thereafter of our health- and technology-conscious society. I was studying on a development of a new quantitative indicator to evaluate positive and negative feelings toward such scenes.

◆Educational Pursuits

In the lecture of “molecular cell biology” for undergraduate students, main topics were arranged from cell-adhesion molecules. They were fibronectin, vitronectin, laminin, integrin, cell spreading, cell migration, and cancer metastasis.

In the lecture of “biology and society” for undergraduate students, students were encouraged to present their own research, then discuss and evaluate each others. Topics were all bioethical issues including genetically modified food, animal rights, and genetic diagnosis.

In the lecture of “science, engineering and society” for undergraduate students, real world of real scientists in the life science were explained in order to help their future career plan. Topics were about graduate course, research, laboratory, research paper, research ethics and study abroad.

In the graduate course, seminars for the advanced study in the above topics were flexibly settled.

◆共同研究例

細胞培養系を用いた医薬品の毒性評価

◆将来の研究計画・研究の展望

科学者、とりわけバイオ研究者の倫理問題の調査研究を通し、バイオ研究者社会の健全化を図る。また、世界の大学のバイオ研究組織の実態の調査研究を通し、日本の大学のバイオ研究体制のあり方を提示する。さらに、生物学の研究テーマの実態を調査研究し、将来の生物学のあり方を研究する。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

かつて「ビトロネクチンの精製方法」「角膜上皮創傷治癒用点眼剤」「ビトロネクチンの接着性向上法」「血液型判別方法」などの特許出願をしたが、現在、共同研究・実用化したいテーマは、バイオ科学技術のあり方に関する諸問題である。

◆受験生等へのメッセージ

現代の生物学は大きく変化している。生物学は、何世紀もの間、自然界の生き物の不思議な現象を解明してきた。しかし、現代では、生き物の不思議な現象はほとんどない。また、日本の生物学は、自然界の生き物を研究する「自然」科学というより、人工環境のモデル生物を対象に、単純化された生命現象を研究することが中心になっている。しかも、多額の研究費が必要で、潤沢な政府資金や企業研究費がなければまともな研究の発展は望めない。従って、人間社会や産業界に大きく貢献するバイオテクノロジー分野の発展（医薬品、医療、育種、食品などの開発研究）が望まれるのは当然かもしれない。一方、国民個人としては、日常生活で、先端生殖医療、遺伝子組み換え食品などに直面する。これらを自分の生活に取り入れるかどうかは、個人の生命倫理観の問題になる。人間の生き方は多様で、選択と決定は複雑でやっかいになる。私は、生物学と社会との接点が重要だと認識し、新しい学際的研究分野「バイオ政治学」を開拓している。そういう新しい学際的な学問に共感し、学び、自分で格闘・開拓したい人こそ、私の研究室の門を叩いて欲しい。社会人も歓迎する。

教員名	原井 敬子 (HARAI Keiko)
所 属	人間文化研究科
学 位	理学
職 名	リサーチフェロー
URL/E-mail	

◆主要業績

総数 (1) 件

◆研究内容

無限次元Hilbert空間上には、有限次元空間上で有効なLebesgue測度、Gauss測度は存在しない。Gauss測度は存在しないが、Gauss測度になる前段階のGaussシリンダー測度がある。これは、無限次元Hilbert空間上で大変有効なものである。このGaussシリンダー測度が測度になるための条件として導入されたものが可測ノルムという概念である。その後、一般のシリンダー測度が測度になるとめの必要十分条件として、別の可測ノルムが導入された。この2つの可測ノルムの条件は非常に近いが同値ではない。Gaussシリンダー測度において、この2つの可測ノルムの条件が同値となる。

この従来のGaussシリンダー測度とは異なるもので、Baxendaleによって定義されたものがある。Baxendaleの意味でのGaussシリンダー測度であるが、従来のGaussシリンダー測度ではない2つのシリンダー測度を具体的に構成して、Baxendaleによって定義されたGaussシリンダー測度と従来のGaussシリンダー測度を比較した。この2つのGaussシリンダー測度の一方は分散をもち、他方は分散を持っていない。BaxendaleのGaussシリンダー測度には、Gauss特有の性質を持っていないことが分かった。

◆Research Pursuits

The comparison between Gauss cylindrical measures

By Baxendale and the original one was researched. We concretely construct two cylindrical measures. There are Gauss cylindrical measures in the sense of Baxendale but they are not the original Gauss cylindrical measures. One has a variance, the other does not have a variance.

We compare two Gauss cylindrical measures which are constructed and the canonical Gauss cylindrical measures.

Gauss cylindrical measures in the sense of Baxendale do not have property which the canonical Gauss cylindrical measures have.

◆将来の研究計画・研究の展望

2つの可測ノルムが同値のはならないという反例として、具体的にノルムとシリンダー測度を構成していたが、それらを少し一般化した。まだ、少し条件を加えて一般化しているので、条件を取り除くことができないか、それとも必要十分条件になるのか考えている。

教員名	平岡 公一 (HIRAOKA Koichi)
所 属	文教育学部人間社会科学科応用社会学講座
学 位	社会学修士 (1980 東京大学)
職 名	教授
URL/E-mail	hiraokak@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

社会保障 / 社会政策 / 社会福祉 / 政策評価 / 政策科学

◆主要業績

総数 (6) 件

・平岡公一「社会福祉と介護の制度改革と政策展開」国立社会保障・人口問題研究所編『社会保障制度改革——日本と諸外国の選択』東京大学出版会、287～317 頁、2005 年 12 月。

・Hiraoka, Koichi, "Long-Term Care Insurance in Japan" in Hyunsook Yoon and Jon Hendricks (eds.) Handbook of Asian Aging, Baywood, pp.355-381, 2005.12.

・平岡公一「岐路に立つ日本の介護保険制度」武川正吾・イ・ヘギョン編『福祉レジームの日韓比較——社会保障・ジェンダー・労働市場』東京大学出版会、123～145 頁、2006 年 3 月。

◆研究内容

- 1) 科研費プロジェクト「日本型社会福祉システムの確立・変容過程の実証的研究——国際比較の視点から」のスタート：7 名の研究分担者とともに 3 年計画で実施。日本の社会福祉システムの特徴と、その変容過程を明らかにすることを目指す。
- 2) 介護サービスの政策評価に関する研究：①研究レビューを学会誌に発表。②研究セミナーを開催し、研究交流を図った。③介護・福祉制度の新たな分析枠組みを開発し、80 年代以降の制度改革の背景・経過・結果を分析し、論文として発表。④日韓比較研究の一環として、介護保険をめぐる政策展開を分析し論文を発表。⑤施設入所需要の分析について学会で発表。
- 3) 中高年女性のライフコースに関する研究：2 世紀 COE プログラムによる共同研究。
- 4) 社会保障制度制度の日本的特質に関する研究：韓国の学会で発表するとともに、論文を執筆。
- 5) その他：イギリスの高齢者保健福祉の動向、地域格差に関する意識について学会発表・論文発表。地域福祉計画の研究プロジェクトに参加。プログラム評価に関する教科書を翻訳刊行（監訳）。

◆教育内容

- <学部>
- 社会政策論Ⅰ：社会政策の政策科学的な研究の分析枠組みの概要を講義。
- 社会保障論：比較福祉国家研究の成果をふまえた社会保障・福祉国家の社会学的分析について講義。
- 社会政策論演習Ⅰ：英文の文献の輪読
- 社会政策論演習Ⅱ：社会政策・社会保障に関する特定の政策課題に関するテーマ研究
- 社会学研究指導Ⅰ・Ⅱ、卒業論文：卒業論文指導
- <大学院前期課程>
- 社会福祉論演習：各分野における最新の研究動向を示す論文の検討
- 社会福祉論特論演習：英文の基礎文献の輪読
- <大学院後期課程>
- 演習Ⅰ、演習Ⅱ：個別指導、研究発表と討議
- 教育活動について特筆すべき点は以下の通り。
- 1) social policy and administration 研究の枠組みに沿った体系的な社会政策論の講義は、日本では類例のきわめて少ない独自性のある取り組みと考えられる。
 - 2) 「社会政策論演習Ⅱ」における特定の政策課題に関するテーマ研究については、特に受講者の関心が高く、積極的な学習姿勢が目立った。

◆Research Pursuits

- 1) Analysis of the Formation and Change in the Japanese System of Social Welfare Services --- a new three-year project supported by The Grants-in-Aid for Scientific Research. This project aims to analyze unique characteristics of the Japanese system of social welfare from international perspectives.
- 2) Policy and Program Evaluation of Long-term Care Services --- a review article in an academic journal; a research seminar on the policy evaluation of the long-term care; a journal article on the reorganization of welfare services; a book chapter on the reform of the Long-term Care Insurance; a conference paper on the demand of the nursing home care.
- 3) Analysis of the life-course of the middle-aged women.
- 4) Development and reform of the social security in Japan.
- 5) Miscellaneous: a paper on eldercare in Britain; a book chapter on the attitudes to geographical inequality; research project on the community social planning; translation of a text on the program evaluation

◆Educational Pursuits

<Undergraduate courses>

Social Policy I: Outline of policy-oriented analysis of social policy
Social Security: Sociological approaches to social security and welfare state.

Social Policy Seminar I: Reading of an English text on social policy

Social Policy Seminar II: Analysis of a specific policy issue on social policy

<MA courses>

Social Welfare Seminar: Review of journal articles for major topics of social policy analysis

Social Welfare Seminar in Specific Topics of Social Policy: Reading on a text of specific topics of social policy.

<Ph.D. Courses>

Seminar I, Seminar II: Supervision of research and discussion

◆将来の研究計画・研究の展望

現在取り組んでいる研究、および今後取り組む予定の研究の主なテーマは以下の通りです。

1. 国際比較の視点にたった日本型社会福祉システムの変容過程の実証的研究
2. 新しい介護サービスのプログラムに関する実践的研究
3. 社会福祉・介護分野におけるプログラム評価の手法の開発と教育方法の検討
4. 生活リスクの変容に対応して社会保障改革のあり方と、改革に関わる合意形成の方法の研究

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・新たな介護サービスのプログラムの開発と評価
- ・介護・社会福祉に関する計画立案と評価のための基礎的研究
- ・海外の介護・社会福祉の先進事例の検討

◆受験生等へのメッセージ

他の国立大学にはあまりみられない本学の特色の一つとして、①家族に関する専門的研究を行っている社会学・心理学・経済学・法学等の研究者が揃っていて、「誕生から死」までの各ライフステージに即した研究と教育が行われていること、②年金・雇用・医療保障・社会福祉・介護を専門に研究している研究者が揃っていてこの分野の研究・教育が充実していることをあげることができます。このようなテーマを専門に勉強・研究したいと考えている受験生（学部、博士前期課程、博士後期課程の各レベル）のかたは、ホームページ等で授業科目や教員の専門分野を確認した上で、本学の受験を積極的に検討していただきたいと思います。

教員名	平田 亜古 (HIRATA Ako)
所 属	生活科学部食物栄養学科
学 位	1993 年 3 月 栄養学修士
職 名	助教授
URL/E-mail	http://www.food.ocha.ac.jp/ hirata@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

給食施設 / 品質管理 / 食事サービス

◆主要業績

総数 (5) 件

・共著

主任研究者 石田裕美 (女子栄養大学)

分担研究者 平田亜古

「特定給食施設等における栄養管理の実施状況とその基準に関する研究」

平成 17 年度厚生労働科学研究費補助金がん予防等健康科学総合研究事業 特定給食施設における栄養管理の実施状況とその基準に関する研究

・「わかりやすい給食・栄養管理の手引き」

新日本法規出版 (株)

編集 栄養法規研究会 代表 石田裕美

執筆者 赤枝いつみ 平田亜古 他 24 名

「特定給食施設とは、特定給食施設における栄養管理基準は、特定給食施設において給食の栄養報告をする時の手続きは、特定給食施設における食事の献立は、特定給食施設における情報等の管理は、特定給食施設に対する行政指導は、給食施設の立地条件は、給食施設の区分と標準面積は 他 13 項目」

・共著

鈴木久乃 太田和枝 殿塚婦美子 編著

著者 平田亜古 他

「改訂新版 給食管理」

第 3 部 給食の運営 I. 給食業務の流れ : p59-63 VII. 施設と設備 : p175-211

◆研究内容

[給食施設における栄養管理及び品質管理の研究]

各給食施設では、施設の理念や目的にかなった食事サービスが提供されている。しかし、施設の理念や目的に合わず、栄養的、衛生的、経済的に不十分な品質で食事の提供がなされた場合、利用者の健康を損なったり、治療・回復効果が現れない等、食事サービスを実施している意義や役割がない。そこで、食事サービスの品質管理や保証について研究を行っています。

◆ Research Pursuits

In hospitals, schools, welfare facilities for the elderly and nurseries, suitable meals are provided everyday. However, if these meals are not suitable for customers and do not have high quality nutrition management and sanitation management, they will not make customers healthy. Therefore, it is important that we study quality control and the quality guaranteed system in food service.

教員名	平野 美恵子 (HIRANO Mieko)
所 属	国際教育センター
学 位	人文科学修士 (2005 お茶の水女子大学)
職 名	講師
URL/E-mail	http://www.ocha.ac.jp/introduction/structure/international/hiramie@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

第二言語教育における教師研修 / 接触場面研究 / 多言語多文化教育 / 協働学習 / 異文化教育

◆主要業績

総数 (6) 件

- ・美恵子 (2005) 「多文化混成の日本語教育実習生による反対意見表明の変化 - 母語話者・非母語話者実習生間の異同に着目して - 」『多言語多文化社会を切り開く日本語教育と教員養成に関する研究 2004 年』平成 16 年度 科学研究費補助金研究 基盤研究 B-2 研究成果中間報告書 (研究論文編) 研究代表者 岡崎眸, pp.45-53
- ・平野美恵子 (2006) 「多文化共生指向の日本語教育実習における実習生間の関係性・準備期間 3 ヶ月の話し合い分析 - 」『人文科学研究』2 号, pp.185-200 お茶の水女子大学
- ・平野美恵子 (2006) 「多文化共生指向の日本語教育実習における NS・NNS 実習生間の話し合い分析 - 3 ヶ月間の話し合いを通して構築されたティーチャー・コミュニティの実態 - 」『社会言語科学会第 17 回大会発表論文集』198-201

◆研究内容

多言語多文化社会を担う日本語教育教員養成の可能性と課題を追究するため、言語文化背景が多様な教員による協働の実態や、協働での教壇活動への取り組みが学習者にもたらす効果、そして教員間での協働的内省による自律的教員研修の可能性、等を研究課題として挙げ、研究に取り組んでいる。

これらの課題を実証的に検証するため、本学大学院日本語教育コースで実施されている「多言語・多文化社会を切り開く日本語教員養成」を主な研究のフィールドとし、母語話者実習生・非母語話者実習生間の協働の様相を、インターアクション分析の手法で、縦断的に研究を行った。

◆教育内容

国際交流室の専任教員として、海外留学を希望する学生を対象に、カウンセリング、留学準備の支援、異文化環境に対する助言・指導、などを行った。

さらに、留学に関する学内での情報発信力を高めるため、国際交流室のホームページ及び『海外留学の手引き』を作成した。ホームページは随時更新し、学内における国際交流の情報発信源となるよう努めた。また、留学経験者や留学希望学生の間でのネットワーク構築を行った。

◆Research Pursuits

I explored possibilities of teacher training programs for Japanese as a second language, oriented to multicultural society. The research topics to identify the possibilities were: 1) how multicultural teachers collaborate in a process of developing their own teacher community, 2) what impact the teachers' collaboration gives upon their learners, and 3) what is learnt by the teachers for their professional development through their collaborative reflection as teaching assessment.

A practicum taking a view of multicultural society in Japan, which is annually held at the department of Japanese as a second language, the graduate school of Ochanomizu University, was the research field. By analyzing interactions among multicultural student-teachers, data was longitudinally examined.

◆Educational Pursuits

I provided students interested in studying abroad with advisory service, procedural/ administrative support, and lectures about a cross-cultural environment.

I also created the webpage and handbook for the International Exchange Planning Office, which enhanced the office to release information regarding study abroad. Furthermore, I developed a social network among students who are interested in study abroad and experienced student exchanges.

◆将来の研究計画・研究の展望

- 1) 多言語多文化社会を視野に入れた、非母語話者日本語教員導入の可能性を探る。
- 2) 複数の教員による協働実践の効果に関する理論構築を行う。
- 3) 日本社会のグローバル化にともなう言語生活や異文化受容の変容を日本語教育に反映させる。

◆受験生等へのメッセージ

世界のグローバル化に伴い、海外経験は学生生活に不可欠な要素となりつつある。それと同時に、日本国内での「内なる国際化」が進んでおり、本学でも多くの留学生が学んでいる。様々な背景を持つ人々との交流の機会を多く設け、国際人としての知識と教養を養う環境づくりに尽力したい。

教員名	平野 由紀子 (HIRANO Yukiko)
所 属	人間文化研究科国際日本学専攻
学 位	文学修士 (1970 お茶の水女子大学)
職 名	教授
URL/E-mail	rano@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

日本古典 / 平安文学 / 和歌

◆主要業績

総数 (2) 件

- ・私家集研究のフロンティア―道長と栄花物語 国文学 (学燈社) 50 巻 4 号 pp111-116 (2005 年 4 月)
- ・日本文学と女性―小町をめぐる 日語日文学研究 (韓国日語日文学会) 第 54 輯 pp25-33 (2005 年 8 月)

◆研究内容

国宝「西本願寺本三十六人集」は三十六歌仙と称された小町や貫之など、すぐれた歌人たちの私家集 (家集とも。個人を中心とした歌集) である。その料紙の見事さ、書の美しさは平安文化の頂点を示す。三十六人集の全注釈は未だない。

私家集研究が私の領域である。平安時代、十二世紀以前は、種々様々な私家集が編まれ、その文学史的意義の究明を目的とし三十年以上研究している。

二〇〇五年度は、院生との十年來の輪読の成果「千里集」の全注釈を来年刊行すべく、原稿を整えた。科学研究費基盤研究 (c) の報告書として「五本対照 千里集」を作成した。

また、藤原道長の家集は「御堂関白集」というが、巻末に欠脱があった。冷泉家の本が複製刊行され、はじめて十七首が出現した。その精読によれば、道長、妻倫子、その母穆子との関係について、栄花物語の記述とは全く異なる事実が判明する。

◆教育内容

1) 研究科 (大学院) の科長を二期つとめ、その第四年目にあたる。この間、大学院の演習一つ、学部の演習二つを担当し、講義は非常勤講師に依頼した。

2) 大学院の演習は一四名の受講者がおり、そのうち二名は日本女子大からの聴講生であった。新出の冷泉家蔵「御堂関白集」巻末十七首を各自分担し、精読し、注釈を付し、史実と比較した。新見が多く得られたがそのうちの一つについて発表したのが、「私家集研究のフロンティア」である。

3) 院生のうち二〇〇五年度学会誌に論文投稿したもの二人、また学会発表をしたもの二人、その指導をした。

4) 学部の演習 (イ) 二年生後期の基礎演習、(ロ) 三年生の演習 (中古) は、基本的に注釈のない原典を自力で読み解くための方法を獲得させる目的を持つ。(イ) は少人数クラスとするため同時開講される四つのうちの一つ。(ロ) は (イ) を修めた学生を対象に、平安文学研究に絞る。

◆Research Pursuits

My area of study is private anthologies of Heian waka poems (“shikashu”). A large variety of “shikashu” were compiled in the period before the twelfth century. I have been working on them for more than thirty years, with the aim of understanding their meanings for the literary history of Japan.

I have just finished editing manuscripts, the outcome of group studies for ten years, to publish a book titled A Complete Annotation of the Chisato Collection next year. Also, by carefully perusing the last seventeen waka poems, recently discovered, of the Mido Kanpaku-shu, a collection of Fujiwara Michinaga-related materials, I have identified several facts that differ from the description in the Eiga Monogatari, on one of which I have already published an article.

◆Educational Pursuits

1. Since 2005 was the final year for me as the dean of the graduate school, I taught one graduate seminar and two undergraduate seminars.
2. The graduate seminar was attended by fourteen students, two of whom were from other universities that have agreements for credit exchange with Ochanomizu University. We perused the last seventeen waka poems, recently discovered, of the Reizei-ke version of Mido Kanpaku-shu. Having identified several new facts, I have published an article on one of them.
3. I gave guidance to two of those graduate students whose articles were accepted by academic journals in 2005 and have been printed and two other who read their papers at academic meetings in the same year.
4. My undergraduate seminars has the aim to enable the students to achieve the skills to read Japanese classics basically with no annotation given.

◆共同研究例

- ・異文化の視点にたつ『句題和歌』研究

◆将来の研究計画・研究の展望

私家集研究は、まだ始まったばかりである。伝本の所在の確定は昭和 40 年代以降可能になった。

私家集の中に他の資料にはない第一級の情報が存在することも少なくない。そのような資料としての私家集研究の他に、もう一つ、なぜそのような多様な私家集が九世紀末から十二世紀にかけて多く出現したか、その文学史的意義を究明することが、私の目標である。仮名書きの消息の出現とも深く関係する。また勅撰和歌集からは見えない贈答歌の表現性の研究とその成果は、従来の物語や日記研究に影響を与えずにはいない。

教員名	広橋 教貴 (HIROHASHI Noritaka)
所 属	人間文化研究科特設遺伝カウンセリング
学 位	理学博士
職 名	講師
URL／E-mail	nhiro@cc.ocha.ac.jp

◆共同研究例

- ・ 生理活性糖鎖の構造解析とその生理機能

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・ 動物の受精
- ・ 細胞内分子の可視化とイメージング解析
- ・ 糖鎖生物学

教員名	福田 豊 (Fukuda Yutaka)
所 属	理学部化学科
学 位	1966.3. 学芸学士 取得 1968.3. 理学修士 取得 1974.10. 理学博士 取得
職 名	教授
URL/E-mail	www.sci.ocha.ac.jp/chemHP/fukudaHP/index.htm fukuda@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

サーモクロミズム / ソルバトクロミズム / エレクトロクロミズム /
 フォトクロミズム / ピエゾクロミズム

◆研究内容

多彩な発色機構を持つ遷移金属化合物の外部刺激による可逆的な色変化を総称して、「クロモトロピズム」と呼ぶ。
 ①サーモクロミズム（温度）、②ソルバトクロミズム（溶媒やその他の化学物質）、③エレクトロクロミズム（電子、酸化－還元）、④フォトクロミズム（光）、⑤ピエゾクロミズム（圧力）に大別される。
 今までに進めてきた主なものは、①～③である。今後その他のクロミズムについても検討していきたい。
 現在は、その実用化の研究も進めている。

◆Research Pursuits

Inorganic materials, especially transition metal complexes, show marvelous colors due to different color-origins(d-d transition, CT transition(ML and LM-CT), Intervalence transition or colored ligand p-p* transition)

◆特許

- ・ 示温材料としての無機化合物の開発
- ・ 偽造防止のために塗料開発

上記特許については、申請中。

◆将来の研究計画・研究の展望

Inorganic Chromotropism の研究―実用化も視点に入れて、今後新規機能性錯体の創製を目指す。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・ 金属錯体の機能性開発に向けた基礎研究
- ・ 刺激応答型金属錯体 (Inorganic Chromotropism)

教員名	藤江康彦 (FUJIE Yasuhiko)
所 属	子ども発達教育研究センター
学 位	博士 (教育学)
職 名	助教授
URL/E-mail	http://www.kodomo.ocha.ac.jp/ / fujie@kodomo.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

教室談話 / 教育実践 / 学習支援

◆主要業績

総数 (11) 件

- ・藤江康彦「第4章教室談話の特徴」、秋田喜代美編著『授業研究と談話分析』、放送大学教育振興会、Pp.51-71.
- ・藤江康彦「第12章 授業における学習評価のあり方と方法」、秋田喜代美編著『授業研究と談話分析』、放送大学教育振興会、Pp. 162 -186.

◆研究内容

小学校から中学校への移行期における、子どもの理数系教科の学習の様相を明らかにする短期縦断研究を行った。対象は首都圏の小5～中2（小学校8校、中学校3校、計約1800名）。研究は、①小中学校での授業観察に基づく**教室談話の生成過程の分析**と②質問紙調査に基づく**理数科系教科の学習動機を高める要因の検討**からなる。①では移行期における子どもの授業参加の様相や教師の指導上の工夫が明らかになるとともに教師への面接からは、小中間での学週間や学習者間の相違や移行期における学習指導上の工夫が明らかになった。②では、算数・数学と理科とは学習動機のあり方が異なり、個別に検討することの必要性が示唆された。また、子どもの学習意識や行動の傾向である学習力は算数・数学との相関が強いが理科との相関が弱いことが明らかになった。

このほかに、文部科学省の研究開発指定を受けた本学附属学校園における校種間連携の研究に従事した。

◆教育内容

学部においては、教職科目「生活科指導論」を担当した。夏季休業中の集中講義であったが、多数の参加者があり、幼児期から小学校低学年に書けての発達特性について講義するとともに、生活科の実践事例の紹介、学生間での生活表現の交流をねらいとしたワークショップ型の活動を行った。また、コア科目として「環境教育論」を附属中学校佐々木和枝副校長とともに担当した。附属中学校での授業実践に向けて、受講者各自がテーマを設定し教材開発を行う過程をコーディネートした。

大学院においては、社会臨床論コースを担当した。「授業臨床論演習」では、附属小学校1年生の観察を行い、授業記録、文字化、分析、考察といった授業研究の一連の流れを実習した。「教育実践心理学演習」では、アクション・リサーチ、コンサルテーションに関する文献を講読し、心理学の立場からの教育実践への関与のあり方について議論した。「学習開発論演習」では、心理学における社会文化的アプローチや活動理論に関連する文献の講読を行った。このほか、修士論文の指導補助、論文審査を務めた。

◆Research Pursuits

We engaged to a short-term longitudinal studies of transition from elementary school to junior high school in mathematics and science class about following topics; 1) relation between classroom discourse and children's cognitive development, 2) relation between children's motivation for a subject matter and learning behavior and attitude.

◆Educational Pursuits

Undergraduate Courses

The Theory and Practice of Life Environment Studies
Environmental Education Studies

Graduate Courses

Graduate Division of Human Development and Social Science

Seminar in Clinical Studies on Teaching and Classroom
Seminar Psychology of Educational Practice
Seminar in Learning and Curriculum Development

◆共同研究例

- ・小学生・中学生における教科に関する認知発達マップに関する研究（ベネッセコーポレーション）
- ・小学生、中学生における自己学習力形成要因の検討（ベネッセコーポレーション）

◆将来の研究計画・研究の展望

今後は、1)理数教科授業における教室談話生成と変容の過程と認知発達との関連、2)小学校から中学校への移行に伴う活動システムの変容が、児童・生徒の理数教科の学習や認知発達に与える影響、を授業観察と質問紙調査により微視的、短期縦断的に明らかにする。教育システム間の移行に伴う児童・生徒の自然科学領域の認知発達の様相を明らかにするとともに、理数科離れの要因の一つと考えられる環境移行に伴う不適応の解消や理数教科学習への動機づけを高める学習環境のデザイン原理の開発に資するだろう。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・組織における個人と集団との相互の関係性形成に向けたコンサルテーションシステムの開発
- ・学校改革を通じた教師の資質向上を可視化するツールの開発

◆受験生等へのメッセージ

幼小連携や小中連携、学力向上などの取り組みに対する支援をおこなっています。フィールドにおいては実際に取り組んでおられる先生方と協働しながら、大学では、教育実践上に関心をもつ学部生や院生の方々と議論しながらすすめていきたいと考えています。

教員名	藤崎 宏子 (FUJISAKI Hiroko)
所 属	生活科学部人間生活学科生活社会科学講座
学 位	文学士(1976 年、東京教育大学)、家政学修士(1978 年、お茶の水女子大学)、社会学博士(1998 年、筑波大学)
職 名	教授
URL/E-mail	http://www.soc.ocha.ac.jp/fujisaki/fujisaki@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

高齢者 / 家族 / 福祉政策 / 社会的ネットワーク / ライフコース

◆主要業績

総数 (2) 件

- ・久塚純一・藤崎宏子・本沢巳代子・犬伏由子，《座談会》高齢期を尊厳を持って生きること・支えること，法律時報 Vol.77No.5，2005 年 5 月，4-20 頁。
- ・平成 14-16 年度科学研究費補助金 基盤研究(B)(1)研究成果報告書，社会学者は誰に何を教えどんな人を創っていくのか（研究代表者：藤崎宏子），2006 年 2 月，第 I 分冊：135 頁，第 II 分冊：147 頁。

◆研究内容

- ①大学における社会学教育のあり方について、平成 14 年度より 3 年間にわたり科学研究費補助金を受けておこなった調査研究の報告書を、研究代表者としてとりまとめた。教育サービスの提供者である社会学者の教育実践や教育観、サービス利用者である学生の社会学教育に対する評価や要望、サービス内容の一端を示す教育プログラムのあり方という 3 つの視点から、社会学教育の現状を反省的に見直し、改善のための提言をおこなった。
- ②お茶の水女子大学 21 世紀 COE プログラム『誕生から死までの人間発達科学』プロジェクト 4 のリーダーとして、中高年期の危機的移行と社会的支援に関する研究を進め、次年度に実施予定の調査準備に取り組んだ。
- ③高齢者介護政策の動向と家族介護の現状の間に生じている諸問題に関する研究を継続的におこなった。

◆教育内容

- ①卒業論文（10 名）、修士論文（1 名）の研究指導、論文指導の主査を務めた。
- ②内地留学中の群馬大学教授の論文指導をし、博士論文の主査を務めた。
- ③国費、私費の留学生 3 名を研究生として受け入れて指導し、2006 年度に、博士前期課程、後期課程に各 1 名が入学した。

◆Research Pursuits

① [Research Project, Grant-in-aid for Scientific Research] Who and What Do Sociologists teach and What Kind of People will be Created? :

The theme of this study is to reflectively review the status of sociological education from three viewpoints: the educational practice and philosophy by sociologists; the evaluation and request toward sociological education by students; and the modality of typical education programs that represent part of the service content.

② [Ochanomizu University 21st Century COE Program] Studies of Human Development from Birth to Death:

As a leader of project 4 in this program, I conducted the study of critical transitions and social support for midlife.

③ I have been studying on discrepancy between elderly care policy and family care.

◆Educational Pursuits

① I served as mentor of 10 undergraduate students, one master's degree student, and supported preparing graduation thesis, master's thesis.

② I accepted professor of Gunma University as a research resident, and served as mentor of her doctoral dissertation.

③ I accepted 3 foreign students as research students, and guided them in their studies. One of them entered master's course, and the other one entered doctoral course, in April 2006.

◆将来の研究計画・研究の展望

① 21世紀 COE プログラムのプロジェクト研究（中高年期の危機的移行と社会的支援に関する研究）は今年度をもって終了するが、このテーマをさらに発展させるために、科学研究費補助金を 2006 年度から 3 年間にわたり受けることができた。中高年期における発達の様態をキャリア間の関係と世代間関係に注目しつつ、継続的に考察していく予定である。

② 高齢者介護政策の動向と家族介護の実態との間に生じている諸問題に関するこれまでの研究を整理し、できれば単行本にまとめたいと考えている。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・ライフコース・パースペクティブにたった中年期の移行と支援に関する研究
- ・ケアに関する質的研究

◆受験生等へのメッセージ

「あたりまえ」の世界に安住しないで疑ってみること、あるいは視点を少しずらして別の面を見ようとする。そんなちょっとした冒険が、あなたの世界を広げ、より豊かなものにしてくれるでしょう。社会学の研究テーマは無限です。研究すること、自分が生活すること、そして生きることそのものが密に絡み合っているところが社会学の魅力であり、同時にしんどさでもあるかもしれません。閉塞感の強い時代ですが、だからこそ、自分について、周囲の人間関係について、そして社会のしくみについて、社会学的思考の武器をもって、深く掘り下げていきましょう。

教員名	藤田 宗和 (FUJITA munekazu)
所 属	生活科学部人間生活学科発達臨床心理学講座
学 位	
職 名	教授
URL/E-mail	mu-fuji@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

犯罪 / 非行 / 心理査定 / 心理テスト / 投映法

◆主要業績

- ・「青少年の非行傾向の要因に関する調査」(最優秀論文), 無藤隆, 藤田宗和, 小保方晶子, 季刊 社会安全, 2005
- ・「心理査定における心理テスト再考」, 藤田宗和, 井原成男, お茶の水女子大学心理臨床相談センター紀要 第7号, 2005
- ・鑑定書「強盗殺人等被告事件(東京地方裁判所平成16年(わ)第354号等)」, 藤田宗和

◆研究内容

投影法であるTAT物語産出の基礎過程を実験的研究し, その産出プロセスを形式的, 内容的に分析し, 分析・解釈のための標準的な資料を収集した。現在, その資料を分析中であり, 今後, 標準的な物語産出プロセス, 物語内容の特色を発表する予定である。

◆教育内容

生活科学部・人間生活学科・発達臨床心理学講座における教育内容: 「人格心理学」, 「発達臨床基礎演習」, 「教育発達講義購読」, 「発達臨床論文演習」等を教授
大学院人間文化研究科・発達社会科学専攻(発達人間科学系)・発達臨床心理学コースにおける教育内容: 「非行臨床心理学特論」, 「臨床心理査定演習(実践)」, 「発達社会科学論」, 「特別研究」等を教授
学部, 大学院とも, 臨床心理学における心理査定を中心に教授している。

◆将来の研究計画・研究の展望

心理テスト，特にT A Tの物語産出の基礎過程を明確化することで，T A Tの物語の標準的な分析法，解釈法を開発し，その妥当性を高め，臨床心理査定分野での投映法の利用価値を高める。

調査研究，また鑑定などの実践活動を通して，現代の犯罪，非行の変化とその背景にある現代日本人の意識の変化との関係を検討し，犯罪，非行の防止に資する資料を提供する。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・投映法の信頼性，妥当性の研究
- ・最近の犯罪，非行少年の意識の変化と現代日本人の意識

◆受験生等へのメッセージ

学部，大学院とも，臨床心理学，特に心理査定の理論と実践を中心に研究，教授しています。また，これらの成果を援用して，特に犯罪，非行領域において，犯罪者や非行少年の主観的な世界を描き出す中で，その原因，背景を解き明かし，彼らの更生を図るための手がかりを探求しています。

具体的には，心理査定において関心のあるものは，T A Tという投映法テストで，その標準的な分析，解釈法を開発することが研究テーマです。また，犯罪の鑑定の実践を通して，最近の犯罪の質的な変化を検討する中で，現代日本人の意識の変化についても関心を広げています。

教員名	富士原 紀絵 (FUJIWARA Kie)
所 属	文教育学部人間社会科学科教育科学講座
学 位	修士 (1995 お茶の水女子大学)
職 名	助教授
URL/E-mail	fuji-k@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

教育課程 / カリキュラム / 教育実践史 / 教育方法 / 新教育

◆主要業績

総数 (4) 件

- ・「1940年代の明石女子師範学校附属小学校・国民学校における総合学習 (3)」お茶の水女子大学『人間発達研究』第28号、2006年3月、pp.35-48
- ・「4. 子どもの学びと育ちに寄り添う創造活動 (4) 創造活動をふり返る」他 平成15・16年度文部科学省「総合的な学習の時間の充実に係る教師用参考教材の開発等に関する委嘱事業」報告書「総合的な学習の時間の年間計画作成等に関する実践研究実施報告書」(代表酒井朗)、pp.91-98、171-175
- ・「第2部第2章第2節 お茶の水女子大学附属小学校の『市民』の実践に関する所感」お茶の水女子大学21世紀COEプログラム 誕生から死までの人間発達科学 プロジェクトⅢ 思想史サブグループ報告書『子どもから成人への移行概念としてのシティズンシップの変容とその思想史的文脈』(代表小玉重夫)、pp.60-65

◆研究内容

戦後初期の小学校のカリキュラム改革に関する研究。1950年代に展開されたコア・カリキュラム運動の先駆けとなる、終戦直後の1945～49年の間に行われた実践研究の特徴について、戦前からの影響の有無も含めて検討を行った。従来のコア・カリキュラムに関する研究は1950年代の実践を対象となされてきたが、本研究は戦前・戦中・戦後との時間的連続性の中で検討することに特徴がある。具体的には、戦前、1930年代にカリキュラム改造に取り組んだことで知られ、さらには1950年代のコア・カリキュラム運動を代表する実践校として知られる明石女子師範学校附属小学校の1940年代の実践研究について、制度としての教育課程との関係性のみならず、教員構成や学校経営、研究指導体制作りといった様々な要因も含めて、同校の戦後のカリキュラム改革を支えた条件の解明を行った。なお、本研究は現在の「総合的な学習の時間」にも示唆を得ることができる。

◆教育内容

学部) 教育課程や教育方法、教職関係科目の授業を担当した。教育課程概論では現代の教育課程や教育方法につながる問題点を意識して、日本の戦前から現在にいたる教育課程の特徴について講義を行った。授業研究演習では現在の日本を代表する教育方法について論じた文献をゼミ形式で購読した。この他、小学校教材研究・国語、社会科教育論、道徳教育の研究といった教職関係の授業を担当し(オムニバス形式も含む)、教育実習の事前・事後指導を担当した。また、小学校や少年院といった実際の教育現場と学生との接触を図るための授業運営や、NPO インターンシップのコーディネートを担当した。

(大学院) 修士課程の「教育実践学」演習・特論では教育評価をテーマにした。前期は日本の教育評価の歴史に関する研究論文を購読し、後期は最近の海外の教育評価に関する文献購読と、現在の日本の学校に導入されている教育評価について検討を行った。カリキュラム研究演習ではアメリカの最近のカリキュラム改革についての文献検討を行った。

◆Research Pursuits

Research on elementary school curriculum reform during the early post-war period. The characteristics of the studies regarding the educational practices during the early post-war period, between 1945 and 1949, preceding the Core Curriculum Movement in the 1950's, were examined, including the influence of the pre-war era. Traditionally, studies concerning the Core Curriculum movement had focused on the implementation of the educational practices during the 1950s; however, my research is characterized by an approach based on the temporal continuity from pre-war, through war-time, to post-war periods. Taking as an example the elementary school attached to Akashi Women's Normal School, known for its prewar efforts in curriculum reform in the 1930s and its leading role in the Core Curriculum movement in the 1950s, its educational practices were examined from the view point of conditions which supported its postwar curriculum reform including elements such as the composition of teachers, the management of the school and the process of implementation and teacher training as well as their correlation to the curriculum as a system. The study should give a useful indication for the present 'Period for Integrated Study'.

◆Educational Pursuits

(For Undergraduate) I taught classes regarding educational curriculum, educational methodology, teacher training and others. In the 'Introduction to educational curriculum' class, I ran a series of lectures regarding the characteristics of the educational curriculum in Japan from the pre-war era up to the present, highlighting the issues which lead to the present educational curriculum and its methods. In the practical teaching exercise class, we read materials regarding typical contemporary Japanese educational methodologies. In addition, I taught classes aimed at teacher training including the teaching material studies for elementary school, educational theories on Japanese language, social studies and moral education (including omnibus format), coordinating and supervising the students on-site teacher training throughout.

(For Postgraduates) In the Theories of educational practices seminar class in postgraduate courses, I took up the theme of educational assessments. In the first term, we read research papers on the history of educational assessment in Japan, while in the second term, we studied materials regarding the latest educational assessment in other countries, as well as educational assessment methods introduced into contemporary Japanese schools. In the curriculum studies seminar class, materials on recent curriculum reform in the USA were read and examined.

◆共同研究例

- ・学校放送番組を活用したインターネット交流サイト運営（日本放送協会）
- ・小学校～高等学校の授業・カリキュラム研究（例：富山大附属小学校）
- ・N I E実践の共同開発研究（例：秋田和洋女子高校）

◆将来の研究計画・研究の展望

1. 日本の戦前・戦後の小学校のカリキュラム改革の歴史的研究の対象を、戦後の中学校に展開させる。この研究は、特に今日、中等教育で問題となっている「総合的な学習の時間」の現場での運営に寄与するものと期待できる。
2. 教師の教育評価観に関する研究を進める。教育評価、教育測定、テストといった方法論は教師の中でどのように認識され、実践にいかされているのかについて、歴史的な研究とともに、現在の教師の意識調査などを行い、授業に反省的に還元される評価方法について検討する。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・小学校～高等学校のカリキュラム開発（特に総合的な学習の時間）研究
- ・小学校～高等学校の授業研究 ・多様なメディアを活用した授業実践研究

◆受験生等へのメッセージ

将来、教職を志望する学生を育てること、あるいは現職の教師の方の実践研究への手助けをすることが自分がこの職に就いた理由です。学校に対する社会の期待は年々大きくなる中で、教師や子どもをめぐる様々な困難が取りざたされています。しかし、教師という仕事は目に見えない子どもの可能性、そしてその子どもらによって創られる未来を生み出す手助けをするという意味において、社会の行く末を左右する重要な仕事であるのみならず、本来、未知のものを扱う創造性豊かな楽しい仕事であると考えます。そうした仕事に進んで携わろうとする、そして現に携わっている人たちの期待や夢、そして直面している困難と一緒に考え学んで行くことを基本的なスタンスとしています。これまで小・中・高等学校の教師と子どもたちと様々な問題と一緒に取り組む中で多くのことを学んできました。研究対象は歴史的な実践ですが、歴史の中に登場する教師からも多くのものを学んでいます。実践に即していれば時空を問いません、学校や教師について一緒に考えてゆきましょう。

教員名	藤原 正彦(FUJIWARA Masahiko)
所 属	理学部数学科
学 位	理学博士(1973 東京大学)
職 名	教授
URL/E-mail	fujiiwara@math.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

数論／楕円曲線／不定方程式

◆主要業績

総数 (4) 件

- ・ Ramanujan の数学, 日本数学会、岩波書店、第 57 巻 第 4 号 pp.1-86, 2005
- ・ 世にも美しい数学入門、筑摩書房、小川洋子氏と共著、2005

◆研究内容

楕円曲線の有理点の研究。とりわけ、 n 分点を付け加えたガロア群の表現について研究しています。具体的な楕円曲線から出発して、ガロア群や表現を計算し、そこから予想を立て、証明するという順で行いました。

◆教育内容

基礎ゼミ 1、基礎ゼミ 2、数学パースペクティブ、解析的整数論入門

基礎ゼミでは、主に明治時代に書かれた文献を学生に読ませました。数学パースペクティブでは、数学に関する哲学的な話、数学史、数学的発見の仕方について話しました。解析的整数論では、入門的事項から始め、平方和の問題にそれを応用しました。

◆Research Pursuits

Rational points on elliptic curves, especially the Galois groups over rational numbers consisting of n division points, and their representations.

Starting from concrete examples, I computed those Galois groups and their representations and then, establishing feasible conjectures.

Many proofs still remain open.

◆Educational Pursuits

Great books 1 and 2, perspectives in mathematics, and analytic number theory.

In perspectives, I explained philosophical questions on mathematics, its history, and how to discover theorems. In analytic number theory, I first introduced basic tools and then applied them to square sum problems.

◆将来の研究計画・研究の展望

現在取り組んでいる問題を発展させること、およびここ十年来取り組んでいる θ -congruent numbers についての諸研究。

◆受験生等へのメッセージ

数学を好きな人、考えることが好きな人、一步一步進む暗闇の牛のような遅く着実な歩みをいとわない人を数学科では望みます。これに美的感受性があれば、申し分ありません。

教員名	藤原 葉子 (FUJIWARA Yoko)
所 属	生活科学部食物栄養学科
学 位	学術博士 (1993 お茶の水女子大学)
職 名	助教授
URL/E-mail	fujiiwara@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

脂質代謝 / 動脈硬化 / 多価不飽和脂肪酸 / 生活習慣病 / メラニン

◆主要業績

総数 (7) 件

- ・高オレイン酸ひまわり油の血中脂質に及ぼす影響
藤原葉子、佐塚あゆみ、堤智恵子、澤田留美、金子和代、安田文、松本晶子、伏見直也、脊山洋右
日本家政学会誌 171-179, 56(3), (2005)
- ・Exploring the effects of polyunsaturated fatty acids on gene expression in human hepatocyte (HepG2 cells) using DNA chip.
Fujiwara Y and Matsumoto A.
“Unrevealing Lipid Metabolism with Microarrays” edited by Alvin S. Berger and Mathew A. Roberts
MARCEL DEKKER, INC (New York) 101-129 (2005)
- ・メラニン生成に及ぼす発酵月桃茶の影響
青木由美、藤原葉子、稲福盛雄、稲福直、藤野哲也、脊山洋右
第 59 回日本栄養・食糧学会大会 平成 17 年 5 月 12-15 要旨集 p 125 東京農業大学

◆研究内容

脂肪の摂取は生活習慣病の原因や発症に重要であり、どのような脂質をどのように摂取するのかは、栄養学的に重要な問題である。特に近年、動脈硬化、高血圧、糖尿病と体内の脂肪細胞の役割が明らかになってきた。これまでに、DNA マイクロアレイを用いて多価不飽和脂肪酸 (PUFA) の遺伝子発現に及ぼす影響の網羅的解析を行ってきた。その結果の PUFA によるこれまでに知られていないいくつかの作用が見つかった。それらについてさらに詳細に検討を進めている。

また、脂肪細胞を用いて、いくつかの食品成分について、脂肪細胞への分化能や生活習慣病に関わるアディポサイトカイン分泌に対する影響も検討している。培養細胞で得られた結果をもとに、動物に投与する *in vivo* レベルの実験も行った。

近年の女性の美白志向から、メラニンの合成を抑制することが期待されている。そこで、紫外線によるメラニン合成促進に関わる分子メカニズムの観点から、これを防御する食品成分を探索している。またその食品を経口で摂取した場合のメラニン沈着抑制作用についても検討してきた。

◆教育内容

学部の授業では代謝栄養学、栄養化学実験、食物科学演習、を担当した。代謝栄養学は管理栄養士教育課程の基礎栄養学にあたり、栄養素の生体内での代謝と各栄養素の役割を、主に生化学的視点から教育するものである。さらに、日本人の食生活を中心とした特徴や最近の新しい栄養学的な話題についても解説した。

学部実験実習はビタミンの定量や酵素の精製と測定などの栄養学を主体とした研究を進める上での基礎的な技術の習得を指導した。4 年生の演習では、最新の英語による学術論文を読み、理解して発表する上での指導を行った。

大学院では 2005 年度は代謝栄養学演習を担当した。

◆共同研究例

- ・サントリー㈱「動物および細胞における脂質代謝に関する研究」
- ・昭和産業㈱「オレインリッチ油のコレステロール低下作用に関する研究」
- ・理研ビタミン「ヒト正常肝細胞における DPA のアラキドン酸変換挙動」

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・植物油脂の栄養と機能評価に関する研究
- ・細胞系を用いたリポタンパク質代謝に関する研究
- ・食品の機能開発と作用メカニズムに関する研究

教員名	古川 はづき (KAWANO-FURUKAWA Hazuki)
所 属	理学部物理学科
学 位	博士 (理学) (1995 東京大学)
職 名	教授
URL/E-mail	http://www.phys.ocha.ac.jp/furukawalab/hazuki@phys.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

強相関電子系 / 超伝導と磁性 / 物性実験 / 低温 / 中性子散乱実験

◆主要業績

総数 (2) 件

- ・ Neutron scattering study of the anisotropic spin fluctuation in Sr_2RuO_4
H. Kawano-Furukawa, M. Urata, T. Nagata, H. Yoshizawa, H. Kadowaki and P. Dai
The Journal of Neutron Research, 13 (2005) 45-48
- ・ Electronically smecticlike liquid-crystal phase in a nearly half-doped manganite
F. Ye, J. A. Fernandez-Baca, P. Dai, J. W. Lynn, H. Kawano-Furukawa, H. Yoshizawa, Y. Tomioka, and Y. Tokura
Phys. Rev. B 72, 212404 (2005)

◆研究内容

中性子散乱法を用いて強相関電子系の研究を行っている。研究対象として近年取り上げた物質は、新奇超伝導 CeCoIn_5 、モット絶縁体、 p 波超伝導 Sr_2RuO_4 と $\text{RENi}_2\text{B}_2\text{C}$ などである。主な成果は以下のようにまとめられる。

＊ $\text{La}_{1-x}\text{Y}_x\text{TiO}_3$ 系の磁気相図－単結晶試料を作成し、中性子回折実験によって、詳細な磁気構造を調べた。

＊ 希土類遷移金属硼炭化物超伝導体の中性子散乱－希土類元素は超伝導や反強磁性といった様々な性質を示す。そこで、以下の 2 つの課題に関して、中性子散乱実験を手段として研究を行った。

～ $\text{TbNi}_2\text{B}_2\text{C}$ の強磁性磁気秩序の起源

～ $\text{YNi}_2\text{B}_2\text{C}$ の磁束格子の磁場－温度相図

◆教育内容

(学 部) 物性物理学序論、物理学基礎実験、物理学特別講義Ⅴ、特別研究

(大学院) 磁性体特論、磁性体特論演習、揺動現象特論 (卒業研究・修士研究指導) 研究室所属の学生各自に 1 つずつ研究テーマを与え個別の研究指導を行っている。これまでの研究課題は研究室の HP に記載している。各人、担当した研究テーマの試料を作成し、X 線構造解析、電気抵抗、磁化測定、中性子散乱等を用いて物性研究を行う。研究の目的の熟知と最適な実験・解析法の議論に徹する時間が長い、その中で「新しい問題への解決法を、自分の手で、いかにうまく切り開くか」といった研究のおもしろさを伝える様心がけている。

◆Research Pursuits

By using neutron scattering technique, we are studying strongly correlated electron systems, mainly CeCoIn₅, Mott insulators (Ti and Mn systems), Sr₂RuO₄ and RENi₂B₂C. Recent activities are summarized as follows:

(1) Studies of Mott-Hubbard insulator (La,Y)TiO₃ system.

This system has been attracted much attentions as a band-with controlled Mott-Hubbard insulator with one 3d electron (t_{2g}^1).

We succeeded in growing single crystals of (La,Y)TiO₃ system, then determined their magnetic structures by using polarized and unpolarized neutron diffraction technique.

(2) Novel intermetallic superconductor RENi₂B₂C.

Depending on RE ions, this system shows variety of superconducting and magnetic phases. Among them, we performed neutron scattering studies on following two attractive topics.

a) Origin of a weak ferromagnetic order in TbNi₂B₂C.

b) H-T phase diagram of Flux line lattice structures in YNi₂B₂C

◆将来の研究計画・研究の展望

ここ10年ほど、超伝導現象と磁性の関わりについて研究を行っています。今、一番、力を注いでいる研究テーマは、CeCoIn₅の磁性と超伝導の関係を明らかにすること、および、この系で実現していると思われる超伝導の磁束状態の一つであるFFLO相を実験的に実証する事です。特に、後者のFFLO相については、40年も前に理論的に予言された現象が実世界で実現している事を実験で実証しようというもので、とてもチャレンジングなテーマです。これまでに培った知識を生かし、可能な限りの集中力で実験の準備を進めています。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・強相関電子系の実験研究
- ・強相関電子系の単結晶試料作成条件の探索

◆受験生等へのメッセージ

将来的な人口の大幅減少を見据え、近年、女性パワーの活用が注目されています。個々の活躍の場を見つけるため、大学生活を充実したものにする事は大切なことです。自分が興味を持てる事を見つけることができる場所、そして、その興味を延ばすことができる場所を見つけましょう。一番、大切なことは、ポジティブ思考で走る事だと思います。

教員名	古瀬 奈津子 (FURUSE Natsuko)
所 属	文教育学部人文科学科比較歴史学講座
学 位	博士 (文学) (1999 東京大学)
職 名	教授
URL/E-mail	furuse@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

天皇制 / 儀式 / 日唐関係史 / 古代から中世へ / 日唐律令制の比較研究

◆主要業績

総数 (6) 件

- ・古瀬奈津子「綸旨の成立」『法制史研究』55号、2006年3月、51-79頁
- ・古瀬奈津子「手紙のやりとり」平川南他編『文字と古代日本4 神仏と文字』吉川弘文館、2005年10月、218-241頁
- ・古瀬奈津子「書儀・書簡よりみた日唐古代官僚制の特質」『お茶の水史学』49号、2005年12月、119-129頁

◆研究内容

日本の歴史を理解するためのキーワードのひとつは天皇制である。日本古代における天皇制の成立と展開について研究している。平成17年度は科研「日本古代における書状の社会的機能に関する研究」の一環として、綸旨の成立について論じた。綸旨は天皇の意を奉じた蔵人が書き記し、蔵人の名によって他者へ差し出した書状形式の文書である。8世紀には天皇の命令は口頭であり、伝達するのは女官であったが、9世紀末から10世紀初めになると蔵人が奏宣機能を担うようになる。その後、日記からみていくと、11世紀初めの後一条天皇の時期に綸旨としての書式が成立することがわかる。文書としての綸旨の初見も後一条朝である。その背景としては政治機構の中世的な家政機関化が想定できる。綸旨の成立は中世的な天皇制システムの始まりを示している。その他、日本古代の書状について、当初は公的な場面で使用される文書として受容されたことを指摘し、また、書状に影響を与えた上表文について検討して、日本の天皇・唐の皇帝と官僚との関係の違いについて考察した。

◆教育内容

学部の日本史概説においては、7世紀から12世紀までの歴史上のトピックとして、学生が関心をもつことができるように、女性の天皇、遣唐使、摂関政治と女房文学について取り上げた。日本史講読においては、律令格式、六国史、木簡、日記、文書など出来るだけ多くの古代・中世の史料にふれることができるようにした。日本古代史料演習では『続日本紀』延暦元年条を読み進め、桓武天皇初期の政治や社会の変化を探った。日本古代中世社会経済史では、書状に焦点をあて、古代における中国の書儀・書状の受容と日本の書状の成立を考察し、書状からみた日本社会の特質について論じた。大学院においては『令集解』と『小右記』を講読し、律令制の基礎とその後の社会的変化について理解を深めた。卒論・修論については発表会と個別指導を併用した。歴史現地調査では岡山県で、備中国分寺や古墳、吉備津神社、鬼ノ城（朝鮮式山城）などを見学し、古代の吉備の位置づけについて考えた。

◆共同研究例

- ・日唐律令比較研究の新段階

◆特許

- ・『唐令拾遺補』の刊行
- ・『御堂関白記全註釈』の刊行
- ・天聖令からみた日唐令の比較研究
- ・中国法制文献の日本への伝来とその伝存状況に関する基礎的研究
- ・平安時代における貴族の日記をめぐる研究

◆将来の研究計画・研究の展望

「日本古代における書状の社会的機能に関する研究」を発展させ、7世紀から12世紀までを通じて、公式令との関係を念頭におきながら、敦煌・吐魯番文書を含めて、中国の書儀・書簡と日本古代の書状との全面的な比較研究を行う。日本においては10世紀に至り初めて中国の書儀に該当する往来物が成立するが、その背後にはどのような社会的変化が存在したのかを考察する。書状研究を通じて、日本の基層社会・文化を探究する。また、新たに中国で発見された天聖令と日本令との比較研究も行いたい。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・日唐律令制および礼制の比較研究
- ・平安時代における社会史的・文化史的研究
- ・日中関係史

◆受験生等へのメッセージ

女子大というと閉ざされたイメージがあるかもしれませんが、お茶の水女子大学の場合それは当てはまりません。サークルだけではなく、ゼミや勉強会を通じて他大学との交流もあります。他大学の単位を取得する制度もあります。お茶大の中だけに閉じこもらずに、積極的に外の世界とのつながりをもつようにしましょう。

ただし、国立女子大学の意義もまたあると思います。現代社会においては、まだ就職や、結婚をし子どもをもった後に仕事を続けようとした場合などに、男女平等とは言えない部分があるのではないのでしょうか。子どもの出生率が下がったままなのは、こうしたことに原因があるのではないのでしょうか。本当の意味において男女がそれぞれの特性をいかして生きていける社会を実現していくために、国立女子大学の意義はまだ大きいと言わざるを得ないと思います。

教員名	古田 悦子 (FURUTA Etsuko)
所 属	ラジオアイソトープ実験センター
学 位	博士 (理学)
職 名	講師
URL/E-mail	furuta@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

低エネルギー β 線の弁別 / 放射性コンシューマプロダクト /
新放射線検出器(β 線最大エネルギー測定) / 放射性核種の弁別 / 安全管理

◆主要業績

総数 (1) 件

・ Identification of pure beta nuclides with very near maximum energies using a GM counter and thin absorbers.

◆研究内容

1. 低エネルギー β 線放出核種の測定:

ライフサイエンス分野において、低エネルギー β 線放出核種が多用されている。最大エネルギーが非常に近い低エネルギー β 線放出核種である ^{14}C と ^{35}S は、主に液体シンチレーションカウンタ (LSC) を用いて測定されている。しかし、LSC では、この 2 核種は、最大エネルギーの差が僅か 11keV であるため、弁別できない。GM 計数管と薄膜吸収体をもった減弱率の測定により、最大エネルギーを求めることなく、この 2 核種の弁別を可能とした。 ^{40}Bq の弁別が、20 分以上の測定により可能であった。

2. 放射性コンシューマプロダクトの線量評価: 私たちの生活環境中には、種々の放射性同位元素を含んだ商品が存在する。これらは放射性コンシューマプロダクト (RCP) と呼ばれ、①意図的に放射性同位元素を添加し、放射線を利用しているもの、②天然放射性同位元素を利用したもの、③使用した材料に、偶然天然放射性同位元素が比較的多量に含まれているものの 3 種類に分類できる。RCP は、リスクを上回るベネフィットがなければその存在は認められるべきではない。さらに、いずれの商品からも、規制値を超える被ばく線量があってはならない。一部 RCP は、その存在意義が怪しいものもあり、1RCP 毎に被ばく線量の評価が必要である。最新の評価は、脱臭剤について行った。靴の中敷の一部に生産者の被ばく線量が多くなると考えられるものが存在した。

3. 新型検出器の開発と応用

4. 放射線安全管理に関わる測定改善

◆教育内容

放射線障害防止法に定められた放射線業務従事者のための教育訓練講習: 放射線障害防止法に定められた、新規放射線業務従事者のための法定 6 時間の新規教育訓練 2 回、および継続放射線業務従事者のための再教育訓練 1 回を担当。新規教育訓練は、最低限の知識定着を目的とした、試験、解説を行っている。(2005 年度は、定期講義の担当はなかった。)

◆Research Pursuits

Pure beta emitting nuclides are used as tracers in a life science field. Liquid scintillation counters (LSCs) are used usually to measure the low energy beta-ray emitters such as ^{14}C and ^{35}S . It is difficult to identify the nuclide as ^{14}C and ^{35}S in unknown samples by using LSCs, because the maximum energy difference between ^{14}C and ^{35}S is as small as 11 keV. Discrimination between ^{14}C and ^{35}S was realized by using a GM counter and thin absorbers without determining the maximum ranges of beta-rays. Differentiating ^{14}C from ^{35}S having activity of 40 Bq can be carried out by making 20 min or longer measurements.

◆Educational Pursuits

Those who handle radiation generating equipment or radioisotopes mainly in controlled area are called "radiation workers" under the Law Concerning Prevention of Radiation Hazards. Education is given to radiation workers to ensure that they have the minimum knowledge. It is decided that new radiation workers take education of six hours and the continuous workers take reeducation once a year by a law. New education training performs an examination and a commentary aimed for minimum knowledge fixation.

◆共同研究例

- ・放射性コンシューマプロダクトの線量評価をトヨタ中央研究所と共同研究
- ・IPを用いた ^3H の測定用保護膜の使用試験を(株) イングと共同研究

◆将来の研究計画・研究の展望

新検出法による汚染検査を確立し、現在汚染検査として多用されているスメア法に存在する不確定要素を削除する。液体シンチレーションカウンターを用いた、不明物質中の簡便な核種同定法の確立。予備実験により、大変良い結果が得られており、論文に出来る予定である。この方法は、放射線の実習教育のあり方を変えるものになると考えられる。

マイナスイオン効果を謳った商品からの被ばく線量の評価を行う。

ホルミシス効果を謳った化粧品などによる被ばく線量評価を行う。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・ β 線最大エネルギーの特定
- ・マイナスイオン効果の検証
- ・ホルミシス効果の検証

◆受験生等へのメッセージ

受験に関係ないがために放射線教育を受けてきた学生は少ないことと思います。しかし、原子力発電所を初めとして、私たちの生活圏内には、多くの放射線源が存在し、危険と隣り合わせになっています。一方、放射線と聞いただけで怖いと感じる人が多く居ますが、医療等、有効な使用方法もあります。さらに、放射線以上に怖いものも多数存在します。放射線を正しく知り、万が一の場合に適切に対処する基礎知識を身につけていただくために「安全管理概論」の講義を行っています。

教員名	古田 啓 (FURUTA Kei)
所 属	文教育学部言語文化学科日本語・日本文学講座
学 位	文学修士 (1983 東京大学)
職 名	助教授
URL/E-mail	kfuruta@cc.ocha.ac.jp

◆主要業績

総数 (1) 件

- ・『口語法』における両立と統一『築島裕博士傘寿記念 国語学論集』2005年10月 pp, 左 17-36

◆研究内容

近代日本における「国語」の成立に関しては、ともすれば政治的的局面ばかりが強調されるが、「標準語」の言語体系そのものについて、明治38年の方言調査、明治43年の国定読本、大正5年の『口語法』を総合的に観察し、略述した。

◆教育内容

「日本語文章表現法」ではレポートの書き方を説明し、実際に書く練習を行なった。

「日本語史特殊研究」では奈良時代から現代までの日本語の変化を概観した。

「日本語史特殊講義」では「国語」の成立と展開を概観した。

◆共同研究例

・1997年に、日本規格協会で、JIS X4062:1998「仮名漢字変換辞書交換形式」を開発し、98年にJIS規格になりました。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・日中韓における漢字訳語の成立と現状
- ・人名用漢字入力システム（構想はあるがパートナーをまださがしていない）

教員名	古谷 希世子 (FURUYA Kiyoko)
所 属	理学部数学科
学 位	博士 (理学)(1991 広島大学)
職 名	助手
URL/E-mail	furuya@math.ocha.ac.jp narita@math.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

ディラック方程式の経路積分の表現、 / シュレディンガー方程式の経路積分の表現、 / 非放物型方程式を適切にする空間の研究

◆主要業績

総数 (6) 件

・国際会議 NACA2005 The Fourth International Conference on Nonlinear Analysis and Convex Analysis
沖縄コンベンションホール 2005 年 6 月 30 日 - 7 月 4 日 Feynman Path integral of Lebesgue type.

・第 31 回 発展方程式研究会：総合研究(A) 2005 年 9 月 1 日 - 3 日

Feynman Path integral of Lebesgue type. (報告集あり)

◆研究内容

1. ディラック方程式の経路積分の表現、シュレディンガー方程式を作用素空間でのファインマンの経路積分により数学的に意味を持つ様にする
ファインマンの経路積分は直感的な定義により物理の世界では市民権を得ているが 数学の立場から見ると厳密な定義が与えられていない積分を定義する為の一次元の測度が存在しないためである空間を激しく振動していることを考慮して無限次元空間 (作要素空間) での”ベクトル測度”を定義する事によりファインマンタイプの経路積分を定義する。
2. シュレディンガー方程式の経路積分の表現、シュレディンガー方程式を作用素空間でのファインマンの経路積分により数学的に意味を持つ様にする
ファインマンの経路積分は直感的な定義により物理の世界では市民権を得ているが 数学の立場から見ると厳密な定義が与えられていない。
積分を定義する為の一次元の測度が存在しないためである空間を激しく振動していることを考慮して無限次元空間 (作要素空間) での”ベクトル測度”を定義する事によりファインマンタイプの経路積分を定義する。

◆教育内容

- (学 部) 数学演習 V
前田ミチエ教授の監督のもと関数解析の演習を行う
- (学 部) 関数解析
前田ミチエ教授の監督下
関数解析は無限次元空間における 作用素解析である。
ヒルベルトの積分方程式の研究に始まり、20 世紀始めその重要性が認識されノイマンによる量子力学の基礎付けに応用されて急速に発展した。この講義では関数解析の基礎的なことを学ぶ。
- (学 部) 偏微分方程式
前田ミチエ教授の監督のもと偏微分方程式の入門的な講義を行う。主に 1 階偏微分方程式と 2 階の定数係数線形偏微分方程式を取り上げる。波動方程式、ポテンシャル方程式、熱方程式などを扱い必要な基礎概念を学ぶ。
- (大学院) 関数方程式特論演習
真島秀行教授の指導のもとに関数方程式特論の演習を行う。

◆Research Pursuits

"The idea of Feynman's integral is a topic of great interest in mathematics and physics.

But rigorous mathematical treatment of this integral is not enough.

We shall define a kind of operator-valued integration and define the path integrals

Reducing matrix-valued functions to scalar functions, we prove path integrals for Dirac equations are represented by an $L(L^2, L^2)$ -valued measure." Heuristic Feynman path integrals have played a remarkable role in various aspects of quantum physics.

But rigorous mathematical treatment of this integral is not enough.

It is well known that Feynman path integrals for Schrodinger equations are not represented by scalar-valued measure.

We shall define a kind of operator-valued integration and define the path integrals

Our class of potentials is wide enough: the real measurable potential should be locally essentially bounded except a closed set of measure zero"

◆Educational Pursuits

A seminar on functional analysis

Functional Analysis

Partial differential equations

A seminar on functional equations

◆受験生等へのメッセージ

10年後、どんな状態でいたいのかを思い浮かべながら自分の頭で考え判断し計画を立て実行に移してください。
今 人気がある、高収入につながる 他人に勧められたと行った理由では 大変なときに 頑張りが効きません。
辛い時には 苦勞したことは 無駄にはならない 何らかの形で 身に付くということを 忘れないでください。

教員名	HAWLEY DIANE EDLA (Diane Hawley NAGATOMO)
所 属	文教育学部言語文化学科応用言語学講座
学 位	Master of Education: TESOL(Teaching English as Second Language) (1991 ニュ ーポート大学)
職 名	助教授
URL/E-mail	

◆研究キーワード

English as a Second Language / Second Language Teaching / Second Language Learning /
Materials Development / Learner Motivation

◆Research Pursuits

I am interested in researching how second language learners can best acquire a language and how teachers can teach a second language most effectively. This research takes several directions. First, I study materials development to find what teaching materials are most effective. In particular, I am investigating how online learning may motivate students and improve their English accuracy and fluency.

In addition to this, I am interested in how teachers develop their teaching philosophy and become good and effective teachers. I am also researching the differences in teaching philosophy between native speaking English teachers and non-native English speaking teachers.

◆Educational Pursuits

Through my teaching I hope to enable students to develop the skills they need to become life-long users of English. They should be able to read both for pleasure (novels, magazine articles, and so on) and for information (textbooks, newspapers, and so on). They should be able to write for a variety of purposes (reports, letters, diaries, business) both accurately and fluently. They will learn how to express themselves in English in a variety of situations and they should be able to listen and understand spoken English in a variety of situations.

◆受験生等へのメッセージ

One of the best ways to prepare for doing well in English is to read as much as you possibly can. Try to read books that are just a little bit more difficult than what you can read, and try to understand the whole of what is written rather than each word and each sentence. Try to guess the meaning of a word through the context of the sentence and through the grammatical placement of the word within the sentence. Reach for your dictionary AFTER you try to understand.

Remember, if you memorize long lists of English vocabulary words you will only remember the list. If you read a lot, you will learn a lot of vocabulary in context. You will also improve your understanding of natural English and you will learn to enjoy English as a language, and not just as a subject.

Good luck!

教員名	堀 佳也子 (HORI Kayako)
所 属	理学部化学科
学 位	理学博士 (1981 大阪大学)
職 名	教授
URL/E-mail	http://www.chem.ocha.ac.jp/~kagaku/Hori-HP/hori-j.html khori@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

分子間相互作用 / 結晶構造 / 液晶

◆主要業績

総数 (3) 件

・ K. Hori, Y. Iwai, M. Yano, R. Orihara-Furukawa, Y. Tominaga, E. Nishibori, M. Takata, M. Sakata, and K. Kato, Bull. Chem. Soc. Jpn., 78, 1223-1229 (2005).

Phase Relationships of Crystalline Polymorphs of Mesogenic 4'-Heptyloxy-4-cyanobiphenyl (7 OCB) and 4'-Octyloxy-4-cyanobiphenyl (8OCB).

・ K. Hori, N. Seo-Hayashi, S. Ueno, S. Watanabe, Mol. Cryst. Liq. Cryst., 437, 311-319 (2005).

Intermolecular Interactions Studied by Crystal Structure Analysis I. Biphenyl-ester Liquid Crystals.

・ K. Hori, M. Kuribayashi-Kimishima, T. Miyashita-Yagi, Mol. Cryst. Liq. Cryst., 438, 1-7 (2005).

Intermolecular Interactions Studied by Crystal Structure Analysis II. Naphthyl-ester Liquid Crystals.

◆研究内容

分子集合体の構造-物性相関：結晶構造に基づく液晶性物質の分子間相互作用の解明

分子構造が少しずつ異なる液晶性物質について、系統的に結晶構造解析を進め、液晶相を規定する分子間相互作用を明らかにしようとしている。その過程で、分子間相互作用の微妙なバランスの帰結である結晶多形を数多く見いだしている。

2005年には、その1例として、パーフルオロアルキル基を有する液晶性物質の結晶相における逐次相転移の解明のために、13-360 Kの温度範囲にわたる断熱型熱量測定と転移点近傍の示差走査熱量形による測定を行った。これは、東工大阿竹教授らとの共同研究である。また、単純な分子構造をもつ新規液晶性物質の合成を試みた。

◆教育内容

学部学生には、物理化学の基礎体系である熱力学の講義を、演習も交えながら行った。丸暗記に頼らず、基礎的な事項から状況に応じて論理展開ができることを目的として、達成度を評価した。

物理化学実験では、同僚教員と共同で、基礎的なテーマを通して、講義で得た知識の復習と有機的な展開、論理的思考、厳密なデータの取り扱い、レポートの書き方などに重点を置いて、個別指導も交えて行った。

卒研、大学院の研究指導では、テーマをいかに主体的に展開していくか、また、将来のライフサイクルを見据えて、日々活動することを習得してほしいとの観点で指導した。

◆Research Pursuits

In order to obtain information concerning the intermolecular interaction of the matter, which controls relationships between structures and properties, we carry out systematic crystal structure analysis on mesogenic compounds and find out many crystalline polymorphs, which result from the delicate balance of intermolecular interactions.

In 2005, successive phase transition behavior of a mesogen with perfluoro-alkyl chain was elucidated by adiabatic calorimetry (13-360 K) and differential scanning calorimetry. The study was carried out as a joint study with Prof. Atake and his coworkers of TTT.

New mesogens with simple molecular constitutions were synthesized.

◆共同研究例

- ・ペルフロロアルキル系液晶性物質の結晶相逐次転移に関する熱的研究
- ・液晶性物質の結晶多形の相転移挙動と熱力学的関係

◆将来の研究計画・研究の展望

基礎的な観点から、構造解析、熱測定、分光法を組み合わせることで総合的に仕事を進めていく。

◆受験生等へのメッセージ

2006年夏、冥王星が惑星から外されたことは、私にとって感慨の深いことでした。小学生の頃、海王星の軌道がケプラーの法則からわずかにずれていることを手がかりに冥王星が発見されたことを知り、自然の神秘と、それを解明する人間の知恵に感動しました。今回、冥王星の相対的な小ささが紹介され、そんな小さい天体が広い宇宙空間で及ぼす力が、ずっと昔にちゃんと認識されたことに改めて感じ入りました。人間の自然認識は時代とともに変わります。そして、「それでも冥王星は回っている」のですね。

自然科学は、自然界の現象の本質を科学的・客観的な手法と問題意識で探ります。化学は、その中でも、さまざまな分野が選択できますし、知力、体力、気力などが総合的に必要ですので、そのどれかに自信のある人、または、そのどれにも特別の自信はないけれども、全体的にまあまあという人は、チャレンジしたらどうでしょう。好きになれば、がんばれます。もちろん、甘くはありませんが。

◆Educational Pursuits

Lectures with exercises on chemical thermodynamics to undergraduate students. The importance of logical development from the basic concepts were especially emphasized.

Experimental physical chemistry with the special emphasis on the organic developments of the knowledges obtained in the lectures, logical thinking, data treatments, and how to write reports.

As research programs for B4 and master students, how to promote the studies with the future perspective throughout their life cycles.

教員名	堀江 充子 (HORIE Mitsuko)
所 属	理学部数学科
学 位	理学修士 (1981 お茶の水女子大学) 理学博士 (1990 東京都立大学)
職 名	助手
URL/E-mail	horie@math.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

中心拡大 / 埋め込み問題 / 類数

◆主要業績

総数 (1) 件

・ The American Mathematical Society からの依頼により Lavallee, Melissa J.; Spearman, Blair K.; Williams, Kenneth S.; Yang, Qiduan dihedral quintic fields with a power basis Math. J. Okayama Univ. 47 (2005), 75--79 の review を執筆

◆研究内容

On Number Knots (Number Knot について),
Proceedings of the 2nd Workshop on Number
Theory (2004) に記載の Theorem 2 に誤りがあった
ので、この場を借りて訂正します。

Theorem 2

Suppose that k is the rational field, k'' is
any quadratic extension of k , and L is any
maximal cyclic 2-extension of k'' which is
unramified over k'' in the narrow sense, so that
 L is a Galois extension over k .

(i) If $K = L$ or if K/k is not a Galois
extension, then $\nu(K) = 1$.

(ii) If K is a proper intermediate field of L/k'' ,
then $\nu(K) \equiv 2 \pmod{2}$.

◆教育内容

前期の「ガロア理論」では4年生を対象として、以下の
内容の講義を行った。

1. 体の正規拡大と分離拡大
2. ガロア群
3. ガロア拡大とガロア閉包
4. 正規部分群と正規拡大
5. ガロア理論の基本定理
6. ガロア理論の応用 (代数学の基本定理、作図問題

等)

後期の「代数学 III」及び「数学演習 III」では群、環、
体の復習から始めて、ガロア理論を理解するために必要
な知識を身につけられる様に次の内容の講義及びその演
習を行った。

1. 環と体の例
2. 環論の一般論
3. 体上の多項式
4. 多項式環と単拡大
5. 群論の一般論、自己同形群
6. 正規列、組成列、可解群

◆Research Pursuits

Let K/k be an extension of algebraic number fields. The number knot of K/k is the factor group of the multiplicative group of nonzero numbers in k which are everywhere local norms from K by the multiplicative group of nonzero numbers in k which are norms from K . In the following, the notation $\backslash\backslash_{\text{nu}}(K/k)$ denotes the number knot of K/k . If K/k is a Galois extension, $\backslash\backslash_{\text{nu}}(K/k)$ is isomorphic to a factor group of the second homology group of the Galois group of K/k with coefficients in the rational integers. Our interests tend to the questions: For towers $L/K/k$ of Galois extensions, which relations are there between $\backslash\backslash_{\text{nu}}(L/k)$ and $\backslash\backslash_{\text{nu}}(K/k)$? What does explain the structure of $\backslash\backslash_{\text{nu}}(K/k)$ when K/k is not a Galois extension? We considered, for example, the case where k is the rational number field, L a maximal unramified cyclic 2-extension over a quadratic field F , and K any intermediate field of L/F . As a consequence, a relation between $\backslash\backslash_{\text{nu}}(L/k)$ and $\backslash\backslash_{\text{nu}}(K/k)$ was given in this case.

◆Educational Pursuits

Galois Theory:

1. Normal and separable extensions
2. The Galois group
3. Galois extensions and Galois closures
4. Normal subgroups and normal extensions
5. The fundamental theorem of Galois theory
6. Applications

◆将来の研究計画・研究の展望

ガロア拡大の number knot に関しては、中心拡大の理論を通して、埋め込み問題と関わりが深いことが知られているが、一般の代数拡大の number knot に対する考察は未だ十分にはなされていないようである。そこで、具体例を局所的、大域的性質を比較しつつ調べることにより、一般の拡大の number knot が埋め込み問題とどのような関わりをもつか、また、それがガロア拡大に至って統合される様子を明らかにしていきたい。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・類数
- ・埋め込み問題
- ・代数体の整数環

◆受験生等へのメッセージ

「数学」というと皆さんはどういうものを想像されるでしょうか？ 数学科を受験しようと思っている人は、受験勉強の中で問題を解きながら「あっ！そうか、わかった！」と思い、それがとても快かったことはありませんか。この気持ちは、数学を続けていく上でとても大切だと思います。問題が難しければ難しいほど、解けたときの喜びは大きいのではないのでしょうか？ でも、より難しい問題を解くためには、それなりの知識や技術が必要かもしれません。私は大学の教育を通して、皆さんが将来、より難しい問題（数学に限ったことではありません！）を解決しようとするときに役に立つかもしれない知識や技術を身につけて、あるいは自分でそれらを開発するための努力ができるようになって頂きたいと思っています。そして、継続して努力を続けるための原動力の一つであり、努力の報賞の一つであるのが「あっ！そうか、わかった！」の快感だと思います。

教員名	本多 恭子 (HONDA Kyoko)
所 属	お茶の水女子大学大学院人間文化研究科
学 位	理学博士
職 名	リサーチフェロー
URL/E-mail	honda.kyoko@ocha.ac.jp

◆研究キーワード

擬リーマン多様体 / 共形平坦 / 等質

◆主要業績

総数 (1) 件

「Three dimensional conformally flat homogeneous Lorentzian manifolds」 (to appear in Journal of Physics A)

◆研究内容

3次元共形平坦等質ローレンツ多様体の分類に取り組んだ。これに先立ち「べき零リッチ作用素をもつ共形平坦擬リーマン多様体とアファイン微分幾何学」についての研究を行った。その研究において、べき零リッチ作用素をもつ3次元共形平坦ローレンツ多様体の構成法は確立しており、等質中心アファイン平面曲線を分類すればよいことがわかっている。2次元一般線形群のリー環の1次元部分空間の分類を行うことによってそれらの分類を得た。また、3次元左不変ローレンツ計量をもつリー群であって共形平坦になるものを分類し、それらの中から3次元共形平坦等質ローレンツ多様体となるものを照合していった。3次元共形平坦等質ローレンツ多様体の分類は、そのリッチ作用素の形に応じて行われる。当初は4種類しか存在しないであろうという見通しに対し、総計6種類存在することがわかった。そのうち3種類はローレンツ多様体特有のものであって、今までのリーマン多様体に対する研究の中では現れてこないものであった。また、その研究過程において、リーマン多様体で等質ならば対称空間になるか左不変ローレンツ計量をもつリー群になるかのどちらかであるのに対し、ローレンツ多様体の場合には、等質であるが対称空間にも左不変ローレンツ計量をもつリー群にもならない例があることが初めてわかった。

◆ Educational Pursuits

We tried to classify the three dimensional conformally flat homogeneous Lorentzian manifolds. Prior to this, we have studied “Conformally flat semi-Riemannian manifolds with nilpotent Ricci operators and affine differential geometry”. In this study, we have established the construction of three dimensional conformally flat homogeneous Lorentzian manifolds with nilpotent Ricci operators and found that for obtaining these manifolds we should classify homogeneous centro-affine plane curves. By classifying one dimensional subspaces of Lie algebra of two dimensional general linear group, we obtained those manifolds. We classified three dimensional conformally flat Lie group with left invariant Lorentzian metrics and among them we verified the existence of three dimensional conformally flat homogeneous Lorentzian manifolds. The classification of three dimensional conformally flat homogeneous Lorentzian manifolds is characterized by their Ricci operators. At first we have expected the four cases of those manifolds, but found that the six cases of the whole. Three cases among them exist only in Lorentzian case and do not appear in Riemannian case which have studied up to the present. While homogeneous Riemannian manifolds are either symmetric spaces or Lie groups with left invariant Lorentzian metrics, the existence of homogeneous Lorentzian manifold which is neither symmetric spaces nor Lie groups with left invariant Lorentzian metrics.

◆ 将来の研究計画・研究の展望

3次元共形平坦等質ローレンツ多様体は分類されたので、4次元の場合、さらには一般次元の場合の分類を試みる。3次元の場合には左不変ローレンツ計量をもつリー群になったものでも、4次元以上の場合には必ずしも左不変リー群にならないことが見込まれている。従来のリーマン多様体の研究の中には現れる事のなかった新しい多様体を、ローレンツ多様体の中に見つけていきたい。

教員名	前田 ミチエ (MAEDA Michie)
所 属	理学部数学科
学 位	理学博士 (東京工業大学)
職 名	教授
URL/E-mail	

◆研究キーワード

可測ノルム / シリンダー測度 / ガウスシリンダー測度

◆研究内容

1980年代から無限次元ヒルベルト空間上における測度論の研究として可測ノルムとシリンダー測度の関係について取り扱ってきたが近年(2003年前後)新しい方向がひらけ2005年度には論文の形では未だ発表されていないが次のような結果が得られている。シリンダー測度というのは通常の測度になる以前の形で加法性は有限加法性のみのものであるがこれが可測ノルムという新しいノルムを導入して完備化することにより空間を変えるとそこでは測度になることが基本的な関係である。この分野は具体例が少なく従来もガウスシリンダー測度以外は筆者による例がその大半をしめていたがここでさらにそれらに新しい例を加え、可測ノルムと類似の性質についても7項目に広げそれらの関係について細かいデータがつくられている途上である。

一方従来のガウスシリンダー測度とは異なるバクセンダーのガウスシリンダー測度の定義に着目して興味深い事実を突き止めた。

◆教育内容

2005年度の教育内容は基礎微分積分学と初等解析学1で他学科(主に物理・化学・生物)に対して微積の基礎を、数学科の3年生に対して積分論と数学演習2でルベーク積分の基礎を教えた。微積の内容については近年数学科の学生においてすら理論の理解は壊滅的であることを念頭に他学科にたいしては実用できることを第一の目的として具体的問題を中心に講義した。しかしながら本来の数学の理論の美しさもぜひ伝えたいと思いながら力及ばなかったしだいである。数学科の積分論においては十数年前の学生が極めてわかりやすく楽しい講義であるという評価をしてくれたのに対し内容を数段やさしくしているにもかかわらず全く理解できないという学生が激増していることを危惧しながら新しい講義内容の検討中である。

◆Research Pursuits

In 1962 Gross introduced the concept of measurable norms, and in 1971 Dudley et al. introduced another measurability of norms. Badrikian and Chevet offered the following question.

"Do these concepts of measurable norms coincide with each other for every cylindrical measures?"

I solved this problem negatively.

This was the first work relative to the connection of measurable norms and cylindrical measures.

Now there are seven conditions that are similar to the above measurable norms. We research them with respect to many examples.

◆将来の研究計画・研究の展望

可測ノルムとシリンダー測度の多くの具体例の関係から普遍的な性質を導く。

バクセンダーのガウスシリンダー測度を解明する。

◆受験生等へのメッセージ

困難を乗り越えて始めて本物に出会えます。大学で本物の数学に出会ってください。

教員名	真島 秀行 (MAJIMA Hideyuki)
所 属	理学部数学科
学 位	理学博士 (1985 東京大学)
職 名	教授
URL/E-mail	http://www.sci.ocha.ac.jp majima@math.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

複素領域における微分方程式論 / 数学教育 / 数学史

◆主要業績

総数 (3) 件

- ・「角についての数学」, 数学通信第 10 巻第 2 号, 日本数学会, 2005. 8., pp.38-52
- ・「西田明則の和算書と東京湾海堡建設」, 日本数学会年会数学基礎論および歴史分科会特別講演, 於中央大学理工学部, 2006 年 3 月
- ・「油分け算の不等式による解法」, 平成 17 年度日本数学教育学会研究部高等学校部会研究報告書:「数学的な活動」を促す教材開発と指導法の工夫—数学 II・数学 B 編—, 日本数学教育学会, 2006 年 3 月, pp18-21

◆研究内容

複素領域における微分方程式に関する研究では、未発表であるが（複合領域科学専攻のアニユアルレポートには書いたが）、エアリー微分方程式という典型例の解の導き方についてひとつの知見を得た。

数学教育における研究としては、引き続き「虹の数学」の教材の完成度と上げつつあるほか、油分け算の不等式と不定方程式を利用した手順に対応した解法を考え出し、その教材化を試みた。

2004 年度に発見した本学附属図書館所蔵の和算資料に基づく数学史的な研究としては、その旧所蔵者西田金吾明則が明治時代、国防のために東京湾海堡建設に当たった人物であることから、海堡建設事業と和算の関連を調査研究している。この研究について日本数学会年会において数学基礎論及び数学史分科会特別講演を依頼され、講演予稿（8 ページ）を執筆し 1 時間講演を行った。

◆教育内容

理学部数学科 3・4 年生向けに、微分方程式論の初歩の講義、4 年生向けに常微分方程式の特異点理論へのコンパクト作用素の理論の応用として指数定理等の講義を行った。

大学院前期課程向けに、微分方程式の特異点の理論について、確定特異性、不確定特異性の特徴付け、不確定度数等について講義し、演習を行った。

学部 4 年の数学講究では、微分方程式論の英語のテキストを読ませて発表させ、質問、演習を通じて理解度を上げた。前期専攻の 1 年生には、複素関数論の英語のテキストを読ませ、質問、演習を通じて理解度を上げた。

前期専攻の 2 年生には、修士論文としての研究課題を与え、そのために必要な知識を本や論文を読ませることによって獲得させ、修士論文の指導に当たった。

博士後期課程の学生には論文指導を行い、投稿させ一編は年度内に掲載されるに至った。

◆特許

- ・数学の役割が感得されるような教材の開発

◆将来の研究計画・研究の展望

1. 複素領域における微分方程式の研究としては、いくつかの系列の超幾何微分方程式系の解の超漸近解析的な性質を明確にしていくことを目標としており、基礎理論部分は本年度中に仕上げたい。2. 数学教育的な研究として、附属高校で実施している「虹の数学」の教材としての完成度を上げ、多くの高校で使ってもらえるような形に整えたい。3. 数学史的な研究としては本学所蔵の西田金吾明則の旧所蔵本の中に今まであまり知られていないものがある。いくつかありそれらを調査し、歴史的な位置づけを明らかにする予定である。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・特殊関数の漸近挙動を使った研究

◆受験生等へのメッセージ

数学は元々人間生活の必要性から発祥し、発展し、人びとの生活を支え続けてきています。物を数えたり、量を測ったり、形を作ったり、空間内の位置を表したりするのに必要な数の概念、図形の概念はもちろんのこと、それらを基礎として、関数の概念が生まれ、それを解析する手段である微分積分学が確立されてきました。そのお蔭で、他の科学、技術とも相俟って、今日、人工衛星を打ち上げることなどが可能となり、より正確な天気予報が可能になったり、衛星放送が見られたり、GPS（全地球測位システム）が開発されナビゲーションができるなど、人びとはその恩恵に浴しています。数学は地味な学問ですが、強力で、その良さを社会の多くの人びとに知っていただきたいと思っています。数学を何らかの意味で人生に役立てていこうという志のある方が、「虹の数学」などを学びに、そしてさらに研究を目指して進学して来てくれることを期待しています。

教員名	増田 優 (MASUDA Masaru)
所 属	ライフワールド・ウオッチセンター
学 位	
職 名	教授
URL/E-mail	

◆研究キーワード

化学物質総合管理学 / 自主管理 / 評価指標 / 社会技術革新学 / 現場基点

◆主要業績

総数 (31) 件

- ・化学物質総合管理、増田優、70-84 頁、地球環境の化学ー役に立つ化学シリーズ9ー、朝倉書店
- ・化学物質管理に係る企業行動に関する評価指標の開発研究、窪田清宏・結城命夫・増田優 他、全 228 頁、科学研究費補助金成果報告書
- ・ナノ材料の総合管理を何を土台に如何なる枠組みで考えるかー化学物質総合管理における国際的論議と経験を踏まえてー、増田優、276-291 頁、「ナノテクノロジーの社会的受容の促進に関する調査研究」科学技術振興調整費成果報告書

◆研究内容

1992 年の国連環境開発会議(UNCED)以来、2002 年の持続可能な発展に関する世界首脳会議(WSSD)においても化学物質総合管理に係る活動の強化が合意され、国内の体制の強化を図ることが、喫緊の課題となっている。

このため、化学物質総合管理において重要な役割を果たす自主管理を促進するための方策について検討を行い、化学物質の管理に係る企業行動を評価する指標体系を開発した。

また、国際的な比較を行いつつ、化学物質のもたらすリスクを科学的知見と科学的方法論に基づいて管理していくのに相応しい国内の法律体系について検証した。

さらに、化学物質総合管理に係わる人材の育成を中心に社会人の再教育に関する調査研究を行うと共に、個別分野の取り組みとしてナノ材料のリスク評価に関する調査研究などを行った。

その他、技術革新と社会変革の関わりについて調査研究を行った。

◆教育内容

UNCED や WSSD の合意においても、キャパシティ・ビルディングが最重要課題のひとつとして掲げられている。

化学物質総合管理のためには、化学物質の特性など自然科学的知識から条約や法律など社会人文科学的知識まで幅広い知見が必要である。レギュラトリー・サイエンス概論の講義を行い、科学的知見および科学的方法論と法律や条約の関わりなどにつて論じた。

また、学生・院生を含む多様な社会人を対象に、化学物質や生物の管理、或いは技術革新と生活や社会の変革の関わりなどに関して、実践的で総合的な学習の機会を提供するために公開講座「化学・生物総合管理の再教育講座」を実施した。化学物質総合管理学や社会技術革新学など5分野について、専門機関や実務機関などから総勢 377 名の講師陣を組織化し、56 科目(112 単位相当: 1 科目当たり 90 分授業 15 回で 2 単位)を開講した。

その結果、20 歳台から 50 歳台までの現役世代を中心に、企業人から教員、公務員までの幅広い分野から総勢 1237 名の受講者の参加を全国から得た。

◆Research Pursuits

Integrated Risk Management of Chemical Substances are a worldwide issue since the formulation of UNCED action plan in 1992. Because of a pressing need to secure enhanced domestic structure when international actions such as treaties on persistent organic pollutants are accelerated, we examined domestic law systems appropriate to manage risks through scientific knowledge and methodology, and strategies to promote self-management by developing index systems to evaluate corporate efforts. Human resource enrichment, nano-material risk evaluations, relationship between technological innovation & social changes were also studied.

◆Educational Pursuits

Capacity building of human resource is stated as the highest priority issue at UNCED & WSSD. To provide a broad range of knowledge from natural, social & cultural science essential to fully understand risk management, lectures on Regulatory Science were given to introduce students to relationship between scientific knowledge & methodology and law & treaties, while 56 extension lectures in 5 fields with 377 lecturers introduced 1237 members of the society including students and graduates to practical and comprehensive studies on managing risk of chemical substances & living organisms, or on relationship between technical innovations & social transformations.

◆共同研究例

- ・化学物質総合管理に係る企業行動に関する評価指標の開発研究
- ・化学物質総合管理学に関する教材の開発
- ・社会技術革新学に関する教材の開発

◆将来の研究計画・研究の展望

- ・化学物質総合管理に関する評価指標を基に企業行動の評価を継続すると共に、評価指標の適用範囲を専門機関などへ拡大する。また、評価指標の金融分野などへの応用展開を図る。
- ・国際的な整合性に配慮しつつ国内の法律体系を検証し、化学物質総合管理を行うのに相応しい法律体系のあり方などについて提言を行う。
- ・現場基点の立場に立って、技術革新と社会の関わりについて、技術の視点、社会の視点、人間の視点から検証する。

◆受験生等へのメッセージ

技術革新は日々加速度を増しながら進展し、社会や生活の変革は激しさを増している。そうした中で、国際社会は大きな変貌を遂げつつあり、化学物質総合管理に関するだけでも過去 10 年間に 3 つを超える条約が締結されるほど急速に、世界的な枠組みの構築が新たに進んでいる。こうした内外の動きを的確に理解し主体的に行動するため、現代社会に相応しい教養(ニュー・リベラル・アート)を身につけることが不可欠である。

しかし現代社会の教養は、基礎的な学問を学ぶだけで身に付くものではない。1980 年代以降の世界の学界における論議を経て、学問そのものが Science for Society や Science for Policy の概念の展開の中で社会との関わりを強く指向している。社会の現場との交流の中で「互学互教」に励み、学問に溺れることなく産学連携を越えた「社会学連携」の視点を持って活動し、大学を大学人のための「知の拠点」から社会と世界のための「知の市場」へと昇華するため、学生・院生の存在は大きく重要な役割を担っている。

教員名	益田 祐一 (MASUDA Yuichi)
所 属	理学部化学科
学 位	理学博士 (1984 名古屋大学)
職 名	教授
URL/E-mail	masuda@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

プロトン移動反応 / 溶媒効果 / 磁気緩和

◆主要業績

総数 (1) 件

・ Y. Masuda and C. Shimizu "Solvent Effect on Intramolecular Electron Transfer Rates of Mixed-Valence Biferrocene Monocation Derivatives" J. Phys. Chem. A, 110, 7019-7029 (2006)

◆研究内容

プロトン移動反応に伴う電荷移動 (P T) は、周囲の環境とつよく相互作用する。特に溶液中における反応障壁の比較的小さい分子内 P T プロセスでは、溶媒和の静的あるいは動的揺らぎが直接そのダイナミックスに参与する。しかしながら、このような系について、P T 速度を直接観測した例は、今のところ見あたらない。本研究では、核磁気緩和に対する、P T 過程による磁氣的相互作用の揺らぎの寄与を抽出し、溶液中で分子内 P T 速度を決定する方法を確立するとともに、2, 3 の OH... O 分子内水素結合系に適用した。また、同様の方法を、NH... H 水素結合系へ拡張し、その分子内 P T 速度を決定した。これらの実験から得られた結果により、これまで行われてきた分子軌道法を中心とする理論計算の結果が、多くの場合、実測値を反映していないことが示されたとともに、この原因として、溶媒との局所的な相互作用の重要性が示唆された。

◆教育内容

<学部>

- ・ 「基本化学実験」：化学科新入生に対して、大学における化学特に実験に関する包括的理解と基本的な実験手法についての教育を行う。化学実験を中心に、高大の補完的な内容も含む。
- ・ 「無機実験」：配位結合の概念を機軸におき、基礎的な無機化学の定性実験を通じ、多様な無機化合物の反応を体系づけて学ぶことをめざす。
- ・ 「基礎無機化学」においては、「無機化学」の範疇を超え、今日的意味での、化学における様々なモデルやその背景についての理解を深めることをめざす。また、「分子分光学」においては、分光学の技術的、知識的側面ではなく、量子化学の实在の分子への適用といった側面から、今日の化学が根ざす理論的な背景の理解に努める。
- ・ その他、各種演習、コアカラスタ (オムニバス) など。

<大学院>

- ・ 液体、溶液に関する講義演習。核磁気共鳴法を中心とする分光法の原理と応用、測定技術に関する教育。

◆Research Pursuits

The charge migration accompanying protontransfer(PT) reactions strongly couples with the environment. Static and dynamic fluctuations of the solvation should contribute the PT dynamics in intramolecular PT processes, which have relatively low reaction barriers in most of the cases. Nevertheless, there is no report of a direct observation the PT rate.

In the present study, an method to determine the PT rates in solutions is presented: extracting the contribution of the fluctuation of magnetic interactions by PT to the magnetic relaxations. The method has been applied to several OH...H and NH...N hydrogenbond systems. The obtained rates were different from those predicted by theoretical and quantum mechanical calculations in many cases. The results were related to contribution of local solute-solvent interactions.

◆Educational Pursuits

<Undergraduate>

- “Basic Chemistry Experiment”: An education for introductive chemical experimental techniques and the comprehension of chemistry at undergraduate level including complementary subjects between undergraduate and high school chemistry.

- “Inorganic Experiment”: An education of the comprehension of basic inorganic chemistry through inorganic qualitative analysis and inorganic synthesis based on coordination chemistry as well as techniques for inorganic synthesis..

- “Basic Inorganic Chemistry”: A lecture for an education of basic concepts and models in (inorganic) chemistry

- “Molecular Spectroscopy”: A lecture for an education of understanding quantum chemistry as well as basic principle of spectroscopies.

<Graduate>

- lectures and seminars accounting for solution chemistry:

Comprehensions of basic concepts and models for solution including applications of various methodologies and their principles.

◆将来の研究計画・研究の展望

プロトン移動速度に対する溶媒効果の検証： 溶媒の特性を鑑み，P T速度の溶媒依存性について系統的な実験を行う。その結果を基に，溶媒との相互作用の大きさ，及び，溶媒和の揺らぎのダイナミックスとP Tダイナミックスの相互作用メカニズムについて検証を行う。これらの結果は，溶液中はもとより，動的静的に揺らぎを持つ媒体中での電荷移動速度についても実証的な予測を可能にすることが期待できる。

◆受験生等へのメッセージ

自然科学の研究を行うことは，ある意味で，演奏家の行為に似ている。モツァルトのある作品を解釈するとともに演奏家の個性と融合させながら，楽器の演奏として表現することは，自然界のある事象について，観察・実験を行いその結果を第三者に認識されうる形で表現することと類似である。このような視点に立てば，学部における様々な勉学は表現手段として，楽器の演奏に係わる様々な技法・技術の習得に相当している部分が多い。しかしながら，演奏家にとってもっとも大切なことは，楽譜から何を感じ取り，また，それが脳髄のフィルターを通して何を表現するか，といった内在的なところである。自然科学を志すものは，感じ取るみずみずしく鋭いセンサーと，センサーからのインプットと自己を融合させる柔軟な心を持ってほしい。

教員名	増永 良文 (MASUNAGA Yoshifumi)
所 属	理学部情報科学科
学 位	工学博士
職 名	教授
URL/E-mail	http://www.db.is.ocha.ac.jp/ masunaga@is.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

データベース / マルチメディア / 仮想世界 / Web コミュニティ / RFID

◆主要業績

総数 (20) 件

- ・ 7. N. Oyama, Y. Masunaga and K. Tachi: A Diachronic Analysis of Gender-Related Web Communities Using a HITS-Bases Mining Tool, Frontiers of WWW Research and Development- APWeb 2006: 8th Asia-Pacific Web Conference, Harbin, China, January 16-18, 2006, LNCS 3841, Springer, pp355-366, January 2006
- ・ 横川明子, 増永良文: “仮想世界データベースシステムにおけるマルチモーダル問合せ実現のための融合文法の導入,” 日本データベース学会 Letters, Vol.4, No.2, pp.93-96, 2005 年 9 月.
- ・ 佐藤有紀子, 増永良文: “3 次元地図を用いた映像データのリアルタイム索引法,” 日本データベース学会 Letters, Vol.4, No.1, pp.53-56, 2005 年 6 月.

◆研究内容

先端データベースシステム
データベース高度応用
Web コミュニティ分析
RFID データベース

◆ Research Pursuits

Advanced Database Systems

Advanced Database Applications

Web Community Analysis

RFID Databases

教員名	松浦 悦子 (MATSUURA Etsuko)
所 属	理学部生物学科
学 位	理学博士 (1982 東京都立大学)
職 名	教授
URL/E-mail	etmatsu@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

ショウジョウバエ / ミトコンドリア / 老化

◆主要業績

総数 (3) 件

- ・ Yoneyama, H., Hara, T., Kato, Y., Yamori, T., Matsuura, E. T. and Koike, K. (2005) Nucleotide sequence variation is frequent in the mitochondrial DNA displacement loop region of individual human tumor cell. Mol. Cancer Res. 3:14-20.
- ・ Yui, R. and Matsuura, E. T. (2005) Detection of deletions flanked by short direct repeats in mitochondrial DNA of aging Drosophila. Mut. Res. 594:155-161.
- ・ Sugihara, K., Yui, R., Ibaragi, Y., and Matsuura, E. T. (2006) Complete nucleotide sequence of the A+T-rich region of Drosophila mauritiana mitochondrial DNA. Genes Genet. Syst. 81:21-28.

◆研究内容

1) ミトコンドリア転写因子 A(TFAM)と老化の関連

ミトコンドリア DNA(mtDNA)の転写因子 TFAM の老化における役割を考察するため, Tfam 遺伝子をショウジョウバエ個体に導入し, 組織および時期特異的な TFAM の過剰発現が個体の寿命やミトコンドリアに及ぼす影響を調べている。

2) ミトコンドリア置換系統の性質

mtDNA が他種に由来するものに置換されているショウジョウバエの系統を利用し, 寿命と mtDNA との関係を考察することを目的として, このような系統のミトコンドリアの電子伝達活性, 個体の活動量の測定を行っている。

3) ショウジョウバエの Sir2-like 遺伝子の機能
Sir2 タンパクは細菌からヒトまで広く保存され, ヒストンの脱アセチル化をはじめ, 寿命に関与していることが示されている。ショウジョウバエにおいて, Sir2 および Sir2-like 遺伝子の機能を明らかにするため, RNAi 法によってその発現を抑制した時の寿命への影響を調べている。

◆教育内容

1) 学部 (基礎)

生物学科の必修科目として「基礎生物学 A」と「基礎遺伝学」を分担で担当している。「基礎生物学 A」では, 遺伝学の基礎として, DNA の性質, 複製, 突然変異などの分子の基礎, 「基礎遺伝学」では, メンデル遺伝学の分子の解釈, 組換えなどを取りあげた。

2) 学部 (専門)

選択科目として「分子遺伝学」と「分子遺伝学実習」を担当している。「分子遺伝学」では, ゲノムの成り立ち, および遺伝子の転写調節を扱った。「分子遺伝学実習」(分担担当)では, DNA 断片のクローニングから塩基配列決定までの一連の実験を行った。

3) 大学院

「分子遺伝学特論」「オルガネラ遺伝学」では, 最新の関連論文の講読, および「Computational Biology」10 章の講読を行った。遺伝カウンセリングコース対象の「特設分子遺伝学特論」(分担担当)では, 「Human Molecular Genetics」8 章および 12 章の講読を行った。

◆Research Pursuits

- 1) Effects of overexpression of Tfam gene in *Drosophila*
TFAM, necessary for transcription initiation of mtDNA, has been recently shown to package mtDNA molecules with non-specific manner. To understand TFAM functions in ageing, the introduced Tfam gene was expressed using the GAL4/UAS system, and the effects of its overexpression on development, longevity, and mitochondrial functions are investigated.
- 2) Characterization of the *Drosophila* strains possessing mtDNA derived from different species

It has been observed that longevity of the strains in which endogenous mtDNA is completely replaced with that derived from foreign species tended to be shortened. To clarify the relationship between mtDNA sequence and longevity, the activity of the respiratory chain and the activity of individuals under constant dark are investigated for such strains.

- 3) Function of Sir2-like genes in *Drosophila*
Sir2 protein functions as an NAD-dependent histone deacetylase and is conserved from archaeobacteria to humans. Sir2 has been recently suggested to be involved in ageing. Sir2 and Sir2-like genes share the core domain that shows high amino acid sequence homology. To clarify their functions in *Drosophila*, whether the fly Sir2 and Sir2-like genes affect life span is investigated by suppressing their expression using RNAi.

◆Educational Pursuits

- 1) Among the required subjects in Department of Biology, parts of “General Biology A” and “Basic Genetics” were assigned. The chemical structure and replication of DNA, molecular mechanisms of mutation, and DNA repair were included in “General Biology A”. Molecular aspects of Mendelian Genetics were included in “Basic Genetics”.
- 2) In “Molecular Genetics”, the structure and the expression of genomes were lectured. In “Laboratory Course of Molecular Genetics”, cloning of DNA fragments and its sequence analysis were carried out.
- 3) In “Advanced Course of Molecular Genetics” and “Organelle Genetics” in Graduate School, recent papers related to the students’ research interests were discussed, in addition to reading Chapter 10 of “Computational Biology”. In “Advanced Course of Molecular Genetics” for the Genetic Counseling Course, Chapters 8 and 12 of “Human Molecular Genetics” were discussed.

◆将来の研究計画・研究の展望

ショウジョウバエの実験系を用いて、ミトコンドリアのもついくつかの機能、伝達様式、ミトコンドリアゲノムなどに関する解析をさらに進め、ミトコンドリアの細胞内共生の成立という観点にも立って考察を行う。

教員名	松浦 秀治 (MATSUURA Shuji)
所 属	生活科学部人間・環境科学科
学 位	理学博士 (1982 東京大学)
職 名	教授
URL/E-mail	http://www.eng.ocha.ac.jp/anthropol/index.htm matsura.shuji@ocha.ac.jp

◆研究キーワード

人類の起源と進化 / 化石骨 / 年代測定 / 日本の旧石器時代人 / ジャワ原人

◆主要業績

総数 (3) 件

- ・ Dating of the Hamakita human remains from Japan
- ・ 帝釈観音堂洞窟遺跡出土哺乳動物骨の多元素分析 ― 古人類化石の出土層準・年代判定に関する基礎的研究 ―
- ・ 生命の進化と社会の進化 ― 人類進化学、古人類学、先史科学の立場からみたヒトの誕生

◆研究内容

＜主要研究テーマ＞ 1. 人類の起源と進化：特にその年代論、年代・環境的背景
2. 化石骨の年代測定・判定学
3. ジャワ原人や日本の旧石器時代人類の編年および変遷史

＜研究目的＞

大きな目的は「ヒトとはどういう生物か」を知ることである。それには多面的・多角的な調査が必要となるが、私の場合は、地球における人類の起源と進化という面に興味を持ってアプローチしている。人類の進化を研究するには、進化の道筋をたどる具体的な資料であり、様々な生命・生命体情報の宝庫として「化石となった生」とも言える古人骨を対象とした研究が不可欠である。そうした研究においては、資料の「古さを特定し、編年をおこなう」ことは「古人骨からのわかること」への基盤情報をなす。以上の観点と興味から、主に上記の3つのテーマで研究をおこなっている。

◆教育内容

以下の授業を担当するとともに、主に自然人類学に関する研究を指導した。

＜学部＞

自然人類学（全学共通科目）
歴史環境論（全学共通科目）
生物人間論（生活科学部共通科目）
人類進化史（生活科学部専門科目）
人類進化学実験実習（生活科学部専門科目）
人類起源論（生活科学部専門科目）
人類科学演習（生活科学部専門科目）

＜大学院＞

人類進化学特論（ライフサイエンス専攻）
生物人間科学演習（ライフサイエンス専攻）
ライフサイエンス論（ライフサイエンス専攻）

◆Research Pursuits

The main purpose of my research is to understand the uniqueness of our species, "why a human", and there should be diversified and many-faceted attacks to this problem. I have been approaching this problem from the palaeoanthropological and evolutionary perspectives, especially through working on human skeletal remains which provide many and various information for the reconstruction of life and the human career. More specifically, my main research subjects at present are as follows: i) human evolution and origins with special reference to the geochronological backgrounds, ii) dating of fossil bones, iii) chronology and palaeoanthropology of the Indonesian fossil hominids and the Japanese Palaeolithic hominids.

◆Educational Pursuits

In the school year of 2005, I supervised graduation studies mainly on physical anthropology, and instructed classes such as introduction to physical anthropology, general human biology, human evolution, human origins, experiment and training on evolutionary anthropology, seminar on human biological studies, special lecture on evolutionary anthropology, and some other lectures or seminars.

◆将来の研究計画・研究の展望

現在得ている主な日本学術振興会科学研究費補助金には、基盤(A)「世界文化遺産サンギラン遺跡出土古人類化石の評価にかかる年代学的検証」(代表者)、基盤(S)「更新世から縄文・弥生期にかけての日本人の変遷に関する総合的研究」(分担者)がある。前者では、ジャワ原人の年代論争について、現地調査を通してその検証をおこない、東アジアにおける人類進化史の解明をめざす。後者では日本の旧石器時代人骨の再評価と編年の再検討を進めることによって、日本人の起源に大きく関与する縄文時代人の起源と形成史を考察したい。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

・化石骨の年代測定(特に炭素 14 年代の前処理法)に関する研究

◆受験生等へのメッセージ

受験準備としては「理系パターン」「文系パターン」への対処は必要であるが、そもそも理系・文系というのは受験区分であり、学問にそうしたレッテルを貼る必要はない。入学後は、「自分は理系(あるいは文系)」などという枠を自らはめることなく、広く「リベラル・アーツ」を身につけてほしいと思う。

教員名	松崎 毅 (MATSUZAKI Takeshi)
所 属	文教育学部言語文化学科英語圏・欧州言語文化講座
学 位	文学修士 (1985 東京都立大学)
職 名	助教授
URL/E-mail	

◆研究キーワード

17 世紀 / 詩 / 王党派 / 宗教詩 / 隠蔽

◆主要業績

総数 (1) 件

・「私」の沈黙が語るもの — "The World"における「説教師」のペルソナ『英文學研究』Vol.82 1-13 日本英文學會

◆研究内容

ここ数年は科研費研究との絡みがあり、17 世紀イギリス王党派文学をジャンルの使用という観点から研究している。内乱における敗北と議会派政府による言論統制という抑圧的な政治状況下、イギリス王党派文学は政治的に不穏当な言説を偽装する手段として極めて巧妙にジャンルを使用した。これは、テクストの読みが社会構築された解釈の枠組みに依存するものにすぎないという事実を実証するとともに、解釈の枠組みがどのように社会構築されるか、またそれがいかに意図的に構築されうるかという問題に大きな手掛かりを与える。17 年度は、宗教詩における「私的な祈り」という解釈の枠組みが、政治的・公的言説の偽装としてどのように機能するか、また、牧歌というジャンルがジャンル自体のもつコードを通じ、一見してアポリティカルなテクストのなかにどのように政治的・公的言説を生成するかという問題を中心に研究を行った。研究成果は、宗教詩に関する研究を論文として発表したほか、18 年度の研究と併せ、科研費報告書にて発表の予定。

◆教育内容

コア英語科目は、近年の学部生の語彙力低下に歯止めをかけるため、単語・熟語等の小テストを増やし、語彙拡充を特に重点的に行った。学部専門科目は「英米文学演習 (中級)」で John Bunyan の The Pilgrim's Progress をテキストとし、聖書・教会・ピューリタニズムなど、英語圏文化のバックボーンとしてのキリスト教について学生の理解を深めるとともに、この作品のジャンル上の特異性とその文学史的意義を考察した。卒論は Jane Eyre を研究対象とする学生 2 名と The Turn of the Screw を研究対象とする学生 1 名を指導した。大学院博士前期課程では、イギリス内乱期王党派の政治詩を扱い、作品を 1640 年代の政治的・論争的文脈に即して可能な限り精密に読み解くと共に、この時期の王党派詩に特徴的な隠蔽的レトリックのありかたを考察した。この授業では比較歴史学コースの聴講を受け入れた。

◆将来の研究計画・研究の展望

17世紀イギリス文学のジャンル研究では、これまで、唄、俗謡、連祷、哀歌、牧歌、恋愛詩、瞑想詩、宗教詩等についてその隠蔽的機能を検証してきたが、これらは大半が詩であり、散文のジャンルについては十分な考察が行われていない。今後は、対話編、指南書、大全等の実用書を含む散文ジャンルの考察を行い、これらのジャンルの振る舞い、特に偽装としてそれらが果たした機能を検証したい。そのうえで、17世紀王党派文学がジャンルという社会構築的な解釈の枠組みを極めて戦略的に使用していた事実を明らかにしたい。

◆受験生等へのメッセージ

豊かな言語表現能力と言語に対する鋭い感受性を持つ皆さんを待っています。

教員名	松藤 薫子 (MATSUFUJI Shigeko)
所 属	語学センター
学 位	人文科学博士(2000 お茶の水女子大学)
職 名	講師
URL/E-mail	shigeko@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

言語心理学 / 英語学 / 言語学

◆主要業績

総数 (3) 件

- ・「日本語児による数量表現「全部」の獲得について」お茶の水女子大学大学院英文学会編、『英語圏研究』第1号(通算 第35号), 62-80.
- ・松藤薫子 絹谷弘子 エドワード・シェイファー 牛江ゆき子「英語 CALL 教材を利用した自習における支援方法の比較」お茶の水女子大学『人文科学研究』第2巻, 217-228.
- ・松藤薫子 絹谷弘子 エドワード・シェイファー ナガトモ・ダイアン 牛江ゆき子「CALL 教材を利用した自習のメールによる支援効果」LET(外国語教育メディア学会)第45回全国研究大会にて口頭発表, 発表要項 60-61.

◆研究内容

ここ数年、個人研究として子どもが数量表現をどのように獲得するのかと共同研究としてお茶の水女子大学の学生にとってどのような自習支援プログラムが効果的なのかについて研究を行っている。2005年度の個人研究では、全称量化 ALL の意味を表す限定詞の位置に生じる「全部 (の)」を含む文がいつ頃理解・発話されるようになるのかを、3歳1ヶ月から5歳4ヶ月の日本語児18人と大人の日本語母語話者10人に対して行った真偽値判断課題による実験によって得られた資料に基づき考察した。その結果、日本語児は「全部 (の)」を3歳8ヶ月以降、4歳6ヶ月位に正しく理解することを明らかにした。これは動的文法理論に基づいて予測された「全部」の獲得過程の妥当性を支持するものであることを論じた。さらに実験で観察された大人と異なる解釈や発話も、動的文法理論により説明できることを示した。共同研究では、お茶の水女子大学で設定されたコア英語の目標にできるだけ到達できるように自習に取り組み、本学の学生にとって効果的な自習支援の方法を見いだすために、2005年度前期において英語の授業2クラスにCD-ROM CALL 教材 Listen to Me! シリーズ中の College Life を自習課題とし、それぞれのクラスで異なる支援方法 (i)電子メールと(ii)学習記録進捗表提出・返却)を用い、その支援効果を比較・考察した。その結果、両支援方法の有効性を確認した。メールの得手・不得手により、学習に良い方にも悪い方にも心理的影響を及ぼしやすいことがわかった。またアンケートの結果、学生の英語力のレベルや興味・関心に応じた多様な教材提供する必要性が示された。

◆教育内容

学部のコア英語を担当した。担当した授業では、授業時間外に自分の語学力と興味にあったリスニング教材とリーディング教材で自習をするように指導・支援し、学習時間を増やしてコア英語の到達目標にできるだけ到達できるように目指した。基礎英語の授業では、比較的平易な英文を聞いたり読んだりして要点をつかむことができるようになることを目指した。中級英語の授業では、英語の新聞、論説、ニュース、レクチャーに使われる英語が理解できるようになることを目指した。総合英語の授業では、英語の新聞、論説、ニュース、レクチャーに使われる比較的長い英文の論点を正しく理解できるようになることを目指した。

◆Research Pursuits

For these several years, I have investigated how children acquire quantificational expressions in my individual research and what kind of self-learning support program is effective for the students of Ochanomizu University in my joint research.

In my individual research of 2005, I examined when Japanese-speaking children understood and produced sentences including the determiner quantificational word *zenbu-no* ('all'), which occurs in the subject position and indicates universal quantification on the basis of the findings obtained from a study utilizing a truth-value judgment task.

It was found that the Japanese children past 3 years and 8 months (average age: 4 years and 6 months) understood *zenbu-no* correctly. The result lends support to the acquisition process of *zenbu-no* that is predicted based on the framework of the Dynamic Theories of Language, developed in Kajita (1977, 1997, 2002, 2004), which assumes the non-instantaneous model of language acquisition, or focuses on the process of language learning and attempts to characterize the notion of "possible next grammar" on the basis of the properties of the present grammar.

In my joint research, in order to find effective ways to support self-study for students at Ochanomizu University, we conducted a comparative study of their progress in English under different instruction methods: email vs. report form submission and return.

It was found that the effectiveness of both methods is confirmed.

As a result of the questionnaire, the necessity of offering students various self-learning materials suiting their levels and interests was shown.

◆Educational Pursuits

I taught core curriculum English classes at the undergraduate level. I supported students' self-learning of English outside the classroom as well as teaching English classes that would improve students' basic reading and listening ability.

Basic English classes were designed to help students read plain English prose and comprehend English spoken at a somewhat slower speed.

Intermediate English classes were designed to help students read and comprehend authentic short materials such as books, newspapers, TV programs and lectures.

Advanced English classes were designed to help students read and comprehend authentic long materials such as books, newspapers, TV programs and lectures

◆将来の研究計画・研究の展望

今後も、個人研究では、数量表現の意味の獲得を実証的に調査することによって、言語獲得モデルの妥当性を検討し、言語獲得原理の内容を解明したい。それにより、刺激の貧困にもかかわらず言語獲得が可能なのはなぜかという言語獲得に関する「論理的問題」といつ、どのような言語発達がみられるのかという言語獲得に関する「発達的問題」の両方に妥当な解答を与えうる言語獲得理論とはどういうものかを検討したい。

共同研究では、これまでに作成した学習者の自律性を高めた自習支援プログラム基に、自律型学用の教材と学習者の現状を調査し、学習遂行のために必要な継続的支援として考えられる教員による学習者の支援と学習者同士のやりとりを効率よく行うのに適したコースマネジメント・システム（CMS）を導入し、より効果的な自律型学習支援プログラムに発展するように改良したい。そのプログラムを運用し、学習者の自律支援効果を検証したい。また、CALLの運営とCMSの効果的な利用法を提案したい。

◆受験生等へのメッセージ

受験生のみなさん、受験勉強で大変かもしれませんが、目標を持って着実に学習してください。

大学の英語の授業では、周到に準備された最新の教材を使用し、これまでに学んだ事柄を確認しながら、大学生レベルの語学力を養成します。英語の基礎力を伸ばすためには、積極的に英語学習に取り組む必要があります。できるだけ早くこのような習慣を身につけることが大切だと思います。意欲的に英語学習ができるようになると、英語を通して自分の世界がもっと広がり楽しみも増えることでしょう。

教員名	松本 勲武 (MATSUMOTO Isamu)
所 属	理学部化学科
学 位	薬学士(1967 東京大学)、薬学修士(1969 東京大学)、 薬学博士(1972 東京大学)
職 名	教授
URL/E-mail	isamu@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

レクチン / アネキシン / アフィニティー吸着体

◆主要業績

総数 (4) 件

- Annexins I and IV inhibit Staphylococcus aureus attachment to human macrophages.
Gotoh M, Takamoto Y, Kurosaka K, Masuda J, Ida M, Satoh A, Takayama E, Kojima-Aikawa K, Kobayashi Y, Matsumoto I.
Immunol Lett. 2005 May 15;98(2):297-302
- Differential expression of the keratin-4, -13, -14, -17 and transglutaminase 3 genes during the development of oral squamous cell carcinoma from leukoplakia. Ohkura S, Kondoh N, Hada A, Arai M, Yamazaki Y, Sindoh M, Takahashi M, Matsumoto I, Yamamoto N
Oral Oncol. 2005 Jul;41(6):607-13.
- The earliest thymic progenitors in adults are restricted to T, NK, and dendritic cell lineage and have a potential to form more diverse TCRbeta chains than fetal progenitors.
Lu M, Tayu R, Ikawa T, Masuda K, Matsumoto I, Mugishima H, Kawamoto H, Katsura Y.

◆研究内容

主としてレクチンの研究を行った。
植物では、新規レクチンのスクリーニングを行った。
動物レクチンでは、主としてヒト血漿中のアネキシン型レクチンの性質を明らかにした。
①アネキシン V はグラム陽性菌に結合し、マクロファージの食食作用を阻害する、いわゆる免疫抑制作用を持つことを示した。特異抗体のオプソニン作用と拮抗する系があることが明らかになった。
②ヒト血漿中では、男性よりも女性においてアネキシン IV 濃度が著しく高いことを発見した。また、アネキシン IV が異常部位での血液凝固を阻止し、正常部位では血液凝固阻害活性を示さないとの実験結果を得た。この新知見から、アネキシン IV が副作用のない血栓予防あるいは治療薬として有用であると考えられる。日本人の三大死因である悪性腫瘍、心疾患、脳血管症においては、それぞれ播種性血管内凝固症候群、心筋梗塞、脳血栓症など、最終的には血栓が死因となっていることを考えると、内在性抗凝固剤であるアネキシン IV の研究促進の重要性は極めて高いと思われる。

◆教育内容

学部では、主として生化学関連の基礎的および専門的な内容を紹介する授業および実験、ならびに化学の基礎実験の指導を行った。授業科目は次の通りである。
構造生化学 II
生体分子機能・認識学
生物化学実験
化学基礎実験
大学院博士前期課程では生化学の専門分野、特に糖鎖関連分野の講義、ならびに演習を行った。
糖鎖分子生物学
生物化学
生物化学演習
大学院博士後期課程では、学位論文の研究の指導を行った。日仏共同博士課程の制度のもとで初めてストラスブールのルイパスツール大学へ派遣された学生については、指導及び学位審査を先方の教授と共同で行った。

◆受験生等へのメッセージ

本学は中期目標・中期計画の前文冒頭で『お茶の水女子大学は、学ぶ意欲のあるすべての女性にとって真摯な夢の実現される場所として存在する。すべての女性がその年齢国籍等にかかわらず、個人の尊厳と権利を保障され、自由に己の資質能力を開発し、知的欲求の促すまま自己自身の学びを深化させることを支援する』と言明しています。

若い方のなかには『学び→勉強→試験→受験→苦痛』という暗い連想をされる方が多いかもしれません。孔子の学問の極意『之を知るは之を好むにしかず。之を好むは之を楽しむにしかず』は、『知る→好む→楽しむ』という学びの深化を説いています。私は『学び→最高の遊び→至上の楽しみ』というホモ・ルーデンスの連想のとりこになっています。お茶大とのかかわりにより、この連想がすべての女性にとって自己自身の現実の事となり、延いては真摯な夢の実現となることを願っています。

教員名	三浦 謙 (MIURA Ken)
所 属	文教育学部人文科学科哲学講座
学 位	理学修士 (1984 東京工業大学)
職 名	助教授
URL/E-mail	mike@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

科学哲学 / 認識論 / 知識論

◆主要業績

・2005年度の出版された業績はないが、当該年度の研究とパスカル大学での講演内容は、「魅力ある大学院教育」イニシアティブ 対話と深化の次世代女性リーダーの育成 活動報告書 において、「安定性とモジュール性 科学的知識の本質的特長」として掲載予定。

◆研究内容

これまでの研究では、科学の本格的な成立に必要な観察・実験の役割、特にこれまでの科学論・知識論であまり注目されてこなかった、観測・測定装置の製作・使用に必要な背景知識の役割について、考察を深めてきた。

2005年度も、このような観点を共有するテキストの研究を行ってきたが、特に、20世紀前半の論理実証主義の哲学者で現在では取り上げられることの少ないファイグルが、上記の点についての的確に論じているのを発見した。

このような、これまでの研究内容を中心にして、大学院教育イニシアティブにおいて参加した、フランス・パスカル大学のシンポジウムで発表を行い、また、フランスにおける哲学研究の事情を知ることができた。

ただし、シンポジウム参加の準備に時間をとられたため、成果の発表については昨年度は十分ではなかった。

◆教育内容

毎年、思想史・科学史における知識論の問題を講義で取り上げているが、本年は哲学・科学史の授業で、最近の西洋古典学の研究による、ギリシャ古典期からヘレニズム時代における懐疑論と科学方法論の解明の成果を取り入れ、紹介した。

また、哲学の授業では、初期ストア哲学における因果性の理解が、物体と出来事を結びつける実在論的なものであり、ヒュームに代表されるような近世以降の法則論的な因果性の考え方とは異なる側面を持つことを取り上げた。

こうした論点は国内の文献や概説書で取り上げられることが無く、また私自身の関心の薄かった部分でもあったため、学部・大学院の授業は昨年よりも充実させることができ、また自身の研究にも役立つ経験となったと考えている。

◆Research Pursuits

Recently I have studied the role of background knowledge in science. Such knowledge is necessary to make scientific instruments and to use them for observation or experiment. In 2005 academic year I found that Feigl, one of the members of Wiener circle, already took such a view. I presented my result obtained until now at the conference held at Pascal university in France. The draft is to be printed soon.

◆Educational Pursuits

In 2005 academic year I added new topics to the content of my lecture on epistemology and history of science. One topic is Greek and Hellenistic skeptic philosophy and methodology of science. They are intensively studied now. Another topic is Stoic conception of causality which is the realistic one contrasted to the modern nomological conception of causality. These topics are not popular in Japan, so my lecture became helpful to students.

◆将来の研究計画・研究の展望

現代における科学の役割の重要性は明らかであるが、科学の実質、科学の方法論については論争も多く、また相対主義的観点から科学の役割を不当に貶める見方も存在する。今後も、現代科学が歴史的な拘束条件の下で、どのように合理的な方法論と有効な知識を構成できたのかというテーマで研究し、成果を出版したい。また、昨年度からの海外交流の継続も予定しており、海外でも日本における江戸時代以降の自然研究や合理的思考の発達過程を紹介しながら、わが国における科学の受容のあり方について、自身の今後の研究・教育に反映させていきたい。

◆受験生等へのメッセージ

哲学の 20 世紀における重要な仕事としては、ドイツ語・英語圏における論理学の発展に、数学基礎論とともに貢献したこと、また、アメリカを中心にして、心理学・認知科学の方法論について、哲学者が方法論の議論を中心に影響を与えてきたことがあげられる。このように、哲学は他の学問分野に対して閉じられたものではなく、いろいろと関係している。私自身も、専門の哲学以外に、数学・自然科学、科学史、社会科学の研究・文献から多くを学んできた。受験生の皆さんも、自分の関心を狭めることなく、大学ではさまざまな分野を勉強してもらいたい。

教員名	三浦 徹 (MIURA Toru)
所 属	文教育学部人文科学科比較歴史学講座
学 位	文学修士 (1986 東京大学)
職 名	教授
URL/E-mail	miura.toru@ocha.ac.jp

◆研究キーワード

都市 / ネットワーク / 契約 / 市場 / 賄賂

◆主要業績

総数 (4) 件

- ・「中世イスラム都市の諸相」『シリーズ都市・建築・歴史 3 中世的空間と儀礼』東京大学出版会、2006 年 3 月、pp. 277-338
- ・"Urban Society of Damascus as the Mamluk Era was Ending" , Mamluk Studies Review, 10/1, 2006, pp.157-193
- ・"Perception of Islam and Muslims in Japanese High Schools: Questionnaire Survey and Textbooks", Annals of Japan Association for Middle East Studies, 21/2, March 2006, pp. 173-192.

◆研究内容

アラブ・イスラム都市の社会経済システムの解明のために、文書史料を用いた研究を進めている。近年は、ワクフ（宗教目的の寄進）に焦点をあて、寄進された財産（とくに不動産）が、都市の社会経済基盤を整備し、農民や商人・職人が寄進財となった農地や商店や工房を賃貸借することで経済に参画し、同時に賃貸料収入が宗教施設や社会福祉に環流されるという仕組みを明らかにし、都市の発展と衰退のメカニズムの解明にとりくんでいる。また、高校生や大学生の中東・イスラム認識について、高校教員と協力してアンケートなどの調査を行いながら、中東やイスラムの理解のあり方について、実践的な問題提起を行っている。

◆教育内容

文教育学部では、比較歴史学とグローバル文化学環で授業を担当している。17年度に新設されたグローバル文化学環では、「グローバル文化学総論1」において、歴史的観点から今日のグローバル化の特徴はどこにあるのかを講義した。「グローバル・ヒストリー」では、米国の大学で使用されている世界史のテキストを用い、Q&A方式で議論する授業を行った。「イスラムの社会と文化」では、問題提起型の授業形式をとった。自然、家族、教育、商工業、裁判など、毎回のテーマごとに、授業の前と後で「視点がどう変わったか」についてレポートを求めた。またアフガニスタン女性教員との意見交換会を授業の一環として開催し、調査や質疑を通して「生」の情報から学んだ。「東洋史演習」でも英文のテキストを用い、報告者には要約ではなく「問題提起 lead the discussion」を求めたところ、討論は活発になった。いずれの授業においても、「双方向性」と体験を重視した。実験的な授業ではあったが、学生による授業評価では、高い満足度が示された。

◆将来の研究計画・研究の展望

歴史研究と地域研究をつなぐ仕事をしたい。日本の歴史研究は、日本史、東洋史、西洋史のいずれも、原史料を丹念に解読し、実証的な知の体系を築き、地球上の多様な地域の歴史文化についての情報をもっている点では、欧米と比べてもぬきでたものがある。他方で全体像や現代とのつながりを見失いつつある。多様な歴史上の事象を比較することで、人類社会に共通する原理と地域時代による個性とを探りあてる作業を進めていきたい。そのことは、グローバル化する時代の人々の相互理解のための実践的な課題でもある。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・アジアの比較史
- ・日本における中東・イスラム認識

◆受験生等へのメッセージ

中東は、「西洋」（ヨーロッパ世界）と「東洋」（アジア）の中間に位置し、中東・イスラム世界の歴史を通して、現代世界の成りたちをさぐることをめざしています。特に、ダマスカスやカイロなど、イスラム世界の都市社会に関心を持ち、都市の空間（ハード）と社会のしくみ（ソフト）の両面から、研究をしています。アラブ諸国に通いだしてはや15年、馬糞のにおいがしたカイロの下町は相変わらずですが、高速道路がモスクのそばを横切るようになりました。湾岸諸国にはドバイなどハイテク高層都市が出現しています。個性というフレーズで他者との違いが強調される今日ですが、人々の暮らし方、社会のあり方には、共通の感覚や知恵があります。最近、北京やカシユガル、ジャカルタなど、広くイスラム世界の町をめぐる、比較史に熱をいれています。

教員名	水野 勲 (MIZUNO Isao)
所 属	文教育学部人文科学科地理学講座
学 位	博士 (理学)、東京都立大学、1998 年
職 名	助教授
URL/E-mail	http://www.li.ocha.ac.jp/hum/chiriog/staff/p_mizuno.html mizuno@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

集積 / 地理的モデリング / 職住関係 / 都市空間 / 韓国

◆主要業績

総数 (3) 件

- ・水野 勲(2005): 「エントロピー最大化モデルのアナロジーとレトリック」, お茶の水地理 45, pp. 16-31.
- ・水野 勲(2005): 「住まいと通勤」, COE ジェンダー研究のフロンティア (お茶の水女子大学) 編『家族・仕事・家計に関する国際比較研究: 中国パネル調査 第1年度報告書』, pp. 95-102.
- ・水野 勲(2005): 「引越し履歴と住宅」, COE ジェンダー研究のフロンティア (お茶の水女子大学) 編『家族・仕事・家計に関する国際比較研究: 韓国パネル調査第2年度報告書』, pp. 56-61.

◆研究内容

1. COE ジェンダー研究のフロンティアによる韓国と中国のパネル調査データを用いて、都市空間における職住関係、特に居住、通勤、引越しについて、性別、年齢、配偶関係、家族構成、就業形態などに注目して分析し、2冊の報告書に分析結果を載せた。その成果は、人文地理学会大会および家計経済研究所パネルカンファレンスにおいて発表した。
2. 九鬼周造の著作をたよりに、「偶然性」の概念を再考し、それに基づいて立地分析における「偶然性」の役割を、地域発展モデルを例にして考察した。その成果は、お茶の水地理に掲載された。
3. 著名な地理学者の自伝を集めた”Geographer’s Voices”の2論文を翻訳した。共訳書が2007年度以降に出版予定

◆教育内容

学部では、地理学の必修科目である人文地理学、地図学、人文地理学基礎演習を共同で担当し、地理学の基礎を講義・実習した。また、夏休み中に宮崎での4泊5日の野外調査実習を行い、年度末には調査報告書を刊行した。この他に、社会調査士の免許科目である社会情報処理、社会情報処理演習、さらに地理学の専門科目である経済地理学演習、卒論の指導を行った。3名の卒論生の指導を行った。

大学院では、博士前期の地理情報論において、ジェンダー地域統計についての演習を行い、博士後期の地域開発政策論では、アマルチア・センの『合理的な愚か者』を講読した。

◆Research Pursuits

1. I studied the home-and-work relationships like residential situation, commuting patterns, and intra-urban migration in metropolitan area, focusing on gender, age, marital status, family type, and employment pattern by using the F-GENS Panel Survey data by COE Frontiers of GENder Studies in Korea and China. The results were printed in two of F-GENS Publication Series, and were prepared in the annual meeting of the Association of Japanese Human Geographers and in the Panel Conference of the Institute of Home Economics.

2. Rethinking the “contingency” concept in terms of Philosopher Kuki’s “Problems of Contingency”, I considered the positive roles of that concept played in regional development model as a case of locational analysis. The paper is printed in the Annals of Ochanomizu Geographical Society.

3. I translated two papers in “Geographers’ Voices”, which had famous geographers’ autobiography, into Japanese. The translation book will be published in 2007.

◆Educational Pursuits

At undergraduate level, I delivered three lectures (Human Geography, Cartography, and Social Information Processing), three seminars (Human Geography Skills, Social Information Processing, and Economic Geography) and one excursion (Five days field trips to Miyazaki). I made a guidance of three undergraduate students’ thesis.

At graduate level, I had two seminars for gender regional statistics and Amartia Sen’s “Rational Fool”.

◆将来の研究計画・研究の展望

1. 時間地理学と生活時間研究を結びつけた都市空間の職住関係の統計分析
2. 地域分析と社会調査の接点に関する考察
3. 経路依存性を考慮した地域発展モデルの構築

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・経済地理学における経路依存性のモデリング
- ・ジェンダーの視点による時間地理学の再考
- ・災害履歴、ハザードマップ、環境認識の研究

◆受験生等へのメッセージ

ローカルな舞台で起こる諸現象どうしを関連づけ、さらにそれらを広い文脈の中に位置づけて理解すること、既存の理論を地図や地域統計などの分析を通じて、多様性を内部に含んだ理論に拡張すること、これらが地理学の課題としてあります。そのために、私の授業がきっかけとなればよいと考えています。

教員名	水村(久埜) 真由美 (KUNO MIZUMURA Mayumi)
所 属	文教育学部芸術・表現行動学科舞踊教育学講座
学 位	教育学博士 (1997 東京大学)
職 名	助教授
URL/E-mail	http://buyou1.li.ocha.ac.jp/Mizumura/HTML/index.html mani@c.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

舞踊動作の科学 / 子どものからだ / 柔軟性のメカニズム / 女性のライフスタイル /

◆主要業績

総数 (16) 件

- ・「舞踊の中の身体」(水村真由美、衛藤隆共著) 2005, 武藤、衛藤、山本編、『新身体教育論』放送大学教育振興会、東京、pp.138-152.
- ・「舞踊動作にみられる手と足の動きの表現性」2005, バイオメカニクス研究, 6(2), pp120-128.
- ・「小学生児童の身体組成と体力特性」水村(久埜) 真由美, 吉田真咲, 田中真実子, 瀬田亜耶子, 春山知子, 横山善実, 栗原知子, 石塚諭, 高木悦子, 金久保成美, 小林稔共著) 2005, 人文科学研究, 第2巻, pp125-139

◆研究内容

2005年度の研究テーマは以下の3つが主要な研究テーマであった。

1. 柔軟性の機能的意義に関する研究
2. 舞踊動作の動作解析に関する研究
3. 子どもの身体諸機能に関する研究

テーマ1は2006年度までの2カ年で科研費採択により取り組みテーマで、柔軟性の向上に寄与する生理学的バイオメカニクスの適応現象を、慢性および一過性の適応の両面から検討するものである。本年度は基礎的なデータ収集を行い来年度の実験に続ける。また今までのデータの一部を日本トレーニング科学会カンファレンスのシンポジウムにおいて「芸術系スポーツにおける柔軟性」として発表した。テーマ2は、私が修士論文のときから継続している研究テーマであり、今年は特にバレエを中心とする西洋の舞踊の足および手の動作を人文科学的な資料を用いて考察する一方、舞踊にみられる跳躍動作のパフォーマンスに関する研究を動作解析により行った。また研究成果を国際ダンス医科学会議において発表した。

テーマ3では本学着任以降、附属小学校のからだ部と連携して行っている小学生児童の体力変化に関する縦断的な調査を行った。またこうした研究調査のデータを基に学校教育における体育および舞踊教育の役割について検討した。今年琉球大学との共同研究で離島の子どもたちの身体および健康づくりに関する調査も行った。

◆教育内容

学部では、コアにおいて「健康スポーツ実習(軽運動)」と「スポーツ科学概論(半分回を担当)」を担当した。軽運動では、通常の体育授業が疾患などの理由により行えない学生に対しストレッチングなどの実技を指導した。スポーツ科学概論では、スポーツ科学領域の基礎的な学問体系と競技スポーツへのその応用について概説した。専門科目としては、「動作学」「解剖学」「生理学」「動作学実験演習」「表現行動論」「舞踊・運動科学研究法入門」を担当した。いずれも人間の身体の機能および身体動作の科学的解析方法を学ぶうえでの基礎的な知識をみにつけるための講義であった。また実験実習においては、バイオメカニクスおよび運動生理学の手法を使って身体運動の成り立ちや運動中の生体反応を実際に調べる実習である。

博士前期課程では、「表現行動科学実習」を担当し、舞踊動作の科学的な成り立ちに関する英著を輪読した。

博士後期課程では、「舞踊分析論」を担当した。

なお研究室所属院生が、日本体育学会にて2演題、日本体力医学会にて2演題、それぞれの研究テーマで研究発表をし、その指導を行った。

◆Research Pursuits

Research project in 2005 was consisted of three main areas.

- 1) Functional significance of flexibility in human
- 2) Biomechanical characteristics of dance movements
- 3) Physical fitness and health status in elementary school children.

1) was granted from JSPS as Kakenhi and this study will continue until next year. In 2005, we had taken basic data for determining flexibility using ultrasound apparatus. 2) was long-term research project for our laboratory. In 2005, we focused on the biomechanical characteristics of the arm and the leg movement in dance. 3) was collaborative studies with teachers of elementary school attached to Ochanomizu university. We also investigate the physical characteristics of children living in iriomote island in Okinawa.

◆共同研究例

- ・ 5. 中山隼雄科学財団研究助成「ダンスが中高年女性の全身反応時間に及ぼす影響ーリズムミクな動きを模倣する点に着目してー」2000, 80 万円/1 年
- ・ 明治生命体力事業財団研究助成「柔軟性の機能的意義」2001, 100 万円/1 年
- ・ 中富健康科学財団留学助成
「日豪の生活習慣の違いが運動による酸化ストレスに及ぼす影響」2002, 100 万円/1 年

◆将来の研究計画・研究の展望

舞踊を中心としたさまざまな身体運動による人間の身体諸機能の可塑性を検討するとともに、熟練した舞踊動作、いわゆる芸術性の高いと評される運動の成立のメカニズムを解明したいと考えている

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・ 舞踊動作の身体運動としての可能性（昨年度、厚生労働科研に応募するが不採択）
- ・ 芸術的動作成立のメカニズム
- ・ 子どもの健康および体力に関する研究（これは子どもやフィットネス、スポーツに関わる企業との共同研究が可能と考える）

◆受験生等へのメッセージ

人間の行う動きは非常に複雑で巧みです。その動きや動きを起こす身体 of のしぐみに興味をもって地道に研究を続けられる若い人たちと一緒に研究をしたいと思っています。私が所属するコースは、国立大学法人唯一の舞踊を専攻することのできるコースです。またその中にあって、私は唯一自然科学系の学問領域から、舞踊やスポーツ、さまざまな運動を対象として、研究を行っています。「舞踊を科学」してみたい人にとっては、まさに日本で唯一の教育環境といってもいいでしょう。

また働く女性とし、母として、女性のライフスタイルと運動や健康に関しても大きな興味をもっています。エネルギー溢れた女性のライフスタイルをサポートする研究を一緒に行ってみませんか？



教員名	三原 芳秋 (MIHARA Yoshiaki)
所 属	語学センター
学 位	修士 (文学)
職 名	講師
URL/E-mail	http://www.ocha.ac.jp/languagecent mihara.yoshiaki@ocha.ac.jp

◆主要業績

総数 (3) 件

- ・(口頭発表)「暴力・秩序・神話 ― ベンヤミンとT. S. エリオット」
- ・(項目執筆)『現代批評理論のすべて』(大橋洋一編、新書館)
- ・(翻訳)『故国喪失についての省察1』(エドワード・W・サイード、みすず書房)

◆研究内容

T. S. エリオットを中心に、1920・30年代の英米文学・思想を研究。また、同時期の日本帝国本土ならびに植民地朝鮮における文学・思想を、とくに英文学受容の観点から研究。

◆教育内容

基礎英語、中級英語、総合英語。CALL教室を積極的に利用して、多角的な英語教育を実践。

◆Research Pursuits

Anglo-American literature and intellectual history in the 1920's and 30's. T. S. Eliot.

Literary and intellectual history of the Japanese Empire (Japan and Korea), with special emphasis on their reception of contemporary English Literature.

◆Educational Pursuits

Basic, Intermediate, Comprehensive English.

Computer Assisted Language Learning (CALL).

◆将来の研究計画・研究の展望

科学研究費補助金・若手研究（B）の研究計画に従い、「T. S. エリオットと帝国の理念、および東アジアにおけるその思想の散種に関する研究」を引き続き行なう。

◆受験生等へのメッセージ

英語は、点数をとるための科目ではなく、あくまで言語です。そして、その他すべての言語と同じく、豊かな文化的背景をもった言語です。そのことを、授業を通じて、みなさんに伝えたいと思っています。

教員名	御船 美智子 (MIFUNE Michiko)
所 属	生活科学部人間生活学科生活社会科学講座
学 位	家政学修士 (1977 お茶の水女子大学)
職 名	教授
URL/E-mail	http://www.soc.ocha.ac.jp/mifune/mifunemm@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

家計 / 家庭内経済関係 / 消費者政策 / ジェンダー / 生活経済

◆主要業績

総数 (5) 件

- ・現代生活者のライフスタイルと生活意識の実像
- ・家庭内資源配分とジェンダー不平等
- ・家計管理

◆研究内容

1.COE「ジェンダー研究のフロンティア」における『家族・仕事・家計に関する国際比較研究』の韓国パネル調査、中国パネル調査に基づく家庭内経済関係の変化と規定要因についての研究。家庭内経済関係のジェンダー不平等は、夫妻の累積収入など家計フロー面、資産割合など家計ストック面、家事など家庭内生産面、収入管理や資産処分など家計管理面から見られ、日本の不平等は特に家庭内生産面で、資産貢献への不平等は韓国でみられること、日本の妻の資産形成貢献意識が高い背景として、夫妻の家事労働評価の高さがある。

2.生活者のライフスタイルの研究。現代日本の生活を家計と生活意識などの生活指標により時代区分すると1967まで、91年まで、92年以降の三区分別でできる。92年以降は、標準的なライフスタイルではなく格差を伴った二極化が進んでいる。背景には労働市場の変化、高齢化があり、貯蓄のない世帯が4分の1以上となり1960年代の水準に戻っている。生活の経営という視点での生活研究と支援が求められることが見出された。

◆教育内容

学部：生活経済学、家政経済学概論、消費者科学入門、家庭経営学、マネーワーク論で、消費者、家計主体からみた現代経済社会の仕組みについて概説した。パーソナルファイナンスのための生活設計、金銭管理、家計会計の手法、時間管理や生活協同の方法を身につけるとともに、消費者物価や景気など消費者としての経済動向の見方、制度としての消費社会、消費者政策と消費者支援、消費者情報、ジェンダー視点での家庭経済分析について示した。授業では、家計財務諸表の実習を課したり、KJ法でのキーワード整理による問題の把握方法の習得、東京都消費生活総合センターでの見学実習も盛りこみ、生活者起点での問題意識の組み立て方法、生活者支援の理論と実際を学べるように組み立てている。

大学院：生活経済論、生活経済論演習で、現代社会での生活と経済の関係を生活者・消費者の視点で理論構築する方法を、文献や実証研究結果とその議論によって検討している。

◆Research Pursuits

I make the study of household economic relations and factors by Panel Survey in Seoul and Beijing on Work, Family and Gender. I consider gender inequality from income, assets, household production and management. I also examine the present and factors effecting on the property accumulation of married women by using surveys on nuclear family. The gap between the proportion of married women's property to household property and that of married women's cumulative income to household total income is distributed widely. I found that there would be a tendency that married women who belong to households with low income, and have consciousness with division of labor by gender role, can't accumulate their own property and feel stress in their daily life. Moreover, I discovered that they think that husband has the title to husband's income. Findings suggest that married women with couple's separate income consciousness can't accumulate their property.

◆Educational Pursuits

I survey the Everyday-Life Economics, Household economics, Consumer Science, Family Resource management at faculty level. I teach personal finance, life planning, money management, account execution, time use, cooperation and cooperative society. Students exercise organization technique by KJ method in class. We visit Consumer Center and take the lecture by officer and consumer adviser.

◆共同研究例

- ・団塊世代の生活創造、女性と資産、消費生活に関するパネル調査研究

◆将来の研究計画・研究の展望

消費者の研究は、マーケティングなどで盛んに行われているが、その成果は企業の経営に活用されるのみで、消費者実態や動向は消費者自身の生活の質の向上に還元されていない。消費者被害が増大する中で、パーソナルファイナンス、生活経営も含めた「消費者実態」を明らかにし、それを消費者政策、消費者教育、消費者支援に結びつける方法を研究する。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・企業からみた「消費者」と消費者対応
- ・企業と消費者の双方向コミュニケーション

◆受験生等へのメッセージ

私たちが生活している現代社会は、急激に変化しています。そして、「生活」を切り口にすると、標準的な生活の時代から、生活創造の時代に入っています。自分の身の回り1メートルから出発し、自分の生活を見つめるとともに、周りの人の生活をじっくり見て、その関係やネットワークを観察しましょう。すると、その共通の背景と生活主体の多様性がみえてくるでしょう。それぞれの生活目標や生活資源は生活者の生活経営を左右します。共通に枠組されている経済社会やその制度が、生活者にどのように届くのか、生活者はどのように認識し行動するのか、それを見極めてこそ生活者の生活の質を高めることができるでしょう。消費者、生活者をキーワードにして、生活を社会科学として産業を生活産業に、政策を生活政策に、支援を生活主体形成へと産業、政策、生活者消費者支援などを再構築することに挑んでみませんか。

教員名	耳塚 寛明 (MIMIZUKA Hiroaki)
所 属	文教育学部人間社会科学科教育科学講座
学 位	教育学修士 (1979 東京大学)
職 名	教授
URL/E-mail	mimi@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

教育社会学 / 学力 / 進路選択 / 教育政策 / 学校組織

◆主要業績

総数 (7) 件

- ・耳塚寛明「揺れる学校の機能と職業社会への移行」社会政策学会編『社会政策学会誌第 13 号 若者一長期化する移行期と社会政策』、17-30 頁
- ・耳塚寛明「何が学力を決めるのか—A エリア小 6 算数学力の規定要因分析—」『青少年期から成人期への移行についての追跡的研究 JELS 第 4 集 細分析論文集 (1)』、お茶の水女子大学 21 世紀 COE プログラム、1-21 頁
- ・矢島正見・耳塚寛明編著『変わる若者と職業世界 トランジションの社会学 第 2 版』学文社、2005、全 201 頁

◆研究内容

教育社会学。とくに教育政策、学校組織、進路選択、学力形成に関する実証的研究。

1. 学力形成の社会学 だれが学力を獲得するのか。青少年の学力形成の過程に、家庭の経済的・文化的環境、地域特性、学校特性の観点からアプローチ。21 世紀 COE プログラム「誕生から死までの人間発達科学」の一環として、ふたつのフィールドを対象に実証研究 JELS2003(Japan Education Longitudinal Study)を進める。
2. 進路選択の社会学 だれが、どのように進路を選び取り、選抜されるのか。とくに高校生の進路選択の社会的分析。高卒無業者、ニート、フリーターにも焦点をあわせる。
3. 教育政策の社会学 国および地方自治体レベルの教育政策（義務教育、高校教育）に関する研究。

◆教育内容

学部、大学院において以下の授業を開講している。

1. 教育社会学、学校社会学の概論および特殊講義
2. 社会調査法、教育調査法に関する講義、演習
3. 教育社会学方法論に関する講義、演習
4. 教職課程における、教育社会学を中心とした講義
{2005 年度} 学部ゼミでは、「青少年の進路選択と教育選抜の社会学」をテーマに内外の基礎文献を輪読した。各回とも、最新の教育関係の文献、記事、番組等を取り上げて紹介・議論するコーナーを設け、また夏合宿を実施。大学院ゼミでは、『教育社会学 第三のソリューション』(Halsey, A.H.ほか)を基礎文献として、新自由主義的教育政策とその帰結について議論した。大学院生合宿を実施。

◆Research Pursuits

Sociological Study of Education; Educational Policy; School Organization, Educational Selection, Achievement.

Theme 1. Ecological Study of Student Achievement; I administered an empirical research on the relationship of students' achievement, their career formation and family background (Japan Education Longitudinal Study 2003 by OCHANOMIZU University).

Theme 2. Sociological Study of Student Career Formation; I analyzed changing patterns of youth transition from school to work, focusing on the emergence of young part-time workers or NEET.

Theme 3. Sociology of Educational Policy in Japan

◆Educational Pursuits

1. Introduction of Sociology of Education and School
2. Lecture and Exercise of Social Research
3. Lecture and Seminar on the Methodology of Sociology of Education
4. Lecture on Social Foundation of Education (Teacher Training Course)

In the 2005/2006 term, the major theme of a seminar in the undergraduate course was a sociological analysis of youth career formation and educational selection. In a seminar of the graduate school, we discussed on limits and possibilities of educational policies of the new right.

◆共同研究例

- ・「第3回学習基本調査」 ベネッセ教育研究所 2002年

◆将来の研究計画・研究の展望

だれが学力を獲得するのかの分析を通じて、子どもたちの学力形成に家庭・地域の経済と文化が深く関わり、学力の社会的格差が生まれていることが明らかとなりつつある。どこにいかなる資源配分（社会政策、教育政策、指導改善等）が必要であるのかの分析を通じて、スタートラインが「生まれ」によって異なる状況を平等化する方策を模索したい。わが国では唯一とっていい、青少年期からの縦断的調査研究である JELS2003 を継続し、またエリアを広げた調査研究を展開したい。

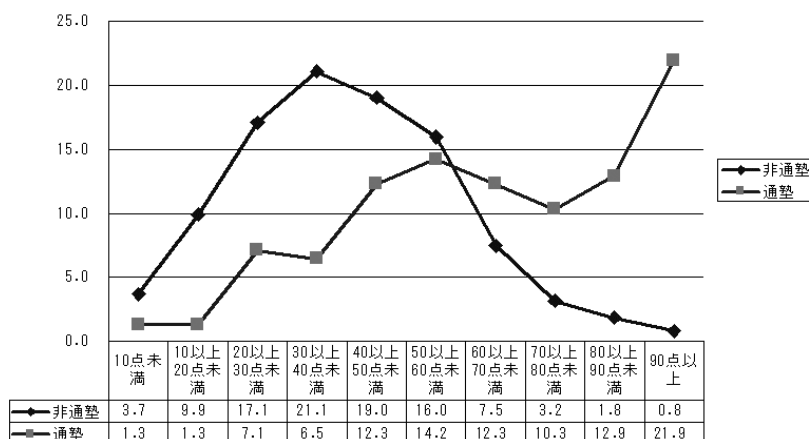
◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・学力の生態学的研究
- ・青少年の進路選択、職業意識に関する調査研究

◆受験生等へのメッセージ

いま日本の学校教育は激動期にあります。義務教育は、長い間変わらなかった制度の根幹が崩れようとし（たとえば義務教育費国庫負担や中央集権的な教育課程）、分権化が進み、「脱ゆとり」路線へと舵が切られました。行政の重点は条件整備から結果の評価に基づく資源配分へと変わりつつあります。全国一斉学力テストの導入や学校評価システムの整備はその一例です。こうした教育界を襲う変化は、子どもたちの発達に、学校の機能に、さらには社会そのものの姿に、どういう帰結をもたらすのでしょうか。教育の現在に危機意識を持って、エビデンス・ベースにアプローチして見ようとする皆さんを歓迎します。また現状分析に基づいて新たな施策を検討しようとする行政や学校との共同研究にも期待しています。

A エリア小6・受験塾通塾別算数学力分布 (JELS2003)



教員名	宮内 貴久 (MIYAUCHI Takahisa)
所 属	生活科学部人間生活学科生活文化学講座
学 位	博士 (文学) (2003 年 筑波大学)
職 名	助教授
URL/E-mail	http://www.aesthe.ocha.ac.jp/~hp/miyauchi/miyauchi@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

家相 / 風水 / 職人

◆主要業績

総数 (5) 件

- ・宮内貴久 2006 『家相の民俗学』 吉川弘文館
- ・宮内貴久 2005 「家相の民俗と書物」『歴史評論』664号 校倉書房
- ・宮内貴久 2006 「番匠巻物―書き伝えること・呪物・文字意識―」『奥会津の職人巻物』 神奈川大学日本常民文化研究所

◆研究内容

今年度は学位論文「家相の受容と展開に関する民俗学的研究」を、吉川弘文館から『家相の民俗学』と題して公刊できたことが最大の成果である。

また、会津を中心とする職人巻物研究も、全国的な展開の視野が開け、史料の読解から呪い歌について大きな展開を見いだすことができた。この点については神奈川大学日本常民文化研究所での口頭発表、ならびに論考を発表した。また、国立民族学博物館での共同研究でも一部口頭発表を行い、論文作成中である。

蔵書と出版文化については若尾政希（一橋大学）氏が研究代表者である科研に研究協力者として参加した。その成果の一部は『歴史評論』誌上に発表した。

◆教育内容

学部の授業では民俗学を中心とした講義群を行っている。今年度からはパワーポイントを導入した。このためフィールドで撮影した画像、ビデオなどにより視覚的な授業を進めることができた。今後もコンテンツを充実させていきたい。

また、学外での巡検も江戸東京たてもの園、深川、銀座、秋葉原などで実施した。今後も学外でのフィールドワークを行っていきたい。

大学院の授業ではアナール派の著作の輪読を行い史料操作法と史料批判について授業を行った。

◆共同研究例

- ・「奥会津の職人巻物の民俗学的研究」 神奈川大学日本常民文化研究所委託研究(2002～2004)

◆将来の研究計画・研究の展望

日本の家相研究は東アジアの風水研究につながるテーマである。今後は東アジアの風水との比較研究、東アジアの建築文化の研究に進化させていきたい。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・風水研究
- ・職人研究
- ・街並み保存

◆受験生等へのメッセージ

大学はキャンパスで学ぶだけでなく、図書館や美術館といった施設、さらにはフィールドワークにより広く学ぶところです。

私は機会があるごとに学生を連れて色々なところに行っています。昨年度は江戸東京建物園、深川富岡八幡宮の茅の輪行事、月島・銀座、茨城県桜川市真壁町などに行きました。

お茶大に入って色々なところを訪れて学びましょう。

教員名	宮尾 正樹 (MIYAO Masaki)
所 属	文教育学部言語文化学科中国語圏言語文化講座
学 位	文学修士(1982 東京大学)
職 名	教授
URL/E-mail	miyao@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

中国 / 近代 / 文学

◆研究内容

グローバル化する中国における文学、文化の問題について、海外在住作家や、インターネット文学、文化的アイデンティティの問題などを題材に考えています。

五四時期の文白論争、30年代の大衆語論争など、言語（書き言葉）と社会の問題についても考えています。

インターネット文学については、有名な楽府「木蘭辞」（ディズニーのアニメ「ムーラン」の題材になりました）の、インターネット上で流布するさまざまなパロディを分析して、そこにジェンダーやナショナリズムの問題が見えることや、いわば隠微なメンタリティの媒体としてのインターネット空間のあり方を考察しました。

グローバル化する中国における文学については、ハ・ジンという在米の中国人作家の作品を取り上げ、欧米の中国観を内面化／戦略化したものであること、そして、彼の作品の中国語圏における受容のされ方に、現在の中国社会の（グローバル）文化のあり方／見方を見てとることができることを指摘しました。

◆教育内容

○中国語

中国語初級では、通常の授業の他、留学生を招いて、学んだ中国語でネイティブ・スピーカーとコミュニケーションをする楽しみを味わってもらうこともあります。

中級の講読では、中国語の新聞記事を読んで、読解力をつけると同時に、日本のマスコミではあまり報じられないような、中国の社会や文化の問題を知ってもらうことを心がけています。

○近代文学史

中国の近代文学、現代文学の代表的な作品に触れてもらうとともに、中国の近代、現代における文学のあり方についても考えるきっかけをつかんでもらうことを心がけています。

○アジアにおける国語問題

中国文学の専門科目以外に、アジアの近代におけることばと社会の問題、特に「国語」の問題について考えてもらう授業も担当しています。日本、中国、東アジアが中心となります。

ディベート形式でことばと社会の問題について考える授業も担当します。

◆Research Pursuits

to study the transformation of culture and identity in globalizing China, focusing on exile writers, culture crisis, etc.

to study the problem of written language and society, focusing on vernacular language movement in the May Fourth Era, the Mass language movement in the thirties, etc.

ex.)

Chinese traditional Yuefu, Mulan Ci, based on which Disney made the cartoon film, Mulan, has produced a lot of her descendents in literature and in present days, in internet. They show us the notions of gender, nationalism, and so on, of Chinese people and culture, at the same time, reveal the characteristics of internet space.

About the literature in globalizing China. Ha Jin, who went to US in late 80s, published stories written in English, and won many awards. His pieces and the way they have been read in the Western world reveals how in the age of globalization, Chinese writers/literature can and have to adapt themselves to the logic and the value of the Western world, esp. those of US.

◆Educational Pursuits

*Chinese language

Besides ordinary lessons, the class invites Chinese students and try to chat with them in Chinese, through which students understand the fun of communication with Chinese through Chinese language.

In the intermediate class, the class read Chinese newspapers, through which acquire the skill of reading, and at the same time get familiar with various problems of Chinese society and her culture, most of which Japanese media rarely feature.

*Modern Chinese literature

In this class, through reading masterpieces of Chinese modern literature, students get to consider the functions of literature itself in modern China and her culture.

*National languages in modern Asia

The problem of National language(KOKUGO in Japanese, GUOYU in Chinese) in modern Asian countries have a lot of common characteristics and at the same time show differences according to their history and process of modernization. This class deals with this problem, mainly focusing on the East Asia.

There is another class which also deals with the problems of the language and the society. Students think about them through debates.

◆共同研究例

・死、あるいはその哀悼について、中国の古典文学から近現代文学まで、どのように表現してきたかを共同研究しました。(佐藤・宮尾編『ああ、哀しいかな』汲古書院)

◆将来の研究計画・研究の展望

社会や文化の中に文学や言語を置いて研究していきたいと思っています。

最近では、近代や現代の都市の風景を形作るもの、たとえば、1920年代、30年代の人力車(夫)と現代中国のタクシー(運転手)の文学における表象について興味を持っています。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・グローバル化と文学
- ・言語と社会
- ・情報化社会と文学

◆受験生等へのメッセージ

何についてもそうですが、中国について、マスコミが流す情報だけを信じないこと。同時に、中国に旅行したり、身近な中国人を通じて作り上げた自分なりの中国イメージを過信しないこと。

「中国は～」とか「中国人は～」とかいう言い方には特に注意が必要かと思います。

教員名	宮本 泰則 (MIYAMOTO Yasunori)
所 属	理学部生物学科
学 位	理学博士 (1989 筑波大学)
職 名	助教授
URL/E-mail	http://www13.plala.or.jp/miyamotolab/ miyamoto@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

細胞外マトリックス / 細胞接着 / ビトロネクチン / 神経細胞 / 重力応答

◆主要業績

総数 (4) 件

- ・ Saito, T., Ambe, H., Takeda, M., Murase, S., and Miyamoto, Y. (2005) "Role of Vitronectin in the Proliferation, Differentiation and Neurite Extension of Mouse Cerebellar Granule Cell Precursors." Cell Struct. Funct. (Supplement) 30, 31.
- ・ Miyamoto, Y., Saito, T., Ambe, H., Takeda, M., and Murase, S. (2005) "Vitronectin is Essential for the Differentiation of Cultured Mouse Cerebellar Granule Cell Precursors." Mol. Biol. Cell (Supplement) 16, 493a.
- ・ Ishikawa, Y., Mogami, Y., and Miyamoto, Y. (2005) "Analysis of the gravity response mechanism of actin filament in osteoblasts". Biol. Sci. Space 19, 78-79

◆研究内容

細胞の周りにある不溶性成分である細胞外マトリックスの細胞に対する作用（増殖・分化、接着、機械刺激応答）解析を進めている。細胞外マトリックスは、コラーゲンやヒアルロン酸に代表されるが、細胞の周りにあり組織への物理的強度や水分保持に貢献している。細胞外マトリックスの役割として、さらに細胞増殖・分化の制御や機械刺激応答への関与が知られるようになってきている。特に細胞外マトリックスは、空間的な構造をとることからゲノム情報解析では取り扱えない空間情報を担うものであることに、この細胞外マトリックスを解析する大きな意義がある。具体的には、以下の3テーマに関して進めている。第1のテーマは、マウスの小脳顆粒前駆細胞運命決定における細胞接着分子ビトロネクチンの役割解析、第2のテーマは、マウス骨芽細胞株における過重力負荷応答における細胞接着の役割の解析、第3のテーマは、馬屈腱炎における細胞接着分子インテグリンの関与である。

◆教育内容

教育では、私が専門としている分野である分子細胞生物学を生物学科の中で担当している。

2005 年度学部担当科目

「分子細胞生物学Ⅱ」細胞外シグナルが標的分子までのシグナル伝達機構に関して概説した。

「細胞生物学実習」細胞外マトリックス分子に関する精製法、細胞接着活性測定を含め、動物細胞への遺伝子導入及びタンパク質発現などの実習を行った。

「生物学実習Ⅱ」物質分離Ⅱを担当

「特別研究」3名の学生を担当し、卒業研究発表会及び卒業論文の指導を行った。

大学院担当科目

「動物分子細胞生物学」、「動物分子細胞生物学演習」、修士論文指導・審査（2名）論文題目

「マウス小脳顆粒前駆細胞の運命決定における細胞外マトリックスタンパク質ビトロネクチンの機能解析」

「骨芽細胞 MC3T3-E1 の細胞接着に関する過重力負荷応答の解析」に関して研究をまとめた。

◆Research Pursuits

Extracellular matrix, which has the property of insolubility and surrounds cells, gives physical strength and water-holding activity to tissues. Recently, besides these function, extracellular matrix is known to be involved in the regulation of cell proliferation, cell differentiation, cell adhesion, and response of mechanical stress. I am studying about the role of extracellular matrix. Especially, three-dimensional structure of extracellular matrix might give spatial information to cells. This information could not be analyzed only by approach of genome information. I think this spatial information of extracellular matrix must be important to understand organisms. Now, I am running the following three projects. 1) Functional analysis of a extracellular matrix protein vitronectin on fate of mouse cerebellar granule cell precursors. 2) Analysis of the gravity response mechanism mediated with cell adhesion in osteoblast cells. 3) Role of cell adhesion molecule integrin in the development of equine superficial digital flexor tendonitis.

◆Educational Pursuits

I deliver lectures about molecular cell biology, which is my major, for undergraduate and graduate students.
My allotted class in 2005 of undergraduate program.
“Cell and Molecular Biology 2” The outline of signal transductions from extracellular signal to the targeted molecule.
“Laboratory Course of Cell Biology” Experiments of purification of a extracellular matrix protein, assay of cell spreading, introduction of gene into animal cells, and expression of proteins in animal cells.
“Research on Biology” I was in charge of three undergraduate students and supervised their graduation thesis.
My allotted class in 2005 of graduate program.
“Animal Molecular Cell Biology”, “Seminor: Animal Molecular Cell Biology”.
Supervision of two dissertations for master students.
The titles of dissertations
“ Functional analysis of a extracellular matrix protein vitronectin on fate of mouse cerebellar granule cell precursors.
Analysis of the gravity response mechanism mediated with cell adhesion in osteoblastic cell MC3T3-E1”

◆共同研究例

・「ウマ屈腱炎発症における接着分子の関与」 JRA 競走馬総合研究所

◆将来の研究計画・研究の展望

細胞外マトリックスの持つ空間情報が、どのように細胞により認識されているのか、その機構を現在進めているビトロネクチンの解析を中心に進めていく。このことにより神経系におけるビトロネクチンの果たしている役割が明らかにされることが期待される。また機械刺激応答解析では、骨量減少の機構解明に結びつくことが期待される。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・小脳における疾患とビトロネクチンの関係
- ・骨芽細胞活性における細胞外マトリックスの貢献

◆受験生等へのメッセージ

最近の生物学では、ゲノムプロジェクトやプロテオームに代表されるように生体の構成要素を網羅的に解析する技術が急速に普及し、生物学に大きな変化を与えています。しかしそれだけで、生物を理解できるのでしょうか？生物は、それぞれ"かたち"を持っています、この"かたち"が、あるからこそ、生物として機能することができます。この"かたち"に関わっているのが、細胞の周りにある細胞外マトリックスです。
細胞外マトリックスは、細胞の周りに不溶性の 3 次元構造物を構築し、組織に物理的な強度を与えるだけでなく、細胞内にシグナルを送り、様々な生命現象に関わっています。宮本研究室では、この細胞外マトリックスが、どのように 3 次元構造を作り上げ、細胞の増殖や分化などの現象に関わっているのかを分子レベルで解明することを目指しています。少人数の研究室ではありますが、一人一人を大事にしながら、各々の研究テーマと各自向かい合いながら研究に励んでいます。宮本研究室で研究をしてみたいという方は、大歓迎です。お待ちしております。

教員名	三輪 建二 (MIWA Kenji)
所 属	文教育学部人間社会科学科教育科学講座
学 位	1983.3.31 教育学修士 東京大学 1993.3.17 博士 (教育学) 東京大学
職 名	教授
URL/E-mail	http://lw.cc.ocha.ac.jp/qube.li.ocha.ac.jp/hss/educi/miwa/k-miwa@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

s

省察 / 専門職 / 専門職大学院 / 成人学習論 / 意識変容

◆主要業績

総数 (4) 件

- ・三輪建二 (研究代表者) 「生涯学習関係職員・指導者の養成と研修に関する比較研究」 (平成 13~16 年度科学研究費補助金基盤研究 B・1 研究成果報告書、2005 年 3 月。
- ・三輪建二 (研究代表者) 「「市民講師」養成プログラムに関する実証的研究 (平成 16 年度文教協会研究助成研究成果報告書)」、2005 年 3 月。
- ・三輪建二 「専門職が大学院で学ぶということ : 成人学習論特論 I (2004) を例にして」 『お茶の水女子大学生涯学習実践研究』 第 3 号、2005 年 3 月、pp.1-42.
- ・S・B・メリアム、R・カファレラ著、立田慶裕・三輪建二監訳 『成人期の学習 : 理論と実践』 鳳書房、2005 年。

◆研究内容

21 世紀 COE 「誕生から死までの人間発達科学」のプロジェクト 4 のメンバーとして、第 2 回小田原調査の調査項目の設定に関わった。

科学研究費「生涯学習関係職員・指導者の養成と研修に関する比較研究」の研究代表者として、研究成果報告書をまとめると同時に、平成 17 年度から科学研究費「成人学習支援専門職の能力開発に関する研究 : 専門職大学院に向けて」を開始した。

日本社会教育学会プロジェクト研究「専門職大学院と社会教育の役割」の担当者となり、プロジェクト研究プログラムを作成すると同時に、専門職大学院研究の基本文献として、D・ショーンの The Reflective Practitioner(1983)の翻訳作業に関わった。

◆教育内容

学部では、生涯学習という、大学を卒業してから体験する学習について、①概論では事例をふまえて興味関心をもってもらうよう努力し、②特殊講義では、生涯学習プログラムの作成を通して、追体験的に学べるよう工夫している。③演習では、生涯学習の支援者 (教育者) の立場から、実践記録などをもとに、成人学習論・成人学習支援論を理解してもらっている。

大学院では、成人学習論、成人学習支援者論、専門職論、専門職大学院論を、欧米と日本の文献をもとに検討している。成人学習論特論では、社会人院生の職場経験のリフレクションををふまえた授業編成を試みている。

◆Research Pursuits

I was taking part in a COE-project: human-development science from birth to death, and made a second research project in Odawara city.

As a chief I edited the report "comparative study about education and further education of lifelong learning staffs". From 2005 I begin new research project "Study about development of facilitators for adults learners", which is also a project sponsored by Japan Society for promoting science.

As a chief of a research project "Professional schools and a Role of Social Education" in the Japan Society for the Study of Adult and Community Education, we are beginning to translate an important book "the Reflective Practitioner" by D.Schon.

◆Educational Pursuits

At the undergraduate course, I am teaching lifelong learning. It is an unfamiliar to students about 20 years old. Then I am not only lecturing lifelong learning, but also using some methods such as case study method, planning lifelong learning curriculum, reading practical documents.

At the graduate course, I am teaching adult learners, such as school teachers, nurses, NPO staffs etc. I try to use a "self reflection method" and form their own practical experience, they find gradually their research questions.

◆将来の研究計画・研究の展望

科学研究費補助金「成人学習支援専門職の能力開発に関する研究：専門職大学院に向けて」の研究代表者として、平成 20 年度までに、成人学習支援専門職大学院の構想をまとめることになっている。日本社会教育学会プロジェクト研究「専門職大学院と社会教育の役割」のまとめと同時に、成人学習支援専門職大学院構想をまとめ、実験カリキュラムを実施したい。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・お茶の水女子大学における専門職大学院構想
- ・現職教員の研修に関する研究
- ・社会人大学院生の教育・研究指導に関する研究

◆受験生等へのメッセージ

学習や教育は、学校教育だけに限定されるものではありません。生涯学習は、一生涯にわたる学習という時間軸と、学校のほかお稽古事、企業内教育、NPOやボランティア活動における学習といった空間的な広がりを持つ、新しいアイデアです。学習や教育に対するこれまでの固定観念を打ち破る作業に、共に取り組んで生きたいと思っています。

大学は、高校卒業生が直接訪ねる教育機関としての役割から、社会人の再教育の場への転換しつつあります。成人学習論という観点から、大学教育、大学での研究の質的転換をはかる作業に、取り組んで生きたいと考えています。

教員名	村田 容常 (MURATA Masatsune)
所 属	生活科学部食物栄養学科
学 位	農学博士 (1987 東京大学)
職 名	教授
URL/E-mail	http://www.food.ocha.ac.jp/chozo/murata.htm murata.masatsune@ocha.ac.jp

◆研究キーワード

リンゴやレタスの酵素的褐変 / ポリフェノールオキシダーゼ・PAL /
ビタミンCやフルフラールのメーラード反応 / 野菜の非加熱殺菌 / 黄色ブドウ球菌とエンテロコキシン

◆主要業績

総数 (8) 件

- ・ Browning of Model Orange Juice Solution: Factors affecting the Formation of Decomposition Products. Yuki Shinoda, Hajime Komura, Seiichi Homma, and Masatsune Murata. Bioscience, Biotechnology, and Biochemistry, 69, 2129-2137 (2005).
- ・ Purification and characterization of wheat (*Triticum aestivum*) polyphenol oxidase. Tomoko Kihara, Masatsune Murata, Seiichi Homma, Shigeharu Kaneko, and Kozo Komae. Food Science and Technology Research, 11(1), 87-94 (2005).
- ・ Effect of roasting on properties of the zinc-chelating substance in coffee brews. Xu Wen, Akiko Enokizo, Harumi Hattori, Harumi, Sachiko Kobayashi, Masatsune Murata, and Seiichi Homma. Journal of Agricultural and Food Chemistry, 53 (7), 2684-2689 (2005).

◆研究内容

酵素的褐変の食品学研究：リンゴやレタスの酵素的褐変を生化学的、食品学的に解析し、その制御法を提案している。具体的には酵素（ポリフェノールオキシダーゼ）の単離、性状、クローニング、アンチセンス法による発現抑制、ポリフェノール類の分析、フェニルアラニンアンモニアリアーゼの役割、その抑制による褐変制御などを研究している。

食環境における微生物制御：和菓子中の黄色ブドウ球菌を調査し、その性状を明らかにしている。また、野菜に付着した食中毒菌の殺菌法を検討している。

メーラード反応：ビタミンCやフルフラール関与の褐変反応を食品化学的に解析している。また、微生物を利用した分析法も開発している。

◆教育内容

食品は生物を原料とするがそのものではなく、加工貯蔵して食に供される。加工貯蔵中に食品素材は化学的、物理的、生物学的変化を受け、その制御は食生活上重要である。食物栄養学科で食品保存・製造学（農産物の性質と加工法、貯蔵法の原理、貯蔵法各論）、食品保存・保存学実験（豆腐、チーズの製造、水分活性測定、イソフラボンのHPLC分析、食中毒毒素のELISA等）、食品微生物学（微生物とは、微生物学の歴史、微生物の生理、醸造食品、細菌性食中毒等）を担当し、当該分野の知識、概念を教えるとともに、実験指導を行っている。

◆Research Pursuits

Enzymatic Browning of Foods: We have analyzed the enzymatic browning of apple and lettuce and have proposed the regulation method. Our group have isolated, characterized, and cloned polyphenol oxidase of apple fruit. We then repressed its expression by the antisense technology. Further we have examined and regulated phenylalanine ammonia lyase in cut lettuce.

Regulation of Microbes in Foods: We have surveyed and characterized *Staphylococcus aureus* in Japanese cakes, and have proposed a modified detection method for enterotoxin A. We also examined the effect of disinfectants on food-borne disease bacteria attaching to vegetables.

Maillard reaction: We analyzed the Maillard reaction in which AsA or furfural is involved. We also have developed analytical methods using microbes for the Maillard reaction.

◆Educational Pursuits

Foods are derived of organisms, which are processed and preserved. During processing and preservation, chemical, physical, and biological changes happen. The understanding and regulation of changes are important from the standpoint of food science. I have taught food processing and preservation, its laboratory course, and food microbiology.

◆共同研究例

- ・小麦ドウの変色要因の解析
- ・柑橘ジュースの変色要因の解析
- ・大豆発酵産物の抗菌活性評価

◆将来の研究計画・研究の展望

- ・酵素的褐変の食品学研究:様々な野菜や果物の酵素的褐変を生化学的、食品学的に解析し、その制御法を提案する。
- ・食環境における微生物制御:黄色ブドウ球菌の毒素産生を抑制する新たな方法を開発する。また、野菜に付着した食中毒菌の非加熱殺菌法を検討する。
- ・メーラード反応の解析:フルフラール関与の褐変反応を食品化学的に解析する。
- ・変色の食品学研究:小麦ドウの変色要因を解明する。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・酵素的褐変の制御と解析
- ・殺菌剤の食中毒菌に対する評価

◆受験生等へのメッセージ

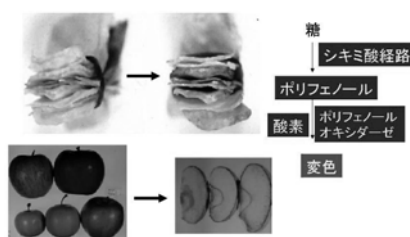
学部の受験生へ:食品を科学しましょう。食品は生物が原料ですが、生物そのものではありません。製造、保存の間に様々な変化がおきます。化学や生物学を使い、食品のでき方、保存のし方を考えましょう。食べ物と実験科学の好きな人には最適なところですよ。高校では、化学や生物、物理など理科の基礎や原理をしっかりと勉強してください。

大学院の受験生へ:食品の褐変や微生物制御について研究しています。食品学、有機化学、酵素学、微生物学などが基盤になります。食品の変化を科学の目で分析し新たな発見をするのは何より楽しいものですが、研究は継続が力です。毎日しっかり実験しましょう。

期待される効果

- ・食品産業
カット野菜、カット果実の流通、利用
(外食産業および家庭)
- ・食品科学
食品の変色のメカニズム
- ・食資源
変色による使用可能食材の廃棄率減少
- ・食育、家庭科・理科教育
身近なサイエンスの体験、キッチンの科学

食品の酵素的褐変とその制御



教員名	村田 眞弓 (MURATA Mayumi)
所 属	文教育学部言語文化学科英語圏・欧州言語文化講座
学 位	文学修士 (1979 東京大学)
職 名	助教授
URL/E-mail	http://www.li.ocha.ac.jp/index.html muratama@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

フランス 17 世紀宗教思潮 / 神秘主義 / 古典主義

◆研究内容

フェヌロンの『テレマックの冒険』をめぐり近年新たな読解の試みがいくなされていく。かつてこの作品が彼の神秘主義思想の表明であることを、作品中の「父」概念の分析を通じて論証し、日本フランス語フランス文学会で発表したことがある。今回新しい研究を参照しながら改めてより広範な文脈に位置づけつつ『テレマックの冒険』を読み直し、その結果を私的研究会において発表した。発表と質疑を通じ、ホメロスの『オデュッセイア』補遺という形を借りながらキリスト教神秘主義思想に裏打ちされた帝王学を未来のフランス王と目されていた少年に説くこの冒険譚が、「脱構築」の観点からの読解により、より多くを語る可能性を持つ作品であることが明らかとなった。又発表の機会にテキストの何カ所かを丁寧に翻訳する作業を行い、古典的フランス語が持つ端正かつ流麗な美しさを改めて確認し味わうことができた。

◆教育内容

【学部】17 世紀フランスの文学作品の講読を通じて「近代」について考えるきっかけを与えると同時に、古典的フランス語読解のすべを学ぶという基本的方針の下、2005 年度はモリエールの『ドン・ジュアン』を取り上げた。ドン・ジュアンが近代的自由思想の体現者であるかを、テキストを分析しながら個々の学生に考えさせた。後半は『ドン・ジュアン』にも言及している当時の演劇批判を精読しながら、時代背景への理解を深めた。

【大学院】神秘家の言説をテーマに、前半はサン＝マルタンの『渴望する人』の一部を精読し、後半は17 世紀フランス女性神秘家の自伝を読みながら、神秘体験の「語り」が成立する場について考えた。神秘家の言説は、特に今回取り上げた自伝といった言説の場合、語られる内容のみならず、自己を神秘体験の場として規定しつつ行われる「語ること」そのものが、何よりも彼らのメッセージとなっていることを確認した。

◆将来の研究計画・研究の展望

フェヌロンは結果として、ポール・アザールが「ヨーロッパ精神の危機」と名付けた時代を象徴する「新旧論争」「開かれた宇宙」等と深く関わり、発言をした。彼の思想の本質をその神秘主義思想をも含めより多元的観点から理解することにより、〈科学者の近代＝「進歩」〉とは別の位相から見た〈文学者の近代〉を浮き彫りにしていけるのではないかと。まずは彼のコスモロジーを『神の存在証明』を中心に整理しようと考えている。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・神秘家の言説(discours)：神秘体験をどう語るか
- ・神秘家の言説(discours)：自己を語る語り（神秘家の自伝）

◆受験生等へのメッセージ

17世紀フランスに関心を持つ学生はそう多くはない。確かに遠い昔の事柄であり、「今」の関心と重なる部分は少なく、「現在」の問題意識に対する即効性に乏しい。だが本当にそうだろうか。科学も学問も進歩し続けるという考えの欺瞞性が暴かれて久しいが、まだどこかでこの神話を信じたがっている自分に気付くとき、また理路整然と論述できることが絶対の価値であると教えられ、論理的整合性の枠をはめることのできない事象を切り捨てたくなったとき、そうした考え自体が実は「近代」の申し子であることに改めて思いをはせるべきだと思う。そして現在我々が直面している問題の多くがそうした「近代」に根ざすものである以上、いったい「近代」とは何なのか、何であったのかを今一度自分自身で考えてみるべきではないだろうか。この「近代」が17世紀ヨーロッパのあたりから始まること、デカルトを生んだフランスにその一つの典型があることを考えるなら、17世紀フランス研究が取り組み甲斐のあるテーマであることは明白だ。

教員名	村松 志野 (MURAMATSU Shino)
所 属	子ども発達教育研究センター
学 位	
職 名	アソシエイトフェロー
URL/E-mail	http://www.kodomo.ocha.ac.jp/~ccae/index.html muramatsu.shino@ocha.ac.jp

◆研究キーワード

カリキュラム開発

◆研究内容

お茶の水女子大学・アプリカ特設講座ならびに土曜保育フォーラムに対する、現職保育士の関心内容並びに、参加者の属性を分析し当講座がより効果的な社会貢献をするためのカリキュラム開発を行っている。

◆教育内容

特設講座において行なわれる全講義に使用される教材の作成に参画し、学生から寄せられた教育内容についての要望をまとめ、カリキュラムに反映させた。

また、種々の公開講座の開催にあたり、その企画・運営を行った。

◆Research Pursuits

By analyzing the questionnaires obtained from the students, I have developed and modified the curriculum used in our course.

◆Educational Pursuits

Engaged in the curriculum and material development for all the lectures made in our course.

Summarized the requests from the students, and reflected their request on curriculum and educational material development.

Involved in the selection of the subjects for the open lectures for child specialists in-service.

◆将来の研究計画・研究の展望

現職保育者や乳幼児保育に関心を持っている社会人、学生に対し保育の質の向上に役立つカリキュラム開発や、多くの社会人に向けて保育に関する公開講座やフォーラムを実施していきたい。

教員名	室伏 きみ子 (MURAKAMI-MUROFUSHI Kimiko)
所 属	理学部生物学科
学 位	医学博士 (東京大学)
職 名	教授
URL/E-mail	murofush@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

Cell differentiation / Cell proliferation / Stress responses /
Cyclic phosphatidic acid (cPA) / Cholesterylglucoside

◆主要業績

総数 (18) 件

- ・ ストレスの生物学 (オーム社、2005 年)
- ・ Identification of Residues Responsible for Ligand Recognition and Regioisomeric Selectivity of LPA Receptors Expressed in Mammalian Cells.
J. Biol. Chem. 280:35038-35050 (2005)
- ・ 今、なぜ、若者の理科離れか (日本学術協力財団、2005 年)

◆研究内容

我々の研究室では、主に、細胞の増殖・分化、ストレス応答の制御機構について研究を進めている。いずれも、きわめて独創性の高い研究であり、これらの研究成果を、社会に還元すべく努力している。さらに科学への理解増進の視点から、アウトリーチ活動のあり方について検討するために、海外の活動の調査・研究を行なっている。

1. 細胞の増殖・分化の制御機構—環状ホスファチジン酸の働きとその代謝調節
2. 細胞と動物個体のストレス応答—ステリルグルコシドの役割とその代謝調節
3. テロメラーゼの活性調節機構
4. 海外におけるアウトリーチ活動

◆教育内容

学部・大学院ともに、細胞の構造と機能について、講義や演習を行なっている。また、自分自身の研究に基づいて新たな研究テーマを設定し、研究指導を行なっている。学生たちが、細胞の種々の働きの仕組みを明らかにするための研究法や、先人の努力についても詳しく学び、それらを基礎に、高い知的基盤と問題解決能力を身に付けて欲しいと願っている。

1. 細胞生物学 I & II
2. 細胞生化学特論、細胞生化学特論演習
3. 細胞情報学特論、細胞情報学特論演習
4. 生命科学

◆Research Pursuits

We have studied on the regulatory mechanisms of cell proliferation, cell differentiation and stress responses. All project are extremely original, and we intend to return the results of our research to the society.

From the standpoint of social understanding for the science, we also research the outreach activities in the foreign countries.

1. Regulatory Mechanism of Cell Proliferation and Differentiation—Role of Cyclic Phosphatidic Acid and Regulation of Its Metabolism
2. Stress Responses of the Cell and Animals—Role of Sterylglucoside and Regulation of Its Metabolism
3. Regulation of Telomerase Activation and Inactivation
4. Outreach Activities in Foreign Countries

◆Educational Pursuits

I have some lectures and seminars on the structure and function of the cell. And I supervise the dissertation for the undergraduate and graduate students on the new research projects based on my own investigations.

The goal of my education is to bring up my students to be excellent human beings with high intelligences and problem-solving abilities.

1. Cell Biology I & II
2. Cell Biochemistry & Seminar
3. Signal Transduction & Seminar
4. Life Sciences

◆共同研究例

- ・環状ホスファチジン酸(cPA)のがん浸潤・転移の抑制作用

◆特許

- ・環状ホスファチジン酸(cPA)の医療への応用：がんの浸潤・転移抑制剤として、ヒアルロン酸増強剤として
- ・コレステリルグルコシド(CG)の医療への応用：ストレス性疾患の予防と治療
- ・テロメラーゼ阻害剤 TELIN の医療への応用：抗がん剤としての利用

◆将来の研究計画・研究の展望

我々はこれまでに、新しい生理活性脂質である環状ホスファチジン酸(cPA)やコレステリルグルコシド(CG)を見出し、それらが細胞の増殖、分化、ストレス応答の調節を行なっていることを明らかにして来た。それらの物質の持つ本来の生理的役割と、それらが機能するために必要な受容体や代謝調節のメカニズムの解明が、現在の目標である。

さらには、cPAやCGの医療への応用についても、共同研究によって検討を行なっている。

またテロメラーゼ阻害剤 TELIN など、我々が見出した制癌物質を、医療へと応用する道を探ることも目指している。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・環状ホスファチジン酸(cPA)の医療への応用
- ・コレステリルグルコシド(CG)の医療への応用
- ・日本におけるアウトリーチ活動のあり方

◆受験生等へのメッセージ

二十一世紀は生命の世紀と言われています。

生命の不思議さと素晴らしさを解き明かすことの楽しさを、若い方たちと共有したいと思っています。

生き物を愛し、人間を愛する皆さん、お茶の水女子大学の生物学科は、そんな方たちを待っています。

教員名	最上 善広 (MOGAMI Yoshihiro)
所 属	理学部生物学科
学 位	理学博士 (1983 東京大学)
職 名	教授
URL/E-mail	http://bios.cc.ocha.ac.jp/data/Mogami/MOG.html mogami@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

動物生理学 / 重力生物学 / 応答可塑性 / 繊毛・鞭毛運動 / アロメトリー

◆主要業績

総数 (12) 件

- ・Akiyama, A., Ookida, A., Mogami, Y. and Baba, S.A. (2005) Spontaneous alteration of the pattern formation in the bioconvection of *Chlamydomonas reinhardtii*. J. Jpn. Soc. Microgravity Appl., 22, 210-215.
- ・Kato, Y., Mogami, Y. and Baba, S.A. (2005) Longevity of a *Paramecium* cell clone in space: hypergravity experiments as a basis for microgravity experiments. Adv. Space Res., 36/7, 1225-1228.
- ・Sawai, S., Mogami, Y. and Baba, S.A. (2005) Effect of clinorotation on the proliferation of *Paramecium tetraurelia*. Space Utilization Research 21, 194-197.

◆研究内容

重力はサイズ依存性の外力であり、現象のサイズが小さくなるにつれてその影響力は急減する。従って、重力は地球上での生命活動を規定する要因ではあるものの、生物の大きさやデザインさらにはそのマクロな行動を制限する拘束的な作用力としてのみ捉えられてきた。この既成概念をうち破り、重力が生体システム内での要素間の協同作用を通じて全く新しい能力（特性）を創出できる可能性を提示したい。個々の構成要素のレベルでは極微弱な応答（重力応答）が、要素間の協同作用と、その産物である動的不安定性を通じて、集団としての「思いもよらない特性」が発現されるという、新しい概念の検証を、微生物の示す生物対流現象の研究を通して試みた。テトラヒメナやクラミドモナスの生物対流現象の解析から、パターンの発現が、集団要素（細胞）間の協同作用に基づくものであり、その創出や空間周波数の変動特性が遠心過重力に鋭敏に応答すること、を明らかにした。

◆教育内容

平成17年度は学部生に対し、専攻科目として、生物物理学、バイオメカニクス、動物生理学実習、動物生理学臨海実習、生物学実習Ⅱを開講（実習は他教員と合同）し、コア科目として一般生物学・臨海実習、コアクラスター「総合環境学」（生物多様性とその保全）を担当した。大学院生に対しては、細胞生理学特論、同演習、生物学演習（前期課程）、生物複雑系、同演習（後期課程）を開講した。また、特別研究として、大学院前期3名、後期2名の研究指導を行った。前期学生のうちの一人については、その研究内容が論文として学会誌に掲載された。

◆Research Pursuits

Gravity has been considered as a kind of restrictive force providing such as the mechanical limits of growth and morphology of the organisms. I would like to reveal the possibility for gravity to develop new functions of the biological systems via collective interactions between the elements of the system. Collective interactions, which are ubiquitous in nature, and the resultant dynamic instability of the system itself are known to have an ability to amplify the subtle effects of external forces, such as that of gravity on the biological event the cellular dimensions. In order to assess this possibility, bioconvection performed by aquatic microorganisms are analyzed. The analyses revealed that the spatio-temporal patterns of bioconvection are the result of the integration of interactions between individual microorganisms and that pattern formation and fluctuation frequency of the pattern as a measure of the dynamic properties of bioconvection were really sensitive to the alteration of the gravity given by centrifuge.

◆将来の研究計画・研究の展望

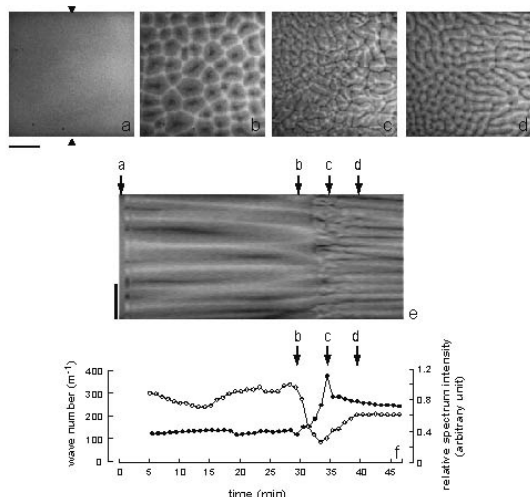
微小重力環境下での生物の飼育と維持。特に長期宇宙飛行を想定した生物キャリアの開発。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・過重力実験装置を用いた重力応答の解析
- ・単細胞生物のアロメトリー

◆受験生等へのメッセージ

私の専門は動物生理学。動物たちが生きるためにどのような工夫をしているのかを調べています。生命の長い歴史の中で培われてきた工夫の数々は、生き物のしぶとさと繊細さ、泥草の中にちらっと見える何とも言えない優美さを示しています。生き物の持つ不思議さと素晴らしさ。それがなぜ不思議なのか、なぜ素晴らしいのか。それを「科学の言葉」で語ってみたいと思いませんか。



Pattern alteration response recorded from the suspension of *Chlamydomonas reinhardtii*. (a) to (d) Plan views of the bioconvection pattern at 0.5 (a), 30 (b), 35 (c) and 40 min (d) after placing the suspension into the recording chamber. Scale bar, 10 mm. (e) Space-time plot of the bioconvective pattern formation. Density profiles measured on a linear portion at a given position in each sequential image (as indicated by faced triangles in a) are displayed side by side in a time sequence (from left to right) to form an image. Times for corresponding plan views are indicated by arrows. Scale bar, 10 mm. (f) Plot of the dominant wave number (filled circle) and the relative spectrum intensity (open circle) of the convection pattern measured on the basis of 2D-FFT as a function of time after placing the suspension into the recording chamber. Time axis shown at the bottom of the figure is common

◆Educational Pursuits

Educational activity for undergraduate students:

Lecture: Biophysics, Biomechanics, General lecture for environment (Diversity of organisms and its preservation)

Experiment: Animal Physiology, Animal physiology at Marine Biological Lab., Basic Biology II, General Biology and Marine Biological Experiment

Educational activity for postgraduate students:

Lecture: Cell Physiology, Cell Physiology (Seminar), Complexity in Biology, Complexity in Biology (Seminar)

Research for thesis: three master course students and two doctor course students. One of three students in master course published a joint paper for an academic journal.

教員名	森 義仁 (MORI Yoshihito)
所 属	理学部化学科
学 位	薬学博士 (1988 北海道大学)
職 名	助教授
URL/E-mail	mori.yoshihitoi@ocha.ac.jp

◆研究キーワード

非平衡 / 非線形 / 相乗効果 / 自触媒 / 反応性流体

◆主要業績

総数 (2) 件

- ・ S.Nakata, A.Terada, A.Yamada, M.Denda, Y.Mori, Pattern formation of a thin film is characteristically sensitive to chemical stimuli Materials Science and Engineering C, accepted.
- ・ Y.Sumino, H.Kitahata, K.Yoshikawa, M.Nagayama, S.M.Nomura, N.Magome, Y.Mori, Chemosensitive running droplet, Phys. Rev. E 72, 041603(2005).

◆研究内容

非平衡条件下の現象について以下の項目について研究を行った。(1) 生物に対する金属イオンの相乗効果、(2) 霜の成長に及ぼす重力効果、(3) 高粘性反応性流体に及ぼす攪拌効果、(4) 金属イオン錯体と過酸化水素の自触媒反応。

科学と社会のコミュニケーションに関して地域環境系 NPO と協働で環境実験教室を開催した。

◆教育内容

大学の基礎教育は一般に平衡現象に関する一方で非平衡現象は自然界広く存在する。平衡から非平衡への拡張を実験を通じて理解するような指導をした。その際に対象として化学的現象のみならず物理学的または生物学的現象も取り入れた。

専門知識を広く理解するとき、社会における自身の位置を知ることが強い動機となる。そのための一つの試みとして、環境問題を通じて地域 NPO 団体と協働で活動することを勧めた。その活動として地域 NPO 団体と協働で環境実験教室の開催を行った。

◆Research Pursuits

From viewpoint of nonequilibrium conditions we had some experiments as follows: (1)Cooperative effect of metal ions on organisms, (2)Microgravity effect on growth of frost, (3)Stirring effect on high-viscous and reactive fluids and (4)Autocatalytic reaction of metal ion complex and hydrogen peroxide.

We held environmental class open to local community collaborated with a local environmental-NPO concerning communication between science community and local community

◆Educational Pursuits

On basic educational classes of universities, natural phenomena are understood based on the equilibrium concept in general. On the other hand nonequilibrium phenomena exist widely in the nature. I guided students to understand the extension from the equilibrium concept to the nonequilibrium concept with help of various experiments, not only chemical phenomena but also physical and biological phenomena. The strong motivation to understand the special knowledge widely is given by knowing own location in the general public. For this, as a trial, collaborations with the local NPO about the environmental issues were recommended. The trial was to hold the environmental-issues oriented class open to the community collaborated with the NPO.

◆共同研究例

- ・ 金属イオン錯体と過酸化水素の自触媒反応
- ・ 高粘性反応性流体の攪拌効果
- ・ 金属イオンの生物に対する相乗効果

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・ 溶液の乾燥

教員名	森川 雅博 (MORIKAWA Masahiro)
所 属	理学部物理学科
学 位	理学博士 (1987 京都大学)
職 名	教授
URL/E-mail	http://sofia.phys.ocha.ac.jp/cgi-bin/hiro/wiki.cgi? hiro@phys.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

暗黒物質・エネルギー / 相転移 / 量子測定

◆主要業績

総数 (6) 件

- ・ Local virial relation and velocity anisotropy for collisionless self-gravitating systems
- ・ Why is the zel'dovich approximation so accurate?
- ・ Local virial relation for self-gravitating system

◆研究内容

宇宙は何からできて「いるか」という問題に対して、宇宙の骨格を成す暗黒エネルギーを量子力学的な凝縮体 (ボーズアインシュタイン凝縮、BEC)、暗黒物質をその励起ガスと同定して、暗黒エネルギー・物質の一元論を提案した。このボーズアインシュタイン凝縮の宇宙モデルは、エネルギーが宇宙膨張を与えること、ゆっくりと凝縮が進むこと、凝縮体の運動方程式、BEC は不安定性をもつ、という事を数式に表現して解析できる。

帰結として、以下のことが得られる：1. BEC は凝縮が進むと不安定になり崩壊する。2. そしてほぼ銀河サイズに局在化できる。3. それらの中心に巨大ブラックホールを作る。従って銀河に巨大ブラックホールが付随するという最近の観測事実と整合する。さらに、4. BEC 崩壊のタイミングが対数周期的であることや、5. 何回かの崩壊を繰り返したあと、宇宙は最後に加速膨張すること、6. BEC 崩壊に伴い重力波が放出されることなど。特に、5 のインフレーション機構は、凝縮宇宙モデルに特有なものであり、既存の「ゆっくり転がるモデル」を大きく拡張するものである。

BEC に限らず一般に相転移が様々な構造を作るという視点に基づき、ミクロ量子論からマクロ古典論への相転移を記述する自発的対称性の破れに基づく量子観測論を提出した。特に、量子測定の本質が、量子力学的もつれ、量子干渉性消滅、量子干渉性再生成、それから秩序変数の生成と出現、の 4 つに集約できることを提案し、これを具体的なモデルで検証した。

◆教育内容

【学部】

物理英語：従来の方法 (授業のほとんどが日本語で進行したり、英文翻訳に終始したり、問いと応答が 1 組程度の単純構造の会話、自身の表現欲求と関係ない情況と言ひ返しを与えられた設定での会話、...) に基づいていくら長期間、教室で英語を習っていてもなかなか実用になる英語は身につかないと考える。英語の実用化のために一番重要な要素は「個人の表現欲求」である。これを実現するために、はじめに選んだ物理の教科書を、学生の方々が「講義」してみんなで「質問・議論」する方法が有効だと考える。今年は Goldstein の Classical Mechanics を選んだ。はじめは単語を並べるだけでもいい (実際これでかなり伝わる)、教員の話中の単語を質問してもらうというのでもよい。1 時間半すべて英語で進行している。

物理数学演習：従来の方法 (題意が明確で模範解答がすぐ作れ、実質的にそこで完結してしまう、学生が黒板の前で解いて教員がチェックする、...) に基づいて演習を繰り返していても、学生の問題意識や個性は育たないと考える。与えられた要求に効率的に答えるのではなく、自分の中の矛盾や不透明感を解消する方向を自分で探るタイプの経験がぜひとも必要である。そのような考察と経験を誘起する問題を作成し、学生に挑戦してもらっている。

【大学院】■コロキウム：広い意味の宇宙物理学を題材に、多様な学生に対し個々の個性を尊重する議論を展開する。■お昼の議論の時間：気軽に生活の一部として物理を語れる文化を目指している。独創的なアイディアはこのような文化が背景になければならないと考えている。

◆Research Pursuits

We do not know 96% of the total matter in the universe at present. A cosmological model is proposed in which Dark Energy (DE) is identified as Bose-Einstein Condensation (BEC) of some boson field. Global cosmic acceleration caused by this BEC and multiple rapid collapses of BEC into black holes etc. (=Dark Matter (DM)) are examined based on the relativistic version of the Gross-Pitaevskii equation. We propose (a) a novel mechanism of inflation free from the slow-rolling condition, (b) a natural solution for the cosmic coincidence ('Why Now?') problem through the transition from DE into DM, (c) very early formation of highly non-linear objects such as black holes, which might trigger the first light as a form of quasars, and (d) log-z periodicity in the subsequent BEC collapsing time. All of these are based on the steady slow BEC process.

◆Educational Pursuits

In our laboratory, we have experimentally introduced occasional brain-storming discussions, as well as regular seminars and colloquia. We have so far discussed on the 'origin of irreversibility', 'time development and evolution', etc. The purpose of our brain-storming is to develop natural thinking free from commonly accepted theories or from mutually contradictory data in appearance. The value of the brain-storming is that we have chance to find another point of view far from the standard interpretation and to find unexpected interrelation between apparently different systems. These discussions will not contribute to the immediate research subjects of students, although they will help to find a global direction of individual research and to separate the essential physics from many insignificant varieties in appearance of a subject.

◆将来の研究計画・研究の展望

広い意味の宇宙と相転移のかかわりを追究していきたい。宇宙は初期宇宙からホライズンまで 60 桁以上にわたって広がりを持ち、天体や物質は多様な存在形態や進化を示す。この宇宙の構造や進化は、現在までに一応形式的には、かなり理解されてきている。しかしこれらの成功は主に揺らぎの線形領域に限られ、非線形性が顕著になる実際の構造形成の解明には程遠い。さらに宇宙パラメータが前面に出てきて、マイクロ物理からのバックアップが少ないので、この標準モデルそのものからの更なる発展は期待できない。何らかの物理的視点からの系統的な研究が必要であると考えられる。これら宇宙の構造形成や進化の本質を広義の相転移現象として系統的に捉える視点から、現在の宇宙論の基本的問題に解答を与えていきたい。目標は、宇宙論という視点から広義の相転移機構と基礎法則を確立することである。

全体的に期待される結果は、宇宙論という視点から広義の相転移機構と基礎法則が確立することである。このことは、例えば宇宙モデルに限ってみると、暗黒物質・暗黒エネルギーをマイクロ物理から（ある程度）同定し、構造形成の非線形領域(クエーサー、最初の星、再加熱化、現在のインフレーションなど)を整合的に記述できる事である。これは標準モデルを書き換えて宇宙論を物理としてさらに展開させる意義がある。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

・広い意味の宇宙物理・相転移物理。

◆受験生等へのメッセージ

【学部・大学院に入学を希望する学生さんに対するメッセージ】

まず、自分の心に耳を傾け、素直に発現してくる課題に挑戦して欲しいと思います。その長い過程を通じて、困難に挫折したり、自分の能力に絶望したり、既習の体系ががたがたと崩壊していくのを何度か体験するかもしれません。しかし、それを恐れず、状況をできるだけ明確にしようと努めてください。信じられるものは自分だけです。そして、崩壊したあとの瓦礫の中から自分の世界を確かなものとして再構築する楽しみを味わってください。時間と努力を惜しまないでください。（これは私自身に対しても当てはまります。）そのように人間が発展していく相互作用と土壌と、何より勇気を与えるのが大学の使命だと考えます。

教員名	森田 寛 (MORITA Yutaka)
所 属	保健管理センター
学 位	医学博士(東京大学 1984)
職 名	教授
URL/E-mail	http://www.ocha.ac.jp/healthho/index.html ymorita@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

気管支喘息 / 気道炎症 / マスト細胞 / 好塩基球 / 吸入ステロイド薬

◆主要業績

総数 (9) 件

- ・森田 寛、永倉俊和、勝呂 宏、宮川武彦、宮武明彦、久保 裕、川合基司、岡野英幸、植地泰之、永田 傳、宮本昭正：全国大規模調査による吸入ステロイド薬プロピオン酸フルチカゾン投与前後の喘息の悪化による喘息エピソードに対する検討(FINE study)(最終報告). アレルギー・免疫 12: 62-75, 2005.
- ・勝呂 宏、永倉俊和、森田 寛、宮川武彦、宮武明彦、久保 裕、川合基司、岡野英幸、植地泰之、永田 傳、宮本昭正：小児喘息患者の喘息エピソードに対する吸入ステロイド薬プロピオン酸フルチカゾンの検討(FINE study). 小児科臨床 58: 2095-2108, 2005.
- ・森田 寛：気管支拡張薬、他. 今日の治療薬. 2005 年版 水島 裕、編集. 南江堂 東京 pp131-135、pp142-144、p180-185、pp192-194、pp253-254、pp266-283、pp468-471、pp482-489、p492、pp495-496、pp503-504、pp675-676、pp681-686、pp705-708、p712、2005.

◆研究内容

- ・気管支喘息の本態である気道炎症の発症機序を好塩基球、マスト細胞に焦点を当てて解明する。
- ・気管支喘息の治療法を研究する。

◆教育内容

- ・生活科学部食物栄養学科の学生に「病理学」、「臨床医学概論Ⅱ」を講義した。
- ・人間文化研究科ライフサイエンス専攻の学生に「健康医学特論」、「ライフサイエンス論」を、特設遺伝カウンセリングコースの学生に「解剖学」を講義した。

◆ Research Pursuits

- to elucidate the role of mast cells and basophils in the pathogenesis of airway inflammation in bronchial asthma
- to study asthma therapy

◆ Educational Pursuits

- I lectured on pathology, and clinical medicine in Nutrition and Food Science, Faculty of Life and Environmental Sciences.
- I lectured on common diseases, and anatomy in Life Sciences, Graduate School of Humanities and Sciences.

教員名	森光 康次郎 (MORIMITSU Yasujiro)
所 属	人間文化研究科人間環境科学専攻
学 位	博士 (農学) (1992 名古屋大学)
職 名	助教授
URL/E-mail	http://www.food.ocha.ac.jp/foodchem/foodchem.htm monyam@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

機能性含硫成分 / 食用植物の化学と機能性 / 食品香気の化学と機能性 / 食品機能化学 / 食品分析化学

◆主要業績

総数 (5) 件

- ・ Sugai, E., Morimitsu, Y., Iwasaki, Y., Morita, A., Watanabe, T., and Kubota, K., "Pungent qualities of sanshool-related compounds evaluated by a sensory test and activation of rat TRPV1", Biosci. Biotechnol. Biochem., 69(10), 1951-1957 (2005).
- ・ Kim, H.W., Murakami, A., Abe, M., Ozawa, Y., Morimitsu, Y., Williams, M.V., Ohigashi, H., "Suppressive effects of mioga ginger and ginger constituents on reactive oxygen and nitrogen species generation, and the expression of inducible pro-inflammatory genes in macrophages", Antioxid. Redox Signaling, 7(11-12), 1621-1629 (2005).
- ・ 森光康次郎：「第1章含硫化合物」、「第8章イソチオシアネート」，がん予防食品開発の新展開（大澤俊彦監修），シーエムシー出版，2005年4月。

◆研究内容

食品成分の持つ生理機能性(食品機能性成分) に関して研究を進め、着実にその研究成果を得た (ミョウガ、サンショウ、アブラナ科野菜など)。その研究題目は以下の通りである。

1. 食品含硫成分とその生理機能に関する研究
2. 食品香気成分が生体に及ぼす有用な生理機能について
3. 酸化ストレス制御に関する食品因子の基盤的研究
4. 生活習慣病抑制をターゲットとした食品機能成分の探索

◆教育内容

学部教育においては、「基礎有機化学」「分析化学実験」という基盤科目から「卒業研究」という専門科目までを網羅し、担当した。大学院教育では、「食品機能・分析化学特論演習 (前期)」と「食品機能学 (後期)」を通して、一貫して食品の機能性に関する専門知識、最先端の研究内容などを教え、食と健康科学の社会的必要性和その専門性が要求されている現状を伝えた。

研究指導においては、食品からの機能性成分の単離と構造解析を含む各種機器分析、試験管系のみならず培養細胞・実験動物を用いた機能評価系について教育を行った。

◆Research Pursuits

Chemistry and Biochemistry of the bioactive compounds in food stuffs were steadily investigated. My research titles were as follows:

1. Bioavailability of sulfur-containing compounds in foods
2. The beneficial effects of food flavor for human health
3. Fundamental studies on oxidative stress regulation by food factors
4. Food factors and human diseases

◆Educational Pursuits

From the fundamental subject "Fundamental Organic Chemistry" to the special subjects "Investigation for Undergraduates" were taught to undergraduates. Through the subjects "Chemistry for Food Factors (master course)" and "Ideas of Food Functions (doctor course)", the special knowledges and advanced sciences of this research area were taught to the graduated students consistently. And I commented that the social necessity and requirement of high specialty for this research area of food factors were so important.

At the experiment education, I taught and navigated the isolation and identification of food factors from edible foods, and how evaluation for functionalities of food factors by using in vitro and in vivo methods.

◆共同研究例

- ・機密事項を含む共同研究があるため、その多くは非公開とする。
- ・H17年度：沖縄産官学連携「紅イモ赤色素成分の有効利用」－機能性担当

◆将来の研究計画・研究の展望

共同研究の一部など、機密事項を含むものに関しては一切、非公開として以下に代表的な項目を挙げる。

- 1) 機能性含硫成分を含む野菜の研究推進のみならず、その実利用性を可能にできるようプロジェクト研究などの共同研究を通して実施する。
- 2) 食品香気成分に関して、その生理機能の基盤的研究を進める。
- 3) 食品成分化学と機能性に関する研究の推進

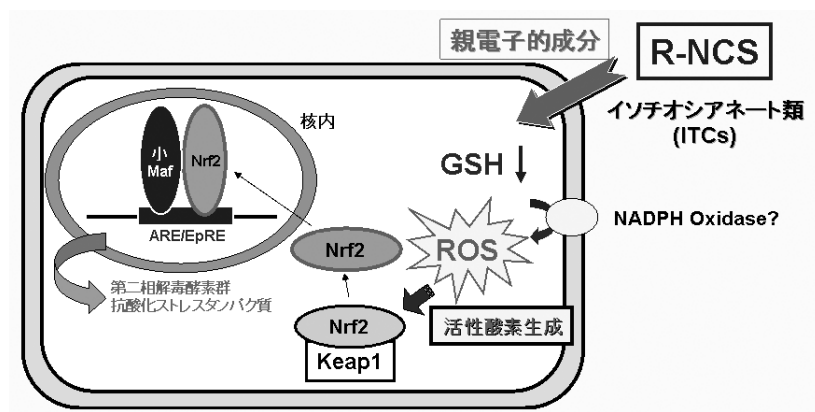
◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・(すでに多くの共同研究課題を抱えているため、常時、個別に相談可)

◆受験生等へのメッセージ

食と健康、特にメディアでも話題に上がることが多い、「食品の機能性成分」に関する研究をしています。世の中に出回っている食情報の真偽を、自らの手で化学的な切り口をもって研究してみませんか？

とにかく食品成分に関する研究を一生懸命にしてみたい、または大好きな学生さん(優秀 ^^)をお待ちしています。



イソチオシアネートによる推定第二相解毒酵素誘導機構

教員名	森山 新 (MORIYAMA, Shin)
所 属	国際教育センター
学 位	文学博士 (日本語教育学) 教育学修士 (日本語教育学)
職 名	助教授
URL/E-mail	http://jsl.li.ocha.ac.jp/morishin1003/ morishin@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

認知言語学 / 多言語習得 / 総合的日本語教育 / グローバル / 遠隔教育 (E-learning)

◆主要業績

総数 (13) 件

- ・森山新編著 『認知言語学的観点を生かした日本語教授法・教材開発研究：1 年次報告書』（平成 17～19 年度基盤研究 (C)：課題番号 17520253） 2006 年 3 月 p112
- ・森山新著「格助詞ニの意味構造についての認知言語学的考察」『日本認知言語学会論文集』5,1-11
- ・水口里香・森山新著「日本語学習者と日本語母語話者の持つ「で」のカテゴリー構造比較」『日本学報』66:43-54 韓国日本学会

◆研究内容

科研基盤研究 C「認知言語学的観点を生かした日本語教授法・教材開発研究」の第 1 年目として、日本、韓国などの学会にて口頭発表を行い、「日本語学習者と日本語母語話者の持つ「で」のカテゴリー構造比較」「格助詞ニの意味構造についての認知言語学的考察」「認知言語学からの日本語教育への提言」「視点についての認知言語学的考察」などの論文が学術誌に掲載された。

3 次元仮想空間を用いた日本語教育・異文化理解教育をさらに発展させ、韓国の学術誌に「3 次元仮想空間を利用した日本語の授業と教師の役割」「3 次元仮想空間を利用した日本語教育：異文化理解への新たな試み」という論文が掲載された。

多言語習得研究（科研基盤研究 B、萌芽研究、共に研究分担者）として (4th INTERNATIONAL

CONFERENCE ON THIRD LANGUAGE ACQUISITION AND MULTILINGUALISM) に

て「How are languages transferred by a Korean-Japanese-English trilingual student?」、韓国日本学会にて「韓日英トライリンガル生徒の言語運用と環境との関係」という口頭発表を行った。

◆教育内容

グローバル文化学環の新任教員として、また比較日本学研究センターの研究委員として「グローバル時代の総合的日本語教育」といった研究を行い、それを基盤に韓国・同徳女子大学校大学院との間でジョイント授業を実施した。その内容は「海外大学院とのジョイント授業報告書」としてまとめられている。

また比較日本学研究センター長として、本学大学院生を引率、フランスにおいてジョイント教育・シンポジウムを実施した。

さらに国際教育センター専任教員として、韓国の同徳女子大学校から 12 名の学生と 1 名の教員を本学に招き、第 2 回日韓大学生国際交流セミナーを実施した。(このセミナーは、全学科目「異文化交流実習 1」として開講されたものである)。その内容は報告書としてまとめられている。

◆Research Pursuits

In the first year of the project of “The Research of Teaching Methods and Materials for Japanese Language Education” supported by the Grants-in-Aid for Scientific Research, Category C, I gave talks in several conferences held both in Korea and Japan and also published the following papers: (1) “A Comparative Study of the Categorical Structure of the Japanese Case Particle DE between Japanese Learners and Japanese Native Speakers”, (2) “The Relation between Cognitive Perspectives and the Polysemic Structure of Japanese Case Particle NI”, (3) “Opinions Offered Concerning Japanese Language from Cognitive Linguistic Perspective” and (4) “A Study on Viewpoint from Cognitive Linguistic Perspective”.

I developed the study of “The Japanese language and Japanese cultural understanding education using 3d-mud” and published two papers entitled “The Japanese language education using 3d-mud and the role of the teacher” and “The Japanese language education using 3d-mud: A trial for the cultural understanding” in a Korean academic journal.

As a co-researcher on the project of “the Research of Multi-lingual Acquisition” supported by the Grants-in-Aid for Scientific Research, Category B, and Grants-in-Aid for Exploratory Research, I gave two talks entitled “How are languages transferred by a Korean-Japanese-English trilingual student?” in the 4th International Conference on Third Language Acquisition and Multilingualism and “The relation between linguistic competence, performance and environment: A case study of a Korean - Japanese - English trilingual student” in the Korean Association of Japanology, respectively.

◆Educational Pursuits

As a new member of the faculty of the Global Studies for Inter-Cultural Cooperation and as a member of researchers of the Center for Comparative Japanese Studies, I conducted the joint education with Dongduk Women's University in Korea on the basis of the study of “Holistic Japanese Language Education in the Global Era”. The result was published as “The Report on the Joint Education with a Graduate School in Abroad”. As the director of the Center for Comparative Japanese Studies, I conducted “Joint Education and Symposium” in France, accompanying graduate students at the university.

I, furthermore, as a faculty member of the International Exchange and Education Center, held “The Second International Exchange Seminar for Japanese and Korean Students”, inviting a professor and twelve students at Dongduk Women's University to the university. This seminar was organized as a subject “Practicum of International Cooperation 1” open to all undergraduate students. The result was published as “The Report on the Second International Exchange Seminar for Japanese and Korean Students”.

◆共同研究例

・グローバル時代の総合的日本語教育（韓国、中国、モンゴル、ベトナムなど）

◆将来の研究計画・研究の展望

- 1) 科学研究をもとに、認知言語学を日本語教育（教授法・教材開発）に応用する。
- 2) グローバル時代にふさわしい総合的な日本語教育を模索する。
- 3) 遠隔教育についての研究を進め、国際理解教育や留学生教育などの教育へいかす。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・応用認知言語学
- ・第二言語・多言語習得研究
- ・グローバル時代の総合的日本語教育

◆受験生等へのメッセージ

グローバル時代を迎え、日本語教育の需要が高まっており、そのための研究も重要性を増している。言語教育には学習者中心の視点が重要であり、その意味で第二言語習得研究をふまえることが重要である。また言語習得理論など応用言語学の成果も参考にすることが必要である。

そのため、韓国、中国など、東アジアとのネットワークを構築しつつ、①認知言語学や第二言語習得研究を日本語教育に活かす、②文化をも取り入れ、グローバル時代にふさわしい総合的な日本語教育を模索する、③遠隔教育などの効果的利用を模索する、といった研究活動を進めていきたいと思います。

教員名	矢島 知子 (YAJIMA Tomoko)
所 属	理学部化学科
学 位	博士 (工学) (1997 東京工業大学)
職 名	助手
URL/E-mail	tyajima@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

立体選択的合成 / 含フッ素、含窒素化合物 / ラジカル反応 / 含フッ素アミノ酸 / ケミカルバイオロジー

◆主要業績

- Radical-mediated hydroxytrifluoromethylation of α,β -unsaturated esters
Yajima, Tomoko; Nagano, Hajime; Saito, Chiaki
Tetrahedron, 2005, 61, 10203-10215.
- Substituent effect on the diastereoselectivity in the chelation-controlled radical reactions of γ -(p-substituted-benzyloxy)- α -methylene esters with alkyl iodides.
Yajima, Tomoko; Okada, Kyoko; Nagano, Hajime. Tetrahedron, 2004, 60, 5683-5693.
- Radical-mediated hydroxytrifluoromethylation of α,β -unsaturated esters
Yajima, Tomoko; Nagano, Hajime; Saito, Chiaki
Tetrahedron Lett. 2003, 44, 7027-7029.

◆研究内容

1) ラジカル付加反応を利用した立体選択的合成法の開発
立体選択的反応の成功例の少ない、ラジカル付加反応の立体選択的合成法の開発を目指している。
これまでに、ルイス酸による 8 員環キレーションを利用したジアステレオ選択的な反応について報告しており、今後、不斉触媒的反応へと展開する。

2) 含フッ素化合物の合成法の開発
医薬品や機能性材料として欠かすことのできない含フッ素化合物の合成法の開発を目指す。
これまでに、ラジカル反応を利用したヒドロキシペルフルオロ化反応について報告を行っており、この方法を応用した含フッ素アミノ酸の合成に成功している。さらなる含フッ素化合物の合成法の開発、および得られた含フッ素アミノ酸をケミカルバイオロジー的に応用していく。

◆教育内容

授業としては 1 年生を対象とする化学実験の基礎についての基本化学実験、および 2 年生を対象とする有機化学実験を担当する。

◆Research Pursuits

1) Chelation-controlled 1,3-asymmetric inductive radical addition.

I have reported the highly syn-selective radical mediated reaction of α -methylene- γ -oxycarboxylic acid esters with alkyl iodides in the presence of a Lewis acid. And a series of studies involving allylation with allyltributyltin and remote substituent effects was also conducted. I plan to investigate the possibility of asymmetric catalytic radical addition reactions.

2) Development of new synthetic methods for organofluorine compounds based on the radical addition.

Organofluorine compounds possess unique chemical reactivity and unusual physical properties and are commonly employed in medicinal chemistry and material science. I have already reported the radical-mediated hydroxyperfluoroalkylation reaction of α , β -unsaturated esters using various alkyl iodides and Et₃B in the presence of KF and H₂O. I have also found the reactions of acrylic acid derivatives with perfluoroalkyl iodides under UV irradiation and have synthesized chiral fluorinated α -amino acids. Based on my results, I will extend my research to fluorinated peptides/proteins and the synthesis of new fluorinated compounds.

◆将来の研究計画・研究の展望

1) ラジカル付加反応を利用した立体選択的合成法の開発

1-1) エナミンへのラジカル付加を利用した有機触媒を用いた立体選択的反応の開発

1-2) ラクタム類へのアルキルラジカルの付加反応の不斉触媒化と複素環類の合成

2) 含フッ素化合物の合成法の開発

1-1) 含フッ素オレフィン類の合成とその反応に関する研究

1-2) 含フッ素アミノ酸をタンパク、ペプチドなどにとり込み、新しい機能の発現を目指す。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・含フッ素化合物の合成とその応用
- ・ラジカル反応を利用した立体選択的合成法の開発
- ・含フッ素アミノ酸を用いたケミカルバイオロジー研究

◆受験生等へのメッセージ

学生と教員の距離の近い大学です。1-3年生で化学の基礎を身に付け、4年生、院生はその基礎を最先端の研究に活かします。

また、研究を医薬品、機能性材料などへと発展させることにより持続的可能な社会の形成の一端を担っていければと考えています。

教員名	安田 次郎 (YASUDA Tsuguo)
所 属	文教育学部人文科学科比較歴史学講座
学 位	博士（文学）（2002 東京大学）
職 名	教授
URL/E-mail	http://www.li.ocha.ac.jp/hum/history/teacher/yasuda/index.html yasu5178@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

中世社会 / 寺社 / 荘園

◆主要業績

・『福智院家文書 第一』（続群書類従完成会）（上島享・末柄豊・前川祐一郎の3氏と共同校訂）

◆研究内容

1 興福寺旧蔵史料の研究。とくに「福智院家文書」の解読と研究、そしてそれを史料集として公刊するための調査・研究を進めた。興福寺や春日社の組織や所領支配のありかたの研究、文書様式についての調査があらためて必要であった。

2 南北朝期についての研究。南北朝の動乱は、日本の中世を前後にわかつ大きな画期である。この期間について、従来のような政治史的観点からではなく、社会史的な観点からどのような歴史叙述が可能かについて考えた。

3 いくつか具体的なモノについて研究した。たとえば、興福寺の国宝・仏頭。いわゆる鎌倉復興期に興福寺の東金堂衆が飛鳥の山田寺から奪ってきたとされる白鳳仏で、のちに火災に遭って行方不明となり、大正期になって頭部だけが再発見されたというドラマチックな経歴をもつものであるが、この仏頭をめぐるいくつかの謎の解明を試みた。これは寺院間紛争、その解決方法にかかわる研究である。

初期の宝篋印塔について研究した。南都の鎌倉復興に従事した石工たちは中国から渡ってきた技術者であるが、山城、大和に残存する鎌倉時代の宝篋印塔は彼らの手になるものだろうという観点から考えてみた。技術の伝来と定着に関する研究である。

◆教育内容

1 入学したばかりの学生を対象として、史料読解や解釈の具体的な方法について、基本的な手ほどきを行った。あわせて、生の史料からどのようにしてある特定の歴史像が構成されてくるのかを講じた。学生の疑問をすくい上げ、また各自の意見を積極的に発表させることに留意した。

2 南北朝期に関する重要な先行研究を紹介してその問題点について講じた。聴講学生の多くは卒業論文作成をひかえているので、学術論文がどのように構想されて書き上げられてくるのかについても言及した。

3 中世の僧侶の記録を取り上げて精読し、具体的な個々の記事をどう解釈して歴史叙述にまでつなげていくかについて、実戦的な演習を行った。ここで参加者が行った作業は、各自の学力養成につながり、また卒業論文作成のための貴重な経験となる。

4 大学院では『大乘院寺社雑事記』紙背文書の研究を行った。きわめて難解な史料であるが、読解をめざして行われる様々な努力や工夫のなかから研究の手がかりが発見されている。

5 卒業論文、修士論文執筆者に個別的に指導を行った。博士論文作成中の院生にも適宜アドバイスした。

◆将来の研究計画・研究の展望

興福寺旧蔵史料の紹介、活字化が進めば、武家・公家を中心に構成されてきた日本の中世史像が大きく変わる可能性がある。寺社の側からみた歴史という視点に立てば、比叡山の史料が乏しいだけに、南都の史料はきわめて貴重である。引き続き重要史料の収集と分析を行っていきたい。そのような基礎作業を通じて、中世社会における寺社の位置がいつそう明らかになり、中世社会像はよりバランスがとれて具体的なものとなるだろう。とくに史料上になかなか残りにくい庶民の歴史について、より多くの手がかりが発見されて歴史叙述に生かされていくことが期待される。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・ 中世社会史研究
- ・ 古文書学
- ・ 古記録学

◆受験生等へのメッセージ

古代には律令制、近世には幕藩制とよばれる体制の枠組みがある。中世にも学界では権門体制という概念があるが、古代や近世にくらべれば、中世は国家や社会の枠組みはぼんやりとしてよくわからない、というのが一般に持たれている印象であろう。「だから中世はいやだ」というひとと、「だから中世は面白い」というひとがいる。もちろん、私は後者だから中世を勉強している。枠組みがないだけに、どこからでも入りやすい。史料のなかから自分で自由に歴史を再構成してみたいと思っているひとは中世向き。

史料を集めてそれを読み、並べ直してみたり、記載事項をデータ化して集計・分析したり、あるいは書かれていることのウソを暴いてみたりすることが好きな人、歴史に向いているかもしれません。

教員名	安成 英樹 (YASUNARI Hideki)
所 属	文教育学部人文科学科形象分析学講座
学 位	文学修士(1990 東京大学)
職 名	助教授
URL/E-mail	hy@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

フランス近世国制史 / 官職売買制度 / 地方長官 / 儀礼 / 統治構造

◆研究内容

フランス近世国制史の研究。とくに絶対王政期の官僚制度（官職売買制度）を中心とする権力構造や、宮廷を舞台に展開する儀礼の分析を通じて、当時の統治システムとその有効性を検討する。

具体的な研究課題としては、

1 絶対王政期の官僚制の考究……国王権力の重要な柱である官僚制について、その二大類型たる官職保有者(官職を金銭で購入した人々)と直轄官僚(国王によって任免可能な官僚群)、この両者の特質を分析し、当時の社会に深く根を下ろしていた官職売買制度の実態に迫る。

2 権力を補完するものとしての権威構造の解明……支配の実際の脆弱さを補うものとして、国王を主体に展開された各種儀礼(宮廷儀礼、国家儀礼、メディア戦略など)の具体的分析を行う。

平成 17 年度は、この 2 点の課題がクロスする宮廷に研究の主眼をおき、その具体的な構造分析を行った。これは、平成 16 年度からの科研費基盤研究(C)「フランス絶対王政期における官職売買制度についての展開とその再検討」の研究活動の一端でもある。

◆教育内容

学部の特講では、基本的に現在の研究テーマである宮廷を取り上げた。具体的にはフランス国王(王家)の存在意義・機能、フランス宮廷の具体的な構造、国王の日常生活、宮廷を舞台に展開された各種の儀礼といったテーマについて講義を行った。学部の演習では、18 世紀フランスの公共圏の成立に重点をおいた英文テキストを使いながら、18 世紀アンシャン・レژیーム社会の特質について考えた。これ以外にも、主として 1、2 年生向けの基礎ゼミ、西洋史概説、西洋史研究法などの授業を担当した。大学院の演習では、フランス近世の古典的概説書を材料に、主として近世都市の特質について検討した。また、学部 4 年生のなかで西洋史分野で卒論を書く学生(8 名)についての指導を行い、博士前期課程でフランス近世史を専攻する学生(2 名)の修論指導を行った。

◆将来の研究計画・研究の展望

フランスの宮廷構造を明らかにし、その基本的構成人員である宮廷貴族の役割を詳細に分析することで、国王の王国統治において欠かすことのできない権威と権力というコインの両面について分析を進めていきたい。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・官僚制
- ・統治制度

◆受験生等へのメッセージ

大学で学ぶ（ことのできる）歴史は、暗記中心の高校のそれとは全く違います。年号や固有名詞を覚えることに意味はありません。ある時代のさまざまな事件、あるいは社会そのものがどうして生まれたのか、自分でテーマを見つけて材料を集め、自分で考え、自分なりの解を見出すものです。そのために、大学で歴史を勉強したい人には、できるだけたくさん本（必ずしも歴史関連のものに限りません）を読み漁ってほしいと思います。そのうえで、自分の取り組みたいテーマを見つけ出せばいいのだと思います。

教員名	矢野 裕子 (YANO Yuko)
所 属	理学部情報科学科
学 位	博士(理学)
職 名	アソシエイトフェロー
URL/E-mail	yano@is.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

確率過程 / 拡散過程 / 加法的汎関数 / 極限定理

◆主要業績

総数 (2) 件

- ・ Shinzo Watanabe, Kouji Yano and Yuko Yano, A density formula for the law of time spent on the positive side of one-dimensional diffusion processes, J. Math. Kyoto Univ., 45-4 (2005), 781--806.
- ・ Yuji Kasahara and Yuko Yano, On a generalized arc-sine law for one-dimensional diffusion processes, Osaka J. Math., 42 (2005), 1--10.

◆研究内容

1939年にレヴィによって示された逆正弦法則は、一次元ブラウン運動の正側滞在時間の分布の漸近挙動に関する結果である。正側滞在時間分布が滑らかな密度関数を持ち、かつそれが区間の両端点で発散する U 字型曲線である点が非常に興味深く、現在に至るまで様々な精密化や一般化がなされている。私は逆正弦法則を一般化することを目的とし、特に一次元拡散過程の正側滞在時間をテーマとして研究を行っている。

◆将来の研究計画・研究の展望

一次元拡散過程の正側滞在時間、多次元ブラウン運動及び多次元拡散過程のある領域における滞在時間を扱い、Krein らによる解析的な理論を最大限に活用することによって極限定理等を確立する。また、一次元レヴィ過程の正側滞在時間に関する極限定理の精密化を行う。更に、多次元レヴィ過程、fractional Brown 運動の滞在時間に関する研究に着手したい。

教員名	山田 眞二 (YAMADA Shinji)
所 属	理学部化学科
学 位	工学博士(1986 北海道大学)
職 名	教授
URL/E-mail	yamada@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

カチオン- π 相互作用の利用 / ねじれ型アミドの合成と利用 / 新規不斉有機触媒の開発と利用

◆主要業績

総数 (5) 件

- ・ S. Yamada and I. Jahan, "A new route to 3,4-disubstituted piperidines: formal total synthesis of (-)-paroxetine and (+)-femoxetine" Tetrahedron Lett., 46, 8673-8676 (2005).
- ・ S. Yamada, Y. Morimoto and T. Misono, "Preference of intra- and intermolecular cation- π interaction: cis-trans geometrical effects of amide bond on the interaction mode" Tetrahedron Lett., 46, 5673-5676 (2005).
- ・ S. Yamada, T. Misono and Y. Iwai "Kinetic resolution of sec-alcohols by a new class of pyridine catalysts having a conformation switch system" Tetrahedron Lett., 46, 2239-2242 (2005).

◆研究内容

1. ピペリジン類の新規不斉合成法の開発
分子内ピリジニウム- π 相互作用を利用することで面選択的な付加反応を見出しているが、本手法により得られたジヒドロピリジンを生体活性ピペリジンであり、抗うつ薬として知られる(-)-Paroxetineの合成を行った。
2. 新規有機触媒の開発
光学活性な第二級アルコールは種々の合成中間体として重要な化合物であるが、本化合物を得る方法としては、アシル化による速度論分割が用いられる。我々は、分子内カチオン- π 相互作用を利用した、配座変換型の効率の高い新規アシル化触媒を開発した。

◆教育内容

学部
「反応有機化学」、「合成有機化学」の講義では、有機化学の教科書「モリソン●ボイド」の後半部分、すなわち酸素官能基を有する化合物、アミン等の合成、構造、反応について講義した。さらに、「有機化学実験」では、基礎的な合成操作、分離精製、構造決定の方法について、実習と講義を行った。

大学院
「有機立体化学」では、有機化合物の立体化学の基礎から立体選択的反応まで、最近のトピックスも含めて講義した。さらに、学生に立体化学に関連するテーマを選択させ、最新の論文も含めた発表会と質疑応答を行った。

◆Research Pursuits

1. Development of a new method for the asymmetric synthesis of piperidines.

A new route to 3,4-disubstituted piperidines was developed using chiral 1,4-dihydropyridines as key intermediates, the synthetic utility of which was demonstrated by formal syntheses of (-)-paroxetine and (+)-femoxetine.

2. Development of a new DMAP catalyst.

A catalyst having a conformation switch system induced by acylation and deacylation serves as an asymmetric acylating catalyst of sec-alcohols. The kinetic resolution of various sec-alcohols resulted in good to excellent selectivities in the presence of 0.5 to 0.05 mol% of the catalyst. The conformation switch system plays a key role to attain both good selectivity and high catalytic activity.

◆Educational Pursuits

[organic reaction chemistry], [synthetic organic chemistry].

In these classes, I taught synthesis, reaction and structure of organic compounds that have an oxygen containing functional group and amines and so on.

[experiment of organic chemistry]

Basic methods for organic synthesis, separation and purification methods were instructed.

[Organic stereochemistry]

In this class, I taught basic words related to stereochemistry, historical backgrounds of stereoselective synthesis, and modern synthetic methods.

◆将来の研究計画・研究の展望

現在の主な研究テーマは以下の3つです。

- 1) カチオン- π 相互作用の利用
- 2) ねじれ型アミドの合成と利用
- 3) 新規不斉有機触媒の開発と利用

ほとんどの研究は基礎的なものですが、将来以下のような領域で役立つことを期待しています。

- 1) 位置および立体選択的合成
- 2) 新しい構造や性質を持った分子の創製
- 3) 生理活性化合物の創製

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

・新規有機触媒の開発

◆受験生等へのメッセージ

私たちの身の回りをながめると、ほとんどのものは化学的に合成された化合物が関係していることに気が付くでしょう。新しい化合物を創り出すことは、「化学」の最も得意とすることの一つです。現在までに数千万の化合物が合成されて来ましたが、その可能性は無限にあります。あなたも自分の手で、この世に存在しない分子を創り出してみたいと思いませんか？

教員名	山野 春子 (YAMANO Haruko)
所 属	生活科学部食物栄養学科
学 位	医学博士(1982 東京医科歯科大学)
職 名	助手
URL/E-mail	yamano@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

がんの予防 / 食品成分

◆研究内容

前年度まで所属していた生活科学部生活環境学科生活工学講座（旧家政学部被服学科）において、紫外線遮蔽加工布の効果を生化学的手法により研究してきた。

また、長く化学発がんおよびウイルス発がんの基礎研究に携わってきた観点から、日常の食生活で摂取している食品のもつがんの予防効果や治療に対する有効性についても、これまで強い関心を持ってきた。2005年度より食物栄養学科所属となり、がんの予防に効果があるとされている食品に着目し、それらの中に血管新生を阻害する効果のあるものを生化学的手法により検索し、検出された有効成分の作用機構の解明を目指している。

◆教育内容

授業関係では本年度前期は、食物科学講座の「食品製造学・保存学実験」（学生数 24 名）の実験準備および指導補助ならびにレポート添削補助を担当した。教職科目として、生活工学講座学生対象の「被服製作実習」（学生数 17 名）の指導補助、作品回収、評価補助、作品返却ならびにミシン等の実習用機器類の点検、管理等を担当した。後期は、食物栄養学科の「一般化学実験」（学生数 36 名）、教職科目として、食物栄養学科学生対象の「被服構成実習」（学生数 15 名）の指導補助、作品回収、評価補助、作品返却、実習用機器類の点検、管理を担当した。

「被服製作実習」と「被服構成実習」については、正規の授業時間内に作品が完成しなかった学生を対象に補習時間を設け、その管理も行った。

食品貯蔵学研究室においては、研究室読書会やゼミに参加し、文献紹介や研究報告に対しディスカッションを行った。

修士論文発表会、卒業論文発表会に関する準備を行い、発表会に出席して意見交換を行った。

◆受験生等へのメッセージ

近年、食物関連分野の企業の研究員や大学教員の募集条件に、管理栄養士の有資格者であることないしは有資格者であることが望ましいと明記されている場合が多い。本学食物栄養学科では国立大学法人として初めて管理栄養士の資格が取得できるカリキュラムを組み、卒業後は有資格者として社会で幅広く活躍することが期待されている。できれば、資格を取得した上で大学院に進み、より高い能力を身につけ、研究者や教員として専門性の高い分野でも大いに活躍することを期待する。

教員名	山本 直樹 (YAMAMOTO Naoki)
所 属	理学部生物学科
学 位	理学博士 (1976 東京都立大学)
職 名	教授
URL/E-mail	naoky@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

植物分子生物学 / 光環境応答 / タンパク質の核輸送 / クリプトクロム / 遺伝子調節

◆研究内容

植物細胞が分化全能性を示すことは古くより知られており、その細胞分化は光をはじめさまざまな環境要因の影響を受けている。私は、この光環境が細胞分化に及ぼす影響を分子細胞生物学的に明らかにすることを研究の最終目的において研究をすすめている。ゲノム研究により植物細胞の核には約3万個の遺伝子があることがわかった現在、細胞分化の調節を3万個の遺伝子をもつ細胞核における遺伝子調節と言い換えることができる。遺伝子調節はタンパク質によりなされるのであるから、光などの環境変化に応じて、細胞質から核へ、逆に核から細胞質へ、転写因子をはじめさまざまなタンパク質が輸送されるはずであり、事実、それが確認されている。このような中であって私の研究は、(1)植物細胞のタンパク質の核輸送の分子機構の解明と(2)青色光受容体クリプトクロムの核内外のシャトルリング機構、の二つのテーマの下で行われている。

◆教育内容

私の教育活動は、大きく3つのカテゴリーに分けて考えることができる。すなわち、(1)コア科目「生命の科学」、(2)理学部生物学科の専門教育として「植物生理学」、「植物発生生物学」等、(3)大学院教育、である。

私は「生命の科学」の半分を担当しており、生活の中の話題として組換え植物を取り上げ、教養教育としてDNA、遺伝子、ゲノムの理解へ導くことを目標においている。

生物学科の専門教育では、植物の胚発生から死までの個体発生のさまざまな段階でおこる現象を取り上げ、遺伝子、遺伝子調節、細胞分化などの切り口で分子細胞生物学的な理解へ導くことを目標においている。大学院教育においては、この方針を高度化したものと位置づけ、研究者養成を目標においている。

◆Research Pursuits

The totipotency of plant cells has been elucidated, and the differentiation of plant cells is also regulated by the environmental conditions such as light. As about 30,000 genes has been shown in a plant nucleus by genome research projects, the differentiation of plant cells might be interpreted as the total results from regulation of each gene member. During cell differentiation process, various kinds of proteins will be imported into nucleus and exported from nucleus and each gene is regulated in a specific manner. To elucidate mechanisms of light responsiveness of plants, our research has been carried out intensively under the following two projects, (1) molecular mechanism on nuclear import and export of proteins in plant cells, and (2) shuttling mechanism of blue light receptor cryptochrome between cytoplasm and nucleus.

◆将来の研究計画・研究の展望

植物が環境条件の変化に敏感に反応する様、とりわけ光環境応答は感動的ですからある。環境応答機構に関する遺伝子研究やゲノム研究は目覚しく発達してきたが、細胞核に注目し遺伝子調節の主役を演ずる転写因子等の核タンパク質の核内輸送・核外輸送の分子機構研究は十分ではない。植物細胞の光環境応答に関する研究にタンパク質の核輸送の視点を導入し、新たな展開を図りたいと考えている。

◆Educational Pursuits

Main teaching activities:

- (1) “Science of Life” as liberal arts. In this class, GM plants are taken up as a main topic in human life. Thinking of GM plants is led to understanding of genome, gene, and DNA in basic biology.
- (2) “Plant Physiology (obligatory subject)” and “Plant Developmental Biology (optional subject)” in the Biology Course of Faculty of Science. In these classes, some main events in plant life such as embryogenesis, seed germination, growth, development, flowering, and death are explained from view points of molecular and cellular biology.
- (3) “Plant Molecular and Cellular Biology” in Life Science Division of Graduate School. Light responsiveness of plant cells is discussed in the molecular and cellular levels. Molecular mechanism on nuclear import and export of proteins is also introduced for the understanding the gene regulation in the nucleus of plant cells.

教員名	山本 秀行 (YAMAMOTO Hideyuki)
所 属	文教育学部人文科学科比較歴史学講座
学 位	文学修士(1972 東京大学)
職 名	教授
URL/E-mail	rekishi@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

ナチズム / 第三帝国 / 社会史

◆研究内容

ここしばらくは、ナチズムと第三帝国の問題ととりくんできました。資料がふんだんにあり、分かっているようでいて、案外分からないことが多いので、興味がつきません。昨年度の主な研究は以下のとおりです。

1. 授業に関連して、絶滅政策およびポーランド占領政策について文献調査。
2. 『フロイトのアンナO嬢とナチズム』についての書評原稿作成に関連して、ガリツィアにおけるユダヤ人関係の文献調査
3. ドイツ現代史学会での司会に関連して、軍事郵便関係の文献調査
4. 東京書籍高等学校世界史Bを執筆、それにならう文献調査

◆教育内容

ここしばらくは、「徴候としての20世紀」というテーマで授業をしてきました。わたしたちが現在直面している問題の多くは、じつは20世紀の世界戦争の時代に起源をもっているように思われます。ナチズムも、そうした時代がつきつける問題へのひとつの解決方式としてとらえることができます。

講義では、いわゆる「ホロコースト」という問題を、ユダヤ人やヒトラーではなく、世界大戦の時代の問題としてとらえなおす作業をしました。

演習では、『未開人を映画にとる』というテキストを読みました。植民地なきドイツにおける植民地主義の問題を、映画史と文化人類学の接点に着目して論じるという興味深いものでした。

◆将来の研究計画・研究の展望

現在の研究を、「20世紀論」、「ナチズムの人種プロジェクト」などにまとめる。

◆受験生等へのメッセージ

お茶大で学ぶ歴史学のいいところは、暗記物ではないことです。

見えないものを、見えるようにすること、そのために、いろいろ工夫することが、歴史学の醍醐味のひとつです。また、西洋史のスタッフには、ドイツ近現代史の僕のほかに、イギリス中世史の新井先生と、フランス近世史の安成先生がおります。お二人とも、いやといえない性格で、面倒見のよさには定評があります。3人のスタッフと3、4年生全員が参加する卒論指導のゼミは、毎回議論に花が咲き、時間を忘れる楽しいものです。4年生にとってはどうだかわかりませんが。ゼミのあと、近くのレストランで、ワインやビールかこんで、ひと息つくのも恒例となっています。

教員名	由比 良子 (YUI Ryoko)
所 属	人間文化研究科
学 位	博士 (理学)
職 名	リサーチフェロー
URL/E-mail	yui@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

ミトコンドリア DNA / ショウジョウバエ / ヘテロプラズミー / 老化

◆主要業績

総数 (2) 件

- ・ Ryoko Yui, Etsuko T. Matsuura, Detection of deletions flanked by short direct repeats in mitochondrial DNA of aging Drosophila, Mutation Research (2006) 594, 155-161
- ・ Kanako Sugihara, Ryoko Yui, Yoko Ibaragi, Etsuko T. Matsuura, Complete nucleotide sequence of A+T-rich region of Drosophila mauritiana mitochondrial DNA, Genes & Genetic Systems (2006) 81, 21-28

◆研究内容

- 1) ショウジョウバエにおける老化に伴うミトコンドリア DNA(mtDNA)の変化について、mtDNA に生じる欠失の頻度と欠失の起きるメカニズムに注目し、研究を行った。さらに mtDNA の酸化について、若い個体と老化した個体で比較を行った。
- 2) ショウジョウバエの mtDNA ホモプラズミー化機構を解明するため、異種由来の mtDNA をヘテロにもつ ショウジョウバエ系統を作成した。

◆ Research Pursuits

- 1) We investigated the age-related changes of mitochondrial DNA (mtDNA) in *Drosophila melanogaster*. The frequency of deleted mtDNA and the mechanism of inducing deletion were studied. The relative amounts of DNA oxidation in young and old *Drosophila* were compared.
- 2) The mtDNA heteroplasmy lines were prepared for the study of the mechanism of mtDNA homoplasmy.

教員名	横川 光司 (YOKOGAWA Koji)
所 属	人間文化研究科比較社会文化学専攻
学 位	博士（理学）（1992 京都大学）
職 名	教授
URL/E-mail	http://www.math.ocha.ac.jp/yokogawa/

◆研究キーワード

代数幾何学 / 整数論 / ホモトピー数学 / モジュライ / ホッジ理論

◆研究内容

非可換ホッジ理論は非可換群を係数とするコホモロジーに対するホッジ理論の拡張である。一次のコホモロジーはヒッグス束のモジュライスタックであり、その上のホッジ構造を調べることは大変重要である。これまで高次のコホモロジーは定義さえすることが困難であったが、高次カテゴリーの導入によりそれが可能となった。この枠組みで非可換ホッジ理論の展開することが研究内容である。また、高次カテゴリーの導入は従来の層の概念をさらに広げた高次のスタックの導入も可能にしている。これは集合論を基礎として築かれた現在の数学自体を拡張したホモトピー数学の可能性を示唆している。ホモトピー数学ではこれまで無視されて来た情報を高次カテゴリーにより表現し、取り出すことを可能にすると思われる。現在は、このホモトピー数学の基礎を固めることが主な研究課題となっている。

◆教育内容

主として代数学に関係する講義を担当している。4年の数学講究では整数論や可換環論、代数幾何学、暗号理論などを教えている。大学院では整数論、代数幾何学、複素幾何学、ホモトピー論などに関する講義、修論指導を行っている。

◆Research Pursuits

Noncommutative Hodge theory is an extension of the Hodge theory for cohomology theory with non-abelian groups as its coefficients. Its first cohomology are moduli stacks of Higgs bundles. It is very important to study Hodge structures on them. Though it was difficult to define higher cohomology, higher category theory enables the definition. My research purpose is to develop non-commutative Hodge theory in this framework. Moreover, higher category theory enables us for introduction of higher stacks which extends the notion of sheaves. This means a possibility of homotopical mathematics that enlarges mathematics build up on the set theory. Homotopical mathematics seems well for getting and representing any information that we have been neglecting via higher categorical structures.

◆Educational Pursuits

My lectures concerns mainly on algebra. In the seminar for 4th grader students, it has been used textbooks concerning on number theory, commutative algebra, algebraic geometry and cryptographical theory. For students in master course, my lectures are usually concerns on number theory, algebraic geometry, complex geometry and homotopy theory.

◆将来の研究計画・研究の展望

ベクトル層の理論を正標数の場合に完成させることをまず第一の課題とする。これはクリスタリンホモトピーをシンプソンの方法で高次のスタックを用いて表現し、その非可換コホモロジーを考えるにあたっての基礎となる。そのためにはクリスタリンコホモロジーを導入するのにトポスが必要であったのと同様に、高次のトポスを導入することが必要になると思われる。高次のトポスは最近の研究でいろいろな方法で考えられてきてはいるが、いまだにどの方法が良いかは不明である。その定義を探すことは本研究の次の大きな課題である。

◆受験生等へのメッセージ

数学は実用的なだけでなく、大変美しく神秘的な魅力に満ちています。物理的な法則ばかりでなく、経済現象や生命、心の問題に至るまで突き詰めて考えれば、その中には数学の美しい法則が隠れていることが少なくありません。そればかりでなく数学的な美しさが多くの法則に影響しています。私は数学的な美しさこそが宇宙の神秘を解き明かす鍵だと考えて研究しています。このような美しさを体験するには高校までの数学では不十分です。是非、大学で数学の真の美しさに触れてみてください。

教員名	吉田 恵子 (YOSHIDA Keiko)
所 属	学生支援センター
学 位	修士 (家政学)
職 名	講師
URL/E-mail	yoshida.keiko@ocha.ac.jp

◆研究キーワード

心理教育的支援のあり方 / キャリアカウンセリング / ワークショップ型介入

◆研究内容

複雑多岐にわたる学生のニーズを捉え、心理教育的支援のあり方を検討していく。

◆教育内容

2005年度は、学部生（34名）・院生など（11名）にインターク面接及びカウンセリングを行った。さらに、「ストレス対処法・自己理解・キャリア」について学ぶワークショップを3回にわたって実施した。

◆将来の研究計画・研究の展望

個別相談の充実化及び学生のニーズの高いキャリアカウンセリングのあり方を検討していく。さらに幅広い学生に支援を行っていくために、効果的なワークショップ型介入も検討していく。

教員名	吉田 裕亮 (YOSHIDA Hiroaki)
所 属	人間文化研究科複合領域科学専攻
学 位	工学博士 (1988 大阪大学)
職 名	教授
URL/E-mail	yoshida@is.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

非可換確率論 / 作用素環 / 変形量子化 / 量子確率論 / 変形合成積

◆主要業績

総数 (2) 件

・国際会議

"Generalized q-deformed Gaussian random variables",

Non-commutative harmonic analysis with applications to probability, August, 2005 (Banach inst., Poland)

・学会特別講演

「非可換確率空間における独立性の変形」

日本数学会 函数解析分科会, 9月 2005 年 (岡山大学, 日本)

◆研究内容

自由確率論と通常確率論あるいはブール確率論を補間する合成積の変形に関する研究を中心に行なった。このような変形はポーランド Wroclaw 大学の Bozejko 氏らにより導入された条件付き自由合成積は自由合成積にある種の制限を加えることである。これをモーメント・キュムラント公式の集合分割の言葉で言えば、非交叉分割の要素である各ブロックに荷重を与えることで実現可能であることが示された。

このことは、ブロックの荷重として任意の値を割り当てることが、形式的には可能であることを示唆する。また、このようにブロックに荷重を与えるという手法は、非交叉分割に限ることなく、一般の分割の場合（通常の独立性のモーメント・キュムラント公式に対応）にも無理なく拡張可能である。

このようにブロックに荷重を適当に与えて変形合成積を作った場合に問題となるのは、その合成積の正值性である。この正值性を調べるため、この変形合成積を実現する変形 Fock 空間を構成することを行った。

◆教育内容

大学院博士後期課程のゼミでは、非交叉分割上のある種の分割統計に関する数え上げで新たな結果を学生と共同で得た。現在、学生が学術雑誌への投稿準備を行っている。

また前期課程の学生に関しては5名のM2学生の修論指導を行った。内1名は後期課程への進学を希望する等、学生の研究意欲を促す修士論文のテーマであった。

学部卒業研究については4名の卒業生の指導を行い、内2名に関しては修士課程の研究テーマと繋がる課題の研究を行った。

講義に関しては、受講学生とコミュニケーションを取りながら、学生の理解度ならびに習熟度を把握しながら効果的な授業を展開するように努めた。

◆Research Pursuits

The author has investigated deformed convolutions which interpolate between free and usual probability spaces or free and boolean probability spaces, by giving some restrictions on the conditional free convolutions that is introduced by Bożejko (Wrocław University, Poland).

It was shown that these deformations can be obtained by introducing the weight function on the set of blocks in non-crossing partitions for the free moment-cumulant formula, which suggest us that, formally, we can give any weight to each block in non-crossing partitions.

Such a method of the weight function is valid not only for non-crossing case but for all partitions, that is, it is also applicable to the case of usual moment-cumulant formula. In that case, it would be arisen the problem on the positivity of the deformed convolution obtained by the above method. For the positivity problem, the author has also tried to constructed the corresponding deformed Fock spaces. This project is now under consideration.

◆Educational Pursuits

In the seminar for Ph D. program, we have discovered the new enumeration result for some set partition statistics on non-crossing partitions. Concerning this result, our graduate student are now preparing for submission to an international journal. In the seminar for the program of Masters degree, the author has supervised five students. One student has strongly encouraged to continue her study in our Ph D. program. Now she is still in her project.

Concerning the undergraduate program, the author supervised four students and two of them wanted to continue their study in our graduate school. Now they are still in their projects.

In the classroom of the lectures, the author has tried to keep communications with the students and to proceed his lectures effectively by checking the level of student's understandings and achievements.

◆共同研究例

- ・保健指導効果の測定法に関する研究（日本人間ドック学界の論文誌へ採録済）

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・量子（非可換）確率論とその応用
- ・統計的データ解析に関する助言

◆受験生等へのメッセージ

「数学や理科がキライ」って言う人は、いつの時代にもいます。そして、「数学や理科が好き」って人もまたそうです。最近では、「キライだ」っていう高校生が増えたと言われています。しかし、一昔前より、最近の高校生の方が、もっと多くの理科や数学、延いては自然科学の基礎理論の恩恵に与っています。

高速情報通信網が多くのご家庭にあり、カメラ付きGPS携帯電話が当たり前のように街で使われています。これらは自然科学の基礎理論の結晶とも言えるでしょう。

理科や数学がキライな人は、これら自然科学の理論の塊で出来たものは見るのもイヤでしょうか？

実は、自然科学は我々をもっとワクワクさせるような楽しみがいっぱいあるのではないかと考えております。是非、次世代のワクワクのために、理学の勉強・研究に参加しませんか？

教員名	吉村 佳子 (YOSHIMURA Yoshiko)
所 属	生活科学部人間生活学科生活文化学講座
学 位	家政学修士
職 名	助教授
URL/E-mail	http://www.aesthe.ocha.ac.jp/fukshokbigak/

◆研究キーワード

服飾 / 日本 / 美意識 / 色 / 文様

◆主要業績

総数 (2) 件

- ・ 蜘蛛の巣文様の展開—中世における—
- ・ 五節の舞姫像—遍照の和歌の解釈を中心に—
- ・ 五節の舞姫の服飾—平安朝女子服飾の一考察—

◆研究内容

日本服飾文化の研究。色、文様、形などを対象として服飾に託された美意識を考える。

◆教育内容

服飾美学。日本服飾史のなかの具手的事象をとりあげ、服飾の美意識を分析。

◆将来の研究計画・研究の展望

これまでの服飾研究を深化させるとともに、対象の時代をこれまでの日本中世から日本近世・近代へと広げて行きたいと考えている。

◆受験生等へのメッセージ

紫式部は『源氏物語』末摘花の巻で「昔物語にも人の御装束をこそまづ言ひためれ」といっています。昔から人間は美意識や感情を服飾に託してきました。服飾に託された人間のさまざまな心情について考え、人間にとって最も身近な存在である服飾について、新たな発見をしてみませんか。

教員名	米田 俊彦 (YONEDA Toshihiko)
所 属	文教育学部人間社会科学科教育科学講座
学 位	教育学博士 (1989 東京大学)
職 名	教授
URL/E-mail	yoneda@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

教育法令 / 旧教育法体系

◆主要業績

総数 (5) 件

- ・『反大学論と大学史研究—中野実の足跡—』(東信堂 2005 年 5 月)、共編著
- ・『大日本職業指導協会と機関誌『職業指導』—発足の経緯と財団法人化 (1932 年) までの動向—』(2006 年 3 月、単著、COE 報告書)
- ・『第 2 次世界大戦後における日本の女子高等教育に関する社会史的研究』(2006 年 3 月、共編著、科学研究費報告書)

◆研究内容

『近代日本教育法集成』の編纂を継続している (すでに 10 年近くを費やしている)。大日本帝国憲法・各学校令制定前後から日本国憲法・教育基本法制定前後までの旧教育法を、一部抄録としつつ、主要なものを改廃を含めてすべて収録して、分類・体系化したものを編集している。

◆教育内容

学部・大学院のいずれにおいても教育史、教育制度史などの授業を担当しています。担当した卒業論文の題目は「白井常の幼児教育理論と東京女子大学同窓会幼児グループ」「教育委員会と地方教育行政の在り方に関する一考察」「日本における子ども電話相談の一考察」、修士論文の題目は「教員養成における一般教育の位置づけ—戦後教育改革における「師範型」克服論争の結末—」でした。

◆Research Pursuits

I am compiling “laws and ordinances in modern Japan”. I am collecting and classifying laws and ordinances promulgated in the period from the end of 19 century to the World War II.

◆Educational Pursuits

I am teaching subjects about the history of education or system of education. I led students who wrote graduation theses on the theory of the preschool education of SHIRAI Tsune, the board of education, and the consultation for children by telephone, and a master's thesis on the general education in the teacher training.

◆共同研究例

- ・「学校沿革史の研究」（財団法人野間教育研究所における共同研究）

◆将来の研究計画・研究の展望

現在進めている『近代日本教育法集成』を 2007 年度中には完成させたいと考えている。

◆受験生等へのメッセージ

教育の制度や現象を歴史的に考察する研究活動を行っています。歴史というのは古い時代ばかりを対象にするわけではなく、ごく最近のことも含め、歴史的に研究することは可能であり、また必要なことです。

教員名	頼住 光子 (YORIZUMI Mitsuko)
所 属	文教育学部人文科学科哲学講座
学 位	博士 (文学) (1994 東京大学)
職 名	助教授
URL/E-mail	

◆主要業績

総数 (7) 件

- ・『比較宗教への途 3 人間の文化と神秘主義』
(吉村均・保坂俊司・新免光比呂氏との共著 北樹出版 2005 年 4 月 1 日 序章神秘主義とは何か pp.15-51、第五章中国における神秘主義 pp.193-211、第六章日本における神秘主義 pp.212-224)
- ・『道元 自己・時間・世界はどのように成立するのか』(単著) NHK 出版 2005 年 11 月 30 日 126 頁
- ・「宗教と倫理をめぐる一考察―道元の二つの因果観をてがかりとして―」
(文部省科学研究費研究成果報告書「時間論をてがかりとした道元の世界観の総合的研究」研究課題番号 15520010 平成 15～17 年度科学研究費補助金 基盤研究(C)(2) 研究代表者: 頼住光子 研究成果報告書、平成 18 年 3 月 pp.1-11)

◆研究内容

頼住光子の 2005 年度の研究内容は、以下の 4 領域からなり、その研究成果については、大学院イニシアティブによるフランスシンポジウムや学術雑誌において発表された。

- ① 日本仏教の思想的研究 道元や親鸞などの、仏教思想家の著作を厳密にテキストクリティークし、その思想構造を探求し、日本仏教の独自性と普遍的意義とを追及する。
- ② 日本近代思想に関する研究 和辻哲郎など日本近代思想についての再検討。とくに「超越」「自己」「非還元主義」などをてがかりとして、日本近代思想の持つ意義を解明。
- ③ 比較思想学、比較宗教学による研究 日本の思想や宗教を考える上で、比較の手法を使い、他のアジアの思想 (中国、インド)、ヨーロッパ思想との比較対照において、日本の思想や宗教の特徴を解明。
- ④ 道徳教育、宗教教育に関する理論的研究 日本人の道徳性や宗教性を解明し、それらに適合する道徳教育や宗教教育を行うための理論的基盤を明示。

◆教育内容

- ① 学部、大学院 (博士課程、修士課程) における講義とゼミを行い、日本倫理思想史、宗教哲学、比較思想学について、入門、基礎、応用的教育を行った。
- ② 学部、大学院 (博士課程、修士課程) の学生の、日本倫理思想史、宗教哲学、比較思想学について、論文指導を行った。特に、博士論文執筆中の学生、学会誌投稿論文執筆中の学生に対しては、メールなどを使って、懇切丁寧な指導を行い、内容的なアドバイスや、論文としての体裁を整えるための添削を行った。
- ③ 魅力ある大学院イニシアティブの事業の一環として、博士課程学生を引率して、フランスでシンポジウムを行い、学生の発表を指導した。
- ④ 大学院教育の実質化のために、博士課程学生に、ゼミ等で指導を行い、また論文指導を丁寧に行うだけではなく、RA として各種の学術的活動を行えるよう指導した。

◆Research Pursuits

Mitsuko Yorizumi's study in 2005 consists of following four spheres.

- ① A Study of the thought of Japanese Buddhism A Study of Dogen and Shinran and so on.
- ② A Study of Japanese Modern Philosophy A Study of Teturo Watsuji and Ryosen Tsunashima and so on.
- ③ A Comparative Study of Japanese and Western or Asia Thought and Religion A Comparative Study of Japanese and Western Mysticism and so on.
- ④ A Study of Japanese Moral Education Especially a Study of Japanese Religious Education in Public Education.

◆共同研究例

- ・宗教教育研究

◆将来の研究計画・研究の展望

将来の研究計画としては、東洋の哲学とりわけ仏教思想の現代的意義を探究する予定である。特に、現在の中心的研究対象である道元にしても親鸞にしても、従来の研究は、宗門の護教的研究が主流を占めており、そのような中で、文献学的な正当性と思想史的背景を踏まえた思想研究を行い、東洋の哲学の普遍的意義を探究したいと思う。そのために、現在、個人として行っている研究と平行して、現在進行中の比較思想的見地からの国際的プロジェクトを推進したと考えている。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・仏教思想（特に親鸞、道元）の思想的研究
- ・日本近代哲学の研究（和辻哲郎、綱島梁川他）
- ・道德教育としての宗教教育の研究

◆受験生等へのメッセージ

私どものゼミにおいては、日本の（場合によっては、アジアやヨーロッパも含めて）古今の思想的な文献を正確に読むことをまず訓練します。それを通じて、人間とは何か、また自己とは何かという問題を、深く広く考えて行きたいと思っています。

特に、現在、ゼミにおいて中心的に探究しているのは、仏教哲学など、東洋の思想伝統の中に、普遍的なものでありつつ、西洋近代の要素還元主義的な発想からは看過されがちであった関係主義的発想、非実体化的発想をさぐり、それをてがかりとして、「自己」「超越」などの概念を再検討することです。それによって、従来、無自覚のうちに固定的なものとして捉えられがちであった「自己」概念を解体し、諸関係の結節点として捉えるという非要素還元主義的「自己」観念を明らかにするとともに、さらに、神として実体化された「超越」（いわゆる西洋的超越概念）に対して、それ自身のうちにすべてを成り立たせる「場」としての超越概念を、東洋の思想、宗教のうちに捉えたいと考えております。

◆Educational Pursuits

Mitsuko Yorizumi's education in 2005 consists of following four spheres.

- ① Seminar and Lecture of Japanese Philosophy and Buddhism for Undergraduates and graduates.
- ② Guidance of theses and papers for Undergraduates and Graduates.
- ③ Leading Undergraduates and Graduates to Symposium in France and Guidance of their Publication.
- ④ Guidance of various academic acts for Graduates.

教員名	李 美静 (LEE MEICHIN)
所 属	人間文化研究科
学 位	博士 (人文科学)
職 名	リサーチフェロー
URL/E-mail	ri.bise@ocha.ac.jp

◆研究キーワード

二言語教育 / 中国語 / 日本語 / 海外在住の子どもの言語習得 / バイリンガリズム

◆主要業績

総数 (1) 件

- ・中日二言語のバイリンガリズムー在日台湾人の子どもの二言語習得に影響する要因ー

◆研究内容

従来の第二言語習得研究では聴解能力(hearing)を指標とした短期的実験が多数あるが、本研究は、これまでほとんど明らかにされてこなかった、台湾在住の国際結婚家庭の子どもの日本語及び中国語の二言語を併用する子どもの二言語習得のメカニズムをとらえる目的で日本から移住した子どもたちの母語保持・中国語習得の過程について様々な側面から検討することを目的とした。日中の二言語習得過程に影響する要因を年齢的な側面、環境要因、心理的要因の側面から検討し、「第二言語の獲得に敏感期はあるのか」「在外児童・生徒の言語獲得の実態と、母語保持と第二言語習得のパターンに影響する要因は何か」という問を明らかにすること。

◆Research Pursuits

A Study of Chinese and Japanese Language Acquisition of the Overseas Students

The purpose of this research is to reveal the mechanism of two language acquisition of the children who use two languages of Chinese and Japanese together; and to examine the factors which had an influence on it.

A language vocabulary proficiency test and a questionnaire on language environment were administered, and the correlation between the environmental consciousness and language proficiency was examined.

◆将来の研究計画・研究の展望

1.題：「台湾在住の日本人の子どもの日中二言語習得に影響する要因」。台湾在住の日本人の子どもの日本語・中国語の併用における二言語習得について、学習開始年齢と滞在年数の違いによって、どのような影響を及ぼすのかを検討する。

2.題：「日本と台湾の大学生の学習観についての国際的比較研究」。日本と台湾の大学生が持つ学習観について、認知、情緒的、行動的、道徳的な側面の自由記述調査によって検討することを目的とする。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・学習観についての国際的比較研究

教員名	若林 美佐知 (WAKABAYASHI Misachi)
所 属	人間文化研究科
学 位	博士 (人文科学) (お茶の水女子大学) / Dr. phil. (ウィーン大学)
職 名	リサーチフェロー
URL/E-mail	

◆研究キーワード

ドイツ現代史 / ドイツ軍 / ナチズム

◆主要業績

総数 (3) 件

- ・論文:「ナチ体制の政策決定要因をめぐる一考察—ドイツ占領下セルビアにおける抵抗運動対策をてがかりに—」、『現代史研究』第 51 号 (2005 年 12 月) に掲載。
- ・口頭発表:「ナチ・ドイツ占領下セルビアにおけるジェノサイド」、現代史研究会第 434 回例会 (2005 年 7 月、CGS「ジェノサイド研究の展開」との共催、シンポジウム「ナチ・ジェノサイド研究の現在」) にて報告。
- ・口頭発表:「ドイツ軍政下 (1941～1944 年) セルビアにおける『人的資源』の『調達』と『活用』」、ドイツ現代史学会第 28 回大会 (2005 年 9 月、シンポジウム「軍隊・戦争と社会」) にて報告。

◆研究内容

当面の研究課題は、ドイツ第三帝国 (1933～1945 年) の歴史のさまざまな側面を、ドイツ国防軍を軸に考察、分析することにある。時期としては、第二次大戦期 (1939～1945 年) を扱い、ドイツがどのようなやり方で戦争を遂行したか、そしてその中で軍部がどんな役割を果たしたかを実証的に明らかにし、分析することを通じて、ナチ体制における軍部の位置付けを行なう。具体例として、ドイツ軍によるセルビアでの占領政策 (1941～1944 年) を取り上げた。占領政策の諸側面の中でも、抵抗運動対策がどのような事情のもとで決定され、実施されたかについて、① 戦況、② ユダヤ人絶滅政策、③ 戦争経済との関連で考察し、この三点それぞれを整理してまとめた。これらの考察により、国防軍はナチ・イデオロギーを受容していたが、具体的な政策決定には、イデオロギーだけでなく、戦争がもたらしたさまざまな条件が影響していたという結論が得られた。

◆Research Pursuits

I research into the German army in the Third Reich (1933–1945). In order to show the position and the role of the army in the Nazi regime my papers deal with the German occupation policy in Serbia (1941–1944), where the military government was formed. My papers analyze the measures against the resistance, in connection with the war situation, the extermination of the Jews and the war economy. These analyses show:

- 1.The German army assimilated the Nazi ideology.
- 2.Also the factors which the war had caused influenced upon the decision-making.

◆将来の研究計画・研究の展望

ドイツ第三帝国における軍部について、研究を継続する。その際、考察と分析を深化させるためには、比較の視点が有益であり、必要である。占領政策に関しては、これまでセルビアの事例を取り上げてきたが、別の地域を扱うことになるだろう。あるいは、再検証の対象を、第二次大戦が始まる以前の時期の内政や外交に広げて、「ドイツ国防軍とナチ／ナチズム」の全体像の把握につなげていきたい。

教員名	和田 英信 (WADA Hidenobu)
所 属	人間文化研究科比較社会文化学専攻
学 位	文学修士 (1987)
職 名	助教授
URL/E-mail	wada@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

中国文学 / 和漢比較文学 / 詩話

◆主要業績

総数 (2) 件

・《非詩話》與《五山堂詩話》日本江戸後期の文學環境和詩話

◆研究内容

本年度はこれまでの詩話研究を整理するとともに、日本撰述詩話の研究に着手した。とりわけ、江戸後期の文学環境における詩話の特色を、トウ（人偏＋同）庵非詩話ならびに五山堂詩話を中心に考察し、台湾高雄で開催された東方詩話学会第四回国際東方詩話学術研究会において発表した。詩話ならびに詩学著作に関して、中国をはじめとする海外の研究者と情報を交換できたことは、はなはだ有意義であった。

◆教育内容

学部においては中国語教育ならびに専門教育（中国古典文学）に携わった。

専門教育については、文学史（中国古典文学史）の講義と、演習・講読を中心とする授業を担当した。前者では中国文学研究に関する諸問題を時代をおって論じ、後者においては様々なジャンル・スタイルの文学作品を取り上げ、読解力の養成をはかると同時に、作品に対する研究的アプローチの方法を学生とともに考えた。

◆受験生等へのメッセージ

豊饒な中国文学の世界を、数多くの人々に知ってもらいたいと思います。

教員名	渡部 亜矢子 (Watanabe, Ayako)
所 属	総合情報処理センター
学 位	博士(理学) (2004 お茶の水女子大学)
職 名	助手
URL/E-mail	watanabe.ayako@ocha.ac.jp

◆研究キーワード

原子・分子 / イオン・原子衝突 / 可視化

◆教育内容

総合情報処理センターで運用している全学向け教育用計算機の保守を担当。

◆将来の研究計画・研究の展望

イオン・原子衝突問題は、その応用分野として核融合研究、放射線医療などがあり、種々の系でのデータが求められている。Ni, Fe などの重原子、C などは、その系の複雑さゆえ衝突断面積等のデータが少ないため、これらを含む多くの系のデータベース作成を目指す。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

・イオン・原子衝突問題の可視化

◆受験生等へのメッセージ

お茶大は少人数クラスがモットーの大学です。先生方との距離がとっても近い、アットホームな環境があります。自分の興味もてるものを見つけ、それを探求することに、みんなが手を貸してくれますよ。

また、お手本とすべきたくさんの卒業生（もちろん女性の先輩）がいます。将来の姿を思い描くときに、きっと参考になります。

とっても貴重な4年間をお茶大でいっしょに過ごしましょう。

教員名	渡辺 知恵美 (WATANABE Chiemi)
所 属	理学部情報科学科
学 位	博士 (理学) (2003 年 3 月取得)
職 名	講師
URL/E-mail	watanabe.chiemi@ocha.ac.jp

◆研究キーワード

データベースシステム / 科学データベース / データベースセキュリティ /
Peer-to-Peer における検索手法 / マルチメディアデータの内容類似検索

◆主要業績

総数 (7) 件

- ・石田 愛, 渡辺知恵美, 城 和貴 :
網羅的なシミュレーションにおける空間的パターン発見のためのデータマイニング手法の開発 :
Ai ISHIDA, Chiemi WATANABE, Kazuki JOE
日本データベース学会 Letters Vol.5, No.1, pp.145-148
DBSJ Letters, Vol.5, No.1, June 2006, pp.145-148
- ・植村亜以, 渡辺知恵美, 城和貴 :
HDF-EOS のための Bitmap 索引を用いた問合せの実現
ーパーソナルユースの科学データ管理システムの開発に向けてー データ工学ワークショップ (DEWS) (2006)
- ・Yi Yu, Chiemi Watanabe, Kazuki Joe:
Towards a Fast and Efficient Match Algorithm for Content-Based Music Retrieval on Acoustic Data. ISMIR
2005, pp.696-701 (2005)

◆研究内容

データベース管理システムの高度応用についての研究を行っている。2005 年度は地球流体物理分野を対象とした科学データベースの研究を行い、シミュレーションや衛星観測で得られる多次元格子の管理および検索を効率的に行うシステムの開発を行った。多次元格子をデータベースに格納する場合、特徴的属性をメタデータとして格納する場合と、多次元格子そのものを格納する場合がある。

我々は前者に対しては地球観測データのデータ型 `points, swath, grid` に対する時空間属性を科学データファイルから自動抽出し RDBMS に検索を行うシステムの開発を行った。また後者に関してはビットマップ索引を多次元格子に適用し、属性値による条件にあった部分格子の高速な抽出を行った。また、これらの DBMS をバックエンドに利用した可視化システムの開発を行った。

2006 年度は科学 DB の開発に加えて、暗号を利用したデータベースセキュリティの研究、および、Web コーパスを利用した擬音語・擬態語用例辞典の開発を進めている。

◆教育内容

2005 年度は 10 月に赴任したため、後期のプログラミング実習 (情報・1 年後期) を担当した。プログラミング言語に C 言語を用い実用的な例を多く交えた演習授業を行った。

◆将来の研究計画・研究の展望

今後も多様化するシステム環境に合わせたデータベース機能の研究を進めていきたいと考えている。2006 年度に進めている研究は以下の通りである。

- ・地球流体科学者のためのデスクトップサーチの開発
- ・P2P ネットワークを利用した科学データの検索・共有
- ・暗号化されたデータベースに対する効率的な検索
- ・Web コーパスを用いた擬音語・擬態語用例辞書の開発

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・科学技術データの効率的な格納と検索の実現